長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

—茅野市・原村その1，富士見町その2—

昭和50年度

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

——— 茅野市・原村その1，富士見町その2 ———

昭和50年度

信州大学附属図書館
56.5.30
図書
教育学部分館

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

序

昭和50年度中央自動車道建設用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、昭和50年４月22日から12月１日にかけて、茅野市・原村その１、富士見町その２地区６遺跡を実施した。

この地区の八ヶ岳山麓には、八ヶ岳連峰から放射状に伸びる長峰状丘陵が並び、その標高900～1,000mの位置に多くの遺跡が分布している。中央自動車道は、これらの長峰状丘陵先端部を横断して建設されているが、丘陵先端部は山林地帯であり、遺跡の実態に明確さを欠くものが多く、新しい遺跡の発見が予想されていた。ところが、調査に入ってみると予想以上の大遺跡であり、かつ調査員などの必要人員が種々の事情で確保できず、大石遺跡のみでも年内終了が危ぶまれたが、調査団の努力で一応終了することができた。

発掘調査の結果は、本報告書にみられる通りであるが、特に大石遺跡は、縄文時代中期前葉の集落址をほぼ完掘し、その成果は広く日本全国から注目され、その報告の刊行が期待されていた。また、小遺跡とはいえ、御狩野遺跡では古代諏訪神社祭祀に大きな鍵を握るといわれる鉄鐸が土坑中から発見され、遺跡の重要性がその規模だけでないことを如実に示すなど、有益な知見を加えることができた。

なお、居沢尾根、阿久、両遺跡は、予想以上に遺跡の規模が大きく、また、多くの遺構が重複していたため、計画年度内に調査を終了することが不可能になった。そこで、日本道路公団と協議し、次年度も継続して発掘調査を実施することとした。

本報告書の刊行にあたって、この発掘調査の実施に深い御理解をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同諏訪工事事務所、余寒未ださりやらぬ４月から、氷雪さえ見えた12月にかけて、長期間この調査に精励された大沢団長をはじめとする調査団の各位、この調査のために御協力いただいた諏訪中央道事務所、茅野市、原村富士見町当局並びに同地区被買収者組合等の関係各位に対し、深甚の謝意を表する次第である。

昭和51年３月20日

長野県教育委員会教育長　　水　口　米　雄

例　　言

1．本書は、昭和50年度に日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいて行なわれた発掘調査のうち、長野県茅野市・原村その１・富士見町その２地区の調査報告書である。

2．調査した６遺跡のうち、次年度以後も継続調査された塩水（阿久）・居沢尾根の両遺跡については、試掘結果の概略のみ記載している。

3．調査結果に関しては、検出された遺構・遺物の図示に重点を置いている。一部遺物に関しては類型化を試みたが、十分な検討ができず錯綜した部分を含み、紙数の制約から図表を割愛している。

4．遺物実測図は担当者により、また、縄文の表現方法は途中で変更しているため多少表現方法に差があるが、御了解頂きたい。

5．遺構図中で焼土はドットで、重複関係と遺構の想定範囲は破線・一点破線で、Sは石を表わしている。柱穴の規模は（長軸）×（短軸）－（深さ）の順で計測値のみを本文中に記載し、cm は省略した。

6．本文中、大石遺跡の遺構と遺物の項では土器に限り、図番号の後に表示した住居単位のアルファベット順の記号を用いて図を指示している。また、石器についての詳細は石器一覧表を参照されたい。

7．灰釉陶器については森田稔・江崎武両氏の、徳久利下・一の沢両遺跡の土器については神村透氏の御教示を得た。

8．本書の編集は樋口昇一が行ない、各項は下記のように分担執筆している。Ⅰ　樋口、Ⅱ及びⅢ－６－５）－ウ　土屋積、Ⅲ－３　松永満夫、その他　伴信夫。なお、遺構についての記述は調査担当者の作成した記録カードに基づき、その後の検討結果により一部追加・変更している。その場合、現地での所見と併記している。

9．住居址の発掘分担を下記する。土壙等については省略したい。

（細川）４・14・23・38号住、（伴）５・８・13・14・18～20・24・25・27・41・42・45・46・48号住、（松永）１・６・７・11・12・17・21・28・34・35・37・39号住、（田畑）３・９・10・15・16・22・26・29～31・36・40・43・47号住、（郷道）２・32・44号住、（知名）18・20・27・33号住、（片山）24号住、（原）19・24号住、（秋山）25号住

土器復元は、福沢幸一が担当した。

10．なお、大石遺跡の図・図版については下記の如く取扱った。

(1)　土器図の番号の後の小数字は、出土状況図中の番号を示す。
石器図の番号は付表２石器一覧表の番号と一致している。

(2)　遺構図・土器図は、時期別に配列することを原則とした。
石器図・写真は、遺構番号順であるが、土器写真は実測図の配列に準じた。

(3)　製図・編集などは下記のように分担した。

遺構図	実　測	各発掘担当者	
〃	トレース	伴　信夫	丸山　雅子
土　器	拓　本	伴　信夫	山内志賀子
〃	実　測	伴　信夫	土屋　積　松永　満夫

〃	トレース	伴　信夫	丸山　雅子		
石器実測		伴　信夫	土屋　積	松永　満夫	根津　清志
		赤羽　淑子	山内志賀子	丸山　雅子	
〃	トレース	丸山　雅子	重倉理恵子		
写真撮影	遺構	伴　信夫	松永　満夫		
〃	遺物	木下平八郎			
現像・焼付		木下平八郎			
編集	図・図版	伴　信夫	土屋　積		
〃	写真	土屋　積			

(4) 上記の担当者の他、調査団員多数の協力があり、最終的編集は樋口昇一が当った。

11. 本報告書関係の遺物は諏訪郡原村歴史民俗資料館に、実測図等は長野県中央道遺跡調査団本部に保管してある。

本文目次

序
例　言
目　次
本　文・挿　図・表・付表・図・付図・図版

Ⅰ　調査状況　1
1　調査にいたるまで　1
1）中央道関係の経過　1
2）発掘調査委託契約　2
3）長野県中央道遺跡調査会　2
ア　昭和50年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿　2
イ　長野県中央道遺跡調査団編成（茅野市・原村・富士見町班）　3
ウ　発掘調査協力者　3
エ　現地指導・視察者　4
2　調査遺跡の概要　4
3　発掘調査の方法　4
Ⅱ　大石遺跡周辺の歴史的・地理的環境　5
Ⅲ　調査遺跡　6
1　塩水遺跡（阿久遺跡）（SAUB）　6
1）位置　2）調査の経過とその概況　6
2　居沢尾根遺跡（SIZB）　7
1）位置　2）調査の経過とその概況　7
3　御狩野遺跡（SMKC）　8
1）位置　8
2）調査の経過　8
3）遺構と遺物　11
ア　土坑1（11）　イ　遺構外出土遺物（11）　11
4）まとめ　12
4　一の沢遺跡（SISB）　13
1）位置及び調査の経過　13
2）遺構と出土遺物　13
ア　縄文時代早期遺物集中区1（13）　イ　同集中区2（13）　ウ　同集中区3（14）
エ　同集中区4（18）　オ　炉址状遺構（18）　カ　土壙1～3（18）
キ　遺構外出土遺物（19）
3）まとめ　19

5　徳久利下遺跡（STKB）　26
1）位置及び調査の経過　26
2）遺構と遺物　26
ア　土壙1　26
6　大石遺跡（ＳＯＩＢ）　29
1）位置　29
2）調査の経過　29
3）層序　30
4）遺構と遺物　30
ア　繩文時代前期の住居址と遺物　30
ア）第27号新住居址（30）（以下住居址などはナンバーのみ記す）
イ）27号旧住（31）　ウ）28号旧住（31）　エ）32号住（32）　オ）33号住（32）
カ）39号住（33）
イ　繩文時代中期初頭の住居址と遺物
ア）１号住（34）　イ）5号旧住（36）　ウ）６号住（36）　エ）７号住（36）
オ）18号住（37）　カ）28号新住（39）　キ）29号住（40）　ク）30・31号住（41）
ケ）34号住（42）　コ）41号住（44）　サ）42号住（44）　シ）46号住（44）
ス）47号旧住（45）
ウ　繩文時代中期中葉の住居址と遺物
ア）２号住（45）　イ）３号住（46）　ウ）４号住（48）　エ）５号新住（48）
オ）11号住（48）　カ）12号住（49）　キ）13号住（50）　ク）14号住（51）
ケ）15号住（51）　コ）16号住（52）　サ）17号住（53）　シ）19号住（54）
ス）20号住（55）　セ）21号住（56）　ソ）22号住（57）　タ）23号住（59）
チ）24号住（60）　ツ）25号住（61）　テ）26号住（62）　ト）35号住（63）
ナ）36号住（63）　ニ）38号住（64）　ヌ）40号住（65）　ネ）43号住（65）
ノ）44号住（66）　ハ）40号新住（67）　ヒ）48号住（67）
エ　平安時代の住居址と遺物　68
ア）８号住（68）　イ）９号住（68）　ウ）10号住（69）　エ）37号住（69）
オ）45号住（71）
オ　土壙と出土遺物　71
ア）繩文時代前期の土壙と出土遺物　71
イ）　〃　中期初頭の土壙と出土遺物　71
ウ）　〃　〃 中葉の　〃　74
エ）　〃　後期の土壙と遺物　75
カ　配石状礫群　75
キ　近世の遺構と遺物　76
ア）掘立柱穴群１（76）　イ）掘立柱穴群２（76）
ク　遺構外出土土器及び土製品　77

5）大石遺跡に関する考察 81
ア　縄文時代の遺構に関する考察 81
ア）集落構造 81
イ）住居址の形態と炉の変化 82
ウ）屋内祭祀と屋外祭祀 83
イ　土器・土製品に関する考察 83
ア）縄文前期の土器 83
イ）縄文中期初頭の土器 85
(i) 篭畑II式（85）　(ii) 九兵衛尾根Ⅰ式　(iii) 九兵衛尾根II式（89）
ウ）縄文中期中葉の土器 90
(i) 平出第3類A系（90）　(ii) 貉沢式（91）　(iii) 新道式（93）
エ）土偶及び把手 97
オ）土製円板 98
カ）縄文中期前半における移入土器 98
(i) 東海系（98）　(ii) 関西系（99）　(iii) 北陸系（100）
ウ　石器に関する考察 102
ア）資料の性格と記述の方法 102
イ）石器の概要 104
① 打製石斧（104）　② 横刃型石器（107）　③ 磨製石斧（110）
④ 凹石・磨石（112）　⑤ 石皿（114）　⑥ 石鏃（114）
⑦ スクレイパー類（掻器・削器）（115）　⑧ 石錐（ドリル）（116）
⑨ その他の石器・石製品（116）　⑩ 定型的石器以外の黒曜石類（121）
ウ）出土状態 126
① 分布（126）　② 住居址内での出土のありかた（127）
③ 接合資料のありかた（130）
エ）まとめ 132
① 石材（132）　② 製作技術（133）　③ 使用痕，折損　④ 組成の変化（134）
⑤ 型式編年（135）　⑥ 出土状態　〈付　24号住居址出土の石器について〉（136）

鑑定結果1　長野県諏訪郡原村大石遺跡で発見された炭化種子について　松本　豪　137
鑑定結果2　長野県諏訪郡原村大石遺跡で出土のタール状炭化種子の同定について　松谷　暁子　141
鑑定結果3　花粉分析結果報告　パリノ・サーヴェイ株式会社　144
鑑定結果4　放射性炭素年代測定結果報告　木越　邦彦　144

エ　まとめ 145
あとがき（大沢和夫）

挿図目次

挿図1	御狩野遺跡地形図	8
挿図2	〃　〃　遺構配置図	9
挿図3	〃　〃　土壙1及び出土遺物実測図・拓影	10
挿図4	一ノ沢遺跡・徳久利下遺跡地形	14
挿図5	一ノ沢遺跡遺構配置図	15
挿図6	〃　〃　早期遺物集中区1・2、炉址状遺構、土壙1～3実測図	16
挿図7	一ノ沢遺跡早期遺物集中区3・4実測図	17
挿図8	一ノ沢遺跡早期遺物集中区1～4出土土器拓影	20
挿図9	〃　〃　4、土壙2、遺構外出土土器拓影	21
挿図10	〃　土壙1及び遺構外出土土器拓影	22
挿図11	一ノ沢遺跡早期遺物集中区1・2出土石器実測図	23
挿図12	〃　〃　〃　3、土壙2及び遺構外出土石器実測図	24
挿図13	〃　〃　1～3、土壙1周辺、遺構外出土石器実測図	25
挿図14	徳久利下遺跡遺構図、土壙1	27
挿図15	土製円板最大径・重量相関図	98
挿図16	実測図の表現方法（打製石斧・横刃型石器など）	103
挿図17	使用痕の位置	104
挿図18	打製石斧の折損の類型	104
挿図19	打製石斧の類型	104
挿図20	横刃型石器の形態と刃部角	108
挿図21	横刃型石器の類型	108
挿図22	乳棒状磨製石斧の形態	111
挿図23	磨製石斧の刃部形態	111
挿図24	凹石・磨石の時期別類型構成	114
挿図25	石皿の折損	114
挿図26	黒曜石剝片類の住居址別数量	117
挿図27	黒曜石類の分布	120
挿図28	ピエス・エスキーユの長さと重さ	121
挿図29	ピエス・エスキーユの刃部角	122
挿図30	使用痕部の長さ	123
挿図31	使用痕部の刃部角	123
挿図32	住居址別の器種構成	128
挿図33	住居「床面」における器種別出土位置（模式図）	130
挿図34	時期別の接合関係	132
挿図35	器種別保有量の変化	134

表 目 次

表1　大石遺跡出土平安時代土器一覧表　70
表2　大石遺跡出土の石器一覧　102
表3　打製石斧の刃部角　105
表4　打製石斧の折損　106
表5　打製石斧の石材　107
表6　横刃型石器の石材　109
表7　横刃型石器の刃部角　109
表8　乳棒状磨製石斧の類型と折損　111
表9　凹石・磨石の類型別数量　112
表10　凹石・磨石の折損　113
表11　石鏃の折損部位　115
表12　緑色片岩剝片類の数量　116
表13　黒曜石類の遺構別構成　118
表14　使用痕部の類型別の長さ　124
表15　使用痕を有する剝片類の類型別の刃部角　125
表16　使用痕を有する剝片類の類型別の重量　125
表17　剝片類の重量分布　125
表18　遺構内外における器種別比　127
表19　「床面」出土石器（上）と住居址出土全石器（下）の器種別比　129
表20　遺構別石器数量　131
表21　床面出土石器の破損率　133
表22　時期別組成の推定　134

〈鑑定結果1、松本豪氏論文〉
第1表　分離した穎果の測定値　138
第2表　それぞれの大きさの変異　139
第3表　形状の変異表　140
第4表　大きさの変異表　140

付表目次

付表1　大石遺跡出土土壙一覧表　146
付表2　大石遺跡出土石器一覧表　172
(1) 住居址出土石器（173）　(2) 土壙出土石器（206）　(3) 遺構外出土土器（209）
(4) ピエス・エスキーユ（231）

図　目　次

大石遺跡

図　1　中央道関係遺跡位置図
図　2　大石遺跡地形図
図　3　住居址位置図
図　4　土層図　(1)
図　5　〃　(2)
図　6　27・32・33号住居址・土壙実測図
図　7　27号住居址遺物出土状況図
図　8　39・1号住居址・土壙実測図
図　9　39号住居址遺物出土状況図
図 10　1号　〃
図 11　5号旧・6号・11号住居址・土壙実測図
図 12　7号・18号　〃
図 13　28号・29号　〃
図 14　30号・31号・34号・42号　〃
図 15　41号・48号　〃
図 16　46号・3号住居址炉　〃
図 17　2号・3号　〃
図 18　3号住居址遺物出土状況図
図 19　4号・5号住居址実測図
図 20　13号　〃
図 21　12号・14号　〃
図 22　15号・16号　〃
図 23　15号住居址遺物出土状況図
図 24　17号住居址実測図
図 25　19号・20号　〃
図 26　19号住居址遺物出土状況図
図 27　21号・22号・26号住居址実測図
図 28　21号住居址遺物出土状況図
図 29　22号・26号　〃
図 30　23号・24号住居址実測図
図 31　25号・35号　〃
図 32　36号・38号　〃
図 33　40号・43号・44号　〃
図 34　47号・8号　〃
図 35　8号・9号　〃
図 36　10号・37号・45号　〃
図 37　土壙実測図（その1）
図 38　〃　（その2）
図 39　〃　（その3）
図 40　〃　（その4）
図 41　土壙実測図（その5）
図 42　〃　（その6）
図 43　〃　（その7）
図 44　〃　（その8）
図 45　〃　（その9）
図 46　〃　（その10）
図 47　〃　（その11）
図 48　〃　（その12）
図 49　〃　（その13）
図 50　〃　（その14）
図 51　〃　（その15）
図 52　〃　（その16）
図 53　〃　（その17）
図 54　〃　（その18）
図 55　〃　（その19）
図 56　〃　（その20）
図 57　〃　（その21）
図 58　〃　（その22）
図 59　〃　（その23）
図 60　〃　（その24）
図 61　〃　（その25）
図 62　〃　（その26）
図 63　〃　（その27）
図 64　〃　（その28）
図 65　〃　（その29）
図 66　〃　（その30）
図 67　〃　（その31）
図 68　〃　（その32）
図 69　〃　（その33）
図 70　〃　（その34）
図 71　〃　（その35）
図 72　〃　（その36）
図 73　〃　（その37）
図 74　〃　（その38）
図 75　〃　（その39）
図 76　〃　（その40）
図 77　〃　（その41）
図 78　〃　（その42）
図 79　〃　（その43）
図 80　〃　（その44）
図 81　〃　（その45）

図 82　土壙実測図（その46）
図 83　〃　（その47）
図 84　〃　（その48）
図 85　〃　（その49）
図 86　〃　（その50）
図 87　〃　（その51）
図 88　〃　（その52）
図 89　〃　（その53）
図 90　〃　（その54）
図 91　〃　（その55）
図 92　〃　（その56）
図 93　〃　（その57）
図 94　〃　（その58）
図 95　配石状礫群・土壙実測図（その59）
図 96　〃　（その60）
図 97　柱穴群１・２
図 98　27号住居址出土土器(A)
図 99　〃　(B)
図100　〃　(C)，28号旧住居址出土土器(A)
図101　28号旧住居址(B)・32号住居址出土土器(A)
図102　32号住居址(B)・33号住居址出土土器
図103　39号住居址出土土器(A)
図104　〃　(B)
図105　〃　(C)
図106　〃　(D)
図107　〃　(E)
図108　１号住居址出土土器(A)
図109　〃　(B)
図110　〃　(C)
図111　〃　(D)
図112　〃　(E)
図113　〃　(F)
図114　〃　(G)
図115　〃　(H)
図116　〃　(I)
図117　〃　(J)・５号旧(A)・６号(A)出土土器
図118　６号住居址出土土器(B)
図119　〃(C)・７号住居址出土土器(A)
図120　〃　(B)
図121　〃　(C)
図122　〃(D)・18号住居址出土土器(A)
図123　〃　(B)
図124　〃　(C)
図125　〃(D)・28号住居址出土土器(A)
図126　〃　(B)
図127　〃(D)・28号住居址出土土器(C)
図128　〃(D)・29号住居址出土土器(A)
図129　〃　(B)
図130　〃　(C)
図131　〃(D)・30号住居址出土土器(A)
図132　〃　(B)
図133　〃　(C)
図134　30号住居址出土土器(D)
図135　〃　(E)
図136　〃　(F)
図137　〃　(G)
図138　〃　(H)
図139　〃(I)・31号住居址出土土器(A)
図140　〃(B)・22号出土土器(A)
図141　22号住居址出土土器(B)
図142　〃(C)・34号住居址出土土器
図143　41号・42号・46号・47号旧(A)出土土器
図144　47号旧(B)・48号(A)出土土器
図145　48号(B)・２号(A)出土土器
図146　２号(B)・３号(A)出土土器
図147　３号住居址出土土器(B)
図148　〃　(C)
図149　〃　(D)
図150　〃　(E)
図151　〃　(F)
図152　〃　(G)
図153　〃　(H)
図154　４号住居址出土土器(A)
図155　〃(B)・５号新住居址出土土器(B)
図156　５号(C)・11号住居址出土土器(A)
図157　11号(B)・12号住居址出土土器(A)
図158　〃　(B)
図159　12号(C)・13号住居址出土土器(A)
図160　〃　(B)
図161　13号(C)・14号住居址出土土器(A)
図162　14号(B)・15号住居址出土土器(A)
図163　〃　(B)
図164　〃　(C)
図165　15号(D)・16号住居址出土土器(A)
図166　〃　(B)
図167　〃　(C)
図168　17号住居址出土土器(A)
図169　〃　(B)
図170　〃　(C)
図171　〃(D)・19号住居址出土土器(A)
図172　〃　(B)

図173　〃(D)・19号住居址出土土器(C)
図174　〃　(D)
図175　〃(E)・20号住居址出土土器(A)
図176　〃　(B)
図177　〃(C)・21号住居址出土土器(A)
図178　〃　(B)
図179　21号住居址出土土器(C)
図180　〃　(D)
図181　〃　(E)
図182　〃　(F)
図183　22号住居址出土土器(D)
図184　〃　(E)
図185　〃　(F)
図186　〃　(G)
図187　〃　(H)
図188　23号住居址出土土器(A)
図189　〃　(B)
図190　24号住居址出土土器(A)
図191　〃(B)・25号住居址出土土器(A)
図192　〃　(B)
図193　〃(C)・26号住居址出土土器(A)
図194　〃　(B)
図195　〃　(C)
図196　35号・36号住居址出土土器(A)
図197　〃　(B)
図198　〃　(C)
図199　〃(D)・38号住居址出土土器(A)
図200　〃　(B)
図201　〃(C)・40号住居址出土土器(A)
図202　〃(B)・43号住居址出土土器(A)
図203　〃(B)・44号住居址出土土器(A)
図204　〃(B)・47号住居址出土土器(C)
図205　〃　(D)
図206　〃(E)・42号住居址出土土器(B)
図207　1号(K)・48号(C)・遺構外（その11）
図208　土壙出土土器（その１）
図209　〃　（その２）
図210　〃　（その３）
図211　〃　（その４）
図212　〃　（その５）
図213　〃　（その６）
図214　〃　（その７）
図215　〃　（その８）
図216　〃　（その９）
図217　〃　（その10）
図218　〃　（その11）
図219　土壙出土土器（その12）
図220　〃　（その13）
図221　〃　（その14）
図222　〃　（その15）
図223　〃　（その16）
図224　〃　（その17）
図225　〃　（その18）
図226　〃　（その19）
図227　〃　（その20）
図228　〃　（その21）
図229　〃　（その22）
図230　〃　（その23）
図231　〃　（その24）
図232　〃　（その25）
図233　〃　（その26）
図234　〃　（その27）
図235　〃　（その28）
図236　〃　（その29）・配石他出土土器
図237　遺構外出土土器（その１）
図238　〃　（その２）
図239　〃　（その３）
図240　〃　（その４）
図241　〃　（その５）
図242　〃　（その６）
図243　〃　（その７）
図244　〃　（その８）
図245　〃　（その９）
図246　〃　（その10）
図247　〃　（その12）
図248　〃　（その13）
図249　〃　（その14）
図250　〃　（その15）
図251　〃　（その16）
図252　〃　（その17）
図253　〃　（その18）
図254　〃　（その19）
図255　〃　（その20）
図256　〃　（その21）
図257　〃　（その22）
図258　〃　（その23）
図259　〃　（その24）
図260　〃　（その25）
図261　土器・土製円板
図262　土製円板
図263　〃
図264　〃

図265　土製円板・39号住居址出土土器(F)
図266　土器及び土偶（その１）
図267　〃　（その２）
図268　土製品及び土偶（その３）
図269　住居址出土石斧・横刃(1)
図270　〃　(2)
図271　〃　(3)
図272　〃　(4)
図273　〃　(5)
図274　〃　(6)
図275　〃　(7)
図276　〃　(8)
図277　〃　(9)
図278　〃　(10)
図279　〃　(11)
図280　〃　(12)
図281　〃　(13)
図282　〃　(14)
図283　〃　(15)
図284　〃　(16)
図285　土壙出土石斧・横刃(1)
図286　〃　(2)
図287　〃　(3)
図288　〃　(4)
図289　遺構外出土凹石(1)
図290　〃　(2)
図291　〃　(3)
図292　土壙出土凹石・磨石(1)
図293　〃　(2)
図294　〃　(3)
図295　〃　(4)、石皿(1)
図296　土壙出土石皿・他(2)
図297　〃　(3)
図298　住居址出土石皿・他(1)
図299　〃　(2)
図300　〃　(3)
図301　〃　(4)
図302　住居址出土小形石器(1)
図303　〃　(2)
図304　〃　(3)
図305　〃　(4)
図306　〃　(5)
図307　〃　(6)
図308　〃　(7)
図309　〃　(8)
図310　〃　(9)
図311　〃　(10)
図312　〃　(11)
図313　〃　(12)
図314　〃　(13)
図315　〃　(14)
図316　〃　(15)
図317　〃　(16)
図318　土壙出土小形石器(1)
図319　〃　(2)
図320　〃　(3)
図321　遺構外出土小形石器
図322　黒曜石剝片・石核類(1)
図323　〃　(2)
図324　石器接合例(1)
図325　〃　(2)
図326　８号住居址出土土器(A)
図327　〃　(B)
図328　９号・10号・37号・45号住居址・遺構外出土土器

付図目次

付図１　大石遺跡遺構配置図
付図２　大石遺跡打製石斧分布図
付図３　大石遺跡址石・磨石・石皿分布図
付図４　大石遺跡横刃型石器分布図
付図５　大石遺跡小形石器分布図
付図６　大石遺跡磨製石斧分布図

図版目次

大石遺跡

図版 1　全景（航空写真）
図版 2　〃（　〃　）
図版 3　〃（　〃　）
図版 4　〃
図版 5　1号　住居址
図版 6　2号　〃
図版 7　3号　〃
図版 8　4号　〃
図版 9　5号　〃
図版 10　7号　〃
図版 11　6・8号　〃
図版 12　9・10号　〃
図版 13　12・13号　〃
図版 14　13号　〃
図版 15　14・15号　〃
図版 16　15号　〃
図版 17　16号　〃
図版 18　17号　〃
図版 19　18・19号　〃
図版 20　19号　〃
図版 21　20号　〃
図版 22　21号　〃
図版 23　22・26号　〃
図版 24　23号　〃
図版 25　24号　〃
図版 26　25号　〃
図版 27　27・29号　〃
図版 28　28号　〃
図版 29　30号・他　〃
図版 30　32・33号　〃
図版 31　34・35号　〃
図版 32　36号　〃
図版 33　37・39号　〃
図版 34　38号　〃
図版 35　40号　〃
図版 36　42・43号　〃
図版 37　44号　〃
図版 38　45・46号　〃
図版 39　47号　〃
図版 40　48号　〃
図版 41　配石周辺の土壙群
図版 42　土壙
図版 43　〃
図版 44　〃
図版 45　〃
図版 46　〃
図版 47　〃
図版 48　掘立柱建物址・配石
図版 49　配石細部・土壙1329
図版 50　27・28号　住居址出土土器
図版 51　32・33・39・1号　〃　〃
図版 52　1号　〃　〃
図版 53　1・5号　〃　〃
図版 54　7・18号　〃　〃
図版 55　18号　〃　〃
図版 56　28号　〃　〃
図版 57　28・30号　〃　〃
図版 58　30号　〃　〃
図版 59　30号　〃　〃
図版 60　30号　〃　〃
図版 61　30号　〃　〃
図版 62　30・46・47・2号　〃　〃
図版 63　2・3号　〃　〃
図版 64　3号　〃　〃
図版 65　〃　〃　〃
図版 66　〃　〃　〃
図版 67　〃　〃　〃
図版 68　〃　〃　〃
図版 69　〃　〃　〃
図版 70　〃　〃　〃
図版 71　3・4号　〃　〃
図版 72　5・12号　〃　〃
図版 73　12号　〃　〃
図版 74　13・14・15号　〃　〃
図版 75　15号　〃　〃
図版 76　〃　〃　〃
図版 77　〃　〃　〃
図版 78　16号　〃　〃
図版 79　〃　〃　〃
図版 80　17号　〃　〃
図版 81　〃　〃　〃

図版 82　17号　住居址出土土器
図版 83　19号　〃　〃
図版 84　〃　〃　〃
図版 85　〃　〃　〃
図版 86　20・21号　〃　〃
図版 87　21号　〃　〃
図版 88　〃　〃　〃
図版 89　21・22号　〃　〃
図版 90　22号　〃　〃
図版 91　〃　〃　〃
図版 92　23・24号　〃　〃
図版 93　25号　〃　〃
図版 94　26・36号　〃　〃
図版 95　35・36号　〃　〃
図版 96　38号　〃　〃
図版 97　43・44号　〃　〃
図版 98　47・42・48号　〃　〃
図版 99　1号・他　〃　〃
図版100　土坑出土土器
図版101　〃　〃
図版102　〃　〃
図版103　〃　〃
図版104　〃　〃
図版105　〃　〃
図版106　〃　〃
図版107　〃　〃
図版108　遺構外出土土器
図版109　〃　〃
図版110　〃　〃
図版111　〃　〃
図版112　〃　〃
図版113　〃　〃
図版114　〃　〃
図版115　出土土偶
図版116　〃　〃
図版117　出土石器(打製石斧と磨製石斧の接合資料)
図版118　出土石器（横刃型石器）(1)
図版119　〃　（　〃　）(2)
図版120　〃　（磨製石斧）
図版121　〃　（石鏃）(1)
図版122　〃　（〃）(2)・（ドリル）
図版123　〃　（石匙）
図版124　〃　（スクレイパー）
図版125　〃　（磨石・石錐など）
図版126　〃　（凹石）(1)
図版127　〃　（〃）(2)
図版128　24号住居址出土石器(1)
図版129　〃　〃　〃　(2)
図版130　出土炭化種子
図版131　〃　〃
図版132　〃　〃　、種子圧痕
図版133　〃　炭化種子
図版134　〃　平安時代土器
図版135　〃　炭化物
図版136　〃　炭化種子の走査電顕像
図版137　大石・荒神山遺跡出土炭化種子の走査電顕像
図版138　現生シソ科植物種子の走査電顕像
図版139　現生アワの走査電顕像
図版140　現生アワ及び三内遺跡出土炭化種子走査電顕像

大石遺跡以外

図版141　御狩野遺跡遺構・遺物
図版142　御狩野遺跡遺物
図版143　一の沢遺跡遺構
図版144　一の沢遺跡遺構・遺物
図版145　一の沢遺跡遺物
図版146　徳久利下遺跡遺構

I 調査状況

1. 調査にいたるまで

1）中央道関係の経過

昭和32年4月に公布された「国土開発縦貫自動車道建設法」に基づく中央自動車道西の宮線は、小牧・東京間約 360 km、そのうち長野県内は岐阜県中津川市から恵那山トンネルで飯田盆地に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ケ岳山麓をかすめて山梨県に至る間約 122 km の長さである。

買収された用地は、昭和51年3月現在 6,826,218 m² の広さに及ぶ。ルート内に含まれる埋蔵文化財包蔵地は195遺跡を数え、調査対象面積も 1,125,495 m² 以上に及んでいる。昭和42年9月に文化庁と日本道路公団との間に取り交わされた「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、昭和45年までの数年にわたり度重なる協議が日本道路公団名古屋支社との間に続けられ、漸く昭和45年9月に下伊那郡阿智村小野川地籍から発掘調査が開始され、本年で7年を経過した。その間、用地買収・登記の終了を待って、原則として下伊那・上伊那・諏訪郡の順に発掘調査が進められ、昭和50年度末までに184遺跡の調査が終了した。

発掘調査には県独自の組織が持てないので、「長野県中央道遺跡調査会」を特設し、その中に調査団を組織してこの業務を遂行している。調査団の運営には、団長と共に、県教育委員会文化課に置いた指導主事が調査主任として現地へ出向し、当っている。昭和45・46年度には調査主任2名、調査班2班編成であったが、昭和47年度から増員され6名の調査主任が数班編成で業務に当たることになった。

昭和49年度は、4月に宮田村内その2地区1遺跡（調査費7,788万円）、岡谷市その1地区4遺跡（調査費1,032.8万円）、諏訪市内その3地区6遺跡（調査費2,761.3万円）、鼎町その2地区1遺跡（調査費302.3万円）を契約した。更に7月には岡谷市その2地区6遺跡（調査費2,193.3万円）を契約している。その後、鼎町その2地区は遺構続出のため調査費502.3万円と契約変更、諏訪市内その3地区は十二の后・金鋳場・荒神山遺跡での遺構続出と、土砂運搬のためのパイロット道路早期着工のため調査遺跡を変更し、岡谷市その2地区3遺跡（調査費2,116.9万円）、諏訪市内その3地区6遺跡（調査費3,514.4万円）と契約変更し、49年11月25日発掘作業を終了し、50年3月20日業務を終了している。

昭和50年度は、4月14日に岡谷市内その3地区3遺跡（調査費3,302.6万円）、諏訪市内その4地区4遺跡（調査費3,327.8万円）、茅野市・原村・富士見町内6遺跡（調査費2,767.7万円）を契約し、3班編成により調査を開始し、各調査区共多大の成果をあげ、調査区により終了時期の差はあるが、原村塩水（阿久）遺跡の発掘調査を最後に50年11月17日発掘調査を終了し、51年3月20日業務を終了している。なお、原村大石遺跡は遺構続出により、調査面積が増大し、塩水（阿久）・居沢尾根遺跡が調査未了となったので、昭和51年1月茅野・原・富士見町内4遺跡と契約変更している。

茅野市・原村地籍の山林中に、新しく8遺跡が発見されたが、本年度の調査体制が整わないため、公団名古屋建設局と協議の結果、昭和51年度に実施する事に決定している。

2）発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施工前に日本道路公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で保護協議することになっている。この結果、記録保存と決定、発掘調査が必要となった場合、公団は県教育委員会に委託して調査を実施することになっている。そのため県教育委員会は、公団と現地協議など度重なる事務接衝の上、調査遺跡の発掘面積・調査費・調査期間・調査方法が定められる。その後相互の委託・受託の文書の往来があって、発掘調査委託契約が締結される。契約書の内容については、調査発足以来その条項に変更がないので「諏訪市その１・２」等の既刊報告書を参照していただき、関係分のみ記載したい。

1　委託事務の名称　中央道埋蔵文化財発掘調査　茅野市・原村その１　富士見町その２
2　委託期間と金額　昭和50年４月14日から昭和51年３月20日まで　27,677,000円

3）長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年７月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年２回の理事会が開かれている。年度当初の理事会において、発掘調査の受託が決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。調査会の規約は「諏訪市その１・２」にあり、また、県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないのでそれぞれ省略する。昭和50年度役員・茅野市・原村・富士見町関係調査団組織及び参加者等はつぎのとおりである。

ア　昭和50年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿（昭和50年10月現在）

顧問	一志　茂樹	（県文化財専門委員）			
会長	水口米雄	（県教育長）			
理事	金井喜久一郎	（県文化財専門委員）	米山　一政	（県文化財専門委員）	
	樋口　昇一	（県文化財専門委員）	原　嘉藤	（信濃史学会理事）	
	木内　仁平	（県教育次長）	太田　波夫	（県文化課長）	
	瀬尾　忠幸	（伊那教育事務所長）	坂井　喜久	（上伊那地区教委協議会長）	
	笠原　信平	（諏訪地区教委協議会長）	下島　節	（鼎町教育長）	
	林　金茂	（宮田村教育長）	熊谷　大一	（辰野町教育長）	
	久保　義幸	（岡谷市教育長）	中村　文武	（諏訪市教育長）	
	木川　千年	（茅野市教育長）	小泉　真澄	（原村教育長）	
	小林　繁治	（富士見町教育長）	岡西　良治	（諏訪教育会長）	
	林　茂樹	（長藤小学校長）			

監事	小栗栄重郎	（県文化課課長補佐）	田中一太郎	（諏訪市社会教育課長）
幹事	金井　汲次	（県文化課文化財係長）	泉　勇一郎	（県文化課文化係長）
	浅井　舎人	（県文化課文化財係長）	堀内規矩雄	（県文化課主事）
	浅川　欽一	（県文化課主査）	平野　益雄	（県文化課主事）
	宮島　孝明	（県文化課主事）	矢野　公一	（伊那教育事務所総務課長）
	唐沢　茂門	（伊那教育事務所主任）	久保田秀明	（伊那教育事務所主任）
	星野　政清	（伊那教育事務所社会教育課長）	武井今朝人	（伊那教育事務所主任）
	土屋喜久治	（伊那教育事務所諏訪支所長）	今村　善興	（県文化課指導主事）
	桐原　　健	（県文化課指導主事）	山田　瑞穂	（県文化課指導主事）
	伴　　信夫	（県文化課指導主事）	宮沢　恒之	（県文化課指導主事）
	丸山敞一郎	（県文化課指導主事）	岡田　正彦	（県文化課指導主事）

イ　長野県中央道遺跡調査団編成（茅野市・原村・富士見町班）

団　　長　大沢　和夫
調査主任　今村　善興（総括）　伴　信夫
調　査　員　細川　光貞　松永　満夫　田畑　辰雄　郷道　哲章　遮那藤麻呂　片桐　孝雄
　　知名　定順
調査補助員　片山　徹　原　明芳

ウ　発掘調査協力者

発掘作業には近隣市町村当局の御好意で応募した下記の方々が従事された。

〈茅野市〉　赤沼　幸一　有賀　久　岩崎　孝治　片山　晴吉　小松　吉郎　宮坂　収一
　守屋きすみ　守屋みきよ
〈原　村〉　秋山きみゑ　荒木　弥生　池　律子　牛山いねじ　牛山　英子　牛山とく子
　牛山よしみ　長田あき子　笠原　隆光　鎌倉みき子　鎌倉みちえ　上島まさ子
　北原今朝嘉　木下とくよ　小林　利重　小林　美映　五味かずゑ　五味　きく
　清水しげ子　清水たけよ　清水たつみ　真道ふみ子　武田　長子　長林みね子
　中村ふさえ　林　やす子　日達イサ子　平井　直子　原山　俊雄　藤原せつ子
　藤原ちえ子　堀内よしゑ　堀内　美江　丸山　増雄　宮坂とし子　宮坂　花子
　宮坂ひろ子　芳沢　花江
〈富士見町〉　雨宮　律雄　伊東　立子　伊藤　幸枝　伊藤　洋児　川上小夜子　北沢　巽
　北原き志子　北原みつぼ　栗原すみゑ　窪田　和儀　小林　喜万　小池かをる
　小池さと子　小池さたゑ　小池　章子　小池　早苗　小池みはる　小林　利人
　五味　昭子　五味さくよ　後町　春子　田中よし子　中山幸次郎　原田りょう
　三井はつほ　三井みつ子　三井さつき　矢沢しのる
〈諏訪市〉　荒木　弥生　伊藤　倭男　岩波けさ江　岩波やよい　小林　花子　関　喜子
　原　トメ　藤森ミツ子　宮坂　庄平　森野　勇　守矢　たつ　矢崎つな子

〈辰野町〉　板倉たせ子　武井スミエ　山内志賀子　丸山　雅子
〈事務局〉　鈴木御恵子　丸山　優子　田中　淳子　春日　房子　久保田英子

エ　現地指導・視察者（敬称略）

日本道路公団　名古屋建設局総務管理課長代理他・諏訪工事事務所庶務課長・工事長他
関係行政機関　原村村長・富士見町教育長・原村教育長・教育委員・村史編纂委員・諏訪建設事務所課長
研　究　者　中村龍雄・林茂樹・藤森みち子・小松虔・武藤雄六・宮坂光昭・武居幸重・笹沢浩・梅沢太久夫・末木健・会田進・高林重水・小林公明・柳沢士朗
そ　の　他　原村小・中学校職員及び生徒・下諏訪南小学校職員及び児童・原村公民館及び村民の方々

2. 調査遺跡の概要

町村名	遺跡名	用地内面積 (m^2)	調査面積 (m^2)	発掘調査期間	備考
富士見町	一の沢（SISB）	2,400	460	昭和50.3.9～3.16 〃 4.23～5.1	（予備）
〃	徳久利下（STKB）	1,800	340	〃 4.22～4.29	
茅野市	御狩野（SMKC）	6,000	1,000	〃 5.1～5.26	
原村	大石（SOIB）	6,000	2,300	〃 5.26～12.1	
〃	居沢尾根（SIZB）	6,600	1,400	〃 10.27～11.13	51年へ継続
〃	塩水（SSMB）	7,200	1,400	〃 10.28～11.17	51年へ継続 「阿久」と同一
計		30,000	6,900		

紙数の関係から、当初契約時の数字と調査期間のみの大要を掲載するにとどめる。

3. 発掘調査の方法

中央道用地内の遺跡発掘調査は、工事により破壊される遺跡を事前に記録保存することを目的とし、どのような時期の遺構・遺物かをさぐり、それを報告書としてまとめることが主眼となる。

遺跡の範囲・時期は分布調査により確認されているため、中央道がいかなる部分を通過するかによって4区分し、遺跡名の略記号の末尾にそれを付した。A—遺跡の頂部、B—遺跡の中央部、C—遺跡の先端部、O—全面がそれである。用地内の遺跡全面にに2m間隔の基準方眼グリットを設定し、中央道の幅員方向に01～99の2桁の数字を用い、それに直交する長軸方向にA～Yの25のアルファベットを用い、50m毎にA地区…B地区…とした。但し、中央道のセンターライン（20mおきにセンター杭あり）は50とする。これにより25地区1,250mがとれる。だからそれぞれのグリット地点は「SHJC　AC55」の如く表示できる。これは遺跡の先端部を中央道がかかる本城遺跡のA地区C55地点を意味する。グリット設定後、適宜それを掘り、遺構が確認されるとその周辺を拡張する方法をとった。詳細な調査方法については、「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査方針」と云う小冊子にまとめたものを基にしている。

Ⅱ 大石遺跡周辺の歴史的・地理的環境

本報告書中の4遺跡の歴史的・地理的環境の詳細は紙数の関係から割愛するが、一の沢・徳利下両遺跡については『中央道報告—富士見町その1（昭和48年度）』、大石・御狩野両遺跡については『同茅野市・原村その2（昭和51年度）』に詳述されているので参照を願って、以下、大石周辺について概観する。

大石遺跡が所在する原村は周辺の茅野市・富士見町とともに八ヶ岳西南麓の縄文時代遺跡の密集地として知られ、与助尾根・尖石・井戸尻などは中期の代表的集落址として学史的にも著名である。さらに近年の中央自動車道建設に伴う調査を中心として多くの新知見をつけ加えつつある地域である。

大石遺跡もまた縄文中期を中心とする遺跡であり、八ヶ岳の広大な裾野を浸食した幾筋もの沢に挟まれた尾根上に立地する。これらの尾根は信州ローム層におおわれ、その基盤は八ヶ岳の火山地形である。遺跡周辺には同様の尾根がいくつも平行して南西に向かい、糸魚川—静岡構造線上の宮川沖積地に面して比高60mほどの段丘状を呈して終わり、宮川沖積地は狭長な平坦面で諏訪湖まで続いている。大石遺跡のある尾根は幅200mほどの平坦部から南は比高30mほどの矢ノ口川へ急斜面で降り、北はハレン沢の浅い谷へ緩斜面で続くが、ハレン沢の谷はこの付近から急に深くなって遺跡北西からは比高20mほどの急斜面となる。尾根上の平坦面は南がやや高くなり、ハレン沢側の一段低い広い面とは区別できる。中央道は八ヶ岳山麓の一連の尾根の末端ちかくを縦断するため、遺跡より八ヶ岳側には広い山麓が展開するが、宮川沖積地側は末端まで400mほどの狭長な尾根を残すだけとなっている。

大石遺跡は中期前半を中心とし、同じ中期の遺跡は、同じ尾根の末端側に日向、八ヶ岳側に山の神尾根、ハレン沢の対岸にオシキ、さらにひとつ北の尾根に居沢尾根がある。前期の集落址として著名となった阿久は居沢尾根のさらにひとつ北の尾根である。これら周辺の遺跡はやはり中期が多いが、中央道通過部分が調査されたのみであり、予想できない時期や規模の遺跡が存在する可能性は強い。また、中期主体の遺跡群としても、オシキなどは定住的な集落遺跡ではなく、それぞれ異なった性格を持っている。発掘調査が行なわれて、比較的規模の大きな集落址であることがわかる阿久、大石、居沢尾根、上前尾根の各遺跡は、それぞれ前期後半、中期初頭、中期中葉、中期後半を主体としており、時期的にはほとんど重ならない。これらの遺跡は距離的にも半径1kmほどに分布し、それぞれ土器形式にして3～4形式の継続が認められ、未調査遺跡を考慮してもなお、集落の展開のありかたや—集団のテリトリーの問題を提起する。また、同時期の小遺跡のありかたとして、大石における前期、オシキにおける前期・中期、阿久における中期などの遺構と遺物のありかたが、近辺の集落址とどのようなかかわりを持つかも興味深い点である。

大石には平安時代住居址も存在するが、原村から富士見町にかけての中央道通過部分では平安期集落が比較的多く調査されている。尾根南斜面に立地することが多く、阿久・居沢尾根・オシキでも同様である。これらは斜面に沿って東西に長く分布する例が多く集落の全体は不明であるが、縄文時代の遺跡の立地との共通点と微妙な差異は、その生産基盤の問題としても興味が持たれる。

現在、尾根上は畑地あるいは山林（雑木・松）となっており、斜面を降りた谷は水田として利用されており、谷水田の開発は水利の点では困難ではなかったと考えられる。また、現在の集落は中央道より八ヶ岳側の谷が浅く尾根が広くなった部分にあり、遺跡付近は居住地とはなっていない。

Ⅲ 調 査 遺 跡

1. 塩水遺跡(阿久遺跡)(SAUB)

1) 位置 (図1)

阿久遺跡は日本道路公団との契約では塩水遺跡として扱われてきている。然し、地元では本遺跡ののる低い尾根状丘陵を阿久尾根と呼称しているため、阿久遺跡と改称した。

本遺跡は長野県諏訪郡原村柏木9308の2番地外に所在し、標高は898m～910mで山林となっていた。阿久尾根は八ヶ岳山麓から西流する北側の大早川と南側の阿久川に挟まれ、浸蝕された丘陵であり、その付根部には柏木部落がある。遺跡の南側は阿久川の形成した広い沖積地で、本遺跡の平安時代住民による耕地が展開していたものであろう。北側は一段低いテラスをもって、比高差30m余の大早川のV字谷となり、柏木南遺跡と相対する。

2) 調査の経過とその概況

本遺跡の調査に入ったのは10月28日である。大石遺跡が調査未了のため、本遺跡の調査完了は厳寒期を目前にした時点では到底不可能であった。そこで、調査団としては公団との協議により契約変更する方針をきめ、今年度は範囲確認のための調査に限定し、大石遺跡の調査終了に全力をあげることになった。11月5日にはグリット掘りを行なったが、各グリットから遺物が多出し、遺構が多数存在することが予想されたため表土を剝ぐ作業に止め、凍結による破壊を防ぐこととした。同日には道路公団から本遺跡及び居沢尾根遺跡の調査を完了しないのは契約違反であり、更に調査を続けるようとの厳しい抗議を受けた。これに対し、大石遺跡の遺構・遺物の多出により精一杯の努力をして来たが、本遺跡を年度内に調査終了し公団へ引渡すことは出来ないという返答をした。この事情により一旦資材撤収作業を行なったが、17日に再度グリット掘りを行なった。松永・田畑両調査員が、大石遺跡の測量を終え参加した。

グリット設定は従来の調査団の基準に従い、日本道路公団設定の STA 234+60 を基点に AA とし、50列を STA 235+68 まで2m間隔で掘っている。BP 列ではセンターラインに直交する方向のグリットを試掘したが、各グリットの表土層から遺物が多少なりとも出土した。特に、AA から BP 間には繩文時代のものが多く、前期の関山式、黒浜式、諸磯式土器と凹石、フレイクが出土し、BP からC区には平安時代の灰釉陶器片、土師片が多く出土している。この間には集石遺構1カ所、土壙2カ所、住居址と思われる地点1カ所を確認している。

契約時の用地内面積 7,200 m²、調査予定面積 1,400 m² に対し、調査した面積は 112 m² のみであったが、遺跡の範囲は今年度契約対象とした基点 AA より北側に延びることが判明した。その後、調査団は県教育委員会と協議し、全体面積を 21,500 m²、用地内面積 11,000 m²、調査予定面積 4,000 m² として日本道路公団と契約変更することを決定し本格的調査を次年度へ繰越すことにした。

2. 居沢尾根遺跡（SIZB）

1）位置（図1）

本遺跡は諏訪郡原村菖蒲沢9854、10315番地に所在する。遺跡は八ケ岳山麓から西流する払沢川の支流と阿久川の浸蝕により形成された、ほぼ東西にのびる低い長尾根状の丘陵に位置する。標高は916～925mであり、畑・山林となっていた。用地はセンターライン東側車線（Aライン）のサービスエリアとなるために、この尾根上では広大な面積が取られている。遺跡南側は払沢川の沖積地となり水田として利用されているが、尾根に沿う小川も近くにあり、比高差8mのゆるやかな斜面を下れば容易に水を得ることができる。また、北側の阿久川にも近く、古代人の生活環境としては絶好の場所といえる。

本遺跡の南方600m、800m離れてオシキ・大石両遺跡が間に長尾根を挟んで相対し、北方には居沢尾根の裾に中阿久遺跡が隣接し、500m離れて阿久遺跡が望める。なお、中阿久遺跡は本年度実施した分布調査で発見したものであるが、本遺跡と一体となるものであろう。

2）調査の経過とその概況

本遺跡は10月27日に開始した。大石遺跡が測量段階に入り、漸く、作業員の余裕ができたため主任1名とで草刈り、資材移転、グリット設定をした。翌日は霧雨の中をグリット掘りしたが、各グリットから遺物の出土をみ、中には表土の腐植土を剝ぐと 20 cm 下から完形土器が顔を出すという状況であった。縄文中期の大集落が予想されることから、年度内での調査終了は不可能と判断し、完形土器出土グリットは埋め戻し凍結による破損からの保護処置をした。他のグリットも表土を剝ぐに止め、範囲が契約面積の3倍にも達することを予想し、資材を阿久遺跡に移し、調査を一旦終えた。予算的にも水洗用賃金から流用した分まで使いはたし、これ以上の調査は大石遺跡の測量が完了していないこともあって不可能であった。

グリット設定の基点は STA 248+90 を AA とし、DU 列までを調査し、STA 240+80 までの範囲を確認した。11月13日、阿久遺跡で記した事情もあって、本遺跡の範囲をより正確に確認するために資材を再度運び、松永・田畑両調査員とともにセンターラインに直交するグリットを設定し調査した。

AF では52～60列に縄文時代中期末葉の土器片・石器の濃密さを認め、AL 50 では完形土器1点を確認し、住居址の存在を予想して、前記の処置をとった。BA 50 には曽利式土器片が多出した。BU 列でも曽利式土器片が多く得られ、BU 40 を中心に遺構の存在することを予想した。CJ からCT の間には多少の土器片・フレイクが出土し、センターライン沿いの STA 240+00 のグリットからは平安時代の灰釉陶器・土師片の出土があり、表採時にも同時代の遺物を用地外の桑畑からも得ている。

居沢尾根遺跡の契約時用地内面積 6,600 m^2 に対し、調査予定面積は 1,400 m^2 であったが、調査した面積は僅かに 304 m^2 であった。その後、県教育委員会との協議の上、公団との契約変更には遺跡全体面積 21,500 m^2、用地内面積 17,400 m^2、調査予定面積 3,000 m^2 として交渉することとなり、本遺跡もまた、次年度の本格的調査へと持込まれた。

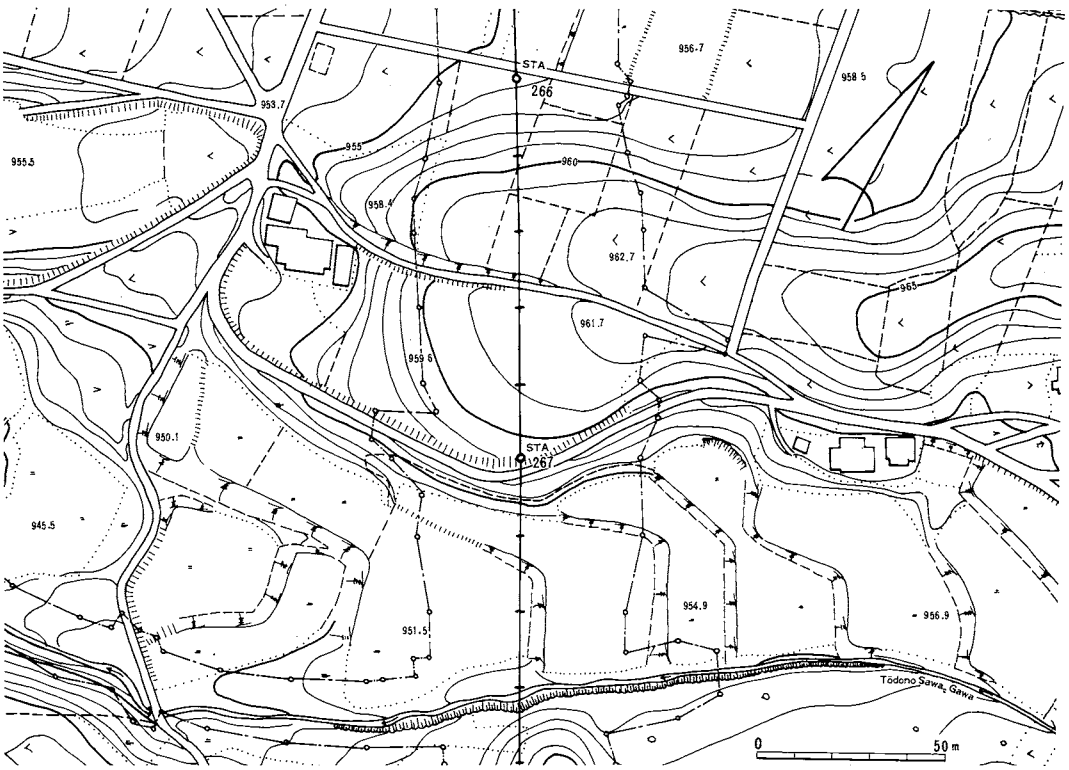
3. 御狩野遺跡（SMKC）

1）位置（挿図１・２、図版１）

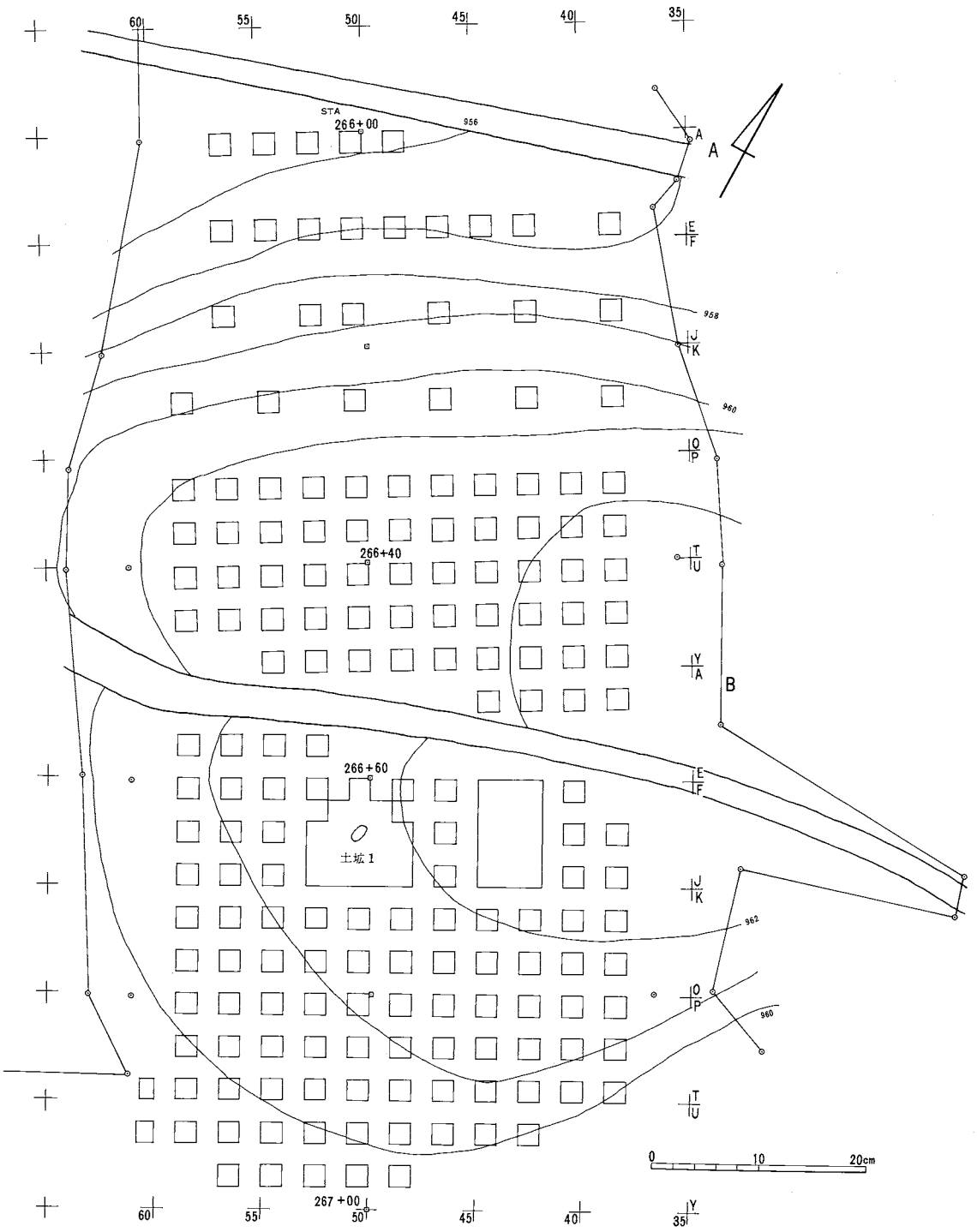
茅野市金沢御狩野5665・5666番地他が本遺跡の所在地である。調査時点における遺跡の状況は野菜畑であった。遺跡のある台地は、北は金山沢、南は頭殿沢が形成した谷となり、西は宮川へと続く斜面となっており、南北方向の幅は遺跡付近でおおよそ600m程である。遺構は台地南側の頭殿沢沿いの、東西にのびる幅100m、台地中央部より５～６m程高くなった尾根の、標高962m前後の南向き斜面上に位置する。中央道用地はこの尾根を横断しているが、幅約60mの用地中央部に土壙一基が発見されたのみで、この尾根の南・北両斜面からは、後述する少量の遺物が発見されたのみで、他の遺構は検出されなかった。本遺跡の南側の頭殿沢の対岸には同時代の集落址が発見されており、距離的にも近いこと（140m前後）、また土壙は集落址を見おろせる位置にあることなどから、両遺跡の関連性がうかがわれる。

2）調査の経過

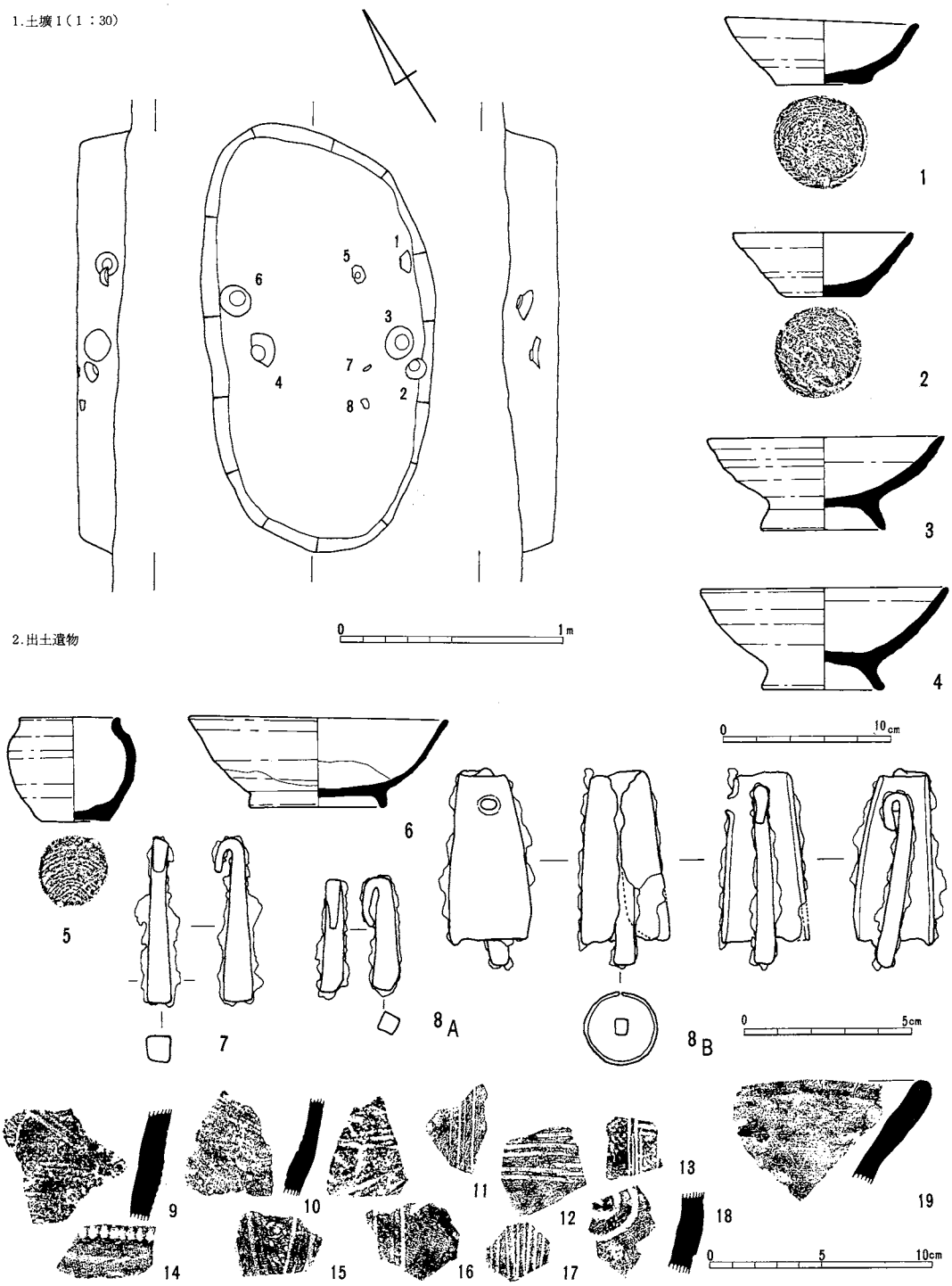
本遺跡の調査は昭和50年５月１日から26日にかけて行なった。 STA 266＋00 をグリット設定の基点と



挿図１　御狩野遺跡地形図　（１：2000）



挿図2　御狩野遺跡遺構配置図（1：600）



挿図3　御狩野遺跡土壙1実測図及び出土遺物（1～6は1：4，7・8は1：2，他は1：3）

〈1～8土壙1，9～19遺構外〉

して尾根北側の農道付近から発掘を開始した。この付近は黒色土の堆積も厚かったが、遺物は殆んど発見されなかった。尾根頂上付近は、僅かな耕作土の下がローム層で、土壙1基とそれに伴う遺物の他は少量の土器片を発見したにすぎない。

3）遺構と遺物

ア　土壙1（挿図2・3、図版1・2）

遺構　耕作土を取り除いた段階で、ローム層を掘り込む遺構が確認できた。遺構の形状はいわゆる小判形で、長軸を南北方向から30度程東に振り、長径が1.9m、短径が1.0m、深さはローム層の検出面より測って、斜面上方の北側が最大で 23 cm、斜面下方の南側が最小で 15 cm である。土壙底は概ね平らで、土壙壁は60～70度の角度で立ち上がる。（遺構図内の小数字は遺物図番号と一致する。）

遺物　土師器坏2点（挿図3－1・2）、同高台付坏2点（3・4）同小形甕1点（5）、鉄鐸1点（舌あり）（8B）、舌2点（7・8A）が出土している。遺物の出土状況をみると、土師器坏（1）は土壙東壁沿いの中央よりやや北の、土壙底より 7～17 cm の位置に内側を壁に向けた状態で、他の1点（2）は東壁中央の壁際の、土壙底より 3～9 cm の位置に伏せられた状態で出土している。土師器高台付坏2点のうち1点（3）は、東壁沿いのほぼ中央の土壙底より 3～15 cmの位置に、上向きで土壙中央側に傾いた状態で、他の1点（4）は、西壁中央部の土壙中心寄りの土壙底より 3～15 cm の位置に、上向きで土壙中央側に傾いた状態で出土した。土師器小形甕（5）は、土壙中央からやや北東の土壙底より 9 cm の位置から、正位の状態で出土した。鉄鐸（8B）と舌（8A）は、土壙中央やや南寄りの、土壙底より 1 cm の位置から、また他の舌（7）は、この鉄鐸の北約 10 cm の土壙底に接して出土している。出土遺物のうち鉄鐸と舌について触れてみる。いずれも腐食しており細かな観察は困難であるが、鉄鐸は厚さ 1～2 mm の鉄板を丸く曲げ、円錐台筒状に加工したもので、鉄板の端は突き合わせてあるだけで接着等の加工はみられない。この部分を正面にすると、左側面に一孔が穿たれている。長径 4 mm、短径 3 mm の長円形をしており、鉄板が内側から外側に向かってめくれ上がっている。これは穴が、内側から外側へ向けて開けられたことを示していると考えられる。鉄鐸の各部の計測値は、上端径 1.5 cm、下端部は一部破損しているが径約 2.5 cm、器高 5.0 cm で重量は現状で16.5ｇである。これに伴う舌は 4 mm 角の鉄材の一端を細く延ばして丸く上げた、長さ 5.2 cm 重さ5.6ｇのものである。同図－7の舌は、7 mm 角の鉄材の一端を細くかつ平らに延ばして曲げたもので、長さは 4.8 cm 重さ7.4ｇである。同図8Aの舌は、5 mm 角の鉄材の一端を細く延ばして曲げたもので、長さ 3.3 cm、重さ4.4ｇである鐸身と舌を連結する部品は残存していなかった。

イ　遺構外出土遺物（挿図3）

挿図3－9は外面条痕の上に竹管による平行沈線のあるもので、胎土に雲母と多量の繊維を含む。10は内外面とも条痕で、胎土に雲母と少量の繊維を含む。11～13は竹管施文のもので、胎土に雲母を含む。13はRL縄文を地文としている。14は三角押文のあるものである。15～17は竹管施文のものである。18は沈線文である。19は無文で内外面とも篦削りされている。これらの他に図示していないが、無文の深鉢小片と陶器甕破片が出土している。

4）まとめ

本遺跡では、遺構は小高い尾根の上に一基の土壙が発見されたのみであった。この土壙は出土遺物の状

況から墓壙と考えられ、また直接の関係を証明するものはないが、南側に同時代の頭殿沢遺跡の集落址を見おろす位置に立地していることと、現在諏訪大社で祭器として扱われている鉄鐸を伴うことから、被葬者の集団内での地位を考える手懸りになるであろう。さらに鉄鐸の用途や、変遷、所有形態などの解明にも多くの手懸りを与えたが、これらのことは今後周辺遺跡の研究の進展や、諏訪古代史の研究の上で、さらに検討されなければならない多くの点を含んでいよう。本址の所属時期は、出土した灰釉陶器が折戸53号窯期のものであることから、11世紀代に位置づけられると考える。

遺構外出土遺物のうち挿図3—9は田戸上層式並行、11～13は九兵衛尾根Ⅰ式に属するものである。14は新道式、15～17は平出第3類Aで、14に伴出するものである。18・19は縄文後期前半の堀之内式に並行するものであろう。また、図示してない遺物のうち無文の深鉢は縄文時代後期のもの、陶器甕破片は中世の常滑系のものであろう。

4. 一の沢遺跡（SISB）

1）位置（挿図4・5、図版3）及び調査の経過

諏訪郡富士見町富士見一の沢1584のイ番地の山林が本遺跡の所在地である。徳久利遺跡ののる台地から掌指状にのびる長尾根の先端部が遺跡地で、東側は急崖下を流れる一の沢川を挟んで、徳久利下遺跡となる。同川との比高差は7mあるが、遺跡中心から南へは緩傾斜面となり、この遺跡の住人はこの斜面を降りて水場へ通ったものであろう。西側は同程度の比高差の凹地をへだてて長尾根遺跡と相対する。

調査対象範囲は標高974～987mで、かって山畑であったため林道の両側に猪土手が築かれていた。

昭和49年12月に日本道路公団より、ボックス工事のため年度内に調査して欲しいとの要請を受け、協議の結果3月に工事に必要な最小限の範囲を発掘することになった。翌50年3月9日から16日にかけて、伴・細川が参加し調査したが、頂上部は地表面数 cm が軟らかいだけで、下部は凍結し笹の根等で難行した。グリットは STA 17+80 m を基点 AA として、設定した。同18+26mの Au 列まで、45～56列の間が一次調査分である。50年度に本遺跡の調査を再開したのは4月23日、終了は5月1日、田畑が遺跡担当者である。

用地内面積 2400 m^2、調査予定面積 460 m^2 に対し、実調査面積は 748 m^2 である。層序は頂上部で表土（腐植土層）が 30 cm、その下部に約 10～15 cm の漸移層を挟んでロームとなる。腐植土層が縄文中期以降の遺物包含層、漸移層が早期遺物の包含層である。

2）遺構と出土遺物

ア　縄文時代早期遺物集中区1（挿図5・6・8・11・13、図版3・5）

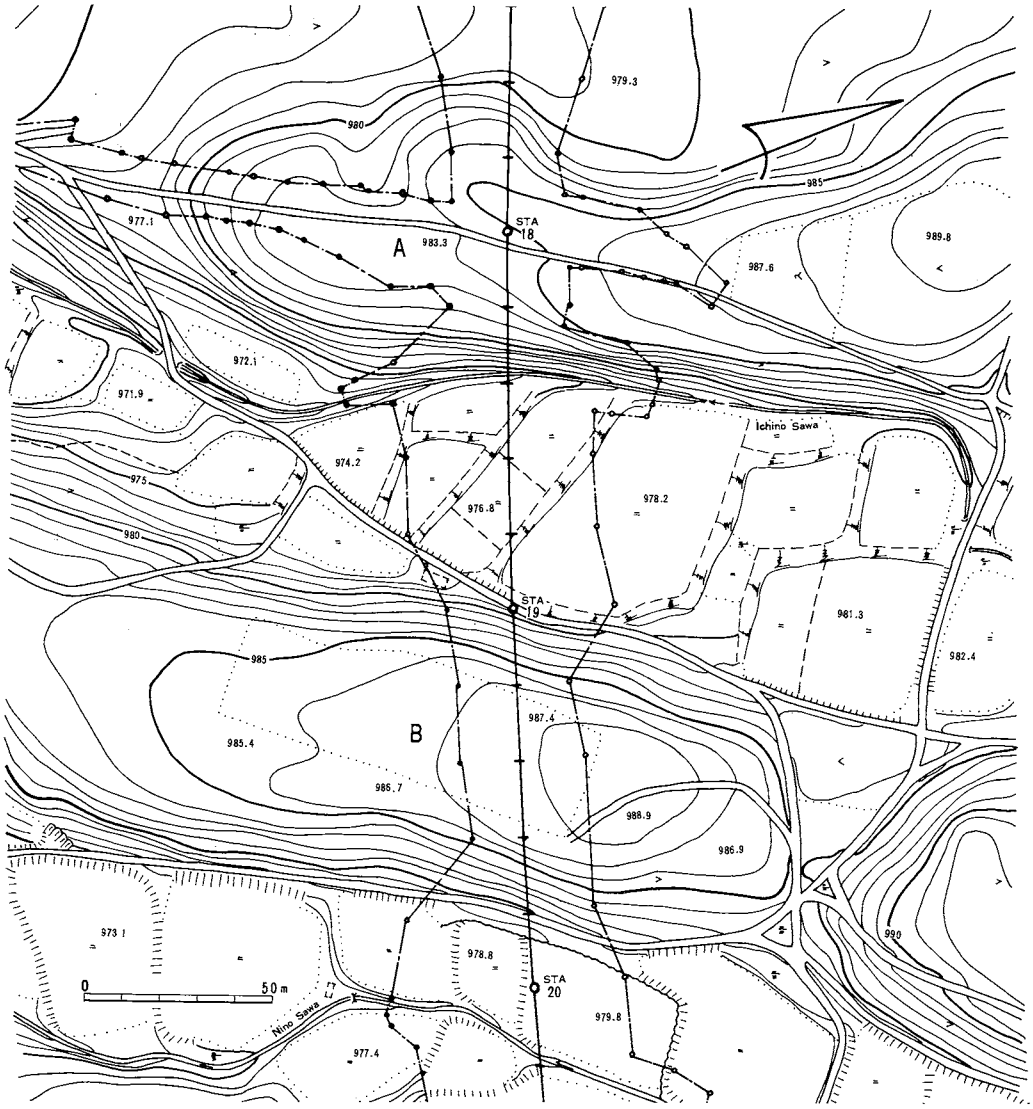
遺構　長尾根中央部に径2.2mの範囲に台石・遺物等が集中した箇所である。表土下 25 cm に台石等が見られ、注意して削り下げたが、住居址等は確認できず生活面と考えた。大きな台石の下面レベルで、その脇から尖底部片（挿図8－2）が出土した。ロームからは 7 cm 程上層にあった。他の遺物も同程度浮く。

遺物　土器片4点（挿図8）を得た。1は胎土に金雲母を含む細久保式の楕円押型文、2は胎土に長石及び少量の繊維を含み、橙褐色の尖底部で、半截竹管で平行沈線を縦と横位に施文する。田戸式である。3・4は、赤褐色で長石・石英・輝石・微量の繊維を含み、撚糸文を施文する。他に若干のフレイクがある。裏面にも凹穴1をもつ凹石（挿図11－1）は877g、安山岩製、剝片石器（挿図13－7）がある。

イ　縄文時代早期遺物集中区2（挿図5・6・8・11・13、図版3・5）

遺構　尾根中央部にあり、径6mの範囲に安山岩礫石が散乱し、押型文・石器がある程度のまとまりをもって検出された。出土層位は前者と同様であるが、遺物包含層には木炭片・炭粉がみられ、北西部では須恵器片、東部では縄文時代中期の深鉢片も腐植土層で得た。

遺物　土器（挿図8）は山形押型文8片がある。5・6は暗赤褐色で長石・雲母を含み、厚さ 9～12 mm、7～10は同一個体と思われ、橙褐色で厚さ 9～10 mm で山形幅は 8～10 mm と狭い。原体の回転方向も不

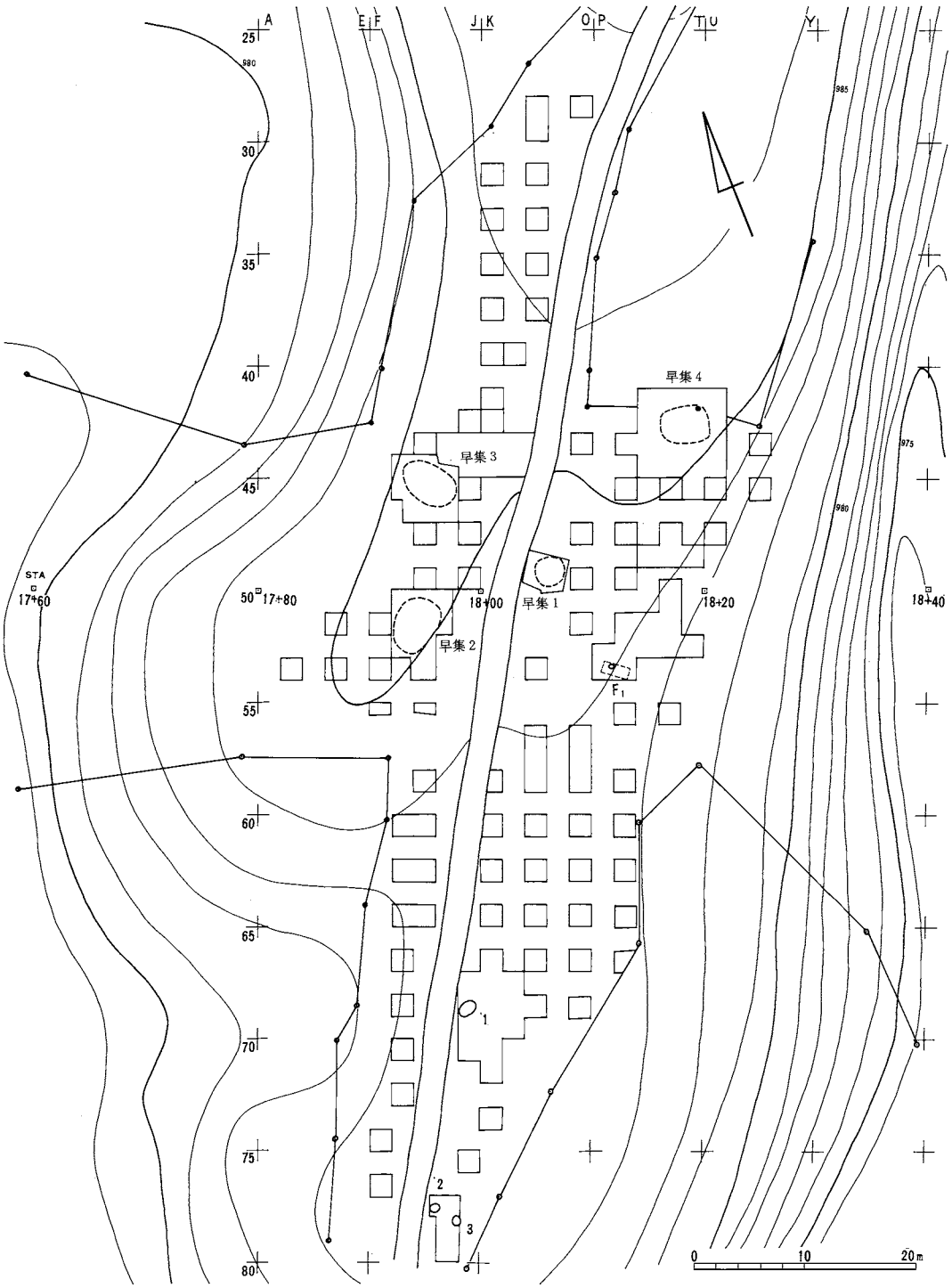


挿図４　一ノ沢遺跡・徳久利下遺跡地形〈A一ノ沢遺跡，B徳久利下遺跡

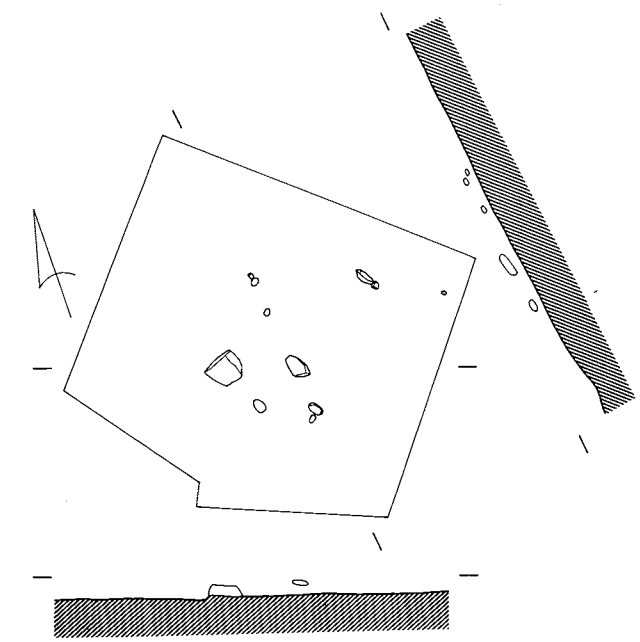
規則で細久保式に近いが、やや厚く多少の差がある。11は長石・輝石を少量含み赤褐色を呈し、内面は丁寧ななで整形される。11～12・14は撚糸文、13は縄文、15は擦痕に近い条痕が施文される。14～15は暗褐色で金雲母を多く含む。特殊磨石（挿図11）の２は985ｇ、３は905ｇ、４は545ｇ、５は935ｇでハンマーとしても使用したと思われる。磨石の６は両端にも磨面を持ち1,100ｇ、７は475ｇである。８の打石斧は100ｇ、９の凹石は2,240ｇである。以上、打石斧が片麻岩製で、他は安山岩製である。黒曜石製の小形石器（挿図13）では８の石鏃、９～11の使用痕のある剝片がある。

ウ　縄文時代早期遺物集中区３（挿図５・７・８・12、図版４・５）

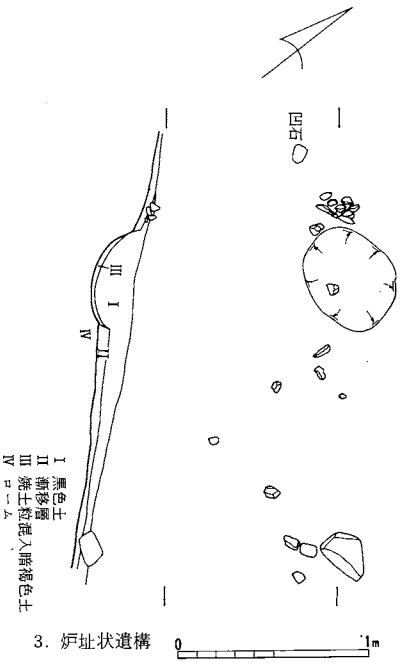
遺構　尾根北斜面寄りの平坦面にある。４×2.5mの楕円形となる範囲に安山岩礫が散在し、縄文時代早期、弥生式土器片が少量検出された。表土下 35～25 cm の暗褐色土層が包含層であるが、両時代の遺物は



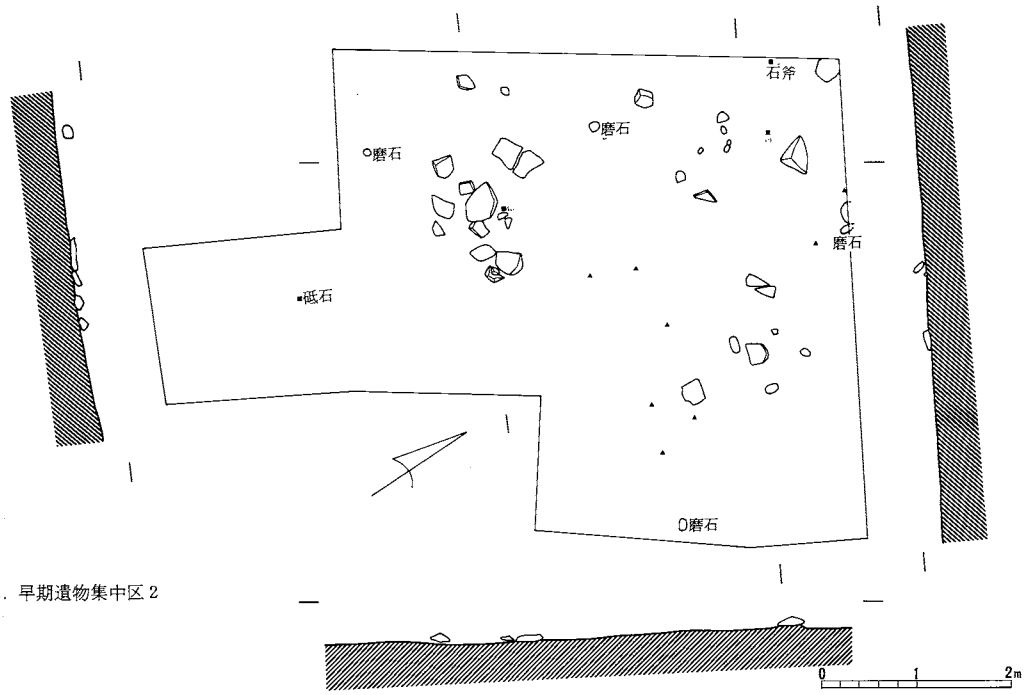
挿図５　一ノ沢遺跡遺構配置図　（１：600）



1．早期遺物集中区１

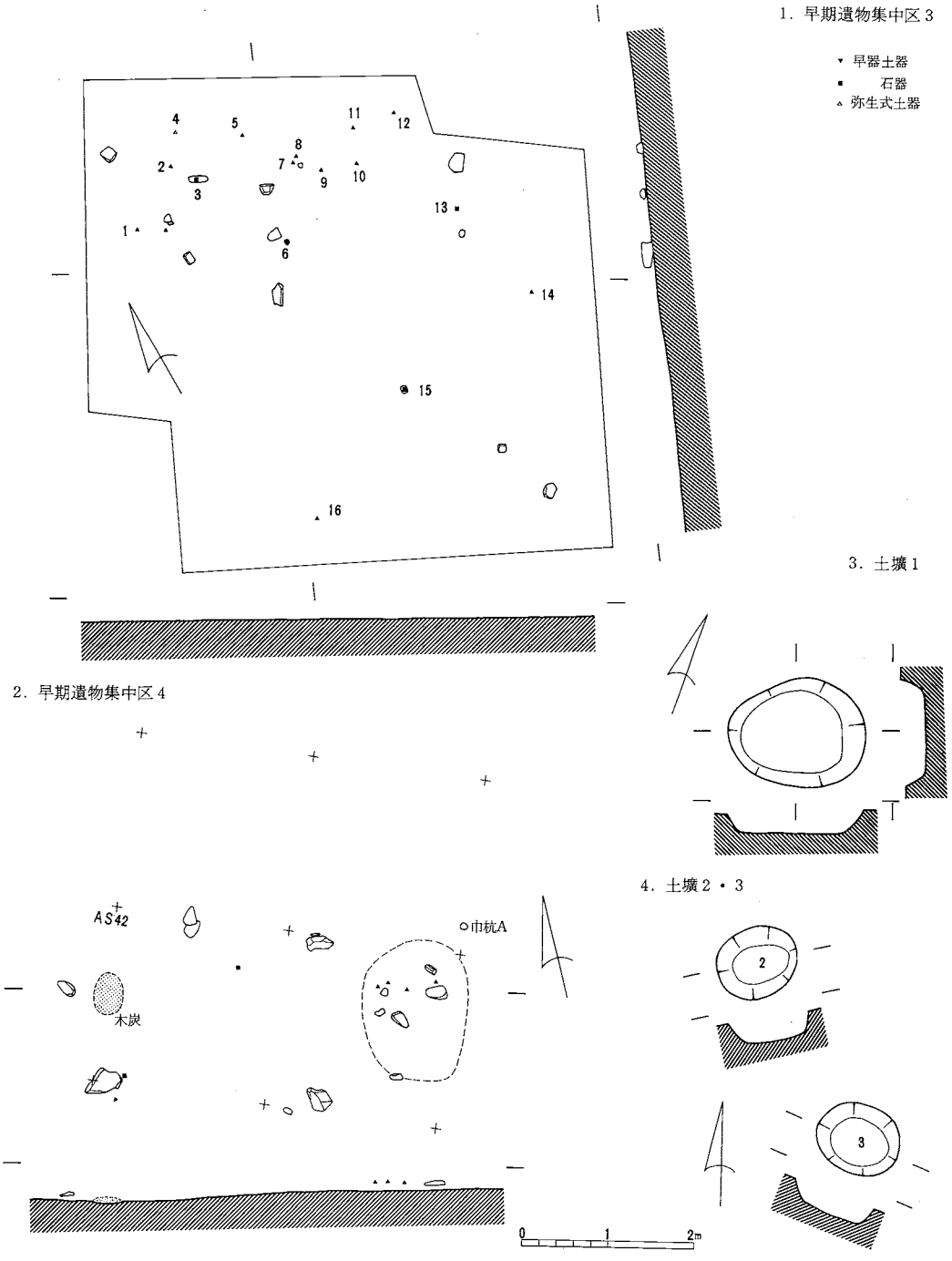


3．炉址状遺構



2．早期遺物集中区２

挿図６　一ノ沢遺跡早期遺物集中区１・２，炉址状遺構，土壙１～３（１：80　但し３は１：40）



挿図７　一ノ沢遺跡早期遺物集中区３・４　（１：80）

殆んど同一面で出土している。若干、硬さを感ずる部分もみられたが、当時の生活面であろう。

遺物（小算用数字は遺構図中出土地点を示す）　土器（挿図８）　16は楕円文を密施する細久保式で、原体の長さは 19 mm、径は 5 mm 程となり右廻りに回転施文している。器厚 7 mm で金雲母を含む。17～18は異方向の撚糸文施文で、17は長石・輝石を、18は長石・石英を多く含む。この３点は赤褐色で、焼成の良い土器である。19～21は大粒な RL 縄文で、長石を主に石英・金雲母を含み整形も雑である。

特殊磨石（挿図12）が３点ある。１は795ｇで、下端に敲打痕が顕著にみられ、２・３とともに安山岩製である。スクレーパー（挿図13—12）は黒曜石製で3.4ｇある。

エ　縄文時代早期遺物集中区４（挿図５・７・８・９）

遺構　一ノ沢川への急崖寄りに位置し、５×2.6mの範囲に安山岩の礫石が散在する。挿図７の点線内は礫と遺物がまとまってみられ、下部に硬い面がみられた。表面下 35 cm にあり、遺物は同 25 cm より下に多い。これは、他のグリットでも同様である。ローム面までは 30～40 cm あり、西側は木炭の多い箇所があり、炉址かも知れない。

遺物　土器（挿図８・９）　23・24は同一個体で、長石を非常に多く、金雲母も含み堅緻である。異方向の施文をし、黒褐色である。25・26も同一個体で、胎土は同様だが赤褐色を呈する。１は長石を中程度含み橙褐色である。３個体とも微量の繊維を含み、高さ 12 mm、幅 18 mm と大きく、厚さも 9～10 mm ある。鍋久保遺跡第１群第１類Ｃに近い。微量ながら繊維を含む点で相木式に近い時期であろう。２は一端を自縛したか撚糸をからめたＲℓℓℓ縄文で暗褐色を呈し、雲母・長石を少量含む。複節の近似例は赤坂遺跡にあり早期後半である。内面平滑に篦横なでされる。４～８は赤褐色の長石・石英を多く含む、内面の凹凸の激しいもので、大粒な単節縄文が施文される。９は異方向網目状となる。

オ　炉址状遺構（挿図５・６）

遺構　一ノ沢への南向緩傾斜面に位置する。56×45 cm の規模で黒土の落ち込む浅い凹穴である。傾斜面にあるため正確な深さは不明であるが北肩部との差は 20 cm で、底部には焼土粒混入黒褐色土が見られた。北西の脇には安山岩礫が集中し、下方にも礫石が散乱する。遺物は周辺で凹石１点と黒曜石フレイクが出土しているが土器はない。黒土層の最下部にあり、縄文時代早期の屋外炉の一種と考える。

カ　土壙１～３（挿図５・７・10、図版４）

土壙１　160×124 cm の卵形を呈し、褐色土層からロームまで掘り込み、深さ 32 cm で黒褐色土が落ち込んでいる。底面はほぼ平坦であるが、軟弱である。覆土から庄之畑式片（挿図10）が出土した。16・17は櫛状具による条痕文を斜または縦位に付するもので暗赤褐色の堅緻な甕である。18は沈線を横走させ壺片であろう。周辺からは表土下 20～30 cm の黒土中で19～23の同式片を得ている。19は16と同様に口唇に指圧痕を付し、29は口唇に篦刻目が施文される。弥生時代中期の土壙である。

土壙２　98×80 cm の楕円形を呈し深さ 25 cm である。黒土が落ち込み、下層にはローム粒が混入する。遺物は少なく、縄文式土器小片１点（挿図９）と黒曜石フレイク、安山岩製の特殊磨石（挿図12）が１点出土している。後者は混入とみられ、縄文時代早期の土壙であろう。

土壙３　99×41 cm の規模で深さは 23 cm と浅い土壙である。黒褐色土が充満し、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。所属する時代は不祥である。

キ　遺構外出土遺物（挿図9・10・12・13、図版5）

縄文時代早期　細久保式に比定される押型文がある（挿図9）。いずれも、長石・石英等を含むが11～13は多い。11は山形文の原体が長さ 25 mm、16 mm の間隔で同一文様となることから径 5 mm と推定される。12は挿図8—10と同一個体かと思われる。楕円文となる13～21は器厚 7～8 mm と薄手で焼成も良い。撚糸文を施文するもの（挿図9・10）は、いずれも、長石を多く含み、橙褐色～赤褐色である。23は横位、22・24・32～34は異方向の斜位施文となる。26～29は細い原体で、他は太い。大粒な縄文を施文する挿図10—3がある。5～6は 12 mm と厚く、長石・繊維を含み平行沈線文が施文される。胎土からみて挿図8—24～26に伴うものかと考えられる。

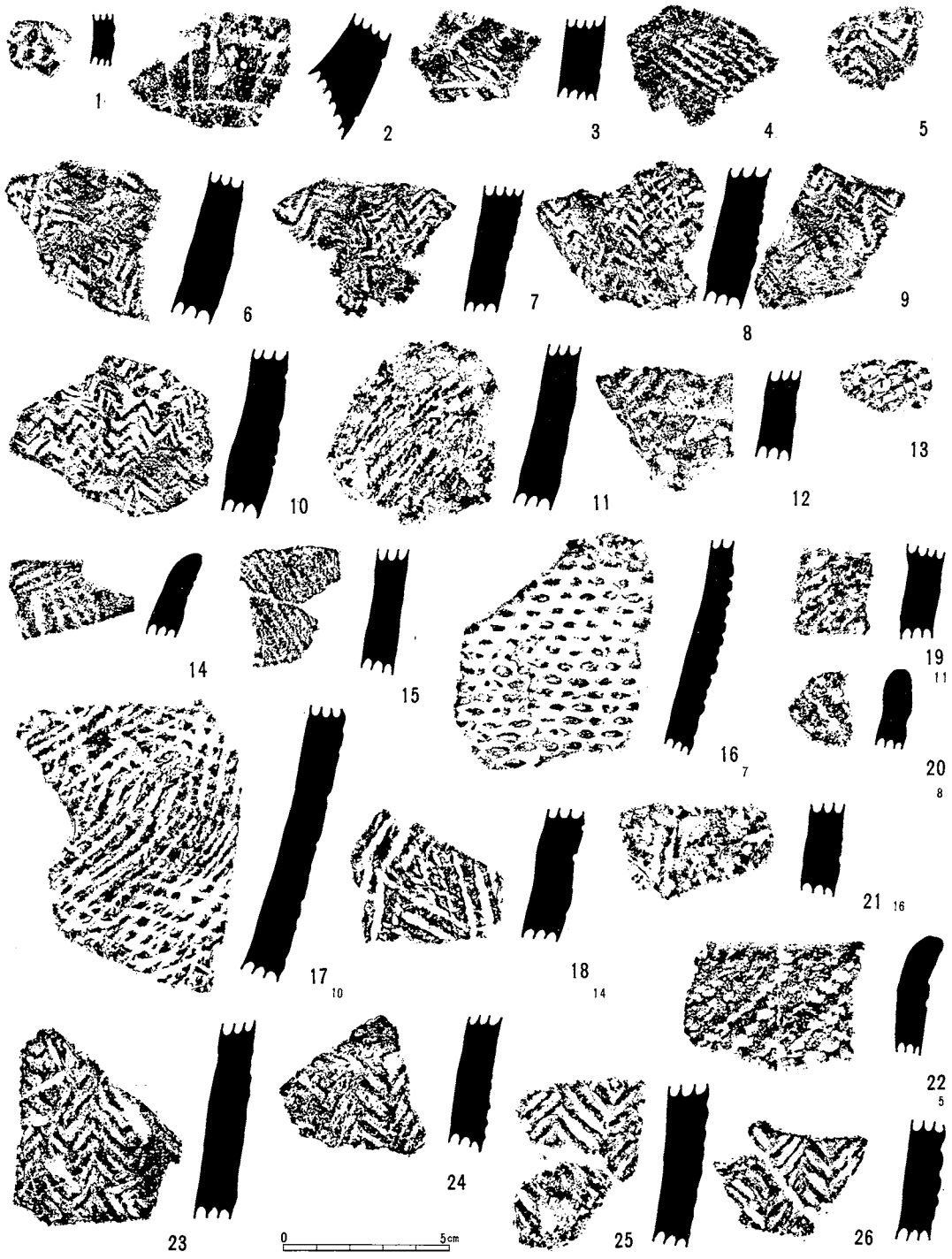
縄文時代前～後期　挿図10—7～10は諸磯A式かと思われ、9～10は半截竹管による施文がある。同図11は繊維を含む無文部で、低い隆帯をめぐらすが形式は不明である。12～13は中期中葉、14は新道式、15は後期の堀之内式である。

石器　特殊磨石7点（挿図12）がある。全部が安山岩製で黒土下層～漸移層直上での出土が多い。5は凹石としても使用され430ｇ、7は多孔質の原石を使用し620ｇ、8は1,100ｇ、9は900ｇである。凹石（挿図13）も安山岩製で、1は930ｇ、2は2,320ｇある。横刃型石器（同図）で矢印部に磨耗痕をもち、硬砂岩製で75ｇ、6は緑泥岩を用い22ｇである。硬砂岩製の打石斧が2点ある（同図4・5）。小形石器（同図）はすべて黒曜石製である。石鏃の内13・14は黒土最下層出土で、13は1.0ｇ、14が1.1ｇ、15が1.3ｇである。16・17はスクレーパー、19は石錐基部、18・20～22は使用痕ある剝片、23は有茎石鏃である。20～22と打石斧、横刃形石器は土壙1周辺出土で、23とともに弥生時代の可能性が強い。

3）まとめ

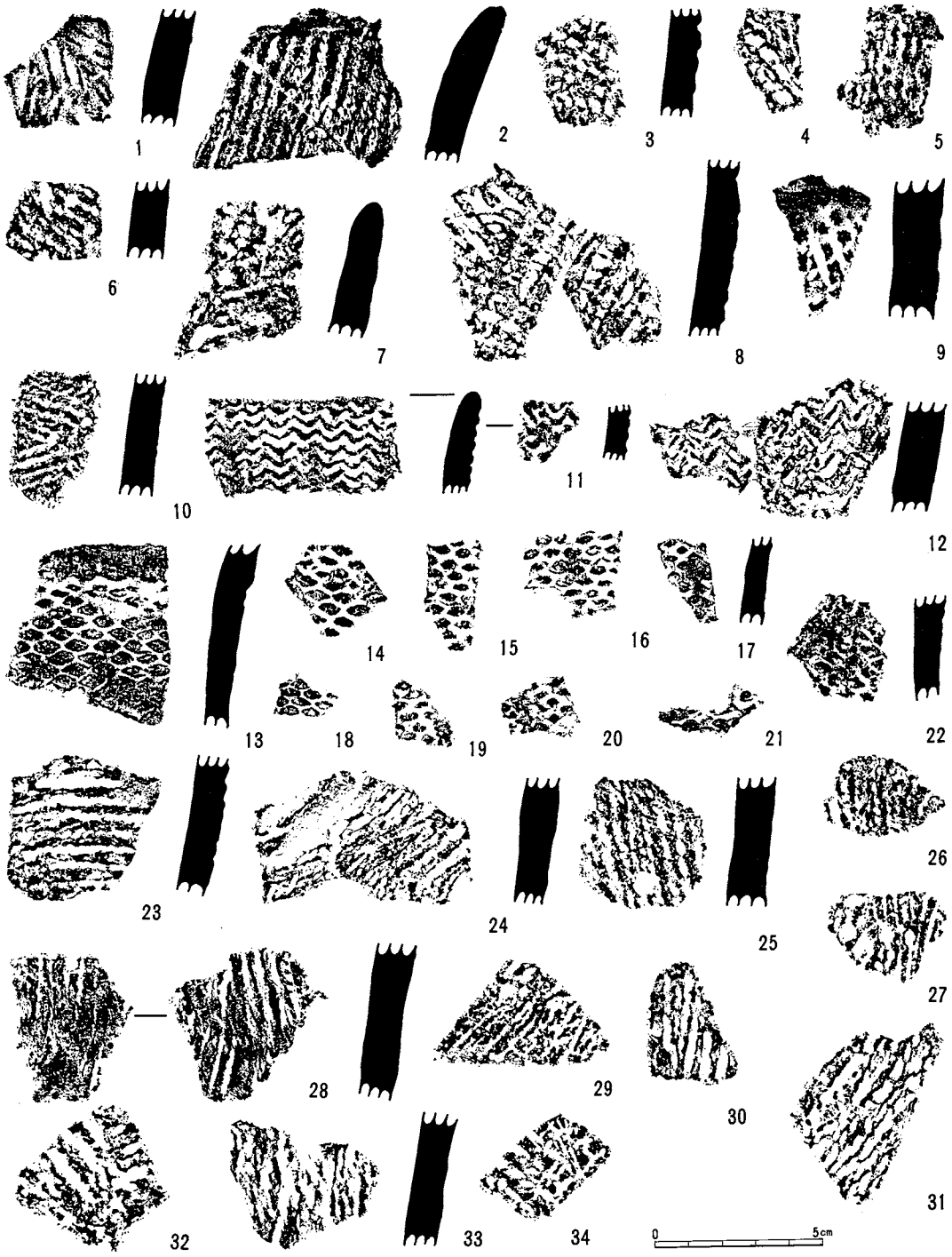
縄文時代早期から弥生時代中期まで、断続的ではあるが各時期の遺物が残されていた。しかし、住居址は確認されず縄文時代早期の炉址状遺構と遺物集中区4が生活の痕跡を強く感じさせるだけである。早期においては仮泊地として利用されたものであろう。弥生時代中期庄ノ畑式期は土壙1基ではあるが、この地区としては数少ない遺構の確認例である。下方の神戸区運動場造成時に弥生式土器片が採集されたと聞くが、その遺跡と関連が考えられる。

註1　森嶋稔他「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌』23・24　1976
2　遠藤藤麻呂「上伊那郡赤坂遺跡における押型文土器と遺構」『長野県考古学会誌』16　1973



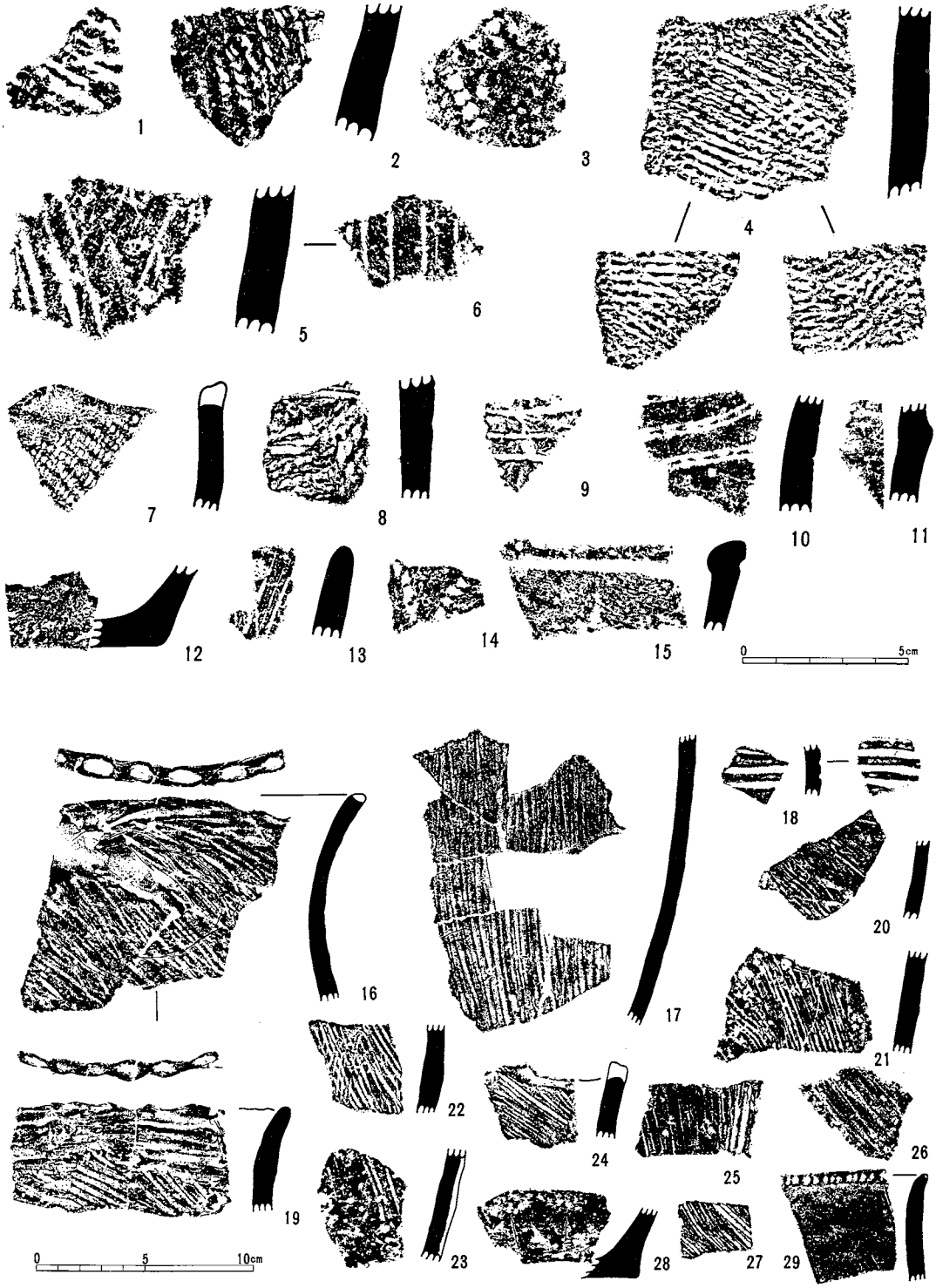
挿図８　一ノ沢遺跡早期遺物集中区１～４出土土器（１：２）

〈１～４・早集１　５～15・早集２　16～22・早集３　23～26・早集４〉



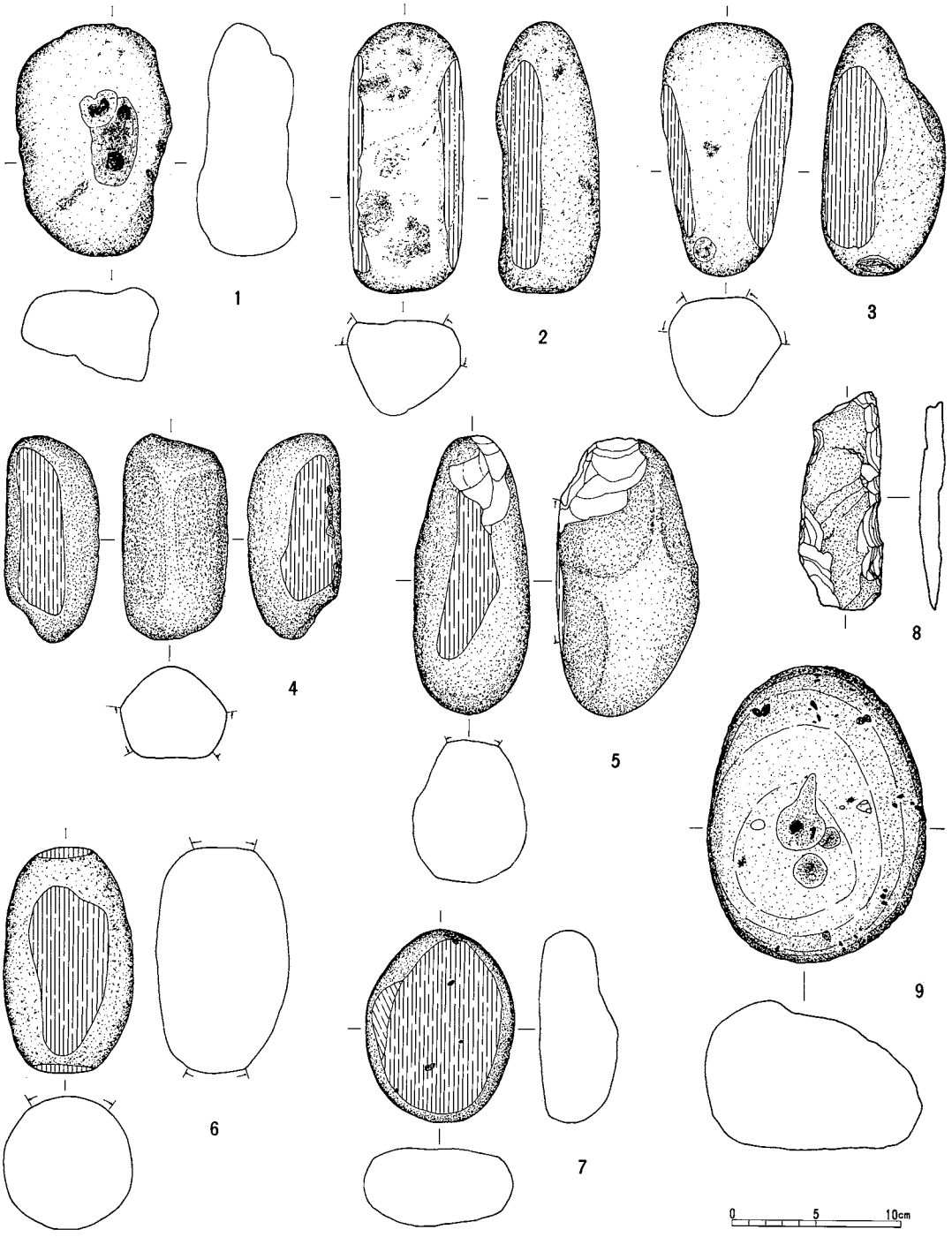
挿図９　一ノ沢遺跡早期遺物集中区４，土壙２，遺構外出土土器（１：２）

〈１～９・早集４　10・土壙２　11～34・遺構外〉

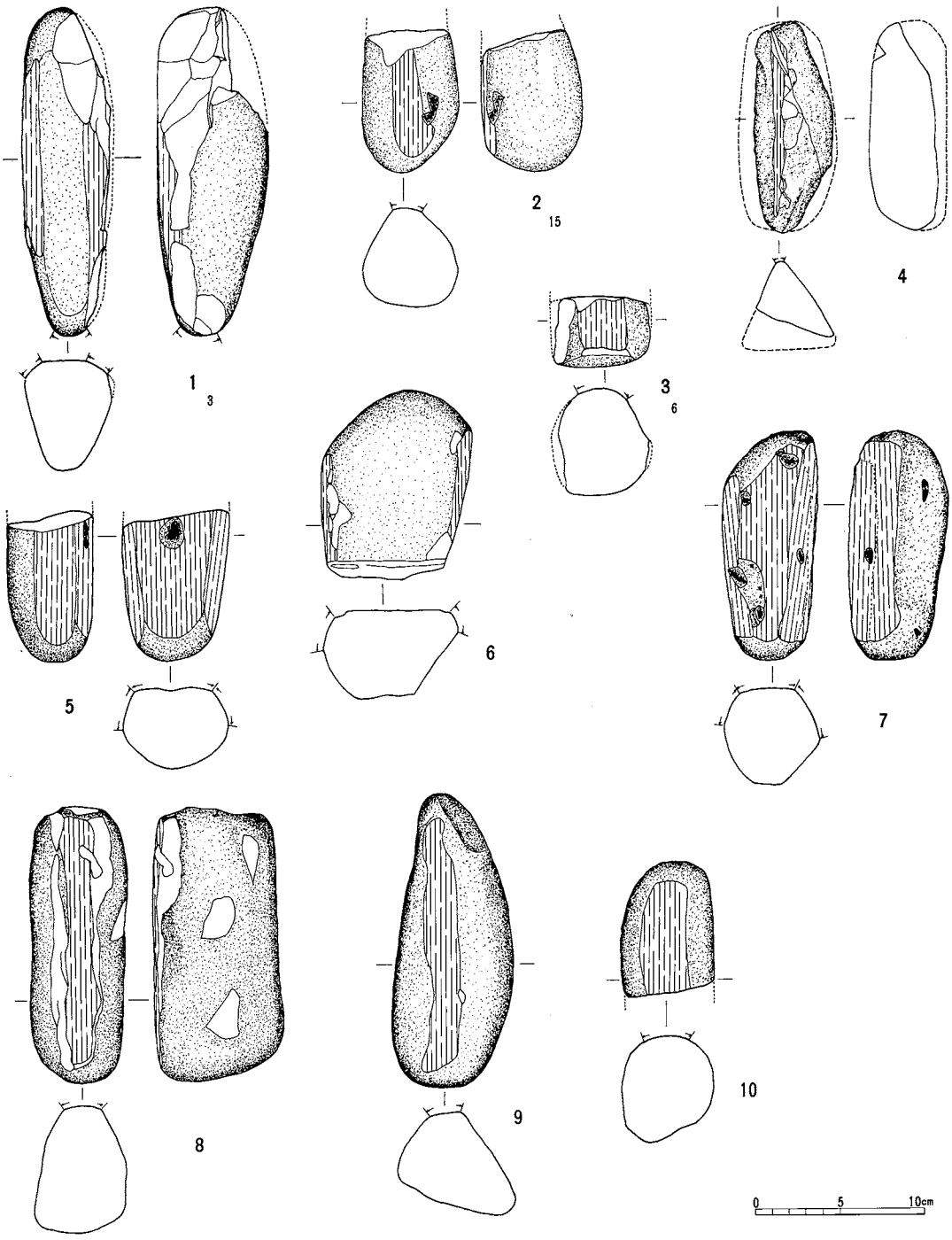


挿図10　一ノ沢遺跡土壙1及び遺構外出土土器　（1～15は1：2　16～29は1：3）

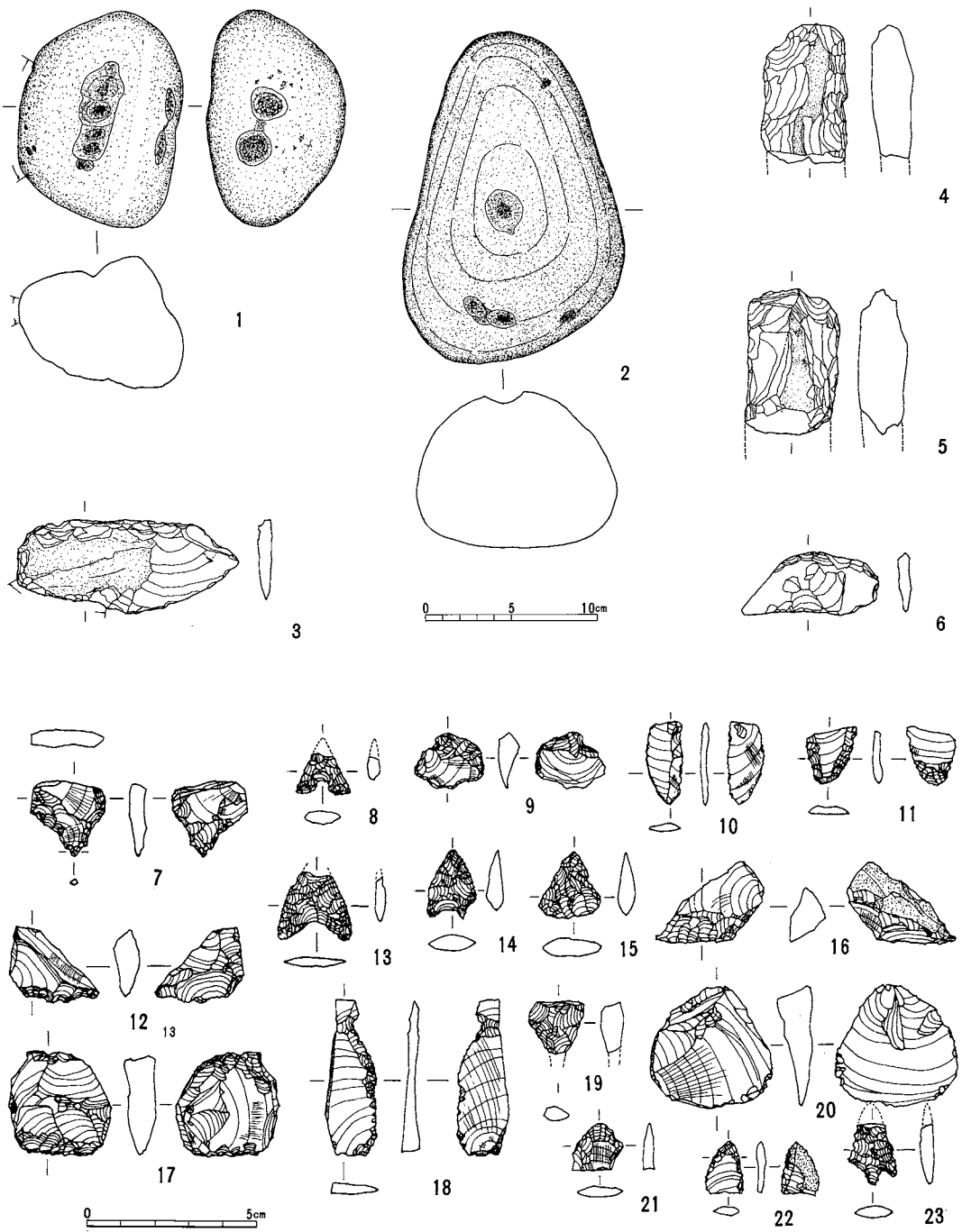
〈1～15・24～29・遺構外　16～18・土壙1　19～23・土壙1周辺〉



挿図11　一ノ沢遺跡早期遺物集中区１・２　出土石器（１：４）
〈1・早集１　2～9・早集２〉



挿図12　一ノ沢遺跡早期遺物集中区３，土壙２及び遺構外出土石器（１：４）
〈１～３・早集３　４・土壙２　５～10・遺構外〉



挿図13　一ノ沢遺跡早期遺物集中区１～３，土壙１周辺，遺構外出土遺物（１：４ 但し７～23は１：２）
〈７・早集１　８～11・早集２　12・早集３　３・20～22・土壙１周辺１・２・４～６・13～19・23遺構外〉

5. 徳久利下遺跡（STKB）

1）位置及び調査の経過（挿図14、図版６）

本遺跡は諏訪郡富士見町富士見248・244番地の畑が所在地である。徳久利遺跡ののる台地から続く長尾根の頂部にある。西は一の沢の谷となり、一の沢遺跡となる。東は二の沢の広い氾濫原となり水田が広がる。標高は978mで、耕土層 25 cm、漸移層数 cm でローム層となる。カット面の2.5m下には厚さ 30 cm 程のパミス層がある。

４月上旬に準備を終え、調査に入ったのは４月22日である。グリットは STA 19＋10 m を基点ＡＡとして設定した。遺跡担当者は松永で伴・細川・田畑が補助した。幸い遺構が少なく４月29日に終了した。

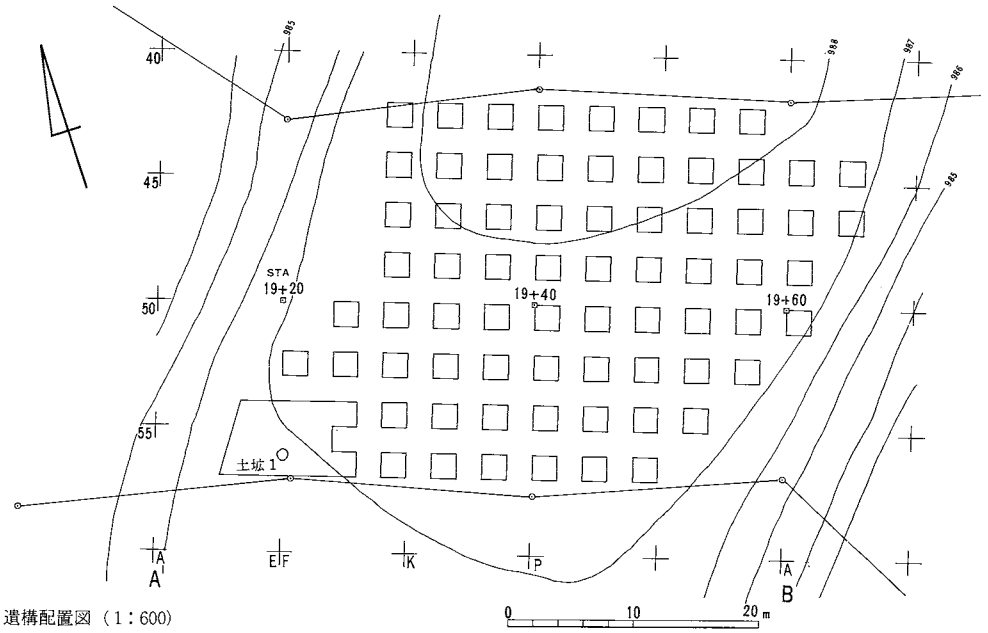
2）遺構と遺物

ア　土壙１（挿図14、図版６）

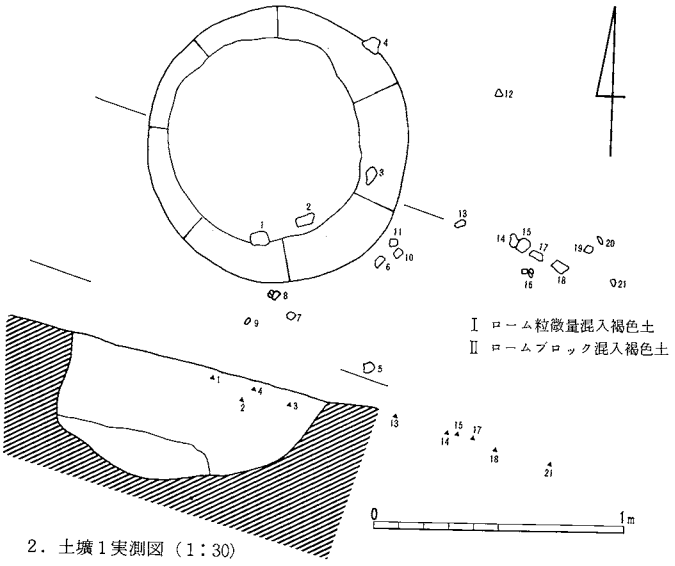
検出面は暗褐色土中である。規模は 110×86 cm、深さ 50 cm の円形を呈する。覆土上層と遺構外南東方向に、縄文時代早期花積下層式土器片が21点出土した。多量の繊維を含み、厚手の深鉢片である。２～３個体分があり、内外面に絡縄体圧痕文のあるもの、外面に大粒な縄文のある破片がある。

遺物は辰野本部より移転の際に、諏訪郡市町村へ送った遺物にまぎれこませてしまった。遺物が発見され次第、何んらかの方法で報告したい。

なお、遺構外では縄文中期中葉土器片少量と打石斧３点が出土している。



1．遺構配置図（1：600）



2．土壙1実測図（1：30）

挿図14　徳久利下遺跡遺構図・土壙1実測図

6. 大石遺跡（SOIB）

1）位置（図1・2、図版1～4）

本遺跡は諏訪郡原村菖蒲沢大石10701番地外に所在する。地名は大石があったのに由来するとのことであるが、はっかの尾根の最南端に近く、県道堀一青柳線にそった菖蒲沢川と、はれん沢川とに挟まれた尾根状丘陵のくびれ部の頂上とその北西斜面に立地する。南側は比高差30mの急崖となってはれん沢のV字谷に臨むが、北側の菖蒲沢川へは比高差15mの緩傾斜面となっている。標高は924～935mの範囲であり、地目は山林と畑地である。遺跡地はBラインのサービスエリアとなるため幅広である。

本遺跡の県道を挟んで隣接するオシキ遺跡は次年度の調査で、ほぼ同時期の遺構、遺物が確認されており、本遺跡と一体をなすものである。尾根続き約500mには曽利期の良好な遺跡がある。

2）調査の経過

本遺跡への資材移転は5月26日に行なった。その後、用地内のかって山林であり、事前の分布調査のできなかった部分の表採及び試掘により、頭殿沢、判ノ木山東、同西、上ノ原、オシキ、中阿久、柏木南、入の日影の各遺跡を発見し、作業員の募集が未了のため諏訪班の十二ノ后遺跡調査を3日間応援した。

6月2日、原村教育委員会との打ち合わせ会を持ち、翌日より本格調査に入ったが、グリット掘りが進むにつれ、遺構が多出し遺物量も多いことが判明してきた。それに比し、調査団で常時参加できたのは松永・田畑両調査員のみであり、大学の夏休み等に学生調査員・補助員の参加を頼りにしなければならなかった。7月下旬から知名調査補助員が参加した。作業員の方も農繁期に入ると急減し、6月中旬に終了する予定は大幅に遅れ、遺跡範囲も当初予定した標高932mまでをこえ、ほぼ全面発掘に切りかえなければならなくなり、調査を完了したのは12月1日である。最終段階では既に調査の完了した諏訪班の作業員の方の参加と平出一治調査員の応援を得て、不充分ながら調査を終了することができた。

グリットの基点はSTA 247+20 m をAAとし、菖蒲沢より農道から尾根頂上部までを調査している。STA 247+80 m 地点、遺跡の中央を横断する農道から北はセンターライン東側を除いて人力で表土を剝いでいる。しかし、南側は前記の事情もあり、費用と労力を節約するためと山林であり抜根が困難なため、一部グリット掘りした上で重機を用いたが、従来のブルトーザーに変え、ユンボーとトラックを併用した。ただし、この部分でも表土の浅い部分と20号・24号住居址までの範囲は人力で表土剝ぎを行っている。重機の使用によって能率をあげざるを得なかった事情があったが、黒土中にあった住居址の一部か相当部分を破壊してしまったことは伴の責任である。

整理作業は発掘期間中の雨天による現場作業中止日と日曜日に、遺物水洗、注記作業を10月30日の原村宿舎引あげまでにほぼ終了した。遺物の復元作業等は十二ノ后遺跡の報告書作成を最優先させるため、若手調査員が動員されたため、伴、細川の2名で進めたが、完形土器等の復元は福沢幸一調査員の応援を頂いている。

3）層序（付図1、図4・5）

土層はセンターラインに沿い、STA 24,760 から24,886mの間に2m間隔に掘ったグリット壁面をつなげる形でとっている。農道より北は全掘した部分に土層ベルトを残して測定しているが、この部分は桑畑であったため、I層は耕土で 20～35 cm の黒土、II層は 20 cm 前後の礫混入漆黒土となりその上部に縄文中期遺物少量、前期遺物やや多量を包含する。III層は 20 cm の礫多量混入漸移層となり、IV層は混礫二次堆積ロームとなる。かって、菖蒲沢がここを流れたと思われる。農道の南は山林であったため、I層は腐植土、II層以下は図示したようになる。

14号住居址と STA 24,780 間も土層図をとっているが、ここではI層が耕土で 20 cm 前後、II層が20～50 cm の黒土層となるが、この下部は炭粉を含み縄文前期前半の遺物が面をなして散布していた。3号・45号住居址の間は耕土が 20～30 cm、その下に 10～15 cm の暗褐色層を挟んでローム層となる。

4）遺構と遺物

ア　縄文時代前期の住居址と遺物

ア）　**第27号新住居址**（図6・7・98～100、図版27・50）

遺構　暗褐色土層で輪郭を確認したが、覆土は炭粉混入の黒土で、ほぼ一様で土層区分は不可能であった。隅丸方形の5.45×3.85mで壁高は北 36 cm、南 43 cm、東 58 cm、西 16 cm の住居址である。主軸方向は棟方向と考えられる P_1—P_4 を結ぶと N 15° E となり、北寄りに楕円形の地床炉があり、75×55 cm、深さ 8 cm で鍋底形、内部には炭が認められた。炉底は焼けてレンガ状になり、底面下に P_8 が検出されたが、この上部は焼け、柱穴の壁もかなり焼土化しているため、このピットは旧住居のものと考えた。床はたたきで覆土からすぐはがれる状況であったが、旧住居址の周溝の北はやや軟弱となる。壁下の周溝内には壁柱穴とみられる小ピットがほぼ等間隔で認められるが、径 10 cm 内外、深さ数 cm～20 cm で、内傾するものもあった。主柱穴は P_1～P_6 であるが、その計測値は以下、長軸×短軸、深さの順で cm は省略する。P_1　25×23－28、P_2　30×28－51、P_3　34×25－52、P_4　23×22－12、P_5　30×24－59、P_6　22×20－57。本址は旧住居址の北側周溝上に拡張の際のロームをのせ、北へ拡大したものであるが、状況からみて継続的に居住された可能性が強い。北西隅は耕作による溝で攪乱を受けている。

遺物　遺構確認前の覆土上部黒土層には九兵衛尾根I式20片、新道式10数片が出土している。遺物は床面より 10～20 cm の高さに多くみられたが、A1・2は諸磯A式、3・4は同B式で覆土最上層で本址に伴うものではない。A36・38、B5・7・8・10～12・22～25、C5～7・9・11・12は中層より、A37、B6・14・16・19～21・26・27、C1～4・8・10は床面か生活面で出土している。本址は神ノ木式期に属するが、土器の分類基準は後記遺構外出土遺物の項で説明してある。

1類A種（A5・36）　36は波状口縁部と端部及び底部に櫛状具による施文をもつが、やや崩れたひっかき風になり、遺構外の図244—5に近く、内面の頸部は篦整形痕顕著、胴部は滑らかで丁寧な調整である。B種（A6・7・38）　7の爪形は先端平らな篦状具による。C種（A37）　先端をささくれさせた竹管により口縁部に施文し、内面は指圧・篦痕を多く残している。D種（A42）　橙褐色を呈する。

2類A種（図101—41）は、櫛具条痕、C種（B5）は単節と撚糸2条との異条斜縄文である。D種（A39・40）　暗褐色、繊維を多量にサンドウィッチし内面は平滑で、遺構外のD種は粗大な単節であるが、本例は

繊維を含み亜種とした。F種（B６）　口唇と口縁をめぐる隆帯にシャープな爪形を施し、RL 縄文を付す。繊維が多く含まれ赤褐色で内面丁寧ななでが行われる。

３類D種（B１～４・７～９）　８は無文部と思われ、９は黒褐色で口縁部に関山式の特徴であるループ文がみられる唯一の例であるが、一応本種に含めておく。E種（A41）　多繊維で内外面赤褐色。

４類A種（A８・B10～13）・C種（C６）　は遺構外例と酷似する。D種（A９～18・B14～27・C１～５・７～10）　B27は外面煤付着し多段撚りと特殊な縄文で、C１は口端にも縄文を付す。遺構外に比し煤・炭化物付着例が多い。E種（A19～35）　20～23は内面指圧痕が、19・24～35は篦整形痕が顕著である。５類無文で他よりやや薄手でC11は内外面指圧痕を残すが、無繊維で長石粒やや多く、C12は胎土精選されるが、微量の繊維を含む。

石器は、磨製石斧１、凹石・磨石４、石皿１、石鏃２、スクレイパー類１、ドリル２、の計11個出土している。該期住居址としては、やや少ない出土量といえる。

本址は神ノ木式期の住居である。

イ）　**第27号旧住居址**（図６、図版27）

遺構　新住居に拡張される前のもので、柱穴の配置から4.20×3.40mの隅丸方形であったと推定する。P_8-P_{11} の棟方向を主軸と考えると N16°E であり、北壁下と推測される周溝は最大幅 8 cm、深さ 3～4 cm で痕跡を止めるのに対し、南壁部では新住居の周溝の内側に径数 cm～15 cm、深さ 10 cm 内外の小ピットがやや不規則に配列し、壁柱穴かと思われる程度である。また、炉址も確認できないため、新住居拡張の際に本址の床面も若干削り下げている可能性が強い。従って、遺物も新旧の分離は不可能である。主柱穴は P_7～P_{12} である。P_7　23×17－64、P_8　22×22－63、P_9　20×16－65、P_{10}　15×12－43、P_{11}　26×18－64、P_{12}　27×19－57。概して新住居址より細く、深い柱穴となっている。本址は神ノ木式期に属する。

ウ）　**第28号旧住居址**（図13・100・101、図版28）

遺構　縄文中期中葉の**21号住**と同中期初頭の**28号新住**によって破壊され、痕跡を残すだけである。地床炉 F_3 は 46×30 cm、深さ 13 cm でローム・焼土粒を含む黒褐色土で覆われ、上面が硬くしまっており、焼土面はややくぼむ。各期の住居が複合する中で F_3 を先行するものと考え、柱穴の検出には特に留意したが、21号住 P_1・P_2 と本址 P_4・P_5 から、神ノ木式土器片の出土をみた。該期の住居が方形で炉が北に片寄って位置することからみて、P_3～P_5、P_{10}～P_{12} を本址の柱穴と考えた。21号住の P_1、P_2 も本址のものとして、F_3 の炉縁とのレベル差で深さを復原した数値は下記になる。P_1　30×22－44、P_2　24×21－66、P_3　34×25－30、P_4　28×26－60、P_5　25×25－42、P_{10}　34×?－25、P_{11}　26×?－8、P_{12}　32×20－42。P_{11} が浅すぎることと、P_{12} は発掘者が木根と考えていることに難があるが、本址遺物の可能性のある出土範囲ともよく符合する。P_2 では中期初頭土器片も出土し、22号新住の柱穴とみると、より合理的である。根拠は薄弱ではあるが、神ノ木式期の住居の存在を考えたい。

遺物　１類B種（A14～16）、C種（A13）は胎土精選され半截竹管による爪形か２点１組の列点文となるものであるが、16は長石粒が非常に多く内面調整も４類に近い。３類D種（A20）、E種（A18・19）、４類D種（A22～26・B１～７）ではB４～６が複節縄文である。E種（A21・B８）ではA21が胎土に金雲母を含み特異である。分類不能なB９は微量の繊維を含み、幅 3 mm の篦描沈線があり黒浜式期と思われる。

エ）　**第32号住居址**（図6・101・102・261、図版30・51）

遺構　暗褐色土層中まで掘り下げて確認した隅丸方形の竪穴住居址である。3.65×3.05 m の規模で主軸方向は N4°E であり、覆土は黒褐色土層・暗褐色土層の順になる。床面より 10 cm より上に炭化した小木炭片が多量に出土し、火災によって廃棄された住居と考えられる。南壁部には**土壙343**があり、本址を切っている。南東壁が 31 cm と高く北壁は 21 cm である。床は硬いローム**のたたき**でほぼ平坦であり、壁下には周溝が全周し、幅 10 cm 以下、深さ約 5 cm で部分的には小ピットの連続と思われる箇所もあるが、総体的には溝状をなしている。地床炉が北寄りに設けられていたが、新炉 F_1 は 48×31 cm の楕円形で深さ 4 cm、旧炉 F_2 は 37×27 cm の楕円形で深さ 6 cm の鍋底状を呈し、いずれからも焼土が認められた。F_2 の下面には貼床があり、硬さが認められ P_5 が検出された。P_5 は位置からみて、棟持ち柱と思われるが、後に取り去られたものであろう。P_1～P_5 を主柱穴と考えたが、総て炭化物を含む黒褐色土が充満していた。調査終了後入口部と考えられる南部床面を更に削り下げたが、他方の棟持ち柱の痕跡は認められなかった。P_1　19×15−55、P_2　19×16−39、P_3　17×17−39、P_4　20×17−50、P_5　18×16−28。

遺物　遺構の輪郭確認前の最上層遺物がA10～35・37・40、B1であり、図示しなかったが縄文中期初頭・中葉の土器片も上層では若干存在する。火災による廃絶住居にしては出土遺物量は少なく、完形に近いものは皆無である。床面密着の土器はB3と小破片が数点あるのみである。

1類A種　A10は黄赤褐色の軟質で本種の無文部と思われる。B種　B1は RL 縄文を地文とする。C種　B2は口縁から垂下させる隆帯には爪形が、口縁部は平行沈線で三角・菱形区画が付される。2類A種　A42は口縁の2条の粗間隔爪形文間を平行沈線でうめる。C種　A11～15は撚糸2条と RL 縄文が斜交或いは平行し、B1は綾形縄文で、多量の繊維をはさみ内面平滑である。3類D種　A16・17、B4は斜縄文で中位の繊維を含む。E種　A18～20は少量の繊維を含み、18は4類B種との中間型である。4類A種　A21～23、B5～8、D種　A24～32、24・32は内面篦痕、他はザラザラである。B11～19の内、12はA24と同一個体かも知れない。E種　A33～36のうち、33は結束縄文横位回転、36は無節か荒い単節縄文である。5類　A37は1類の胴部か、38は中越式の胎土に似る。39は中越式の口縁部細線格子文をもつ。6類　A40は微量の繊維を含む薄手無文片である。261図6は東海系と思われ6類である。

石器は、凹石・磨石4、石鏃1、ドリル1、石核1の計7個と比較的少ない。

以上の出土遺物から、本址は神ノ木式期の住居址と考える。

オ）**第33号住居址**（図6・102、図版30・51）

遺構　暗褐色土層で確認した。重機で排土したため北側の黒土中に存在しただろう壁及び床面を破壊してしまった。残存部は幅2.55mで南壁から北側床の2.50mのみであるが、主軸方向N10°Eをとる隅丸方形と思われる。ロームの床面は**たたき**で覆土がはがれて取れるような状況で、極めて硬い。覆土は炭粉の入る黒土で、遺物は床より 9～14 cm 浮いた面に多い。南東隅に黒曜石フレイクが集中した。壁高は南東部で 50 cm であり、壁下に周溝が幅 5～18 cm、深さ数 cm でめぐる。周溝内には11個の小ピットが検出されたが、深さ 18 cm 以下で 10 cm 程度が多い。主柱穴は床面に認められないが，小規模な住居であるため、壁外に設けられていた可能性が強い。炉址は破壊された部分に設けられていたものと思われる。

遺物　1類B種　20は床面出土で、21は床より 14 cm 浮いて出土し、半周を残す底部片でRL縄文が付される爪形文帯を持つものである。2類C種　22は器面が荒れているが繊細な斜縄文で二種の原体が用いられており、多量の繊維を含む暗褐色の深鉢片である。4類D種　23は炭化物が付着し内面ザラザラであ

る。22・23は壁面について出土した。

石器はわずか石鏃1個が出土したのみである。

少量の遺物ではあるが、住居址の形態からみても神ノ木式期の住居址である。

カ）第39号住居址（図8・9・103～107・265、図版33・51）

遺構　表土は重機によって剝いだが、遺物の集中から黒土層下層で本址の存在を予想し、輪郭線を確認したのは暗褐色土層中である。覆土上層は礫まじりの黒褐色土で、拳大から人頭大の礫多数が入っているが、この地区の地山は礫が非常に多い二次堆積ロームであり、黒土層にも散在していることから、これらと住居址を掘り上げた際のものが廃絶後投げ入れられるか、再流入したものと思われる。床面直上はローム粒混入褐色土となり、壁及び中央に向ってくぼむ床面は混礫ロームのため凹凸が激しい。プランは楕円形を呈し，4.65×3.98mで入口を P_1・P_7 間と考えると主軸方向はN 2°Eである。中央やや北寄りに浅い地床炉が設けられるが、径 20 cm の円形で僅かな焼土があり、主柱穴は P_1～P_7 の6個が考えられる。調査者が入口部と考えている P_6・P_7 間には幅 16 cm、深さ 17 cm の溝がある。壁高は東 23 cm、西 20 cm 、南 35 cm、北 24 cm で、壁下の P_9 は入口施設の補助柱穴かと思われる。P_3 は東部が袋状となり径 95 cm、深さ 61 cm で貯蔵穴と思われる。P_1　33×27—26、P_2（P_1 方向へ傾斜）　40×38—35、P_4　50×45—31、P_5　37×31—32、P_6　25×19—30、P_7　30×29—30、P_8　40×33—21、P_9　78×45—20。

遺物　炉から P_3 の東側に比較的大破片が集中し、P_8 周辺に有孔鍔付土器の祖形といわれるものが2個体分出土した。土器の置き場が炉に近い奥寄りにあったものであろうか。遺物は出土状況図から住居廃絶時に床或いは生活面に散乱したものと周辺遺物が再流入したか、廃棄された上層遺物に分けられる。床面と生活面のものはA 1（P_4周辺に集中）・2・4・6・10～14、B 1（P_1周辺に集中）・2・3・7～10・13～16・18～23・26・28、C 1～3・5・7・9・11・18、D 1・2・15～19、E 1・8～10・12・21～26である。下層はA 9、B 4～6・17、D 1、E 3・6・14・16・18で、他は上層遺物である。

深鉢　1類　浮線文のグループで地文に単節縄文をもち、内面は丁寧な篦磨きかナデである。a種　沈線文に斜刻目をもち、隣接する紐の斜刻目が異方向となるもの（A 1、B 6～12）、同一方向のもの（A 3、B13～20・25）と北白川下層式の手法であるハの字に刻む土着の土器と思われるもの（A 2、B21）がある。B25は下部に篦描き沈線で三角形の文様を加える。F13は獣面把手をもっている。b種　刻目を持たぬもので、B22～24があり、23はやや薄手で焼成も良い。C種　浮線文を貼付した後、全面に縄文を施文するもので、a・bと作業工程を異にするもの（A 2）がある。d種　浮線文上に禾本科茎による細い爪形連続刺突を加える（B26・27・28、C 1はRL縄文で、本格的な本種は後の3点）。

2類　爪形文を主文様とする。a種　C 2～8は1類aの斜刻目浮線文間を連続爪形文で埋める。3は口唇に粘土紐を貼付する。b種　C 9は平行沈線とくみ、口唇は棒押圧である。

3類　縄文と平行沈線で文様を構成する。C10～19、E22～25、F12があり、C10はイノシシと思われる獣面把手を、11は棒状突起、12は円板を貼付する。

4類a種　縄文のみのものでC20～28、D 1～16がある。正確ではないが10個体分はあると思われる。

5類　有孔鍔付土器の祖形の小形鉢形で無文か、半截竹管・篦描き沈線の直曲線文で文様を構成するもの。器形はa型（カブト状）のA12・13、B 1とb型（口縁内曲）のA10・11、c型（椀形）のB 5に分類され、A10～14、D17～20、E 1～11がある。更にd型としてE12・13のような小形鉢がある。

6類　関西系を一括した。北白川下層Ⅲ式に比定されよう。灰黄色～赤褐色で斜刻目やハの字刻目をも

つ。E14～19がそれであるが、17・18・20は丹彩され同一個体かも知れない。

4類b種のE26・27は無節かゆるい撚りの単節で、A種とは異質で諸磯A式に近い感じがするが本址に伴うものであろう。遺物出土状況図（図9）で検討したが、各類の出土比率に上下層位による差はなく、諸磯B式の良好なセットであることが判明した。本址は諸磯B式期に属する。

石器は、打製石斧3、横刃型石器1、磨製石斧1、凹石・磨石6、石鏃7、スクレイパー類4、ドリル1の計23個が出土している。すべてが本址に伴うか否か問題もあるが、出土量は少なくない。

イ　縄文時代中期初頭の住居址と遺物

ア）第1号住居址（図8・10・108～117・207・26、図版5・51～53・99）

遺構　グリット掘りで黒土層中より多量の遺物出土を見たため拡張し、輪郭を確認したのは黒褐色土層中である。プランは楕円形を呈し、4.15×3.65m、主軸方向はP_3・P_4間を入口と考えるとN3°Wである。壁は礫混入黒褐色土で東9cm、西8cm、南23cm、北25cmある。床面は礫まじりのローム・漸移層（褐色土）と北部が黒褐色土であるが、やや軟弱で北西方向へ10cm傾斜する。中央やや北寄りに楕円形の地床炉があり、52×39cm、深さ11cmであり、焼土が散在するのみであまり焼けていない。主柱は4本であったが、P_1・P_2は垂直に、P_3・P_4は多少内傾して掘り込まれている。P_1　18×17—48、P_2　22×20—46、P_3　23×20—52、P_4　20×20—31。覆土中には炭片と礫が散在し、中央西寄りの床上15cm上に僅かな焼土が見られた。

遺物　上層の群と床面より数cm上の生活面及び床直上の群に分けられ、前者では破片、後者では完形・半完形が多く、覆土上層では全面に散在するが、柱穴をつなぐ線内に特に集中し折り重なる状態で、床面のものは炉とP_1・P_2間に多かった。廃棄形態からは吹上パターンと井戸尻パターンの複合といえる。

生活面・床面ではA3・4・7・8、B1・6・7・19、C1・2・4・17、G16・18、H1・4・5・10・13・18、I2、K10・13が出土している。他は覆土中からである。良好なセットであるため図示不能か不要部を除き、殆んどの個体を図示した。以下、型式分類を試みたが、基準については後に述べる。

九兵衛尾根I式Ia型　A1は口縁に連続爪形文と平行沈線を交互に横走させる。胎土・色調は篭畑期のものに似ており、口径35.5cmである。Ib型　A3は浮隆結節状文のみを口縁に持つもので口径29cm、器高30.5cmの半完形であり、内部に炭化物が付着する。Ic型　A4は口径23.6cmである。A18～22、C1～6はbかc型の底部であろうが、他に10数個体分の底部がある。Id型　A8は暗赤褐色を呈し胎土色調も篭畑式のものに類似し、口縁も平行沈線を篦切し格子文にし頸部に蛇身文を貼付する。また、胴の区画内を篦切斜格子文で埋めるなどA10の胴部Y字文とともに前形式の要素を多く持っている。口径24cm、現存器高27.5cm。B1はほぼ完形で、器高55cm、口径40cmで赤褐色を呈する。炉上にあった。口縁の上部と下部の比がほぼ1：1で本址のa～d型が1：2を基本とするのに異質である。A9・11は8・10に比し胴が球形に張り出し、図10でも判明するように上層遺物に属し、間層を置いての出土であり時間的に多少の差があることが予想される。むしろ、e型に分類されるべきかと思われる。A5・6、C21・22、G12～14はI型の口縁部であろう。

IIb型　B7は本型の代表となる完形品であるが口径25.4cm、器高26.5cmで口縁に1箇所山形突起があるが凹穴を持っている。A6とともに床面より出土しており、当初は本址の土層及びグリット掘り段階の遺物中に比率が高いことから、本址より後出の型との予想を持っていたが、本址のセットの一部を構成するものと考える。他にB6・8、C34～36・38・39、H1～3・5～8はこのタイプである。

IIc型　B９は口縁隆帯部にＲＬ縄文を付すもので上層出土である。縄文は本址より後出の要素である可能性がある。

IIIａ型　Ａ２は中～上層出土で半截竹管による平行沈線文帯は口縁上部に施され、口縁直下は結節状沈線文である。口径 20.5 cm で口縁上部と下部の比が２：１とＩ型と逆転し波状傾向が強くでている点は30号住の傾向と一致し、形式的にみて後出の可能性が強い。

Ⅳａ型・Ｃ19・20・42、Ｄ28、Ｅ11、Ｇ15で該当グリット遺物が上層遺物であり、出土状況からみて後出型である。Ⅳｂ型は頸部に結節状沈線文を横走させ、口径 29 cm で平行沈線の斜格子文をもつ。Ⅳｃ型ではＧ16の生活面出土があるが、小破片１点のみで本址に伴うかは疑わしい。

Ⅴａ型　Ｂ14～17　底部に横走する平行沈線文帯をもつもので上層が殆んどである。

Ⅵａ型　Ｂ11は口縁が僅かに波状をなすかとも思われるが、単なる整形のゆがみかも知れない。口縁下には竹管外面による押引をもつ。Ｂ12は横走する沈線は直下を除き総て結節状沈線文か、半截竹管の両端のみが器面に喰い込む押引手法によるもので、ともに上層から出土した。

Ⅶａ型　Ｃ37、Ｈ１・４は頸部文様帯に斜格子文を持つ点でIIｂ型と区別したが、本址の床、生活面での出土である。

Ⅸａ型　Ｂ２、Ｃ24があげられるが、Ｃ25・26・30・31、Ｇ17・21・23はⅨ型に分類されよう。いずれも上層出土である。

Ⅻ型　Ａ７は胴部半截竹管による半隆起線文による区画内を同様の斜線で埋め、区画外を半肉彫りするもので、生活面出土で本址に伴出すると考えられるが、他に類例をみない。暗赤褐色を呈し、長石・金雲母が多く堅緻である。

XIVa型　Ｅ11・47がある。同ｃ型　単線文に沿って直交する刺突があるもので、Ｅ12～15・24・40～43があるが輪郭確認前の出土である。

XVａ型　Ｄ20、Ｆ12。同ｂ型　Ｂ４・32・42・43、Ｄ10・11・21、Ｅ17・33、Ｆ８、Ｇ５・19・20がある。同ｃ型　Ｅ26～36、Ｈ27・32。

XVIb型　Ｅ37。同ｄ型　Ｆ16。

浅鉢Ｉａ　Ｉ１～３・７・11～20、Ｋ10・11。同ｂ型　Ｉ４・５・10・21・22、Ｋ12。同ｂ型　Ｉ６は結節状沈線文を内面に付する。IIａ型　Ｉ８・９。同ｃ型　Ｋ13がある。本址に伴うものはＩａ型であり他は後に廃棄されたものと考える。

九兵衛尾根II式　Ｃ７～12、Ｅ44～46・48・49、Ｆ１～７・９～13、Ｈ28～31がある。

縄文中期中葉　貉沢式期　Ｆ22～24は平出３Ａ系であり、深鉢ではＦ25・26、Ｇ１～４・６、浅鉢ではＦ27がある。新道式期では深鉢でＧ９は平出３Ａ、Ｇ７・10・11は北陸からの影響の中で成立したもの。浅鉢ではＧ８がある。調査時に平出３Ａ系が本址に伴出すると誤認したが、出土状況（図10）の検討から、中期中葉遺物がその周辺にまとまって出土し、攪乱による混入と認定した。

土製円板（図261）　16は九兵衛尾根II式、17は中期中葉？、18は中期と思われる深鉢片を使用し、重量はそれぞれ18ｇ、18.7ｇ、55ｇであり、覆土上層出土である。

石器は、打製石斧61、横刃型石器17、磨製石斧５、凹石・磨石14、石鏃６、スクレイパー類５、ドリル２、他１の計111個という多量の出土をみた。とくに打製石斧の多さが目立つ。

本址は九兵衛尾根Ｉ式期の住居址である。

イ）第5号旧住居址（図11・117、図版9・53）

遺構　新住居址の床面検出段階で埋甕炉があることが判明、本址の存在に気づいた。新住によって殆んどを破壊され、残るのは北側の僅かな部分のみである。柱穴の状況からみて5×4m、P_{13}—F—P_{18}を結ぶ線を長軸と考えるとN21°Wである。柱穴は貼床されていたとみられ、床面一次清掃時に検出できず、やや下げて検出したP_{13}～P_{23}がある。長軸に対し主柱が対称的に並ぶが6本で、いずれもローム層に達しており、P_{13}　45×38—33、P_{15}　31×29—30、P_{17}　38×35—31、P_{18}　34×27—41、P_{19}　28×23—39、P_{22}　35×30—27である。補助柱穴は5個ありP_{14}　17×16—23、P_{16}　21×20—17、P_{20}　26×20—29、P_{21}　23×19—20、P_{23}　18×16—23である。北側には周溝が残存する。

遺物　確実に本址に伴うものといえるのは埋甕炉のA15のみで胴最大径22.3cm、残存高17.0cmで隆帯区画や懸垂文に沿って半截竹管の半隆起線文を施文し、縄文の地文上に篦切による楔形文・三角印刻文を付する明赤褐色を呈し、無文部は篦なで痕が顕著である。九兵衛尾根XVIc型である。A4～14・16～28は新住居址の検出遺物から中期初頭遺物を参考のため図示した。床面ではB16の半隆起線を綾杉状に施文する深鉢片と、B17の五領ヶ台式浅鉢片が出土した。

本址は18号住と同時存在した可能性が強く、仮称原沢式とされた時期の住居址であったと考える。

ウ）第6号住居址（図11・117～119・261・262、図版11）

遺構　耕土を剝いだ後ローム面で輪郭を確認した。楕円形を呈し、3.95×3.45mで、P_5—P_6間を入口と考えると主軸はN52°Eで壁高は東24cm、西11cm、南2cm、北15cmである。ロームの床面は軟弱で凹凸があり、中央北東よりに地床炉とも考えられる埋甕炉があって抜かれた跡（P_9）があり、床より3cm凹み、掘り方の最深部は20cmである。主柱穴は、P_1　26×24—50、P_2　22×18—55、P_3　32×22—58、P_4　24×23—56、P_5　19×15—32、P_6　34×28—24の6個である。補助柱穴はP_7　43×38—23、P_8　60×55—15。貯蔵穴と思われる袋状のP_{10}は30×26—28である。P_{10}上部やや落ち込んで石皿片が出土した。遺物は床上3～10cmと25～30cmの2群に分かれる。床面に緑泥岩原石があった。**11号住**に貼床され、**土壙4・15**に切られている。

遺物　生活面・床面出土はB3・8・13・14、C2で他は上層遺物である。九兵衛尾根I式は深鉢でB29～31、浅鉢はB12である。同II式はB1～11・13である。貉沢式浅鉢のA32は口径37cmで他にC4・5がある。貉沢期深鉢の平出3AはB14、同15は北陸系の上山田古式かと思われる。B16、C1・3は深鉢片である。C2は九兵衛尾根II式と貉沢式の境に出現した深鉢と思われる。B17はIIa型で暗褐色を呈し、胎土に長石・金雲母を含み、口縁部には半隆起線と沈線に沿って連続刺突文を加える。

石器は、打製石斧11、横刃型石器7、凹石・磨石3、石皿1、石鏃1、スクレイパー類2、先端研磨石器1の計26個が出土している。

土製円板　図261—21は13g、図262—1は34gで中期初頭深鉢底部片を使用し覆土出土である。

以上からして、本址の所属時期は九兵衛尾根II式期と考える。

エ）第7号住居址（図12・119～122・262、図版10・54）

遺構　ローム面で検出した円形の4.25×4mと考えられる竪穴住居址である。北西部は耕作で破壊されているが柱穴のみ確認できた。P_2—P_3を入口と考え、F_1方向を主軸とするとN3°Wであり、壁高は南東29cmで最高である。柱穴の状況からみて少なくとも2回の改築が行われているが、新住居址の床は

ロームの硬い床でやや凹凸が激しい。断面E—Fより F_1 が新埋甕炉で、F_2 が旧炉であることが観察されたが、更にもう一回改炉されている可能性もある。炉周辺には焼土が多量に認められ、埋甕炉は火種保存用のため埋設され、焚き火は地床炉部分でされた可能性も考えた。新住居の柱穴は P_2 20×20—49、P_3 24×22—48、P_4 31×30—42、P_5 29×28—34、P_6 28×27—57、P_{10} 26×25—37で、P_1 は改築時のものかと思われ、33×30—69である。旧住居址の柱穴と考えられる P_8・P_9・P_{11} は貼床下で検出され、それぞれの規模は26×26—48、24×18—42、24×？—23で、他に P_7 27×26—37が主柱であったと考える。

遺物　床面に密着したものもあるが、2・3 cm～10 cm 浮いたものが多い。炉周辺から東側に特に集中して出土している。旧住居址遺物と断定できるものは F_2 に用いられたもので口縁は一部を残すのみであるが、胴は全周し胴最大径 20.5 cm、RL縄文を地文とし図正面をAとすると、側面はフの字凸帯文の下に沈線による渦文を配するBとのA＋B＋A′＋B′の4単位である。

新住居址の生活面と床面出土では F_1 に使われたA 8は胴径 15 cm の繊細なRL縄文を全面施文するものであり、同9・12・15・17、C20・22、D 3・4がある。他は中～上層出土である。上層には若干、縄文中期中葉の土器片があるが割愛した。

九兵衛尾根Ⅰ式　深鉢B 1・2は篭畑式の要素を多分に持ち、同3・4はⅠ型かⅢ型、同6・12はXIV型、同7・9、C15はXV型、A 6はXVIｄ型で金雲母を多量に含む赤褐色の円筒型となり、頸部には爪形隆帯をめぐらすが、他は口縁を含め竹管による半隆起結節状文でRL縄文を地文とする。A 7も半隆起結節状文を垂下させる。浅鉢ではⅠａ型のB13、Ⅰｂ′型のC12がある。B11は次式との境界に位置づけたい。

九兵衛尾根Ⅱ式　Ⅰａ型　A10～12、B16・17、C21。Ⅰｂ型　A13～15・18～21はRL縄文を地文とする。15はA＋Bの4単位で、ほぼ完形で口径 32 cm、器高 34.2 cm。金雲母は含まない。16は口径 21.5 cm。Ⅱｂ型　A17は口径 36.5 cm で繊細なRL縄文を全面に施文するもので1/4周残存する。他にD 5がある。Ⅲｃ型　A22は胴肩最大部 17.6 cm で赤褐色の長石・金雲母を含み、頸部に隆帯剝落痕があり、下半部は砂粒移動痕顕著である。B20～34、C 1～10・16・18・23～28、D 1～4は以上の型の部分である。

浅鉢Ⅲａ型　D 6は長石・金雲母が多く含まれ、口縁に2条の沈線をめぐらす。

縄文中期中葉　A23・24、D 7があり、後者は貉沢式である。B15は20号住に多出している型と思われるが、RL縄文を持つ点で、7号住のC 2と同様に、その先駆をなすものと考える。

土製円板（図262）2は浅鉢片使用の未成品で22ｇ、3は22ｇ、4は14ｇの深鉢片を用い中期初頭と思われ覆土出土である。

本址は九兵衛尾根Ⅱ式期の住居である。

オ）　第18号住居址（図12・122～125・262・266、図版19・54・55・131）

遺構　暗褐色土層で輪郭を確認した。4.30×3.75mの楕円形を呈し、主軸方向は P_1—P_2 を入口と推定するとN 47°E となる。壁高は東 30 cm、西 23 cm、南 31 cm、北 19 cm であり、緩傾斜する。床面はロームであるが軟弱で、凹凸があり、中央へ 5 cm くぼむ。ほぼ中央に埋甕炉が設けられ、顔面把手付の円筒形深鉢が埋設され、内部には黒褐色土が充満し、少量の焼土と木炭片が検出された。なお、顔面は P_1 方向のほぼ真南に向いていた。周囲の床面は主軸方向に延びて焼けている。主柱穴はいずれも中央に若干傾斜して掘り込まれているが、P_1 50×38—60、P_2 42×35—65、P_3 29×20—63、P_4 33×32—55 の4個である。補助柱穴は P_5 19×18—28 と P_4 の北側に2個あるが、壁ぎわが深さ 22 cm、P_4 寄りが同 46 cm である。

本址は新道期の**土壙44**に切られ、時期不詳の**土壙180**を切る。本址の北東壁外には黒土下層に石が散在し、縄文中期初頭から中葉の土器片や原石・剝片が比較的多く出土しており、石器加工場所であったかと思われる。また、壁外南には集石部が認められたが、その下部には土壙は検出されなかった。

遺物　床面遺物は僅少で、むしろ、上層の暗褐色土層よりの出土が多い。特記しなければならないのは、アワ状炭化種子塊（25×25×15 mm）の発見である。B 4 の深鉢片は床面より 46 cm 上にあるが、その位置記録用に残した土柱の床上 18～20 cm の位置で検出された。（図12、図版131）床上 17 cm を境に上層が黒褐色土、下層がローム粒を含む暗褐色土となる。花粉分析用サンプル採取は**A11**の深鉢が出土した炉に近接した土柱で行った。資料 1 は床上 1～7 cm、資料 2 は同 11～17 cm のローム粒を含む暗褐色土を、資料 3 は同 24～30 cm の黒褐色土を採取した。ここでは床上 25 cm で暗褐色土から黒褐色土へ変化するが、同 25～31 cm では 4～6 mm の炭片が濃密であり、本址全般に下層での遺物出土は殆んどなく炭化種子が九兵衛尾根II式出土層に属することは確実と思われる。

生活面と床面出土はA 8 、B 1 ・ 3 ・20、C 9 ・22があり、他は中・上層出土である。C22と10は同一個体の可能性が強い。

九兵衛尾根 I 式深鉢　IIb型　B15、C 3 。IVa型　B20。Va型　C 2 ・10。VIIa型　B16。IXb型　C 7 。同C型　B12。XVb型　B 9 。XVIa型　B 2 ～ 5 。XVIb型　A 8 は埋甕炉で口径 18.6 cm、現存器高 19.5 cm で赤褐色を呈し、長石細粒を含み、半截竹管による半隆起線と爪形、楔形文、RL 縄文によって文様を構成し、涙目の顔面から隆帯を懸垂し、胸部隆帯から両手を顔に向けて上げてくる人体文を器面全体に加飾する。他に型式分類不能のA 9 ・10、B 6 ～ 8 ・10・11・13・14・17～19・21～23、C 1 ・ 4 ～ 9 ・11～15がある。ただし、C14は次式との中間期か古いところかも知れない。

浅鉢 I a型　C27～29、D 1 ・ 2 がある。

九兵衛尾根II式　I a型　C20・21。同a型　D 4 ・ 5 。I b型　A11は上層出土で口径 35 cm、器高 39・5 cm の吸盤状突起を 4 対つけ、頸部文様は 1 単位、胴部 4 単位となり、繊細な LR 縄文を地文とする。他に型式分類はできないが、C16～19、D 3 ・ 6 ～11は本式のものである。

貉沢式　A12は口径 32 cm の赤褐色を呈し、長石・石英粒の多い中葉の特徴を持ち口縁の隆帯にそって角押文のみだが、本式の古い段階で I d 型である。A13は、色調・胎土から、平出 3 Aの初現期と考えるもので、口径 18.6 cm、突起は 1 対だが口縁文様は 4 単位で、口縁と頸部の隆帯には半截竹管の内面による刺突を加えるが深くついて引き上げるため錨形をなす。A14は口縁部に沈線文を僅かに付すもので、暗褐色の金雲母や砂粒が多く含まれるものである、I 型である。C26も中期初頭の胎土とは思われない。D14・15は貉沢式期の平出 3 A、16は浅鉢である。以上はすべて中～上層出土である。

図266—8は顔面把手より人体文把手と表現した方が適切と思われるもので、暗褐色を呈し長石・石英は中位であるが金雲母を多量に含む。頭部は平面ほぼ三角形で口がとがり、目を篦描き沈線で表し両腕は土器をだく姿勢となる。口縁に三条の沈線と楔形文を付し、篦整形痕が深鉢本体では顕著である。検出面の上層出土で、九兵衛尾根II式から貉沢式への移行期のものと考える。

土製円板　図262—11は 9 g で中期初頭と思われる深鉢片を使用している。

石器は、打製石斧14、横刃型石器 5 、磨製石斧 2 、凹石・磨石11、石皿 2 、石鏃 5 、スクレイパー類 2 、刃器 1 、計42個と比較的多く種類にも富んでいる。

僅少な床面遺物と埋甕炉のA 8 から、本址は九兵衛尾根 I 式の終末期、仮称原沢式期に属すると考えたい。然し、同型の埋甕炉を持つ 5 号旧住では単独出土に近い状況であり、また、岡谷市船霊社遺跡13号住

でも破片の出土をみているが、九兵衛尾根II式に伴出したと断言することはできない。むしろ、1号住が九兵衛尾根II式への移行期の様相を持ち、器形を異にするがA8と同系統の破片が原沢式と下層に共伴しておる事実に注目したい。今後の資料の増加を待ちたい。現状では、九兵衛尾根II式の住居としておくほかない。

カ)　**第28号新住居址**（図13・125～128、図版28・56・130・131）

遺構　ローム面で遺構を確認したが、新道期の**21号住**に切られている。6.18×4.37mの楕円形を呈する竪穴住居址である。P_1—P_6 間を入口と推定すると N 1°W が主軸方向となる。埋甕炉が21号住の壁によって多少削られてはいるが残存し、炭化物・焼土混入黒褐色土が充満し、その下部に小ピットがあるが、意図的なものか根が入り込んだものか不明である。この F_1 は中央より北寄りに位置するが、この南西の F_2 と南に F_3 の地床炉があり焼土が認められた。F_3 部分の床は本址の最低部となるが、柱穴検出時に神ノ木式土器片を出土するものがあり、F_3 は旧住居址のものと考えた。壁高は東 23 cm、西 9 cm、南 19 cm、北 17 cm。主柱穴は P_1　34×25—47、P_6　35×30—67、P_7　27×25—53 の3個が考えられるが、更にもう1個は21号住で番号をとった P_{21}　25×22—52、P_2　24×21—64、P_6　22×20—17、P_7　20×19—32、P_{22}　21×20—27 の内のどれかかと思われるが確定することはできない。これらの深さは本址 F_1 のレベルからの推定値である。本址の P_2　31×27—53 も主柱穴であろうが改築されたことを示すものであろう。P_8　58×45—61 には石柱とみられる石が底より 25 cm 上で斜めになって検出されたが、単に落ち込んだと考えるより壁ぎわに立っていたと考えられる。縄文中期初頭においても屋内に於いて石柱祭祀が行われていたのではないかと思われる。P_9　39×38—45 は貯蔵穴と思われ、上層は自然埋没の状況を示している。

遺物　床面密着の遺物は僅少で埋甕炉のA20と F_3 内出土のB20のみである。若干浮いた最終時の生活面では、B1・24、D1がある。中～上層での遺物出土量は多いが、本址に近接した時期に廃棄された遺物と考えられる下層・中層出土のものは、A18・19・21・22、B2・3・5・7～9、C1・2・10・11・13、D2・6・10があげられる。

九兵衛尾根I式　I型　A17・24・25、B7・10～16があるが、いずれも小破片で本址より若干先行する1号住に多出する型も含まれると考える。Ie型　A18は胴部1/5周程の破片から図上復元したもので、頸部径 32 cm としまり、球形に近い胴部に半截竹管による半隆起線で方形区画を連ね、内部を斜格子文で埋め、頸部の半隆起線の交点は三角印刻文を付す。下部には平行沈線による渦文を有し赤褐色乃至暗褐色の深鉢である。IIc型　A21は口径 22.2 cm、現存器高 22 cm 程の底を欠く無文深鉢であるが、長石粒多量、金雲母少量を含み外面は橙色、内面は黒褐色で炭化物が付着する。IIb型と器形・胎土が類似し便宜的に亜種としてここに含めておきたい。IIIa型　B17・18を疑問点はあるが入れておきたい。IVa型　B19。Va型　B2は頸部の斜格子文を半截竹管による平行沈線のみで施文し、底部に平行沈線を横走させる。VIIa′型　A23は小波状口縁突起部の下に短い棒状把手を貼付し、それに押引D字文を施す例で、土壙1157出土例に近似する。長石・石英の他に大粒な金雲母を多量に含む。VIIa型　B1は3/1個体が残存する。口径 35 cm、器高 42 cm と推定され、胴側面文様は正面の斜格子文に代えて内部の交互刺突文帯を縦位に施す。B24・25・27もこの型の可能性が強い。同b型　A20は頸部にV字・逆U字状の隆帯を貼付し、A＋Bの4単位の施文となる。実測部分はほぼ完存し、口縁最大径 30.3 cm、現存器高 17 cm である。IXa型　A19、B8・21～23の内、23は口縁部の縦の平行沈線が部分的に施される点で若干趣きを異にする。IXb型　B4・26を含めたい。XI型　A22は口縁最大径 17.2 cm、器高 21 cm 程と思われる深鉢で、橙赤褐色

を呈し長石細粒、金雲母が多く、外面がよく研磨されている。口縁にはLR縄文を、肩部は竹管背面による押引沈線文帯をもち、胴は4分割された区画内を横走する平行沈線で埋め、更にこれを棒状具による沈線で切る。C10にも同様押引文をみる。

XIVc型　B20は口縁にRL縄文を付し半隆起線をめぐらすもので、D9・10・12・13のやや細目の単沈線による施文とはやや異る。XVa型　B3は結束LR縄文を地文とし、頸部に把手の剝落痕がある。

上記の型に入るB9・28・26、C1～6・8～11・13～29の深鉢片は、九兵衛尾根I式期であり、本址に伴う可能性のあるものであるが胴部がふくらむものが多いことに注目しておきたい。同I式からII式への移行期の所産とみられるものにXVII型とした肩部に隆帯文と胴に縄文を付し長石・石英・輝石を含むB5やXVIb型の外面黒磨きした口径7cmの小型土器B6がある。篭畑II式かと思われるものでC20がある。

浅鉢Ia型　C30・31。Ib型　C32、D1・5・7・8。Ib'型　D2。以上が九兵衛尾根I式期。

九兵衛尾根II式　深鉢のD11・14・15、浅鉢のD4は無文で長石・金雲母を多く含み中期初頭に属する。

縄文中期中葉　C12は最上層出土で北陸系の影響を受けたものの可能性があり、D16は藤内I式である。

覆土中より食物の炭化物かと思うもの2点を得ている。大きいものは30×25×18mmの塊状をなすもので、他の1点は小片に分離しており原形は不明である。いずれも澱粉質が炭化発泡した状況を示している（図版130・131）。

石器は、打製石斧10、磨製石斧1、凹石・磨石14、石鏃2、スクレイパー類1、刃器1、剝片1の合計30個が出土している。

本址は九兵衛尾根I式期に所属する。

キ）　**第29号住居址**（図13・128～131・263・266、図版27）

遺構　黒土中から遺物が多出し、遺構の存在を予想し、重機で削り下げたため、削りすぎ、また、暗褐色土層中の住居であるため輪郭確認は困難であった。壁高は東2cm、西8cm、南6cm、北30cmを残すのみで、覆土遺物の多くは失われてしまった。プランは3.85×3.25mの楕円形を呈し、主軸方向はN 89°Eである。中央やや南よりに地床炉F_1があり、31×25cm、深さ2cmで若干の焼土が認められた。床面は**30・31号住**を切る部分を除き漸移層上にあり、凹凸が激しいが硬い。東側に焼土を残す地床炉ともみられるF_2があるが、35×32cmで小ピットが掘り込まれている。主柱穴は4本と考えられるが、P_1　22×20—32、P_3　45×35—63、P_4　25×24—28、P_5　20×20—30が最終時のもので、P_6　35×?—35は建直されたものであろう。補助柱穴P_2は入口施設のために設けられたものと考えたい。

遺物　床面出土遺物はA17・18のみであり、他は輪郭確認時か覆土出土である。

九兵衛尾根I式　I型　A19・20・22は7a型か本型か口縁のみで不明。II型　B17～19。IIIa型　A18・21、B1・3・4がある。IVa型　A17、B2の胴部はRL縄文を地文とする。IXa型　A23、B5～9があげられるが、B5の渦文に押引する爪形は隆帯幅より狭く、胎土が脇に押しだされた状況を示す、九兵衛尾根I式後半期の1つの特徴をもっているが、B6は前半期以来のもので、口縁のカーブも異り古いかも知れない。B11～15は前群の縦平行沈線文を欠き、12のように弧状につける。5・11・13には一部結節状沈線文も付され、11はLR縄文を付す。IXd型　B10は棒状具による口唇押圧と縦の沈線を付すもので本址より後出型と思われる。X型　C5・6は半隆起線で器面全体を施文するが、本址より古い可能性が強い。XIII型　C7～9は外面に丁寧な篦磨きのある土器で、9は結節状沈線文が一部横走する。XIV型C30～31は単沈線と直交する連続刺突文をもつ。B26は平行沈線のみで縄文がない点で異るが、本群へ含

めておく。XIVc型　D15。XVa型　B21。同b型　C23・26～29・32～35は同c型式に属する可能性の強いものである。XVIa型　B16・20、D2。型は判然としないが、九兵衛尾根I式でB11～28、C1～4・17～35、D3があげられる。B23～28はミニチュアか小形深鉢である。

浅鉢　口縁内面の爪形文はいずれも幅3mm程度の細い竹管を用いている。Ib型　D5・6・9。Ib′型　D4・7は外面の半隆起線と単沈線にそって刺突文を持ち、7はRL縄文、8は無節と思われる縄文があり、34号住出土と同一個体かも知れない。10は無文であるため中期初頭とだけしかいえない。

九兵衛尾根II式　D11～14がある。16は無文、17はLR縄文を有し、それぞれ頸部と口縁に押引沈線をめぐらし、終末期のものではないかと考える。

覆土中より14×8×6mmのアワ状炭化種子塊とも澱粉質の炭化発泡したものともとれる小塊が出土している。

土製品では図266—6の妊娠土偶腰部がある。最大幅は6cm、腹部最大厚2.8cm、現存高4.5cmで赤褐色を呈し細砂粒を含み丁寧に磨かれている。へそは刺突文、陰部は浅い半肉彫三叉文で表現し、両脚の付け根は腰部にはめ込まれたため接合面が凹穴となり、図中矢印部に芯素材痕が小穴となって残る。覆土中からの出土であり遺物整理段階で気づいたため、出土状況の詳細は不明であるが下層出土は確実である。

土製円板（図263—2）は中期初頭浅鉢片を利用した未成品と思われ、右肩部が磨かれ31gで覆土最上層出土である。

石器は、打製石斧25、横刃型石器5、凹石・磨石5、石鏃1、スクレイパー類2、粗大石匙1、石棒片2の計41個が出土している。

本址は床面遺物が僅少であるが、九兵衛尾根I式後半の住居と思われる。

ク）　**第30号・31号住居址**（図14・131～140・261・263・266、図版29・57～62・115）

遺構　5軒の住居が切り合う結果となり調査は難行した。**22・26・29号住居址及び土壙1308・1309**に切られている。切り合わない部分の検出面は東が褐色土層、西が暗褐色土中である。発掘時は付図1のように31号住をP_5—P_7の北西側のみが30号住に破壊されずに残存したと調査者は考えていたが、遺物出土状況図を検討してみると、30号住B7が31号住の残存部と考えた北壁下の最終時生活面と考えて良いレベルまで、ほぼ同一面に散在している。このことは切り合い関係を誤認していたことを示しているのではないかと考える。調査時において南北方向にも土層観察ベルトを設けながら、境界を把握できずはずしてしまったことを反省している。現地視察に見えた武藤雄六氏より30号・31号住が一軒ではないかと御指摘を受けたことを思いださずにはおられない。結論的には外周の長楕円形の竪穴住居址を30号住居址、P_7・P_{20}に接する内周と、調査時に30号住の床面上昇部と認定して記録されているその境界線の北側を31号住居址としたい。遺物図版、石器一覧表は修正する余裕がないため、全体図で示した発掘時所見に従っていることを付記しておきたい。

30号住は10.12×5.50mの規模を有し、本遺跡では中期初頭は勿論のこと全期を通じて最大の住居址である。長軸を主軸方向と考えるとN 41°Wであるが、入口施設の柱穴かと思われるP_{21}寄りの床面は緩傾斜している。30・31号両住居址の床面の差は9cm前後であり、中間にあるロームは黒褐色土を混じ、31号住床との接点に褐色土混入の黒土層が薄く入る。30住床は全般に軟弱で凹凸がある。壁高は東49cm、西7cm、南18cm、北23cmである。本址は2～3回の建て直しが行われており、最終時主柱穴はP_1　35×?—62、P_2　23×?—31、P_3　32×?—45、P_4　25×?—47、P_5　31×?—58である。改築前の主柱穴をP_6　40×

?—43、P_7 22×?—13、P_8 26×?—28、P_9 32×?—28、P_{10} 30×?—36、P_{11} 34×?—51 とすると、補助柱穴は P_{12} 18×28—42、P_{13} 29×25—22、P_{14} 20×17—29、P_{15} 30×26—23、P_{17} 30×25—25、P_{18} 27×25—17、P_{19} 20×12—17、P_{20} 33×25—22、P_{21} 52×42—41。 地床炉かと思われる F_1 は 30×27 cm、深さ 14 cm であるが壁に近すぎると思え、29号住床面ですでに確認しているものである。

31号住は円形に近い径5.20mの規模で床面は平坦でいわゆるたたき床である。中央やや西寄りに地床炉 F_2 があり、63×51 cm、深さ 7 cm で厚い焼土が認められた。P_{16} 38×26—22、P_{22} 32×28—19、P_{23} 25×21—29 は本址の柱穴かと思われる。

遺物 30号住居址 多くの遺物は床より 10 cm 以上浮いて出土しており、炉址の北東に多い。入口部では殆んど出土せず、床及び生活面出土はA20、B3・7・10・12、C9、D2、E5、F6・30、H13、I2である。

九兵衛尾根I式 深鉢 Ia型 B1は中層出土であるが、赤褐色、長石粒を多く含み焼成堅緻で1/2残る。口径 38.4 cm。篭畑II式の特徴を残す。Ic型 B1は下層、B4・8は上層出土である。B7・10とここに含めたい。Ie型 B2。IIa型 B6は口径 20.6 cm、器高 37.5 cm の暗赤褐色で長石・石英・金雲母が多く、焼成は良い。IIIa型 D2・3・5・11。この亜種として縄文を付すD14・15がありa′型とする。IIIc型 A19。IVa型 D9とE1・5。Va型 B8。VIa型 C6。VIb型 C7、E18。VIII型 B12。IXa型 B4、D13・17～27があり、やや趣きを異にするE2～3も含めておきたい。IXb型 B3。XIa型 E19。同b型 F7。XIII型 A20、E8、F1～3。XIVa型 C11・12、G17～18・21・22、同b型 C13、同c型 F25～29・31～35、G1・5・8・9。XVa型 C8。B5は肩部に半截竹管による平行沈線と同具による2点組の押引平行沈線があり、口縁に RL 縄文を付す。同b型 F12。F13～15はXV型に属すると思われる。

本址に明らかに伴わないものは諸磯B式のE4。篭畑式と思われるものにG28～31があり、31号住に伴うものであろうか。九兵衛尾根II式期と思われるC2～4、G6・7・11～16・19がある。H1・2は清水ノ上式第三群第1類Bである。

浅鉢 Ia型 C15～17、H3～7・10～14。Ib型 C18～19・21があるが、19は外面沈線が横走するものでより新しいものかと思われ、他にH8・9・15～19があるが、19は、内面に結節状沈線文を4条付する。他にI1がある。

土製品 把手部となる図266—2・5は篭畑式で、2は半隆起線・結節状半隆起・半肉彫三叉文を有し同II式に、5はイネ科植物茎による細線文施文後に半隆起線を付すもので宮ノ原貝塚第6群に比定される。土偶腰部の図266—7は最大幅 7 cm、腹部最大厚 3.5 cm、現高 4.7 cm で、赤褐色を呈し雲母・長石等を含み丁寧ななでが加えられている。妊娠女性を表現するものと思われ、正中線は2条の平行沈線で表現している。P_{23} の約 20 cm 東の床面より僅かに浮いて出土したが、床面に特別な施設はなかった。施文具・出土状況からみて本址に伴出することは確実である。

土製円板 図263—3は中期初頭浅鉢片を使用し、39gで覆土遺物である。

石器は、打製石斧34、横刃型石器8、磨製石斧2、凹石・磨石20、石皿1、石鏃2、クスレイパー類3、ドリル2、刃器2、石錘1、不明石器1の計77個出土している。しかし、31号住との関係も考慮する必要があろう。

本址は九兵衛尾根I式に所属する。

31号住居址 篭畑式 A7は半隆起線と連続爪形文を付す隆帯で文様を構成する。A4も該当するかと

思われる。九兵衛尾根Ⅰ式　深鉢　Ⅰc・d型　A8～9と胴底部の23～25がある。Ⅶa型　A13が含まれると思われる。Ⅸa型　A10・16。XIVa型　A17・18・27～29、B1があげられるが、沈線と角押文類似の押引文、隆帯か沈線に沿い、それらに直交する二方向の列点文を有するものである。XV型　A19～21・26を疑問はあるが所属させたい。XVIa型　A12・14が含まれよう。浅鉢　Ⅰb型　A4は内面無文でやや特殊であり、他にA5～6がある。A5は外面口縁にRL縄文を付す。

九兵衛尾根Ⅱ式　B2～3の深鉢片があるが、深鉢A3・5～6は九兵衛尾根Ⅰ式であろう。A22は新道期の深鉢片である。

覆土中より炭化栗1点を得ている。発掘時31号住と考えた北西部覆土より澱粉質が炭化発泡したらしい小塊を得ている。また、石器は、打製石斧8、横刃型石器2、凹石・磨石6、石鏃1、ドリル2、刃器1の計20個出土している。

以上、31号住として図示し、説明してきたが前記事情により、30号住の遺物と考えることが妥当と思われる。本来の本址に伴出する遺物は、30号住居址生活面出土のA9が篭畑式と思われることが、両址の篭畑式期遺物が30号住によって攪乱され、再流入したものとも考えられ、また1号住と同タイプの型群が比較的多いことから、これらが本址の遺物であるとみることもできよう。いずれにしても、本址は篭畑式の終末期から九兵衛尾根Ⅰ式期に所属させたい。

ケ）　第34号住居址（図14・142、図版31）

遺構　重機によって排土したため削りすぎ、暗褐色土層中で東壁部と床面の半分を確認したのみである。柱穴の配置から推定すると径3.30m程度の楕円形を呈する竪穴住居址と思われ、P_2—P_3を入口部と考えると主軸方向はN3°Wo東壁の残存高は5cmで、P_1・P_2とも壁ぎわにあり壁の立ち上がりと一致する。残存するロームの床面はやや凹凸があるが、硬く良好である。中央やや北よりに25×30cmの地床炉が認められたが、焼土中央に深さ10cmのピットが検出され、埋甕炉の土器が抜かれた可能性もある。主柱穴はP_1～P_4で、P_1上は貼床されていた。P_5は補助柱穴であり、P_1の一部は貯蔵穴として利用された時期があったのかも知れない。P_1　100×70－18、P_2　48×38－16、P_3　36×32－東27・西32、P_4　35×26－南34・北33、P_5　23×18－26。

遺物　残存した覆土は僅かに数cmで、本址に伴出する遺物はP_1、P_2出土の少量であるが、九兵衛尾根Ⅰ式後半期の良好なセット関係を示す資料が得られた。それだけに能率のみを考え重機で深く削りすぎたことが悔まれる。

九兵衛尾根Ⅰ式　深鉢　Ⅳa型　7、Va型　12、Ⅷ型　13、Ⅸa型　8・9の2点で9には頸部隆帯にそって結節状沈線文が横走し、全面にRL縄文が付される。XVb型　11は半截竹管による半隆起線とRL縄文を付す。他に10・20はⅠ式期であろう。浅鉢　Ⅰa型　17・18。Ⅰb́型とした19は外面口縁部に無節らしい縄文を付し、内面にハート型の貼付文を付す小型な浅鉢である。前者は疑問であるが、後者は本址に確実に伴出する。21は清水ノ上Ⅲ群1類Bに比定され、黒褐色を呈し内面は丁寧に磨かれ浅鉢の可能性が強い。

九兵衛尾根Ⅱ式　14～16の内、14はⅠ式の可能性も残される。中期中葉　22は口縁は連続爪形文、交互刺突文、角押文を持つもので貉沢式の初期の可能性が強い。

石器は、打製石斧8、横刃型石器7、凹石・磨石3、スクレイパー類2、ドリル1、剝片1の計22個が出土している。

コ）　**第41号住居址**（図15・143）

遺構　暗褐色土層で輪郭を確認した円形に近い竪穴住居址である。2.9×2.83 cmと小形で、P_1—P_5 を入口とすると主軸方向は N32°E である。壁はローム層から立ち上がり、東 25 cm、西 20 cm、南 20 cm、北壁下に他の床面より 10 cm程高いテラス部分があり、ここと北壁上部との差は 10 cm である。床面はロームで中央部は硬いが、壁ぞいは軟弱で凹凸がある。中央やや南西よりに僅かに焼土を残す径 30×25 cm の地床炉があるが、深さは殆んどなく、ごく短期間しか使用されなかったのではないかと思われる。主柱は P_1　25×20−22、P_2　16×16−15、P_5　21×13−21、P_7　16×15−24。補助柱穴 P_3　11×10−12、P_4　12×12−15、P_6　23×16−12、P_8　12×11−16、P_9　16×16−16、P_{10}　15×14−12がある。P_5 と P_9 の間に浅いピットが2個あるが、根穴かと思われる。

遺物　炭粉混入の黒褐色土の覆土中より少量出土している。図示できるものは RL 縄文を地文とする1～3であるが、九兵衛尾根II式である。石器は横刃型石器2個のみの出土である。僅少な遺物で疑問はあるが、炉の形態も考えると縄文中期初頭九兵衛尾根II式期の住居址であることは、ほぼ問題はない。

サ）　**第42号住居址**（図14・143・206、図版36・98）

遺構　暗褐色土中で黒褐色土の覆土との差により輪郭を確認した 3.25×3.13 m の円形を呈する竪穴住居址で、P_1—P_5 を入口部と推定し、P_2—P_3 の中間を結ぶ線を主軸と考えると N42°E となる。中央部東寄りに地床炉があるが、39×34 cm、深さ 3 cm と浅く、薄い炭粉混入の焼土が認められた。壁は下部がローム、上部は漸移層中にあるが傾斜しやや軟弱である。壁高は南が 26 cm と高く、東が 10 cm と低い。床面はほぼ平坦であるが軟弱な部類に属する。周溝はない。P_{10} は本址より新しい土壙の痕跡かとも考えたが、出土遺物もなく、入口施設のために掘り込まれた可能性もある。主柱穴は4個で、P_1　45×22−31、P_2　43×32−30、P_3　30×25−35、P_4　35×35−27 となる。補助柱穴は P_5　19×18−12、P_6　20×18−10、P_7　26×22−21、P_8　15×15−25 である。P_9 は貯蔵穴かと思われ50×37−13である。

遺物　床面か多少浮く生活面とみて良いレベルから少量の遺物が出土した。

九兵衛尾根II式　深鉢ではA 5・6・8があるが、いずれも RL 縄文を付す。浅鉢のA10は波状突起部の同心円文の中心を太い棒状具で刺突する凹穴を付し、三叉文や三条の横走する連続爪形文の中間部で意図的に切る手法と、空間部にそれらと直交する方向で押圧する爪形列点文がみられ、純然たる九兵衛尾根I式期のものとは差異を感ずるが、II式期の典型例と思われる頭殿沢遺跡出土例は横走する連続爪形文が2条であるのに比し、B14も3条を施文している点で、I式期にまだ近い要素も持っていると思われる。A10はId型でも過渡期と考えたい。Ie型　B14は底を欠くが、ほぼ完形であり、1対の波状口縁突起部には貫通孔を有し、丁寧に内外面を磨いた後に口縁内面に連続爪形文、同具による列点文、RL 縄文横位回転の順で施文している。口縁部最大径31.2、最大高 12.8 cm でともに長石粒を含み、金雲母は多い。深鉢片A 7は半截竹管による平行沈線を垂下させるI式期のもので、A 4は同具による半隆起線にそって内面に連続刺突文を繊細な単節縄文の地文上に付すもので縄文中期中葉の可能性が強く、ともに P_4 東側同一地点出土で攪乱による混入の疑いが強い。A 9は平出3類Aの底部である。

石器は凹石・磨石2、剝片1の計3個のみで、土器と共にその遺物出土量は僅少であるが、完形浅鉢の出土から九兵衛尾根II式のやや古い時期に所属すると考えたい。

シ）　**第46号住居址**（図16・143、図版38・62）

遺構　地表下 60～70 cm の漸移層中で確認した、2.5×2.25mのほぼ円形を呈する小形な竪穴住居址である。地形を考えると等高線に沿った P_2—P_3 が入口部の可能性が強く、中央の地床炉Fの方向を主軸とするとN43°E となる。床面はロームまで掘り込むが軟弱で、地床炉は 37×30 cm、深さ 3 cm で焼土粒が僅かにみられる程度で長期間使用されたとは思われない。柱穴の配置は不規則で全般に浅く、主柱穴と見て良いものは2個、P_1　23×23－20、P_2　32×25－18 である。補助柱穴は P_3　25×23－10、P_4　33×25－13、P_5　30×23－10 である。P_6　44×41－10 は貯蔵穴であろうか。壁高は東 14 cm 、西 18 cm、南 16 cm、北 6 cm。

遺物　床面遺物は北西壁ぎわで出土したA12のみである。九兵衛尾根Ⅰ式　深鉢　Ⅳb型で、頸部径 18 cm、暗赤褐色を呈し、長石を主とする細砂粒を含み金雲母を多く混入する。頸部にはV字状貼付文を2対、胴部は爪形文隆帯を1対と交互刺突文と角押文沈線と組み合わせた平行沈線文帯を1対垂下させる4単位の文様構成となるようである。11・13は型式分類不能であるがⅠ式である。14は縄文を付すものである。

本址は僅少な遺物ではあるが、九兵衛尾根Ⅰ式後半期と考える。

ス）　**第47号旧住居址**（図34・143・144、図版39）

遺構　新住居址床面清掃時に更に下層に本址の存在が確認された。新住居址の床面下約 10 cm に床面部が残存するが、僅かに残る壁から2.95×2.50m程の楕円形のプランであったことが想定される。床はロームのたたきで良好であり、中央へ凹む。南側はやや軟弱部がある。ほぼ中央に埋甕炉 F_2 があるが焼土は少ない。新住貼床の下部から検出され、本址のピットと断定できるものは P_{11} のみで、他は新住居床面で検出されているが、以下のものは本址のものである可能性がある。P_5　38×29－28、P_7　28×24－55、P_{11}　48×35－7。主柱穴は P_5 と P_7 の2個である。

遺物　A17は諸磯B式深鉢片で覆土に更に2片ある。九兵衛尾根Ⅰ式　深鉢　A15は暗赤褐色、A18・19は橙褐色を呈する。他にB1～4・20・29・30があり、1はⅨ型の亜種か。20・29はXV型の一部分、30はXⅣb型である。浅鉢　Ⅰb型　31は外面沈線を垂下させるもので、沈線施文グループ中でもより新しいかも知れない。他に32がある。A15は新住床面に密着して出土したが、本址に伴出した可能性を捨て去ることはできないもので半截竹管三種を用いている。九兵衛尾根Ⅱ式　深鉢　A16は埋甕炉に使用されたもので、頸部最大径約 26 cm、残存器高 12 cmの全面に単節縄文を施文する。1 á 型に分類される。B1・6は床面、8は焼土内、5・7・9～12は覆土とはいっても生活面と考えて良い新住貼床下の出土であり、B1以外はⅡ式である。B13～19・21～29もⅡ式である。

石器は、打製石斧2、横刃型石器2、凹石・磨石2、石鏃1、スクレイパー類1、他1、計9個出土している。

ウ　縄文時代中期中葉の住居址と遺物

ア）**第2号住居址**（図17・145・146、図版6・63）

遺構　暗褐色土からローム層中で輪郭を確認した4.35×4.05mのほぼ円形の竪穴住居址である。主軸はN5°W で、ロームの壁は良好である。壁高は東 31 cm、西 10 cm、北 13 cm である。床は東側が 5～10 cm 攪乱されているが、他はたたきで硬い。中央の方形石囲炉は 45×45 cm で、炉石上部から炉底までの深さは 18 cm で、木炭片と底部に焼土が薄く認められた。周溝が部分的に認められ、南側のは幅 12 cm 以下、深さ 4～7 cm、北側のは幅 10 cm、深さ 4～6 cm ある。主柱穴はP1～P_4 で、P_1 とP_3 からは打石器片が

検出された。補助柱穴は P_5～P_8 と考えるが、主柱穴に沿うようにして検出され垂木を支える役目を果したかと思う。いずれの柱穴もローム・ブロックを含む褐色土が充満していた。P_1 41×35—57、P_2 35×27—44、P_3 48×47—49、P_4 36×33—48、P_5 19×16—26、P_6 20×16—25、P_7 13×10—9、P_8 18×11—16。

遺物　完形か半完形の土器は床面か、僅かに浮いた生活面と考えて良いレベルから出土し、井戸尻パターンの様相をもち、炉周辺に集中する。廃絶時の位置を保ったと考えて良いものはA 9～11・13がある。他に破片で床面出土のA16・18、B 2・7がある。

新道式　深鉢　Ⅳb型　A 9は口径 32 cm、残存器高 31.3 cm で、第1文様帯が8単位第3文様帯が5単位である。Ⅳb型　A10は口径 34 cm、器高 40.5 cm で上部から4単位、11単位、3単位で無文部は篦整形痕が顕著である。Ⅶa型　A11。XIVa型　A13は口径 28 cm、器高 17.5 cm の金雲母を多量に含み、LR縄文を地文とするもので、a′型のB10に先行するであろう。XIIIa型　B11。平出3AⅣd型　A14は口径 30 cm、残存器高 22 cm で金雲母・石英を少量含む。B12・13はやや古い。他に型分類しないA 8・12・15～17、B 1～8があり、9は藤内式に近いであろう。

浅鉢　A18とB14がある。他に本址に伴わない篭畑期のB15と九兵衛尾根II式の17・18がある。

石器は、打製石斧11、横刃型石器7、磨製石斧3、凹石・磨石1、石皿1、石鏃1、ドリル3、刃器1、台石1、石錘1、計30個が出土している。

本址は新道式期の住居である。

イ）第3号住居址（図16～18・146～153・261、図版7・63～71）

遺構　ローム層から褐色土層中で輪郭を確認した住居で炉址が3箇所検出されたことから3回拡張が行われ、断続的か継続して相当長期間にわたって居住された住居と思われる。

旧旧住居址　本址の埋甕炉 F_3 が新住の F_1 に切られて僅かに残存するのみである。床面は後の両住居址と同一面であるため範囲は確認できなかったが、浅い柱穴の組み合わせが、同心円的配列の最小径部にあり、P_7 か破壊された部分にあった P_8・P_{10}・P_{11}・P_{13}・P_{14}が主柱穴かと思われる。P_{13}—P_{14}を入口部と考えると N45°W と推定される。

旧住居址　埋甕炉 F_2 が完存し、掘方の一部が新住居の F_1に切られている。中位の深さの柱穴を本址のものと推定した。主柱穴は P_8・P_9・P_{15}・P_{16}・P_{12} で、P_{20} は本址の入口部に関係するかと思われる。P_{15}—P_{16}を入口部と推定すると主軸は N52°W となる。

新住居址　6.45×5.05mの卵形プランで、壁は緩傾斜するがロームで深く壁高は北東 38 cm、南西 46 cm、南東 50 cm、北西 30 cm ある。周溝が幅 8～15 cm、深さ 2～6 cm で全周する。床は中央が低く凹凸はなく、たたきである。中央北西よりに 45×38 cm、深さ 13 cm の石囲炉 F_1があり、他の炉址より高い位置にあって焼土が厚く遺存した。主柱穴は6個で P_1～P_6 と最も深く径も大きい。覆土層序は典型的な凹レンズ状の堆積を示し、1層には後期土器片が含まれ、埋没完了までには長時間を要したようである。P_{15}—P_{16} を入口とする主軸は N56°W となる。P_{18}・P_{19} は入口施設であろう。袋状をなす P_7 は貯蔵穴と思われる。P_1　65×62—81、P_2　72×65—68、P_3　60×45—55、P_4　77×65—54、P_5　48×37—43、P_6 46×40—59、P_7　65×63—63、P_8　29×28—35、P_9　32×31—41、P_{10}　29×24—30、P_{11}　32×25—25、P_{12}　24×23—45、P_{13}　28×20—42、P_{14}　25×20—23、P_{15-1}　18×26—24、P_{15-2}　25×20—37、P_{16}　39×21—24、P_{18}　26×16—18、P_{19}　19×18—25、P_{20}　34×18—26、P_{21}　19×17—28。

遺物　床面遺物は少ないが、生活面から下層の井戸尻パターンと考えられる置き去られた遺物と、吹上

パターンの後に廃棄されたものが極めて多い。

旧旧住居址　貉沢式　Ⅲｅ型　埋甕炉 F_3 の残存部であるA19が確実なだけで、他に破壊された際、周辺に散乱したもの、再流入かも知れない、Ｇ１～３がある。

旧住居址　新道式　深鉢　埋甕炉 F_2 に使用されたＤ１が確実なだけてあり、これはⅦＣ型である。口径 31 cm、現存器高 22 cm であり、胴部は４単位であるが、１区画はＹ字状文を欠く。他は新住居址と区別できない。

新住居址　床面と生活面出土はＤ２・３、Ｅ９・10、Ｆ４・６・10～11、Ｇ７である。新道式　深鉢　Ⅰｃ型　A20は口径 27 cm、器高 20.3 cm でロ縁６単位、胴部２単位であり、Ｃ６の下部に入りより古い。Ⅰｂ型　A21は三角押文に用いる篦状具の先端を切り落した施文具により巾 4 mm の角押文類似の押引文を付す。Ｇ５はⅠ型である。２ａ′型　Ｂ１は2/3個体が残り、口径 25 cm、器高 33.5 cm で、胴側面にはＹ字状懸垂文がある。Ｂ６は口径 14.8 cm、器高 14.5 cm のほぼ完形品である。Ｇ９は２型であろう。Ⅳａ型　Ｂ４はロ径 46 cm、残存器高 45.5 cm で４単位の文様割付をする。Ｂ５は1/4強の残存部から復元した。Ⅳｂ型　Ｃ１・５は同一個体と思われ、口縁部は21号住Ｂ５と類似モチーフである。Ｇ10はⅣ型である。Ⅴｂ型　Ｂ２は口径 43 cm、器高 47.5 cm、口縁文様がＡ＋Ａ′＋Ａ′＋Ｂ、頸部７単位Ａ胴４単位の完形品である。Ⅵ型　Ｅ２・３。Ⅶｃ型　Ｃ６は口径 18.5 cm、残存器高 19.3 cm でロ縁・底は４単位、胴は２単位で１区画は右からも蛇身文？を入れるらしく、1/2個体残存する。Ｃ７は胴に２単位の同文をもつもので粟粒大の炭化種子痕が多数みられ、口径 29 cm である。Ｃ８はⅡａ′型と底部文様は共通する。７・８は６より古い様相をもっている。他にＤ６があるが、幅広の連続爪形文と先端をそいだ三角押文を付す７ｅ型では、ＲＬ縄文を付すＣ４があり、側面には円文を貼付する２単位の区画である。Ⅷａ型　Ｄ２は1/4個体から回復したが口径 35 cm、器高 37 cm と思われる。Ｄ３は幅 4 mm の角押文と三角押文を施す。Ｄ７は口径 41 cm で結節状沈線文とＲＬ縄文を施文し、口縁断面に栗と思われる種子痕と胴部に6×3 mm の不明種子痕をもつ。Ⅷｂ型　Ｄ８。Ⅷｃ型　Ｄ４、Ｇ７。Ⅸａ型　Ｄ５は17号住出土と接合したもので、口縁最大径 20.5 cm、器高 22.5 cm と推定され、三角押文の施文具と先端に刻目を入れたものとそいだ３種を用いる。Ⅸｃ型　Ｃ３はほぼ完形で、口径 19.5 cm、器高 27.4 cm、ＲＬ縄文を付す。Ⅹｂ型　Ｅ４は口径 30 cm、最大高 32 cm で平行沈線を胴に付す。Ⅻｂ型　Ｇ14。Ⅺ型　Ｅ９は口径 19.7 cm、最大高 29.5 cm で、爪形隆帯と半隆起線、ＲＬ縄文を付し、上から４・２・４単位で下半部は正面１単位のみ変化をつけ、３単位はＹ字懸垂文で区画した間を正面右側区画内と同文で埋めるほぼ完形である。ⅩⅢａ型　Ｅ５・７はＲＬ縄文を付す。口径 49 cm を示し、他にＨ１がある。同ｂ型、Ｅ６・８・10、Ｈ２・３。同ｄ型　Ｃ２はほぼ完形で口径 21.6 cm、器高 26.5 cm。ⅩⅣａ′型　Ｇ６。同ｃ型　Ｆ１。同ｄ型　Ｆ２・３があり、Ｅ11は1/4個体から図復したＲＬ縄文を全面に付し器高 29.5 cm である。Ｆ３は下層で口縁を上に斜位で出土した。ⅩⅤ型　Ｇ15。有孔鍔付Ⅱａ型　Ｆ11は炉辺の生活面出土の完形品で、口径 15 cm、器高 13.1 cm、外面赤褐色で黒斑があり、内面は黒色で内外面とも丁寧に篦磨きされる。

平出３類Ａ系　Ⅲａ型　Ｆ４は1/2個体が成存し、口径 23.5 cm で、他にＨ４がある。同ｂ型　Ｆ５も同様で、口径 32 cm である。Ｆ６は1/4個体から図復した口径 24 cm、胴部に隆帯を垂下させるものである。Ⅴ型　Ｆ７も1/4しかないが、大粒な金雲母と石英粒を非常に多く含むので、Ⅲ型が本址に伴い、本例は後出型であろう。

椀形土器　Ｆ８は台付土器の脚部かと考えたが、口縁の整形等から椀形とするもので、口径推定 7.2 cm の繊細な無節縄文を付すものである。浅鉢Ⅱａ型　Ｈ６・７　Ⅲａ型　Ｆ８・10、10は推定口径 37 cm、

外面篦削りされる。Ⅲb型　F9は推定口径43cmで内外面篦磨きされる。

土製円板図261—19・20は、重量25g、19gで中期中葉深鉢片を使用し覆土上層出土である。石器は、打製石斧51、横刃型石器15、磨製石斧6、凹石・磨石10、石皿1、石鏃6、スクレイパー類3、ドリル3、刃器1の計96個が出土しているが、重複する各期住居地との関係は不明である。

以上の出土遺物から、旧旧住居は貉沢式期、旧住居は貉沢式から新道式への移行期、新住居は新道式期と考えられる。

ウ)　第4号住居址（図19・154・155、図版8・71）

遺構　畑の境界線下に所在したため東南部は耕作による攪乱を免がれた住居である。ローム直上で輪郭を確認したが、覆土は上層が炭粉混入黒褐色土で、下層は床面まで数cmの厚さの暗褐色土層となるが、その境界面は硬いが、鉄分の沈着によるものと思われる。4.02×3.85mの円形を呈し、主軸方向は壁柱穴を欠くP_3—P_4を入口と推定するとN22°Eとなる。壁は北西側は耕作により削られ、西20cmと低いが、南は45cmとほぼ原形を保つ。ロームの床面は平坦で硬く中央の埋甕炉の周囲は木炭片が散在していた。主柱穴はP_1　16×16—37、P_2　24×17—57、P_3　17×17—41、P_4　19×18—43である。補助柱穴はP_5　14×11—11、P_6　15×8—16で、P_5は中央へ傾斜する。壁下には径10cm内外、深さ4～10cmの壁柱穴がめぐる。

遺物　推定入口部脇には石皿が出土した。攪乱の恐れのない部分であり原位置と考えてよいであろう。A10、B1が炉周辺、19が床及び埋甕炉に使用されたA11内から出土し、他にA18が床面遺物である。覆土からはA1～4の九兵衛尾根Ⅰ式、A7・8の同Ⅱ式、口縁に楔形文をもつと思われるA5・6の深鉢片と交互刺突文下に短沈線を付す浅鉢片が出土しているが、後者は貉沢式への移行期か初期段階と思われ本址に伴う可能性がある。

貉沢式　深鉢　Ⅲ型　A10～15の内15はe型と思われる。11は長石・石英・金雲母を含み、輪積み後篦具による連続押圧を加える。平出3A系　Ⅰa型　A17。1型　20・21　B1ⅠC型　A19は口辺部が半隆起線で施文され、暗赤褐色を呈しより中期初頭的なものである。Ⅱa型　A18。Ⅲa型　B2。

石器は、打製石斧3、横刃型石器1、磨製石斧1、石皿1、石鏃2，ドリル1，三角剝片1、計10個出土している。

本址の床面土器は貉沢式深鉢Ⅲ型と平出3A系Ⅰ型・Ⅱa型で貉沢式期でも比較的古い時期である。

エ)　第5号新住居址（図19・155・156、図版9・72）

遺構　25cm程の表土下のローム面及び黒褐土層中で輪郭を確認した。6.03×5.55mの不整円形を呈し、P_7—P_8を入口と考えると主軸はN16°Wである。中央北寄りに48×?cm、深21cmの石囲炉があり、北側の炉石がはずされていた。床面は南西部がロームで堅緻で北東部は暗褐色土で軟弱である。壁高は東24cm、西28cm、南49cm、北は旧住居床面との差14cm確認したのみで、旧住覆土を壁面としていたと思われる。南壁下の一部に周溝が幅10cm、深さ4cmで存在し、壁柱穴は径8～18cm、深さ8～22cmである。主柱穴はP_1　37×33—44、P_2　34×30—41、P_3　35×25—37、P_4　50×38—48、P_5　?×27—45（P_4に切られる）、P_6　31×25—42、P_7　30×26—43、P_8　41×35—47、P_9　30×28—36、P_{10}　25×21—37、P_{11}　31×27—43、P_{12}　37×43—37。柱穴の状況からみて建て直されている。P_9は古い柱穴で、これに接する浅い凹穴は44×33—16で貼床下から検出された。入口部の壁は緩傾斜しており、床面も10数cm高い。

遺物　床面出土はB１～３、１～８、Ｂ５は一部P_8から出土している。新道式　深鉢　IIa′型　C12～14、IVa型　C10。VIb型　Ｂ５・Ｃ２。VIIC型　Ｂ３。IXa型　Ｂ４・11。XIII型　Ｃ３・18～20、同b′型　Ｂ６は胴部がほぼ残存し、RL縄文を地文とし半隆起線によるB字文と楔形文・三叉文を付し、赤褐色でもろい。XVIa型　C1は胴部に繊細なLR縄文を付す。XIVd型　Ｂ７。他に型式分類不能のＣ９・11・15～17がある。

有孔鍔付土器　Ｃ７～９がある。平出３Ａ系　III型　Ｃ５。IV型　Ｃ４。浅鉢Ｂ９・10、Ｃ６・23・24があり、IIa型でＣ６・24、VIb型のＢ９は⅓個体の図上復元である。B10は金雲母を含み内面は篦磨きを丁寧にするが、外面は指圧輪積み痕を残し、底部篦なでが雑である。

貉沢式　深鉢　B12～15。平出３Ａ系　C22。浅鉢ではIIa型のＢ８があるが⅓個体残存である。

石器は、打製石斧10、横刃型石器９、磨製石斧２、凹石・磨石５、石皿１、石鏃２、スクレイパー類６、ドリル２、計37個出土している。

本址出土の貉沢式期遺物はＢ８が床面である以外、床面から 15 cm 以内の遺物は炉周辺に２点混入するのみで、図示しなかった新道式期の床面出土の小片が11点ある点から本址は新道式期の住居としたい。

オ）　第11号住居址（図11・156・157）

遺構　耕土直下の褐色土中で輪郭を確認した。西側は緩傾斜面にあることと浅い住居であったために失われていた。調査時は**３号・６号住**によって切られた住居と考えたが、出土遺物の検討により縄文中期中葉の住居と考えるに至った。東南部の壁が残存するのみで壁高は 14～17 cm、床面はローム土で凹凸はあるが硬い。柱穴はP_1　26×21—33１個が検出された。

遺物　床面から 3～7 cm 浮いて図示した中期初頭から中葉の土器片が混在する形で出土した。Ｂ１～４は九兵衛尾根II式で３はXVI型である。新道式深鉢のＡ25・Ｂ６は長石・石英・輝石等を多く含み、爪形刺突文を有するもので、諏訪市荒神山遺跡・伊那市月見松遺跡に類例をみるが、いずれも器形は良くわからない。Ｂ５はXIVa′型、７は平出３Ａ系のIII型である。浅鉢のＡ26はVIb型である。

石器は、打製石斧１、横刃型石器１、凹・磨石１、計３個出土している。

本址は出土遺物からみて新道式前半期の住居と思われる。

カ）　第12号住居址（図21・157～159・262・267、図版13・72・73）

遺構　ローム層直上が検出面である。5.8×5.65mの五角形に近い不整円形で、P_9—P_{11}を入口と考えると主軸はＮ62°Ｗである。壁高は東 35 cm、西 12 cm、南 34 cm、北 17 cm である。床はローム土で凹凸があり、中央へ凹むが軟弱である。中央に 85×80 cm、深さ 9 cm の地床炉があり、上部に焼土が10数 cm 堆積し、石囲炉であった可能性もある。生活面は床より 5 cm 程高く想定した。主柱穴はP_1　55×43—63、P_3　43×35—55、P_4　45×38—60、P_5　48×40—53、P_6　33×28—39、P_8　30×25—40の６本、入口施設の補助柱穴はP_8・P_9　40×35—21、P_{10}　27×21—25、P_{11}　30×31—43を考えた。P_7　30×21—39は石柱があっても良い位置にある。P_2　48×35—10はP_8が棟持柱とするとその補助と思われる。炉の下の土壙898は本址より古い。

遺物　床面に接するＡ８・12・17・20、Ｂ７と、生活面のA10・13～16、Ｂ１・２・５・10、Ｃ１・４・７・12～13は井戸尻パターンで、他は後に廃棄されたものである。入口部に集中する傾向がある。

Ａ８は九兵衛尾根II式で、Ｂ３、Ｃ９～11は貉沢式期に属し本址に伴うものではない。新道式　深鉢II

a′型　A10。VIC型　A９。VIIｄ型　A13。VIIIｂ型　Ｂ８～９。同ｄ型　B12。IX型　Ｂ５～６。IXｂ型　Ｃ２。XIIIａ型　B11、Ｃ３。XIVC型　C13。同ｄ型　Ｂ１はほぼ完形で口径 13.2 cm、器高 15 cm であり、焼成後の凹穴をもつ。他にＣ６。XVIａ型　Ｂ７・10で後者はΣ状の施文具を用いる。同ｂ型　A14はほぼ完形で口径 16 cm、器高 25 cm で、15は推定口径 20 cm、16は口径 20.8 cm、器高 31 cm であり、いずれも RL 縄文を付す。他にＣ４・５がある。平出３AのC12はIVｂ型である。

浅鉢　IIａ型　A19・Ｃ７。IIIａ型　A20は口径 40.2 cm、器高 15.2 cm で補修孔がある。Ｃ８。IV型　Ｂ２は半完形で口径 43.5 cm、器高 17.5 cm と思われる。

図267―３は深鉢口縁部で突起部下部に円文を貼付し、内外周に角押文を付し、内面にハート形顔面が付される。東側覆土出土であり、貉沢式である。

土製円板（図262）の５は20ｇ、６は16ｇで中期初頭の深鉢胴部片を使用し、覆土出土である。

石器は、打製石斧28、横刃型石器５、磨製石斧１、凹石・磨石４、石鏃６、スクレイパー類３、ドリル５、石棒１、計53個出土している。

本址は新道式でも藤内Ⅰ式に近い住居である。

キ）　第13号住居址（図20・159～161・262、図版13・14・74）

遺構　黒褐色土層中で漆黒土の落ち込みを確認し、縄文後期土器片が散在したが該期遺構は存在せず本址が完全に埋没するまでには長期間を要したことが判明した。同心円的拡張の行われた住居で新旧の間に時間差が多少あった可能性もあり。III層の西部に肩部を持つが、その部分で東西の境界は認め得なかった。

旧住居址　新住に殆んど破壊され、西部壁が残存するだけかと思われ壁高は 59 cm である。主柱は新住に貼床されるか切られている柱穴とすると P_9　28×？―27、P_{10}　22×？―22、P_{11}　45×44―81、P_{12}　35×？―45、P_{13}　21×20―40（以下、深さは下段床面との差）、P_{14}　43×43―38、P_{15}　37×24―36である。P_{13}―P_{14} を入口と考えると主軸は N54°W となる。ほぼ中央に埋甕炉が設けられＢ１の深鉢胴部が埋設されていた。これは新道式深鉢１型で、本址は貉沢式期からの移行期の住居である。

新住居址　東寄りに改築もしくは拡張された住居で、6.42×4.65mの楕円形を呈する。壁は緩傾斜し壁高は北 44 cm と高く、南は 37 cm である。P_5―P_6 を入口部とすると主軸は N55°W となる。主柱穴内に旧住のものより黒いローム粒を含む黒土が充満し、P_1　60×49―71、P_2　48×40―75、P_3　45×41―60、P_4　55×51―65、P_5　45×39―65、P_6　35×35―58がある。補助柱穴は P_{16}　37×25―９、P_{17}　52×41―47（斜めに入り新しいが、木根ではない）P_{18}　24×20―22、P_{19}　33×25―31、P_{20}　24×23―36。貯蔵穴は最終使用時とみる P_7　45×45―64と貼床下で検出された P_8　53×45―47の古いものがある。床面は主柱穴を結ぶ線外が 3～11 cm の段差をもって高いテラス状をなし、その直下が周溝状となるため，中央部が旧住の床面かとも考えたが、テラス部との連続面に硬さは認められず貼床は存在しなかった。内部空間に何んらかの床上施設をもったと考えられるが、内外ともロームのたたきで良好な床面であり、入口部へ向って 24 cm 上昇する。中央には旧住埋甕炉の東に 70×60 cm の焼土面があり、深さ 5 cm 程の地床炉か石囲炉があったと推定され、新住の炉であった可能性がある。P_4 の北床面に石柱が倒れており、立石であった可能性を考え精査し、その下部に径 12 cm の浅い凹穴を検出したが、P_4 に接する深さ 33 cm の小ピットに立てられたと考える。また、これとは対称の位置にある P_{22}　40×35―８からは乳棒状石斧の完形品が、中間にある P_{21}　28×25―23からは凹石が出土し、ともに上部に貼床されていた。覆土中からは中央部床上 32 cm で石柱欠品１点が出土したがこれは廃棄されたものであろう。

遺物　床と生活面出土はA17、B３～４・13～16・19・20・26、C３・６・９・10である。A14は篦畑式、15・18は九兵衛尾根Ⅰ式で、18は半截竹管による連続刺突文列を付し、19～22は同Ⅱ式で、細い単沈線文の16・17は若干古いと思われる。貉沢式にはB６～10があり、10は浅鉢片である。

新道式　深鉢　Ⅱ型　B３。Ⅵａ型　B13・19～20、C１。Ⅸｂ型　C３・７・８。同C型　B24・25。Ⅻ型　B16、C４～６。ｄ型　C１。ⅩⅥd型　B２、C９。平出３A系　Ⅲａ型　B４は口径27cm、C10。残存器高26cmであり、RL縄文を付す。有孔鍔付土器　C13。浅鉢　Ⅱａ型　C12。Ⅲａ型　B５は¼のみで、口径34cm、内面に漆状膜が付着している。Ⅲｂ型　C11。なお、B18は船元Ⅱ式と同一位置で出土している。

土製円板（図262）７は34ｇで新道式、８は26ｇで中期中葉深鉢片を使用し、覆土上層出土である。

石器は、打製石斧22、横刃型石器19、磨製石斧５、凹石・磨石18、石皿１、石鏃２、スクレイパー類１、台石１の計69個が出土している。

本址は出土遺物からみて新道式期に属するとしたい。

ク）　**第14号住居址**（図21・161・162・262、図版15・74）

遺構　東南部は農道にかかり、全体が桑改植で荒れている。農道付替え後完掘した。5.80×4.50mの楕円形を呈し、P_1—P_2を入口とすると主軸はN30°Wである。中央に50cmの方形石囲炉があるが、深さ８cmで石は散乱している。床面は中央へくぼみ、やや荒れているが硬い。主柱穴はP_1　36×32－44、P_2　50×46－44、P_4　38×35－52、P_5　34×30－37、P_9　47×36－29、P_{10}　35×30－35、P_{11}　30×25－53、P_{12}　30×25－59、P_{13}　39×37－45でP_1内20cm下で打石斧が出土したが埋設されたと思われる。貯蔵穴はP_3　58×50－56、P_7　55×46－55で、上面に丸石がのせられていた。補助柱穴はP_8　35×33－18、P_{14}　38×31－29、P_6　20×16－45を考えている。入口部床は傾斜し、壁高は東20cm、西８cm、南20cm、北11cmで壁下に小ピットがあり、**土壙79**に切られる。

遺物　床面出土はA14・16～21で、22～23とB１～２はP_7の下部から検出された。貉沢式　深鉢　Ⅴ型A14は篦状具による角押文風押引文をもち、本型では新しい。新道式　深鉢　Ⅱｄ型　A15は口縁２単位、頸部は４単位である。Ⅳ型　A18・20、B１・２・６。ⅧC型　B５。Ⅷａ型　A23。ⅩⅥa型A22。浅鉢Ⅱｂ型　B８。Ⅲａ型　A16がある。

土製円板　図262—９は31ｇで床面出土である。石器は、打製石斧９、横刃型石器７、磨製石斧１、凹石・磨石４、石鏃２、他１、計24個出土している。

本址も新道式期の住居である。

ケ）　**第15号住居址**（図22・23・162～165、図版15・16・74～77・132）

遺構　ローム直上で輪郭を確認した。4.80×3.90mの楕円形を呈し、改築された住居址で旧住の入口をP_7—P_9とすると主軸はN56°W、新住の入口はP_3—P_{11}とすると同N54°Wとなる。壁高は南東49cmと高く北西は19cmである。西壁下に幅10cm以下、深さ３cmの周溝がある。床は中央が低くなるがほぼ平坦で硬い。中央に埋甕炉F_2（B４）を埋設し、その西に焼土混入の床面下に埋甕の抜かれた痕跡を確認したが、これを旧炉F_1と考えた。旧住の主柱穴はP_1　38×37－64、P_3　34×29－52、P_4　40×32－66、P_7　36×33－53、P_9　38×29－60である。新住のはP_4・P_7を再使用したと考えられ、P_2　40×?－42、P_5　36×25－?、P_8　51×50－55、P_{10}　43×39－40で、P_3とP_8が棟持柱と思われる。貯蔵穴P_6　55×50－62

からは凹石と土器片が、またP_8 51×50−55 内からは拳大の石や土器片が出土した。P_{11} 51×42・10 は浅いが一種の貯蔵穴であろう。

遺物　生活面からはB１・３・８、下層からはA９～10・12、C１、D６が出土したが、井戸尻パターンと考えられ、他の吹上パターンとの複合形態で間に間層がみられる。貉沢式　深鉢　Ⅰf型　A９。Ⅳb型　A11は口縁が約1/8残存するだけであるが、他は完存するもので、口径 24 cm、器高 22.7 cm、胴部には八の字に開く隆帯と蕨状隆帯文を配し、A＋B＋Á＋B́となる。他に本式のC13がある。C５～９は中期初頭の混入である。

貉沢式　深鉢　Ⅴ型　A10は½強残存で口径 30.5 cm　他に、A12・C14～17、D１・３も含められるだろう。新道式　深鉢　Ⅱá型　A13は口径 42 cm、器高 49 cm で口縁は４単位、頸部以下は３単位であり、長石・金雲母を含む。D２も同手法である。ⅦC型　B１は上半⅓を欠くが口径 36 cm、器高 43.5 cm で口縁６単位、胴２単位である。Ⅺ型　B２は口径 20.4 cm、器高 26 cm、赤褐色内至暗褐色を呈し、長石細粒多く含み、隆帯と半肉彫三叉文にそって半截竹管による角押文と結節状沈線文とが、また部分的に三角押文を付す類例ない土器である。ⅩⅣ型　B３・平出３A系　Ⅱb型　D９の口縁部には角押文がある。Ⅲá型　埋甕炉B４は推定口径 34.6 cm で２種の半截竹管を使用し、RL 縄文を地文とする。頸部には紐線文をもつ。他にD８がある。Ⅳa型　B６は口径 30 cm、残存器高 26 cm である。B７、C４も同型。Ⅳb́型　B５は口径 20 cm、残存器高 24.5 cm である。D７は藤内式期であろう。型分類しなかったが、D５は爪形文を付す。

有孔鍔付土器　Ⅰa型　B８は口径 12 cm、器高 10.7 cm で内外面赤色塗彩後に黒漆がかけられており、特に外面に広範囲に残る。Ⅲa型　B９の下部は接合通りの実測であるが、もう少しつぼまる器形と思われるが、部分的に赤色塗彩と漆がほぼ全面に残りもろい。浅鉢　Ⅱa型　C２は口縁最大径 39 cmで外面篦なで、砂粒移動痕顕著であり、他にD10がある。Ⅲa型　C３は¼欠で口縁最大径 42.6 cm、器高 14.1 cm ある。Ⅴ型　C１は口径最大部 35.7×30.6 cm、最大高 12.7 cm の舟形であり、他に後出型と考えられるD11がある。炭化栗２点が遺物取りあげ番号49と56—2の下部から検出された。

石器は、打製石斧１５、横刃型石器５、磨製石斧１、凹石・磨石７、石皿２、スクレイパー類２、ドリル５、ハンマー１の計38個が出土している。

本址は、床と生活面出土遺物からみて貉沢式から新道式への移行期の住居である。

コ）　第16号住居址（図22・165～167・262・268、図版17・78・79・116）

遺構　暗褐色土中でプランを確認した。覆土は炭化物を多く含む黒土である。住居は4.57×3.75mの楕円形を呈し、P_1—P_2 を入口とすると主軸は N23°E である。中央に埋甕炉があり、B２・３が埋設され、周囲床面は 63×43 cm の範囲で入口方向がより焼けていた。床上では特に入口部で柱材・焼土が多くみられ、南から北へ走る炭化材が多かった。P_3 の南東部には黒曜石フレイクの焼けて白色化したものが多く散乱していた。床面はロームであるがやや軟弱である。壁高は東 53 cm、西 33 cm、南 42 cm、北 23 cm である。主柱穴は P_1　27×20−29、P_2　26×20−37、P_3　41×36−29、P_4　33×28−42。補助柱穴は P_5　32×25−18、P_6　42×38−24、P_7　40×36−28。本址は諸磯式期の**土壙179**を切る。

遺物　床・生活面出土の土器群はA16、B４・６、C２と少なく、火災住居ということで一括遺物を期待したが予想外の結果であった。A14、B17のように床面と上層にまたがる遺物もあり、被災後、使用可能土器等を選択後に廃棄されたかとも思われる。勿論、上層には後の廃棄遺物も混在する。

貉沢式　深鉢　IC型　B6。II型　A12は口径29cm、器高35cm、暗褐色で器面に指圧痕を残し、長石・石英粒が顕著で金雲母を含み、もろく口縁は右をAとするとA＋B＋B＋B、胴はA＋B＋Á＋Bの把手3個を欠くのみの完形品である。III型　A15・16・18、B8・9・12・14、a型のA13は口頸部¼を欠くが口径33.5cm、器高36cmですべて4単位施文する。他にC3がある。e型　A14、B10・11・13、C1。VI型　B17は金雲母を多量と長石若干を含む暗赤褐色の比較的小形な深鉢で、口縁下に低い波状隆帯をめぐらし全面に大粒なRL縄文を施す。平出3A系　Ib型　B1は胴部3/4が残り、口径39.6cm、口縁に隆帯文が貼付されるかは不明、RL縄文を付す。IIb型　B2は推定口径27cm、器高30.5cm、RL縄文を付し、他にC7・8がある。IIIa型　C6。IVa型　B3は上下片が炉体に使われていたもので金雲母を多く含む。他にC5・9・10があり、5は暗褐色、長石・石英・金雲母の細粒を含み、細く割った竹を施文具とし、一見篦具による沈線かと見える。浅鉢　IIb型　C11。

新道式　深鉢　Ia型　A17、B16、C2があり、すべて上層出土か一部小片が下層へ混入したもので本址には伴出しない。他に北陸系上山田貝塚第III様式第6型式と思われるC12・13、第III様式類似の下層出土B4がある。また、赤浦遺跡に類例があるC14・15もあるが、B4以外は上層か遺構検出面での出土であり新道期の移入品であろう。

土製品では北壁下床面より出土した土偶下半部がある。図268—2で赤褐色を呈し黒斑があるが長石等の細砂を含み右足で立ち、左足を前にあげた踊る姿勢をとるものと推測される。側・背面には半肉彫三叉文を連続させた波状文と玉抱き三叉文を付し、右脚前部には角押文がみられ本址に伴出する貉沢式期の土偶と考える。左脚付根部には接合のための芯素材痕が残る。また、土製円板の図262—10は30gで平出3A深鉢片を使用し、覆土上層出土である。

石器は、打製石斧14、横刃型石器14、磨製石斧3、凹石・磨石3、石皿1、石鏃5、スクレイパー類1、ドリル4、刃器2、敲打器1の計48個が出土した。

本址は貉沢式期の住居としてよいであろう。

サ)　**第17号住居址**（図24・168～171、図版18・80～82）

遺構　新住のローム上面で輪郭線を確認した。**土壙42**に切られている。5.30×4.55mの卵形のプランで、P_1—P_2を入口と考え、主軸をP_1—P_4に平行でF_3を通る線と考えるとN 4°Wである。床面は硬いロームのたたきで僅かに中央が低い。壁高は東37cm、西25cm、南29cm、北24cmである。中央寄りに27×27cmの方形石囲炉F_3がある。本址は炉址が3個あり、柱穴の配置からは2回の改築拡張があったと推定される。東南方向へ拡張したと思われる。主柱穴はP_1　32×27—55、P_2　19×18—37、P_3　22×21—47、P_4　23×22—50、P_5　29×29—54、P_6　17×15—58の6個である。P_6は旧住居でも使っていると考えたが、別にあったかも知れない。補助柱穴はP_{13}　17×16—18。貯蔵穴P_{11}　50×46—51、P_{12}　30×27—48は袋状で同時使用された可能性がある。

旧住　新住の内周に壁線があったと、柱穴の配置から推察されるが、完全に破壊され規模は不明である。中央北寄りに埋甕炉F_1・F_2が石囲炉のF_3より低いレベルで検出され、埋甕炉の焼土面（1.1×1.05m）がF_3に切られ、F_3の炉石上面は床より4～8cm上で、下面は石の1/2～1/3しかロームに届いていない。旧炉周辺では僅か生活面が残っていたと考える。F_1・F_2は切り合いがなく、F_1の南西側の土器片（A1）を欠いていることや、使用状況から旧炉と考えた。F_2は3個体分（A2～4で、2は貉沢式で拾ったものを使用か？）4片を組合わせており、炉底には径7cm、深さ14cmのピットがある。主柱穴はP_6、P_7　23×21—48、

P_8 24×22—55、P_9 29×26—55 の4本である。新住の深鉢B3が貯蔵穴 P_{10} 42×39—52 の上部にかかってつぶれており、新住期には使われていなかったと思われ、位置からみても旧住のものである。内部からは石柱片が出土した。

遺物　新住　井戸尻パターンと吹上パターンの複合形態である。完形に近い土器は石囲炉周辺に集中し、床面上の土器も本来の床面より 5～10 cm 浮いて出土している。これは生活面の上昇を意味するものであろう。B7は逆位で出土し、15 cm 程埋まってから、B3・5・6・9・11は正位であったものが、埋没過程で上部が散乱したと考えられる。他に床と生活面出土はA8、C15、D5・7がある。

貉沢式　深鉢　IIIa型　A5～8・10・12。同b型　A2。平出3A系　C15。D6は船霊社、頭殿沢遺跡にある型である。浅鉢　A11はIIa型である。これらは旧住遺物であった可能性が強い。

新道式　深鉢　IVa型　B3。同b型　B4・6、C1～2・4～6。VIIb$_2$型　B7は口径 29 cm、器高 34.5 cm で、A+A′のほぼ完形品である。c型　B5は口径 22.5 cm の完形品で、口縁6単位、胴2単位である。VIIIb型　A14。IXa型　C3。IXb′型　A15、C14。XIIIb型　A3。XIVa′型　B8。同d型　B10。XVIa型　C12～13。同b型　B1。平出3A系　IIIb型　A4、C16～18。D1～2。有孔鍔付土器　IIIa型　B9は1/2個体残存で、口径 25 cm、器高 45 cm と推定され、十字の無文部には赤色塗彩され、RL 縄文を付す。

浅鉢　Ia型　B11は口径 45 cm、器高 20.5 cm のほぼ完形である。IIa型　D3。IIIa型　D4。

旧住　旧炉A1は型分類不能であるが、貉沢式大形深鉢胴部か、新道期への移行期のものであろう。

石器は、打製石斧32、横刃型石器14、磨製石斧3、凹石・磨石9、石鏃9、スクレイパー類2、ドリル4、刃器4、石棒？1の計78個が出土している。

出土遺物と住居の形態からみて、新住は新道式期、旧住は貉沢式期のうち、貉沢から新道への移行期の住居址であろう。なお、3号住D5と接合した本址出土土器片は上層出土で、本址と3号住へ分けて廃棄されたと思われる。両址がこの時点で、ほぼ同程度埋没していたことを示すものであろう。

シ）　**第19号住居址**（図25・26・171～175・262、図版19・20・83～85）

遺構　平安時代の**8号住**に切られ、農道下にかかり、道を付替えて完掘した。検出面は暗褐色土中である。調査者は継続的に順次拡張された住居と考えたが、最終的には断続的に3回生活されたものと考える。

新住　5.35×4.50？mの楕円形を呈し、P_9—P_{19} が入口と思われるが、長軸を主軸と考えるとN 23°W である。中央に石囲炉 F_1 があり、床面は凹凸があり中央部は旧住に貼床しているため、やや軟弱である。主柱穴は P_1 42×33—46、P_2 35×32—64、P_5 35×34—41、P_6 45×32—51、P_7 49×47—58 の5本である。入口施設の柱穴を P_3 38×25—29、P_4 43×30—25、P_8 26×22—37、P_9 28×33—18、P_{18} 26×24—30、P_{19} 29×27—32 とみたい。壁高は東 42 cm、南 20 cm、北 26 cm ある。

旧住　新住内側に壁柱穴と思われる小ピット群と周溝がほぼ並び、その外側とは境が明確ではないが、5～9 cm のレベル差があり、それを、本址の床推定線として把えた。規模は4×3.60mの楕円形を呈していたかと思われる。ほぼ中央に埋甕炉 F_2 があり、A11が埋設されていた。主柱穴は P_{10} 42×32—27、P_{11} 40×22—31、P_{12} 40×40—51、P_{13} 20×20—18 と考える。

旧旧住　4.80×4.10mと推定されるプランで、P_{13}—P_{14} と P_{15}—P_{16} の中間点を結ぶと主軸はN 43°W となる。中央に地床炉らしい焼土が 1.02×80 cm の範囲にある。主柱は P_{14} 36×35—27、P_{15} 22×19—35、P_{16} 25×24—35、P_{17} 35×33—23 で、壁柱穴が西側に多数残る。壁高は西 27 cm、南 31 cm、

北 31 cm である。

遺物　旧旧住　貉沢式　深鉢　Ⅲｅ型　A８～10は中層生活面出土である。型分類不能のD21がある。本址は貉沢期の住居である。

旧住　新道式　深鉢　埋甕炉のA11はⅧａ型。

新住　床・生活面出土はA13、Ｂ１・２、Ｃ４・７・９・14、Ｄ２～３・５であり、井戸尻・吹上両パターンの複合である。新道式　深鉢　Ｉ型　Ｄ５。Ⅳａ型　A14。Ⅷb₂ 型　B10は口径 41 cm、器高 57 cm の1/6を欠く大型品である。同ｃ型　Ｂ４。Ⅷａ型　A13、Ｂ５。同ｂ型　Ｂ１～３・６。Ⅸａ型　Ｂ９は口径 25 cm、器高 30 cm で RL 縄文を施す。同ｂ型　Ｂ８は口径 38 cm で、Ｂ７と同一個体で、他にＣ１がある。Ⅹａ型　Ｃ２・３。Ⅻａ型　Ｃ４・５、Ｅ５。ⅩⅢｂ型　Ｅ４、同ｄ型　Ｃ６。ⅩⅣｄ型　C12。平出３A系Ｉａ型　Ｅ１。Ⅱｂ型　Ｄ８。Ⅲｂ型　Ｄ９。Ⅳａ型　Ｃ７～10、Ｅ２～３。有孔鍔付土器　Ⅱｂ型　C14。Ⅲａ型　C15は口径 24.2 cm で口縁内面に一部赤色顔料が付着し、胴部に漆が部分的に残存する1/3個体を図復したものである。浅鉢　Ⅱａ型　Ｅ６・７。Ⅱｂ型　Ｄ１～２。

本址ではアワ状炭化種子塊が５点出土している（図25－１）。Aは P_6 に近接した床上 30 cm で出土した最大の塊（43×32×12 mm）で、タール状に付着した種子が肉眼で判別され、一部を鑑定して頂いたものである。Bは炉から 15 cm 西の床上 15 cm で検出したが 20×15×15 mm の土塊中に少量の炭粉とアワ状炭化種子らしきものが数粒みられるもので確実ではない。Cは P_{12} に近接し床上 20 cm の位置であるがB同様である。Dは炉西側 25 cm のほぼ床面上で検出された 12×12×8 mm のA同様かと思われるものである。Eは P_{12} に近接し床上 7 cm で検出した径 8 mm の小塊でタール状をなす断面にアワ状粒子１個が観察されるが、粉状にして焼かれた食物残片ではないかと思われ、木炭でないことは確実である。

土製円板　図262—12は27ｇで、中期中葉深鉢片を使用し、覆土上層出土である。石器は、打製石斧11、横刃型石器12、磨製石斧３、凹石・磨石11、石皿２、石鏃12、クスレイパー類１、ドリル３、他１、計56個出土している。

旧住は新道式期前半、新住は新道式から藤内式への移行期としたい。

ス）　第20号住居址（図25・175～177・262・267、図版21・86）

遺構　縄文前期の**27号住**に一部貼床し、**土壙1303・1314**を切っていた住居で、同址輪郭線確認作業中に本址の存在に気づいたが既に、その部分を殆んど破壊してしまっていた。覆土は炭粒混入黒土である。4.57×4.00mの楕円形を呈し、地形からみて西側の P_2—P_3 を入口とすると主軸は S86°E である。壁は南はロームであるが北は暗褐色土で、壁高は東 36 cm、西 5 cm、南 15 cm である。床面は南半は硬いが北半は軟弱で、北東に傾斜し全般に根が入り荒れている。ほぼ中央に埋甕炉Ｆがあり、Ａ９が埋設され、90×65 cm の範囲で周囲床面に焼土・炭が検出された。主柱穴は８個あり建て直されている。新住居の主柱穴は P_1 30×20－45、P_2　27×25－27、P_{10}　33×27－24、P_4　28×27－30、旧住居のは P_5　29×25－35、P_6　27×25－42、P_7　31×25－53、P_8　39×31－46 で、補助柱穴は P_3　39×31－11、P_9　18×18－15 である。なお、P_6・P_8 には貼床されており炉断面右端の黒土の落込みは、旧炉址の可能性があるもので側壁が焼けていた。南側には不整形な攪乱部があり、その上部に 65×23 cm の柱状自然石が北に傾いて出土したが、中期の石柱祭祀址の疑いがある。近接する土坑1304も一連のものか。

遺物　床と生活面出土はＡ９～12・15～16、Ｂ２・９・10・15、Ｃ２～４・６～７・９・11である。貉沢式深鉢　ＩＣ型　A21、同ｄ型　Ａ９～12・22～24、Ｂ１～４で器面平滑に篦磨きされる。Ａ９とザラ

ザラのものがある。同e型　A20、同f型　B5。Ⅲ型　B6・8～15であり、A8はa型である。本址に伴出するⅠ型の多出が注目されるが、Ⅲ型の内でB9～12・14はより後出の要素、幅広で粗間隔の押引手法をもつもので混入の疑いをもっている。Ⅰ型とⅢa・b型の本址で共伴関係することは確実と思われる。平出3A系　C1～7は縄文を地文とする。A16とC7は同一個体と思われ頸部まで縄文があるものか。Ⅰb型　A15・16、C3。ⅠC型　C9。Ⅱb型　C2。Ⅲ型　C1・4～6。浅鉢　Ⅱa型　C11・13～15、同á型　C12。九兵衛尾根式　A13・17～19・13は竹管背面による単沈線を施文する。

新道式　深鉢　輪郭確認段階での覆土最上層で若干出土している。図267—5は顔面様把手で南壁上部について出土したものである。この両式は本址に明らかに伴出するものではない。

図267—5は波状をなる深鉢把手部で人頭状の装飾を付している。頭部内面には目を表わす貼付文があり、外面には隆帯に沿って三角押文がみられ新道式である。

土製円板　図262—23は17gで、中期中葉深鉢片を使用し、覆土上層出土である。石器は、打製石斧13、横刃型石器4、磨製石斧4、凹石・磨石5、石皿1、石鏃4、計31個出土している。

以上の出土遺物から、本址は貉沢式でも古い段階に属すると考えたい。

セ）　第21号住居址（図27・28・177～182・262・267・268、図版22・86～89・115・116）

遺構　ローム層上面で輪郭を確認したが**28号住**を切る。最低3回の改築が行われている。柱穴配置で北の2群はほぼ同位置であるが、南の2群は順次拡張されたことを示す。

新住居　4.73×4.03mの楕円形を呈し、P_3　25×17−50、と　P_8　31×30−11　を入口とすると主軸はN2°Wである。壁はほぼ直立し、壁高は東31cm、西22cm、南10cm、北22cmである。床面は若干の凹凸があるが、ほぼ平坦、壁ぎわはやや傾斜し軟弱で、中央部は硬い。中央やや北寄りに埋甕炉があり、C7を埋没し周辺70×45cmの範囲に焼土があり、床面も熱変質している。図示されていないが、炉北側に径20cm、深さ10cmの掘り方があり旧炉の可能性がある。28号住と重複する南東部は柱穴が多数あり正確な組み合わせができないが、主柱穴はP_3 25×17−50、P_8　31×30−11、P_9　26×25−59、P_{16}　32×26−55、P_{17}　25×25−36、P_{19}　26×25−43、P_{13}　26×24−19で、壁柱穴は全周する可能性もあるが検出できたものは径15cm、深さ20cm以下である。

旧住居　2回の改築の可能性がある。前記の旧炉（E1を埋設）を中心に貼床下に検出されたP_1・P_6・P_7・P_{11}・P_{14}・P_{14}・P_{15}・P_{18}を手懸りに配列を考えると新旧関係は判定できないが、P_1　29×22−27、P_{10}　27×21−46、P_{18}　34×30−44、P_{14}　42×28−64とP_5　26×25−10、P_{12}　20×18−20、P_{15}　37×26−35、P_{20}　32×25−14の組み合わせが考えられ、この間に柱の補修をP_4　30×25−48、P_{11}　22×?—63で行っている。P_2・P_6・P_7・P_{22}は28号住のものと考えられる。

遺物　新住居址の下層の完形に近い遺物が多量に出土した面を最終時生活面とすると炉址を中心に出土し、井戸尻パターンを示すものは、B1・6・7・12、C1・3・4・7、D2・7・10、F8・9・17でC1は4の、C6は2の、D4は1の下部に検出された。

貉沢式　深鉢　Ⅲb型　B1は口径35cm、器高46.5cmで器面はザラザラであり、下層に横転して出土し本址に確実に伴う。同e型　A17は口径22.5cmで第2文様帯の一区画のみ隆帯にそって押引を完了し、3区画は押引始めて中止している。第3文様帯は1区画のみ無文である。他にB2、E3がある。浅鉢　Ⅱa型　B3は口縁部½周残であり、内外篦磨きする。これらは28号住からの混入の可能性がある。B4は1/7残で金雲母と篦削り砂粒移動痕顕著であり、底径はもっと小さいかも知れない。

新道式　深鉢　Ⅰa型　E1・2。2は幅6mmと4mmの竹管でひねり紐貼付文をもち、第2文様帯の内部は器面に対して右45°位の角度で刺突し削り取る手法の角押文である。同b型　C4は3/5個体残存で幅8mmと4mmの角押文を粗間隔に深く施文し、補修孔を持つ。ⅡC型　C6は口径23.5cm、器高28cmで沈線連続爪形文と先端丸みを持つ三角押文を併用し、口縁A＋B＋Á＋B́　胴A＋Áで内外面研磨し橙色を呈する。同d型　B5は口縁最大径22.7cm、B14は図示部のみ残存である。Ⅱe型　C1は半完形で推定口径32cm、裏側の把手は上図で頸部6単位である。Ⅲa型　B9は完形で口径24cm、器高34.5cm、口縁5単位、胴6単位である。同b型　C2は完形で口径33.6cm、器高40cmで第2文様帯は上下交互に27の半肉彫三角印刻文をもつ。Ⅳ型　E4・48。Ⅶb₁型　底部の一部を欠くが口径29.5cm、器高31.5cmで、第1文様帯A＋Á、以下は6単位である。Ⅷa型　B8は2/5周残存である。同C型のB6は先端やや丸みをおびた三角押文である。Ⅸ型　E6・7。Xb型　F5、C5は竹管背面をすべて使う。XIIb型　F6　XIIIa型　D1はほぼ完形で口径37cm、器高45cmの全面RL縄文を施文する。XIVa型　F4。XV型　D3は花崗岩の砂粒を含み、暗褐色で頸部に紐線をもつ。

平出3A系　Ⅰb型　F9、Ⅱb型　F8。Ⅲa型　C7は口径24cm、現存器高17cmである。同b型　F12。Ⅲ型　F7～12。Ⅳa型　D4。

有孔鍔付土器　Ⅲ型　D10は1/5周残存である。他に赤色塗彩のF16・17がある。浅鉢　貉沢式　Ⅱa型　D7は2/5残存。他にF13はb型である。新道式　Ⅰa型　D6は¼残存で篦磨きされる。Ⅱa型　D8・9。他に分類不能のD5がある。

土偶2個体分の破片がある。図267—8と268—3は同一個体の可能性が強く、出土状況は図28中62で頭部、45で腰部、42で右足、82で左足が出土し、下層で出土した頭部脇には同レベルで人頭よりやや大きい安山岩2個があった。住居がある程度埋没した段階で北側から投入され散乱したものと思われる。暗褐色、長石を主とする雲母等の砂粒を含み、特に腰部はもろくなっている。頭部は円板を接合し中空となるもので左右幅6.8cm、現存部高5.7cmである。正中線・側面文様は角押文で施文し、へそは刺突する。両足は接合し左右幅10.8cmで芯材の貫通孔がある。全体に丁寧な篦磨きを加え、僅かに出尻となる。同一層位の他の土器からみて新道式期の所産と考える。図268—4は西側覆土上層出土で、灰褐色を呈し長石粒を多少含み芯材の小孔をもつ。篦描き沈線文を有するが縄文中期中葉であろう。土製円板　図262—14は19g、15は26gで、ともに覆土上層出土で中期中葉深鉢胴部片を用いている。

石器は、打製石斧23、横刃型石器10、凹石・磨石2、石鏃8、スクレイパー類2、ドリル2、計47個出土している。土器C4の下部、炉の西側床面で琥珀玉1を得ている。長さ15mm、厚さ8mmの柿の実を厚くした形状をしていたかと思われるが剝落部があり詳細は不明である。

本址は、貉沢式から新道式への移行期の住居址である。

ソ）　**第22号住居址**（同27・29・140～142・183～187・262、図版23・89～91）

遺構　尾根斜面下部にあり70～80cmの黒土層下で検出された。貉沢式期の**26号住**を切り、**30・31号住**に貼床するため、重複部での輪郭線の確認は複雑であった。プランは3.75×3.40mの楕円形を呈し、入口部と推定される北西部柱穴が一部不明確なためP_2—P_3の中間点とF_1を結ぶとN42°Eが主軸方向となる。残存する壁は西部では漸移層にあるが、東部はローム層を掘り込んでいる。壁高は東15cm、南16cm、北12cmである。床面の東部は，ロームで硬く良好であるが，貼床部は前者より4cm程沈下している。北西部にたたきの硬い床面が存在し、焼土F_2が認められたが、他は軟弱な床面である。やや北東よりに埋

甕炉 F_1 があり F_8 の深鉢が埋設されていた。炉内には焼土粒が多少認められる程度であった。貼床部での柱穴の検出は非常に困難であったが、P_1 22×23—29、P_2 26×23—43、P_3 26×24—21、P_4 25×20—61、P_5 20×19—24の5個を確認した。なお、P_4 内には F_2 の焼土部を掘り込んだためと思われる若干の焼土が混入していた。東壁下には壁柱穴かと思われる小ピットがある。調査終了後 F_2 が別住居のものである可能性を考え精査したが、特別な遺構らしきものは存在しなかった。

遺物　床面より多少浮いた生活面出土、井戸尻パターンの状況を示すものはD2・4、E6、F2・3・8があり、他は吹上パターンの後に廃棄されたものと考えたい。覆土中及び貼床部で下部住居遺物が多出し、部分的に掘り下げすぎた箇所があったものと思われる。図14—1で本住居址遺物取り上げ番号107と接合した30号住遺物の内、B7以外のC11・16、H5は本址 F_2 を中心として住居か、何らかの生活空間のあった可能性を否定することは出来ない。その意味で図140（A）～142（C）までを図示した。

九兵衛尾根Ⅰ式　深鉢　Ⅰb型　A18。他にⅠ型かと思われるA19・20があり、22は口縁下部が格子状平行沈線文帯となり篦畑式の手法を残すものはd型であろう。Ⅱb型　B4・5。Ⅲ型　A21・23・24、B3・B8は器形を異にするが、b′型と同手法のもの。Ⅴb′型　A7。Ⅸ型　B1・2。XIII型　B30。XIV C型　B29・31・32。XV型　A8とB19は同一個体で、他にA17、B21・22があり、B20はd型である。XVIa′型　B28は石英・長石粒を少量含むが、赤褐色でやや幅広の半隆起線文を付す。型の分類不能のA25、B9～16・18は九兵衛Ⅰ式に属する。B33は九兵衛尾根Ⅱ式に近いものかと思われるが、類例の増加を待ちたい。単沈線による施文である。浅鉢　Ⅰa型　C1・2、同b型　C3～5、同b′型　B9は口縁に繊細な繩文を付す。Ⅱd型　F1は九兵衛Ⅱ式である。ミニチュア　B24は渦文状隆帯に竹管先端による刺突を加え、口縁に縦半隆起線文を付すもので、B27とともに篦畑式、B25・26は九兵衛尾根Ⅰ式、34は同Ⅱ式と思われる。本址床・生活面で出土したものは、D2・4、E6、F2・3・8である。

貉沢式　深鉢　Ⅰf型　D1。Ⅲa型　D4は胴部⅔周残存し口径 45 cm で4単位の文様を施文する。同d型　D2は¼周残存で口径 22.5 cm と推定される。同e型　D3は残存部文様は上から4・3・2単位となる。以上。貉沢式としたものは角押文施文具幅 5 mm 以下である。

新道式　深鉢　Ⅰa型　D6。Ⅱa型　D7は口縁最大径 40.6 cm、器高 41 cm の完形品で口縁正面文様と裏面区画が若干異なるが、頸部を除き4単位に区画する。角押文の幅は 3 mm と 5 mm である。D8は½個体残存である。同a′型　E2・3・5があるが5の胴部は2単位の懸垂文を付すもので出土状況からは3より若干下層で出土し先行する可能性がある。同b型　E6は口縁に交互刺文の残影とみられる波状文や、通常の三角押文に用いるものより鋭角な施文具2種で隆帯にそう沈線に直交して連続刺突するなど特異な手法をとり、口径 19.4 cm、器高 21.6 cm である。E7・8、G19は同一個体かと思われるほど胎土等酷似するが、文様帯が異なり同時に製作された可能性が強い。VIIC型　E10。VIIIC型　E9。XIb型　E12、H18。XIIIa型　E13は口径 27 cm と推定されるが隆起線と篦描沈線によって施文され、暗褐色で砂粒を多く含む。同b′型　A15・16。

平出3A系Ⅱb型　H25は本址に伴出しない可能性が強く、26号住遺物の混入であろう。ⅡC型　H24はⅡb型の斜格子を平行沈線で描くもので本遺跡では数少ない。Ⅲb型　F3は½周残存するもので暗褐色を呈し長石・石英と特に金雲母が多く中期初頭的であり、胴部の平行沈線も密で、異質な点があるが含めておきたい。他にF4がある。Ⅳb型　F5・6・8があり、6は口縁部突起が5単位と思われる。F7はⅣ型。

有孔鍔付土器　Ⅲb型　F14は器面の風化激しいものである。新道式　浅鉢　F9～12。Ⅱa型　F10

～12で11は¼周から推定復元したものである。他にH20がある。同b型　D5。Ⅲa型　H21。同b型　H19。型分類しないH22・23がある。

北陸系土器　F2は実測部ほぼ完存し、口径16.2cm、現高20cmの蓮華状文・結節状沈線文・半隆起線文を施し、外面は赤褐色、内面は黒褐色を呈し下半部に炭化物が付着するもので上山田古式である。他にA11・13・H17が該当しよう。

拓影図については型分類をしないが施文具のみ記す。連続爪形文＋三角押文　G1～12で5は内外赤色塗彩され、9は隆帯に爪形文を付す土壙839と同型で、12は小羽根状三角押文である。連続爪形文のみがF13。角押文＋三角押文がF16で、F14はそれに円形刺突文が加わる。三角押文のみがF17～21とH1～11で5～7は底部片である。H9～11は小羽根状三角押文を施文する。土製円板　図262—16は23gで九兵衛尾根II式深鉢片、17は11gで中期中葉深鉢片を用い、ともに覆土出土である。

石器は、打製石斧30、横刃型石器11、磨製石斧3、凹石・磨石15、石皿1、石鏃11、スクレイパー類8、ドリル6の計85個と出土量は多い。

床・生活面出土遺物と埋甕炉であることからみて、本址は貉沢から新道式への移行期である。

タ）　第23号住居址（図30・188～189・262、図版24・92）

遺構　西への傾斜面にあるため輪郭線は東側がローム層直上、西側が暗褐色土中で確認した。山林であり地表から約80cmの腐植土・黒土に覆われていたため保存状態は良好であった。3.40×2.97mの楕円形を呈し、地形と住居の形態からはP_4—P_5が入口部であった可能性が強く、主軸方向はS35°Eとなる。壁高は東46cm、西12cm、南6cm、北25cmである。壁下には壁柱穴となる小ピットが並び径、深さとも10～22cmである。中央東寄りに埋甕炉があり、埋設された深鉢胴部A2の内部には焼土混入黒土が充満していた。周辺床面にはさして焼土はみられないが、硬く良好であった。外周部床面は東側がローム、西側が漸移層・暗褐色土となり、やや軟弱で全面に根が入っている。主柱は5本の構造であったかと推定され、一部建てかえていると思われる。P_1　23×19—33、P_2　28×27—31、P_3　32×29—49、P_4　35×22—東13・西21、P_5　28×27—23、P_6　22×17—48。東壁から30cm離れたP_3の上部に石柱として使用されたと思われる角柱状安山岩（51）が傾いて出土した（図版24）。基部で床面より25cmが高い位置で、本址上層の新道期にこの場所に建てられたか、斜面上方にあったものが落ち込んだかと思われる。多分前者であった可能性が強く、近接して出土した新道式深鉢A5も祭祀に関連した遺物であったかも知れない。

遺物　床面か生活面遺物は少なく、A2、B8がある。上層の遺物との間には殆んど遺物を含まない黒褐色土の間層があり、ある程度埋没が進んだ時点で廃棄されたものと思われる。最上層のグリット出土はA9・10・12・13、B3・9・11～13で新道式が多い。下層～中層は貉沢式が殆んどである。

九兵衛尾根II式　深鉢　Ia型　A11。同a′型　A9。同b′型　A12。IIb型　A10。浅鉢　IIC型　B18。

貉沢式　深鉢　IC型　A1は口径29cmで繊細なRL縄文を地文とし、金雲母多く長石等も含むもので、九兵衛尾根II式からの移行期型と思われる。Ⅲb型　A2は上部径24cm、現高22cmで完存し、篦磨きされる。上より3・4単位で、下半部は右の隆帯文が1、左のが2単位付される。角押文は粗間隔で沈線のみの部分もある。Ⅲa型　A3　½残で口径25.5cm、器高28cm程度と思われる。4単位と推定され、鋸歯文は第2文様帯では角押文で、第3文様帯では欠く1区画がある。型分類しないが、他にB1～8がある。角押文はすべて5mm以下である。平出3A系　Ⅲb型　B15・16。以上が本址に伴出する

遺物で典型的な貉沢式である。

新道式　深鉢　IIa′型　A5は底を欠くが実測部はほぼ完存で、口縁2単位の境はY状隆帯文、第2文様帯は上下組の14単位で、第4文様帯は6単位である。VIa′型A4。XIVa型　B13。型分類しないB9～11、14がある。平出3A系　IIIa型　A7は花崗岩風化の大粒を含む。V型　A6は雲母他を含む¼個体残で、口縁側面は半截竹管で三角形を描く。浅鉢　IIIa　B17。VIb型　A8は1/8周からの図復である。

土製円板（図262）　18は9gで中期初頭深鉢片を、19は16gで中期中葉同片の上端のみ磨くもので、覆土出土である。

石器は、打製石斧20、横刃型石器3、磨製石斧1、凹石・磨石9、石皿1、石鏃8、スクレイパー類4、ドリル2、石棒1、敲打器1、不明1の計51個出土している。

本址は典型的な貉沢式期の住居である。

チ）　第24号住居址（図30・190・191・262、図版25・92・130・131）

遺構　山林下部にあったため保存状態は良い。輪郭線はローム上面で確認しているが、**土壙1305**を切る。プランは7.68×6.50mの楕円形を呈し、新道期のでは本遺跡最大である。南東部の P_{15}—P_{25} が入口と思われ、主軸方向はN 17°W となる。壁はロームで東49cm、西19cm、南37cm、北35cmである。壁下には壁柱穴と思われる小ピットが並ぶが、径10～25cmで深さは10cm内外が多く、深いもので20cmである。中央より北西の奥壁へやや寄って方形石囲炉（42×50—12cm）があり、奥側の床面が95×80cmの範囲で焼けていた。床面は中央の炉に向って傾斜し、凹凸があり荒れている。主柱穴を結ぶように周溝が検出され、深さは3～10cmあるが上面に貼床された形跡はなく、周溝底面に小ピットを検出することもできなかった。この周溝内外では床面のレベル差があり、P_{14} と P_{15} 間が7cmと最高で、他は2cm程度外周が高くなっている。内外床面の硬度差は感じられないが根太を並べ外周へ床施設をしたと考えられないだろうか。柱穴は P_1　60×63—29、$P_{28.29}$　43×40—28と P_3　65×63—69、P_4　60×48—54と P_9　65×50—80、P_{10}　55×48—23と P_{12}　56×38—71、P_{13}　46×44—87、P_{14}　41×36—45と P_{15}　52×44—66、P_{21}　67×38—61と P_{26}　32×31—34、P_{27}　48×48—91と P_{22}　35×39—20、P_{23}　60×45—18、P_{24}　35×30—35と P_{16}　27×21—27、P_{18}　45×38—17、P_{19}　35×33—31、P_{20}　27×?—32が群をなし、2～3回の柱の建て替えが行われたと思われる。他に主柱穴は P_5　65×55—69、P_6　65×40—56、P_7　80×70—80、P_8　44×36—17、P_{25}　72×39—49がある。貯蔵穴と思われる P_2　49×43—17内からはA1の深鉢が下位で置かれた状況で出土したが P_{30} との関係を考えると埋納されたのかも知れない。P_{11}　47×46—47はやや袋状をなし平石が落ち込んでおり、明らかに貯蔵穴であろう。ほぼ主軸線上の入口部床面には、石棒片が出土し P_{24} の上部に接合した一部があった。P_{30} では乳棒状石斧21がロームにつきささるように出土し、埋納されたかと思われる。

遺物　床と生活面出土はA1～5・8・14～16・19、B2で、他は中・上層出土である。A4は諸磯B式、A5・6は九兵衛尾根I式であり、B3は平出3A系、B7は浅鉢だが貉沢式で本址には伴わない。

新道式　深鉢　Ia型　A18はひねり紐を区画部に貼付する。VIIc型　A1は1/4周を欠くが第1・4文様帯は4単位のA+B+A′+B′となり、幅4mmの竹管による角押文と三角押文を付す。口縁最大径35cm弱、現高35cmである。VIIIb型　A2は幅広の連続爪形文と三角押文を付す。IXa型　A8・12、同b型　A13。XIIa型　B2、同b型　A3は実測部完存するが底径10cm、現高11cmでVIIc型と類似する隆帯文をはめこんだ半隆起線による区画に沿って爪形刺突文を付す2単位の文様で、他にA2は三角押

文を加える。型分類しないものにつき施文具のみ記すと三角押文のみA８～12、小羽根状三角押文＋篦描沈線がA13、連続爪形文十三角押文がA14～17、連続爪形十角押文A19。なお、Ｂ１はⅦｂ型である。平出３Ａ系　Ⅲ型　Ｂ４・５。Ⅵ型　Ｂ６は藤内期と思われる。

浅鉢　Ⅱａ型　Ｂ７～９。有孔鍔付土器　Ⅲａ型　B10は口縁部に漆が塗られている。

本址ではアワ状炭化物子塊２点が P_7 に近接してⅠ層から出土している（図30—１）。Aは床上 25 cm で出土した径 15 mm ほどの纏粉質が炭化タール状となったもので、粒状のものは確認できないが、それを粉砕した鱗片状のものかと思われるものが多い。Bは床面上で検出され、16×13×23 mm のやや円柱に近い形状のもので、断面部にはアワ状粒子とその砕片が無数に見られる。これは18号住例、19号住出土Aと全く同様のものである。

土製円板（図262—20）は16ｇで中期中葉深鉢片を使用し、覆土出土である。

石器は、打製石斧13、横刃型石器４、磨製石斧４、凹石・磨石14、石鏃20、スクレイパー類13、ドリル６、刃器４、石棒３の計81個が出土した。

本址は出土遺物から新道式期の住居址である。

ツ）　**第25号住居址**（図31・191～193、図版26・93・130）

遺構　漸移層の褐色土層で輪郭を確認している。本址の北端は貉沢期の**38号住**を切り、その上部に貼床している。中心部床面を確認してから、それを追って新住居址の壁を決めた。同心円的拡張が行われている。

新住居址　5.85×5.25mの楕円形を呈し、他の柱穴より浅く長軸に非対称の位置にある P_2　30×29—29を入口用柱穴と考えるが主軸を長軸にとると N 5°W となる。壁は東 23 cm、西 16 cm、南 25 cm、北 20 cm の高さとなり、壁下には周溝が断続的にあるが、幅広のところで 20 cm、深さは最高 9 cm、多くの部分は 5 cm 程度でめぐる。壁柱穴は径 8～20 cm、深さ 5～30 cm である。床面は旧住居の周溝に接する部分で外側が 10 cm 高くなる。土層の観察では、この周溝内はローム ブロック混入褐色土となり、拡張時に埋め戻し、平坦にされたと考える。中央北寄りに６個の石で囲む炉（50×43—11 cm）があり、その周囲 95×80 cm の範囲が数 cm の厚さで焼土がみられた。柱穴は６個で P_1　42×38—53、P_3　41×38—60、P_4　34×31—75、P_5　40×32—46、P_6　34×28—73、P_7　46×33—62 である。P_1・P_5・P_6 には根石がつめられていた。

旧住居址　4.80×3.30mの床面範囲で楕円形のプランであったと思われる。柱穴は５個で　P_8　26×19—34、P_9　23×18—35、P_{10}　28×20—45、P_{11}　16×13—35、P_{12}　20×16—38、壁柱穴は径 7 cm 内外が多く、最高 20 cm、深さは 6～33 cm である。炉は共通であったと思われ旧炉は確認できなかった。

遺物　旧住居址はＢ５・Ｃ５と土製円板のみであり、新道式期である。新住居址　黒浜式Ｂ６。九兵衛尾根Ⅰ式　深鉢Ⅸａ型　A11。以上は本址に伴出しない。生活面と床面出土はＢ５・18、Ｃ１・５・６・９・11である。

新道式　深鉢　Ⅳａ型　A12、同ｂ型　A13は口縁と頸部が角押文、第三文様帯は三角押文で口径 16.5 cm、現高 12 cm である。Ⅻｂ型　Ｂ８・９。ⅩⅢａ型　A16。ⅩⅤ型　A17・18は同一個体で RL 縄文を全面に付す。他に型分類しないA14・15、Ｂ５・11～18、Ｃ１～６がある。平出３Ａ系　Ⅱｂ型　C11。Ⅳａ型　C10・12～13。

有孔鍔付土器　Ⅰｂ型　Ｂ５は口径９cm、現高７cm、口縁に赤色顔料を塗る。Ⅲａ型　C15。浅鉢

IIa型　C14。IIIc型　A19、B1。VIb型　B2。他に3がある。

アワ状炭化種子塊4点が出土しているが小指先大で、タール状に粒子が炭化ゆ着している。1はP_1の西側の床上16cm、2は西壁寄りの同14cm、3はP_2寄りのほぼ床面、4はP_3寄りの床面で検出した（図31—1）。

石器は、打製石斧20、横刃型石器6、磨製石斧2、凹石・磨石4、石鏃3、クスレイパー類2、粗大刃器1、台石1の計39個が出土した。

テ）　**第26号住居址**（図27・29・193～195・263、図版23・94）

遺構　輪郭線は東部はローム直上、西部は漸移層で把握した。**土壙1306**と貉沢式から新道式への移行期の**26号住**に切られる。？×3.87mの楕円形を呈したプランで、入口があったと思われる西部が破壊されているため、仮定される長軸方向を主軸とするとN 48°Eである。壁高は南東が最高で57cm、西は0である。床面は東がローム、西が漸移層中にあり、凹凸はないが中央の炉に向って僅かに傾斜し、硬く良好である。中央東寄りに埋甕炉があり、A20の深鉢胴部が埋設され上部に焼土があり、内部には炭が残る。炉周囲の61×53cmの範囲が2～3cmの厚さで焼土化している。主柱穴はP_1　24×20—32、P_2　16×15—42、P_3　24×23—34、P_4　24×22—33で、プランに対し東に片寄る。壁柱穴が壁下にまばらにある。

遺物　生活面出土はA18の一部とB4・13～14があり、B9・11・18は記録では本址遺物とされているが、測量の誤差で22号住の範囲内へ図示されてしまったと思われる。他は間層をおいて上層に廃棄された吹上パターンに含まれるものである。

九兵衛尾根I式　XIIIb型　A16は口唇に爪形文、その直下の沈線にそって列点文、下部に交互刺突文、V字状把手を付すもので30号住遺物と思われる。B9は細い棒か竹による沈線文、角押文、爪形列点文、結節状沈線文を付し、暗赤褐色で長石・石英・金雲母を含む。10は黒褐色で金雲母を多量に含む。

貉沢式　深鉢　Ic型　C10は繊細なRL縄文を地文とする。同f′型　A18は典型的な貉沢式の胎土である。IIIa型　A19は口径19cm、器高13.5cmの1/2個体残であり、下半部の懸垂文は紐線文である。同b型　B1は口径49cm、現高47.5cmの赤褐色内至暗褐色を呈し、長石細粒を多く含む上から4・4・2単位の文様構成となるもので、胴部に人体文を付す。右下の付図は右把手部の部分図である。C型　B2は推定復元である。同e型　A17は口径23cm、現高12cmと推定される。IVa型　B3は接合した1/5個体と破片からの図上復元で口径26cm、器高19.5cmである。B4は1/3周残で、幅3mm弱の角押文であり、口径20cm、器高12.6cmである。他に埋甕炉に使用されたA20は5/6周残存し、上部径18cm、現高13cmであり、角押文幅4mmのIII型である。

型分類しないがB11・12は角押文と前者が篦切沈線、後者の竹管による沈線文を併用するもので、A21～23、B5・6は無文の底部、B13～20、C1～7・9・13は角押文を付すものである。C11は隆帯文のみである。以上を角押文の幅からみると2種の原体を用いるもので、幅広の方が約6mmのがA18、B1・2・14、C7で、幅の狭い方は4mm以下である。

平出3A系　C14・15はIかIII型の口縁部、16はIIIa型、17・18はII・III型である。C18は22号住F4と同一個体である。北陸系　C21は北陸からの移入品で本址に共伴するが22は新道式期にその影響を受けたもので、その出土地点で共伴したものはB2・8で前記した幅広角押文のB2が含まれることは検討を要する。

台付土器　B7は赤褐色・全面丁寧な磨きを加えた長石を特に雲母を多く含むものであり、上層から出

土したため本址のものかどうか疑わしい。底径 7.2 cm、現高 5 cm である。浅鉢　貉沢式Ⅰ型　C19。Ⅱa型　C20。両者とも体部篦削りによる砂粒移動痕顕著なものである。新道式Ⅴ型　B 8 は1/3個体から図上復元したもので内面は磨き、赤褐色、外面は削り暗褐色のもので舟底形となり22号住と関連ある遺物かと思われる。

土製円板（図263—1）は平出３Ａ系深鉢片を用い26ｇで、覆土上層出土である。石器は、打製石斧14、横刃型石器６、磨製石斧３、凹石・磨石４、石鏃２、刃器２の計31個が出土している。

本址は床面遺物からみて典型的な貉沢式期の住居である。

ト）**第35号住居址**（図31・196、図版31・95）

遺構　漸移層中にあった住居で、表土を重機で剝いだ際に気づくのが遅れ上部を破壊してしまった。南北は3.80mの卵形のプランと思われる。P_1 と P_5 の間に入口を考えると主軸は N72°W となり、広場に向いて入口をもっていたと思われる。東側の残存壁高は 17 cm で黒土中にある。西寄りに方形石囲炉（26×23—13）があり、炉石上端は床面より 3～5 cm 高く、内部及び周辺から平出３Ａ系深鉢片が出土した。床面は漸移層にあり、ローム粒を混入した黒褐色土の硬い床で特に炉周辺は平坦で良好であるが壁ぞいは軟弱である。主柱穴は P_1　30×25—61、P_2　34×28—61、P_3　30×28—59、P_5　31×26—55の４個で、補助柱穴と考える P_6　31×28—26があり、ローム層まで掘り込まれている。P_4　39×33—43は袋状をなし貯蔵穴と思われる。

遺物　１～４は床面から数 cm 浮くだけで、本址に確実に伴出したと考える。新道式　深鉢　１はⅧａ型で平出３Ａ系の２はⅣａ型である。３は浅鉢底部である。石器は、打製石斧２、横型形石器１、石鏃２、スクレイパー類３、ドリル３、他１、計12個出土している。僅かな遺物で残念であるが、本址は新道期の住居であろう。

ナ）**第36号住居址**（図32・196～199・263、図版32・94・95）

遺構　北部は農道側溝によって破壊されていた。残存部はローム上面で輪郭をつかんでいるが、4.80×4.50m程の楕円形を呈するプランで、地形と炉の位置から P_6 と P_7 の間を入口とすると、主軸は N56°E である。壁は傾斜し東 26 cm、西 31 cm、南東部が最高で 45 cm、北 33 cm である。壁外施設は認められないが、壁下に小ピットが並び、径 10 cm 内外、深さ 8～24 cm で壁柱穴と思われる。中央北寄りに、埋甕炉があり、Ｂ２の平出３Ａ系深鉢が埋設され、その南側に焼土が 2～3 cm の厚さで堆積しており、焚き口であったと思われる。床面はロームで凹凸があるが硬く良好であり、すり鉢状に中央へ傾斜する。東壁寄りには貼床部がみられ P_8～P_{10} が検出された。主柱穴は P_1　45×39—22、P_2　30×？—23、P_3　28×25—54、P_4　49×36—64が検出されているが、破壊された部分に更に１個はあったものと思われる。P_5　76×64—73は大形の袋状をなすもので、貯蔵穴と思われ凹石・土器片が出土している。補助柱穴は P_6　27×25—37、P_7　18×15—31、P_8　27×24—30、P_9　38×41—21、P_{10}　28×25—20である。土坑1310は本址東壁を切り、凹石・打石斧が出土し、床面を切る土坑1311は平出３Ａ系等の土器片が出土し本址より新しい時期のものと考える。

遺物　床面遺物は僅少で、Ｂ２・Ｃ７のみ。Ｐ５ 内出土が一部分のものを含めてＡ６・B10・14・25・26である。床がすり鉢状をなすためか、中央部での最終時生活面が相当上昇しやすいことを考え、下層出土のものも含めるとＡ６・８・10、Ｂ３、Ｃ４・11・15が本址に伴出する確度の高いものである。

九兵衛尾根Ⅰ式　B４は半隆起線にそって三角印刻をし、細線文上に楔形文を施す。５は浅鉢、７・８は深鉢XIV型で暗赤褐色、長石・石英細粒と多量の金雲母を含む。他にA５がある。同Ⅱ式　B６は浅鉢である。

貉沢式　深鉢Ⅰf′型　C11。Ⅲc型　A11・13。同e型　A７～10。Ⅳc型　A６は口径 33 cm、器高 24.8 cm で全面篦磨きされる例で、外面上半部には炭化物付着し、下半は赤褐色、底は二次加熱による剝落がみられる。鍋として使ったと思われる。文様は２単位、コウモリが翼をひろげたように見える。

分類しないがB９～27、C１～13の角押文はすべて幅 6 mm 以下で典型的な貉沢式である。C15は沈線文のみで、A11も一部沈線だけである。C14は新道式への移行期の特徴である幅 7 mm をこす連続爪形文的な角押文であり、むしろ、新道式深鉢Ⅰa型としたいものである。浅鉢Ⅱa型　D９・10、同a′型　D 11・12。新道式　B１、C16～19。浅鉢　D13・14。

平出３A系　Ⅱc型　B３は1/2周残で口径 37 cm、器高 41 cm で、花崗岩風化砂を多量に含む。Ⅲb型B２は実測部完存で口径 33.6 cm、現高 21.3 cm。D４・７も本型。D１～３・５・６・８は分類不能。

土製円板（図263）４は19ｇで九兵衛尾根Ⅱ式深鉢片を、５は16ｇで中期中葉深鉢片を使用し、それぞれ、覆土と生活面出土である。

石器は、打製石斧17、横刃型石器10、磨製石斧３、凹石・磨石５、石皿２、石鏃７、スクレイパー類４、ドリル４、他１の計53個が出土した。

埋甕炉のB２は貉沢式から新道式への移行期型である。貉沢式の小破片が多いが、本址が切っている40号住遺物の流入の危険を考慮し、貉沢式から新道式への移行期に属すると考えたい。

ニ）第38号住居址（図32・199～201・263、図版34・96）

遺構　新道式期の**14号住**と**25号住**に上部を切られ貼床されている。西側は農道工事で攪乱され、**土壙79**との切り合いは正確には把握できなかったが、本址覆土より暗色の黒土が充満し、縄文中期初頭の土器片が落ち込んでおり古い土壙と判断した。本址の輪郭線は漸移層ないしローム層上面で把握した。覆土は炭粉混入暗褐色土である。プランは5.03×4.56mの楕円形を呈し、P_1 と P_2 の間を入口部と考えると主軸はN8°E である。壁下部は緩やかに傾斜し残存壁高東西が 32 cm、南 13 cm、北9 cm である。壁下には径 10 cm 内外、深さ 4～17 cm の小ピットがやや不規則に並ぶが、壁柱穴と考えたものである。床面は西へ僅か傾斜するがロームで硬い。中央北寄りに埋甕炉が設けられ、周囲 63×47 cm の範囲に焼土がみられ、深さ 4 cm ほどくぼむ。炉体に使用された土器は３個体で、A19が最初の、A17の深鉢底部小片と18が後の炉として埋設されたかとも考えたが、別の掘り方線は断面観察では確認されず、18が半周分であるため手近かな破片で補強したと思われる。主柱は基本的には４本であったと思われ、P_1　31×26—39、P_4　25×22—48、P_5　43×32—67、P_6　20×18—37の柱穴で、入口施設の補助柱穴が P_2　26×26—33、P_3　29×24—31と考える。P_7　22×20—50は P_6 の補強のためか建て替えのために掘られたものであろう。

遺物　前記の埋甕炉以外の床面出土は微小片以外にはない。B10が生活面と思われる下層出土であるが、出土地点番号を付したものは中層出土である。A15は上層である。B１～６は本址に伴わない。九兵衛尾根Ⅰ式はB１～４で、２は半截管による平行沈線・半隆起線を付し、頸部はXIV型と同様の文様となり、頭殿沢遺跡に類例をみるものでIXc′型とする。B５・６は同Ⅱ式で縄文を地文とする。

貉沢式　深鉢　Ⅰf′型　B17、A16は口径 45.5 cm、底径 23.5 cm、器高 45 cm で７割残存する。Ⅱa型　A18は口径 32 cm と推定するもので胴上部径 26 cm、現高 15 cm、褐色で砂粒を多く含む。口縁は隆

帯に沿い沈線と結節状沈線文を施す。Ⅲａ型　B16・18、同ｅ型　B20。Ⅳａ型　A15。型分類しないB7・10～15・19、C1がある。Ⅴ型　C8は大粒な花崗岩風化砂・金雲母を含み、浅い半隆起線と結節状押引文、RL縄文を付し、平出3Aの胎土・色調と類似する。

平出3A系　IIb型　A19は1/8周の図上復元で、20は1/3周残で口径 29 cm、器高 28.5 cm である。分類できないC2～7・10がある。浅鉢　IIa′型　B8は内面に沈線、口唇に刺突文、口端と外面に角押文・三叉文をもつ。B9は内面に角押文を付す。貉沢式の胎土・色調である。同b型　C9は外面体部篦削りし、砂粒移動痕が目立ち、暗赤褐色で金雲母を多く含み、中期初頭の浅鉢製作技法を残すものである。なお、深鉢B2・7もC9と色調・胎土が同様である。

土製円板（図263）6は14ｇ、7は17ｇで中期中葉深鉢片を使用し、ともに覆土出土である。

石器は、打製石斧18、横刃型石器5、磨製石斧2、凹石・磨石7、石鏃4、スクレイパー類3、ドリル1、刃器2、剝片石器1、尖頭石器1の計44個出土している。

本址は貉沢式期の住居である。

ヌ）　**第40号住居址**（図33、201～202、図版35）

遺構　暗褐土中に遺物の集中する部分を認め、輪郭線は漸移層まで削り下げて確認した。貉沢式から新道式への移行期の**36号住**に切られ、**土壙1163・1166・1312**に切られている。覆土は黒褐色土で炭粉が混入する。プランは3.17×3.19mの円形を呈し、P_1 と P_2 の間に入口があったと推定され、主軸は N17°W である。壁はローム土ではあるが軟弱で壁高は東 14 cm、西 14 cm、南 17 cm である。床面も平坦ではあるがやや軟弱である。中央やや北寄りに埋甕炉があり、A12の深鉢が埋設されていたが、焼土・炭は全く検出されなかった。炉体の深鉢口縁は床より 2～3 cm 高く、A13の深鉢が炉上につぶれて出土した。主柱穴は P_1　26×26－14、P_2　33×26－16、P_3　34×24－22の3個であるが、36号に破壊された部分にあったと考えられ、4柱構造と思われる。

遺物　出土地点番号を付すものは全部床か生活面出土とみて良い。B1・2は中期初頭でB17～19は新道式で混入である。

貉沢式　深鉢　If′型　B12。Ⅲａ型　A12は口径 26.5 cm、現高 15 cm であり、A13は口縁部最大径 38.8 cm、現高 26 cm で顔面把手を付すもので、36号住貯蔵穴などへ混入もしていた。A14は口縁に交互刺突文帯を有する。Ⅳａ型　A11。型分類しないA15・B3～16があるが、B11～14は胴がふくらむものである。以上角押文を付すものは全部幅 6 mm 以下であり典型的な貉沢式である。

石器は、打製石斧5、石鏃1、スクレイパー類1、計7個出土している。

本址出土遺物は少量であるが、貉沢式期の住居址である。

ネ）　**第43号住居址**（図33・203・204・263、図版36）

遺構　住居址の存在など予想もしなかった尾根頂部からハレン沢への急斜面肩部に位置する。本址の南東側と南側の用地幅杭より多少下では急崖となっており、この部分以外には遺構は存在しないと思われる。輪郭は北東部はローム層上面で、南西部は貉沢式から新道式への移行期の**47号新住**を切り貼床するため、その覆土となる黒褐色土上で確認している。本址覆土上面には、**土壙830・833・834**が検出されている。プランは4.50×3.71mの楕円形を呈し、入口が尾根頂部に向いていたとすると N41°W である。壁は東側が 64 cm と最高で、南西部は 12 cm と低く、壁面は硬い。ローム床面はほぼ平坦で硬く良好であるが、貼床

部ではローム粒混入暗褐色土の薄い層がみられやや軟弱である。ほぼ中央に埋甕炉があり、A21の深鉢が埋設されていたが北側半分が残存するのみで、炉内及び周辺の焼土は非常に少ない。柱穴は東側の P_1 28×25−54、P_2 35×33−58はそれぞれ単独であるが、西側は P_3 27×19−24、P_6 31×21−26とP_4 44×45−63、P_7 43×36−42、P_8 31×26−54の2群になるとみられ、当初 P_3・P_4 であったものが、西側へ部分的に拡張されたのではないかと思われる。P_5 50×36−39は南側が袋状になり、内部から土器片と乳棒状石斧(4)が出土したもので貯蔵穴である。本址は、新道期の住居が北方の下段テラス部に存在するのに対し、単独で離れており他とは性格を異にするのではないだろうか。

遺物　出土量は非常に少ない。床面・生活面出土はB21・22、C1である。新道式深鉢Ⅳb型　A21。Ⅸb型　A25とB2は同一個体である。他の型分類しないA22・24・26、B1・3～6がある。A22は棒具による沈線、同24の鋸歯状文は風化し施文具不明、B4は半隆起線と平行沈線を付し、同5は半隆起線区画内を三角押文で埋める。A23は貉沢式である。

石器は、打製石斧4、横刃型石器4、磨製石斧2、計10個出土している。

本址は新道式でも埋甕炉を持ち、住居址の形態では貉沢式期以来の伝統を残している。然し、土器型式からみた場合には典型的な新道式で、むしろ、石囲炉を持つ住居の様相に近いと思われる。

ノ)　**第44号住居址**（図33・203～204・263、図版37・97）

遺構　輪郭線は東側がローム層上面、西側が暗褐色土層中で確認している。覆土は典型的な凹レンズ状の堆積状況を示している。プランは3.25×2.88mの楕円形を呈し、P_3 と P_4 の間を入口とすると主軸はN41°W である。西壁は褐色土であるが、他はロームで、壁高は東 45 cm、西 17 cm、南 26 cm、北 31 cm となる。ロームの床は東半部が硬いたたきで、西半部は軟弱であり、北が 5 cm 高くなるがほぼ平坦である。壁下には小ピットが並ぶが、径 5～8 cm、深さ 8 cm 内外であり壁柱穴と考える。P_4 に近接して周溝状の溝があるが壁から離れすぎ、また、拡張の痕跡も認められず別の成因になるものであろう。中央の埋甕炉には、A7の深鉢下半部が埋設され、縁は床より 3 cm 高く周囲にも少量の焼土を見る。主柱穴は P_1 31×29−58、P_2 35×25−61、P_3 37×29−74、P_4 24×20−50の4個でローム粒を含む黒褐色土が充満し、P_4 以外の中下部から貉沢式土器片が出土した。P_4 脇の床面に石柱が倒れており、P_4 に接して方形の浅い凹穴があり、石柱を建てた痕跡ではないかと思われる。

遺物　床面密着の遺物は小破片のみで少ない。生活面も含めて本址に伴うものはB1・4～11で、他は床より 20～40 cm 浮いているものが多く、最上層（Ⅰ層）に集中する。貉沢式　深鉢　Ⅰe型　A7は底径 15.5 cm、現高 15 cm、赤褐色を呈し金雲母等を含み堅緻であり、4単位の文様を付する。B11は栗色で長石・金雲母を含み、把手部内外面に押圧を加え、その下部に押圧刻みをもつ隆帯文を貼付し、胴区画間には円文を付し類例をみない。ⅢC型　A10は口径 45 cm、現高 12.5 cm で½残存である。Ⅴb型　B19は長石・石英・チャート・片麻岩の大粒が入るもので、隆帯には粗間隔の結節状爪形を付す。平出3A系　B9・18・20。北隆系　B13は赤褐色で長石・石英・金雲母を多く含み、BⅠ57グリットの図250—18は30号住C—14と接合したものと同一個体で、本址に由来した可能性がある。浅鉢Ⅱb型　B21～22。新道式　B12・14～17があり、A11はⅢb型である。他に型分類しないA8・9・13～22、B1～8・10がある。なお、覆土出土の土製円板（図263—8）は、中期深鉢片を利用し、風化しているが、17 g で上端を研磨している。

石器は、打製石斧8、横刃型石器6、磨製石斧1、凹石・磨石4、石皿2、石鏃4、スクレイパー類1、

ドリル1、砥石2、台石2、石棒？27、計33個が出土している。

本址は貉沢式期の住居である。

ハ)　**第47号新住居址**（図34・204～206、図版39・98）

遺構　ハレン沢に臨む急斜面の頂部にあり、北部は**43号住**に貼床される。斜面下方の南壁の輪郭線は黒土中にあり、床面を追って壁を検出した。プランは4.75×4.10mの卵形で、長軸方向は N55°W であるが、入口は地形を考え P_2 と P_3 の間とすると主軸は S75°E となる。壁高は東 78 cm、西 27 cm、南 54 cm、北 49 cm である。床面中央部は旧住の 10 cm 上にロームで貼床し、たたきとなっている。中央部へ若干くぼむが、貼床のための沈下であろう。中央南東寄りに木炭を残す厚さ 5 cm の焼土部 F_1（17×20 cm）があり、西側は東側焼土より 4 cm 低くくぼみ炉底と思われる。主柱穴は P_1　41×30－28、P_2　32×32－29、P_3　44×32－74、P_4　43×28－76である。P_{12}　34×34－7 は石柱が、ここに立てられており倒伏したと考える。

遺物　床面、生活面と思われる高さでの出土はC24、D3～5である。貉沢式　深鉢　Ⅲe型　D1は幅 4 mm の角押文は器面に急角度で押引き焼成も新道期に近いのではないかと思われる。新道式　深鉢　Ⅳb型　D2。他に、型分類しないC23、D6～7、E1～8がある。平出3A系　Ⅲb型　D3は¼周から、D4は半周からの図上復元であり、ともに外面に煤が付着する。他にE9～13がある。浅鉢　C24・25。D5は橙褐色を呈し⅔残存するもので長石・輝石・金雲母を含み、焼成も良い。口縁長径 29.8 cm、短径 23 cm、現高 12.6 cm である。

石器は、打製石斧2、横刃型石器2、凹石・磨石2、石鏃1、スクレーパー1、立石1の計9個が出土した。

本址は出土遺物が僅少で時期決定に難点はあるが、貉沢式から新道式への移行期の住居と考えたい。

ヒ)　**第48号住居址**（図15・144・145・207、図版40・98）

遺構　農道の下部に検出された住居址でロームと暗褐色土層まで下げてプランを確認した。3.40×3.10mの楕円形を呈する。P_3—P_4 を入口と考えると主軸は N43°W である。壁高は東 19 cm、西 3 cm、南 22 cm、北 5 cm である。床はロームのたたきで、南東部が 10 cm 程高く若干の傾斜をもつが、ローム層が傾斜することに起因するとともに、入口部が南東部に設けられたためと思われる。中央やや北西よりに埋甕炉があり、周囲床面径 75 cm の範囲が焼けていた。主柱穴は P_1　35×33－43、P_2　33×30－33、P_3　34×24－59、P_4　26×23－47 で、補助柱穴は P_5　20×20－11、P_6　45×29－8 であり、P_6 は木根による攪乱かも知れない。

遺物　A33～35が床面で他は覆土出土である。33～37・41は無文で縄文中期としかいいようがない。33は黒褐色、多量の金雲母を含み九兵衛尾根Ⅱ式から貉沢式への移行期にみられるものに胎土・色調が類似し、楕円区画を持つようである。まず、34とともに貉沢式にまちがいない。A38～45・B4は中期初頭で、本址には伴わない。貉沢式　深鉢　Ⅰd型　図207—14は埋甕炉に使われた深鉢で実測部完存、上部径 24 cm、現高 14.3 cm の明赤褐色を呈し、長石・石英・輝石・金雲母を含み、外面箆削り、内面横なでされる。B1は金雲母を含み表面洗いすぎたため縄文の有無は不明であるが土壙1186出土に類似しⅠb型であろう。型分類しないがA46～47、B4がある。角押文はすべて 3 mm 以下である。平出3A系　B3・6～8。浅鉢　Ⅰ型　B2。B5は新道式である。

石器は、打製石斧4、横刃型石器2、凹石・磨石2、石皿1、スクレイパー類1、他1の計11個が出土している。

本址の出土遺物は僅少で、発掘時には九兵衛尾根式期と誤認したため、図版は中期初頭へ入れてしまったが、最終的には貉沢式でも古い様相を持つ住居と考える。

エ　平安時代の住居址と遺物

ア）　第8号住居址（図34・35・326・327、図版11・134）

遺構　暗褐色土層の上層で輪郭線を確認した隅丸方形を呈する5.35×4.60mのプランで、長軸方向はN76°Eである。覆土は炭粉混入の黒土で、**土壙1018**は貼床下で検出され、本址の貯蔵穴かもしれない。北東隅寄りに安山岩を使った石組粘土のカマドがあり、規模は1.25×1.20mで良く保存されていた。壁高は東30cm、西25cm、南30cm、北40cmで、床面はほぼ平坦、**19号住**に貼床する部分は軟弱で、下部住居の遺物が露出していた。また、地床炉が2箇所にあり、F_1は50×45cm、深さ13cm、F_2は47×51cm、深さ3cmで、F_2の周辺床面は100×90cmの範囲が焼土化していた。主柱穴はP_1　33×30−38、P_2　37×30−22、P_3　26×22−18、P_4　23×22−22、P_5　28×22−50、P_6　32×28−45であろう。補助柱穴はP_7　28×26−48、P_8　49×37−34、P_9　27×?−15、P_{10}　20×20−13、P_{11}　25×24−11を想定し、その他貯蔵穴かと思われるP_{12}　63×31−12、P_{13}　42×40−14、P_{14}　47×50−16と灰溜めのP_{15}　90×72−25がある。本格的な貯蔵穴はP_{16}　92×73−37である。壁下には周溝が全周したと思われる。床面と覆土からは鉄滓を得ている。本遺跡のどこかで鍛冶が行われたのであろうが、F_1・F_2はその痕跡であろうか。

遺物　北壁上部に碗等の収納施設があったのか、下部に落ち込む遺物が多かった。本遺跡最大の住居で遺物の質量ともに優れ、指導的階層の住居と考える。土師器坏（図326）は器種のある程度推定できるものを含めて34点あるが、A型が18点と半数を占め、赤色・明黄褐色を呈するものが多く、Aa型が大部分と思われる。1は赤色、石英粒少量含み焼成の良い口縁内湾する椀形となるが、一応、坏ACとする。周辺遺跡では類例はないが、全面ロクロ整形である。29は明黄褐色を呈し、細砂粒を含み軟質で外面ロクロナデされ、内面は丁寧なナデ整形されるもので、高台部は全器高の3分の1を越える。BIIより若干薄手で器形を異にするため坏BIIIとする。以上の2点が、「茅野市・原村その2」の分類基準への追加器種である。黒色Bの31〜34には暗文が付される。土師甕ではA・B・E・Fの器種各1点がある。

灰釉陶器（図327）では椀（1〜10）、皿（11〜15）、輪花皿（16）、段皿（17）があるが、3は黒笹89号窯期、多治見窯で、他は折戸53号窯期の東濃産が殆んどである。11は同期の最末とされる。長頸壺（18・19）、短頸壺（20）の破片があり、後者は黒笹89号窯期の猿投窯産である。他に床面から叩目をもつ須恵器大甕片が出土している。

本址に伴出する灰釉陶器で新しいものは折戸53号窯期最末となり、本址は平安時代後期に属する。

イ）　第9号住居址（図35・328、図版12・134）

遺構　暗褐色土層で輪郭を確認した3.58×3.75mの隅丸方形のプランで、主軸方向はN82°Eである。覆土はローム粒混入黒土であり、壁高は東24cm、西13cm、南8cm、北28cmである。ほぼ中央に安山岩を使った石組粘土カマドが設けられており、すでに崩れていたため規模は不明であるが、残存部95×40cmである。床面はほぼ平坦であり、ロームのたたきである。主柱穴はP_1　28×24−19、P_2　25×23−22、P_3

30×28−24、P_4 28×25−20 の4個であり、補助柱穴は P_5 26×24−19、P_6 25×20−22 で、貯蔵穴 P_7 86×78−23 が袋状、P_8 77×65—39 はたらい状で若干の遺物が出土した。西壁外には壁外施設があったかと思われる柱穴 P_9 35×31−28、P_{10} 31×31−18、P_{11} 30×27−19、P_{12} 30×27−14 を検出した。さしかけがあったのかもしれない。

遺物（図328）土師器では坏ＡＣ（1・8・9）、坏Ａａ（2～7）があり、すべて、内外面ロクロナデ、糸切底の雑な整形である。2・3・10は赤色、他は灰褐色か橙褐色である。7・8は内面の底にロクロ整形の凹凸をそのまま残しており、ナデ調整さえ加えていない。5はゆがみがひどく、「仁」と墨書される。灰釉陶器には埦底部の11があるが、黒笹89号窯期の東濃産である。

本址は出土遺物から平安時代後期に属する。

ウ） **第10号住居址**（図36・328、図版12・134）

遺構　黒褐色土層で輪郭を確認した隅丸方形のプランで、規模は3.97×3.32m、主軸は N25°W である。北壁中央に安山岩を使った石組粘土カマドがあり、石組内には支脚石も残る良好な遺存状況である。規模は 75×56 cm である。壁は下部がローム に届いているが、大部分は暗褐色土層中にあるため軟弱である。壁高は東 44 cm、西 32 cm、南 46 cm、北 44 cm である。床面は平坦で硬くしまっている。主柱穴は3箇所検出され P_1 48×45−10、P_2 60×50−12 と浅く、柱穴としての機能を果し得たか疑わしい。P_3 は貯蔵穴と思われる方形ピット（85×80−43）内に浅く痕跡を残す。壁外にも柱穴は検出できなかった。南壁寄りの土壙78は貼床下にある。

遺物（図328）　カマド周辺で少量の遺物が出土した。土師器のみで、坏1～17はいずれも外面ロクロナデ、内面篦ミガキされ、底部は糸切されていた。13・14は黒色Ａほどではないが、内面の相当部分が黒斑となる。16は器壁が他より厚く、内面のミガキも13と同様にやや雑で、磨きとも暗文ともとれる部分がある。17は放射状暗文を有する。「茅野市・原村その2」で分類基準された時期よりも若干古い様相を持ち、そのまま適用することは無理であるが、一応、12・13を坏Ａ、14～17を黒色Ａとする。甕Ｇとした18も同様であるが、薄手で口縁内外面ナデ、内面指頭ロクロナデ、外面カキ目を有する。灰釉陶器と須恵器は出土していない。

本址は灰釉陶器を伴う他の住居址より古いが、平安時代後半の住居である。

エ） **第37号住居址**（図36・328、図版33・134）

遺構　重機で表土を除去したため削りすぎ、西壁を破壊している。残存部からのプランは、南北方向が東壁2.8m、西壁寄りで3.1mと開く方形に近いものと推定される。壁は自然堆積層の黒褐色土層と炭化物混入黒褐色土層の差で把握したもので、東壁は 4～12 cm、南壁は最高 12 cm、北壁は同 5 cm のみ残存する。床面は礫混入黒褐色土か、或いは褐色土で西側を除き全体に硬い面が認められる。ほぼ良好な床面は、実測図で一点鎖線で図示した範囲である。カマドは南壁の東寄りにあり、両袖の粘土を残すのみで幅 80 cm、奥行 90 cm である。壁手前より壁外にかけて焼土があり、残存状態がわるく、詳細は不明である。

柱穴は確認されず、小形な住居のため壁外に設けられたものと思われる。北西部に貯蔵穴と思われる袋状の P_1 78×68−56 がある。カマド左袖部近くの床面に灰釉埦1点が出土した。更に半完形の同様埦があったが盗難にあっている。

遺物（図328）　土師坏黒色Ｂの19は内面に放射状篦磨きと暗文を加え、外面ロクロナデ、糸切底であり、

表1　大石遺跡出土平安時代土器一覧表

図番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
326-1	8住カ・フ・ユ	H	坏AC	12.2			1/8
〃-2	〃 28	〃	坏C	11.4	4.3	6.0	底　糸切
〃-3	〃 6・フ	〃	〃〃	10.2	3.8	4.6	〃　内面底ヘラミガキ
〃-4	〃 フ	〃	〃Aa	10.7	3.3	4.4	1/8　底部糸切
〃-5	〃 フ	〃	〃〃	14.1	4.8	6.4	1/8　底部完存糸切右回転
〃-6	〃 カ	〃	〃〃	13.1			
〃-7	〃 29	〃	〃〃	13.5			1/4
〃-8	〃 フ	〃	〃〃	11.8			
〃-9	〃 カ	〃	〃〃	11.7			1/8
〃-10	〃 フ	〃	〃〃	10.2			1/8
〃-11	〃 30	〃	〃〃	12.1			1/8　黒斑あり
〃-12	〃 39・カ	〃	〃〃	11.7			1/8
〃-13	〃 フ	〃	〃〃	11.3			1/6
〃-14	〃 カ・フ	〃	〃〃	12.5			1/8
〃-15	〃 フ	〃	〃〃	10.6			1/8
〃-16	〃 カ	〃	〃〃	10.0			1/8
〃-17	〃 ユ・P	〃	〃〃			5.7	底　糸切　右回転
〃-18	〃 ユ	〃	〃〃			4.1	内面ロクロ利用ミガキ　〃
〃-19	〃 11	〃	〃〃			7.9	
〃-20	〃 カ	〃	〃〃	10.8			1/8
〃-21	〃 33・カ	〃	坏C	11.4	3.2	4.6	口縁1/8　底全周存　糸切
〃-22	〃 ユ	〃	〃〃	11.3	3.7	5.5	1/4　外面砂粒移動痕
〃-23	〃 カ	〃	〃〃	10.0	2.9	5.3	1/8
〃-24	〃 フ	〃	〃B			5.6	全周
〃-25	〃 カ前P	〃	〃BI	11.9	(5.3)		1/6
〃-26	〃 13・カ	〃	〃BII	13.0	5.9	8.4	完形
〃-27	〃 フ	〃	〃B			7.8	
〃-28	〃 12・25	〃	〃	〃			7.3
〃-29	〃 28・32・34・41・カ	〃	〃BIII	11.9	9.0	11.2	一部欠　明黄褐色
〃-30	〃 フ	〃	黒色B	12.3			
〃-31	〃 東P	〃	〃〃	14.3			1/3
〃-32	〃 フ	〃	〃〃	13.3			内面暗褐色
〃-33	〃	〃	〃〃	13.6			
〃-34	〃 フ	〃	〃〃	—	—	—	
〃-35	〃 ユ	H	甕			9.2	糸切後板目
〃-36	〃 10・19・21・23・24・カ	〃	〃F	9.6	10.0	6.3	ほぼ完形糸切底
〃-37	〃 38・カ	〃	〃			7.7	
〃-38	〃 カ・東P	〃	〃A	17.3		8.7	半完　木葉底
327-1	〃 17・44・46・47	〃	〃B	17.7	(12.3)		口縁1/3存

図番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
327-2	8住29・42・カ	H	甕E	(26.0)			
〃-3	〃 25・38	K	埦	16.3	6.0	7.3	2/3　K-89　多治見
〃-4	〃 40	〃	〃	14.6	4.7	7.4	1/2　0-53　東濃
〃-5	〃 37・ユ	〃	〃			7.8	〃　〃
〃-6	〃 15・16	〃	〃	15.4	5.2	7.8	2/3　〃　〃
〃-7	〃 1	〃	〃	12.8			1/6　〃　〃
〃-8	〃 フ	〃	〃	14.4			1/8　東濃
〃-9	〃 22	〃	〃	16.9			1/8　〃
〃-10	〃 ユ	〃	〃	13.5			1/8　〃
〃-11	〃 8・カ	〃	皿	12.2	2.5	5.8	1/2　0-53最末　中津川
〃-12	〃 25	〃	〃	12.1			1/8　東濃
〃-13	〃 26	〃	〃	12.9	2.6	6.3	完形　0-53　〃
〃-14	〃 3	〃	〃	12.4			1/6　東濃
〃-15	〃 9	〃	〃	13.0	3.1	6.4	完形　0-53　東濃
〃-16	〃 14	〃	輪花皿	13.5	2.7	7.2	ほぼ完形　0-53　〃
〃-17	〃 カ	〃	段皿	12.8	2.1	6.9	1/4　0-53　〃
〃-18	〃 2	〃	長頸壺	12.0			
〃-19	〃 35	〃	〃				
〃-20	〃 35・36・カ	〃	短頸壺	(10.1)	(21.5)	(15.8)	1/6　K-89　猿投
328-1	9住1	H	坏Ac	12.2	3.7	5.8	完形　糸切底
〃-2	〃 3・4	〃	〃Aa	12.2	3.8	4.8	4/5　〃
〃-3	〃 カ	〃	〃〃	11.1	3.6	4.7	口縁1/8　底全周　糸切
〃-4	〃 1	〃	〃〃	10.7			1/4
〃-5	〃 カ・P_8	〃	〃〃	12.5	3.6	5.0	ほぼ完形　墨書「仁」
〃-6	〃 5	〃	〃〃	11.0			1/4
〃-7	〃 1・6	〃	〃〃	12.0	3.7	5.3	ほぼ完形　糸切底　右回転
〃-8	〃 1・2	〃	〃C	12.5	3.3	5.6	口縁1/8　底全周
〃-9	〃 4	〃	〃〃	12.6	2.7	4.2	〃 1/10　〃　糸切
〃-10	〃 ユ・カ	〃	〃BI	13.0	4.6	7.2	ほぼ完形　底スス付着
〃-11	〃 P_8・3・カ	K	埦			7.3	K-89　東濃
〃-12	10住カ	H	坏A	15.1	6.3	6.6	1/3
〃-13	〃 1	〃	〃〃	12.8	4.0	6.9	完形
〃-14	〃 カ	〃	〃黒色A	14.8	5.0	6.0	
〃-15	〃 カ	〃	〃〃	13.1			
〃-16	〃 2	〃	〃〃	13.0	4.2	6.1	完形
〃-17	〃 カ	〃	〃〃			5.7	
〃-18	〃 カ	〃	甕G	14.5			1/2　ロクロ水引
〃-19	37住	〃	坏黒色B			7.1	
〃-20	〃 1	K	埦	13.4	4.1	6.5	ほぼ完形　0-53　東濃
〃-21	45住22	H	坏黒色	12.7			

同一個体と思われる口縁部片がある。灰釉陶器では埦の20があり、折戸53号窯期の東濃産である。

本址の遺物は僅か2点であるが、平安時代後期の住居址であることを示している。

オ） 第45号住居址（図36・328、図版38）

遺構　耕土直下で荒れ、部分的に覆土が残るのみである。中央やや西寄りに暗褐色土が8cmの厚さで残り、多量の木炭片と屋根に用いられていたかと思われるカヤらしい炭化茎があり、火災にあった住居である。プランは3.05×4.05mの隅丸方形を呈し、壁高は東14cm、西2cm、南3cm、北1cmである。東壁下には周溝がめぐり、中央に石組粘土カマドの痕跡があり、焼土混入粘土の範囲は1.05×80cmである。床面は図中点線部が残るのみであるが、ロームのたたきで大部分は南北方向の畝溝で攪乱されている。

主柱穴 P_1 55×42−18、P_2 27×24−18、P_4 69×46−19、P_5 38×28−18。P_6 46×42−40は黒土が充満し、貯蔵穴と思われる。補助柱穴 P_3 18×15−9、P_7 33×25−11、P_8 34×28−12、P_9 36×36−7、P_{10} 35×35−12、P_{11} 40×30−12。なお、土壙1072は黒土が落ち込み、覆土とは差があり縄文土器片が出土したため、土壙としたが、本址の貯蔵穴の可能性もある。

遺物　P_1 近くの床面で土師甕小片を得、東北隅の耕作攪乱の入った黒土中で土師坏、黒色Bの坏片(21)を検出している。僅か2片の土器ではあるが、本址は平安時代後半に属するものと考えたい。

オ　土壙と出土遺物

概要については表2にまとめた。以下、重要な土壙・遺物のみ補足説明するが表との重複はさけたい。

ア） 縄文時代前期の土壙と出土遺物

諸磯B式期集石　土壙501・511・529は黒土下層に集石上部が検出され、掘り方の輪郭は暗褐色土層まで下げて確認している。いずれも人頭大から拳大の安山岩焼礫が多数乱積するもので、礫間には前2者には焼土粒・木炭片混入の、後者には焼土混入の黒土が入りこんでいた。土壙501・529の礫間及び土壙511の周囲からは諸磯B式土器片がある程度得られ、同式期の集石炉と考えたい。

同式期貯蔵穴　土壙547～549は袋状を呈し、土壙549と512からは炭化栗が検出され、土壙181及び39号住周辺の土壙を含めて、標期の貯蔵穴群の可能性が高い。土壙1279は貯蔵穴か抱石墓と思われる。

イ） 縄文時代中期初頭の土壙と出土遺物

九兵衛尾根Ⅰ式期集石　土壙602・778は黒土層下部に礫の上面が検出され、前者は暗褐色土層、後者はローム層まで掘り込まれたもので人頭大から拳大の礫間には木炭片・焼土混入黒土がみられた。重機による表土剝ぎでも頂部グリット掘りの際も表土には殆んど礫は含まれず、炭焼き穴を誤認する恐れはない。少量の遺物が出土しており、無遺物で底全面の焼ける土壙595とともに中期初頭の屋外炉的性格を持ったものと考える。前記の2基は集石炉として良いと思われる。貧弱な地床炉しかない41・42号住との関連でみる必要があろう。屋内炉は火種保存程度で屋外炉が主要な役割をもっていたと思われる。

焼土を伴う土壙では九兵衛尾根Ⅰ式深鉢を埋設したかに見える土壙197は、埋甕炉かと思われる状況を示すものであるが、この地区は地表下約1mと黒土も厚く、また、検出面である暗褐色土上面の周囲も精査

したが、住居址である確証はつかめなかった。調査者原以外は断面図に図示される焼土とされる部分についても疑問を持っていたことを付記しておく。九兵衛尾根II式土器片を下部から検出した土壙589・777では、それぞれ、検出面と上層に焼土部をもつが、前記とは性格を異にし貯蔵穴と考える。

貯蔵穴　土壙140・1203からはドングリ各1粒を覆土中から検出しているが、中期初頭片少量が伴出するのみで、5・15号住に近接する位置にあり縄文中期中葉の可能性も残される。篭畑II式期の土壙855からは栗1粒を得ており、特記しない土壙の多くはこれら食料の貯蔵穴であった可能性が強い。

土器を副葬する墓壙　土壙151は黒褐色土を覆土とし、ロームの底に接し2点のミニチュア土器が正位で出土している。図213—25は黒褐色で器面を磨き幅広の結節状沈線文を垂下させる底径5cm、現高5cm、図版101—5は盗難のため図掲載不能となったが径・高さ約10cmで、口縁にはソーメン状粘土紐を貼付し、その下部を細半隆起線で平行・鋸歯状文を施し、胴部は縦平行線群を垂下させる篭畑I式である。土壙848は褐色土・ロームを掘り込み黒褐色土が充満し、底面に接して小形深鉢2点、浅鉢1点が出土した。遺体の両側に供献したものと考える。図221—9はロ縁最大径16.3cm、器高12.4cmのロ縁突起部2箇所を欠くが、口縁の1区画に連続爪形文を付し、半隆起線、三角印刻文、楔形文、貫通孔をもつ橋状把手で文様を構成し、部分的にRL縄文を付す。黒〜暗褐色を呈し、口頸部には赤色顔料が付着する。これに接し、ほぼ同高・径8cmのキャリパー状口縁となり全面に平行沈線を縦施文する深鉢があったが、保管中盗難にあっている。この2点は篭畑II式である。同図—10は口径28×25.8cm、器高12.1cm、暗赤褐色の金雲母を多く含み、内外面丁寧な磨きをする。この浅鉢の共伴から篭畑II式でも終末期の土壙と考える。近接する土壙855は形状、覆土とも前者に類似し、底より10cm浮いて図79—1の1地点で図221—13が横につぶれ、2地点で同—12が正位で、3地点で凹石が出土した。半完形でやや難はあるが、遺体をある程度土で被覆した後に供献した篭畑II式期の墓壙と考えるが、前記の栗出土から貯蔵穴を転用したものかと思われる。

九兵衛尾根I式期では土壙56の西壁下床面に浅鉢2点が副葬されたかと思われる状況で出土した。図211—10は口径17.8×15.4cm、現高7cmで細い竹管によるロ唇押圧と内外面の角押文をもち、1対の波状突起部からは2本1組の隆帯を垂下させるもので、内外篦磨きされ暗褐色を呈する。同—11は幅2mmの角押文を口縁に、口唇には押圧刻目を付すもので、金雲母を含み赤褐色を呈し、口径17.5cm、器高6.6cmを示す。ともにほぼ完形である。952は耕作によって上部が破壊された土壙で炭粉少量混入の黒土を覆土とし、ロームの底から僅かに浮いて遺物が出土している。西壁下で図223—1・3が、中央北東寄りで同—2が正位で置かれた状況を示す。1はロ縁径9.6cm、現高6cmでロ縁にV字状把手1個を付し、単沈線と半肉彫三叉文で文様を構成する。雲母を含み赤褐色である。3は口径8.3cm、胴最大径16.4cm、底径10.5cm、器高12.3cm、赤褐色だが半分は黒斑があり、丁寧に磨いている。口縁突起は1単位、胴側面の対をなす把手の上面には玉抱き三叉文、下面には三角印刻文を付し、正面隆帯による円文であるが裏側は楕円文となり、結節状沈線文を付す。3の結節状沈線文は図213—25と類似し篭畑式かと思わせるが、1のV字把手、2の平行沈線文、3の玉抱き三叉文は九兵衛尾根I式後半期の特徴をもっていると考える。

九兵衛尾根II式　土壙449はロ縁・胴の3分の1を欠いた深鉢図217—11が欠損部のロ縁を下に斜位で床より僅か浮いて出土した。ほぼ原形を保っている状況で、捨てられたものとは思われない。遺体の頭部を覆うため故意に欠いたものと考えたい。同深鉢は口径30cm、器高27.5cmで裏側の橋状把手下部には玉抱き三叉文を付し、RL縄文を地文とする。土壙429では検出面に図217—1の深鉢がのり、埋葬後に上部へ供献された可能性もある。同深鉢は半個体残存で現高25cmでロ縁にRL縄文を地文に単沈線を付し、胴

部は丁寧に磨く暗褐色の土器である。土壙435で石皿半欠が底に接し深鉢図217—5が床より僅か浮いて出土した。一形式古い土壙884も脇に石があり、同様の墓壙であったことが考えられる。

抱石墓壙の可能性のあるもの　九兵衛尾根Ⅰ式期　土壙14、87、168、273、481、1081、1090、1178。同Ⅱ式期　土壙430。上部がケルン状集石となるらしいもの　中期初頭土器片を出土した土壙928。

以下、主要な土器の特徴と型を記す。篭畑Ⅱ式　深鉢　Ⅰa型　図212—22・23、221—13。Ⅱa型　図213—11は推定口径 27 cm、現高 17.5 cm で暗赤褐色の口縁の結節状沈線文は器面を押して引き上げるため、後の方が盛り上がるようになるものである。その下部の平行沈線文も後出のものより若干深く、胴は結束 RL 縄文を付す。Ⅱb型　図224—23。Ⅲa型　図216—15は底部を欠くが、ほぼ完存で、口径 30.3 cm、現高 32.5 cm、赤褐色を基調とし長石を多く含む。地文は結束 LR 縄文で半隆起線とそれに沿う篦具による刺突、隆帯刻目を付す。口縁は4、胴は5単位に文様であるが橋状把手は4である。他に図223—10。Ⅳa型　図215—4は暗褐色を呈し、全面半隆起線を付すが一部は平行沈線となるもので、底部は直角に近い屈折底かと思われる。他に図221—12・224—22。Ⅳb型　土壙848で出土した盗難にあった土器をあてたい。Ⅴb型　図221—21は平行沈線間に竹管背面によるD字状の交互刺突文を付し、三角印刻文からの退化型である。底径 8 cm、現高 3 cm。Ⅵ型　図221—9。

九兵衛尾根Ⅰ式　深鉢　Ⅲa型　図215—20。218—3は頸部の〓残存し、栗色の長石・金雲母を多く含む口径 26 cm、器高 35 cm と推定され、平行沈線は半隆起線に近い。図222—9は1/5周残存、赤褐色を呈し、長石・石英・金雲母多く、浅い平行沈線を付す。同á型　図225—5は縄文をもつ唯一の例であるが、他はaと変わらない。同b型　図226—28。Ⅳa型　図218—2、225—1。Ⅴa型　図219—11。Ⅶa型　図225—2。同C型　図225—20は半周残存し、暗赤褐色を呈し長石・金雲母を多く含み、胴は結束 RL 縄文を付す。半隆起線である。Ⅷ型　図218—4は口径 17.7 cm、現高 23.2 cm、暗褐色を呈し金雲母を多く含み、頸部の把手は両端からつまみ上げたもので、1区画には結節状沈線文を付す。Ⅸa型　図213—28、224—1～9。X型　図220—1、223—9。XIVa型　図217—20、218—1、225—29。同á型　図222—3。同C型図215—25。同ć型225—7同、d型　図212—7は暗褐色を呈し長石・金雲母を多量に含み、丁寧な篦磨きをするもので、口縁下部に角押文と交互刺突文を有する。他に図224—36がある。XVa型　図226—31は上半部黒褐色、下半部橙赤褐色を呈し、長石を主とする砂粒を極めて多量に含む。LR 縄文を地文に半隆起線で文様を構成し、頸部のV字状把手から隆帯を懸垂する。同b型　図224—14。同C型　217—10、220—27。XVIIIa型　図223—3、b型　同—1。

九兵衛尾根Ⅱ式　深鉢　Ⅰa型　図219—2は半周残存し口径 27.5 cm、器高 33 cm と推定され、LR 縄文を地文とし、口縁部に角押文を施し煤が付着する。他に図216—29がある。同á型　図219—1はほぼ全周する深鉢で暗褐色を呈し、金雲母・長石を多く含む。口径 31.5 cm、現高 28 cm でRL 縄文を地文とする。他に図217—14、224—26がある。同b型　図220—11。同C型　図212—9は 16 mm と厚く赤褐色～黒褐色を呈し、焼成硬く、LR 縄文を地文として垂下する沈線と押圧列点文間を梯子状に単沈線で埋めたり、篦切斜格子文を施すもので、唯一例である。同d型　図214—1は口縁の⅔残存し、口径 26.5 cm、現高 21 cm である。口縁内面の一部と外面に繊細な RL 縄文を施し、単沈線は幅 3 mm と細い。Ⅱa型　図217—5は口径 33 cm、現高 38.3 cm、茶橙色を呈し原体の長さ 2.5 cm のRL 縄文を施す。同b型　図217—11。Ⅲb型　図214—5は口径 18 cm、現高 15 cm で口縁内面を削り取り玉抱き三叉文を連続させるようである。暗赤褐色を呈し金雲母少量を含み器面は篦ナデする。

浅鉢　Ⅰa型　図210—16。同b型　図210—33、211—10。同g型　図211—11。Ⅱb型　同211—12、216

—34。図213—10は赤褐色、胎土に安山岩風化砂の他にチャート粒も含み、口径 45 cm弱と推定され、体部は篦磨きされる。Ⅰ型は九兵衛尾根Ⅰ式、Ⅱ型は同Ⅱ式である。

ウ)　縄文時代中期中葉の土壙と遺物

土器を遺体脇に副葬した可能性のあるもの　貉沢式期　土壙1001の底に接して図232—31の完形浅鉢が出土した。口径 18.7 cm、最大高 8.6 cm で金雲母を多く含み赤褐色、器面を篦磨きする。伴出土器片から貉沢式と考えるもので、浅鉢Ⅰ式である。新道式期　土壙170は図229—1が底より僅かに浮いて出土した。平出3A系Ⅳa型である。土壙837の底面に図230—20の半完深鉢が出土した。口径 20 cm、現高 19 cm で、正面左にはひねり紐を用いた把手も見られ、深鉢XIVc型である。

埋葬後に土器を供献した可能性のあるもの　貉沢式期　土壙857の中層に図231—7の浅鉢2a型散乱し、上部には石が置かれていた。新道式期　土壙46の検出面に図228—2の完形深鉢が出土した。口径 27 cm、器高 25 cm で第3文様帯はA＋A＋B＋Bである。同図3とともにⅡb型である。同図4はXIVd型である。土壙135では図228—10が出土したが、XIVd型である。土壙202でも図229—2のⅣa型深鉢が出土している。底径 8 cm、現高 13 cm である。

遺体上部或いは墓壙上に石を置いた可能性のあるもの　貉沢式期　土壙857、955。新道式期　土壙44、888、1273。中葉　土壙294、631、757、1257。時期不明　70、91、93、448、459、466、539、623、741、742、758、797、907、1032、1089、1276。

石柱及び石棒状自然石を有するもの　新道式期　土壙283は45号柱の南東10mにあるが、底面のあれる浅い土壙で、上面中央に安山岩角石・礫の集石があり、その西寄りに径約 25 cm、長さ 60 cm の円柱状自然石が横転していた。これは一端が丸頭、一端を割りかいているもので石柱ではないかと思われる。石棒の北東、近接して小形有孔鍔付土器が正位で置かれたものがつぶれた状況で、集石脇直下の底より浮いて出土した。墓であれば土器は副葬品で、石棒は墓標としての意味が考えられるし、石棒の屋外祭祀のための土器埋納とも思われる（図版107—2）。図229—14は胴最大径 14.5 cm、現高 8 cm、口頸部赤色、胴部黒褐色、内面炭化物付着するもので有孔鍔付土器Ⅱc型とする。土壙809では石柱片が検出面で、土壙896では集石を伴い、石棒が石の上に倒れたかと思われる状況で出土した。これらは土器を伴わないため時期は断定できないが、中葉の可能性が強い。なお、3基とも検出面は暗褐色土層、集石部は黒土中にあり、下部に浅い土壙を伴うが墓壙としては浅すぎると思われる。前記した副葬品を伴い墓壙としての可能性を強く考えるものにも浅いものもあるが、概して深い。

集石土壙　3号住内集石は土壙番号を付すことを失念しているが、同址 P_8 上部・図17に点線で示す位置の床面より 36 cm 高い覆土上層にある。拳大の礫約150がほぼ円形をなして集積し、下部には浅い掘り込みがみられた。新道式以後ではあるが、時期を特定できない。また、時期不詳の石・礫を相当数もつものに土壙97、378、605、1055、1264、1258がある。集石炉の状況はないが、ケルン状であった可能性もある。

アワ状炭化種子塊を出土した土壙2基がある。土壙1241の覆土中から出土したものは長さ 15 mm、厚さ 6 mm の楕円形を呈し、断面ではアワ粒大の種子が観察される。土壙1257の覆土出土は長さ 20 mm、厚さ 17 mm で、種子を粉状にして団子にしたものではないかと思われ、前者より鱗片状のものが圧倒的に多く、完形に近いものは断面では2粒みられるのみである。前者は新道式期、後者は中葉である。

貉沢式期の土壙75からは栗、新道式期の土壙170からはヒメクルミ、土壙1274からは覆土の全層にわたって多くの木炭片とともに小粒なクリ多数が出土している。縄文土器微少片を伴う土壙421からもクリを得て

いる。

以下、主要な土器の特徴と型を記す。貉沢式　深鉢　Ⅰａ型　図210—20は口径 19 cm、器高 24 cm、RL 縄文を地文とし角押文で文様を構成する。長石・石英を多く、金雲母も含む。同ｂ型　図220—1は48号住出土の図145—1と同一個体と思われ、赤褐色～暗褐色を呈しチャート砂粒等を含む。角押文は幅 3 mm と細く、胴部には結束 RL 縄文を付し頸部の台状把手から垂下させる角押文帯と横走する同文帯の交叉部に半肉彫三叉文が付される。口径 19 cm、現高 11 cm である。この2点は貉沢式の発生段階と思われる。Ⅲａ型　図233—32は胴部3/4残存し、口径 27 cm、現高 18 cm である。浅鉢　Ⅱａ型　図230—24、232—18。新道式　深鉢　Ⅱ型　図234—5は鋸歯状文が三角押文となる。同ｅ型　図227—16は赤褐色を呈し、長石細粒を多く含む。Ⅶb$_3$型　図248—12は口径 27 cm、器高 35 cm の暗褐色を呈するもので、胴部3/4周残存し、下半部に RL 縄文を付す。Ⅹａ型　図227—5。Ⅻｂ型　図228—8は暗赤褐色、長石粒多く金雲母少量含まれ、半截竹管による半隆起線に直交する同具による先端連続刺突を加える。他に図230—5も同様施文である。ⅩⅣb型　同図—9。ⅩⅨ型　図234—8。浅鉢　Ⅱａ型　図227—1。Ⅲａ型　図232—11、230—16。同ｃ型　図231—5。Ⅵ型　図230—23。

平出３Ａ系　Ⅱｂ型　図228—4。Ⅲｃ型　図230—4は花崗岩の風化した粗砂を多く、金雲母少量を含み、全面に大粒な RL 縄文を施す。半隆起線を用いる点で通常の３Ａ系とは異る。他に図228—17がある。Ⅳａ型　図234—17。同ｃ型　同図—3は口径 22.7 cm、器高 31.8 cm、胴の平行線文は７単位である。

なお、型分類しなかった図228—5は隆帯にそって篦具による幅広の押引文があり、区画内を細い三角押文を密施し、横走する同文の間には半截竹管の背面による連続押圧文と先端刺突による円文を付す特異な深鉢である。

エ）　縄文時代後期の土壙と遺物

僅かに堀之内式深鉢片１片を出土した土壙567が該当すると思われる。検出面は暗褐色土層であるが、上層の黒土層から数片の後期土器片を得たのみであるが、南 20 cm の土壙596周辺数ｍの範囲、黒土層下部に図259—7他の出土をみている。この面では少数の礫が散在するだけで、精査したが遺構は確認できなかった。近年、後期遺跡で確認が相ついでいる方形石組墓壙に類似するものがある。土壙980は一部の石がずれているが、南東と北東の壁にそって平石を立て並べていた状況を示す。掘り方と石の間と内部には黒土が入り込み遺物は検出されなかった。更に状況の良好なものは配石状礫群中の土壙1329があるが、後述したい。状況は悪いが、土壙41は底部に石を敷き三方に平石を立て並べ内部空間をつくったと思われる。九兵衛尾根Ⅰ式期の浅鉢片等が、内部の黒土中から出土している。然し、これら遺物が混入したことは周辺の状況から充分考えられ、以上、４基の土壙が後期に属する可能性もある。

カ　配石状礫群（付図１、図95・96・236、図版41・48・49）

遺構　ハレン沢寄りの尾根の北斜面下にある。ローム面では微底地になり、縄文中期遺物包含層である黒土下層の時期まで凹地であったと思われる。重機による表土剝ぎでも地表下 40 cm で石・礫が出はじめている。表土下 60～90 cm に幅７m、長さ28mにわたって径１m強の大石から拳大の礫の集中する箇所が確認された。東西方向に走る礫群の上半は黒土中にあるが、下半部は漸移層である暗褐色土・褐色土層にあり、大石の周辺にも特別な掘り方等は認められなかった。西部は石が密集するが、東部は怖薄で、砂利・

砂は含まれず河川によって形成されたものではないことは確実である。礫群を露呈させた段階で視察に見えた林茂樹・小松虔・武藤雄六の各氏からは環状や方形に石が配列する部分が幾つかあることから配石址であるとの御指導を頂いた。礫間の暗褐色土層中からは微小な土器片（図236）と黒曜石フレイクの50点を得ている。11は厚手で繊維を多く含む花積下層式に類似したもの、12～18は少量の繊維を含む神ノ木式から黒浜式と思われるもの、19は諸磯B式、20～26・31は九兵衛尾根Ⅰ式、30は同Ⅱ式、33～34は貉沢式、28～29・32・35～40は縄文中期初頭である。

下部に土壙が存在する可能性を考え精査した結果、20個の褐色土層へ暗～黒褐色土の落ち込む凹穴を確認したが、当初予想した環状配列をなす部分では検出されなかった。遺物も小片か微細なものでソリフラクション等でも混入することが考えられ、祭祀的なものであればもっと遺物があって良いと考える。この礫群中の土壙は自然の不整合面の凹地と考える方がよいと思うが、土壙1329（図版49—2）は平板な石や、平面を内部に向けて組んだ方形石組土壙と思われ、人為的である。遺物がないため時期不祥である。

礫の性格を知るため断面H—1、M—Lでは深い溝を掘っている。上面程ではないがⅢ・Ⅳ層に径 40 cm の石から礫が散見され、Ⅴ層のローム中には大石を含むものとなっていた。また、南の尾根頂部は工事開始後の断面をみると地表下1mは含石・礫ローム層となっている。従って、これらの礫石が浸蝕の過程で斜面下の凹地に集中したと考えることが妥当と思われる。

キ　近世の遺構と遺物

ア）　掘立柱穴群1（付図1、図97、図版48）

下段テラス部の微高地にある。耕土の直下、黒褐色土層で検出された、黒土の落ち込む方形の掘り方を持つ柱穴列である。最初の確認時には図示された以外の柱穴からも、中央部に柱痕とみれる径15～20の円形の小ピットがみられた。これらには柱の腐植後に流入したとみれる砂質土が入り、上部は砂のみのもみられた。調査の必要上、本址の本格的調査記録まで期間を置いたため、再度削り直し輪郭を確認したため一層浅い柱穴となってしまっているが、地表からは 40～45 cm の深さは持っていたと考えられる。東西方向は列をなすが、南北方向は列が揃わず、このような総柱の建物があり得るのか疑問である。柱痕の存在からみて掘立柱があったことは確実であり P_{20}—P_{27} は S 66°W である。規模は東西 8．5 m、南北 P_{11}—P_{44} 間が 6．8 mである。以下、柱穴の計測値を記すが、（　）内は柱痕の数値である。

P_1 44×33－6	P_{10} 65×51－12	P_{17} 50×42－5	P_{24} (13×18－14)	P_{33} 78×55－10	P_{40} (19×18－13)
(17×16－10)	P_{11} 34×31－9	P_{18} 40×44－6	P_{25} 67×45－9	(21×20－19)	P_{41} 54×44－12
P_2 60×45－12	P_{12} 60×44－9	(21×20－9)	P_{26} 56×45－11	P_{34} 54×41－3	(14×15－15)
P_3 56×47－7	P_{13} 48×42－7	P_{19} 42×36－8	P_{27} 45×38－10	P_{35} 51×40－16	P_{42} 53×52－12
P_4 43×39－8	(19×16－15)	P_{20} 57×42－8	P_{28} 55×48－10	P_{36} 46×48－11	(20×19－15)
P_5 41×43－10	P_{14} 69×52－9	P_{21} 66×57－15	P_{29} 48×44－5	P_{37} 48×46－6	P_{43} 55×40－9
P_6 60×50－11	P_{15} 113×45－10	P_{22} 64×54－14	P_{30} 50×48－9	(20×15－9)	(20×17－14)
P_7 49×47－10	(17×15－14)	(15×15－18)	P_{31} 59×48－9	P_{38} 55×59－9	P_{44} 40×39－8
P_8 48×45－10	P_{16} 50×52－6	P_{23} 51×59－14	P_{32} 68×43－13	P_{39} 55×42－8	
P_9 46×46－8	(19×19－10)	P_{24} 60×44－11	(22×19－15)	P_{40} 59×48－8	

イ）　掘立柱穴群2（付図1、図97・260、図版48）

柱穴及び柱痕等の状況は柱穴群1と同様であるが、同址の南1.8mの距離に平行して検出され、同時存在

したことを示すものと思われる。P_7 と P_{12} の間の検出面には焼土があるが、本址より古い。両址とも下層に検出される土壙群より 10～20 cm 高く、ほぼ現地表から掘り込まれたものと思われ、近世以降の遺構と推定される。一応、棟方向と考える P_7—P_{10} の線は S67°W である。両址とも伴出遺物はない。

P_1 48－39－8	P_4 55×47－13	P_7 53×30－9	P_9 (18×12－8)	P_{13} ？×45－10
P_2 47×45－10	P_5 60×45－6	P_8 50×46－8	P_{10} 52×48－12	(20×19－17)
P_3 48×43－10	(19×17－9)	(25×22－12)	P_{11} 65×46－4	P_{16} 76×52－9
(20×18－16)	P_6 55×47－6	P_9 55×42－10	P_{12} 51×51－6	(21×19－16)

両址ともに柱痕が掘り方底部より僅かに深いが、上部構造物の重量を受けての沈下と考えられる。両址に関連すると思われる遺物は下段テラス部のグリット遺物に若干の江戸時代後期の陶器片がある。灯明皿2個体、灰や鉄釉のかかる埦・茶宛・皿・鉢・甕などの陶片の他にこんろと思われる瓦器、仏飯器の磁器である。図260—32の摺り鉢は明治以降であるが、目の荒い古いものもある。

ク　遺構外出土土器及び土製品

縄文時代早期では細久保式に属するものがある（図261—1～4）。1～3は長石・石英粒を多く含み、器厚 8 mm を示し、1～2は暗褐色、3～4は赤褐色を呈する。4は尖底部で丸底に近く少量の長石粒を含む。楕円文は密施され、1・3の胴部は原体を縦に回転しており、後者の原体は径 12 mm である。茅山式に属すると思われる繊維を中程度含むものがある（図237—1～7）。いずれも暗褐色を呈し、1～3は口唇と断面三角形をなす隆帯に棒状具による押圧刻目を付し、櫛状具による条痕文を有するもので、同式の細分形式でも最末の神ノ木台式の特徴を示している。4～7は内外面に篦整形痕をもつもので、恐らく、前記遺物に伴うものであろう。

次に前期の神ノ木式期については、次の1～6類に分けている。

1類　厚さ 7～10 mm、長石を主とする砂粒を含み、無繊維で焼成の良い土器群である。

A種　一般に明黄褐色を呈し櫛具による条線文と刺突列点文を特徴とする。この種文様帯は口縁部と底部に集中し、中間の胴部は縄文帯となるものが多いようである。器形は口縁部がゆるやかに外反する円筒形に近く、底が僅かに張り出して、揚げ底となる（図237—8～37・238—17・18）。口縁は複合口縁となるものと通常の口縁となるものが混在する。口唇は平頭が多く、丸頭との比は4：1である。口縁部の条線文にそう列点文の施文方法にはそれに直交するもの（図237—8～26・31～37、238—17・18）と平行するもの（図237—27～30）があり、後者の29は条線内に乱雑に刺突し3類Bと共通する施文方法である。

B種　爪形文帯を口縁と底部にもち、胴は縄文か無文帯となるもので、A種の内面が丁寧になでられているのに比し、篦痕を残したり赤褐色を呈するものが多い（図237—38～42・238—1～8）。爪形文にはD字状のもの（38～41・7）とシャープな器面にほぼ直角に刺突するC字状のもの（42・1～6）がある。7は網代底、8は竹管内面による押引くもので特殊である。2・4は微量の繊維を含む。

C種　色調・胎土・器形はA種と同様であるが、竹管内面で刺突した爪形文と八の字状文を施文するものを一括している（図238—9～12・16・19～30、239—4～7）。先端が割れ一見櫛具に見えるもの（図238—9・22～26）がある。図238—9は禾本科茎による刺突文で特異である。図239—6・7はB種とも見られるが、先端を割ったり、ささくれさせている点で、本種に含めた。

D種　平行沈線文帯を口縁部にもつ群である（図238—13～15・31～44・239—1～3）。図238—13～15、239—3はC種にみられる先端の割れた半截竹管による刺突文、図238—31は八の字状文をもつ。図238—31・34は複合口縁で深い篦描き沈線を施文する。以上のものは明黄褐色の胎土精選され、内面も丁寧な調整が加えられる点でA種と共通する。他は赤褐色～暗褐色を呈し、内面の篦痕が顕著である。

E種　複合口縁部に深い平行沈線と爪形文或いは粗い間隔の結節状沈線文を施文する群である（図239～8～10・12～13、244—39）。10は口縁下部にジグザクに刺突する爪形文を、12は単節斜縄文をもつ。

2類　多量の繊維を含み、内面に丁寧な篦磨きを加え、平滑に仕上げる。器厚は1cm前後となる一群。

A種　歯の断面が方形となる櫛状具によって条線文で三角形か菱形区画をつくり、同具による刺突列点文を施文する。赤褐色で胎土は精選される土器群である（図239—14～17）。これらは3～4個体分の土器片があり僅かに小石を含むものもある。

B種　波状口縁突起下部に二重円文を粘土紐を貼付してつくり、重円と口唇にそって結節状沈線文を施文するものである（図239—18）。関山式の古い時期に属するもので、本遺跡ではこの1点だけである。

C種　異条斜縄文を施文する土器群である（図239—19～30・32・34）。19～24は単節縄文と2本1単位の撚糸の条が交差し、25～30は平行する。19は絡縄体の回転施文とみられる。多くは赤褐色であるが、22～24は外面黒褐色である。D種　大粒な単節縄文を持つものである（図239—33・35～37・240—1～10）。

E種　羽状縄文をもつものである（図240—11～16）。11は縦位に、他は横位の回転施文である。

3類　繊維を含み、中厚手の土器である。2類との差は内面の整形が雑で、篦痕、砂粒移動痕を残す。

A種　2類との中間的な内面整形のもので、繊維を含むため芯部は黒色である（図240—17～24）。24以外は内外面とも赤褐色か橙褐色である。18は隆帯に篦刻目をもつ。器厚は10mm内外である。

B種　半截竹管による平行沈線間に櫛具による刺突列点文を付す。施文手法は有尾式と共通するが、多量の繊維を含む点で差があり、有尾式の先駆的なものである（図240—25）。C種　口唇にシャープな爪形文を粗い間隔で付すものである（同—26）。遺構外ではこの1点のみで、赤褐色を呈し、繊維少量を含む。本種は住居址では多数みられ、同じ神ノ木式期の中でも新しい手法と思われるが、後に検討したい。

D種　単節斜縄文と撚糸文がある（同—27～40、図241—1～3）。39・40は整形の差で2類C種と分離しているもので、撚りの異る撚糸の絡縄回転施文である。図241—2・3は諸磯A式にみられる縄文であるが繊維を含むため、一応、この種に含めている。器厚は6～10mmと幅がある。

E種　斜縄文でやや厚く、少量の繊維を含むものを一括している（図241—4～21）。8以外は指頭なで整形である。3類の芯部は黒ずむのが一般的であるが、5・8を除き芯まで赤褐色である。15は結束縄文の横位回転である。13～21は繊細な羽状縄文か斜縄文を施文する。大型深鉢となるものが多い。

4類　無繊維で、内外面とも橙～赤褐色を呈し、全般に明るい色調で、主として縄文を施文する。

A種　羽状縄文、斜縄文を全面に付し、内面は丁寧になでる例が多く、胎土等も1類と共通する（図241—22～44・242—1～43）。1類A種の櫛具にかわって縄文を口唇に付すもの（図241—22）や菱形縄文になるかと思われるもの（同図—25・30）が含まれる。羽状縄文を施文するものは概して口端を平らにする。LR縄文のしめる比率が、他の時期より高い。B種　結束縄文となるが、他はA種と差はないものである（図242—44～48）。C種　内外面とも暗赤褐色、内面の篦なでもやや丁寧である。胎土への砂粒混入も少なく、A・B種に比し薄手である（図243—1～6）。1はごく微量の繊維を含む。6は炭化物付着する。

D種　赤褐色を呈し、内面はザラザラで調整が荒いものである（同—7～33）。E種　内面は指圧か篦による凹凸が目立つが、調整は比較的良く行われている（同—34～43・244—1～4）。34は口唇にささくれだった

竹管による刺突がある。36は微量の繊維を含む。F種　内外面とも暗褐色で、斜縄文を付し、口縁は丸頭である。焼成は概して悪い（図244—5～19）。5～6は櫛具による押引文をもつが、1類A種とはやや異質で、13・16は微量の繊維を含む。20～31はC・D種の胴部と思われる。

5類　中越式類似のものを一括した（図244—32～38）。32は灰黄褐色を呈し、堅緻で中越式の胎土に近く、隆帯に半截竹管内面による押圧を加えている。33～35は少量の繊維を含み、黄褐色を呈し、33～34は金雲母を含む。36は網代底、37～38は揚げ底で胎土等から4類の底部の可能性がある。

6類　東海系・関西系の土器群と思われるものを一括した（図261—6～15）。7は黄褐色、口端部にアナダラ属貝による腹縁部刺突、指圧によるつまみ、櫛による条線文、6～14は茶褐色、薄手、内面に篦、指圧痕による凹凸が顕著で、6・8・13は清水ノ上Ⅰ式の可能性が強い。15は北白川系の可能性もあるもので黄褐色、砂粒多く含む。

諸磯B式　以下の分類基準は良好なセットを持つ39号住で記したものに従っている。

1類　A種（図244—41～43、245—1～12、246—33）　図246—33は灰白色で胎土精選され、他と異る。B種（図245—13～15）。C種（同—13～15）。D種（同18～21）　18はB種との中間型で浮線文間を禾本科茎で連続刺突する。19～21は浮線文上に同様の施文をするものである。

2類　図示しなかった小破片が少量ある。3類（図245—22～31）　22・23は円板状粘付文を、24は口唇に棒状具による押圧刻目を有する。4類A種（図246—1～14）　5は結束縄文、11は部分的に羽状縄文となる。B種（同—15～20）。5類（同—21～32）　21・29は口唇に斜刻目文を、31～32は肩部に同文を付する。6類（同—34～37）　北白川下層Ⅲ式と思われるもので、34は浮線文に斜刻目をつけ篦で刺突し、平行沈線間に爪形押引文を施文する。35は梯子状の斜刻目浮線文で、36は丹彩されている。

諸磯C式　A区M～X列の60～82グリットに散発的にみられる。結節状浮線文を有するもの（図246—39～41、207—1・3・4）とボタン状粘付文をもつものがある。

縄文中期初頭　遺構出土の少なかった時期に中心をおいて図示した。量的には整理箱40個以上の量がある。篭畑Ⅱ式　Ⅰa型　図207—15は図上復元したものである。Ⅱb型　図248—15・16、図249—1～3。Ⅱ型　図249—4～20。Ⅲ型　同—21～34、図250—1～13。Ⅴa型　図207—24、同b型　同—25。Ⅵ型　同250—21、266—3・4。なお、図248—13・14は大歳山類似の結節状隆線文を持つが類例を知らない。

九兵衛尾根Ⅰ式　深鉢　Ⅰ型　図207—16。Ⅴ型　図207—21・23。Ⅵb型　図207—17。Ⅸa型　図290—29。Ⅹ型　同—16。Ⅺ型　図251—6。XIII型　同—7。XIVa型　図207—22、c型　図251—19～24、26XVI型　図251—29～31・252—1～12。浅鉢　Ⅰa型　図253—4～10、同b型　同—11～13、同b′型　同—3・14。

九兵衛尾根Ⅱ式　深鉢　Ⅰa型　図247—1は点線部のみ残存するもので、口径 32 cm、器高 33.2 cm、黒～赤褐色を呈し、結束RL縄文を施文する。同—2は口径 31 cm、現高 13.5 cm で地文を欠く点でやや特異である。同—3は結束LR縄文を付し、底の網代痕は平織である。同—4は繊細な結束RL縄文を付す。Ⅰc型　同—6は結束RL縄文をもち、口縁下の沈線は幅 2 mm で古いかも知れない。Ⅱa型　同—5。他に型分類しない図252—17～27・253—1がある。図252—13～14・16は若干古いかと思われる。浅鉢　Ⅰd型　図247—7は口径 41.5×39 cm と推定され、現高 13.3 cm で暗赤褐色を呈し、長石細粒・金雲母を多く含む。他に図253—18がある。Ⅱb型　同—15は玉抱き三叉文と交互刺突文を有する。同c型　同—16。Ⅲ型　同17は体部が篦削りによる砂粒移動痕顕著なもので貉沢式に入るかも知れない。

縄文中期中葉　貉沢式　深鉢　Ⅰa—図247—8、Ⅲd—同図—9。型式分類しないもの（図254—1～13）がある。浅鉢　Ⅱa—図254—14～16。平出3A系　Ⅰb—図247—11。

新道式　深鉢　II—図247—15。Va—同図—16　1/4個体残存するもので、口径27cm、器高30cmと推定される。幅6mmと4mmの角押文で、底部内面に炭化物が付着する。IVc—図248—3　小羽根状三角押文で底部方形区画と「く」の字状屈折底の芽が出ており、VIIc—図247—13も同様施文具と底部をもち、ともに藤内式に近づいている。VIIb$_3$—図248—2。VIIIb—同図—1。XIb—同図9。XIII—図247—14。XVb—図255—1　遺構内出土はすべてa型で、本例のように短粘土紐貼付文の周囲を三角押文で縁取りするものとしては、この一点のみである。本資料はa型から藤内式期の後出型への橋わたしをする型として注目したい。新道式の後半期に入ると三角押文の施文具が多様化し、小羽根状のもの（図254—20～23）、ねずみ歯錐状のもの（同—25・26）や、先端を平らにそぎ落したものなどが見られる。浅鉢　Ia—図254—17～18。IIa—図255—6～8。IIIa—同—9～10。IIIc—同—17。V—図256—1　体部篦削り痕が残り、口縁には三角押文を横走させ、角押文を2条垂下させるもので古い型と思われる。

平出3A系　図255—18～20・256—2～9。

藤内式　深鉢　図255—3・4・11～16。図示した以外に本式と思われるものは僅かあるのみである。

同中期末葉～後期前葉　曽利V式に属するとみられる「ハ」の字文（図259—1～4）、沈線と縄文を部分的に磨消するもの（同—5・6、260—25）がある。称名寺式には、縄文を地文とし縦沈線、波状沈線で文様を構成するもの（図260—1）や櫛具による波状条線文を有するもの（図248—11、259—8～18）が含められる。堀之内I式では隆帯部や沈線間に列点文を付するもの（図259—19～22）、沈線のみを有するもの（同—23～24、260—1）、磨消縄文となるもの（図260—2～28）、かぶと状鉢口縁片（同—29・30）、無文深鉢片（同—31）がある。これらは遺跡の全面から散発的に出土している。

土製円板　ほぼ全周に磨痕を持つもの24点、一部に磨痕を持つ未成品14点がある。以下、使用土器片の時期別に列記する。九兵衛尾根I式　図263—13・15、264—1・5。九兵衛尾根II式　図263—14、264—15と未成品図265—1・2。中期初頭　図263—17、264—2～4・7・10・12・17、未成品で図264—18、265—4・7～11、貉沢式　図263—12、264—13、新道式　図264—16、未成品で図265—6。中期中葉　図263—11・16・18、264—6・11、未成品で図264—19・20、265—3・5。他に図264—8・9。

深鉢把手　図266—1は諸磯B式の獣面把手で赤褐色、同3は暗赤褐色を呈し、金雲母を含む口径10cm程の小形深鉢片であるが、動物を表現するような具象文を付す。頭部と口縁に細線文を施し篦描き沈線を付しており、4とともに篭畑式である。図265—14は九兵衛尾根I式の終末期とみられ、細単沈線による施文がある。図266—9は顔面を表わすが、棒状突起に粘土紐をまく手法は貉沢式以後に盛行するが、本例は縄文中期初頭の胎土、色調で、同II式の末葉ではないかと推定する。

図267—1は貉沢式の顔面把手で赤褐色を呈する。同2は深鉢胴が頸部に粘土板を貼付し顔面を造るもので同様の色調となり、器面光沢を持つ。同4・6は新道式である。

土偶　図267—7は赤褐色を呈し、前頸部から首へ芯素材痕の貫通孔があり、左右幅4.5cm、前後幅3.8cm、現高4.5cmである。図268—1は暗褐色で剝落があるため、正確ではないが頭部前後幅5cmで、頸部に貫通孔がある。鳥頭に似て口がつきだし、頭頂部と頸部には三角押文を付し新道式期である。同5・6は、それぞれ赤褐色・灰褐色を呈し貫通孔を残す。5は足最大幅4.6cm、現高3.5cmで、6は足指を篦描き沈線で表現している。顔面状土製品　図268—7は裏面に接合された痕跡もなく独立した製品である。径4.2cm、鼻部最大厚1.9cmで隆帯で目鼻を表現し、目は棒押圧を加える。類例がないため時期判断に苦しむが、右目下部に棒状具による沈線かと思うものがあること、赤褐色で長石・石英・輝石を含み、九兵衛尾根II式に近い時期ではないかと推定するが、結論は今後に待ちたい。

5） 大石遺跡に関する考察

ア　縄文時代の遺構に関する考察

ア）　集落構造（付図1、図3、図版1～3）

縄文時代前期神ノ木式期の住居は27・28旧号住のA群と32・33号住のB群に分れるが両群は住居の形態・土器組成に若干の差があり、A群が先行する時期で同時に存在したものではない。北側に隣接するオシキ遺跡にも該期遺物の出土をみることから、日常生活空間は両遺跡にまたがるが、住居址は更にあったとしても一群が追加される程度であろう。A・B群の構成する両址間の距離は、それぞれ、3mと6m強である。神ノ木式から黒浜式の遺物をもつ土壙11基は、16・25号住を結ぶ線から西に片寄り、ハレン沢寄りの尾根頂部の土壙637を中心に5基がまとまる。また、尾根の裾にあたる14・16号住とSTA 247＋80 mのセンター杭の間は遺物が集中する傾向をみせ、ごみ捨て場であった可能性が強い。A群の住居と関連するものであろう。

諸磯B式期の遺構は、6・29号住を結ぶ線の北東側に分布する傾向を持ち、特にセンターラインより東に遺物が多い。調査区は該期集落の西端部に当るのであろう。住居は39号住のみであるが、土壙39基が本式を最終遺物とする。6・36・45号住の間に11基あり、これをA群とするとB群は尾根頂部のセンターにそうSTA 248＋20 mから248＋40 m周辺に20基が集中する。39号住周辺にも貯蔵穴が設けられたであろうが、集落外周部に群をなして貯蔵区域があったように思える。B群中に集石土壙3基が集中するのは、この空間が別の意味を持っていたと考えてよいだろう。集石土壙の性格の究明とともに今後の課題である。

縄文時代中期初頭になると、住居址は14棟、土壙267基と急増する。篭畑式期は土壙13基が確認されているが、15・32号住を結ぶ線より西側に散在し、下段テラスの微高地を選地する。半完形深鉢や小形土器を伴うもの4基があり、墓域の可能性が強い。篭畑Ⅰ式期の土壙152の在り方は周辺に該期集落の存在を予想させる。

九兵衛尾根Ⅰ式第1段階　初期は1・30号住の共存、29・31号は近接した時点での建て直しと考えるが、やや後出の土器様相をもつ。第2段階は28・34・46号住、第3段階は5号住旧・18号住の同時存在で2～3棟の小規模集落となり、判ノ木山東遺跡等比較的近接した位置に、このような単位で同一共同体の2～3単位が散開したのではないかと思う。

同Ⅱ式第2段階　初期は41・42号住の共存、その後に6・7・47号旧住が同時に存在した可能性があるが、遺物の少ない住居があって確信は持てない。中期初頭の住居変遷の中では古い住居の存在を意識している配置となっている。

次に土壙の分布状況を検討すると、九兵衛尾根Ⅰ式期とみる107基、同Ⅱ式期の58基、中期初頭で細分不能の89基は、下段テラス部に多くが集中し、ここでは南側がより濃密な環状をなす。付図1の調査区境界線は最終時の排土との境界線であり、特に下段テラスでは更に北側まで全面調査するか、グリット掘りでの遺構の有無を確認している。しかし、環状をなす住居址群の外周部では土壙分布は稀薄となり、殆んどが住居址帯とその内部に集中した。九兵衛尾根Ⅰ式期には8号住から48号住にかけて紡錘形の空白部が存在する。この南部には農道のつけ替不可能な部分が未掘となる箇所が含まれるが、この傾向は変わらないと思われる。同Ⅱ式期には6号住から14号住にかけての北に開口する馬蹄形の配置となる。両期を通じ副葬品を持ち墓壙とみれるものは18号住と28号住を結ぶ線の南側に片寄る。尾根頂上部では同Ⅰ式期が前記

諸磯B式期土壙群と重複する群と、土壙600を中心とする群とになり、同II式期が土壙751から土壙789の間に集中する傾向をみせる。遺構外での遺物量も下段テラスに比較すると少ないが、頂部住居址と関連のある原沢式前後の遺物が散布する。

縄文時代中期中葉　貉沢式初期　20・44・48号住が該当する。ハレン沢寄りの尾根頂部から北へ少し張りだす支尾根の西斜面に一群をなす。盛期　3旧旧・4・16・17旧・19旧旧・23・40号住が、下段テラスに長径 65 m の馬蹄形集落を形成し、南に開口する。終末期　15・21旧・26・36・38号住が初期の集落があった区域に群をなす。同式期の土壙とした42基は土壙1051が尾根部に孤立するが、他は円周内に入り、中央広場内と住居間に散在し、中期初頭のように環状となることはない。

新道式初期　3旧・13旧・21新・22・47号新住を含めたい。47号新住が尾根頂部に孤立するが、5棟が環状集落をなす。盛期　2・3新・17新・19旧・35・43号住を分類するが、僅少な遺物で判断したものは前後の時期へ変更されるかも知れない。孤状の配置である。終末期　下段テラスにある5新・12・13新・14・19新・24・25号住が該当し、長径 70 m の南に開口する馬蹄形集落を形成するが、将来、土器型式の細分が進めば細分割される可能性はあろう。貉沢式以後は継続的に居住していた可能性が強い。

新道式期の土壙は82基、藤内I式期2基、中期中葉とだけ判別できるものを最終遺物とするもの73基があるが、馬蹄形をなす新道式期住居に囲まれた広場内に殆んどが集中し、広場が貯蔵区域として、また、一部は墓域として多様な機能を果していたものと推察する。

イ）　住居址の形態と炉址の変化

縄文時代前期神ノ木式期終末でも、27・28号旧住は大形で長方形に近いプランとなり棟持柱を持ち、地床炉は北寄りに設ける点で共通し古い形態を残す。しかし、有尾式期に近づく32・33号住は小形の隅丸方形を呈し、有尾式期の楕円形か円形のプランに移行する過程にあることを示していると考えられる。諸磯B式期の39号住は円形に近く、地床炉をもち、県下の該期住居形態と共通する。

同中期初頭九兵衛尾根式から同中期中葉新道式期までの住居址は、規模や多少の変形はあるものの円乃至楕円形を基本とすることは県下の一般例と同じである。篭畑式期には方形か長方形のプランで、地床炉であったものが、九兵衛尾根I式に楕円か円形プランに変化する。ただし、第1段階までは炉の形態は地床炉で、古い生活様式が存続する。しかし、第2段階になると埋甕炉が相当優勢となると考えられ、九兵衛尾根(24)、大芝東(17)、堂地狐窪(20)各遺跡の諸例が該当する。34号住では地床炉とはされているが埋甕があった可能性が指摘されている。以後、貉沢式期まで埋甕炉が原則となり、この点については相当の強い規制があったと考えられる。

九兵衛尾根II式以後、貉沢式盛期までは一般的に径4．30m以下の小形な住居である。貉沢式終末期にはやや大形化する傾向があり、ローム層を深く掘り込む住居が多い。

新道式期初期とした5棟の内で4棟までは埋甕炉であり、47号住のみ地床炉である。初期までは炉の形態に中期初頭の伝統が残る。大勢として小規模な方形石囲み炉へ変化するのは同式期盛期で、6棟の内4棟が石囲み炉で、19旧・43号住の2棟が埋甕炉である。終末期とした7棟は5棟が石囲み炉、2棟が地床炉であるが、石囲みがあった可能性は強い。しかし、茅野和田遺跡東6号住例のように藤内I式の段階まで埋甕炉を残す場合もあり、あくまで例外的存在に考慮を払わねばならないが、新道式盛期以後は藤内式期と共通する方形石囲み炉(35)になっていくといえよう。

また、新道式期盛期以後は石囲み炉への変化とともに、3・5号新住例に代表される卵形に近いプラン

で、4柱に加えて入口部に2本の主柱を持つ構造の住居址が多くなり、大形住居が現われる。

ウ）　屋内祭祀と屋外祭祀

本遺跡では縄文時代中期中葉の住居に、柱状自然石か角柱状の角を僅かに敲打調整した石柱とみられるものを持つ例がある。八ヶ岳南麓における石柱・石棒祭祀については長崎元広氏の優れた論考[55]があり、同祭祀は井戸尻式期から堀之内式期に限定されるとされてきたが、新知見が得られたので所見をまとめたい。詳細については各項を参照されたい。

石柱の屋内祭祀は既に貉沢式に始まる可能性が強い。44号住では推定入口部左側床面に柱状自然石があり、新道式期の石柱入口左部祭祀の原形が完成していたであろう。貉沢式盛期では17号旧住、新道式初期の47号新住、終末期の12・24号住例がある。17号住では、旧住居址の可能性が強い炉址に近接した奥壁寄りの貯蔵穴出土であるが、他は入口部左側に立っていたと推測される状況である。また、この祭祀と直接関連があるか断定できないが、13・24号住で石柱と主軸に関して対称的な位置に、ごく浅い小ピットがあり、完形の乳棒状石斧が埋納されたと考えられる状態で出土している。住居の構築直後に使用した石斧を供献する儀礼が行われたのではないかと思われる。位置や時期は異なるが、14号住 P_1 からの打石斧、30号住 P_{30} から乳棒状石斧がロームにつきささるようにして出土した例にも注意しておきたい。

石柱の屋外祭祀を想定させる例は、20・23号住で上層か、これを攪乱する状況で出土しているものと、土壙283・809・896の3基がある。屋内・屋外とも馬蹄形をなす集落の開口部に近い南半部に集中し、南に突出する47号新住を別にすれば、東西の2群に大別される。各期の集落において必ずしも南端ではないが、それに近い位置にある住居によって分有されることは確かで、屋内においても、集落においても、常に入口が意識されていたと推察される。中期中葉以降は屋内祭祀の位置が多様になるのに比し、強い規制が働いていたようである。

イ　土器・土製品に関する考察

ア）　縄文前期の土器

縄文時代前期中葉で神ノ木式期として扱ってきた土器について、若干、気づいた点を述べたい。（神ノ木式土器の分類は77頁参照）

27号・28号旧・32号・33号住居址は遺物の出土量が極端に少ないものもあるが、ほぼ同様の土器組成から成り、同一形式に属す。該期住居址の確認例は近年増加してはいるが、まだ、他形式に比較すると少ない。従って住居址出土に係るものは殆んどの資料を図示している。

遺構外と住居址出土土器を比較すると、前者では1類A・B種の比率が高く、後者でみられる2類F種・3類C種にみられるシャープな爪形文を施すものが少ない。器面調整では、前者が内外面に丁寧な磨きやナデを加えているのに対し、後者では指圧痕や篦整形痕を残す雑な整形技法のものが多い。従って、本遺跡における居住時間帯の中でも、前者にはより先行するものが含まれると考え、繊維の混入量・整形技法を加味して種別を行っている。しかし、破片での分類のため、文様・整形の差は同一個体の部位による差である可能性が強い。

最も良好なセットを持つ27号住の土器をみると、櫛歯状連続刺突文を口縁に縦位に施文する1類A種は2点あるが、口唇はいわゆる丸頭であり、遺構外出土のより丁寧で古い手法と考える。平頭のものはない。ほぼ器形を知り得る同種深鉢（図98—36）は、施文手法では神ノ木式の特徴を持ちながら、器形は相当の大

波状口縁となり、頸部にくびれ部を持ち、有尾式のものとなる。内面も篦痕が横走し、仕上げの調整を欠いている。同C種に分類している深鉢（37）の口縁には、幅は狭くなっているが複合口縁が残存し、同A種と同じ施文手法がみられる。しかし、その施文具は櫛歯を意識しているが、篦具の先端を割るのみである。本例と同様のものは遺構外に1点（図238—9）あり、同じC種に含めてはいるが、櫛歯状刺突文から竹管内面によるハの字や逆コの字状連続刺突文（10～28）へ変化する中間の手法と思われる。

関山式の特徴である異条縄文を用い菱形とすると思われる2類C種（図99—5）は、32号住例（図102—3）では主要部が上層出土であるが本址のは中層で出土し、小破片ではあるが本址の時期に伴出すると考える。また、付加条縄文（図99—27）の存在も注目されよう。住居址の形態は、近接する28号旧住が柱穴からプランを推定させるのみであるが、大形の長方形となり共通する。両址の同時存在の可能性は高い。

32号住での1類A種、2類、6類はプラン確認時の最上層遺物で、本址に伴うとは断言できない。1類E種（図102—2）は有尾式の特徴を持つ。4類D種に含めた口唇部を篦具で押圧或いは切るもの（9・10）は、唯一の床面出土例（13）とともにLR縄文であるが、類似し後出の形式に多いものである。33号住では2類C種（22）が上層で出土しているが、1類B種で半截竹管によって口縁に3条、器面へ直角に近い角度で連続刺突するもの（20）と、D字文3条を底部に施文するもの（21）は共伴関係にあるものとみて良い。両者は『信濃史料』の神ノ木式・有尾式には含まれていないが、千鹿頭社2号住[3]に類例があり神ノ木式期に属するものと思われる。近接する両址はやや小形な長方形のプランで類似し、前記2址とは相当離れるため、それらからの廃棄遺物が混入する恐れは少ないと思われる。これら両址相互間での遺物の混入はあり得るが、前記2址より若干有尾式へ近づいた時期と考えたい。

次に近隣遺跡の中越式を伴出し、本遺跡より古い①千鹿頭社遺跡2号住とその可能性のある②下菅沢遺跡[4]、③中村遺跡[4]、有尾式とされる④よせの台5号住[5]、遺構外で伴出関係不明の⑤男女倉遺跡C2地点[6]、⑥よせの台遺跡遺構外遺物などと本遺跡を対比してみたい。（以下、遺跡名について①～⑥で略記する）。

1類A種　条線に直交する連続刺突列点文の一群は、①～⑥の全遺跡にみられる。⑤で10類とされたものは5本歯の櫛具であるが、本遺跡では3～7本と幅がある。⑥の5類中には条線によるコンパス文がみられるが、本遺跡にはない。また、27号住で1類C種に分類している押引手法のもの（図98—37）は①にみられるものの新しい手法と思われ、申し訳程度の複合口縁である。B種の粗大な爪形・D字刺突文は①にあり器面直角に刺突するC字文は⑥の8類中に存在する。シャープなC字文となるもの（図237—42・238—1～6）は①に1点あり、揚げ底となる。C種　逆コの字となるものは④に半完形品があるが、本遺跡のような爪形か八の字文を付す複合口縁となるものではない。この種の底部は1類B種の八の字等に替わった変形とみる。D・E種は④にあり、⑤では11類に該当する。本遺跡では複合口縁となるものも多く、神ノ木式から有尾式への移行期とみたい。

2類A種　条線文に平行に櫛歯連点文を付すものは①の2・7号住にあり、⑤の10類にほぼ該当するが、繊維は殆んど含まず、むしろ、本遺跡1類A種の一部（図237—27・18）と共通点が多い。本種は多量の繊維を含む点で、後者より若干先行する可能性が強い。B種（図239—18）は関山式の古い方であるが、6類中の中越式とみられるものと共に持ち込まれたものであろう。C種は①にも菱形縄文となるもの[7]が含まれ、神ノ木式全期を通じて存在することが証明されたと考える。F種の口唇隆帯を篦刻目するもの（図99—6）は①の3号住にみられるが、無繊維で、4類D種（図102—9・10）に近い。器形は若干異なるが施文方法の共通性から神ノ木式終末に出現するものとして良い。

3類B種　⑤で11類とされ、有尾式である。4類A種にみられる複合口縁をもつものは②・⑤・⑥にあ

る。⑥では6類とされ、B～F種は7類に該当すると思われる。

以上の検討結果から、上記の土器群は神ノ木式終末から有尾式の初期、戸田哲也氏の指摘する移行期の良好なセット関係とみたい。[8] しかし、同氏は神ノ木式の底部はほとんど平底とされるが、本遺跡では揚げ底となるものが多いことを強調しておきたい。

イ） 縄文中期初頭の土器

藤森栄一・武藤雄六両氏らによって確立されてきた八ヶ岳山麓の編年体系をもとにして、本遺跡における型式分類を行い、若干の考察を加えたい。ただし、「梨久保式」は以下の各型式に細分されるため、ほぼ併行関係にある篭畑式を採用する。篭畑Ⅰ式は少量の遺物があるのみで対象からはずしたい。

(i) **篭畑Ⅱ式** 大分類は口縁の形と施文、小分類は下半部の形によった。a型は張り出し底と直立に近い胴部のもの、b型は胴部のふくらむものである。Ⅰa〈図207—15、221—13〉 口縁がくの字に内折し、ほぼ全面に縄文を持ちY字文を持つ。Ⅰbと断定できるものはないが、梨久保遺跡出土例が該当する。[9]

Ⅱは結節状沈線文帯を口頸部に持つもので、Ⅰとほぼ同様の器形となる型である。Ⅱa〈図213—11、248—15〉 前例は駒ヶ根市中沢高見原横山B地点遺跡1号住[10]（篭畑Ⅰ式の良好なセットを持つ）土器の後出型とみられる。Ⅱb〈図244—23〉。 Ⅲは内湾する口縁部に特異な隆帯貼付文を持ち、平行沈線や隆帯に沿って三角印刻文を付し、胴部にはY字文が施文される。

Ⅲa〈図216—15、123—1〉 前者は橋状把手を頸部に持っているが、器面に貼り付き終末期のものと思われる。Ⅲb〈図146—15〉 宮ノ原貝塚[11]と対比するとⅡは5群a類、Ⅲbは同C類に類例を求め得る。

Ⅳは器面全体に平行沈線を施すもので、篭畑Ⅰ式では胴部が2～3の横帯区画されるのに対し、単純なものとなる。Ⅳa〈図221—12、224—22〉 前者は土壙855で九兵衛尾根Ⅰ式片とともに出土している。Ⅳbは土壙848出土の完形品があったが、盗難のため図示していない。

Ⅴは半隆起線か平行沈線に沿って三角印刻文を付すが、篦による刺突になり退化している。Ⅴa〈図207—24〉。 Ⅴb〈同—25、221—21〉 後者は九兵衛尾根Ⅰ式に盛行する竹管による交互刺突文に近い。

Ⅵ〈図221-9〉 円筒形の胴から口縁が直に外反し橋状把手を持ち、楔形文を胴部に施す。樋口内城館遺跡土壙79出土例[12]の後出型である。

この時期は該当する住居址がないため新事実は多くない。しかし、土壙848でのⅠa〈図221—13〉、Ⅳb、九兵衛尾根Ⅰ式浅鉢Ⅰa〈同—10〉の共伴関係にあった。後者は五領ヶ台Ⅱ式で、篭畑式段階での確実な出土例を知らない。本遺跡でのⅠa、Ⅳ、Ⅵは篭畑Ⅱ式の終末段階で、浅鉢Ⅰaはこの時期に発生したことを示している。また、Y字文を持つ図132—2、139—2は九兵衛尾根Ⅰ式の30号住出土であり、九兵衛尾根Ⅱ式まで残存する。

(ii) **九兵衛尾根式Ⅰ式** 篭畑式以来の半截竹管による平行沈線・半隆起線・交互刺突文を多用する土器群をⅠ式、主として竹管か棒状具による単沈線で文様を構成する土器群をⅡ式としている。まずはじめに深鉢の分類を概述したい。

Ⅰはくの字形に内折する口縁となり、主として交互刺突文を持つ口辺と縦平行沈線を施す口縁下部の長さの比が1：3程度である。胴部はb・cが円筒形で直立する底部か張り出し底、a・d・eが上部でふくらむものとなる。a・bは篭畑式の手法を残し、結節状沈線と隆帯部爪形施文のみで、扇平南遺跡に類例をみる。Ⅰa〈図108—1〉。 Ⅰb〈同—3、140—18〉。 Ⅰc〈108—4〉。 Ⅰd〈同—8・10、109—1〉。c・dになって初めて胴部を懸垂文で4単位に分割し、典型的な本式となる。1号住では以上の4型式が

IIb・XIIとともに床面で共伴している。Ieは球形に近い胴となり、大形の渦文を配するものが主体で、北八王子西野遺跡5類[14]、宮ノ原貝塚9群[11]に類例をみるが、後者は沈線でより後出の手法と思われる。図108—9・11は1号住上層、図125—28は同址と同時存在とみる30号住を切る28号住出土で、より新しい。胴部の長方形区画は同址出土の図125—23、30号住上層の図132—6、1号住上層の図109—4と共通し、末尾とは区画の接点へ竹管外面による押圧文を持つことでも共通する。1号住床面の図108—7・8は楕円区画で接点の空白部を半肉彫三叉文としている。近接する時間の中で楕円から長方形区画への変化があり、Ibの頸部にある小形の同心円文・渦文が大形化して胴下部へ移動してIeが成立したと考える。そして、宮ノ原貝塚土器221を経由して、船霊社遺跡土器1・5・64の九兵衛尾根II式[15]へ継承されてゆく。

IIa〈図125—23、132—6〉　Idの口縁部が退化し、その下半部をぬいた器形となる。IIb〈図109—6～8〉　椚田遺跡A2類[16]に該当するものである。IIc〈図109—9〉　前者に繩文を施文したものであるが、後半期の手法とみられる。

IIIはIの口辺と口縁下半部との比が1：3であったのに対し、2～1：1となり、下半部が無文帯となるものもある。IIIa〈図108—2、128—18、129—1、218—3、222—9〉　他形式との伴出関係は土壙481でIVa・XIVa、同485ではIVa・IIIと組み、1号住では上層、29号住では床から出土している。Iの後出型である。IIIb〈図226—28〉。　椚田遺跡A1類176と類似する。IIIc〈図131—19〉。

IV　I及びIIIの口縁に施文される縦平行沈線文帯が簡略化され、数条を単位とする平行沈線群を4～8単位施文するだけか、口辺部に横走させるだけで、頸部との間を空白で残すものである。IVa〈図110—20、114—15・16、128—17、129—2、135—5、142—7、218—2・5〉。　図129—2は胴部に繊細な繩文を持ち、218—2は三叉文を交互に付すもので椚田遺跡F1類中にある。IVb〈図109—3、130—9、143—12、207—8〉。　大きな波状口縁で、橋状把手に替わり粘土紐を貼付し、左右からつまんだ蝶ネクタイ状把手やV字状把手を付する。

V　口縁の形態は不明であるが、円筒形の底部に数条の横走する平行沈線文帯を持つ。図133—1は波状をなし下層で、図109—15、126—2、132—8は直線で描き、末尾は上層で出土した。波状の方が古い手法である。後者は大芝東遺跡[17]、宮ノ原貝塚、椚田遺跡に類例をみる。

VI　円筒形の小形な深鉢である。VIa〈図109—12、133—6〉　口縁部隆帯に爪形文を付し、前者は胴部に結節状沈線文を使う。IVb〈図109—11、133—7、207—17〉　前者は交互刺突文帯上部に角押文、後の2例は沈線に直交する押圧列点文を付し、XIVと同一手法である。aはbより該当住居の上層で出土し古い型と考えられる。

VIIa〈図115—1・4、123—16、126—1、225—2〉　IIの頸部文様帯に比し、斜格子文・平行沈線文の幅広な施文帯を有する。器形は円筒形と胴のふくらむものがあり、後者に属する図225—20は胴部に繩文を持ち後出と思う。VIIb〈図125—20〉　aの口縁が幅広くなり、口唇と隆帯に連続爪形を施文する。

VIII〈図132—12、142—13、218—4〉　頸部の横走する平行沈線文帯の一部に、同具による2点組の押引列点文を付し、結節状沈線文の変形手法を有する。頸部に蝶ネクタイ状把手を付す。

IX　Iabの屈折する口辺が消滅したものである。内湾する口縁には縦平行沈線帯を持ち、胴部は同文による懸垂文で4区画する。IXa1〈図109—2、125—19、191—11〉　扇平遺跡土器[13]13を範型とするもので、頸部にV字状把手を付する。a2〈図129—5・7・9、134—18・19・22、139—10、211—15〉　大芝東遺跡に多出するもので、口唇に爪形・刻目・押圧文等を持ち、結節状沈線文を多用し、隆帯に爪形を施文する場合は粘土が竹管からはみ出す。交互刺突文を持たないものが多い。椚田遺跡8類に該当する。

b〈図132—3〉　曽利40号住土器1は胴部が円筒形となるが、ほぼ同一のモチーフである。c〈図123—12〉口縁部が矮小化し、頸部は角押文間に交互刺突するもので、椚田遺跡に類例をみる。[18] c〈図200—2〉　暗赤褐色で雲母を多量に含み、浅鉢のと共通し異質である。頭殿沢遺跡のはd型であるが、同様の色調・胎土となる。d〈図129—10、217—10〉　篦描き沈線と替わるもので、後者は九兵衛尾根II式と伴出するが、本型の最終段階を示すために含めた。

X〈図130—6〉　半隆起線で長方形区画を不規則に配し、内部も同線で埋める。このように全面に施さず、胴上半部に持つものは上平出遺跡にみられる。[19]

XI　頸部に角押文を横走させ、胴の下半部まで平行線文で埋める。胎土・色調はXIc′と同様である。a〈図135—19〉　b〈図125—22、136—7〉

XII〈図108—7〉　胴部の半楕円乃至楕円区画内を半隆起線で埋めるもので、頸部文様帯の一部に用いられる例は中期初頭でも散見されるが、本例のように多用する例は少ない。本式でも後半期とみられる堂地狐窪遺跡土壙7出土例は図125—28と同様に区画交点に竹管背面による押点を有する。[20]

XIII〈図130—8・9、131—20、193—16〉　宮ノ原貝塚9群b類に親縁関係を認めるが、暗赤褐色～黒褐色で器面を丁寧に磨き、半隆起線・平行沈線・結節状沈線が用いられる。沈線・角押文を併用する図114—20も含められよう。

XIV　角押文・単沈線に直交する押圧列点文で文様を構成する。a〈図133—11、139—18〉　西野遺跡2類、東方第7遺跡6群10類[21]に類例をみる。角押文を付すが、全器形が不明のため亜種とする図137—20～27、140—1、225—29があり、暗赤褐色で雲母を多量に含み、丁寧な器面調整のものが多い。b〈図133—13〉扇平遺跡土器16・17に近似する。c　宮ノ原貝塚7群b類、清水ノ上貝塚第三群1類A[22]等にみられる半隆起線・単沈線に直交する押圧列点文を持つ群で器形雑多なものをまとめた。半隆起線の例は図112—13・14、126—20、136—25～29があり、他に28号住で小片1が床面で出土している。単沈線の一群は図112—40～43、128—9・10・12、130—30～31（後者は花崗岩砂含有）、136—30～35などがある。そのうち図136—30が31号住生活面出土であるが、調査期間が長期にわたり、土柱からの転落の可能性があり、大部分は同址最上層～中層から1号住では該当グリットと上層から出土し、九兵衛尾根I式の前半期には伴わない可能性が強い。ただし、図251—14～18は三角印刻文を付すが、前2例は細線文を有する五領ヶ台I式で、本式前半期に伴出したかと思われる。九兵衛尾根II式の7号住では該当グリットに1片あるのみで、船霊社遺跡でもない。大芝東遺跡では、少量ではあるがIXaと伴出している。d〈図212—7〉　土壙68で九兵衛尾根II式[15]の初期と思われる小片と伴出したものである。

XVa〈図126—3、132—5〉　IVaと区画手法は基本的に同一だが、交互刺突を持たず結節状沈線文手法の2点組の押引文がある。椚田遺跡F1類、曽利40号住に類例をみる。b〈図109—4、110—32、111—11～19・27、112—1、123—9、135—8、136—1〉　半隆起線区画内を繩文で埋めるもの（b1）と斜格子で埋めるもの（b2）がある。椚田遺跡に少数と堂地遺跡1号住にある。c〈112—25～36、130—33、136—13～19、217—2、220—27、222—14〉　繩文を地文とし平行沈線を隆帯に沿ってひき、玉抱き三叉文等を隆帯で三角区画や唐草文をつくる。堂地狐窪遺跡土壙13出土例は半隆起線で、本型の先駆型である。d〈図141—20〉　円筒形で半隆起線を垂下させる。

XVIa〈図121—14、123—2～5、135—6、137—28、138—1・2、142—21、175—17、251—29～31、252—1～7〉　清水ノ上第三群第1類Bの口縁部であるが、茅野市頭殿沢遺跡[23]で図上復元可能なものを始め相当数が出土しており、多くは鉄かぶと形となる。器形分類はそちらに譲るが、本遺跡における所見を

記す。色調は赤褐色から橙褐色を呈し、花崗岩帯のやや大粒な砂粒や、片麻岩・チャートの磨耗したものもみられ、XIV c の一部にも同様胎土のものがあり、明らかに移入品である。波状口縁の内面に縄文を付す図251—31、252—10、突起部爪形隆帯間に三叉文を持つ図21—14、同隆帯間に禾本科茎による刺突円文を付す図138—2がある。幅広の結節状沈線文や三叉文を持つ図252—9・10もある。清水ノ上では第1類Aに含められている篦切沈線を持つものは同Bに胴部片がある。図251—29がそれで、半隆起線も併用している。b〈図122—8〉　18号住埋甕炉で使用された土器を範型とする。同遺跡第1類Aの土器49～51は次のc型の隆帯部にも用いられるものと共通の手法を持つ。c〈図117—15〉　多分かぶと状の器形となるのが、5号旧住埋甕炉である。d〈図164—7、141—28〉　隆帯に沿って半隆起線を走らせるもので、口縁下部と胴の2箇所でふくらむ器形となるものと、甕形のものである。e〈図252—8・11〉　口縁が僅かに内湾するか直立、円筒形となるもので、口頸部に波状隆帯をめぐらす。前者は楔形文を付し、径2mmの禾本科茎による2点組の押引列点文を地文とする。後者は片麻岩の磨耗した砂粒を含み、移入品と思われる。f〈図119—6〉　頸部に結節状沈線を持つ。

本型群は後記する本式第1段階の住居において、覆土土層で検出され、この段階に共伴しないことは明らかである。5号旧・18号住では、床面遺物が僅少で所属時期を確定するには不安がある。類例を他に求めると、月見松遺跡59号で浅鉢Ⅰbと共伴するものが、半隆起線・楔形文・三叉文を持ちa・bと同一手法である。ただし、器形(2)を異にし貉沢式期の可能性が強い。大芝東遺跡には存在しないが、九兵衛尾根II式期第1段階の船霊社遺跡14号住にみられる。aに該当する土器NO.63は同址生活面でIX a・XV cと共伴し、間層をおいて本格的な九兵衛尾根II式が上層にある。同1号住も原沢式期であるが、覆土中からaが5点出土した。ところが、後出の11号住ではeに該当する土器NO.35が上層にあり、再流入した可能性が強い。船霊社遺跡両址の時期にセットの一部を構成する形で存在したと考える。これは頭殿沢における所見とも一致する。大芝東遺跡には本群はない。

XVII a〈図226—31〉　椚田遺跡B2類土器194に該当する。b〈図126—5〉　頭殿沢遺跡14号住埋甕炉と同一施文手法を持つ。

XVIII a〈図223—3〉　上記のSB14出土土器NO.22と類似する。b〈図223—1〉。

以上、型式の特徴と一部出土状況にふれてきた。以下、各段階の住居について、層位別に型式の伴出関係を第1～3段階に分け、型式の所属を考えたい。本遺跡で不足のところは近隣の他の遺跡で補う。

第1段階　1号・30号住の床面出土は、深鉢Ⅰa～d、IIb・c、VI a、VII a、XII、浅鉢Ⅰaである。切り合い関係から、若干後の住居址である29号住ではIII a b、IV a、31号住ではⅠc・e、III a、IV a、V a、VIII、XIII、浅鉢では竹管幅が細くなる傾向を持つⅠa・bが伴出関係になる。土壙481ではIII、XIV a、同485ではIV aとVIIIが組む。

第2段階　良好なセットを持つ大芝東遺跡2号住及び遺構外出土土器群を、本遺跡で設定した型に分類すると、IX aを主体にX・XIV c・XV a bがあり、少量のXIV cが伴出している。浅鉢では幅の狭い連続爪形を付すⅠa・bが各1点存在する。同遺跡には本遺跡にない型もみられるが、中心はこの段階にあるとみて良い。これに近接する堂地遺跡にも該期遺物があり、1号住居址から少量出土している。山梨県に類例を求めると、上平出遺跡土壙群の良好な資料がある。上記の2遺跡より多少古い要素を持つと思うが、同遺跡土器NO.58の頸部には短い円筒状粘土紐を把手に替って貼付し、連続爪形文を密施する。この手法は前後の段階では今のところない。これが両遺跡に存在し、同遺跡で人体文としている胴部平行沈線による手法は、本遺跡28号住（図126—1）、31号住（図136—6）の生活面遺物にある。上平出遺跡の土器群は、

本段階の初期に位置づけて良いと思われる。

本遺跡では、床・生活面遺物からみると、28号住がⅠe・Ⅴa・Ⅸa・Ⅺb・浅鉢Ⅰb、34号住がⅣa・Ⅴa・Ⅷ・Ⅸa・ⅩⅤc・浅鉢Ⅰb′を伴う。また、これら諸群の土器は第1段階の各住居址の土層遺物であり、特に30・31号住上層には集中的にみられる。28号住にやや時間をおいて廃棄されたⅪb—図125—22の胴部施文手法を手懸りに類例を求めると、曽利遺跡30号・40号住のセットが浮び上がる。(18) 扇平遺跡小竪穴群出土の土器 No. 13 はⅨa、No. 16 はⅩⅣで、この段階に入れて良い。(13)

第3段階　九兵衛尾根Ⅱ式への移行期であるが、5号旧・18号住が該当すると考える。両址ともⅩⅥb・cの埋甕炉以外に床・生活面遺物は殆んどない。後者では数片あるが、平行沈線文のみであることは遺構の項でふれた。ⅩⅥの土器を持つ貉沢6号住は九兵衛尾根Ⅱ式でも終末期の深鉢と組み、対象外である。図124—22の類例は、近隣の遺跡ではない。(24) 強いて求めるなら大芝東遺跡図44—1、45—23があげられ、それの後出型ではないかと思われる。ⅨC・d、ⅩⅤbの一部、図123—9、同c、ⅩⅦa bと組む可能性が強い。また、月見松遺跡12号住は頭殿沢遺跡の古い土器と共通し、この時期と考える。(40)

（iii）**九兵衛尾根Ⅱ式**　まず、最初に船霊社遺跡の該期住居の土器出土状況を検討すると、本式も次のように3段階に分別できることがわかる。

第1段階　縄文か結束縄文を地文とし、半隆起線・平行沈線・単沈線によって文様を描出する。同遺跡1号住土器 No. 1・3・5～8、14号住同58～61・63・64が床面遺物で、上層に後段階の土器が廃棄されている。原沢式のセットが抽出できるものと考える。土壙出土では同73・77があげられる。

第2段階　隆帯区画内に単沈線で文様を描き、胴部の沈線によるY字状懸垂文が未発達なもので占める。9号住土器 No. 17・18、232～241、10号住同19が該当し、頸部には九兵衛尾根Ⅰ式のV字状把手を胴部に懸垂する隆帯にまたがせる手法で貼付する。船霊社遺跡にはY字状懸垂文の発達した住居はない。

第3段階　単沈線で文様を構成するものは、再びY字状懸垂文が退化し、無文の深鉢がセットの半数を占める。この無文土器には貉沢式への萌芽がみられ、口縁に九兵衛尾根Ⅱ式の特徴であるフの字文を貼付しながら、胴には貉沢式の鍵状隆帯懸垂文を持ち始める。11号住がそれで、床面には土器 No. 25・27・30・32・33・38～41 があり、上層にはプレ貉沢式の土器同24・26～31・34・37が出土しており、九兵衛尾根系では縄文を全く施文しないものが出現し、貉沢式系では縄文を施文している。平出3A系では貉沢式期に多出するもの（No. 38）が生活面に散乱し、既に九兵衛尾根Ⅱ式の終末期に出現したようである。

以上、船霊社遺跡の各段階に対比して、次に本遺跡の様相をみたい。

第1段階　破片で存在する。〈図121—15、131—12、236—2〉　末尾の深鉢は、前型式に含めた図220—27と共存した可能性もあるが、型式的には後出で、船霊社遺跡土器 No. 19 へ橋渡しする型と考える。

第2段階　6・7・41・42・47号旧住が該当する。後記の3軒は胴部Y字状懸垂文が未発達の初期の住居で、前記の2軒は同文を付す深鉢があり、曽利遺跡37号住他と対比される最盛期の住居と考える。ただし、図119—2は20号住にみられる型で、上層遺物の混入と思われる。(18)

Ⅰa　口縁部が外反する円筒に近い器形となるもので、〈図219—1・2〉が初期、〈図247—1〉が盛期を代表する。Ⅰb〈図122—11〉　胴部は円筒に近いが、口縁が内湾するものである。Ⅰc〈図212—9・16〉にみられるように、梯子状の文様のものは前段階の可能性も強い。

Ⅱ　胴の張り出す甕形となるものである。a〈図271—5〉　縄文を付す短い口縁が外反して付く。船霊社遺跡土器 No. 40 から発展したと考えられる。b〈図119—17〉　同様の口縁が内湾して付くが、胴部も縄文のみ施文する。c〈図217—11〉　口縁に比し胴が低く、波状口縁となるものもあり、口縁・頸部・胴

部の3文様帯に区画される。b・c型は頭殿沢遺跡に類例をみる。d〈図119—16〉　口縁が極端に短い。

Ⅲ　無文の深鉢であるが、個体数は少ない。図214—5が器形を判明させるのみで、図123—23、124—26からみて細分されるが、今後に期待したい。最後尾例は次の段階に属する可能性もあろう。

第3段階　船霊社遺跡以外に月見松遺跡60号住が該当し、2点の深鉢が図示されている。その27図4の土器と図190—20の手法が類似する。図247—2[(2)]は船霊社遺跡土器 No. 55 の縄文が消失した後出型と考えられる。充分な検討もしないままに貉沢式の初期段階としたⅠc〈図188—1・217—1〉は同遺跡11号住に類例があり、この段階へ移したい。

次に九兵衛尾根Ⅰ・Ⅱ式に伴う浅鉢についてふれておく。

Ⅰa〈図116—2、133—16、221—10〉　口縁内面に3条以上の連続爪形文を持つもので、一般に五領ヶ台Ⅱ式とされるものの最古型式である。Ⅰb〈図133—18・20、138—18、139—1〉　細い爪形文が多くなり、外面に平行線文を口縁に沿って横走させ、或いは懸垂させる。少数ではあるが、沈線や角押文を施文する場合もある。この型は九兵衛尾根Ⅰ式第2段階の大芝東遺跡には存在するが、同Ⅱ式への移行期段階以後の船霊社・頭殿沢遺跡には皆無である。本遺跡の状況からみて、第1段階の後半から第2段階にかけて盛行したと考える。この時期に並行する北八王子西野遺跡の組成からみても、妥当な結論である。月見松59号住[(2)]で本型が阿玉台Ⅰbと伴出したとされるが、後者は61号住[(14)]の貯蔵穴に落ち込んでいたのを誤認していると考える。筆者は、かつて堂地狐窪遺跡で原沢式に伴うとしたが、これを訂正したい。Ⅰg〈図211—11〉　細い角押文を口縁に持ち、一見して貉沢式と思われるが、同図10と共伴し、九兵衛尾根Ⅰ式の後半か原沢式期であろう。類例を知らないため確信はない。Ⅰf〈図133—22〉　本例も同様である。以上が九兵衛尾根Ⅰ式に伴出する浅鉢で、以下は同Ⅱ式に伴出する型式である。

Ⅰd〈図247—7、121—20、143—10〉　頭殿沢遺跡と本遺跡とを考え合わせると、原沢式から九兵衛尾根Ⅱ式の初期の型と考える。Ⅰe〈図204—14〉も同様である。

Ⅱa〈図116—8・9〉　原沢式に伴う型である。Ⅱb〈図211—12〉　九兵衛尾根Ⅱ式の初期に伴う。Ⅱc〈図189—18〉　同Ⅱ式の盛期である。Ⅱd〈図185—1〉　同Ⅱ式終末から貉沢式期であろう。

ウ)　縄文中期中葉の土器

(i)平出第3類A系　いわゆる平出第3類Aと呼ばれる一群の土器をまとめる。

Ⅰ　口縁を平行沈線で埋める。a〈図118—14〉　口縁部に結節状沈線か、或は、口縁肩部の隆帯に幅の狭い竹管で爪形を付す。船霊社遺跡11号住床面近くに散乱した No. 38 の型と共に、九兵衛尾根Ⅱ式終末の可能性があるが今後の資料の増加を待って再検討したい。b〈図166—1、247—11〉　縄文の地文を持ち、胴に逆U字区画内を格子文で埋める。c〈図154—19〉　口縁に半隆起線による縦施文を描き、胴部にはbと同様の施文をする。d〈図203—12〉　胴部が円筒形に近づく型である。

Ⅱ　口縁に篦切沈線による斜格子文を有する。a〈図122—13〉　隆帯に半截竹管による錨状の刺突文を付するもので、平出3A系としては未完成な型である。b〈図166—2、175—15、199—20〉　胴部等に縄文の地文に持ち、頸部からの平行沈線によって4～8単位に分割するのを基本とする。末尾例はいわゆるトンボ文を持つ深鉢(図203—4)と共通する施文を持ち、図163—4、荒神山遺跡103号住居例へ変化して行く型である。c〈図197—3、199—19〉　縄文を施文しない型である。Ⅰ・Ⅱ型は貉沢式期に伴出する。Ⅰd、Ⅱcは同式終末期に伴う型でⅢと共伴する場合が多い。

Ⅲ　縄文を地文に口縁下部は縦平行線文、頸部にX字状文を持ち、そこから2～3本組の平行沈線を垂

下させる。a〈図151—4、160—4、163—4、179—7〉。　b〈図151—5・6、185—4、197—2、205—3・4〉　貉沢式から新道式への移行段階に発生し、3号住の床面・生活面の時期、新道式の初期に盛行した型と考えられる。貉沢式深鉢で伴出関係にあるものはⅠb、Ⅲb・e、新道式ではⅠa、Ⅱe、Ⅶc（図149—1）、Ⅷa・c、Ⅻ、XⅢb′等があげられる。Ⅳaの内で図166—3は同2と共伴し、肩部に竹管押圧文を付すものはⅣaの紐線文の先駆型となり、古いらしい。

Ⅳa〈図145—14、163—6、173—10、180—4、185—7〉　Ⅲbの縄文が消失した型である。図173—7～9、196—2は前の群に紐線文が口縁や頸部に付加されたものである。前者は2号住のセットから三角形区画が発達した新道式の盛期の型と共伴する。後者は19号新住生活面から2点、35号住床面で1点の出土をみた。伴出関係にあるのは新道式後半の深鉢である。藤内式期まで継続されるが、塚田光・神村透氏らによって、平出第3類Aの定義付がなされた典型的な型である。Ⅳb〈図185—5・6・8〉　胴部にⅠbから退化したと考える逆U字型懸垂文を粗間隔で付けるもので、貉沢式から新道式への移行期に多出する傾向がみられ、紐線文を持つものは後出型である。b′〈図163—5〉　頸部が平行沈線による三角区画的になる。c〈図234—3〉　同じく斜格子にする型である。

Ⅴ〈図151—7、188—6〉　円筒形に近いもので、3号住の所見ではⅢaより新しいと考える。

Ⅵ〈図191—6〉　藤内式期のものであるが、本遺跡では少ない。

(ii) **貉沢式**　次に貉沢式の深鉢の分類を示す。

Ⅰa～eは九兵衛尾根Ⅱ式から貉沢式への移行期の型である。Ⅰa〈図210—20〉　円筒形の胴に直に広く口縁を付す器形で、RL縄文を地文に角押文による施文をみる。a～dは陰と陽の差はあるが、口縁に楔形文を連続して施す。Ⅰb〈図226—1〉　内湾する口縁で、胴が脹む器形となる。頸部の台状把手から結束RL縄文を付す胴に、角押文による長方形区画を連結した文様が施文される。土壙1186出土であるが、図145—1の出土した48号住とは近接しており、同一個体の可能性が強い。類例は船霊社11号住にみられるが、口縁形が短く施文も若干異る。同遺跡深鉢23・24が該当し、より貉沢式に近づいている深鉢28・29と共に上層で出土し、下層の九兵衛尾根Ⅱ式の終末期に発生した無文か胴部に鍵の手状の隆帯懸垂文を貼付する深鉢25・32・38・41との間には、多少の時間差が認められねばならない。船霊社深鉢24は曽利遺跡37号住例に類似する。Ⅰc〈図188—1、217—1〉　この中には前者のごとく全面にRL縄文を付すものと、後者にみられる[18]口縁のみ縄文を有し、胴部は丁寧に篦なでされる深鉢があり、九兵衛尾根Ⅱ式片と共伴した。船霊社遺跡11号住、頭殿沢遺跡[23]に類例をみる。d〈図122—12・14、207—14〉　c型の縄文を失ったもので、e型と共に胎土・色調は貉沢式一般と共通する。20号住で沈線文を主にする図176—1と、角押文と交互刺突文を共有する同一2～4がある。e〈図175—21・22〉　沈線文のみ施文するが類例を知らない。d型同様、20号住出土で共伴した可能性が強く、c型の後出型であろう。図203—7は胴下半部にいわゆるトンボ状の曲線文がみられるが、上部には図226—1のb型胴部に付される長方形区画文と共通する文様があり、内部に部分的な角押文が施される。一応本型に分類するが、貉沢6号住例に直続する土器である。分類しなかった図204—11は九兵衛尾根Ⅱ式に近いが、縄文にかわって篦描き[24]沈線で埋める新傾向の土器で、樋口内城館址遺跡土器505と共に移行期の型であろう。以上のⅠa～c型は、佐藤達夫氏によって平尾第9地点出土土器とされた[12]貉沢6号住出土土器群に後続か、近接するもので、頭殿沢遺跡[25]土器752～753などと共に、貉沢式の成立の鍵となる土器群である。

Ⅱa〈図165—12、199—18〉　阿玉台系とみられる土器群である。前者は黒褐色を呈し、断面三角形の隆帯に沿って1条の細い角押文を施文し、頸部は2条の小波状沈線を横走させる。器面は指圧痕を残し光

沢を有する。阿玉台貝塚第二群第Ⅰ類b[26]に該当し、月見松遺跡59号住（前記したように、切り合う61号住か土壙出土の誤認と考える）出土に類例を求め得る。本例は胴部懸垂文が幅広で、阿玉台Ⅰb式でも新しい方に入るかと思われるが、16号住上層で貉沢式深鉢[2]Ⅲa1一図165—13・14と共伴する事実に注目しておきたい。これらと並行する土器群を持つ頭殿沢遺跡4号住[23]共ども、藤の台遺跡3号住[28]等に類似する土器組成をみる。従来、貉沢式は阿玉台式を受容することによって成立した形式とされ、関東より後出ともとれる扱いを受けてきたが、少なくとも、西関東と強い相互交流が行なわれた時期で並行して変化していると考える。後者は内湾する口縁の突起下部に渦状隆帯文を付すもので、隆帯に沿って沈線と半截竹管内面による結節状沈線文を施文する。阿玉台貝塚第Ⅱ類の半截竹管による複列の角押文を持つとされる土器群や、神ノ木台遺跡r類[29]・新木東台遺跡[30]に近似例をみるが、向油田貝塚第1群第Ⅱ類により近いものである。本例が、断面かまぼこ状の隆帯でモチーフも相違する。土着の土器の可能性もあるが、県下では類例[31]をみない。阿玉台Ⅱ式並行である。Ⅱb〈図199—16、201—13〉　内湾する口縁に阿玉台の扇状把手に対比される大形の台形把手を付し、幅6mm以下で広狭2種の角押文を用い、口縁下部に楔形文を有するものである。Ⅰc・d型から本型式が成立したと考える。

Ⅲa2〈図183—4〉　Ⅱbと同様の施文具を使う。月見松遺跡65号住にみられるが三郎作貝塚第1類b種の把手から影響を受けたものかと思われる。Ⅲb1〈図168—2〉　頭殿沢遺跡土器252と類似し、b2[32]〈図178—1〉・Ⅲc〈図194—1～2、196—11、203—10〉より古い型と思われる。Ⅲa2、Ⅲd〈図183—2〉は新道式深鉢Ⅱbと22号住床面で共伴し、Ⅲb2・Ⅲcも同様の施文手法を持つことから、新道式の初期の型と共伴する可能性のある貉沢式終末期の型と思われる。Ⅲa1〈図165—13、188—3、193—19、201—12・14〉　口縁が内湾し円筒形の胴となる器形で、頸部に楕円区画をめぐらすものである。隆帯渦文による追いまわし区画となる例は細分されるかもしれない。e〈図167—1、177—17、183—3、193—17、201—11、205—1〉　口縁がやや開く円筒形に近い深鉢で、4mm程の細い角押文を施文する。

Ⅳa〈図194—3・4、199—15〉　鉢型で、口唇にも1条の角押文をめぐらすものは、井戸尻2号住[24]で2点出土し、貉沢式の標式セットの一部され、円文・渦文の多用されている特徴を持つ。同址で共伴するⅢa1、Ⅲeに該当する深鉢は、本遺跡図167—1、196—7と同様の楕円区画が崩れた印象を受ける型である。新道式でも初期とみる深鉢Ⅰbの図179—4に近づいた区画手法と考えられ、阿玉台Ⅰ式並行にしても新しい傾向の現われかと思われる。b〈図162—11〉　平縁で口唇を平らに整形し、やや長胴で器上半に楕円区画文を下半に、渦状隆帯文を懸垂させる。床・生活面出土は貉沢式の終末期とみられる15号住上層に、新道式と共に廃棄されていた。c〈図196—6〉　前者の上半部楕円区画文が消滅した例で、同様に終末期の36号住の下層出土である。型式からみた場合アルファベット順に新しい型といえようが、b・cは同時期で鳴神山貝塚例（註25の43・45図）の先駆型である。同貝塚の2例は三角押文を持ち、45図の土器の渦状隆帯先端を肥大させる[33]手法は、本遺跡新道式深鉢Ⅶcに普遍的にみられ、明らかに新道式期に入っている。Ⅰf〈図162—9、183—1、193—18〉　Ⅰc・dの系統だが角押文帯が口縁部に限られ、楔形文と楔形文の沈線部分が角押文に替ったとみられる施文を持ち、胴部は隆帯懸垂文で飾られる。

Ⅴ〈図161—14、162—10・12、175—8〉　口縁内湾し、円筒形の胴部となりⅠfと器形は共通するが、楕円・方形区画内に連続爪形文と角押文が共用されるのが最大の特徴である。入字状把手も肥大化する傾向をみせる。15号住の生活面でⅠfと共伴し、共に終末期の型と考えられる。関東では清水台遺跡・五領ヶ台貝塚[33]の一部の土器に該当し、佐藤達夫氏による阿玉台Ⅰb古式段階である。

Ⅵ〈図166—17〉　判ノ木山西遺跡に隆帯を欠く類品があり、貉沢式期に伴う可能性が強い。

次に貉沢式の浅鉢の分類を述べる。

該期に確実に伴出するとされる浅鉢の報告例は少ない。本遺跡の場合も破片でしかも覆土内という場合が多く、角押文による施文を持ち前後の型と分別できるものを取り上げたが、将来の資料の増加によって変更の余地がある。

Ⅰ　中期初頭との関連の強い施文を有するもの。a〈図199—1・2〉　内面に幅3mmの角押文を1条めぐらす。九兵衛尾根浅鉢Ⅰ型の系統であるが、長石を多く含み赤褐色で、端部を平坦に整形する手法は深鉢Ⅳ型と共通し、阿玉台第1類b種の口縁内面に施文される群の存在を考えると、該期の可能性も残される。b〈図125—16、154—9、195—19〉　口縁が「く」の字に短く内折し、そこに交互刺突文を付す。九兵衛尾根Ⅱ式期の頭殿沢遺跡浅鉢c1型の縄文を消失したものである。c〈図232—31〉　無文ではあるが、体部削りによる砂粒移動痕がみられるものを一括した。

Ⅱa〈図177—15、178—3、199—10〉　20・36号住の所見から貉沢式に伴出することは確実であるが、図180—7は新道式への移行期である21号住生活面、V字状隆帯文を貼付し、口縁に横走する角押文を縦の同文で切り離す手法となる図155—8は5号住床面出土で、新道式期まで僅か変化しただけで残る。Ⅱb〈図167—11、183—5〉　aの角押文空白部に三叉文・楔形文が付加されるもので、月見松遺跡にある半肉彫三角印刻文を連ねる型の変形とみられる。なお同遺跡にはⅠb・Ⅲも存在する。(2)

Ⅲa〈図177—14、228—1〉　横走する1～2条の角押文から縦の角押文を密施する。b〈図195—20〉方形か楕円に近い区画内を、a同様に細い角押文を縦に充填する手法で、口縁がやや幅広となる。頭殿沢遺跡4号住にあり、貉沢式盛期である。

藤森栄一・武藤雄六氏による井戸尻編年では、問題を将来に残しながらも新道式が貉沢式に先行する可能性が強いとされてきた。その後武藤雄六氏によって、曽利遺跡66・67号住の切り合いから貉沢式が新道式に先行する形式として編年が逆転され、貉沢式を古式と新式に2分する考えが示された。(24)しかし、細分の基準・内容は具体的に示されていない。(18)

本遺跡では、22号と26号住、14・25号と38号住、36号と40号住という確実に新道式期の住居址が、貉沢式期のを切って構築されているのを確認した。19号住で旧旧住と新住との切り合いを見逃してしまったのは残念であるが、3号・17号住においても、貉沢式の古い住居が埋甕炉を残すのみであり、新道式期の新住居に破壊されている。曽利遺跡の所見を追認するのに、充分すぎる切り合い例が揃ったといえる。また、土器について、本遺跡の所見から、九兵衛尾根Ⅱ式の色彩が強く残る初期、典型的な貉沢式として確立する盛期、新道式への移行期である終末期として、属する型を整理してみると、下記のようになる。

初　期　　深鉢Ⅰa～e

盛　期　　深鉢Ⅱa・b、Ⅲb1・c（図194—1）、Ⅳa、浅鉢Ⅰc、Ⅱa、Ⅲa・b、平出第3類A系Ⅰa～c、Ⅱa～b。

終末期　　Ⅰf、Ⅲa・b2・c、Ⅳb・c、Ⅳ、浅鉢Ⅱa（図180—7）、平出3A系Ⅰd、Ⅱc、Ⅲa・b。

(iii) **新道式**　三角押文を主に施文する土器とそれに伴出した土器を他と同じように深鉢・浅鉢に分けて型式分類した。以下、深鉢から記述する。

Ⅰa　〈図160—1、167—2・4、183—6〉　連続爪形文幅が7mmを越し、楕円形区画文内の鋸歯状文が直線になるか省略される。概して砂粒が多く器面がザラザラである。b〈図150—1、179—4〉　板状篦状具により隆帯に沿ってキャタピラ文的な施文をする。三角区画も特徴の一つである。c〈図146—20、

171—12〉　同じ施文具により楕円区画をし、貉沢式的雰囲気を残す。a・bは貉沢式から新道への移行期である。aは貉沢11号住にある。

IIa〈図183—7・8〉　22号住の生活面遺物と多少の間層を挟んで中層から出土し、貉沢式終末とはあまり時間差はない。胴中央に渦状隆帯文等を配し、VIICの先駆型と考える。7は上下の文様帯は連続爪形文と角押文により施文され貉沢式深鉢Vの手法を残し、台状把手の形態は同IIbからの発展と考えられ、新道の初期である。a′〈図147—1、162—13〉　口縁部に貉沢式深鉢IIIa2・b・cの形態を残し、それらの角押文が三角押文連続爪形文に置換されたものである。図184—2・5も楕円区画を多用し古い。b〈図184—6～8〉　6は22号住生活面で貉沢式終末期の土器群と共存したもので、7・8は若干浮くが、共に非常にシャープな三角押文による施文をみる。新道式系で最古の型と考える。6の隆帯区画はIICと共通し、胴下部の渦状隆帯懸垂文はVIIcの先駆態と考えられる。隆帯に沿う沈線に直交する同具による刺突手法は北陸の上山田古式から模倣した可能性が強く、同址で共伴した上山田貝塚第III様式第IV型式に比定される円筒形深鉢(図185—2)の移入土器に注目したい。VIIcにみられる渦状隆帯懸垂文の末端を肥大させる手法も北陸の同式に多用されており、交流現象の結果とみたい。IIc〈図179—6〉　内湾する波状口縁突起部に三角形の把手を持ち、人体文とみられる特異な文様を有し、棒状具による沈線文が多用される。類例は荒神山遺跡62号住にみられ、共に新道式でも前半の型と考える。根拠は薄いが、後出型が月見松遺跡62号住から802号土壙出土例[1]となって、藤内式期まで存続する。IId〈図178—5〉　IIcの一部にみられた三角押文[2]が多用されるが、共に21号住中層で出土している。覆土の埋没過程を考えると若干後かと思うが、ほぼ同時期であろう。図161—15、178—14は器形と区画手法が類似するため、本型に含めた。IIe〈図179—1、227—16〉　貉沢式深鉢IIIcの発展型で、内湾する口縁と胴の張る形となる。連続爪形・三角押文による施文で、平出3A系IIIaと共伴し、古い型である。

IIIa〈図178—9〉　円筒形で楕円区画横帯文が発達している。胴中央には縄文を施文し、下部は隆帯による斜格子文となる。b〈図179—2〉　円筒形で6本の紐線文を横走させ、それに沿って連続爪形文と三角押文による施文をみる。第2文様帯の半肉彫三角印刻文は貉沢式の図202—11の継承で、後出のXVIaへ変化して行く。新道式でも盛期の型である。

IV　内湾する口縁部に弧状隆帯区画等を持つが基本的に三角形区画とみなせるもので、円筒形の胴となる例である。a〈図145—9、147—4・5、169—3、171—4〉　胴部も三角区画文帯のみを付する。b〈図169—6、172—1、191—13、196—1〉　胴部に菱形区画文を有するもので、底部まで施文される。VIIcとの中間型の懸垂文を持つ図145—10も同様施文を持つ。両型は新道式の標式となった九兵衛尾根3号住セットの中核をなす盛期の一群である。c〈図248—3〉　底部が屈折底の傾向を持ち、方形区画が底近くに付され、藤内式への萌芽がみられ、終末期の型となり新道1号住深鉢144[24]に類似するが、本例の施文具は小羽根状三角押文である。

Va〈図247—16〉　器形及び口縁部の区画手法はIVと同様であるが、胴部が楕円区画文帯となり、連続爪形文のみによる施文が特徴である。楕円区画の接点に粘土紐をかぶせ連結する方法はIIbにみられ、比較的古いのではと考えるが類例の増加を待ちたい。b〈図147—2〉　胴が張り出し、懸垂文を有する点でIVと区別したが盛期である。

VIa〈図150—2、179—3〉　従来、後田原式のメルクマールにされた方形区画を全面に割りつける手法の円筒形深鉢である。前者は盛期の3号住上層、後者は21号住中層で盛期の土器と混在していた。本型を出土した後田原遺跡[9]1号住は方形石囲み炉を持ち、本遺跡では新道式の古い段階は埋甕炉か地床炉であ

り、石囲み炉は盛期以後となる。本型は盛期の可能性が強い貉沢式の方形区画も併用する、茅野和田遺跡西28号特殊遺構出土例[35]から発展したものであろう。b〈図150—5、157—11〉　底部に方形区画か楕円区画を持ち連続爪形文を付すもので、新道式終末型の一部か、藤内式につくものであろう。

Ⅶ　隆帯による種々の抽象文を有するものを一括した。藤内Ⅰ式に盛行するものの初現形態である。a〈図145—11〉　胴部に縦の菱形区画文帯を有し、底部は三角区画文となる。区画内に隆帯貼付文を持つ複雑な文様で、類例を知らない。b　藤内Ⅰ式にみられる貉沢5号住、藤内特殊遺構出土のいわゆるサンショウウオ文は、本遺跡のd—図157—13が該当する。本型はその祖形で、藤内式期が輪郭のみを隆帯で表現するのに対し、幅広の隆帯でより写実的文様となる。b1〈図179—3〉　Ⅵaの区画文にはめ込まれたもので古い。b2〈図169—7、172—10〉　円筒形で連続爪形文・三角押文による施文の楕円・三角区画を有する。b3〈図248—12〉　甕形の器形となり、区画及び施文はb2同様である。盛期でも新しい。荒神山・後田原二遺跡に類例があるが併行期であろう。c　末端を肥大させる渦状隆帯文を主として胴部に配する。〈図149—1〉は3号旧住の炉体に使用され、口縁も三角形区画とならず、本型では最古である。〈図148—6～8、163—1、169—5〉は口縁部区画手法等Ⅳaと同一で、〈図184—10〉は円筒形に近いが隆帯文が口縁部に付される。これらは盛期であろう。〈図157—9〉は頸部に幅広の結節状沈線文と底部に楕円区画を持ち終末期の型である。近似例は荒神山77号・103号住、鳴神山貝塚他にみられる。

Ⅷa〈図149—2・3・7、178—8〉　胴部に大きな三角形区画文[3]・長方形区画文[25]を持つ。b〈図149—8、248—1〉　施文はaと同様であるが、前者が内湾する口縁に対し外反ぎみのものを分別した。盛期以後に多いと思われる。図190—2、193—1の菱形区画内にキャタピラ文に近い連続爪形文と三角押文を付すものは後田原遺跡にみられ、終末期である。c〈図152—7、184—9〉　強い波状口縁突起下部に三角押文による円文や弧状文を施文する。3号住生活面・22号住中層で出土し、前半の型と思われる。c′〈図149—4〉は盛期。d〈図158—12〉は波状口縁に沿って三角押文を巡らし斜格子文となり、終末期であろう。

Ⅸ　内湾する口縁に三角形区画文帯を持つが、内部に玉抱き三叉文を多用する型で、12号・19号新住に集中する傾向をみせ、古い時期の住居では上層から出土する。玉抱き三叉文はⅦcにおいても終末期に使われている。同型に属し同文を有する荏田第10遺跡7号住[21]例も終末期であり、平台遺跡に多出[41]する。a〈図172—9〉　胴部中央でふくらむ器形で、縄文が施文される。類例は荒神山遺跡土器集中箇所にあるが、玉抱き三叉文を欠くものである。b〈図149—5、172—8〉　胴部に半截竹管による半隆起線区画文を有するⅫとの中間型である。前者は新道式の初期に属する荒神山遺跡103号住下層出土図291—10の手法を継承している。c〈図148—3〉　底近くの楕円区画文は藤内式への傾斜を示す。

Ⅹa〈図173—2・3〉　内湾する口縁部に斜沈線で埋める楕円区画文を有する。Ⅱcかとも思う。b〈図150—4、179—5〉　口縁が直に開く深鉢で、胴部に斜沈線で横帯区画を埋める。前者は篦具で盛期、後者は棒状具によるもので終末の型である。

Ⅺ〈図150—9、163—2〉　異系統の土器で、対比する形式が周辺地域に探し得ないものを一括した。前者は3号住下層出土で、楔形文・爪形隆帯文・半隆起曲線文など縄文中期初頭かと思われる程である。しかし、出土状況からみて、新道式盛期の同址に伴出する可能性が強い。縄文を地文として、竹管押圧点から篦描き沈線をのばし楔形文とする手法は月見松59号住にみられ、阿玉台Ⅰb式と伴出している。それの後出型で山溝遺跡11号住出土例[2]と同類とも思われるが、結論は類例の増加を待ちたい。後者は篦押圧刻目を付す高い隆帯を不規則に貼付し[38]、結節状沈線文を多用する点など、新巻遺跡の阿玉台系に類似点を求められる[36]。

XII　半截竹管による半隆起線に沿って先端刺突を加える。a〈図173—4・5、191—2〉　胴部の横帯区画に波状隆帯を描き三角区画を造る。b〈図109—13、182—6、184—12、228—8、248—9〉　円筒形に近いものと胴の張る器形があるが、胴部を長方形区画で埋める。両者とも終末期の住居に伴出するか、古い住居の最上層で出土する。bの刺突文を欠くか殆んど持たないもの(図187—18)は、類例を後田原遺跡、曽利遺跡66号住に求め得る。bは串田新遺跡にある。

XIII　半截竹管による半隆起線(9)(18)により種々の文様(37)を構成するものを一括した。a 1〈図114—11、184—13〉前例は退化した蓮華文を持ち、後例は口縁の弧状区画内に竹管を押圧した後に引く手法の平行沈線で埋め、胴部が斜格子文となる。上山田貝塚第III様式第18～19型式の影響を受けたものである。a 2〈図150—5・152—14、191—16〉　荒神山遺跡77号住例を範型とするが(39)、a 1から発生したものである。a 3〈図150—7、153—1、180—1〉　大形深鉢口縁(3)に、退化した蓮華文や半截竹管の先端による押圧文を有する。頭書例は樋口内城館遺跡9号住の炉体と類似し、a 2・3は後半に属する。b 1〈図167—12、168—3〉　半隆起線区画内を篦描き沈線文で埋める。前例は串田新遺跡に口縁部の類似例があり、胴部は上山田貝塚第III様式に近く、搬入品かもしれない。本型は貉沢式から新道初期であろう。b 2〈図152—2〉　a 2の胴部である。b 3〈図155—6〉　胴中央に交互に付す半肉彫三角印刻文帯を有し、終末期の型である。b′〈図150—8〉　半隆起線による楕円区画に沿って三角印刻文を付す。盛期に属する可能性が強いが、類例をみない。c〈図114—10〉　壺型で頸部に竹管先端による刺突と、末端を肥厚させる隆帯を持つ。d 1〈図148—2〉　円筒に近い深鉢で、横帯区画内に玉抱き三叉文を多用する。3号住の最上層出土である。d 2〈図161—2、173—6〉　縄文を地文に、細い半隆起線による文様構成となる。dは終末期に属する。

XIVa〈図145—13、169—8〉　円筒形に近い小形の深鉢が主体で、地文に縄文を持つ場合もあるが、無文の胴部に短い隆帯を縦列か斜位に貼付する。両例とも盛期以後の型で、図255—1のように隆帯文の周囲に三角押文を付すようになり、藤内I式の同手法文に受け継がれて行く。b〈図230—9〉　不規則に隆帯を貼付する。

XV〈図152—15、180—3、191—17〉　口縁部か頸部に隆帯を横走させた後に縄文を全面に施文するもので、平出第3類Aと同様の器形をとる。各住居の出土状況から、盛期以降の型と考えられる。

XVI　円筒形で縄文が施文されるが、口縁部の文様により細分する。a〈図156—1、158—7〉　三叉文を充塡する三角区画文帯を有するものである。b〈図157—14～16〉　口縁に波状隆帯文・円文を付し、胴部に沈線を横走させる。藤内I式の藤内特殊遺構15号住例に変化する型で、若干の差があるため、終末期においておきたい。

最後に、後田原式の位置付を問題にしたい。該式は本遺跡の諸型に分解されるものが多く、新道式終末期に吸収される。岡谷市史では後田原式＝新道式、下諏訪町では藤内I式並行とされてきたが、本遺跡にない土器7は荒神山遺跡49号住にあり、新道式から藤内式への移行期に成立した型式群と考えられる。

次に中期に特有な有孔鍔付土器についても同様な分類を試みた。

Ia〈図163—8〉　円筒型の小形品。貉沢式から新道式への移行期に属する。b〈図192—4〉　新道式後半の型である。

IIa〈図151—11〉　新道式盛期の型で、上山田貝塚第III様式第21型式とやや類似する施文・器形である。b〈図173—14〉　口頸部を欠くため断定はできないが、有孔鍔付土器の可能性がある。c〈図229—14〉。

III〈図163—9、169—9、173—15、180—10〉　新道式後半の型である。

また、浅鉢は以下のように型分類した。

Ⅰ〈図169—11、180—6〉　盛期の型である。

Ⅱa〈図157—19、164—2、180—8・9〉　貉沢式Ⅱaの角押文が三角押文に置換された型である。貉沢式から新道式初期の住居の上層出土で、盛期に中心があると考える。b〈図174—1・2〉　貉沢式Ⅱbの後出型である。

Ⅲa〈図157—20、160—5、161—16〉　終末期に属する。b〈図151—9、153—8〉　c〈図191—19〉共に後半であろう。

Ⅳ〈図158—2〉　終末期で藤内式になると口縁部文様帯幅が広くなる傾向があるが、本例もその例にもれない。

Ⅴ〈図164—1、205—5〉　舟形の浅鉢であるが、貉沢式から新道式への移行期の型と思われ、頭殿沢遺跡土器263はその好例である。(23)

Ⅵ〈図156—26〉は深鉢図179—6の胴部に共通する施文があり、前半の可能性がある。図155—9は5号住出土で終末期である。図188—8は新道式期としかいえない。

以上、繁雑すぎたきらいのある分類を試みたが、紙数や費用の関係で説明しきれない部分が多く、かえって混乱する場合も生じてくることを懸念している。近い将来、今少し整理した型式細分とその根拠を示すつもりである。御了承賜りたい。

エ）土偶及び把手

土偶は9個体あり、すべて縄文中期に属する。住居址内では5例出土しているが、格別な施設を伴った出土状況を示すものはないが、16号住の北壁下床面出土例は注意して良い。奥壁寄りでの出土例は意外に多いと思われる。形式的にみると、九兵衛尾根Ⅰ式期29・30号出土例（図266—6・7）は立体土偶の初現が縄文中期中葉と考えられて来たが、中期初頭に出現していることを示しており、その意義は大きい。ちなみに中期初頭の遺構から出土した(42)例も県内では少なく、九兵衛尾根Ⅱ式期の船霊社遺跡1号住出土(2)例は中期初頭の土偶の可能性が強い。また、最古とされる徳久利遺跡13号住出土(24)例も胴部板状か板状土偶である。梨久保遺跡出土例も同様である。(43)

後記の人体文把手付深鉢（図266—8）も立体的で、土偶における変化と関連して注目したい。

中期中葉では、貉沢式期の16号住出土例（図268—2）・新道式期の21号住出土例（図267—8、268—3）は藤内期の西ノ原遺跡1号住出土(44)例に類例を求められ、角押文は貉沢式的であるが、新道式の後半から藤内段階にかけて存在する型であろう。遺構外出土（図268—1）は類例がなく、強いて求めると、鳥頭状になるものに貉沢遺跡4号住出土(24)例があるが井戸尻Ⅰ式期であり、本例はその先駆形態であろうか。同じ図268—1は藤内式から井戸尻式と考えた荒神山遺跡出土(3)例に類似するが、本例は沈線文を欠く。本遺跡の新道式から藤内式への移行段階の住居址に併行したと思われる。

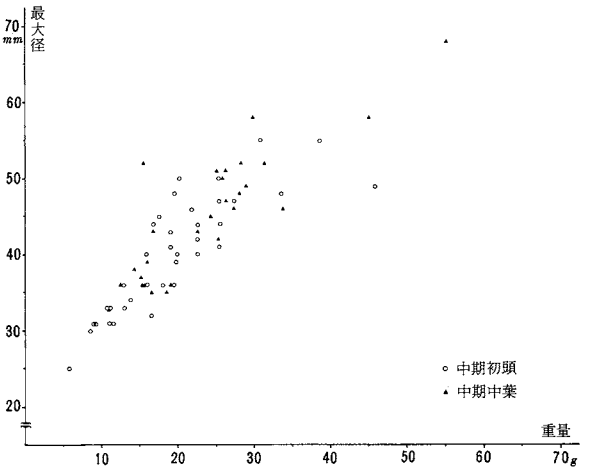
獣面把手は諸磯B式期（図266—1、265—13）・篭畑期（図266—3・5）から九兵衛尾根Ⅰ式の終末期（図265—14）まで断続的ではあるが残る。図265—14は諸磯B式期との類似性が強いが、同—5からの発展とみた方が良いかと思われる。一方、人体装飾は、九兵衛尾根Ⅰ式からⅡ式への移行期の18号住例（図122—8）・顔面把手（図266—9）から始まって縄文中期中葉の盛行期を迎える。貉沢期への移行期の人体文把手付深鉢（図266—8）は類似例がない。

ハート型顔面装飾は九兵衛尾根Ⅰ式34号住浅鉢（図142—19）・前記18号住例を初現として、九兵衛尾根Ⅱ

式の船霊社遺跡出土例[15]で確立し、貉沢式期（図194—1、267—1・3）、新道式期（同—2）への系譜がたどれる。なお、図267—1は柏窪遺跡に類例を求めることができ、福島市信夫町音坊遺跡[42]から類似例が出土している。同—2は荒神山遺跡62号住例[3]の部分省略と思われる。

オ）　土製円板

土製円板は総計75点ある。使用土器片からみると、縄文中期初頭38点（内、九兵衛尾根Ⅰ式4、同Ⅱ式7）、同中期中葉31点（内、貉沢式3、新道式8）、中期とだけ判明するもの7点である。使用土器片が直接製作使用された時期と一致しないかもしれないが、九兵衛尾根式期から盛んに製作され始めたと考える。遺構と同時期の土器片を使用し、出土状況からみても製作時期と一致するのは九兵衛尾根Ⅰ式期土壙1107出土例（図263—10）であり、中期初頭の6・7・18・29・30号住は覆土ではあるが、その可能性がある。中期中葉では貉沢式期36号住、新道式期14号住の床面出土の各一例がある。



挿図15　土製円板最大径・重量相関図

本遺跡では縄文前期の確認例はない。遺構外出土が多いことは、屋外においての使用頻度が比較的高かったと思われる。この点からいうとメンコ（玩具）説が有利になるが、錘説を検討するための挿図15を、完形品の時期区分ができたものを対象に作成した。当然ながら、最大径と重量には正の相関があり、中期初頭は中葉に比し、前者のグラフは後者のに比し勾配が急となるが、一般的に中期初頭の方が薄手であることに対応するだけで意味はない。しかし、前者は5～50g、径25～55mmまでちらばりが大きく、後者は径35～60mm、15～35gに集中し、規格化されている。縄文後期以降の土器片錘のような抉入部はなく、周辺を磨滅させることは漁網の錘として縛るのに不都合である。紡錘車とみれる有孔のものはないが、紡織用錘としての可能性は残される。本遺跡で最小のものは3,6g、最大のものは65g（図263—11）あり、未成品とした部分的に磨痕を残すものがあるが、これが使用前の原形であり、例えば砥石、或いはなめしの最終段階で磨り具として使用された結果、全周に磨痕を残したと考えられなくもない。ただし、実験によって確認する必要はあろう。

カ）　縄文中期前半における移入土器

(i)　東海系

東海系の北裏CⅠ式[45]と似る土器は本遺跡では厳密に対比すると、図137—28、138—1・2、142—21、251—30、252—1～5が該当する。30号住の最上層、34号住には伴出する可能性が強い。九兵衛尾根Ⅰ式の第2段階で搬入されたのではないかと予想する。類縁関係にある清水ノ上貝塚第三群第1類A・Bを手懸りに分類したため、同Ⅰ式深鉢XVaに含めているが、本型式の他の土器は頭殿沢遺跡とともに細分され、第3段階に属する。頭殿沢遺跡の所見ではこの遺跡に限定される特殊なあり方かも知れないが、該期セットの重要な構成要素となっており、単に搬入土器として片づけられない比率をもっている。XVIb・cも前記

した如く清水ノ上貝塚に類例を求め得るもので東海地方との関連の強い型であることを考えあわせると第3段階の時期には東海からの強い影響が南信に及んでいるといえる。

(ii) **関西系**

関西系の船元式が少量出土している（図256～257、図版112）。16個体分と思われる全点を図示した。胎土に磨耗した砂粒（赤色チャート・長石・石英）を含み、RL 縄文を斜位回転させる施文手法で口縁部内面にも縄文帯をもつなど、一見して土着の土器とは分別できる。船元Ⅰ式D類（図256—10）のうちAは21号住、Bは25号住覆土出土である。口縁に貝圧痕を、隆帯にそってまた、ハの字になる口縁下部の隆帯区画内をアカザ？茎による5個の突起をもつ刺突文によって埋める。地文は禾本科茎による平行細線である。船元Ⅱ式A類（図256—11）のうちのAは26号住、Bは38号住、Cは36号住覆土、Dは同住下層出土、Eは土壙1311、Fは同1137出土である。貉沢式から新道式への移行期の36号住に伴った可能性が強い。爪形文幅は 19 mm と推定される。12のAは13号住覆土、Bは同旧住床面出土で爪形文は 28 mm と幅広である。13は口縁内面有段部に縄文をもち、14は36号住、16は22号住各覆土出土である。

以下は257図に図示したものである。1は17号住最上層出土で、隆帯に半截竹管の先端を斜めに切断したもので連続爪形文を付し、口縁下の密施する爪形文幅は 18 mm である。2はBA69グリットで暗褐色土層からまとまって出土し、土壙172・175から各1片が平出3Aと伴出した。胴部には斜刻目を付す円文と、2本の隆帯間が無文部となる文様とを交互に配すると思われる。頸部は僅かにくびれ、隆帯の上方から刻目を密施し、それに沿って器面に急角度で立てた三角押文風の押引が2条組で付される。3は貉沢式に属する4号住床面出土である。4はA・Bが22号住覆土、Cが25号住覆土で出土したが、口縁部に波状隆帯を付し、A・Bには口唇に斜めの連続爪形文を付した痕跡が残る。長石粒極めて多く、石英・片麻岩砂粒を微量含む。5は土壙379出土である。長石・石英のみ含み、口唇と口縁に爪形文がある。6は19号住覆土、7はA・Bが15号住、C・Dが21号住、Eが24号住、Fが25号住、Gが28号住　H・Iが36号住、Jが40号住のいずれも覆土上層で出土し、22mの範囲に散乱する。9は貉沢式期の16号住出土で、Aは生活面、Bは上層で出土した。船元Ⅱ～Ⅲ式の判別不能の8はAが38号住、B・Cは36号住のいずれも覆土最上層からの出土であり、黄赤褐色で長石粒が極めて多く、黒砂と赤色チャートが微量含まれ、胎土・縄文も里木貝塚出土例に酷似する。なお、8以外の上記の土器群の内で幅広の爪形文を施文するものは、里木貝塚のものより爪形文幅が長く、船元式系でも平CⅠ式[46]に近く、京都府丹後町に所在する同遺跡より長野県寄りの中間地帯から搬入されたものではないかと思われる。

船元式系を出土する遺跡は現在のところ中南信に限定される。鷹島式は篭畑Ⅰ式の中沢高見原横山B地点遺跡[10]、同Ⅱ式期の篭畑遺跡[47]での住居伴出例が知られ、不明確な出土例は他にも数遺跡ある。同式が篭畑式期と併行関係にあることは確定的である。北裏CⅠ式を九兵衛尾根Ⅰ式第2段階に併行させると、これには鷹島式直後段階に伴い、九兵衛尾根Ⅰ式の前半は少なくとも船元Ⅰ式併行となろう。船元Ⅱ式は諏訪郡だけでも荒神山・船霊社・頭殿沢遺跡等に断片的にみられるが、小林公明氏は阿原端下遺跡の資料について九兵衛尾根Ⅱ式との併行関係を想定されている[48]。しかし、今まで報告されたものは伴出関係を確定できる状況ではない。本遺跡では貉沢式期の4号住、貉沢式から新道式への移行期である13号旧住・36号住出土例は確度の高いもので、貉沢式から新道式初期に搬入されたと考える。縄文時代中期初頭では28号住最上層に1点あるのみで、他は中期中葉の住居址の上層出土である。

周辺地域では清水ノ上貝塚では第三群第1類に分類され、本遺跡5号旧住、18号住の九兵衛尾根Ⅰ式第3段階とした土器群を中心としたものと伴出したとされる。増子康真氏は最近島崎Ⅰ式を細分し、前半を[22]

同Ⅰａ式と型式設定し、その２類は船元Ⅰ式の最も新しい段階とされるが、本遺跡でいう船元Ⅱ式に該当する。[45]１・４類の一部はそれぞれ頭殿沢遺跡の九兵衛尾根Ⅰ式の終末期とした土器群と類縁関係がみられ、原沢式期と併行関係となろう。伊那谷には10数箇所の遺跡で船元式系がみられる。

現在のところ、船元Ⅱ式は九兵衛尾根Ⅰ式の終末から伴出しはじめ、下限は明確ではないが、藤内Ⅰ式では船元Ⅱ式Ｃ類に近似した器形、モチーフをもつ山溝遺跡14・23号住例、気賀沢進氏によって船元Ⅲ式比定とされる南原遺跡３号住例[49]があるが、本例はむしろ船元Ⅱ式Ａ類を模した土着の型ではないかと思われ、飯田市白山遺跡３号住[50]に良好な資料があり、口縁部は北屋敷式であるが、胴部は船元系特有の縦の繩文を付すものが伴出している。従って、下限は新道式までではないかと推定する。

(iii) **北陸系**

１号住覆土に木目状撚糸文（図117－１～３）が、25号住には混入したらしい網様撚糸文がある（図193－７）。新保式第Ⅱ１型式に比定される。図258－１（図版113）は右上の１片が土壙201で出土した。橙褐色を呈し、長石細砂を主に透明な石英・片麻岩系の小石を少量含む。内面には底に近い部分まで丁寧に研磨される。同式第Ⅳ３型式に該当し、篭畑Ⅱ式の図214－２とともに周辺に散乱していたものが混入したと考える。新保式には鷹島式が伴出するといわれ[51]、その点からも新保式を篭畑式と併行するとしてよい。

上山田古式　図133—14、185－２は上山田貝塚第Ⅲ様式第４型式で前者は30号住最上層出土であるが、22号住に由来した可能性が強い。後者は貉沢式から新道式の移行期の同住居に伴出したものである。貉沢式期の月見松遺跡65号住で器形は同一だが、上記に先行するためか若干施文に差のある深鉢が出土している。伴出関係は不明であるが荒神山遺跡[2]、頭殿沢遺跡[3]にあり、後者は同様式第３型式であろう。図131－１は赤浦遺跡[23]に近似例がある。図258－４は橙褐色、同－３・５～７は暗褐色か赤褐色であるが上山田第Ⅲ様式[52]に類縁を求め得る。図293－９は同第19型式と同一施文手法である。

他に北陸系かと推定している土器がある。図222－６は赤褐色を呈し、透明な石英を主に雲母を多く含み長石は微量で内外面ザラつき、口縁から胴まで隆帯による曲線文を垂下させ、口縁の半隆起線区画内を北陸系特有の縦横に篦切する格子文を充塡している。胴部に指圧痕のある輪積み整形をすることから、貉沢式から新道期でも前半に属するかと考える。図258－２は赤褐色乃至黒褐色で長石・石英を多く含み、器面ザラつく。同様区画内を細い半隆起線を篦切沈線で切る斜格子文で埋める。これは九兵衛尾根Ⅰ式にある手法だが、口縁の入字状把手は貉沢式か北陸系のものである。５号住覆土最上層で、出土状況からは両者とも時期を決定しがたい。赤浦遺跡第１期（上山田古式）２類Ｂに近いが断定はできない。

図111—12～19、140—11・13、167—12～15、168－３、230—23も前記の両遺跡に直接類例を求め得ないが、北陸の影響を受けた土着の土器か、中間地帯のものではないだろうか。

上山田古式の第Ⅲ様式第３・４型式は貉沢式期と同式から新道式への移行期と併行関係にある。そして、この時期には当地で存在しなかった半隆起線による種々の区画・施文手法を新道式の中へ持ち込んだものであろう。従来、新道式独自の手法と考えられてきた図182－６、190－３、228－４、258－８～14・16・17は、同式後半に多くなるが、富山市杉谷遺跡[53]に多出するもので、土着の土器ではあるが、北陸との交流現象の中で成立した型式と思われる。西上遺跡B_2 N地点には、新道式終末期に併行する土器とともに出土し、五領ヶ台式とされているのが、本群であり、この型式が西関東まで及んでいることを示している。今後、本群が地域によってどのような比率で存在するのかを究明することによって、どこにその中心が存在するのかが判明し編年体系も整備されるであろう。

註1　長野県教委『中央道報告—諏訪市その1・2—昭和48年度』　1974
2　〃　『　〃　—伊那市その2—昭和48年度』　1974
3　〃　『　〃　—諏訪市その3—昭和49年度』　1975
4　茅野市教委『下菅沢・中村遺跡』　1976
5　〃　『よせの台』　1978
6　長野県道路公社・和田村教委『男女倉』　1975
7　松戸市教委『幸田貝塚』第3次調査概報　1973
8　戸田哲也他「神之木式・有尾式土器の研究」『長野県考古学会誌』34　1974
9　岡谷市教委『岡谷市史』上巻　梨久保遺跡出土土器 No. 65　1973
10　林茂樹・気賀沢進「駒ヶ根市中沢高見原横山B地点遺跡」『長野県考古学会誌』43　1979
11　武蔵野美術大学考古学研究会『宮ノ原貝塚』　1972
12　長野県教委『中央道報告—辰野町その2—昭和48年度』〈樋口内城遺跡〉　1974
13　岡谷市教委『扇平遺跡』　1974
14　東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会『北八王寺西野遺跡』　1974
15　長野県教委『中央道報告—岡谷市その4—昭和52・53年度』　1980
16　八王子資料刊行会『椚田遺跡群』　1978
17　長野県教委『中央道報告—上伊那郡南箕輪村その1・2—昭和47年度』　1973
18　富士見町教委『曽利』　1978
19　山梨県教委『山梨県中央道埋文報告書』　1974
20　長野県教委『中央道報告—上伊那郡箕輪町—昭和48年度』　1974
21　港北ニュータウン埋文調査団『港北ニュータウン地域内文化財報告書』Ⅳ　1974
22　南知多町教委『清水ノ上貝塚』　1976
23　長野県教委『中央道報告—茅野市その4・富士見町その3』　1981
24　中央公論美術出版『井戸尻』　1965
25　佐藤達夫「繩紋式土器」『日本考古学の現状と課題』所収　吉川弘文館　1974
26　早稲田大学「千葉県小見川町阿玉台貝塚」『学術研究』第19号　1970
27　長野県教委『中央道報告—茅野市・原村その2—昭和50・51年度』　1979
28　藤の台遺跡調査団「町田市藤の台遺跡の調査」『考古学ジャーナル』No. 163 所収　1979
29　港北ニュータウン埋文調査団「横浜市神之木台遺跡出土の繩文時代遺物」『調査研究集録』　1977
30　我孫子市教委『新木東台遺跡』　1979
31　早稲田大学「千葉県香取郡向油田貝塚出土の土器」『学術研究』第21号　1972
32　〃　「千葉県佐原市三郎作貝塚」『学術研究』第20号　1971
33　北奥古代文化研究会『北奥古代文化』第8号　1976
34　伊那市教委『月見松遺跡第三次緊急発掘調査概報』　1977
35　茅野市教委『茅野和田遺跡』　1960
36　下総考古学研究会「群馬県・新巻遺跡の中期繩文土器」『下総考古学』1　1964
37　富山県教委『串田新遺跡』　1973
38　長野県教委『中央道報告書—上伊那郡飯島町内その3—昭和47年度』　1973
39　石川考古学研究会『上山田貝塚』　1979
40　伊那市教委『月見松遺跡緊急発掘調査報告書』　1968
41　平台遺跡調査会『平台遺跡とその出土遺物』　1972
42　江坂輝弥『土偶』　校倉書房　1970
43　宮坂光昭「長野県岡谷市梨久保遺跡の再調査」『長野県考古学会誌』3号　1965
44　伴信夫・宮沢恒之「長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告」『信濃』19—12　1967
45　八百津町教委『岐阜県八百津町南森遺跡発掘調査報告』　1980
46　間壁忠彦・葭子夫妻の御教示による。『里木貝塚』倉敷考古館研究集報第7号　1971
帝塚山大学考古学研究室『平遺跡』　1966
47　武藤雄六「長野県富士見町篭畑遺跡の調査」『考古学集刊』4—1　1968
48　富士見町教委『阿原端下遺跡発掘調査報告』　1976
49　長野県教委『中央道報告—上伊那郡飯島町内その3・駒ヶ根市内—昭和47年度』　1973
50　駒ヶ根市教委『南原』　1977
51　小島俊彰「珠洲郡内浦町松波新保遺跡発掘資料再現」『石川考古学研究会誌』第20号　1977
52　七尾市教委『赤浦遺跡』　1977
53　南　久和「北陸の繩文中期にみられる連続刺突沈文について」　註51に同じ
54　昭島市教委『西上遺跡』　1975
55　長崎元広「八ヶ岳南麓の繩文中期集落における共同祭式のありかたとその意義」『信濃』25—4・5号　1973

ウ　石器に関する考察

ア）資料の性格と記述の方法

石器の数量　大石遺跡の発掘調査により得られた石器は、完形品、破損品、表採品などすべてを含め下記の表2のようになる。接合資料の数え方、整理過程での器種認定の変更などにより付表の実数と一致しないが付表を最終的なものとし、これは概略の数である。

表2　大石遺跡出土の石器一覧

	打製石斧	横刃形石器	磨製石斧	磨石・凹石	石皿	石鏃	削器・掻器	石錐	他	計
遺構に関連するもの	637	269	69	296	38	161	101	68	88	1.727
遺構との関連が不明確なもの	438	206	47	245	9	60	27	19	50	1.101
計	1.075	475	116	541	47	221	128	87	138	2.830

（他に黒曜石剝片類1831個，他の石材の剝片類少量がある。）

検出の方法　遺構は特に検出前後において調査方法が一定していない。遺構と関連があるとして付表に区分したものは発掘担当者が当該遺構の覆土出土としたものすべてを含めているが、これらの中には出土位置などの記録がなく、グリッド単位で取り上げられた他の遺物と意味の変わらないものを含む可能性もある。遺構覆土中層、下層出土のものは出土図中に番号で示されている。また、C区およびD区においてはグリッド単位に取り上げられなかったため、その出土位置を示すことができないものが多い。

記述の方法　付表中には記述の簡略化のために、略号を用いた。器種別に概要を述べる前に、記述法、記号の用法に触れておく。

各器種の分類は従来一般に行なわれているものに従うが、特殊なものはその使用痕、形態に従って仮称せざるを得ない。各器種の細分は形態に基づいて行なう。

使用痕は、肉眼、ルーペ、実体顕微鏡による観察であり、最大限40倍となる。方向の特定できる擦痕状のものはわずかで、大部分が磨滅あるいは敲打痕であるが、風化との区別が困難なものも多く、使用痕がないとしたものは本来、不明というべきものである。

石材は岩石学的に詳細に分類する余裕がなく、遺物の破損も避けたために概略の分類にとどまっているが、必要があれば将来細分されよう。

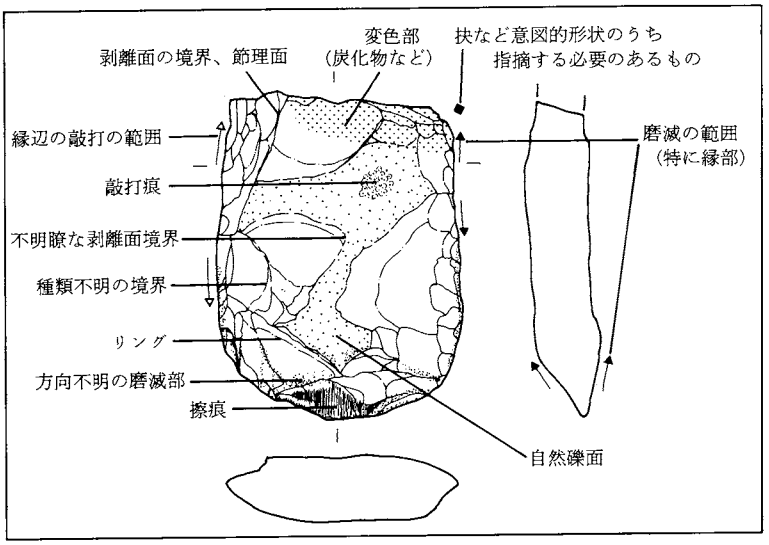
実測図あるいは写真で示したものは次のようなものである。

- 石鏃、石匙、石錐など黒曜石製品を中心とする小形定型化したもののうち、遺構に関連して出土したものは全部、遺構外は必要と考えられるもの
- 打製石斧、横刃型石器は、住居址出土のうち完形品を中心に形態の異なるものを選択して各遺構の30～40%
- 磨製石斧類は形態別に選択したもの
- 石皿はほぼ全部
- 凹石、磨石類は形態別に選択したもの
- 土坑に関連して出土したものはほぼ全部
- 接合資料、その他、説明上必要なもの

以上を図、写真で示し、他は付表で代え、図版番号は付表の番号と一致させてある。たとえば1201は12

号住居址の１番の石器である（付表凡例参照）。

図の表現については挿図16を原則とする（特に打製石斧、横刃型石器）が、実測者が異なるものはそうでないものもある。



挿図16　実測図の表現方法（打製石斧・横刃型石器など）

石材の記述　石器の原材を岩石学的に詳細に記述しようとすれば、少なからぬ時間を費やし、石器を破壊しなければならないこともある。その余裕は時間的にも能力的にも我々には与えられていないが、考古学的遺物としての石器原材について必要と考えられることを以下のように記号で示しておく。本遺跡で用いられた石材は、ほとんどが、中央構造線周辺に分布する領家帯、三波川帯など赤石山系北部の変成岩類、八ヶ岳から霧ヶ峰にかけての火山岩類など近辺で得られるものであり、岩石名について細分を行うよりも、材質感、風化の程度、節理のありかたなどを記述することが有意義と考えた。

(a)岩石名の略号は次のようになる。

ss	砂　岩	Ab	安山岩質岩石	Sp	蛇紋岩質岩石
ms	泥　岩	B	玄武岩質岩石	Hr	ホルンヘルス
altsm	ss と ms の互層	Qp	斑　岩	Gs	緑色片岩
Sch	輝緑凝灰岩	Po	玢　岩	Bs	黒色片岩
ch	珪岩質岩石	Gr	花崗岩質岩石	Altgb	Gs とBs の互層
Tr	凝灰岩質岩石	Gb	斑糲岩質岩石	ob	黒曜石
Ry	流灰岩質岩石	Gd	変輝緑岩類		

（以上の記号は経済企画庁編「土地分類図（表層地質図）長野県」1974. に準拠した）

(b)材質は次のように区分する

1　ち密で、岩石組織が肉眼で一見して判別できないもの

2　肉眼で結晶などが容易に判別できるもの

3　結晶が大きいことなどで粗面となるもの

4　多孔質

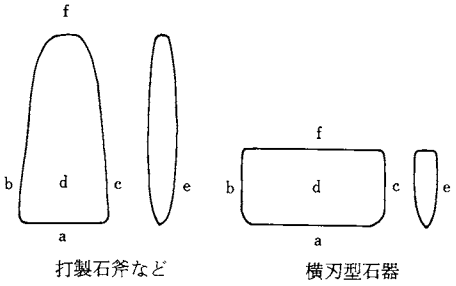
(c)現状の風化程度を次のように表現する

A　自然面、加工面、使用痕の区別ができるもの

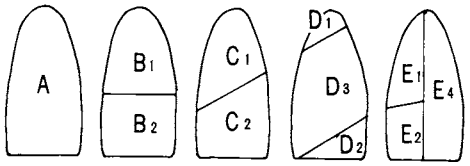
B　Aの３種面のうち、いずれか１種が区別できないもの

C　Aの３種面いずれも区別できないもの

従って、Bとしたものの一部、Cとしたものの全部は風化のために使用痕の観察が不完全ということになる。



挿図17　使用痕の位置



挿図18　打製石斧の折損の類型

使用痕の記述　打製石斧および横刃型石器の使用痕は下記のように略記する。

(a)位置（挿図17参照）

(b)程度

1　軽い磨滅

2　磨滅

3　著しい磨滅

60°　擦痕の場合、中軸に対する角度（磨滅の方向のわかるもの）

S　光沢（使用痕面が光沢を持つもの）

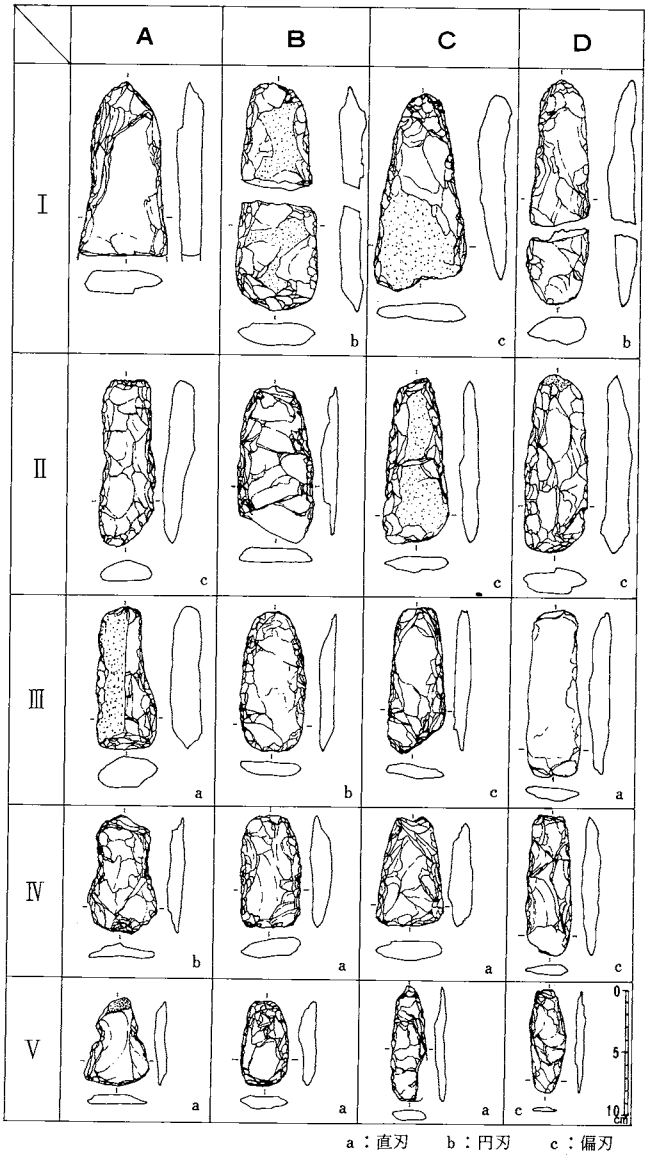
折損の記述　同じく挿図18のように残存部を示し、その組合せも用いる。

イ）石器の概要

①　打製石斧

分類　打製石斧は一部に横刃型石器としたものと区別困難なものを含む。使用痕の部位が短辺にあるものは打製石斧として扱ったが、側縁刃部も用いているものがある。打製石斧のなかで刃部のみを研磨して鋭角的な刃をつけたものがあるが、一覧表中では局部磨製石斧と明記し打製石斧の欄にあるが、ここでは扱わない。

本報告書シリーズでは、従来より打製石斧の分類は平面形態のうち側縁の湾曲程度と刃部形態とに基づいて行なってきた。現在も特に変更しなければならない



挿図19　打製石斧の類型（1：6）

理由はないので、踏襲するが、次のようにやや観点を変えることとなった。縄文時代打製石斧の大部分が土掘具であるとすれば、その細部の形態差は着柄方法や使用段階の差、使い分けなどに起因すると考えられよう。ここで扱う打製石斧に型式差が見出せるとすれば、製作時(着柄されたものは着柄された時点)の形状に変化が加えられる可能性のない部分を取り上げなければならない。つまり、側縁形態と刃部形態との意味は、やや異って分類要素に取り入れられる。付表に示した類型は挿図19に示されるものを典型とするものであり、図中でⅠ類とは長さがほぼ 15 cm 以上(D類は 17 cm 前後)、Ⅱ類は 13～14 cm、Ⅲ類は 12 cm 前後、Ⅳ類は 9 cm 前後(D類は 11 cm 前後)、Ⅴ類は 7 cm 前後(C、D類は 8 cm 前後)のものを示す。A類は抉を持つもの、B類は側縁が平行ないし弧状を呈するもの、C類は側縁が直線的で二等辺三角形を基本とするもの、D類はBとCの中間で細身のものである。この分類図中では、たとえばⅣCとⅤCのように長さと側縁で区分すれば同一類形となるようなものでも全体的形状により分離してあるので、付表中の

表3　打製石斧の刃部角

	10°	20°	30°	40°	50°	60°	70°	80°	90°	100°	110°
1住		1	4	8	6	9	4	2			
2〃		1	1		2	4					
3〃		1	2	5	10	8	4	5	2		
4〃					1	1		1			
5〃			1	2			2				
6〃					5	2	1	1			
7〃				1	1	2	1				
11〃						1					
12〃		1	1	6	3	3	3	1			
13〃			4	1	5	2	2	1			
14〃		1	1		1	2		1			
15〃				1	5	3	1			1	
16〃				2	2	2	1	2			
17〃			1	5	11	5	2			1	
18〃		1		6	2	1					
19〃			1	1		2				1	
20〃		1	1	5	1						
21〃			5	3	4	1	2	1			
22〃		3	2	9	3	2		3		1	
23〃			8	2	2	2	1				
24〃			1	2	1	3	3				
25〃			2	2	2	2					
26〃				1	4	2	1	3	1		
28〃		1			3		1				
29〃			1	3	6	2	2	1		1	
30〃		1	5	1	2	9	7	1	1		
31〃				1	1		1	2	1		1
34〃				1	2	1					
35〃			1								
36〃		1	2	2	3						
38〃		3	1	4		5				1	
39〃			1	2							
40〃				1			1				
43〃					1		1				
44〃			1	3	2		1				
47〃			1								
48〃					1	1	1				
計		16	48	80	92	77	43	25	5	6	1
局部磨製			3	4	2	1					
%		(4.1)	(12.2)	(20.4)	(23.4)	(19.6)	(10.9)	(6.4)	(1.3)	(1.5)	(0.3)

分類記号は分類図の中で最も印象の近いものを指しており、各要素による機械的分類とはなっていない。この20類型に対してそれぞれ直刃(a)、円刃(b)、偏刃(c)を区別しておいた。

表4　打製石斧の折損

	A	B_1	B_2	C_1	C_2	D_1	D_2	D_3	$D_{1,3}$	$D_{2,3}$	E_1	E_2	$E_{1,4}$	$E_{2,4}$
1 住	26	16	5	8	2	1		3						
2 〃	7	1		2	1									
3 〃	31	10	4	2	2			1			1			
4 〃	3													
5 〃	3	1	2	2					1			1		
6 〃	4	1	2	1	1		1		1					
7 〃	4	2	1	3	1			3						
11 〃	1													
12 〃	14	5	3	2				2				1	1	
13 〃	10	2	2	3	1			1			1	2		
14 〃	3	1	1	2	2									
15 〃	8	1	2	1	1		1	1						
16 〃	4	2	2	3	1			1				1		
17 〃	20	1	4	4					2					1
18 〃	6	1	1	2	2			1			1			
19 〃	3	4						3					1	
20 〃	6	1	2	2				1			1			
21 〃	9	2	3	3	3			1	1				1	
22 〃	16	3	3	2	2			1			1	1	1	
23 〃	12	1	1	3				3						
24 〃	8		2	1	1			1						
25 〃	6	5	1	5	1			2						
26 〃	6	1	6	1										
28 〃	3	1		3	1				1		1			
29 〃	5	3	3	2	2			3	2	3		1	1	
30 〃	16		5	4	2			2	2	1		1		1
31 〃	5		1		1				1					
34 〃	2			4	2									
35 〃	1		1											
36 〃	5	1		4	2			3		1		1		
38 〃	8	2	1	2	3				2					
39 〃	2				1									
40 〃	2			1				1	1					
43 〃	2		1		1									
44 〃	5		1						1			1		
47 〃				1				1						
48 〃	3											1		
計	269	68	60	73	36	1	2	35	15	5	6	11	5	2
土壙出土	31	4	8		6									
遺構外	174	126	57	14	16	5	1	18	18	4	3	4		
合計	476	198	125	87	58	6	3	54	33	9	9	15	5	2

使用痕　刃部にみられる使用痕は、方向を特定できる擦痕がわずかに観察されているが、大部分は剝離面境界稜線、縁辺の磨滅である。これらの磨滅はその方向を明らかにできるものが少ないが、磨滅面の部位や拡がりによって推測できるものもある。石材の性質により多くは風化が著しいが、このような廃棄以後の磨滅は、一個体内での磨滅部分の比較により、使用によるものと分離できる。これは稜線部、縁辺部で全体的に観察される必要があるので、欠損部が大きい場合は困難になる。

また、側縁には磨滅とともに敲打痕を残すものが多いが、これは使用痕というより製作痕であろう。しかし、敲打の範囲が限られており、着柄部に対応するようなものが多いので、単に全形の成形にかかわるものではなく、着柄に重要な位置を占める側縁の細部調整と考えたほうが良い。

磨滅の範囲は、各類型によってある程度の傾向を指摘できる。抉があったり細身であったりして着柄が強固で刺突力があると思われるものは、身部中央ちかくにまで及ぶものが多い。偏刃として区別したものは、磨滅にも偏りがあるが、そうでないものも多い。直刃の典型的なものはほとんど刃縁にかぎられる。大形品と小形品とでは、比較的範囲がせまく、中形品に磨滅の程度も強く範囲も広いものが多い。

磨滅の方向の推定できるものはほぼ中軸線に一致し、著しく傾斜するようなものはない。表裏では、特に片面に強く広い磨滅面を持つものが多く、着柄されたものはいわゆる横斧型であったことを示すものであろう。偏刃と磨滅面との関係は、主要磨滅面を裏面として置いた場合、偏りが右にあるものと左にあるものはほぼ同率となる。これは断面形の湾曲に関連しており、外湾する面に主要磨滅面がある場合が多い。つまり、刃部の偏りの方向と縦断面形の湾曲との間にもあまり関連はないということになる。

着柄　A類については抉部分を以って着柄を推定できるが、これ以外に小さな抉を持つものがあり、側縁の対応する位置に刃つぶし状の敲打を行なうものがある。これらが着柄時の紐掛部分を示すものだとすれば、以下のようなものがある。

(a)側縁のほぼ中央部に一対あるもの。2つを結んだ線は中軸線に対して傾斜するものが多い。(0119など)

(b)二対あるもの。両辺で間隔の異なるものが多い。(0128、0131など)

(c)側縁刃部寄に一対あるもの（2301など）

この三種は実際に着柄痕と考えられる変色部を残すものにもあり、①は4404、②は0339、③は1702を実例としてあげることができる。(a)は割合多く、(b)は少ない。(c)はその部分に敲打を持ったり、意図的形状であるかどうか明らかでないものまで含めればかなりある。しかし、全体としてB～D類中で着柄部分を推測できるものは多くはない。

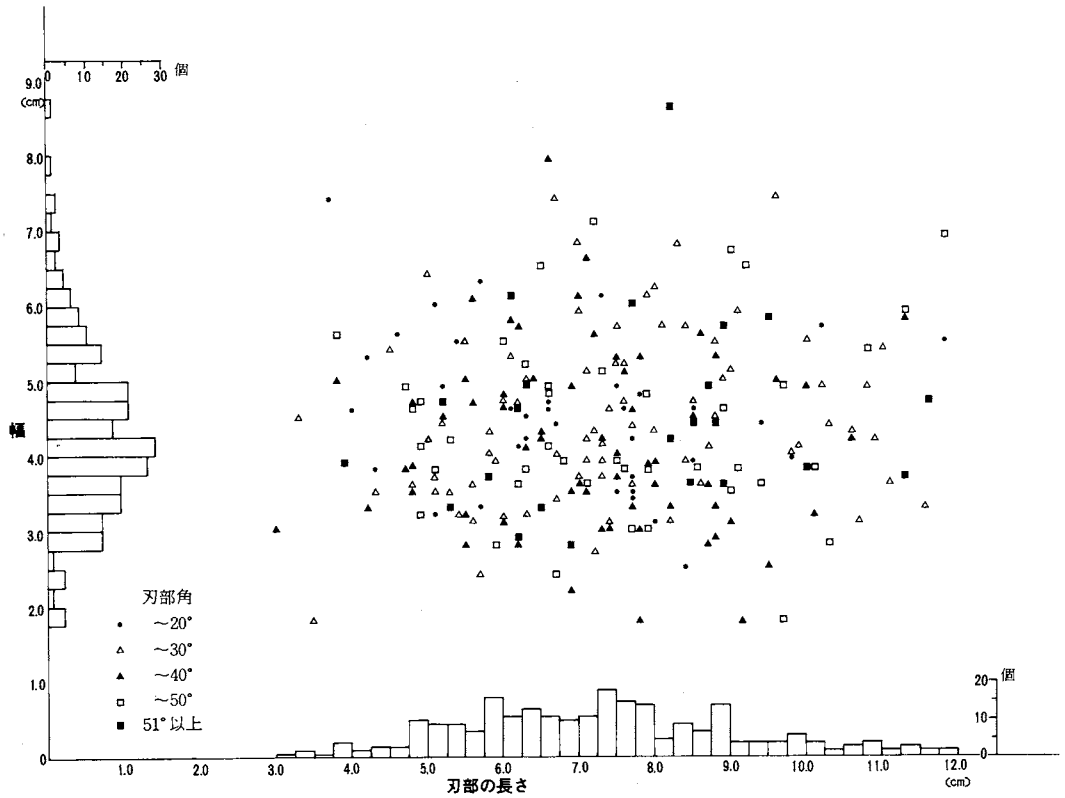
刃部角、折損、石材　この3点は表3～5に示すにとどめざるを得ない。接合したものを別個に数えてあるので、個体数には多少のくいちがいがある。

表5　打製石斧の石材

	Gs	ms	ss	Bs	Ab	Sp	altsm	Hr
1 住	41	7	11	2				
2 〃	9		1	1				
3 〃	35	6	8		1	1		
4 〃	1	1		1				
5 〃	7	2		1				
6 〃	5	4	2					
7 〃	8	3	3					
11 〃			1					
12 〃	19	4	4			1		
13 〃	16	2	3	1				
14 〃	6	2	1					
15 〃	11	2	1	1				
16 〃	6	3	2	1			1	1
17 〃	20	2	6	1	1		2	
18 〃	8	1	5					
19 〃	9	2						
20 〃	7	5	1					
21 〃	19	3	1					
22 〃	25		4	1				
23 〃	16	4						
24 〃	10		2	1				
25 〃	14	4	2					
26 〃	10	4						
28 〃	4	3	2	1				
29 〃	19	4	2					
30 〃	24	5	4	1				
31 〃	6	2						
34 〃	5	1	2					
35 〃	2							
36 〃	9	1	3	2	1	1		
38 〃	11	4	1	1			1	
39 〃	1	2						
40 〃	4		1					
43 〃	4							
44 〃	7	1						
47 〃	1	1						
48 〃	2	2						
計	401	87	73	16	3	3	4	1
土壙出土	41	5	3					
遺構外	297	70	51	10	1		11	
合計	739	162	127	26	4	3	15	1

②　横刃型石器

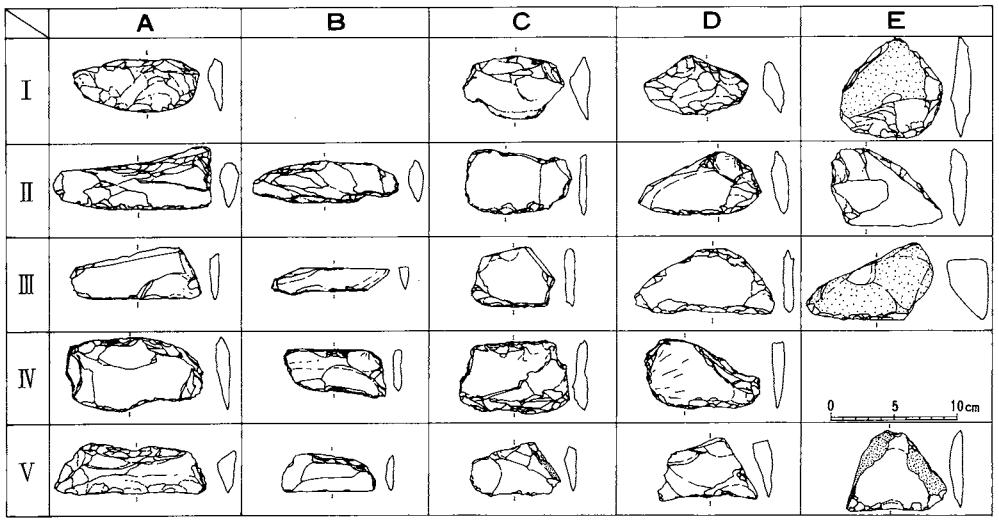
分類　横刃型石器としたものには、打製石包丁に類するものから石鎌、粗大石匙などといわれるものに類似するものまで含めている。また打製石斧との間には相互に転用または兼用がみられる。これらは、主に石材が緑色片岩類であるため鋭くはないが縁辺の刃部加工に特徴が認められ、もし黒曜石に同様の加工を行なうならば削器あるいは掻器とされるものであろう。これらはその形態からみて着柄の考えられるものとそうでないもの、切断具としての刃部を有するものとそうでないものを含んでいる。これらの刃部として用いられたと考えられる部分の長さ、それに直交する



挿図20　横刃型石器の形態と刃部角

身部幅を、刃部角度ごとに示しても、明らかなまとまりはない。形態と刃部の鋭さはほとんど関係がないといってよい。しかし、全体としてみた場合は身部幅で 4 cm を中心とし、刃部長ではいくつかの頂点を持ちながらも 5～9 cm の範囲にほとんどが含まれる。(挿図20)

刃部の長さがいくつかのまとまりを持つことは黒曜石剝片でもみられることであるが、この場合の 1.0



挿図21　横刃型石器の類型（1：6）

表6　横刃型石器の石材

	Gs	ms	ss	Bs	Ab	Gb	ch	altsm
1　住	11		3	1		1	1	
2　〃	6		1					
3　〃	11	1	2	1				
4　〃	1							
5　〃	6	3						
6　〃	2	4	1					
7　〃	8	1	2					
11　〃	1							
12　〃	3	2						
13　〃	15	1	3					
14　〃	4		3					
15　〃	3	1	1					
16　〃	9	2	3					
17　〃	8	1	5					
18　〃	2	2		1				
19　〃	10	1		1				
20　〃	4							
21　〃	9		1					
22　〃	8	1	1	1				
23　〃	1	1	1					
24　〃	4							
25　〃	3	3						
26　〃	5	1						
29　〃	5							
30　〃	7	1						
31　〃	1			1				
34　〃	4	1	2					
35　〃	1							
36　〃	8		1		1			
38　〃	3	1						
39　〃		1						
41　〃	2							
43　〃	3	1						
44　〃	4		2					
47　〃	2							
48　〃		2						
計	174	32	32	6	1	1	1	
土壙出土	17		2	1	1			
遺構外	153	19	4		24			5
合　計	344	51	38	7	26	1	1	5

表7　横刃型石器の刃部角

	10°	20°	30°	40°	50°	60°	70°
1住	1	4	3	5		3	1
2〃		2	3		2		
3〃		3	2	2	4	3	
4〃			1				
5〃		1	4	1	2	1	
6〃		3	2	1		1	
7〃		1	3	4	2	1	
11〃					1		
12〃			1	1	2	1	
13〃		3	6	5	4	1	
14〃		1	3		3		
15〃		1	2	1	1		
16〃		3	2	5	3	1	
17〃			4	7	2		
18〃			3	1	1		
19〃		1	6		1	3	1
20〃			1	3			
21〃		1	5	2	1	1	
22〃		5	2	3	1		
23〃		1	1	1			
24〃		1	1	1	1		
25〃			2	3	1		
26〃		1	1	2	1	1	
29〃		1	2	1	1		
30〃			2	3	2	1	
31〃			1	1			
34〃			3	1	2		
35〃			1				
36〃		1	4	1	3	1	
38〃			1	2	1		
39〃					1		
41〃		1				1	
43〃			2	2			
44〃			3	2	1		
47〃	1	1					
48〃			1	1			
計	2 (0.8%)	36 (14.8)	78 (32.0)	62 (25.4)	44 (18.0)	20 (8.2)	2 (0.8)

cm、1.5 cm の2つの周期はおそらく計測時のくせによるものであろう。刃長 7～8 cm、身幅 4 cm、刃角 30° が平均的な形態といえる。従来からこの種の石器の細分の試みは為されているが、本遺跡は特に多量の資料を得たので、記述上、挿図21のように分類しておく。

Ⅰ～Ⅴ類は刃部形が外湾するものから内湾するものまで、その程度により分け、A～E類は整形の程度と長幅比によって分け、25種の類型を得る。

使用痕　刃部には方向の明らかな擦痕を持つものがある。観察されたかぎりでは刃縁に平行ないしわず

かの角度を持つものである。方向の明らかでない磨滅も含めて刃縁から 2～3 mm 程度の範囲にしかおよばないものがほとんどである。これらは刃部両面に平均してあるものが多い。また、この磨滅面に石包丁にみられるような光沢を持つものがいくつかある。刃部を研磨して仕上げるものはないが、表面または裏面を研磨して平滑にするものがあり、刃部の反対側縁（背）が著しく磨滅するものがある。背つぶしとしての意味を持つ以外に、他の用途、たとえば研磨器的な使用も考えられる。使用痕は全体としてみた場合、打製石斧などにみられるものよりはるかに軽度のものしかなく、強い力が加えられたとは考えられない。また、長期にわたって使い込まれるようなものも少なかったといえよう。

折損　横刃型石器には打製石斧、磨製石斧などからの転用、剝片がほとんど加工されずに用いられたと考えられるものが多く形態も多様である。そのため、現在の資料から完形品と破損品を区分することはほとんど不可能である。刃部の再調整もかなりあり、形態的には折損ではなく成形の手段として折断を行なったと考えられるものもある。もし、機能を失うことがあったとすれば、全体の形態の変化よりも刃部形状の変化に原因があると考えられる。

刃部角　表7のように刃部角は、打製石斧、使用痕ある剝片などと比べてよくまとまっている。黒曜石製品である使用痕ある剝片より鋭いものが多い。ただし、緑色片岩などの剝片が主要な素材であるので、その性質によって黒曜石のようなエッヂは持たず、現在の縁辺断面形はほとんどがまるくなっている。これらの点から、切断具としての用途を考えるとしても、その主要な対象は黒曜石製品とは異ったものであり、たとえば動物質の粘着性あるものには適さないといえる。ただし、使用初期、縁辺が磨滅する前の段階ではこのかぎりでない。使用期間が短かいとすれば、後者の用途も無視できず、むしろ多くの使いわけを考える必要があるかもしれない。

〔粗大石匙〕

横刃型石器のⅠ、Ⅱ類（ともにA、B）に含めるべきものとして、石匙に類似したつまみ部を有するものがある。これらは横刃型石器と石材、製作法、刃部の形状などの差がなく、数もきわめて少ない。つまみ部が着柄に関係するかどうか明らかではないが、抉部分が刃部以上に磨滅するものがある。黒曜石製の石匙は片面加工が多いが、これは粗雑ではあるが両面加工の刃部を原則とするようである。ただし、中には刃部加工を行なわず、一次剝離の縁辺をそのまま刃部とするようなものもある。横刃型石器としたものにもつまみ部に似た形態を持つものがあり、この種の石器は横刃型石器の一種として扱っておいてよいだろう。

③　磨製石斧

刃部を研磨して仕上げる石斧には、乳棒状磨製石斧、定角石斧、小形磨製石斧、局部磨製石斧がある。乳棒状磨製石斧は形態差が大きいが、他は細分できるほどの数もなく形態的にもまとまっている。乳棒状磨製石斧は次のように細分することができる。（挿図22）

Ⅰ、長さが 20 cm 以上の大形品。

Ⅱ、15～18 cm 程度の中形品。

Ⅲ、14 cm 未満の小形品。

A、最大幅に対する最大厚の比が0.7以上の断面が円形にちかいもの。

AB、同じく、0.65前後のもの。

B、同じく、0.55以下の偏平なもの。

以上を組み合わせれば9類が設定できることになるが、実際は小形品ほど偏平であって、形態の確定できる完形品でみるかぎりⅠ、Ⅱ類にはBがなく、Ⅲ類にはAがない。

これらの折損を類型別にみると表8のようになる。大形品がより細片になり小形品に完形が多いことは使用法とともに転用、再成のありかたに関連すると考えられよう。

刃部形態を細かくみれば、中軸線に対して左右対称で刃部側から見て直線的な両刃が11例(挿図23、A)、中軸線に対して一方がより磨滅したように偏っており断面的には同様なもの9例(B)、同様にC1としたもの5例、C2としたもの1例がある。他にも刃部片はあるが小片のためいずれとも決め難い。これらの刃部形態と各類型との間には関連が認められず、刃部が観察できる程度のもののみであるため、折損類型との間にも関連は指摘し難い。刃部形態C1は右利の縦形石斧としてよいものであろう。

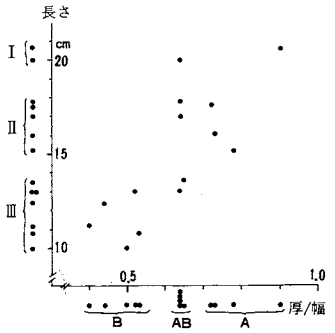
定角石斧は4点(0220、3045、043、044)あり、小形磨製石斧は6点(0371、1751、2623、041、042、045)ある。いずれも蛇文岩または緑色片岩を用いており、蛇文岩製は玉器的なていねいなつくりである。041および乳棒状石斧BⅢ類とした0220は定角石斧との中間的形態である。

以上のうち着装した痕跡を残すものが乳棒状石斧に数点あるが明確でなく、頭部が柄から出ていたという以外、詳細はわからない。また、研磨痕と区別でき方向が特定できる使用痕は観察されなかった。

〔局部磨製石斧〕

刃部のみ研磨している石斧が14点あるが、これらは付表中では打製石斧に含めている。刃部以外は他の打製石斧と差がないため使用痕の欄に明記しておいた。研磨痕と使用痕が区別できるものはなく、刃部形態は乳棒状石斧に準じて示せば、Aが3例、Aではあるが直刃的なもの2例、Bが1例、Bではあるが直刃的なもの3例、不明4例となるが、断面形でみると片刃的なものが多い。(図0123、0701、1209、1724、1730、2101、2405、2501、3603)これらには着装痕を残すものはない。

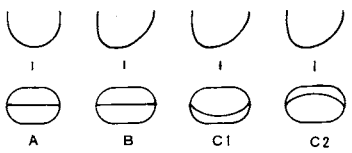
接合資料11(図324、図版117)に示したものは局部磨製石斧といいうるものであるが、尖端部を両面からわずかず



挿図22　乳棒状磨製石斧の形態

表8　乳棒状磨製石斧の類型と折損

類 \ 折損型	A	B_1	B_2	C_1	C_2	D_1	D_2	D_3	E_1	E_2
Ⅰ類										
A		11	6	2	1			2	3	
AB	1	6	5	1				1	1	4
B		2	4		1		1	1		1
不明		1		1		2		1	2	3
Ⅱ類										
A	1	1	3			1		1		
AB			1	1	1			1		
B	2	1	2							
不明									1	4
未成	2									
Ⅲ類									D_{13}	E_4
A				1					1	1
AB	2									
B	5									
不明										
不明										E_{14}
AB										1
不明						2	2	2	1	



挿図23　磨製石斧の刃部形態

つ磨いて小さな刃を付けている。明瞭な4～5条の黒変した着装痕を残しており、この条より刃部寄はほぼ全面に炭化物が付着し、反対側は変色がみられない。主加工面では中央の条に対応する部分より頭部側に不整形な黒変があるだけである。また、主加工面はかなり磨滅しており、これは刃端から身部中央までおよんでいる。着装痕と考えられる条は中軸に対し80°強の角度を持つ。刃部形態は現状ではBとなっており、研磨痕と区別される使用痕はない。はたして縦斧であろうか。

④ 凹石・磨石

分類 従来、凹石は磨石に含めて扱われる場合と分離される場合があった。凹石の形状は磨石と差異がなく、浅い凹みの場合には意図的なものかどうか不明なものもあるので一括しておく。凹石はほとんどが敲打による凹部以外の磨滅面または敲打面を持っており、これらは整形のためではなく使用の結果を示すと考えられる。これらの使用痕と敲打による凹部とに機能的に関連があるか明らかでないが、凹部を持たずに同様な磨滅面または敲打面を持つものがわずかであり、無関係とは考えられない。これらの磨滅、敲打および凹部の成形に関わる敲打が、使用痕としてあげられるものであるが、その程度、位置などの変化は漸移的である。礫の形状は、特に凹み以外の磨滅、敲打痕と関連するので、これによって分類を行なえば、礫面の風化による観察の不備を補うことができる。

原材はほとんどが輝石安山岩の円礫であり、他の石材を用いるものは数点にすぎない。円礫の形状により以下の10類に分ける。

A、定型(偏平で原材の自然面を残さない定型化したもの)

B、棒状で断面形が隅丸方形状になるもの

C、　〃　　円形にちかいもの、大形

D、長円形で偏平なもの

表9　凹石・磨石の類型別数量

遺構	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	?	計
Ⅰ27住				2	1			1				4
32〃		1							1	1	1	4
39〃				2	2			1		1		6
小　計		1		4	3			2	1	2	1	14
Ⅱ 1住	2	1		3	3	1	1	1	1	1		14
30〃	2	2	1	2	4	1	3	2	2	1		20
18〃		2	1	2	1		1	2		1	1	11
7〃	1				1	1				1		4
29〃		1			4							5
28〃	3	2		1	3	1				4		14
6〃				1	2							3
34〃				1	1				1			3
31〃		2			2			1		1		6
48〃	1			1								2
42〃					1		1					2
小　計	9	10	2	11	22	4	6	6	4	9	1	84
Ⅲ22住	2	4		4	2	1			2			15
36〃				2			1	1		1		5
23〃	1	2		2				2	1	1		9
16〃							1	1	1			3
38〃				1	1		1	2	1		1	7
15〃					3			1	1	1	1	7
5〃		1		1	1			2				5
44〃			1					2		1		4
20〃				1			3		1			5
26〃							1	2			1	4
小　計	3	7	1	11	7	1	7	13	7	4	3	64
Ⅳ 3住		1	1	3	2			2	1			10
24〃	2			1	3		2	2	2	2		14
17〃						1	2	1	3		2	9
13〃	1			4	4	4	1		1	2	1	18
19〃	2	2		1	1	1	1	1		2		11
12〃	2						1		1			4
21〃	1						1					2
25〃					3			1				4
2〃				1								1
14〃		1		1		2						4
47〃					1		1					2
11〃				1								1
小　計	8	4	1	12	14	8	9	7	8	6	3	80
土　壙	2	2	5	10	11	4	5	4	3	8		54
遺構外	21	13 (17)	14	31	29	18	18	27	12	30	15	245
計	43	37 (17)	23	79	86	35	45	59	35	59	23	541

E、　〃　厚みのあるもの

F．円形にちかく偏平なもの

G.　〃　厚みのあるもの

H.　〃　中厚、中形

I．　〃　〃、小形

J．不定型　分類不能

以上の10類の形状の差は磨石と同様の用途によるための変化であるとともに、それに適する形状の礫を選んだことにもよるであろう。

使用痕　上記分類のうち、A～Gは磨石としての磨滅面を持つものがほとんどであり、H～Jはほとんどが持たない。凹部の成形は確認できるものはすべて連続的敲打により、滑らかな凹面を持つものはない。A～C類は長軸方向の両端面に敲打痕を残すものが多い。凹部を有さないもの（磨石）は、定型化しないものが自然礫と誤認された可能性があるものの次のように少ない。

A――2個、BないしC――22個、F――1個、G――1個、I――3個、J――1個。計30個。このうちBないしC類としたものは、これまで特殊磨石などといわれたものに類似する。これに対してなんらかの凹部を有するものは総数511個となる。磨石類は凹部を持つことがその属性のひとつと言ってよく、その点で従来、特殊磨石として扱われてきたものはそれなりの意味を持つものであろう。

折損　折損の状態は表10のようになる。このなかには接合したものが4例あり、いずれもほぼ中央より折れたものでB類3例、C類1例である。折損品はA類、B類など定型化したものに多い。折損類型Bとしたものは敲打器的に用いた結果の破損ではなく、ほぼ半折するものであり、これもより定型化したものに多い。一方、折損類型Cとしたものは、剝片状に欠損したものであり、凹部以外の使用痕に関連すると考えられるものであるが、これはJ類（不定型）にやや多いほか特定の類型には集中しない。このことから定型化したものにみられる折損は凹部の成形に関連する可能性があり、不定型なものは凹部成形以外の要因で折損することが多かったとも考えられる。そしてC型の折損が各類型にあまりかたよらずにみられることは、凹部成形以外に関わる用途のうち破損に至るような使用法は特定の形態を条件とはしないものであったと考えうる。これは、いわゆるハンマー・ストーンの形態にも通ずるものであろう。

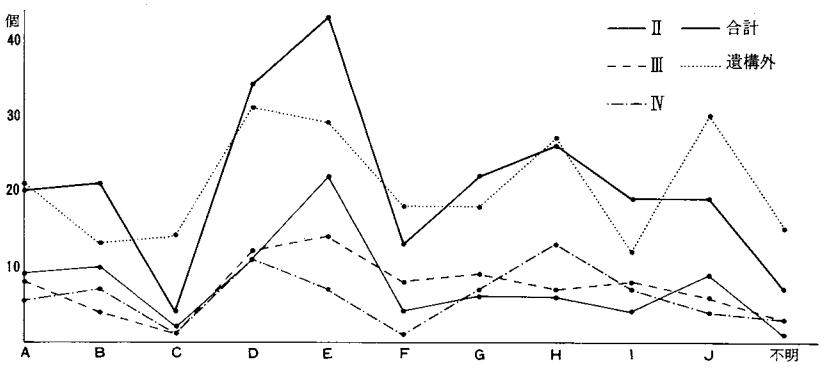
いずれにしても総数541個のうち破損するものは126個（23%）と少なく、そのうちB型折損は75個（14%）、C型折損は51個（9%）であり、凹石に加えられた打撃の程度が推測される。つまり、凹石を敲打器として用いて折損した例よりも本来的な凹部成形に関わる折損例の方が多くA類（定形）では43個中10個を占める。一方、凹部を持たない磨石類29個のうちB型折損5例、C型折損9例で、C型の方が多くこの折損が凹石の主要な使用法に起因しないという推定の理由ともなる。

表10　凹石・磨石の折損

	折損	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	?	計
住居	A	16	11	2	28	41	11	20	26	18	18	1	192
	B	2	7	2	9	3	1				3	6	33
	C	2	4		1	2	1	2	2	2		1	17
土壙	A	1	1	4	8	8	4	5	3	3	6		43
	B	1		1	2	3					2		9
	C		1						1				2
遺構外	A	14	5(9)	11	27	29	14	15	26	12	15	3	180
	B	7	7(1)	1	2				1		4	10	33
	C		1(7)	2	2		4	3			11	2	32
計	A	31	17(9)	17	63	78	29	40	55	33	39	4	415
	B	10	14(1)	4	13	6	1		1		9	16	75
	C	2	6(7)	2	3	2	5	5	3	2	11	3	51

分布　凹石および磨石類は総数541個のうち、住居址覆土および床面から242個

(44.7%)、土坑から54個(10.0%)、遺構外から245個(45.3%)出土している。遺構に関連するものは出土竪穴の時期別にみると、他の石器類がほとんど漸増傾向にあるなかで、前期を除けば漸減傾向にある。竪穴出土の特徴として、同一竪穴には同類型の多いことを指摘できる。遺構外出土の類型別構成比は貉沢期の構成比にちかい。



挿図24　凹石・磨石の時期別類型構成

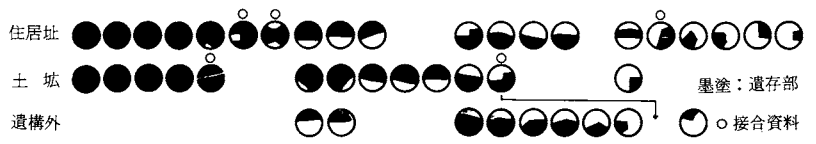
類型別の比は挿図24に示すように目立った変化は認められない。

⑤ 石　皿

使用痕　石皿の使用面に用途を示す付着物を残すものはない。ただ、676号土坑出土の一点は剝落部、折損面以外は煤が付着し、加熱の結果、剝落、折損を生じたと考えられる。使用面は大部分が、粗面な安山岩に敲打痕をとどめるが、土坑300、18号住出土のものは平滑になっている。

折損　大部分が破損品であり、その部位は挿図25のようになる。完形品は遺構外にはなく、住居址出土品に小片が多い。土坑出土品は欠損部が比較的小さい。接合したものは同住居址内1例、住居址相互2例、土坑相互1例、土坑と遺構外1例の計5例ある。石材は輝石安山岩であり割れの方向はその節理によっているが、破損の原因を示すような痕跡の認められるものはない。

分布　遺跡内における分布は付図3のようになる。住居址出土20例、土坑出土13例、遺構外出土10例であり、土坑出土例が比較的多いことが注意される。接合例のうち土坑751と土坑856のものは105m、土坑896と遺構外のものは50m、18号住居址と20号住居址のものは62mも離れている。



挿図25　石皿の折損

⑥ 石　鏃

石鏃は総数221点ある。その70%ほどが図示できたので詳細はそれによる。形態的にみると同一住居址出土のものに類似するものが多いことを指摘できる。たとえば、24号住居址(2440～2459)では片面に剝片製作時の剝離面を大きく残す粗雑なつくりのものが多く、36号住居址(3637～3643)では同様の厚手のものが多い。時期、製作者などの傾向として抽出できるかもしれない。

折損する部位は表11のようになる。総数でいえば、ほぼ半数が完形である。折損は片脚を欠くものが多く、先端を欠くもの、両脚を欠くものは少ない。これに比して脚部や先端部はわずかであり、小さいための見落しもあろうが、使用場所に残されたからとも考えられよう。得られた資料の中には接合するものは

なかった。折損したものとして集計したものには、未成品、製作途中の破損品なども含んでいる可能性もある。使用石材はほとんどが黒曜石であり、小数のチャート、水晶がある。基部の付着物、使用痕などで着柄、使用に起因すると断言できるものはない。

1638（図306）は長時間の加熱によって発泡してパーライト化し、片脚が変形している。黒曜石がこのような状態となるための条件が存在したことが実証される興味深い資料である。

表11　石鏃の折損部位（残以外は欠けた部分を示す）

	A	片脚	先端	先端片脚	先端両脚	その他
1 住	4	1			1	
2 〃	1					
3 〃	1	4	1			
4 〃	2					
5 〃	2					
6 〃	1					
7 〃	4					
12 〃	3	1		1	1	
13 〃		1				半欠1
14 〃		2				
16 〃	1	2	1	1		
17 〃	4	3	1			片脚残1
18 〃	3	2				
19 〃	5	4	2			端・下半1
20 〃	2	2				
21 〃	5	2		1		
22 〃	4	6				片脚先1
23 〃	4	2	1			下半1
24 〃	13	3	2	1		
25 〃	2	1				
26 〃	1					先端少1
27 〃	1		1			
28 〃	1			1		
29 〃	1					
30 〃		2				
31 〃		1				
32 〃	1					
33 〃				1		
35 〃		2				
36 〃	3	3				基部1
38 〃	1	1	1			上半1
39 〃	4	2				下端1
40 〃	1					
44 〃	3	1				
47 〃	1					
計	79	48	10	6	2	
土壙出土	2	2				両脚1
遺構外	29	14	1	5		下半2 両脚3 左半1 上半2 片脚残2 先端・下半1
計	110	64	11	11	2	21

⑦　スクレイパー類（掻器、削器）

主に黒曜石製で、なんらかの刃部を作りだす剝片石器を総て含めている。総数128点。次のようなものがある。

(i)　石匙（34点）

長さ 6 cm 以上の大形品は頁岩、緑色片岩を素材とし粗雑なつくりである。5 cm 程の中形品はチャートが多く、ていねいに仕上げられている。黒曜石製品は石鏃、ドリルなどと比べると少なく、長さ 2～3 cm の小形品となり、大きさによって石材が選択されたか、石材によって大きさが制約された状況を示している。横型石匙がほとんどである。

(ii)　小形円形スクレイパー（18点）

直径 2 cm 前後の円形でスクレイパー状の刃部加工を全周に行なうものである。両面加工のものもあるが、片面加工あるいは片面のみ調整がていねいなものが多い。図示したもののほか、遺構外に1点あり、同程度の大きさで同様の加工をし台形あるいは方形になるものまで含めれば、28点ある。

(iii)　スクレイパー（66点）

長さ 3 cm 前後の小形品と 5～8 cm 程度のやや大きなものとがある。ほぼ8割が小形品であり、石匙同様に石材は黒曜石が大半で、大形品はチャート、頁岩などが多い。刃部は片面加工、両面加工がほぼ同数あ

り、大小の比もそれぞれ同程度である。サイド・スクレイパー、エンド・スクレイパー、ラウンド・スクレイパーなどに細分可能であるが、形態は多様で、上記(i)の欠損品、(ii)に類するものも含んでいるかもしれない。

⑧ 石 錐（ドリル）

ドリルは総数87点あり、うち完形67点、錐部の先端を欠くもの15点、錐部のほとんどを欠くもの5点である。全面を調整して仕上げるものから、剝片の尖端をわずかに加工するものまで加工の程度には種々あり、なかには3844のように直接機能部以外を整形して複雑な形を作りだすものもある。両端が錐部としての形態を持つものも3点ある。石材は黒曜石がほとんどで、チャートが少数あり、大形の粗雑なものには緑色片岩製のものもある。特殊なものとして0727（図273）、1752（図276）のように粗大なものがある。

形態は大別して、細身の棒状のものとつまみ部分の付くものとがある。前者には錐部が片面加工で断面三角形のものが多い。錐部の長さは2cmから3mmまでいろいろなものがあるが、錐部中央で幅、厚さとも4mmをこえるものはほとんどない。使用痕が観察できるものがいくつかあり、すべて水平方向の平行擦痕であり、先端近くにだけ観察される。

分布にはかたよりがあり、比較的多量に出土した住居址と出土しない住居址とがある。また、鏃にもみられるように、住居址によって良く似た形態のものがまとまっている場合がある。たとえば15号住居址（1532～1536）では細身で長いものが多く、36号住居址（3648～3650）では粗い加工のやや短いもののみである。出土竪穴の時期がその覆土から出土した石器の時期を必ずしも決定するものではないが、出土竪穴の時期が新しくなるに従って、形態の多様性が薄れて長さ2.5cm程度に統一されて行くようにもみえる。

⑨ その他の石器・石製品

(i) 石錘　錘と考えられるものが8点ある。0191、0221、1417、3047、095～098であり、40g以下の軽量品と65g以上のものが各4点であり、1417が糸巻形である以外、いずれも円礫の両端を敲打して抉をつけたものである。

(ii) 敲打器　凹石や磨石類のなかにはその一端を敲打に用いたと考えられるものがかなりあるが、それ以外に特に敲打器として指摘できるものがある。9点あるが、石材はほとんど緑色凝灰岩（グリーン・タフ）であり、他の石材に比べ重く硬い。河床礫の角や稜部を継続的に敲打した結果、曲面の使用面を残すものである。手に握られ、ハンマー・ストーンとされたものであろう。主な対象は石皿、乳棒状磨製石斧などと考える。1522、1634、2326、072～077。

(iii) 砥石　明らかに砥石と考えられるものは5点ある。4416、099～102であり、緑色片岩、ホルンヘルスなどを用いており、著しい磨滅面を持っている。101、102は流紋岩であるが平安時代以後のものと考えられる。他は縄文期のものであろう。

(iv) 装飾品　石製装飾品としては3点のみである。2点は滑石製の玦状耳飾の小片であり、うち1点は

表12　緑色片岩剝片類の数量

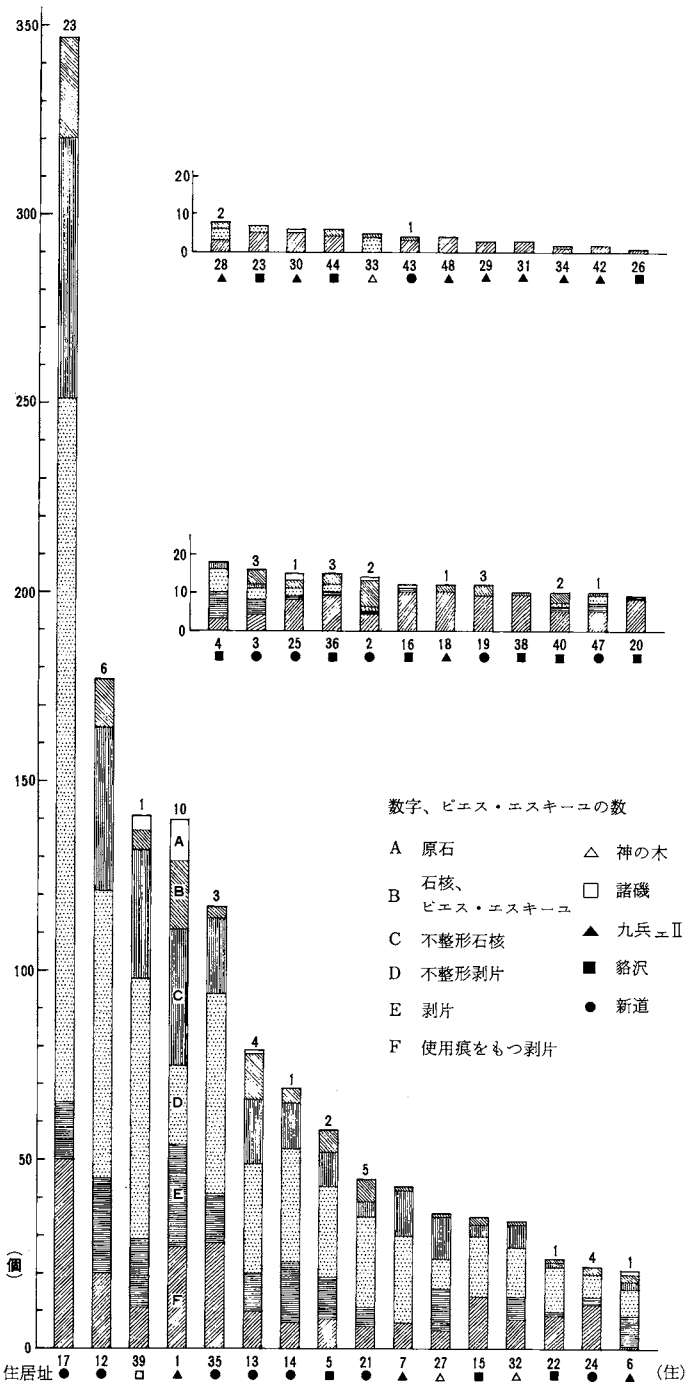
住居址	1	3	4	5	6	7	8	12	13	14	15	16	17	19	20	21	30	35	39	40	43	48	小計	遺構外	総計
個数	6	8	1	11	3	5	6	22	30	4	7	3	32	19	9	7	4	1	1	1	1	2	183	48	231
重(g)	90	390	50	380	75	195	70	685	1035	85	390	305	1205	2375	385	225	295	15	270	70	50	20	8660	7450	16110

土坑1285より出土している。片側から八割ほど穿孔しているが両面穿孔である。もう1点は両面穿孔のいわゆる補修孔を持つ(219)。218は三角形平板の一端に両面穿孔の2孔を持つものであり、先端を欠損するが、全面がよく磨かれている。垂飾であろう。

(v) 石棒　石棒と考えられるものは、7点ある。1253、1776、2479、2480、2940、P896—1、114、である。1253は住居址東西両壁近くにあったものが接合した。いずれも破損しており、1776、2940は石棒と断定はできない。

(vi) 緑色片岩類の原石・剝片類

黒曜石の原石・剝片類の他に緑泥片岩を主とする原石、石核、剝片がある。これらは、節理面を利用して適当な大きさに調整されたと考えられ、わずかな加工により、打製石斧や横刃型石器にできる。しかし、量は下記の程度でさほど多くなく、これらの石材を原材とする石器製作が遺跡内で系統的に行われていたことを示す資料とはいえないだろう。ただ、これら粗大な剝片類の中には横刃型石器として分離したものと類似するものもあり、黒曜石製の使用痕あるものと同様な意味を持つものが、横刃型石器の一部とこれらの剝片類のなかにあるかもしれない。同一母岩と考えられるものはいくつかあるものの、接合するものは認められなかった。住居址覆土および床面出土のものは新道期に特に多い。遺構外出土のものとの比は1：1.2で同石材の成品と大差ない。



挿図26　黒曜石剝片類の住居址別数量

表13　黒曜石類の遺構別構成

	原　石	石核類	不整形石核	不整形剝片	剝　片	使用痕を有する剝片	計	他石材
1住	11 104.9g (24%)	8 53.7g (12%)	36 95.6g (22%)	21 53.8g (13%)	27 37.6g (9%)	27 87.8g (20%)	130 433.4g	
2住	1 13.9 (61%)			1 0.6 (3%)	1 1.6 (7%)	4 6.5 (29%)	7 22.6	
3住			1 5.0 (12%)	3 17.3 (4%)	4 5.1 (13%)	4 12.6 (32%)	12 40.0	
4住			2 8.2 (16%)	6 17.4 (34%)	7 10.3 (20%)	3 14.9 (30%)	18 50.8	
5住			9 61.6 (40%)	24 48.4 (31%)	11 15.8 (10%)	8 29.5 (19%)	52 155.3	剝片3ヶ116g
6住	1 9.4 (16%)		2 14.9 (26%)	7 16.3 (29%)	8 14.7 (26%)	1 1.5 (3%)	19 56.8	袋状ピット内ob 石核状1ヶ58g
7住		1 9.3 (5%)	12 111.7 (57%)	23 46.3 (24%)		7 27.6 (14%)	43 194.9	
12住		7 28.6 (5%)	42 320.0 (51%)	76 161.9 (26%)	25 34.0 (5%)	20 84.8 (13%)	170 629.3	
13住	1 62.0 (19%)	8 42.15 (13%)	17 105.0 (31%)	29 69.4 (21%)	10 14.9 (4%)	10 39.6 (12%)	75 333.05	
14住			12 124.0 (55%)	30 68.0 (30%)	16 19.0 (9%)	7 13.8 (6%)	65 224.8	
15住		2 6.9 (8%)	3 9.3 (10%)	16 40.0 (45%)		14 32.8 (37%)	35 89.0	
16住	1 37.4 (47%)				1 12.1 (15%)	10 30.5 (38%)	12 80.0	ch. 剝片1ヶ 15.7g
17住		4 29.3 (4%)	69 325.0 (44%)	186 263.1 (36%)	15 45.7 (6%)	50 77.2 (10%)	324 740.3	ch. UF. 1ヶ 45.9g
18住		1 1.8 (5%)				10 31.9 (95%)	11 33.7	
19住						9 16.5 (100%)	9 16.5	
20住					1 2.4 (6%)	8 36.9 (94%)	9 39.3	
21住			4 19.0 (20%)	24 49.1 (51%)	5 11.3 (12%)	6 16.4 (17%)	39 95.8	ch. 剝片2ヶ 6.9g
22住			1 7.5 (11%)	12 33.8 (49%)	1 1.0 (1%)	9 27.4 (39%)	23 69.7	
23住				2 2.9 (17%)		5 14.1 (83%)	7 17.0	
24住				5 11.1 (31%)	2 5.1 (14%)	11 19.8 (55%)	18 36.0	
25住	2 25.9 (23%)	1 41.25 (36%)		2 9.5 (8%)	1 1.9 (2%)	8 35.8 (31%)	14 114.35	
26住						1 2.2 (100%)	1 2.2	

	原　石	石核類	不整形石核	不整形剥片	剥　片	使用痕を有する剥片	計	他　石　材
27住		1 8.4 (6%)	11 62.0 (47%)	8 17.0 (13%)	11 27.2 (20%)	5 18.5 (14%)	36 133.1	頁岩UF. 1ケ 4.1g ch. 剥片 1ケ5.8g
28住				3 4.7 (32%)		3 10.1 (68%)	6 14.8	
29住						3 10.7 (100%)	3 10.7	ch. UF. 1ケ 4.0g
30住	1 18.5 (48%)					5 19.0 (52%)	6 38.2	
31住						3 7.0 (100%)	3 7.0	
32住		1 10.5 (12%)	6 25.6 (28%)	13 19.2 (21%)	6 5.0 (5%)	8 31.1 (34%)	34 91.4	
33住		1 6.2 (16%)		4 32.1 (84%)			5 38.3	
34住				1 4.8 (83%)		1 1.0 (17%)	2 5.8	ch. UF.1ケ 2.7g
35住 P			15 79.3 (38%)	40 69.6 (34%)	5 8.4 (4%)	18 49.8 (24%)	78 207.1	
35住 フ			5 27.2 (22%)	13 27.8 (23%)	8 14.5 (12%)	10 52.2 (43%)	36 121.7	
36住		3 7.3 (17%)		2 8.9 (21%)	1 0.8 (2%)	9 25.1 (60%)	15 42.1	ch. 剥片1ケ 8.5g
38住		1 1.8 (8%)				9 19.5 (92%)	10 21.3	
39住 P	3 45.7 (22%)		12 88.7 (44%)	27 64.0 (32%)	2 4.0 (2%)		44 202.4	床. ch. 不整形剥片2ケ8.0g
39住 フ	1 23.2 (6%)	1 28.35 (7%)	22 187.4 (48%)	42 78.6 (20%)	16 28.3 (7%)	11 46.8 (12%)	93 392.65	ch. UF.1ケ 8.5g
40住				1 1.6 (6%)	1 5.4 (19%)	5 20.9 (75%)	7 27.9	
42住						2 3.0 (100%)	2 3.0	
43住						3 10.1 (100%)	3 10.1	
44住		2 37.8 (74%)				4 13.2 (26%)	6 51.0	
47住				2 2.6 (12%)	2 5.2 (24%)	5 14.2 (64%)	9 22.0	
48住						4 7.6 (100%)	4 7.6	
遺構外	4 107.5 (13%)	2 132.05 (16%)	7 34.0 (4%)	9 21.5 (3%)	10 19.4 (2%)	143 529.7 (62%)	201 844.15	ch. 剥片4ケ 25.4g
計	26 448.4 (8%)	70 445.40 (8%)	288 1711.0 (29%)	632 1261.3 (22%)	197 350.7 (6%)	483 1550.3 (27%)	1696 5767.1	ch.15ケ131.4g

挿図27　黒曜石類の分布

⑩　定型的石器以外の黒曜石類

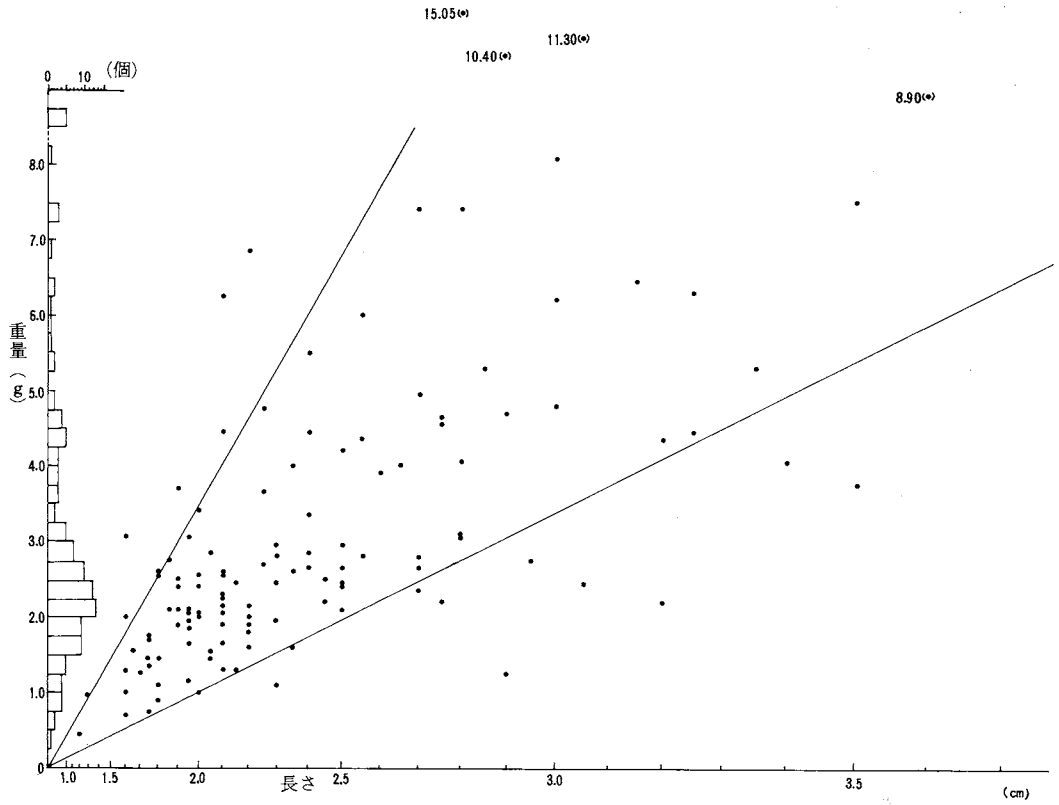
前節までに扱った石器類以外の黒曜石およびチャートを素材とするものを以下にまとめておく。その構成は表13のようになる。これらのうちで原石としたもの以外は人為的成形が加えられたものと考えてよいものであるが、原石も遺跡内に持ち込まれた点では人為物である。これらは総量で黒曜石1838点、6282.2g、チャート15点 131.4g あり、そのうち、道具として用いられたものは黒曜石609点 1970.1g、チャート4点 61.1g であり、残りは原材、素材としての一次加工品、製作過程で生じるチップ、技法の把握できていない石核などである。

これらの遺跡内における分布は、挿図27のようになり、出土竪穴の時期と構成を示せば挿図26のようになる。黒曜石製定型石器の分布とも他の石材の定型石器の分布とも、ほとんど関係は認められない。調査精度の疎密も問題の残るところであるが、全体としての分布は、他の石器類と同じく竪穴の分布に沿って環状になっている。出土竪穴の時期別にみると、他の石器類同様、降るにしたがって増加する傾向にあり、その変化の度は他器種より大きい。

接合資料、同一母岩資料については、これらの中に石核を含めていることからも意義の大きい検討課題であるが、その余裕がないので全く行っていない。その点からも各竪穴単位でなんらかの意味を持つ群として、これらを扱いうるかどうかということも残された問題である。

（挿図26と表13が事実認定の修正や遺物の紛失により異なる点があるが、表を確定数値とする。）

(i)　ピエス・エスキーユ

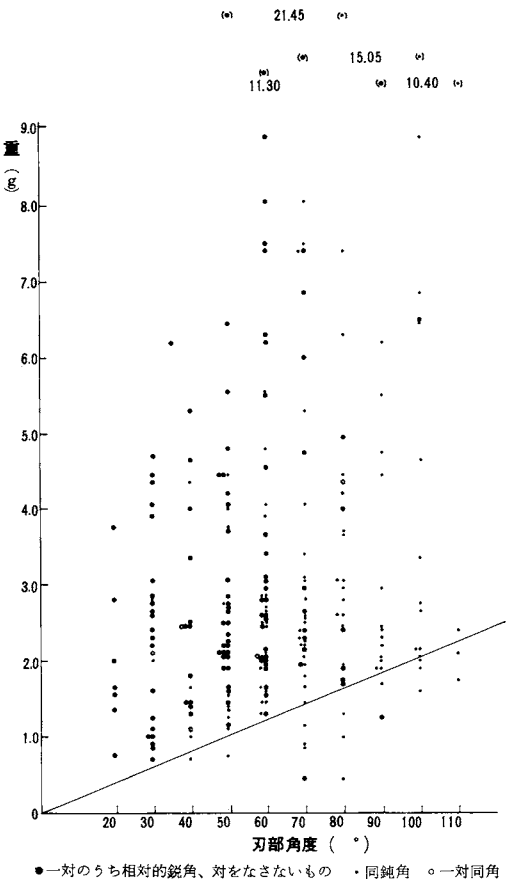


挿図28　ピエス・エスキーユの長さと重さ

黒曜石類のなかに打撃が連続して加えられながら普通の刃部を作出しないものがある。これらは両極剝離を有してピエス・エスキーユと言われるものと、それ以外のものに二分される。両極からの打撃を有するものをまとめておく。総数120個あり、形態的には、剝離された剝片が細石刃状の整ったものになるものから、きわめて不整形になると考えられるものまである。前者は細石核状であるが、打撃点が面を為さず点または線上にあり、細かなつぶれを生じ岩石組織を破壊している。後者は薄手の剝片を素材とした場合が多く、つぶれの範囲はより大きい。これらの用途を検討する余裕はないが、その属性の一部は付表に示した。

挿図28のように、長さ 1.5～3.5 cm、重さ0.7～8.0ｇの範囲にほとんどがおさまる。なかでも長さ 2.0 cm、重さ2.0ｇ程度のものを中心として、3.0ｇ以下の小形のものが多く、これを越えるものは小形品ほどのまとまりはない。図中の斜線は長さと重量の正比例、つまり同一形態、同一比重である場合の長さと重量の関係を示すものであるが、大きさが変わっても形態的変化の範囲はあまり変わらないことになる。

一方、刃部角（10° 単位で計測したもの）と重さとの関係をみると（挿図29）、1.8～2.8ｇ、50°～60° に集中する。また、重いものには角度の鋭いものはなくなり、図中斜線で示すように刃部角と重さの最低線には相関がある。重さ３ｇ以上のものは刃部角のありかたもやや異っており、これによって二大別することもできよう。



挿図29　ピエス・エスキーユの刃部角

(ii)　石核

ピエス・エスキーユとしたもの以外に連続した打撃が加えられているものを石核として扱う。次のようなものがある。

(a)　一辺からの打撃がほぼ平行して加えられ、対辺はその剝離面で終わるもの、打面は原石面の場合が多く、調整打面を持つものはない。縦に短かく、打面方向に長いものが多い。

(b)　(a)と同様であるが、対辺はピエス・エスキーユの刃部と同様な形状となるもの。ピエス・エスキーユの折損したものも含む可能性があるが、数は少ない。

(c)　周囲を任意に打面とするもの、厚手の剝片を素材とするものが多い。

これら三種から得られる剝片を石器の素材とした場合、石鏃程度以上の大きさのものは作れない。黒曜石の大形の石核は、(a)と(b)にそれぞれ42.6ｇ、122.9ｇのものがあるだけで、これも得られる剝片の大きさには大差ない。

接合関係を確かめていないので明らかでないが、これらの石核類は住居址内に存在する剝片類に関連するものであろう。

(iii) 使用痕を有する剝片類

整形の意図を認め難い黒曜石、チャートの剝片、石核の中に使用痕、微小剝離などと呼ばれるものを縁辺に持つものがかなり多量に存在する。定型的石器類の他に不定形石器といわれるものが縄文時代の石器組成ではかなりの比重を占めているが、これらは不定型石器とも異って二次加工が為されておらず、従来、石器として取り上げられない場合もあった。また、ここでは連続した小剝離を持つもののみを摘出したが、使用痕として認定しうる痕跡が、次節の石核・剝片などのなかに存在しないとは言えないので、二次加工（場合によっては一次加工も）が為されない剝片、石核のうち、連続した小剝離を有するもののみを使用痕を有する剝片類としてここで扱うことになる。

これらの素材は原石、石核、剝片すべてにおよび、それによる分類も可能であるが、素材に二次加工を施さずに用いていることを特徴とするので、あまり意味のある分類とはならない。岡谷市経塚遺跡（縄文晩期中心）（「中央道報告岡谷市その4」）との比較を行なうと、小剝離部分の角度は、よりまとまっており、20°から60°までにほぼ80%がおさまる。連続している小剝離部分の長さは 10 mm を頂点とし、それより短かいもの39%、長いもの50%程度となり、経塚遺跡で指摘された、4 mm と 7 mm の頂点、11～15 mm と 16～21 mm のまとまりは 7 mm と 10 mm の頂点、14 mm 前後と 16～20 mm のまとまりとしてある。これもまたよりまとまっており、晩期に比べ、素材の選択、使用法などがより限定されていた結果であろうか。（挿図30・31）

使用法について遺構外より出土した全量（140個）についてみてみると次のような区分ができる。

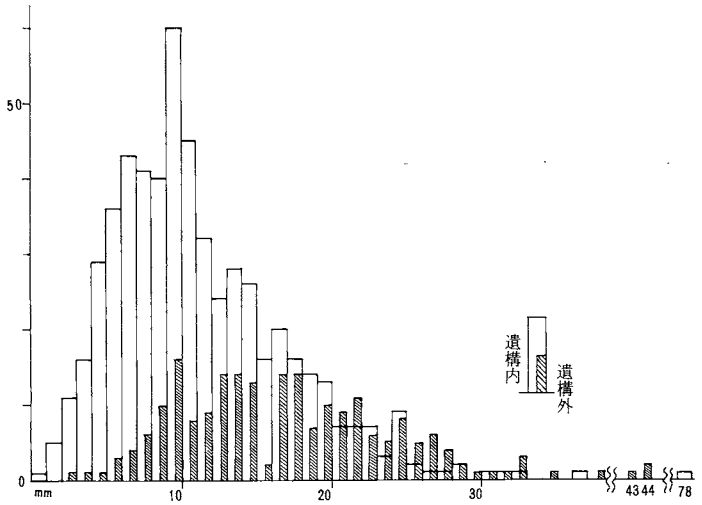
（I）単数の使用痕部を持つもの（79個）

a　縁辺の片面に連続する均一な小剝離を持つもの（43個）

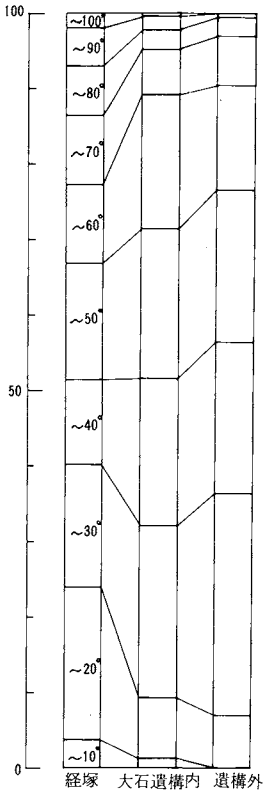
a′　同じく片面に連続的でなく強弱のある、場合によっては鋸歯状の小剝離を持つもの（14個）

b　aと同様な小剝離が両面におよぶもの（6個）

b′　a′と同様な小剝離が両面におよぶもの。　aとa′の組み合せを含む（7個）



挿図30　使用痕部の長さ



挿図31　使用痕部の刃部角

表14　使用痕部の類型別の長さ

	a	a′	b	b′	c	計	2a	aa	aa′	2a′	a′a′	ab′	2b	〔aa〕	計	1	2	計	合計
1㎜																			
2																			
3																1		1	1
4																1		1	1
5																1		1	1
6	1					1	1								1	1		1	3
7	2					2			1						1	1		1	4
8	1					1	2							2	4	1		1	6
9	2	1	1			4	1	1						1	3	3		3	10
10	4		1			5	3	1	1		1			1	7	4		4	16
11	2	1	1			4						1	1	1	3	1		1	8
12	1					1	4				1			2	7	1		1	9
13	2	1	1	1		5	2	1	1					2	6	2	1	3	14
14	5					5	6							1	7	2		2	14
15	2		1	2		5	2	1			1			2	6	2		2	13
16		1				1	1								1				2
17	6					6	2	1						3	6	2		2	14
18	3	2	3			8	2						1	1	4	2		2	14
19	2			1		3	1				1	1			3	1		1	7
20	4	2				6	1					2		1	4				10
21	4				1	5	3								3	1		1	9
22	4	3				7	3				1				4				11
23	1	1			1	3	1				1			1	3				6
24		1	1			2	3								3				5
25	1	2			2	5	1							1	2	1		1	8
26	2		1	1	1	5													5
27	2				1	3	1							1	2		1	1	6
28	1					1								1	1	2		2	4
29														1	1	1		1	2
30	1					1													1
31								1							1				1
32										1					1				1
33		1		1	1	3													3
34																			
35				1		1													1
36																			
37																			
38	1					1													1
39																			
40																			
41																			
42																			
43					1	1													1
44					1	1					1				1				2

c　特に微小な剝離が連続するもの。表裏の区別はし難い（9個）

（II）複数の使用痕部を持つもの（42個）

2a　aが同一面に2カ所あるもの（17）

a•a　aが別な面にそれぞれ1カ所あるもの（4）

a a′　aとa′が同一面にそれぞれ別にあるもの（2）

2a′　a′が同一面に2カ所あるもの（1）

表15　使用痕を有する剝片類の類型別の刃部角

	10°	20°	30°	40°	50°	60°	70°	80°	90°
a		5	16	14	9	8	1	1	
a′		1	6	4	3	2			
b		1	2	3	4				
b′		1	3			3			
c			5	2	2				
計		8	32	23	18	13	1	1	
2a		2	11	6	10	6	4	1	
a・a		1	2	1	1	1			
a・a′		1				1	1		
2a′				1					
a′a′		1	3	1	2				
a′b′			1	1	1		1		
2b			1	1					
〔aa〕			10	1	6	3	1	1	
計		5	28	12	20	11	7	2	
1		2	3	7	4	6	5	3	1
2				1	1				
計		2	3	8	5	6	5	3	1
合計	0	15	63	43	43	30	13	6	1
%		7	29.4	20.1	20.1	14	6.1	2.8	0.5

表16　使用痕を有する剝片類の類型別の重量

	～2.5g	～5.0g	～7.5g	～10.0g	～15.0g
a	20	14	3	5	1
a′	7	4	2	2	
b	2	2	2		
b′	2	4		1	
c	2	4	1	1	1
計	33	28	7	9	2
2 a	12	4		1	
a・a	2	1			1
a・a′	1		1		
2 a′			1		
a′・a′	1	1	1		
a・b′	2			1	
2 b	1				
〔a・a〕	5	4	2		
計	24	10	5	2	1
1	9	6	1	1	
2	1	1			
計	10	7	1	1	
合　計	67	45	13	12	3

a′•a′　a′が別な面にそれぞれ1カ所あるもの（3）

a•b′　aとb′がそれぞれ1カ所あるもの（3）

2b　bが2カ所あるもの（1）

〔a•a〕同一縁辺の左右で小剝離面が表裏場所をかえるもの。別縁辺でそれぞれ小離離面が一方に片寄るもの。(11)

※このうち「右手に持って押し削る」ことを2カ所以上で行なったと考えられるもの10個、「左手」の場合が1個。ただし手前に「引き削る」場合は、左右の関係は逆になる。

表17　剝片類の重量分布

重量（g）	不整形剝片(%)	剝　片	使用痕ある剝片
～2.5	354 (69.7)	162 (83.5)	248 (51.2)
～5.0	122 (24.0)	24 (12.4)	156 (32.2)
～7.5	21 (4.1)	5 (2.6)	49 (10.0)
～10.0	7 (1.4)	1 (0.5)	19 (3.9)
～15.0	4 (0.8)	1 (0.5)	9 (1.9)
～20.0		1 (0.5)	2 (0.4)
～30.0			1 (0.2)
計	508	194	484

（Ⅲ）小剝離が著しく、意図的に施したとも考えられるもの（19個）

1．刃部（17）。a（7）、a•a（3）、a′（3）、a′•a′（1）、a•c（1）、b（1）、a•b（1）

2．刃部以外（2）。a（1）、a′b（1）

以上のように各単位の小剝離の状態はa～cの5種を認めることができ、またその組み合せにおいて7種を認めることができる。複数の使用痕部を持つもののなかで、その位置の相互関係によって、使用法が直接指にはさみ持つものであったことを推測しうるものがあり、その場合、右ききが多かったとすれば、現在、大多数の人が鉛筆を削るような方法で使われたことになる。使用痕部が単数であるものは90個、複数であるものは49個で、それぞれ65%、35%となり、遺構内出土が39%、61%であることからすれば使用痕部がひとつしかないものの比率がかなり高い。（これらの属性の一部は表14～17に示しておく）

遺構内出土のものについて同様の検討をする余裕はないので、使用痕部の長さ、その刃部角、重量分布

について比較すると挿図30・31、表17のようになる。使用痕部の長さは 10 mm 以下、11～15 mm、17～22 mm 程度のものに分かれるが、これは遺構内のものをより強調した分布であるが、10 mm 以下に頂点がないことを特徴とする。また 3～4 mm おきにまとまりがあり、各単位として認定しうるものが、小単位の複合である可能性もある。刃部角は小さなものが少なく、大きなものも少ないという特徴が、やはり、より強調した形で表われている。重量分布は、ほとんど等しいので、先述した内容で全体を代表させることができよう。

これらを使用痕が観察されない剥片類と重量のみで比較すると，やや重いものが多く，平均ではそれぞれ3.2g、2.0g程度になる。使用痕を有する剥片に「剥片」として分類したものを加えた重量分布は「不整形剥片」としたものの重量分布にちかく、これらの剥片が「不整形剥片」同様に生産された剥片のなかから、使用に適したものが任意に選択されただけであることを示す理由となろう。

(iv) 黒曜石石核・剥片類

前項までに述べたもの以外に下記のような石核および剥片類が出土している。表13の区分は次のようになっている。

○原石――黒曜石塊に人為的加工の痕跡が認められないもの。

○不整形石核・不整形剥片――意図的成形の認められない石核・剥片類であるが、充分な分析を行なえば特定の技法を摘出しうる可能性がある。また、これらのなかにはいわゆるチップも含めており、さらには自然物も含む可能性がある。形態上は定型石器の素材とすることは難しいものである。

○剥片――意図的に作出されたと考えられる剥片。目的的に作出されたものと結果的なものとを含んでいよう。形態的には小剥離（使用痕）を有する剥片に等しく、定型石器の素材としてもそのまま用いることができる。

以上の三種は石器として用いられなかった黒曜石およびチャートなどのガラス質岩石であるが、より詳細な使用痕観察などを行なえば、別な意義を見出しうる資料かもしれない。

ウ）出土状態

① 分 布

石器の出土位置は付図２～６に示したようになる。これらのなかで遺構に関連を持って出土した（住居址、土坑などの落込内から出土した）ものは、先に示したように定形的石器類で61.0%、黒曜石剥片類で82.6%（重量比83.9%）片岩剥片類で79.2%（重量比53.8%）である。しかし、これを器種別にみると、打製石斧、横刃型石器、磨製石斧、凹石・磨石などが55～60%程度なのに対して、石皿および黒曜石製小形石器類は70～80%の高率となる。黒曜石および片岩の剥片類もほぼ80%程度である。この原因は小形石器類については、遺構内と遺構外とにおける調査精度の差である可能性がある。小形品は遺構外においてより見落しやすいと考えられるからである。片岩類は人為物と認定されなかったことも考えられる。本来小形品もまた大形品と同様な分布密度を持っていたとすれば、本調査区域内における小形品の量は次のように推測できる。

	石鏃	削器・掻器	石錐
実　　数	221	128	87
推測数（約）	270	170	115

遺構に関連するかたちで遺棄あるいは廃棄される例が60%程度とすれば、調査面積に対する遺構面積比

（住居址で10%以下）を持ち出すまでもなく、遺構内に遺存することは遺構外遺存と同様な行為の結果とは考えられない。遺構内外における器種構成は表18のように、石皿以外はほとんど差がなく、この点では遺存のありかたに器種による差はない。

表18　遺構内外における器種別比

	打製石斧	横刃形石器	磨製石斧	凹石・磨石	石皿	石鏃	削器・掻器	石錐	他
遺構内　(%)	36.9	15.6	4.0	17.1	2.2	9.3	5.8	3.9	5.1
遺構外(実 数)	39.8	18.7	4.3	22.3	0.8	5.4	2.5	1.7	4.5
(推測数)	35.9	16.9	3.9	20.1	0.7	8.9	5.7	3.9	4.1

〔付図の説明〕器種別の出土位置には次のような特徴がある。ただし、C区は検出方法が異なるためにほとんど記載できない。位置はグリッド単位であり、その左下を用いた。

○打製石斧――総数1075点のうち68点が記載できない。離れた位置から出土したものの接合例は7例。住居址群中央部および南側の一部に少なく、集中範囲はほぼ馬蹄形となる。そのなかで特に集中する場所を指摘すれば、南側土坑集中地区から30号住居址にかけて、住居址群北東部およびその外側、3号住居址周辺、住居址群西部があげられる。これらは九兵衛尾根II式期の住居址ブロックに対応するようにみえる。

○磨製石斧――乳棒状磨製石斧106点、小形磨製石斧10点あり、うち10点が記載できない。接合例は6例、同一個体で接合できないもの3例がある。遺構外では南側土坑集中地区に多く、接合例もここに多い。

○横刃型石器――475点のうち32点が記載できない。接合例はない。打製石斧と似た分布を示すが、中央部空間にはほとんどないことが注意される。

○凹石・磨石――541点のうち77点が記載できない。接合例は4例ある。分布は集落全体におよび、中央部空間にも比較的多い。

○石皿――47点あり、接合例が4例ある。遺構外に存在するものは少ない。

○小形石器類――石鏃221点中26点、削器・掻器類128点中12点、石錐87点中4点が記載できない。接合したものはない。南側土坑集中地区、住居址群北東部外縁に多く、後者にはやや石鏃が多い。

以上のことを全体的に比較してみると、遺構外の石器はおおよそ住居址群の分布に沿って環状あるいは馬蹄形状に分布するものの、その範囲、特に環状中心方向への拡がりには器種によって差があることが認められる。より内側に存在するものから示せば、凹石・磨石類、打製石斧、横刃型石器、磨製石斧の順となる。一方、外縁方向の拡がりはあまり差が認められないが、磨製石斧はより内側であることは指摘できよう。小形石器類は、発掘方法にもよるかもしれないが、ほとんど住居址群内に分布する。

② 住居址内での出土のありかた

住居址覆土および床面からは全量の約60%の石器が出土している。現在、これらすべてについて、住居生活面上に残されたものと、竪穴埋没過程にともなって残されたものとに分離することは不可能である。同一竪穴内に残されたものを大きな時間差を持たない一群のものとして器種別の数量を示すと挿図32のようになる。これらのうち、その住居が住居としての機能を失う前に残されたものとして確実に指摘できるものは表19のようなものであり、全体の約15%程度である。各遺構ごとにみれば、石器総量の多いものは「床面」の石器も多い傾向であるが例外もある。また、時期が降るにつれて「床面」出土の比率が高くなっている。全体としての石器量が増加傾向にあることと結びつければ、同時に使われた石器も増加傾向にあっ

たといえようか。

器種別では、「床面」から出土するものとそうでないものとの比は、遺構内出土と遺構外出土に差がないと同様、それほど大きな差はない。ただ、打製石斧、スクレイパー類などはやや少なく、磨製石斧はやや多いということもできる。器種別の比率を「床面」出土のものだけでみた場合と全石器でみた場合とを表19・20に示した。資料が限られているので明確なことは指摘し難いが、凹石・磨石類がいずれも減少傾向にあることは理解されよう。

「床面」出土とされたもののうち出土位置を示すことができるものは、調査の不備によりきわめて少ないが、これを模式的に示すと挿図33のようになる。特徴を器種別に列記しておく（図には3号住を含めていない）。

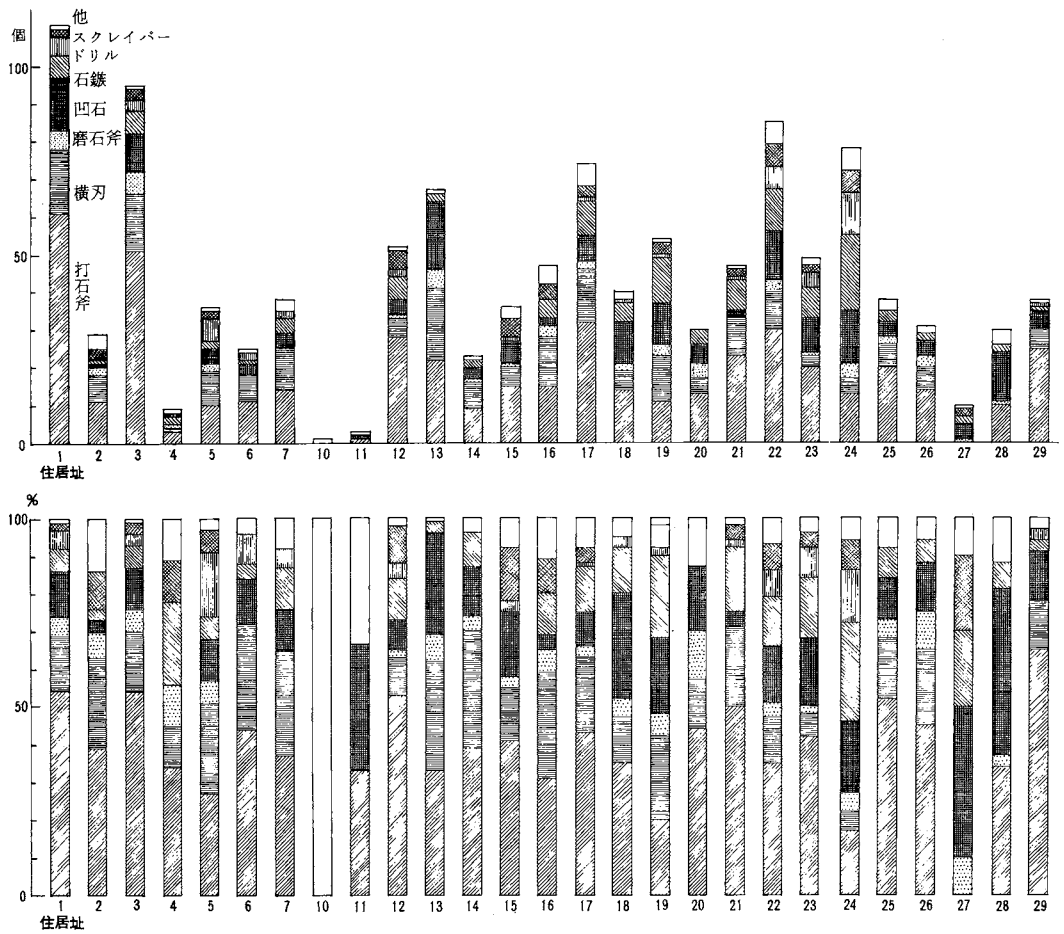
(a)打製石斧は入口部周辺と炉周辺の2カ所に集中する。

(b)乳棒状磨製石斧は主柱穴周辺に多く、打製石斧とともに中心部にはない。

(c)横刃型石器は、壁際と炉周辺に限られる。

(d)石皿は主柱穴より外側でその近辺にある。

(e)凹石は入口部から炉周辺まで比較的均一に分布するが、壁寄には少なく、炉周辺より入口部に多く、



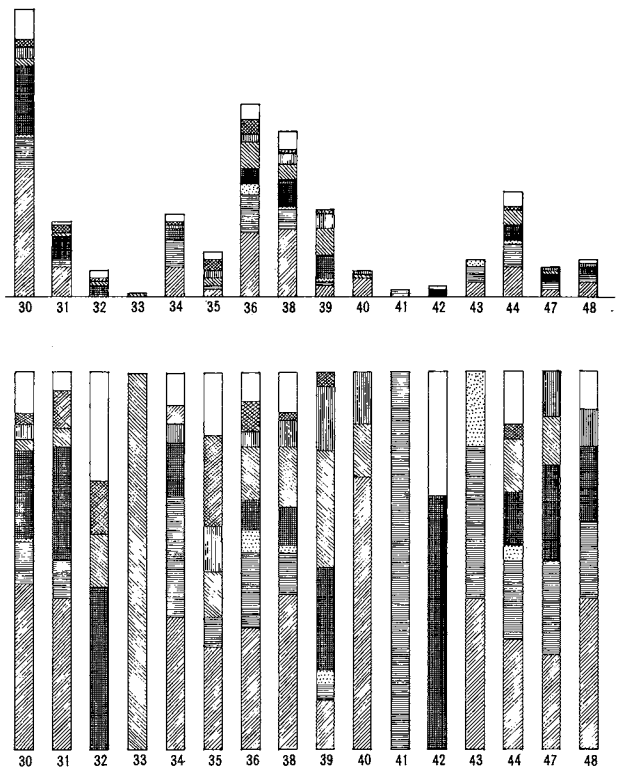
挿図32　住居址別の器種構成

表19　「床面」出土石器（上）と住居址出土全石器（下）の器種別比

	打製石斧	横刃形石器	磨製石斧	凹石・磨石	石　皿	石　鏃	スクレイパー類	ドリル	他	計
個(%)										
Ⅰ	1 (5.3)	0 (0)	1 (5.3)	6 (31.6)	0 (0)	7 (36.8)	2 (10.5)	1 (5.3)	1 (5.3)	19
Ⅱ	16 (39.0)	2 (4.9)	0 (0)	17 (41.5)	2 (4.9)	3 (7.3)	0 (0)	0 (0)	1 (2.4)	41
Ⅲ	14 (22.2)	14 (22.2)	3 (4.8)	8 (12.7)	2 (3.2)	11 (17.5)	1 (1.6)	5 (7.9)	5 (7.9)	63
Ⅳ	45 (40.9)	21 (19.0)	11 (10.0)	11 (10.0)	1 (0.9)	6 (5.5)	4 (3.6)	6 (5.5)	5 (4.5)	110
計	76 (32.6)	37 (15.9)	15 (6.4)	39 (16.7)	5 (2.1)	23 (9.9)	7 (3.0)	12 (5.2)	11 (4.7)	233
個(%)										
Ⅰ	3 (7.1)	1 (2.4)	2 (4.8)	14 (33.3)	1 (2.4)	11 (26.2)	5 (11.9)	4 (9.5)	1 (2.4)	42
Ⅱ	189 (44.7)	66 (15.6)	10 (2.4)	84 (19.9)	5 (1.2)	22 (5.2)	20 (4.7)	7 (1.7)	20 (4.7)	423
Ⅲ	167 (35.7)	74 (15.8)	24 (5.1)	64 (13.7)	12 (2.6)	50 (10.7)	30 (6.4)	26 (5.6)	21 (4.5)	468
Ⅳ	229 (37.7)	107 (17.6)	30 (4.9)	80 (13.2)	5 (0.8)	72 (11.9)	31 (5.1)	29 (4.8)	24 (4.0)	607
計	588 (38.2)	248 (16.1)	66 (4.3)	242 (15.7)	23 (1.5)	155 (10.1)	86 (5.6)	66 (4.3)	66 (4.3)	1540

横刃型石器とは対照的な分布を示す。

これらを時期別にみてもあまり変化はみられないが、横刃型石器は炉から離れ、凹石は炉に近づく傾向があるともいえる。また、分布のうえで複数の中心を持つものについて各中心の類型別構成に変化があれば、器種を細分する一方法ともなろう。次のような例をあげられる。



(a)打製石斧は、入口部周辺にあるものと炉周辺にあるものを比べた場合、前者はⅢC類、後者はⅣ類が多い。また前者には偏刃はない。

入口部：Ⅲ Ca、Ⅲ Ca、Ⅲ Cb、Ⅲ Cb、ⅢC、Ⅴ Cb、a（計7点）

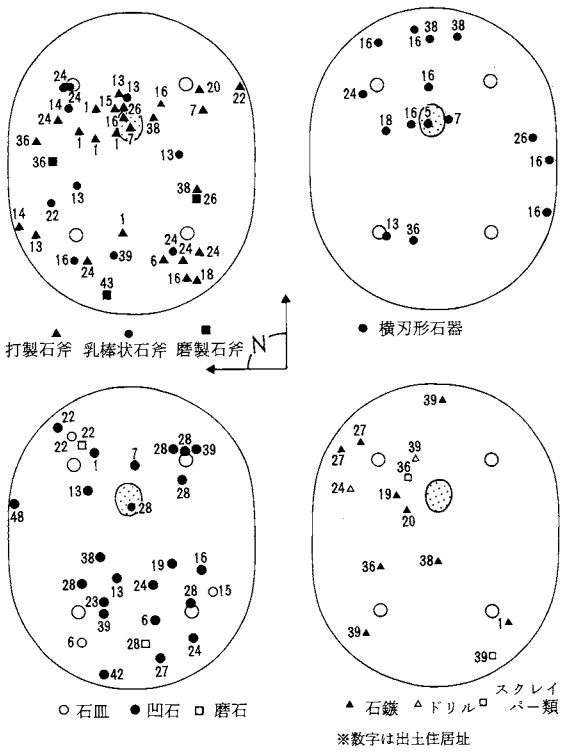
炉周辺：Ⅳ Aa、Ⅳ Bb、Ⅳ Ca、Ⅳ Ca、Ⅳ Da、Ⅲ Cc、Ⅱ Ab、Ⅱ Cc、C、a、不明（計11点）

(b)横刃型石器は、壁際にあるものと炉周辺にあるものを比べた場合、前者は刃部角40°～50°で大形、後者は刃部角30°で50g以下というかなりまとまった特徴がある。角度と重量のみ示しておく。

壁：40°—40 g、40°—90 g、40°—155 g、20°—25 g（半欠）、50°—65 g、？、40 g、50°—60 g

炉：30°—35 g、40°—40 g、20°—20 g、30°—40 g、30°—55 g

検討の余裕がないので、以上を指摘するにとどめるが、出土位置がその石器の保管場所あるいは使用場所を示すものであるな



挿図33　住居「床面」における器種別出土位置（模式図）

ら、横刃型石器において示されるものは使い分けを認定し、さらには器種認定をより確実にしうる根拠ともなるものであろう。特に変化の度合の大きな、多量に出土する石器類、つまり、打製石斧、凹石および磨石、横刃型石器などの分析には有効な一方法になりうると思われる。

住居内に残されるものと住居址内に残されるもの、特定の遺構とは関係のないかたちで残されるものがそれぞれ異なった意味を持っていたのかどうか検討するために折損のありかたを取り上げると表21のようになる。あまり大きな差はないが、石鏃以外は「床面」で完形品の割合がわずかに高くなる。

③　接合資料のありかた

確かめられた石器の接合例は次の24例である。数字は遺物番号、カッコ内は出土グリッドである。

①打製石斧　0501—（AY 68）、1811—（BF 79）、1907—（BE 90）、2223—（BM 65）、2603—（BS 62）、7434—（BH 81）、7435—（AY 69）

②磨製石斧　0369—2528、0519—2527、1342—1820—011、1632—（BT 50）、2243—010、2622—（AY 58）、（AX 59）—32住北、（BH 91）—（BU 71）、4304—4310

③凹　　石　2817—3116、2820—（BL 73）、2933—（BU 67）、9047—（BL 61）

④石　　皿　1842—2031、2258—3077、P 751—P 856、P 896—（BR 58）、（分布は付図参照のこと）

これらのうち遺構とその至近から出土しているものについて時期別に示すと挿図34のようになる。二時期にまたがるものは新しい方で示すことになる。石器の帰属時期の決定を明確に行なえず、かつ接合関係の意味することを一面的に理解することもできないが、ここで示されたものが集落内におけるなんらかの行動の結果を反映するものとみることは可能であろう。図によれば、時期により竪穴とそれ以外の部分との間の関係の変化がみられる。つまり、(a)竪穴と中央空間、(b)竪穴と南西部空間、(c)東西両竪穴群とその相互の近辺空間、である。不充分ではあるが、これらの資料は集落内における空間利用の変遷さえ示すものかもしれない。

接合できた石器はその折損に特徴がある。打製石斧、凹石はほぼ中央より半分に折れている。石皿は3個以上に割れたものの2つが接合する場合が多く、接合により完形に復するものは少ない。これに対して磨製石斧がより多様なありかたを示すのは、他に比べて転用、再成などが容易でありかつ必要であったこととも関係あるかもしれない。

磨製石斧の場合、刃部片の出土地が使用場所に、着柄部分の出土地が保管場所にそれぞれ関係するというような特定な傾向はみられない。しかし、接合したものの分布では、住居址内相互という例とともに、

表20　遺構別石器数量（カッコ内は合計のうち床面出土）

住	打製石斧	横刃形石器	磨製石斧	凹石・磨石	石　皿	石　鏃	スクレイパー類	ドリル	他	計
Ⅰ27	0	0	1	4 (1)	1	2 (2)	1	2	0	11 (3)
32	0	0	0	4 (2)	0	1 (1)	0	1	1 (1)	7 (4)
33	0	0	0	0	0	1 (1)	0	0	0	1 (1)
小計	0	0	1	8 (3)	1	4 (4)	1	3	1 (1)	19 (8)
39	3 (1)	1	1 (1)	6 (3)	0	7 (3)	4 (2)	1 (1)	0	23 (11)
Ⅱ1	61 (8)	17	5	14 (1)	0	6 (1)	5	2	1	111 (10)
30	34	8	2	20	1 (1)	2	3	2	5	77 (1)
18	14 (3)	5 (1)	2	11 (5)	2	5	2	0	1	42 (9)
7	14 (2)	11 (1)	0	4 (1)	0	4 (1)	2	0	3	38 (5)
29	25	5	0	5	0	1	2	0	3	41
28	10 (1)	0	1	14 (7)	0	2	1	0	2	30 (8)
6	11 (1)	7	0	3 (1)	1 (1)	1	2	0	1	26 (3)
34	8 (1)	7	0	3	0	0	2	1	1	22 (1)
31	8	2	0	6	0	1 (1)	0	2	1	20 (1)
48	4	2	0	2 (1)	1	0	1	0	1	11 (1)
42	0	0	0	2 (1)	0	0	0	0	1 (1)	3 (2)
41	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
小計	189 (16)	66 (2)	10	84 (17)	5 (2)	22 (3)	20	7	20 (1)	423 (41)
Ⅲ22	30 (1)	11	3 (1)	15 (2)	1 (1)	11	8	6	0	85 (5)
36	17 (2)	10 (2)	3	5	2	7 (1)	4 (1)	4	1	53 (6)
23	20	3	1	9 (1)	1	8 (3)	4	2 (1)	3 (1)	51 (6)
16	14 (4)	14 (7)	3 (1)	3 (2)	1	5 (4)	1	4 (4)	3 (1)	48 (23)
38	18 (2)	5 (2)	2	7 (2)	0	4 (1)	3	1	4 (1)	44 (8)
15	15 (1)	5	1	7 (1)	2 (1)	0	2	5	1 (1)	38 (4)
5	10	9 (2)	2	5	1	2 (1)	6	2	0	37 (3)
44	8 (1)	6	1	4	2	4	1	1	6 (1)	33 (2)
20	13 (2)	4	4	5	1	4 (1)	0	0	0	31 (3)
26	14 (1)	6 (1)	3 (1)	4	0	2	0	0	2	31 (3)
4	3	1	1	0	1	2	0	1	1	10
40	5	0	0	0	0	1	1	0	0	7
小計	167 (14)	74 (14)	24 (3)	64 (8)	12 (2)	50 (11)	30 (1)	26 (5)	21 (5)	468 (63)
Ⅳ3	51 (17)	15 (4)	6 (3)	10 (2)	1	6	3	3 (3)	1 (1)	96 (30)
24	13 (7)	4 (1)	4 (3)	14 (2)	0	20 (1)	13 (3)	6 (2)	7	81 (19)
17	32 (2)	14 (3)	3	9	0	9	2	4	5 (1)	78 (6)
13	22 (2)	19 (4)	5 (3)	18 (3)	1	2	1	0	1 (1)	69 (13)
19	11	12 (2)	3 (1)	11 (1)	2 (1)	12 (2)	1	3	1	56 (7)
12	28	5	1	4	0	6 (1)	3	5	1 (1)	53 (2)
21	23	10	0	2	0	8	2	2	0	47
25	20 (11)	6 (4)	2	4 (3)	0	3 (2)	2 (1)	0	2	39 (21)
2	11 (2)	7	3	1	1	1	0	3 (1)	3	30 (3)
14	9 (3)	7 (2)	1 (1)	4	0	2	0	0	1	24 (6)
35	2	1	0	0	0	2	3	3	1	12
43	4 (1)	4	2	0	0	0	0	0	0	10 (1)
47	2	2 (1)	0	2	0	1	1	0	1 (1)	9 (2)
11	1	1	0	1	0	0	0	0	0	3
小計	229 (45)	107 (21)	30 (11)	80 (11)	5 (1)	72 (6)	31 (4)	29 (6)	24 (5)	607 (110)
総計	588 (76)	248 (37)	66 (15)	242 (42)	23 (5)	155 (27)	86 (7)	66 (12)	66 (12)	1540 (233)

一方が住居址群南部の土坑群付近にあるものが多いといえる。また、遺跡南東部に頭部片が多く、北西部に刃部片が多いことが指摘でき、これは住居址群の立地からみた場合、尾根上部に頭部、尾根下部に刃部ということになる。

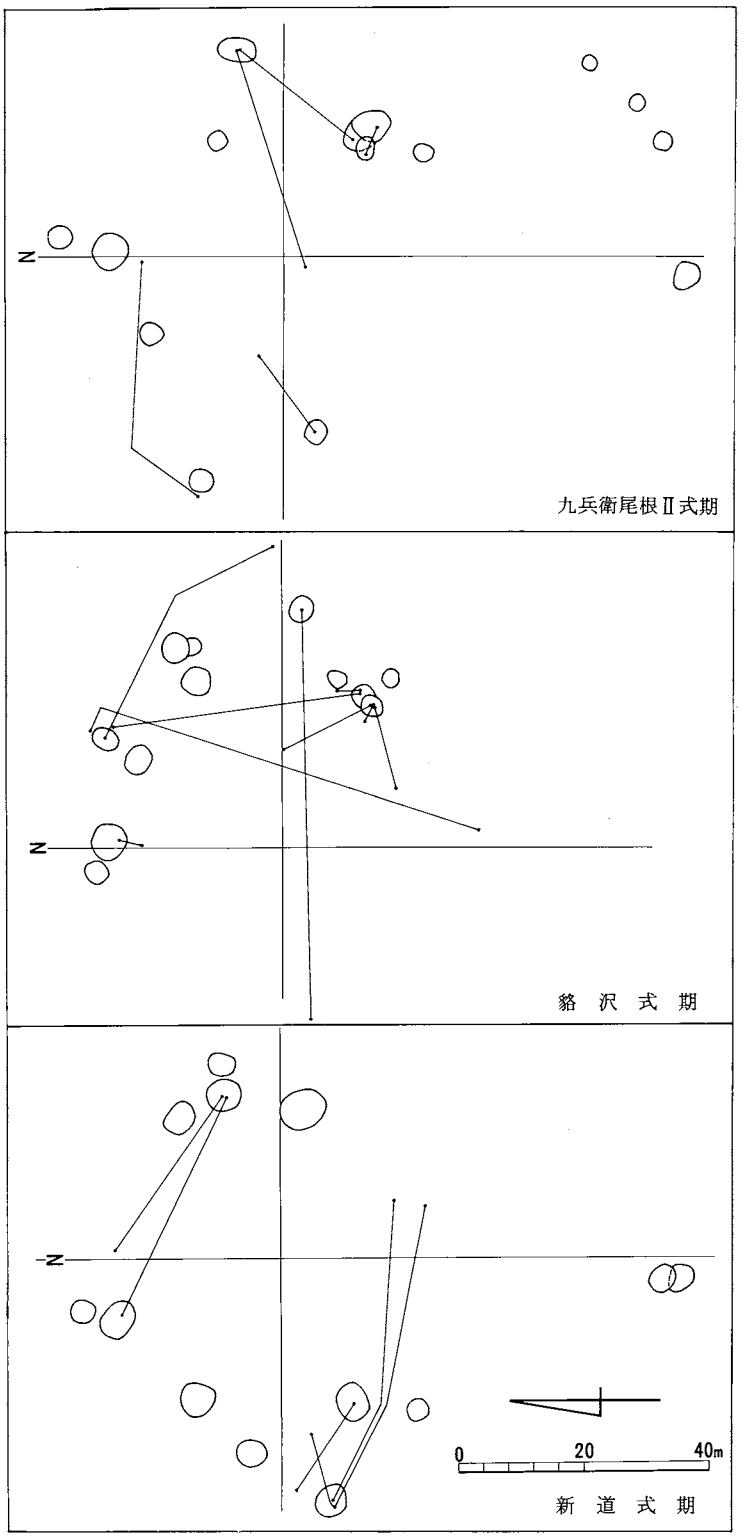
打製石斧は比較的近くにあるものが接合している。これに対して石皿はかなり離れるものがあり、磨製石斧同様、南東――北西という方向性がある。凹石も離れるものがあるが、その方向は、東――西というものが多い。

成品の破損によると考えられる以上の接合例は、折損する石器の総数に比べればきわめてわずかなものであり、その用途を示す資料というよりも、移動関係から人間行動の一端を示しうる資料というべきであろう。成品の接合資料の検出にはかなりの時間を充てたにもかかわらず、この程度の接合しかできなかったことからすれば、欠損部のほとんどは遺跡外に残されたと考えるべきであり、その点がむしろ使用に直接関連する現象である。

エ)　まとめ

①　石　材

石器の石材は器種別にかなり差がある。前項に一部示したように主要な石材として緑



挿図34　時期別の接合関係

色片岩類、安山岩類、黒曜石の三種をあげることができるが、これらは器種によって特定される。打製石斧と横刃型石器は成形の基本が似ているとともに石材もほぼ7割を緑色片岩が占め、頁岩、砂岩などで補うという点でほぼ同様である。凹石、石皿などは安山岩を主とし砂岩、花崗岩が補う。小形の石器類は黒曜石が圧倒的であり、チャートが少数混じる。特に石材の選択が著しいのは乳棒状磨製石斧（緑色片岩）、砥石（流紋岩、ホルンヘルス）、敲打器（グリーン・タフ）などである。

これらの石材の原産地は岩石学的分析を行なってはいないが、中央構造線、フォッサ・マグナ周辺の変成岩帯と八ヶ岳周辺の火山岩帯のものと考えられ、遺跡直下の河床で安山岩類の礫が、やや離れた宮川河床では変成岩類礫が得られる。凹石などは河床礫をそのまま用いるものが多く、打製石斧、横刃型石器にも礫皮面を残すものがある。緑色片岩類は河床礫をそのまま用いたと考えられるものは少なく、残核と考えられるものの状態からみても、安山岩や砂岩とは異った方法で搬入されたとも考えられよう。

② 製作技術

打製石斧と横刃型石器には大別して二種類の製作法を指摘できる。ひとつは円礫を素材とするもので、ひとつはある程度整った石核から得られた剝片を素材とするものである。前者は砂岩などに多く、礫皮面を残し湾曲するもの、いわゆる扁平円礫打割法によると考えられる礫皮面を残しながら湾曲しないもの、適当な円礫を調整剝離して石核石器としたものなどがある。後者は緑色片岩に多く、節理面を利用した石核から得られるほとんど湾曲しない剝片を素材とするものである。これらは技術段階の差というよりも、原材の性質に制約されたものであるが、安定して同形の素材が得られる緑色片岩製のものが優越している。形態的にも、湾曲が少なく側縁が平行で均一な厚さの剝片が得られることにより、この種石器の類型構成は、それを反映するものが多く、抉を持ったり、湾曲の著しいものは少ない。

他の石器類については各項で述べた以上のことを示す余裕はない。

③ 使用痕、折損

さきにみたように出土位置によって折損率が異なるということは、ほぼ全器種でみられない。石器の折損は、使用によるものと製作中の失敗によるものとがある。未成品と考えられる石器の接合例はないが、転用、再加工などが行なわれれば、そのような資料を得るのはむずかしい。また、横刃型石器や不定形のスクレイパー類では完形品との区別が困難なものが多く、これらのなかで完形品として扱ったもののなかには、かなりの破損品を含む可能性がある。床面あるいは生活面上から得られた資料にもかなりの破損品を含むことは、使用場所であったことを示すというより、転用、再加工に備えてのものと考えるべきと思われる。

表21 床面出土石器の破損率

	「床」出土		住居址埋土出土		遺構外出土	
	完形品	破損品	完形品	破損品	完形品	破損品
打製石斧	39 (50.6)	38 (49.4)	230 (45.0)	281 (55.0)	174 (39.5)	266 (60.2)
磨製石斧	5 (33.3)	10 (66.7)	3 (6.8)	41 (93.2)	5 (11.1)	40 (88.9)
凹石・磨石	32 (78.0)	9 (22.0)	160 (79.6)	41 (20.4)	180 (73.5)	65 (26.5)
石鏃	12 (44.4)	15 (55.6)	54 (54.5)	45 (45.5)	29 (59.2)	20 (40.8)
計 個 (%)	88 (55.0)	72 (45.0)	447 (52.3)	408 (47.7)	388 (49.8)	391 (50.2)

使用痕が明瞭に観察できるものはわずかであるが、緑色片岩、安山岩などの軟質の廃棄後に風化の進んだ石器類についても、その各部の比較によって使用によると考えられる変形を指摘できた。使用痕のありかたは、各器種について従来述べられた点を変更するものではない。しかし、黒曜石など硬質の石材においてさえ、観察しうる使用痕は限られており、たとえば使用痕を有する剥片の微小剥離のなかに調整剥離が含まれていないとはいえない。

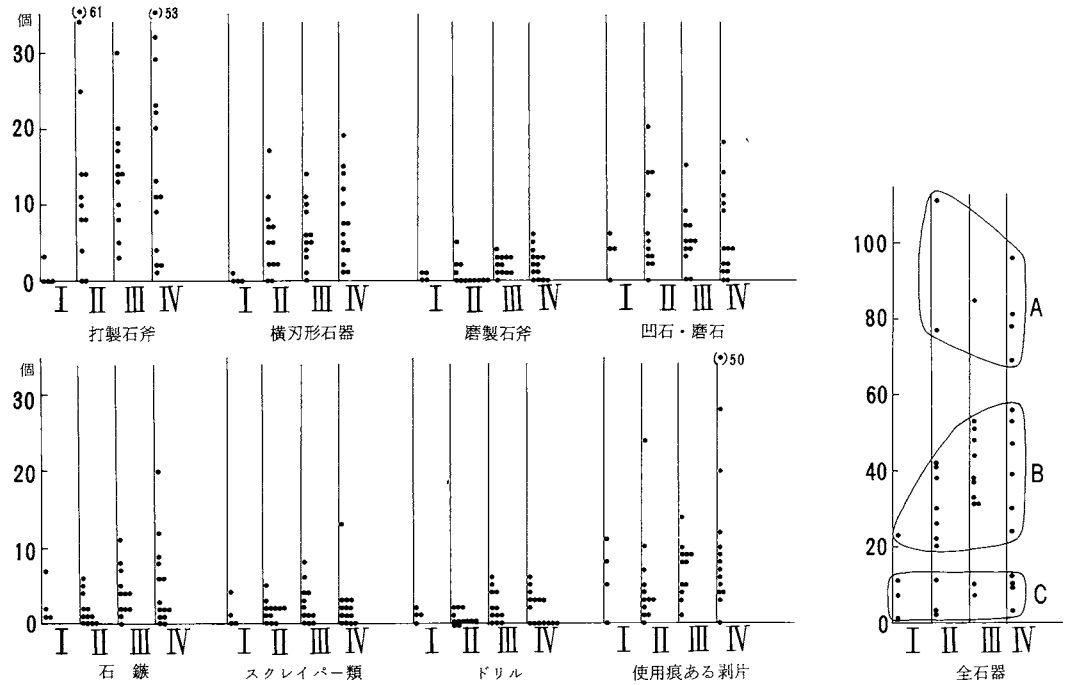
④ 組成の変化

各竪穴覆土および床面から出土した石器類を土器型式別に集計し、それ以外の遺物を仮にその数によって比例配分して、石器のすべてについて時期別数量を推定すれば、表22のようになる。

凹石・磨石類、石皿を除いて、すべてが増加傾向を示し、特に横刃型石器、磨製石斧、石鏃、ドリルの増加は著しい。凹石・磨石類、石皿などは主に植物質食料の加工調製具とされるが、ほぼ一定数を保つ。これは器種別に示すと挿図35のようになり、遺構別出土量にはA～Cの三類型があることが理解される。これらの二次的生産用具以外の石器を直接生産具と考え、その主要な対象をそれぞれ、打製石斧が植物根茎類、横刃形石器が穎果類の植物、石鏃が動物であるとすることが許されるなら、次のように考えることができる。打製石斧は全体的な生産活動の上昇を示してはいるが、それ以上に横刃型石器、石鏃の増加は

表22　時期別組成の推定（各出土竪穴毎）

時期（竪穴数）	打製石斧（1軒当）	横刃形石器	磨製石斧	凹石・磨石	石皿	石鏃	スクレイパー類	ドリル	他
Ⅰ(4)	6 (1.5)	2 (0.5)	4 (1.0)	31 (7.8)	2 (0.5)	16 (4.0)	7 (1.8)	5 (1.3)	2 (0.5)
Ⅱ(15)	346 (23.1)	126 (8.4)	18 (1.2)	188 (12.5)	10 (0.7)	31 (2.1)	30 (2.0)	9 (0.6)	42 (2.8)
Ⅲ(12)	305 (25.4)	142 (11.8)	42 (3.5)	143 (11.9)	25 (2.1)	73 (6.1)	45 (3.8)	34 (2.8)	44 (3.7)
Ⅳ(13)	419 (32.2)	205 (15.8)	53 (4.1)	179 (13.8)	10 (0.8)	103 (7.9)	46 (3.5)	38 (2.9)	50 (3.8)



挿図35　器種別保有量の変化

著しく、植物質食料の比重が高まることが狩猟活動の衰退に結びつくものではないことを示している。また、数量的に増加傾向にあるなかでも、打製石斧、横刃型石器の全体に占める比率はあまり変化せず、他の石器類が特にII期とIII期の間でかなりの変化が認められることは興味深い。つまり凹石の比重が低くなる以外、磨製石斧、石鏃、スクレイパー類、ドリルのいずれもが比率を高めており、生産活動が総体として活発になるなかで、木工、皮工など直接的な食料生産活動でない生産活動の比重が高まっていったとも考えられるのである。そして、このような生産活動のすべてが、増加しながらも比率の変化があまりない打製石斧と横刃型石器の組み合わせに示される体系に、基本的には規定されていたのであろう。

この打製石斧・横刃型石器の体系とは、中期農耕を肯定する立場からすれば、耕作具・収穫具の組み合わせだということになるが、ここでは、打製石斧の増加率より横刃型石器の増加率の方がかなり上回るという点を指摘するにとどめよう。

凹石は用途についていまだ議論のあるところであるが、これを堅果類などの加工調製具と考えた場合、その絶対数に大きな変化がみられないことは、採集活動のうちこの種の採集が他と比べて発展の余地が少なかったことを示すといえようか。一方、打製石斧、横刃型石器に示される活動は確実に規模を拡大しており、それが量的拡大か質的拡大かはともかく、対照的である。このことは集団のテリトリーが拡大せずに草本類、特に横刃型石器の対象が拡大したことが生産力の上昇の主要な要因であったことを示唆するものである。しかし、凹石・磨石類、石皿類は植物質食料の特定なものだけを対象にするものではなく、加工調整具の性質は生産量のある程度の増減には比例する必要がないものであると考えられる。打製石斧、横刃型石器の増加と凹石の一定化という点は、なお検討の余地がある。

出土量の多寡は、その遺構覆土中のものまで含めて比較したけれども、時期の新しいものほどそれ以前のものを含む可能性が多くなるので、厳密には「床面」出土のもの以外は比較の対象になり得ないといえる。しかし、逆に埋没しかかった竪穴ほど後代の廃棄品を集めるものとも考えられる。この点、その竪穴内における土器との共伴関係などを細かく検討しなければ、時期的な量の増減という問題は明確にはなしえないことになろう。ただし、床面上における出土率の変化が、おおよそ全体の量の反映であるとすればここで把握した数量にちかいということになろう。

⑤　型式編年

縄文中期の石器は基本的には器種構成に変化はなく、その量、構成比が変化するだけである。しかし、各器種内の細別類型には時期的に消長が認められるものがあり、打製石斧などについても型式編年の可能性がある。ただし、そのような操作の前題となったのは伴出土器型式であって、石器そのものの形態や機能から型式の変化がたどれたわけではない。生産用具としての石器の型式を編年にまで結びつけるためには土器とは別な方法が要求される。その点で、製作技法と機能の詳細な分析が行なえずに終わったことは、大きな課題を残したことになる。全般的には、機能の分化あるいは製作技術の分化を示すと考えられるような、形態の多様化が認められることを記しうるのみである。

⑥　出土状態

石器の出土状態および出土位置については廃棄の問題としてだけでなく、石器の使用方法、使用場所の問題としても興味ある課題である。遺構外の石器類については時期区分を行なうにまで至らなかったが、本遺跡が全体として環状を呈しており、石器の分布もまたそれに沿って環状になっていることは先に述べたとおりである。集落が結果として環状を呈するように形成されたことから、居住部分とそれ以外の部分とに遺跡を区分することができる。全体として遺物の分布が環状になることは、その居住部分に一致して

いるということであり、人為物の出土位置としては当然でもある。

しかし、そのような状態のなかでも器種により分布範囲に差が認められており、それが居住部分以外における差であるとすれば、廃棄場所というよりも作業場所を反映するものと見なければならない。発掘区域内における石器の廃棄のありかたは、折損率、床面出土率などいくつかの要素でみるかぎり時期や器種による差はほとんど認められず、廃棄方法のちがいによって分布に差が生じたとは、石皿などの例外を除いては、ほとんど考えられないからでもある。

凹石・磨石類は住居内においては特に入口部に多く、居住部分以外では最も広範な分布状態を示し、屋内よりも屋外への傾向性がある。打製石斧もこれにちかいが、横刃型石器はこれとは逆に、住居内においては入口部に少なく、住居外ではその分布はあまり広くはならない。これらが使用場所の反映であるとすれば、どのように考えられるであろう。少なくとも、ここでいう使用場所の反映とは使用に適当な保管場所ということまでも含めなければならない。比較資料の増加を待ちたい。

参考文献（順不同）

芹沢長介編『聖山』　1979

佐原真「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集—』　1977

森川昌和・他『鳥浜貝塚』　1979

加藤晋平・鶴丸俊明『石器の基礎知識Ⅰ』　1980

大塚初重・戸沢充則・佐原真編『日本考古学を学ぶ(2)』　1979

松永満夫「アワ類似炭化種子」『どるめん13』　1977

他に既刊の『中央道報告』

〈付、24号住居址出土の石器について〉

出土した石器類のうち図示できたものはわずかであり、各住居址単位の様子はわかりにくい。そこで、一例として24号住居址出土の石器をすべて写真で示しておこう。本址はアワ状の炭化種子を出土した住居址のひとつであり、石器も平均的な種類と量を持っている。図版128、129に示したもののうち、床面上にあったと認められたものは、1、2、3、5、8、9、12、14、20、22、23、24、34、38、40、60、61、69、73、74の計20点である。他の覆土中より出土したものについては、はっきりしないが、少なくともこの20点については共伴関係を認めることができる。この他に黒曜石剝片類が表13のように計18点、36ｇがあり、別に扱ったものとして図版129の66の下に示したようなピエス・エスキーユ4点がある。

※本文中では執筆者により語句の用いかたに統一を欠くところがある。特に器種分類を行う場合には、報告書の記述のための分類という意味合いが強くなっている。定型化したものについては、ひとつの器種名でその形態を示すことが容易であるが、形態の変異の幅が大きなものについては、観察者により理解の差が生じやすい。打製石斧、横刃型石器、凹石・磨石類などは本来、器種の名称ではなく、ある幅を持った形態の名称である。何らかの意味で機能を反映させた器種名が与えられるとすれば、これらの細別類型のいくつかに与えるべきであろう。その段階に至らなかったために本稿では形態の記述に重点をおいた。その点でたとえば横刃型石器としたものも型ではなく形としての意味しか持たせていない。本来の横刃型石器とはこれらの細別類型の一部の名称として用いられることが多いことをことわっておきたい。

鑑定結果 1

長野県諏訪郡原村大石遺跡で発見された炭化種子について

松本　豪（大阪府立大学農学部）

昭和50年の夏に、長野県諏訪郡原村大石遺跡の住居址から炭化した禾本科植物の穎果らしきものが発見され、ただちに調査を依頼された。受け取った資料は、縄文中期初頭の第18号住居址、縄文中期中葉の第19号住居址から発見されたもので、いずれもタール状に相互に塊り、断面に約2 mm の楕円形をした穎果らしき穀粒がみられる。このような状態は、昭和49年の夏に、長野県諏訪市荒神山遺跡第70号住居址で発見された炭化した禾本科植物の穎果の場合によく似ている。資料の大きさは、第18号住居址からのものは約2.5×2.5×1.5 cm、第19号住居址からのものは約3.0×2.0×1.0 cm である。

調査は、実体顕微鏡を用い、塊を分解しながら断面にあらわれる穀粒の形、表面模様、夾雑物などに注意した。そして穀粒の分離につとめた。穀粒は、塊の分解中に大部分が破損した。内部は空洞状、表面模様は不明、背面の隆起したものはなく、卵状楕円形をしている。穀粒は穎状のものに包まれ、包みの下にやや扁平な楕円形と感じられる子実らしきものがみとめられたが、表面模様、胚芽の位置、大きさなどはわからない。穎状の包みを除くよう努めたが、穀粒はわずかな力でも破損し、わずかに第18号住居址の資料から8粒（図版135—1・2）、第19号住居址から30粒（同3・4）を分離することができた。これらはすべて子実状のものがみとめられたので穎果であろう。分離した穎果は、近縁と思われたエノコログサ、キンエノコロ、イヌビエ、栽培ヒエ、アワの穎果と比較した。エノコログサ、キンエノコロ、イヌビエは昭和50年に大阪府立大学農学部の農場で採集し、栽培ヒエは石川県石川郡白峰村の焼畑、アワは2ヶ所の焼畑で栽培していた系統で、片方は、石川県石川郡白峰村、他方は高知県吾川郡池川町椿山である。栽培ヒエと2ヶ所のアワは、数年前に大阪府立大学農学部中尾佐助教授が入手し、同大学遺伝育種学研究室に保管していたものである。

穎果は、エノコログサとキンエノコロの場合、やや扁平楕円形、背面はやや球状、穎に雲紋状の微細な凹凸がある。栽培ヒエ、イヌビエの場合、背面は隆起し腹面は平たい卵状楕円形、穎の外面には数本の脈があり、脈の上に小刺針がある。アワの場合、小球状楕円形で熟すると苞穎を残して脱落する。その他キビの場合、やや扁平から円味をおびるものまであり、モロコシの場合、卵形または洋梨形で、キビと共に3×2 mm 以上の大きさがある。シコクビエの場合、表面に細い網状突起のある約1.5×1.4 mm の大きさの粒である。この資料の場合、断面にあらわれた穎果や分離することができた穎果に、背面が隆起し腹面が平たい卵状楕円形をしたものはなく、雲紋状の微細な凹凸、毛の有無もわからなかったが、荒神山遺跡第70号住居址で発見されたエノコログサ属の穎果に非常によく似ている。

次に、エノコログサの穎果100粒、キンエノコロは30粒、栽培ヒエは30粒、イヌビエは30粒、アワはそれぞれ100粒、いずれも無作意的に選び、1/10mm まで読み取れる目盛のついたルーペで測定し、最長方向から長さ、幅、厚さとした。第18号住居址、第19号住居址の場合も同様にして測定し、測定値を第1表にした。比較に用いた植物の穎果、第18号住居址、第19号住居址からの炭化穎果それに荒神山遺跡第70号住居址の

第1表　分離した穎果の測定値　　（単位　mm）

	No.	長　さ	幅	厚　さ	長さ／幅	長さ×幅	備　考
第18号住居址	1	2.0	1.8	1.5	1.11	3.60	
	2	2.2	1.9	1.6	1.16	4.18	
	3	2.2	2.0		1.10	4.40	測定中に破損
	4	2.0	1.9	1.6	1.05	3.80	
	5	1.9	1.5	1.3	1.27	2.85	
	6	1.8	1.5	1.3	1.20	2.70	
	7	2.0	1.7	1.3	1.18	3.40	
	8	2.0	1.8	1.5	1.11	3.60	
	平　均	2.01	1.76	1.44	1.14	3.54	厚さは7粒の平均
第19号住居址	1	2.0	1.9	1.4	1.05	3.80	
	2	2.0	1.6		1.25	3.20	測定中に破損
	3	2.1	1.8	1.3	1.17	3.78	
	4	2.2	1.8	1.4	1.22	3.96	
	5	2.2	2.0	1.5	1.10	4.40	
	6	2.0	1.5		1.33	3.00	測定中に破損
	7	2.2	2.0		1.10	4.40	〃　〃
	8	2.2	1.8	1.5	1.22	3.96	
	9	1.8	1.7	1.4	1.06	3.06	
	10	2.0	1.8		1.11	3.60	測定中に破損
	11	2.0	1.8		1.11	3.60	〃　〃
	12	2.0	1.7	1.4	1.18	3.40	
	13	1.8	1.7	1.4	1.06	2.89	
	14	2.0	1.6		1.25	3.20	測定中に破損
	15	2.2	1.8	1.6	1.22	3.96	
	16	1.7	1.5	1.3	1.13	2.55	
	17	1.8	1.8		1.00	3.24	分離中に破損
	18	2.0	1.8		1.11	3.60	〃　〃
	19	1.9	1.9	1.4	1.00	3.61	
	20	1.8	1.7		1.06	3.06	測定中に破損
	21	1.9	1.9	1.4	1.00	3.61	
	22	1.5	1.5		1.00	2.25	分離中に破損
	23	1.9	1.7	1.2	1.12	3.23	
	24	1.5	1.2	1.0	1.25	1.80	
	25	1.8	1.6	1.3	1.13	2.88	
	26	1.7	1.7	1.5	1.00	2.89	
	27	2.4	1.9	1.5	1.26	4.56	
	28	1.7	1.5	1.0	1.13	2.55	
	29	2.0	1.8	1.0	1.11	3.60	
	30	1.9	1.5	1.0	1.27	2.85	
	平　均	1.94	1.72	1.33	1.13	3.34	厚さは20粒の平均

第2表　それぞれの大きさの変異

長さ（mm）		0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	合計	平均値
大石遺跡第18号住居址	長											1	1	4		2									8	2.01
	幅								2	1	1	1	2	1											8	1.76
	厚						3		2	2															7	1.21
大石遺跡第19号住址	長								2		3	5	4	9	1	5		1							30	1.94
	幅					1			5	3		9	4	2											30	1.72
	厚			4		1	3	7	4	1	6														20	1.33
荒神山遺跡第70号住居址	長								1		2	3	1	5	3										15	1.90
	幅						1	4	3	2	3		1	1											15	1.57
	厚			3	3	2	4	2	1																15	1,21
高知県吾川郡椿山のアワ	長											16	18	40	17	9									100	1.99
	幅							5	21	54	20														100	1,59
	厚		3	12	29	49	7																		100	1.17
石川県石川郡白峰のアワ	長											7	20	64	8	1									100	1.98
	幅								5	20	32	41	2												100	1.72
	厚					10	16	33	32	8	1														100	1.42
エノコログサ	長																				3	20	54	23	100	2.80
	幅								24	69	7														100	1.58
	厚		4	49	39	8																			100	1.05
キンエノコロ	長																			1	5	15	8	1	30	2.81
	幅									18	12														30	1.64
	厚			4	12	14																			30	1.13
イヌビエ	長													4	3	6	11	4	2						30	2.24
	幅			1	2	15	10	2																	30	1.23
	厚	10	17	3																					30	0.88
石川県石川郡白峰の栽培ヒエ	長																3	9	14	3					30	2.46
	幅											4	14	12											30	1.93
	厚			1	2	14	8	5																	30	1.25

穎果の測定値からそれぞれの変異を求め、第2表に示した。第2表から、エノコログサとキンエノコロの場合、長さは2.6～3.0 mm、幅は1.5～1.7 mm、厚さは0.9～1.2 mm、イヌビエの場合、長さは2.0～2.5 mm、幅は1.0～1.4 mm、厚さは0.8～1.0 mm、栽培ヒエの場合、長さは2.3～2.6 mm、幅は1.8～2.0 mm、厚さは1.0～1.5 mm に分布する。アワの場合、いずれも長さは1.8～2.2 mm、幅は1.4～1.9 mm、厚さは0.9～1.7 mm である。荒神山遺跡第70号住居址の場合、長さは1.5～2.1 mm、幅は1.3～1.7 mm、厚さは1.0～1.5 mm まであり、大石遺跡第18号住居址、第19号住居址の場合と大差はない。一般に、種子は炭化すると大きさに関係なく、その平均値は小さくなり、変異は大きくなるので、炭化していない種子に比べ、平均値はやや小さく、変異は80%以上が同じであれば、それらは同じものとみてもよい。だから、大石遺跡第18号住居址と第19号住居址からの穎果は、荒神山遺跡第70号住居址の穎果と同じもので、しかも、それらは焼畑栽培のアワにもっとも近い。第2表でみるかぎり長さと幅の対応はわからないので、測定値から粒形基準（長さ÷幅）を求め第3表に示し、大きさ基準（長さ×幅）を第4表に示した。第3表から、エノコログサ、キンエノコロ、イヌビエの粒形基準はすべて1.4以上を示し、円形とは言えない。栽培ヒエ、アワは1.4以下である。大石遺跡第18号住居址、第19号住居址、荒神山遺跡第70号住居址などからのものは1.4以下であるから、粒形基準からは、栽培ヒエ、アワと同形になる。第4表から、栽培ヒエとアワの大きさをみると、栽培ヒエの場合、4.2～5.2 mm^2まであり、エノコログサ、キンエノコロと等しい。アワの場合、

第3表　形状の変異表

長さ/幅	1.0	1.2	1.4	1.6	1.8	2.0	2.2	合　計	平均値
大石遺跡第18号住居址	2	6						8	1.14
大石遺跡第19号住居址	11	18	1					30	1.13
荒神山遺跡第70号住居址	3	9	3					15	1.21
高知県吾川郡椿山のアワ		75	25					100	1.25
石川県石川郡白峰のアワ	12	83	5					100	1.15
エノコログサ				3	77	20		100	1.83
キンエノコロ				14	16			30	1.71
イヌビエ			1	8	8	12	1	30	1.82
石川県石川郡白峰の栽培ヒエ		19	11					30	1.27

第4表　大きさの変異表

長さ×幅 mm²	1.8	2.0	2.2	2.4	2.6	2.8	3.0	3.2	3.4	3.6	3.8	4.0	4.2	4.4	4.6	4.8	5.0	5.2	合計	平均値
大石遺跡第18号住居址					1	1			1	2	1	1							8	3.54
大石遺跡第19号住居址	1		1		2	4	3	4	1	6	3	2		2	1				30	3.34
荒神山遺跡第70号住居址		1			4	1		4	1	2	1	1							15	2.98
高知県吾川郡椿山のアワ					5	23	14	26	20	8	4								100	3.15
石川県石川郡白峰のアワ						5	9	21	27	31	7								100	3.39
エノコログサ													4	40	31	19	6		100	4.59
キンエノコロ													1	10	9	8	2		30	4.61
イヌビエ			1	6	4	10	4	5											30	2.76
石川県石川郡白峰の栽培ヒエ													1	5	4	11	6	3	30	4.75

2.6～3.8 mm²であるから、粒形基準と大きさ基準を組み合せると見分けることができる。大石遺跡第18号住居址、第19号住居址、荒神山遺跡第70号住居址などの穎果は、粒形基準は1.4以下、大きさ基準は1.8～4.6 mm²まであるけれど2.6～3.8 mm²に80%以上が含まれるので、焼畑栽培のアワにもっとも近い。測定粒数の少ないことと胚芽の位置がはっきりしない欠点はあるが、以上の形態比較から、タール状に塊まった炭化物は、アワ状のものが炭化する過程で生じたものだろう。

以上、大石遺跡第18号住居址、第19号住居址で発見されたタール状の塊は、塊から分離した少量の穎果を、現存する禾本科植物の穎果と比較した。その結果、胚芽の位置ははっきりしないが、アワの穎果の大きさに類似したので、アワ状のものが炭化する過程でできたものと思う。そして、先にエノコログサ属の穎果と報告した荒神山遺跡第70号住居址からの炭化穎果も、大石遺跡発見の炭化物とまったく同じであったので、アワ状のものが炭化する過程で生じたものだろう。　（昭和51年8月2日）

註）　この報告が出る前に「どるめん」No13（昭和52年）に、この報告によくにたものが著者の名で出ていると聞いているが、「どるめん」という雑誌の存在を知ったのは昭和54年になってからである。この報告が出る以前のことについては責任はもてない。　（昭和55年10月20日）

鑑定結果 2

長野県諏訪郡原村大石遺跡出土のタール状炭化種子の同定について

松谷　暁子（神奈川大学）

1978年 8 月、当時辰野町にあった長野県中央道遺跡調査団本部において、諏訪郡原村大石遺跡出土のタール状炭化種子を預かった。「大石遺跡18住フ・同19住AおよびC・同24住AおよびB・同25住」と記されているものである。

この時、諏訪市荒神山遺跡第70号住居址出土のタール状炭化種子の追加試料も預かった。追加試料というのは、1974年 9 月、当時在籍していた東京大学理学部人類学教室において、渡辺直経教授（現帝京大学教授）を通し、荒神山遺跡の炭化種子を預かり、灰像法[1]によりアワであることを証明できれば、とかなりの時間と労力を費した結果、無益に終っていたという事情があったわけである。アワ、ヒエ、キビ、そしてイネなどは、イネ科として分類されるが、イネ科植物は表皮細胞に珪酸が沈積する。そして、この珪酸は植物体が灰となっても残るので、アワが炭化したとしても、粒を包む穎の部分が存在していれば、穎の表皮細胞に沈積した珪酸の残存によって、アワの穎に特有の形態が、灰像として認められるはずである。しかし、穎が完全に除去されていて粒だけになっているとそのような灰像は認められない。灰像によるアワの検出については、弥生時代の福岡県立岩遺跡から、渡辺教授がすでに報告されており[2]、未発表ながら、青森県の三内遺跡（土師期）からも同じく渡辺教授によって検出されていた。そこで縄文中期の荒神山遺跡のタール状炭化種子がアワまたはエノコログサであれば、同様に灰像法で確認できると考えられ、かなり苦労して試みたのであるが、アワやエノコログサどころかヒエ、キビその他、イネ科の穎に特有の灰像は検出できなかったのである。そして実体顕微鏡でよく見ると、かなり厚い殻が重なっていて、とてもイネ科とは考えられなかったので、調査団の許可を得て、出土種子の同定に経験の深い、当時岡山大学の笠原安夫教授と大阪市立大学の粉川昭平教授のところに、手許の試料を分割して持参し鑑定を依頼した。そのとき笠原教授は早速走査電子顕微鏡での観察を実施された。その後、筆者も電顕での観察を試みたが、試料の炭化塊破片の状態があまりよくなかったこともあり、不明のままに時が過ぎていった。ところが、1975年の大石遺跡、続いて1977年の上前尾根遺跡と、長野県下の縄文中期の遺跡で同様なタール状炭化種子の出土が報ぜられ、さらに1978年 2 月には東京都のなすな原遺跡第70号住居址（縄文後期）からも類似の炭化種子が出土した。このように、縄文時代の人々の生活に深いつながりのあったと思われるこの植物が一体何なのかをはっきりさせる必要性がますます増してきたわけであり、各地出土のこれらの種子を比較検討することによって何とか良い解答が得られないかと期待したわけである。前置きが長くなったが、幸いにも大石遺跡の種子と荒神山遺跡の追加種子を預かり調査する機会を与えられるについては、上記のようないきさつがあったのである。

しかし、大石遺跡や荒神山遺跡の追加試料を実体顕微鏡でよくよく観察して得た結果は、どちらもよく似たものでイネ科ではないという印象を強めただけであった。粉川教授も、荒神山、大石、なすな原の種子は皆同じようなもので、イネ科ではなく双子葉植物ではないかという御意見であったので、アワなどの

イネ科の種子と似た大きさの種子をもつアブラナ科やシソ科のものとの比較を少しずつ試みていったが、当然のことながらこれらは灰像法で解決のつく種類ではなく、走査電顕での観察の機会を待っていたわけである。

荒神山遺跡の種子について電顕観察を行ない、肥厚した幾本もの線条の走る特異な細胞（"わらび状細胞"と便宜的に呼ぶ）を検出したのは1980年4月であり、同様の細胞はなすな原遺跡のものでも見出された。なすな原遺跡のものについては、実体顕微鏡下で粗い網状の表面模様が認められ、シソ科のものという予想はあり、荒神山遺跡の種子片でも部分的ながら粗い網目が電顕写真にとらえられていて、やはりシソ科ではないかという考えは生じていたのである。しかし、この"わらび状細胞"が一体、どういう植物のどういう部分に存在するのか、ということの解答はもう少し先にまで持ち越された。10月初め、荒神山となすな原の試料に認められたこの独特の形態を持つ細胞を粉川教授に見せた所、シソ科のものの表面の粗い網目がとれるとこういう細胞が下に存在するのではないかと思うという御意見であったが、その少し後、なすな原遺跡の種子を実体顕微鏡で観察してエゴマを想定された笠原教授は、早速、エゴマの果皮を除去して、その下になすな原と同様の"小判状"の文様を検出されたわけである。

大石遺跡の試料についての電顕観察は、1980年4月に18号住居址出土の塊の破片の一部を、そして1981年1月には、18号住出土の塊から分離できた厚い果皮様のものに包まれた粒と、25号住居址よりはがしとった塊の1つについて、実施することができた。

遺跡出土の炭化物、特に荒神山や大石遺跡試料のように、炭化してタール状の塊と化しているときには、種子または粒の分離がきわめて困難であって、たとえ分離できたとしても、そのときの条件に応じてはがれて露出する面が異なる。従って大石の試料や荒神山の電顕像、さらに現生種の植物種子の電顕像との比較を行なうについては、もっと沢山の面についての観察を行なって検討をすることが必要であり、現在はまだそこまで進んでいない。しかし、これまでに実施した観察、撮影によっても、アワなどのイネ科に相当する構造は見当らず、むしろエゴマなどのシソ科に該当する構造が認められることは確実である。しかし、エゴマの他にシソも同様の形態的特徴を有しているし、エゴマ、シソと同属の野性種にはレモンエゴマとトラノオジソがある。このうちレモンエゴマについては、粉川教授から分けていただいて、電顕観察を行なった結果は、やはり類似の細胞が検出され、さらに属の異なる近縁種のイヌコウジュでも同様の細胞が認められた。これら現生種の各種子について、一層ずつはいでいって出現する各層の表面構造についての比較検討を行なっていない現段階では、肥厚した線条を持つ細胞が、エゴマに認められるからといって、直ちに、縄文期の小形炭化種子がエゴマであると断定するのは時期尚早といえよう。しかし、炭化を試みたところ、シソとエゴマは同じようにタール状の塊と化すが、レモンエゴマはタール状の塊とはならなかったことにより、イヌコウジュは種子の大きさが小さすぎるということから除外すると、シソとエゴマが残る。そして、推定される種子の大きさは、シソよりもエゴマの方に高い可能性が認められるというのが現状である。（図版136～140）

それではこのシソまたはエゴマと考えられる種子をシソ属というようによぶとして、用途はどのようなものであったのであろうか。

これについては今後の課題として残しておきたいが、興味深い事実として、時代も地域も異なるが、北海道の十勝太若月遺跡[3]の擦文期の住居址、また宮城県ののがんげつ遺跡[4]の平安時代の住居址で、シソ類と同定された炭化物が見出されていることを見逃すことができない。そして前者ではキビとオオムギ、後者ではイネやヒエ（？）などと共にイネ科植物が伴出している。縄文期の炭化種子にはまだイネ科の種子が見

出されていないこととは、きわめて対照的であり、今後の発掘で縄文期のアワなどが出土しない限り、重要な点と考えられる。

可能性の高いエゴマについては、かってナタネに取って代わられるまでは油の原料として重要であったが、現在の大都市では小鳥のエサとしての用途が主であって名前を知らない人も多い。岐阜県高根村では現在でもエゴマを栽培しており、煎ってすりつぶしてホウレン草などをあえるということを、岐阜大学農学部の堀内孝次氏からエゴマの種子を送付して下さった折に教えていただいたが、筆者も、1978年夏に大石遺跡近くでエゴマの畑を見つけて用途を尋ねた際、同様の答を得ている。また、東北大学農学部の星川清親氏によると、仙台ではやはりゴマと同じように用い、オハギにもつかうということであった。このようにエゴマは人間の食用としてもかってはもっと広く密接な関係を持っていたと考えられ、現在でもまだ身近に用いられているシソなどの、現在とは別の忘れられた利用法を探し出す手掛りとしても、これらの炭化物は興味深い。エゴマはかって飛騨では焼畑の作物であったことも思い起すと、新たな問題がいくつも提起されてくるのである。

最後に、荒神山遺跡試料を受取ってから6年半、大石遺跡の試料を預かってから2年半の年月が経過して、ようやく最近になり、上に述べたことが判明してきたのは、きわめて多くの方々の御尽力によるものである。今回は筆者がとり急ぎ記したが、笠原安夫、粉川昭平教授の御指導とはげましなしにはできえなかったことを特に記しておきたい。走査電顕の操作は、東北大学大学院の高橋正道氏と岡山大学農業生物研究所の藤沢浅夫技官に負っている。

参考文献

註1　渡辺直経（1973・1974）「灰像による穀物遺残の検出法　上下」『考古学研究』20：65—73，21：55—62
2　Watanabe, N. (1970) "A Spodgraphic analysis of millet from prehistoric Japan" 東京大学理学部紀要357—379
3　石橋次雄・木村方一・後藤秀彦（1974）「十勝太若月一第二次発掘調査」
4　瀬峰町教育委員会（1980）「がんげつ遺跡第2次発掘調査報告書」

鑑定結果 3

花粉分析結果報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

〈18号住〉

NO.1：この試料は、草本花粉、羊歯類胞子ともに44.2%検出され多かった。草本花粉の主なものとして、Artemisia（ヨモギ属）が26.9%、Carduoideae（キク亜科）が8.7%検出され多かった。羊歯類胞子としては Monolete spore（単条型胞子）が殆どを占めて検出された。

従って古植生としては上記の草本類や羊歯類から成る草地が考えられる。古気候は温帯に相当しよう。

NO.2：この試料も NO. 1 に近似した花粉・胞子構成を示し、Artemisia を主体として Gramineae（イネ科）、Carduoideae, Cichorioideae（タンポポ亜科）などの草本花粉、Monolete spore などの羊歯類胞子が高い割合で検出された。

従って古植生は、上述の草本類から成る草地が推定される。古気候は温帯であろう。

※18号住居址出土土器 NO. 1 の土柱より採集した花粉を試料とした。

鑑定結果 4

放射性炭素年代測定結果報告

木越　邦彦（学習院大学）

Code NO.	試料	B.P.年代(1950年よりの年数)	
Gak—8672.	Charcal from Ooishi Site. House NO. 16	5240±170	3290 B. C.
Gak—8673.	Charcal from Ooishi Site. House NO. 32	5420±100	3470 B. C.

なお、年代値の算出には ^{14}C の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線計数値の標準差 α にもとづいて算出した年数で、標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、3σ に相当する年代を下限とする年代値（B. P.）のみ表示してあります。

※16号住居址および32号住居址より出土した木炭を試料とした。

エ　まとめ

本遺跡の調査によって得られた成果は多大である。検出された住居址は48棟が命名されているが、新旧の複合した時期の異るものを考慮すると、実際は58棟にのぼる。繩文時代前期神ノ木式期4棟はその終末期における黒浜式への移行する段階の土器を持ち、新知見をもたらした。諸磯B式期の1棟は県内における同式のセット関係を示す良好な資料となろう。同中期初頭の九兵衛尾根Ⅰ式期は9棟、同Ⅱ式期は5棟検出されたが、従来、不明確であった篭畑式の後出段階の編年を明確にするのに極めて重要な多量の土器群を持ち、一級資料として今後の活用が望まれる。

繩文時代中期中葉においては貉沢式期12棟、新道式期22棟の住居址が存在し、従来、貉沢式が新道式に先行することを証明する切り合い関係は曽利遺跡に1例あるのみであったが、本遺跡では22号住と26号住、14・25号と38号住、36号と40号住という確実に新道式期の住居址が、貉沢式期のを切っていることを確認し、また、両式の移行期の土器群の存在によって、中期中葉の土器の型式変遷を詳細に追うことができた。更に、東海・北陸からの搬入土器が遺構内で共伴する例も多く、他地域との文化交流現象や併行関係についての新知見も得られた。他遺跡との比較検討によって、今後は各型式の地域的な分布の片寄り等を抽出することにより、該期文化の地域による独自性を追求することが、課題となろう。

平安時代後葉の住居5棟は八ヶ岳山麓における農業開発が、該期になって急速に進展したことを示すものとして注目して良い。標高 900 m 以上の山麓には弥生時代から奈良時代の遺跡はごく小規模な仮泊地とみれるものが点在するにすぎないが、該期になって爆発的な増加をみることは、興味ある事象である。

土壙は1300余基あるが、環状となる住居址群の内部空間である広場にも多数存在する。また、繩文時代中期初頭においては各遺跡で土壙が急増する傾向がみられる。すべてが食料貯蔵庫とは考えられないが、その可能性が強く、食料獲得方法に何んらかの変化が生じたことに対応した現象とみたい。

付表１　大石遺跡出土土壙一覧表

凡　　例

1　1300余にのぼる土壙については、くわしいまとめもできなかったので、ここに、付表として計測を主とした一覧を作成した。頁数の関係から、相当無理な割付けをしたため、できるだけ略号や略記述を使用した。一見して判読できないきらいがあるが了とされたい。

2　以下、タイトルに従って記す。

1）「番号」欄　　土壙すべての通し番号であるが、100番以降は、すべて100番台の数字は省略して１～99のみにしてある。

2）「図番号」欄　　第○図をさす。挿図・図版番号ではない。

3）「プラン・平面形」欄　　「円」は円形、「不整楕円」は不整楕円形を示す。「形」を省略してある。

4）「状態」欄　　「黒褐」・「暗褐」などは土壙内覆土を示し「色」を省略した。「石」「集石」などは土壙内に検出された遺構（遺物）である。「P」はピットをさす。

「切18住」「切土14」など「切」が最初につく場合は、「18号住居址に切られている」，「土壙14に切られている」ことであり、「18住切」「土14切」のように「切」が後につづく場合は、「18号住居址を切っている」、「土壙14を切っている」という意味である。

5）「出土遺物」欄　　石器他欄では、「打製石斧」は「打斧」などと略してあるが、他に次の略号を用いた。「ob」は黒曜石、「UF」は使用痕あるフレイク、「フ」はフレイクの略である。なお、同一器種で２個以上出土したものはその個数を付したが、１個の場合は「１」は省略してある。次の「土器」欄でも同じである。

「土器」欄は次の略号を用いた。「深」は深鉢、「浅」は浅鉢である。土壙の性格を考えて器形を重視したためである。土器型式名は次のように表現した。九兵衛屋根Ⅰ（Ⅱ）式－(九Ⅰ)・(九Ⅱ)、新道式－(新)、貉沢式－(貉)、平出第３類Ａ系－(平３Ａ)、諸磯Ｂ式－(諸Ｂ)、神ノ木式－(神木)など。(中初)は中期初頭、(中中)は中期中葉をさす。「土」は型式不明の土器片。

6）「時期」欄　　「縄中初」は縄文中期初頭の意味であり、他もこれにならってある。「平」は平安時代をさす。

第2表　大石遺跡土壙一覧表

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	出土遺物 土器	時期
1	37 77	円	130	125	24	黒褐 石		深(新)	縄 中 中
2	37 77	楕円	109	93	26	炭混入黒褐 石		〃 〃 (中初)	〃 〃 初
3	37 77 226 285	長楕円	159	113	23	暗褐 礫 土1239切	刃器	浅(中中) 平3A 3	〃 〃 中
4	11 37	円	106	99	22	〃			
5	37 210	〃	83	82	16	〃 人頭大石		深2(中初) 平3A(狢)	縄 中 中
6	37 210 285	〃	107	104	32	炭混入黒褐	ｏｂフ 打斧	深・浅11(九Ⅰ) 諸B	〃 〃 初
7	37	楕円	93	78	23	〃 暗褐			
8	37	〃	125	101	73	黒褐			
9	37	円	93	91	14	RB・炭混入暗褐 2住切		深2 浅(九Ⅰ)	縄 中
10	37	楕円	108	?	35	黒褐	ｏｂフ 砂岩フ	深2 神木	〃 〃 前
11	37	長楕円	111	68	61	〃			
12	38	円	72	?	24	〃 切3住			
13	8 208	〃	80	76	18	暗褐		神木1	縄 前 前
14	8 210 285	楕円	75	65	24	〃	横刃	深3・浅(九Ⅰ)	〃 中 初
15	11 210	不整円	75	70	30	黒褐		深(九Ⅱ)	〃 初
16	8	楕円	98	?	35	暗褐 切土14			
17	38 210	円	76	75	28	黒褐		深8(九Ⅰ)	縄 中 初
18	38	〃	60	52	31	〃			
19	38	〃	64	60	28	暗褐			
20	38	卵	88	73	18	〃			
21	38 226	楕円	108	91	28	黒褐		深6・浅(狢)	縄 中 中
22	38 226	円	103	103	31	〃		浅(狢)	〃 〃 〃
23	38 226	〃	80	79	23	暗褐		深(狢)	〃 〃 〃
24	38	卵	117	87	26	黒褐			
25	38 210	楕円	111	105	30	〃	ｏｂ原石	半完深(九Ⅱ～狢)	〃 中 初
26	38	円	92	83	22	暗褐 石			
27	38	〃	88	75	42	黒褐	ｏｂフ	深7(中初) 深(中中)	縄 中 中
28	38	〃	127	126	32	〃		径1cmの炭化物	
29	38	〃	75	72	15	暗褐			
30	38	〃	83	80	13	〃		深	縄 中 中
31	38	楕円	82	77	26	黒褐			
32	38	円	84	74	16	暗褐			
33	38	楕円	79	58	11	〃			
34	38	円	57	56	15	〃			
35	38	〃	73	68	18	〃			
36	38 210 212	〃	73	72	8	黒褐		深2・浅(九Ⅰ～Ⅱ)	縄 中 初
37	38 210	長楕円	102	78	22	〃	ｏｂフ	深8・浅2(九Ⅰ)	〃 〃 〃
38	38	円	70	69	23	〃			
39	38	楕円	81	66	25	〃 平石3			
40	38 292	円	128	119	38	〃	打斧 石皿 凹石 ｏｂフ	深(中中) 平3A	縄 中 中
41	38 39 210 292	楕円	105	95	28	〃 集石	凹石 ｏｂフ4	浅(九Ⅰ)	縄 中 初
42	24 35 210 285	半円	138	107	45	〃	打斧 obフ 硬砂岩 原石	深5(九Ⅰ) 神木	〃 〃 〃
43	35	楕円	66	55	33	〃 検出面石多し 集石	磨石		
44	12 227 285	不整楕円	102	80	15	黒褐 18住切	打斧	深・浅(新)	縄 中 中
45	39 292	小判	142	139	35	土49切	凹石	深	〃 〃 〃
46	39 226 227 285 318	楕円	203	184	20	炭混入黒土	打斧 横刃 石鉄1	完桶・半完深2(新)	〃 〃 〃
47	39 227 285 292 318	円	72	70	11	暗褐	ｏｂフ 打斧 横刃 凹石	深2(藤1)	〃 〃 〃
48	39	〃	133	68	10	黒褐	ｏｂ原石 ｏｂフ		縄
49	39 226	不整円	?	72	12	黒褐 切土45	ｏｂフ 砂岩フ	神木 平出3A深	縄 中 中
50	39 210 285	楕円	120	103	27	〃	打斧 ｏｂフ	深15・浅(九Ⅰ)	〃 〃 初
51	39 210 211	円	95	9	28	〃 片袋状	ｏｂフ	深45・浅(九Ⅰ)	〃 〃 〃
52	39	〃	84	55	16	〃 切10住			

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	土器	時期
53	39	楕円	95	?	18	黒褐 切10住	割石		
54	39	円	64	62	23	暗褐		深2	縄中初
55	39 211	〃	63	61	15	黒褐	打斧片	浅(九Ⅰ)	〃〃〃
56	39 211	〃	98	77	23	〃		完浅2(九Ⅰ)	〃〃〃
57	39	楕円	58	?	23	〃			
58	39 211 212	円	71	67	11	〃		浅(九Ⅱ)	縄中初
59	39 211	〃	124	118	26	〃		深・浅(九Ⅱ)	〃〃〃
60	39	不整楕円	88	77	60	〃 一方摺鉢状			
61	39	円	66	63	29	〃			
62	39	楕円	105	86	18	〃			
63	39 93 226 318	円	?	80	26	黒土	石鏃	深鉢3(中初) 深(新)	縄中中
64	39	楕円	142	122	29	〃			
65	39	卵	100	78	24	〃			
66	39	方	108	?	14	〃 切8住			
67	40	楕円	120	90	16	〃	蜂ノ巣石		
68	40 211 212 292 318	円	130	120	14	〃 底	剝 凹石 UF	深多(九Ⅰ～Ⅱ)	縄中初
69	39 212	長楕円	?	88	6	〃 切8住	obフ	深2	〃〃〃
70	40	円	88	85	19	黒褐 石			
71	40	〃	75	70	15	〃 土72切		有鍔付土	縄中中
72	40	卵	75	57	20	暗褐 土73切			
73	40	長楕円	190	125	13	黒褐		有鍔付(新)	縄中中
74	40	楕円	117	105	16	炭混入黒褐 右2			
75	40 227 285 292	卵	192	150	30	〃	打斧 凹石 クリ炭化種子	深6(九Ⅱ) 深3(狢)	縄中中
76	40	不整楕円	120	85	23	暗褐			
77	44	楕円	105	80	23	〃			
78	36	〃	98	70	17	〃			
79	32 212	〃	130	92	38	黒土 14・38住切	obフ	深8・浅(九Ⅱ)	
80	40	〃	130	108	19	炭混入黒褐		深2(狢)	縄中中
81	40 227	不整楕円	103	96	17	暗褐		深(新) 平3A	〃〃〃
82	40	卵	89	80	26	〃			
83	40 212	卵	110	85	16	〃			縄中初
84	41	楕円	134	90	15	〃	obフ	深	〃〃〃
85	41 227	〃	153	114	21	黒褐		深5(新～) 平3A1	〃〃中
86	41 227	卵	158	106	15	〃 礫	打斧 obフ	神木・深(狢)	〃〃〃
87	41 212 285	円	110	103	9	暗褐 石		深2(九Ⅰ?)	〃〃初
88	41	不整円	100	97	21	〃 P(−14cm)			
89	41 227 285 292	楕円	91	75	14	〃	打斧 凹2 敲打器	深片3(新)	縄中中
90	41	〃	101	?	14	〃 土120切			
91	41	不整円	103	93	11	〃 石			
92	41	楕円	100	78	21	〃		深5	縄中初
93	40	隅丸長方	128	101	25	〃			
94	40 212 213 292	〃	173	108	35		凹石2 obフ	深18・浅(篭畑Ⅱ)	縄中初
95	40 213	不整楕円	137	105	28	暗褐	obフ3	深15(九Ⅰ)	縄中初
96	41 213	楕円	116	100	40	黒褐 土107切	打斧	深5(九Ⅰ・Ⅱ)	〃〃〃
97	41	〃	132	106	26	〃 石10 土117・123切			
98	42 213 318	〃	118	105	22	〃	ドリルⅠ UF	深6(神木・篭畑～九Ⅰ)	縄中初
99	42	卵	90	83	15	〃			
100	42 227	方	106	102	40	黒土		深¼・深4(新)	縄中中
1	41	〃	107	97	21	暗褐 底あれる			
2	42	〃	91	82	18	〃 〃			
3	42	長方	114	43	47	〃 〃			
4	41 213	隅丸方	102	97	10.5	〃		深・浅⅓(九Ⅱ)	縄中初
5	42	不整楕円	88	67	17	〃			

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	出土遺物 土器	時期
106	42 227 285	長楕円	114	84	43	暗褐	ハンマー	深10(新)	縄 中 中
7	42	楕円	105	88	18	〃			
8	41	卵	?	106	25	〃 切土96		土器片	縄
9	41 213	楕円	?	80	20	〃 土116切		深½(篭畑II)	縄 中 初
10	41 208	〃	132	117	42	黒褐		深(諸B)	〃 前
11	41	円	120	91	18	〃	石器	土器片	
12	42	卵	115	82	18	暗褐			
13	42	不整楕円	110	86	21	黒褐			
14	41 213	円	106	98	18	〃 土116・120切		深2(撚糸網目文)	縄 中 初
15	42	楕円	79	89	27	黒土			
16	41	円	?	69	6	暗褐			
17	41	不整楕円	?	133	27	〃 切土97・122			
18	42	円	116	116	30	〃 土124切			
19	40	〃	120	115	30	黒褐	打斧	深・有鍔付祖形(諸B)	縄 前
20	41	楕円?	?	92	4	暗褐 土90切			
21	40 213 292	不整円	140	137	22	黒褐 土129切	凹石	深10・浅(九I)	縄 中 初
22	41	円	101	102	17	〃 土117切			
23	41	楕円?	101	?	12	〃 切土97・117			
24	42	楕円	142	83	29	暗褐 切土118			
25	42 228 295	円	125	114	39	黒褐	石皿	深17・平3A 浅(貉～新)	縄 中 中
26	41 228	楕円	122	92	21	暗褐	打斧 obフ	中初2・中葉8	〃 〃 〃
27	41	円	80	65	23	〃 切土130		深	〃 〃 〃
28	42 213 285	不整円	147	130	23	炭混入暗褐	obフ 横刃 打斧	諸B2・深20・浅3(九I)	〃 〃 初
29	40	長楕円	99	60	30	暗褐 切121			
30	41 228	円	110	?	21	暗褐 切土127		深½・深(新)諸B2	縄 中 中
31	43	〃	145	132	29	黒褐 土136切			
32	41	楕円	106	80	15	〃			
33	43	長楕円	121	70	19	〃			
34	43 228 285	円	104	94	19	暗褐	打斧 obフ	深3(貉)	縄 中 中
35	43 228	楕円	103	92	23	黒褐 土139切		深胴	〃 〃 〃
36	43	〃	145	?	25	暗褐 切土131			
37	43	〃	?	100	14	〃 切土134			
38	43	〃	92	75	17	〃 土139切・切土134			
39	43 228	長楕円	129	72	18	〃 切土135・138		深(貉)	縄 中 中
40	41	卵	91	80	22	〃	炭化ドングリ3粒分	深	〃 〃 初
41	43	〃	58	43	13	〃			
42	43	円	82	73	27				
43	43	楕円	132	100	3	土147切			
44	43	〃	158	124	34	土146切	obフ 砂岩フ		縄
45	42	卵	105	89	43			諸B・中初各・深	〃 中 中
46	43	楕円	?	117	29	切土144			
47	43 228	楕円	?	94	29	切土143		深(貉)	縄 中 中
48	43	不整形円	218	200	43			深3	〃 〃 〃
49	43	円	85	80	37	土152切			
50	42 228	楕円	102	82	36			深(新～)	縄 中 中
51	42	円	68	73	25	土153切			
52	43 213	長楕円	207	140	12	切土149・土158切 墓壙?		ミニ深2(篭畑I)	縄 中 初
53	42	不正楕円	87	80	36	切土153			
54	42	円	65	58	31	土161切			
55	42 293	楕円	161	112	32	人頭大石1 切土161	凹石	深・平出3A	縄 中 中
56	42	円	?	53	23	切土161			
57	43	楕円	58	50	37				
58	43	卵	140	85	30	切土152			
59	43	円	126	117	39			深(中初) 深(中葉)	縄 中 中

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	土器	時期
160	42 228	楕円	125	100	23		ｏｂフ	深(狢)	縄中中
61	42	長楕円	98	55	21	土156・土155切・切土154			
62	43 208	円	125	122	31			深3(諸B)	縄前
63	44	楕円	84	69	26				
64	43	円	84	74	33	土169切			
65	43	楕円	61	45	25				
66	42	不整円	73	65	52	土160切			
67	42 228	卵	136	104	39	木炭あり	ＰＳ ｏｂフ	深20(狢・新)	縄中中
68	44 213	楕円	118	102	19	石(35×30cm)1個 土170切	木炭	浅(九Ⅰ?)	〃〃〃
69	43	〃	?	96?	26	切土159・土164			
70	44 229	〃	111	79	20	切土168	ヒメクルミ炭化種子	半完平3A(深)	縄中中
71	44	〃	148	113	34	切土168		深	〃〃初
72	44 228	不整楕円	152	110	5	土176・土174切		平3A・船元	〃〃中
73	44 77	円	163	105	27				
74	44	楕円	130	117	22	切土172	フレイク		縄
75	44 228	円	113	103	39			深(九II・船元)平3A	縄中中
76	44	〃	100	100	20	切土172			
77	43 208	〃	125	120	31	人頭大石 土178切	ｏｂ原石	深2(諸B)	縄前
78	43 228 285	卵?	135		35	切土177	横刃 ｏｂフ	深2	〃中中
79	22 208	楕円	125	100	51			深(諸B)	〃前
80	12	〃	130	118	24	石(30×25) 石(15×25) 18住切			
81	45 208	円	142	135	85	自然埋没貯蔵穴		深(諸B)	縄前
82	43	楕円	170	128	26				
83	40	不整円	83	82	22				
84	40	楕円	89	?	24	未調査地区に一部かかる		深	縄中前
85	43 285	楕円	?	104	35	農道で半分未掘	打斧		縄
86	43	〃	103	70	27				
87	45	長楕円	105	77	17				
88	45	〃	103	71	18				
89	45	不正楕円	74	57	15	黒土 底あれ		深(九Ⅰ)	縄中初
90	45	楕円	88	75	12				
91	45	円	71	66	38	ピット2			
92	45 228	卵	97	79	23	土199切合	ｏｂフ	深5(新)	縄中中
93	45	円	70	62	28				
94	45 213	卵	120	93	15	黒土		深8(九Ⅰ後)	縄中初
95	45	円	133	128	20				
96	45 228	長楕円	102	55	15			深	縄中中
97	45 213	楕円	74	63	18	埋甕炉に似る		深(九Ⅰ)	〃〃初
98	45	不整円	90	?	15	土202切			
99	45 228	長楕円	100	78	10	土202切	ｏｂフ	深(九Ⅰ)深底	縄中中
200	46	楕円	83	54	27	人頭大石			
1	45 214 258	卵	94	72	17	土215・土216切	ＰＳ	半完深(九II)	縄中初
2	45 229	長楕円	90	50	13	中央上部土器直立		半完深(新)	〃〃中
3	45	円	68	67	26	土204切合			
4	45	〃	46	40	12	土203切合			
5	45 213 286	長楕円	80	69	20	人頭大石	打斧・ｏｂフ	深3(九Ⅰ)	縄中初
6	45 228	円	73	55	26		ｏｂフ	深2(新)	〃〃中
7	45	隅丸長方	89	62	17	人頭大石			
8	45	長楕円	93	74	14	土209切			
9	45	楕円	?	52	9	切土208			
10	45	長楕円	92	50	13				
11	45	円	40	38	23				
12	45	〃	60	56	18				

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	土器	時期
213	45	円	56	54	22				
14	45 286	〃	53	50	34		打斧 ｏｂフ	深(中初)深(新)	縄中中
15	45	楕円	?	53	11	切土201	拳大石		
16	45	〃	?	65	9	切土201			
17	45 214	〃	100	75	31			半完深(九II)	縄中初
18	45	円	63	61	25	土219切			
19	45	〃	48	44	13	切土218			
20	45	〃	65	61	19				
21	45	円	63	63	17				
22	45	隅丸長方	90	41	32				
23	45	長楕円	127	?	11	大石(115X?X10)半分未掘			
24	46	円	96	95	12	暗褐			
25	45	〃	121	117	33	〃			
26	44 229 318	卵	100	90	23	土228切	尖頭器	深3(九II)深2	縄中中
27	44	方	?	55	29	切土77			
28	44	長方	103	73	13	切土226			
29	40 214	長楕円	133	86	12			深(篭畑?)	縄中初
30	44	円	70	68	11				
31	44	〃	82	77	17				
32	44	〃	92	90	14				
33	44	〃	54	54	14	土234切		深(中初)深(中葉)	縄中中
34	44	〃	80	74	18	切土233			
35	44	〃?	?	93	14	切13住			
36	44	〃	83	74	10				
37	44	〃	82	81	16				
38	44	〃?	?	93	13	切13住			
39	44	楕円	78	62	9				
40	44	〃	83	62	11				
41	44 214	不整楕円	106	80	15			深	縄中初
42	46	楕円	88	72	11		チャートフ	深2	〃〃〃
43	46 214	〃	89	65	15		ｏｂフ	深(九II)	〃〃〃
44	46	〃	84	68	12			深	〃〃〃
45	46	不整楕円	86	68	13				
46	46 229	〃	120	80	18	土247切		深2	縄中中
47	46 214	円	108	?	26	切土246 半分未掘		深(諸B)	〃前
48	47 229	〃	86	86	19	拳大石 石(10×20)	ｏｂフ2	深13(狢)	〃中中
49	46	楕円	82	70	10		ｏｂフ		縄文
50	46	不整楕円	111	79	16				
51	46	楕円	75	60	12				
52	47	円	?	66	14	切17住			
53	46	卵	70	60	8				
54	46	〃	116	98	18				
55	46	楕円	101	85	11				
56	46	〃	90	70	14	土257切			
57	46	〃	100	65	14	切土256			
58	46	楕円	105	70	11			深	縄中初?
59	46	不整円	60	60	20				
60	46	円?	98	73	10				
61	47 229	円	113	106	21	遺物底上14cm		半完浅・深4	縄中中
62	47 214	円	90	86	21	片袋状土壙	打斧 ｏｂフ OF	諸B・深6・浅(九I)	〃〃初
63	46 214	隅丸方	115	?	38	大石(50×30)	拳大石6 ｏｂフ	深8(九I)	〃〃〃
64	46 229	円	68	68	9		ｏｂフ	深2(新)	〃〃中
65	48	楕円	120	93	15	人頭大石 拳大石数個			

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	出土遺物 土器	時期
266	48 229	楕円	132	108	38		打斧 ob チャートフ	神木深(中初)平3A 深(新)	
67	48	卵	72	66	14				
68	48	楕円	?	112	12	半分未掘			
69	48	円	62	62	16				
70	48	〃	60	58	21				
71	48 229	長楕円	109	66	22	大石(20×40)		深(中初)深・浅(新)	縄 中 中
72	48 214 292	楕円	164	151	19	大石(20×30)～拳大石5 土290切	横刃 凹石	浅(九I)	〃 〃 初
73	44 214	〃	115	76	14	拳大石 大石 人頭大石		深(九I後)	〃 〃 〃
74	44	卵	80	60	13				
75	44	円	67	63	13				
76	48 214	楕円	106	93	15	石	obフ	深3(九II)	縄 中 初
77	48	〃	96	66	12		obフ	浅	〃 〃 〃
78	48	円	90	?	15	切10住	obフ		
79	48 214	卵	98	80	10		obフ	深5(篭畑II)	〃 〃 〃
80	47 48	楕円	?	77	12	石(50×30)～拳大 切17住	obフ		縄
81	48 214	〃	81	63	23		硬砂フ	深4(九I)	縄 中 初
82	48 214 286	卵	103	79	13		横刃	深3(九II)	〃 〃 〃
83	46 70 229	楕円	178	132	14	暗褐 検出面安山岩割石他		浅1(中初)有鍔(新)	〃 〃 中
84	48	不整円	68	63	23				
85	48	円	77	72	15		obフ		縄
86	48	卵	80	73	10				
87	44	楕円	83	70	12	切18住			
88	48 214	〃	107	77	15		obフ	深(九II)	縄 中 初
89	48 214 286	〃	105	75	13	切土269・土284 人頭大石・拳大石	obフ 打斧	繊土・深4(九II)	〃 〃 〃
90	48	〃	84	60	12	切土272			
91	48	円	71	66	8	周囲遺物多	obフ	深	縄 中 初
92	48 229 286	楕円	105	87	8	土293切 石(30×30)～拳大	打斧	深底・平3A	〃 〃 中
93	48	円	95	?	23	切土292			
94	48 229	楕円	100	80	16		打斧 obフ	深5	縄 中 中
95	47 214 215 295	〃	92	78	13	石(20×30) 人頭大21	石皿	深3・浅(九I)	〃 〃 初
96	47 214 286	〃	75	60	12		横刃	深(九I)	〃 〃 〃
97	47	円	75	68	15			諸B・深	〃 〃 中
98	47 286	〃	70	62	27	底ひょうたん形	打斧	深2	〃 〃 初
99	47	〃	83	79	31	小石			
300	47 292 295	隅丸方	87	87	28	人頭大石 拳大石 切17住 土301切	石皿	敲打器・深3	縄 中 初
1	47	円	102	?	23	人頭大石 切土302	台石		
2	47	楕円	115	88	19	人頭大石			
3	46	長楕円	85	55	18	三段底 大石(35×50)			
4	47 215	楕円	75	60	13	石(50×25)2	obフ	深(九II?)	縄 中 初
5	49	長楕円	105	70	55	切土306 二段底			
6	49	〃	100	67	55	土305切			
7	49	隅丸方	109	80	47				
8	49 215	楕円	126	112	66	土器立って出土	打斧 obフ	深½(篭畑II)	縄 中 初
9	49	〃	82	64	39				
10	49	〃	120	104	36				
11	49	卵	140	110	49				
12	49	楕円	155	120	59	RM(風倒木痕)			
13	8 215	〃	250	232	93		obフ	深6(九I・II)	縄 中 初
14	49	〃	92	75	32	ローム混入暗褐			
15	49	〃	78	60	32	暗褐			
16	49	長楕円	119	60	29	〃			
17	49	楕円	145	105	49	〃			
18	49	〃	99	80	40	〃			
19	50 229	〃	113	100	30	〃 人頭大石		深2・平3A	縄 中 中

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	土器	時期
320	50	円	85	86	30				
21	47	楕円	165	138	60				
22	6	〃	100	70	23				
23	8	〃	115	108	46				
24	49	円	110	85	46				
25	51 286	〃	92	88	35	黒土	打斧		縄
26	51	〃	111	100	50	〃			
27	51	楕円	98	80	42	〃			
28	50 51 229 286	〃	143	131	18	黒褐	打斧 obフ	深2(狢)平3A	縄中中
29	50	〃	145	110	45				
30	54 229	楕円	103	90	25	RM		深1(前・中初)深(中葉)	縄中中
31	51 53	〃	66	57	25			深	縄中初?
32	52	円	128	125	47				
33	51	楕円	103	90	25	土348切			
34	51	卵	117	90	47	黒土			
35	51	不整楕円	205	175	53	RM 切土339			
36	52	円	104	88	36				
37	52	不整円	82	68	41	黒土			
38	58	円	74	65	25	切土335			
39	51	楕円	118	80	20				
40	57	円	92	85	19				
41	57	円	92	87	15	黒褐 切32住			
42	57	〃	107	100	32	炭混出黒褐			
43	6 208	〃?	?	110	23			神木深3	縄前
44	52	〃	122	120	27				
45	51	卵	145	110	37	二段底			
46	50 215	楕円	122	90	24			深2(九I)	縄中初
47	47	〃	162	126	49	木炭 切土333			
48	51	長楕円	138	97	44	土433切			
49	52 56	不整楕円	120	85	30	切土1297	obフ	深3	縄中初
50	58	楕円	160	136	20				
51	54	〃	123	100	25	人頭大石2			
52	54	〃	95	78	27				
53	54	〃	105	80	36	石			
54	54	長楕円	142	90	26				
55	54	楕円	90	80	30				
56	54	円形	63	60	22				
57	54	楕円	85	79	33				
58	54	〃	92	77	26				
59	54	円	82	78	24				
60	54	〃	80	77	32				
61	51	卵	87	74	30	黒褐			
62	52 293	円	105	99	18		凹石		縄
63	52	楕円	146	118	40				
64	50	〃	164	112	39				
65	51	円	93	90	21				
66	54	〃	73	71	27				
67	51	楕円	113	82	34	ロームに混入 人頭大石			
68	54	卵	88	69	24				
69	57	円	100	98	23				
70	95	長楕円	210	165	17	礫群中 暗褐色中への黒褐色土の落込		縄中破片・黒浜小片	縄中
71	51	方	51	52	34	底部8字形 P		土器片	
72	54 84	円	70	69	31				

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	土器	時期
373	54 84	楕円	120	101	22				
74	55 215 88 286	〃	86	74	24	拳大2	打斧	深2(九Ⅰ)	縄中初
75	58	円	90	90	24				
76	53 56	〃	122	115	26	拳大石 P(深21)			
77	55 215	楕円	78	64	25		片磨岩	深4・浅(九II)	縄中初
78	51 215	〃	98	88	25	黒褐 石多		深2	〃〃〃
79	52 56 229	〃	133	90	32		obフ UF	深(狢)	〃〃中
80	58	円	128	126	59	炭混黒土	obフ チャートフ	深(薄・丸底)東海	〃前初
81	54	楕円	112	95	26				
82	55 88 215	円	130	120	55	炭混黒土	obフ	深2(九Ⅰ後)	縄中初
83	53 215	〃	142	135	37	切土434 小石・拳大3		深30(九Ⅰ後)	〃〃〃
84	57	〃	90	84	31				
85	58 208	卵	120	90	36			深(神木3)	縄前
86	57 215 286	円	84	80	25		打斧	深6(九Ⅰ後)	〃中初
87	57 216	卵	100	88	35	拳大3		深3(九Ⅰ)	〃〃〃
88	57	不整楕円	174	156	29				
89	57	楕円	128	117	49	拳大石 小石2			
90	57 216	長楕円	131	92	38	右(15×15)	硬砂岩剝片	深5(九Ⅰ終)	縄中初
91	57	楕円	81	70	20				
92	57	〃	100?	75	17	切土393			
93	57 216	〃	137	117	20	土392・396・395切 人頭大石 拳大石		深3(九Ⅰ後)	縄中初
94	57 216	不整楕円	108	95	22		obフ	深13(九Ⅰ後)	〃〃〃
95	57 216	楕円	96	90	8	墓? 切土393・396		半完深	〃〃〃
96	57 216	円	95	93	20	切土393 土395・397切		半完深・深(篭畑II)	〃〃〃
97	57 216	楕円	125?	98	25	切土396	UF	深(九Ⅰ?)	〃〃〃
98	57	〃	112	85	20				
99	57	円	76	76	18				
400	55	卵	85	70	17	土404切			
1	55	卵	167	134	30	切土403 土402・348切			
2	55	〃	167	110	30	切土401・403 ピット 拳大2			
3	55	〃	90	64	15	土401・402切			
4	55	〃?	65	55	17	切土400 土405切			
5	55	楕円	50	47	24	切土404			
6	55	楕円	80	88	34				
7	55 216	円	81	83	15			深3(九Ⅰ・II)	縄中初
8	55	〃	68	71	9			深	〃〃〃
9	55 229 286	楕円	120	102	40		横刃 obフ	深(狢)	〃〃中
10	55	卵	108	85	16				
11	55	楕円	105	79	32				
12	55 216	〃	90	76	15			深2(九Ⅰ)	縄中初
13	55	〃	68	55	23	切土414	片磨岩フ		
14	55 229	楕円	128	100	24	土413・415切	obフ	深(狢)深(新)	縄中中
15	55	円	67	?	13	切土414			
16	55	楕円	80	60	18				
17	55	〃	107	98	17				
18	55 216	円	78	74	22			深3(九Ⅰ)	縄中初
19	57	楕円	105	75	20				
20	55 88	〃	128	102	23				
21	53 56	楕円	110	94	26	ピット(24cm)	obフ3 底クリ炭化粒3		縄
22	53 56 229	不整円	97	90	31	土424切	木炭片 ob原・フ	深10(中初)深(新)	縄中初?
23	53	楕円	99	90	24				
24	53 56 216	不整円	131	89	27	切土424		深1(九II)	縄中初
25	50 51 216	卵	85	72	19	炭混入黒褐		深(九Ⅰ)	〃〃〃

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	土器	時期
426	51	楕円	66	61	24	炭混入暗褐	打斧？		縄
27	58	〃	103	95	26				
28	50 52 216	不整楕円	118	100	32			諸B・深5（九Ⅰ後）	縄中初
29	50 52 217 226	長楕円	135	93	8	黒褐	ｏｂ 砂岩剝片	半完深 他20（九Ⅰ～Ⅱ）	〃〃〃
30	50 52 216	楕円	112	90	23	一抱大石		深（九Ⅱ）	〃〃〃
31	85 229	〃	130	92	49	拳大石	ｏｂフ	深2（新・平3Ａ）	〃〃中
32	56	長楕円	145	74	26	土431間焼土 人頭大石			
33	56	円	90	84	24	切土349	ｏｂフ	諸B・深	縄中初？
34	53 216	楕円	100	85	19	土383切		深4（篭畑）	〃中初
35	54 84 216 217 296	〃	108	78	14	炭混入黒褐	石皿片 ｏｂ	深¾ 深8（九Ⅱ）	〃〃〃
36	59	円	97	93	28	暗褐 ロームブロック混入	ｏｂフ	深	〃〃〃
37	56	不整楕円	75	53	19	暗褐 切土438			
38	56	楕円	80	72	17	〃 土437切			
39	59	円	80	78	18	〃			
40	59	不整楕円	92	85	19	暗褐 ロームブロック混入		深（九Ⅱ）	縄中初
41	59	円	80	80	25	ローム粒・炭混入暗褐		浅・深・平3Ａ	縄中中
42	59 217	〃	85	80	39	暗褐		深	〃〃初
43	60 217	不整楕円	97	80	29	炭混入黒褐	ｏｂフ	深5・浅（九Ⅱ）	〃〃〃
44	59	円	85	80	21	黒褐		土	〃
45	59	〃	78	76	21	暗褐			
46	59	〃	67	64	14	〃			
47	60	楕円	75	68	13	〃			
48	86	〃	68	59	10	暗褐 切土1077 土1080切 石			
49	50 217	不整楕円	76	54	12		ｏｂフ2	半完深（九Ⅱ）	縄中初
50	53	楕円	86	73	10				
51	53	〃	70	70	15				
52	53	〃	100	67	12				
53	53	〃	70	50	6		ｏｂフ		縄
54	53	円	79	78	11				
55	53	楕円	95	90	10				
56	53	〃	100	60	7				
57	53	円	85	85	9				
58	53 217	長楕円	140	77	16	拳大石 二段底 石(25×25)		深（九Ⅰ）	縄中初
59	53	楕円	100	75	13	石(20×30)			
60	53	円	77	74	11				
61	53	長楕円	90	60	31				
62	53	楕円	126	92	10		凹石		
63	53	〃	91	85	15				
64	53	不整楕円	53	112	15				
65	53 217	円	80	69	17	炭粉有	ＵＦ	深（九Ⅰ）	縄中初
66	53	不整楕円	85	58	20	大石(50×30)			
67	53	楕円	95	76	10				
68	53	〃	95	78	14	石(15×10)			
69	53	円	75	63	11		ＵＦ		
70	62	楕円	78	73	10				
71	63 208	楕円	78	70	22		ｏｂフ	深1（神木）	縄前
72	63	円	95	93	18			深	〃中初
73	61	〃	78	73	14				
74	61	〃	75	70	8				
75	61	楕円	63	73	15				
76	61	〃	90	72	10		ｏｂフ	土	縄
77	61	卵	127	90	17				
78	61	円	88	82	14	炭混入黒褐			
79	61	卵	110	90	13		輝緑岩片		

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	出土遺物 土器	時期
480	61	楕円	?	75	9				
81	61 217 218 286 296 318	楕円	120	97	16	平石の上に土器片	石皿 凹石 横刃打斧2 obフ	深多(九I)	縄中初
82	61 229	円	97	93	20	拳大石 石(20×24)		深7(新)	〃〃中
83	61	楕円	112	92	26				
84	50 61	長楕円	114	73	18		obフ	縄片	縄
85	61 218	円	108	105	38	拳大石 墓壙		半完深・深口縁(九I後)	縄中初
86	61	円	104	100	13	石(35×20)1～			
87	61 218	楕円	139	113	21	人頭大石		深4	縄中初
88	61	〃	98	75	18				
89	61 218	〃	95	80	35	底ピット		深	縄中初
90	61	〃	83	67	19				
91	61	〃	95	76	19	土492切			
92	61	〃	80	68	13	切土491		深小	縄中初
93	61	〃	76	68	25				
94	61	〃	87	72	15				
95	61	〃	85	72	11			深(新)	縄中中
96	61	卵	95	70	13	切土497・499	UF	深小	〃〃
97	61	楕円	85	68	23	土496切	安山岩割石		
98	61	〃	?	91	12	小石 切土499・655			
99	61 229	円	120	110	25	土498・496切		深3(新)	縄中中
500	63	楕円	100	70	18			諸B小	〃前
1	63 208	長楕円	160	100	42	集石土壙(礫220)	磨石	諸B6	〃〃
2	63	楕円	160	145	30	礫	UF	諸B・深3	〃中初
3	63	〃	86	70	14				
4	63	卵	115	77	23				
5	63	楕円	75	61	14				
6	63 218	〃	81	71	11		obフ	深(九I)	縄中初
7	63 218	隅丸方	105	104	19			深 他に諸B	〃〃〃
8	63 208	楕円	107	80	7			有鍔付祖形(諸B)	〃前
9	63	隅丸方	90	55	16			深	〃中初
10	63	楕円	110	100	29	覆土に炭粉 拳大石4	obフ	深3(九I後)	〃〃〃
11	63	隅丸方	110	95	32	集石(礫175ケ、木炭多し)			
12	64 208 211	卵	170	143	50	人頭大石2 拳大石3	obフ 炭化クリ½粒	深・浅40(諸B)	縄前
13	64 208	楕円	74	64	19			諸B	〃〃
14	64 208	方	56	73	14			〃	〃〃
15	64	〃	145	125	17			縄	〃
16	64 208	円	77	77	16			諸B	〃前
17	64 208	隅丸方	65	60	16	覆土に炭粉		諸B2	〃〃
18	64	円	60	58	20				
19	61	隅丸方	78	70	14				
20	61	不整楕円	76	67	12				
21	61	隅丸方	78	83	24				
22	61	円	64	62	12			深	縄中初
23	61	楕円	77	55	12				
24	64 208	隅丸方	128	114	20				
25	64 218 293	〃	137	132	51		凹石	諸B2・深10(九I)	縄中初
26	64	楕円	83	72	8	礫			
27	64 208	卵	95	75	16		obフ	諸B2	縄前
28	64 208	長楕円	190	110	19	礫2		諸B2	〃〃
29	64 218 293	隅物長方	142	102	42	集石(礫260 焼土)	obフ 凹石	諸B8・浅(中初)…混入?	縄前
30	64 218	楕円	72	65	12			深(九I)	〃中初
31	64	隅丸方	83	60	8				
32	64	楕円	110	95	47	礫		諸B2・深	縄中初

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	出土遺物 土器	時期
533	64	楕円	66	47	12				
34	64	〃	90	81	19				
35	64	〃	83	73	10				
36	64 208	隅丸方	50	75	16			諸B4	縄前
37	64 218	楕円	105	80	13			深(九II)	〃中初
38	58 318	〃	90	78	13		石匙		〃
39	58	〃	100	90	12	石			
40	58	卵	102	70	13				
41	58	隅丸方	70	56	20				
42	58 218	不整楕円	100	84	18	炭混入暗褐		深(九I後)	縄中初
43	58 208	楕円	90	80	13			諸B	〃前
44	58	〃	102	80	13				
45	58	〃	90	80	12				
46	58	円	103	95	15				
47	58	楕円	100	74	18	覆土に炭粉 石(35×15)		諸B5	縄前
48	58 209	〃	83	73	38	袋状 貯蔵穴		諸B5	〃〃
49	58 209 293	〃	90	67	45	〃 〃	凹石 obフ 底より	炭化クリ1粒・諸B3	〃〃
50	58	〃	120	90	14	土551切			
51	58 286	〃	95	78	18	切土550	乳石斧		縄
52	58 218	〃	135	120	32	覆土に木炭小片	obフ2	諸B 深(九I)	〃中初
53	65	隅丸方	95	70	8				
54	65	〃	85	85	44	袋状 貯蔵穴			
55	65 209	円	80	80	27	覆土に炭粉 一方袋状貯蔵穴	打斧 チャートフ	諸B8	縄前
56	65	卵	92	82	11	土557切			
57	65	〃	90	70	16	切土556			
58	65	円	90	84	14				
59	65 209	不整楕円	182	135	28	焼土 集石	砂岩フ	繊土 諸B8	縄前
60	65	〃	123	102	7	覆土に炭粉 拳大石3 小3	緑泥片		
61	65 209	隅丸三角	78	68	19	石3		諸B	縄前
62	65	楕円	118	95	8	拳大石3			
63	65	〃	90	87	14				
64	65	〃	90	67	13				
65	65	〃	86	75	14				
66	65	〃	77	60	11				
67	65 236	〃	73	72	9	石		深(堀)	縄後
68	65	隅丸方	68	60	14				
69	65	長楕円	140	90	25	周辺に諸B片			
70	65 209	円	90	72	18	石(15×15)		深2(諸B)	縄前
71	65	円?	145	?	18				
72	65	円	70	65	11				
73	66	楕円	?	55	15	小石 切土574			
74	66 218	円	107	100	50	土573切 覆土に木炭片 人頭大2 拳大4		諸B2・深7(九I)	縄中初
75	66 218	楕円	72	60	19			深(九I)	〃〃初
76	66	長楕円	95	65	11				
77	66	〃	106	80	15	底中央凹			
78	66	不整円	120	110	72	貯蔵穴 一方袋状			
79	66	長楕円	112	75	16				
80	66	卵	75	60	13				
81	65	楕円	60	55	12				
82	65	〃	102	73	14				
83	65	半楕円	78	75	22				
84	65 229 286 293	〃	66	63	30		横刃 凹石	中初3・深(中葉)	縄中中
85	65	長楕円	93	50	33				

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺作 石器他	土器	時期
586	66	円	65	57	8				
87	66 219	楕円	103	89	12	墓壙 人頭大石 拳大3		深2 (九II)	縄 中 初
88	66	〃	118	82	20	人頭大石	ｏｂフ		〃
89	66 218	円	98	92	47	焼土 木炭片 (上)		深2 (九II)	〃 中 初
90	66	隅丸方	?	73	12	未掘部有			
91	66	楕円	130	65	10				
92	66	卵	117	98	7				
93	66 209	長楕円	115	80	11			諸B 2	縄 前
94	66	?	?	?	?	RM			〃 〃
95	67	円	107	100	59	底全面焼土	木炭片		
96	67	楕円	90	67	20	焼土		深	縄中初?
97	67	〃	123	95	16	拳大石	炭粉含		
98	67	卵	100	85	13				
99	67 286	〃	75	68	11	拳大石	打斧		
600	67 218	楕円	80	64	17	小石 2 深鉢片土壙621と接合		深(九I)	縄 中 初
1	67	楕円	70	62	20			深(九I)	縄 中 初
2	67 219	隅丸方	149	87	16	集石 (礫80)	磨石	深4・浅(九I)	〃 〃 〃
3	67 219 293	円	40	38	24	木炭・炭粉含	打斧 凹石(内) ｏｂフ	浅3 (九I)	〃 〃 〃
4	67	長楕円	95	65	8				
5	67	隅丸方	107	93	22	集石 (40前後礫20)		土	
6	67	楕円	75	62	14			深	縄 中 初
7	67 209	不整楕円	90	50	13	石		神木	〃 前
8	67	〃	90	63	19				
9	67	楕円	90	55	20			深小	縄 中 初
10	67	隅丸方	87	58	15				
11	62	〃	75	65	10				
12	62	楕円?	280	?	?	RM 未掘			
13	67 219 293 318	円	120	119	31	覆土に炭粉	凹石3 スクレイパー4 乳石斧	茅山? 諸B3 九I・II	縄 中 初
14	67 219	楕円	71	57	12			深胴(九I)	〃 〃 〃
15	62	隅丸方	96	75	19				
16	62	楕円	100	78	22				
17	62	〃	90	70	13				
18	66 229	円	158	158	66			深3	縄 中
19	62	楕円	82	70	18				
20	62 293	卵	78	62	7	拳大石	凹石		縄
21	68 219 229	円	60	58	6	石 (15×15)		深	縄 中 初
22	68 219 286	楕円	107	90	9		硬砂フ 横刃 乳石斧	深5 (九II) 諸B	〃 〃 〃
23	68	〃	148	118	12	小石 大石 (40×40)			
24	68	〃	77	63	12				
25	68	円	64	61	14	石 (15×15)			
26	68	卵	102	80	13				
27	68	楕円	90	80	15				
28	68	〃	102	94	25	土629切			
29	68	〃	102	?	20	切土628			
30	68 219	円	67	63	11			深5 (九I)	縄 中 初
31	68 230	不整円	82	78	14	石 拳大石	ｏｂフ チャート	深2	〃 〃 中
32	68 230	楕円	100	80	27		UF2 ｏｂフ6	深4	〃 〃 〃
33	68	卵	55	47	7				
34	68 209 318	不整楕円	105	72	14	ドリル	UF obチャートフ10	花積下層・黒浜・東海系薄指痕11	縄 前 中
35	68	楕円	68	50	11		砂岩フ	深	〃 〃
36	68	円	90	86	10			東海系薄指痕	〃 〃
37	68 209	楕円	80	57	7			神木 無文中越? 深3	〃 〃 前
38	68 287	円	67	65	13		打斧		〃

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	出土遺物 土器	時期
639	68 219	卵	85	60	10			深	縄中初？
40	68 209	円	90	85	19	土641、642切	神木		〃 前前
1	68	楕円	70	55	9	切土640	チャートフ		縄文
2	68	?	?	?	?	切土640末堀部有	ｏｂフ チャートフ		〃
3	68	円	73	68	11				
4	15	楕円	105	75	14				
5	15	〃	100	83	11	小石3 石(10×10) 2			
6	15 293	円	75	72	12		凹石		
7	15 219 293	〃	75	75	24		〃	深（九Ⅰ）	縄中初
8	15 287	楕円	100	75	15		横 打斧		〃
9	15	方	110	95	12	覆土に炭粉含			
50	15	円	90	85	15				
1	15	円?	105	?	6	切41住			
2	15 219 287	長楕円	110	70	20	覆土に小石多	打斧	諸B 深 浅8（九II）	縄中初
3	15 230	楕円	95	74	12			深2	〃中中？
4	15	円	75	75	19				
5	61 296	楕円	80	65	11	土498切 石(小)	石皿 砂岩フ	深	縄中初
6	62	隅丸方	118	85	15				
7	62	楕円	83	62	10				
8	62	〃	80	64	12				
9	62	〃	88	65	9	炭粉少混黒褐			
60	62	〃	83	58	19				
1	62	円	57	53	10				
2	68	楕円	97	70	14				
3	68 219	円	104	100	32		片岩剝片 ｏｂフ7	深10（九Ⅰ）	縄中初
4	68	楕円	105	90	19				
5	68	卵	90	73	23				
6	68	楕円	83	78	17				
7	68	円	83	77	9				
8	68	〃	90	88	19				
9	68	楕円	94	78	32		特殊磨石状凹石		
70	68	〃	85	72	18				
1	68	〃	73	63	13				
2	62	楕円	75	70	13				
3	62	卵	70	60	13			深	縄中初？
4	62 219	楕円	85	73	22			浅（九Ⅰ）	〃 中初
5	62	円	80	72	22				
6	62 296	卵	92	84	19		石皿		
7	62	楕円	96	80	20				
8	62	隅丸方	92	70	13			縄片	縄
9	62 219	楕円	125	90	11		チャートフ	深4 浅（九Ⅰ後）	〃 中初
80	62	〃	85	62	17				
1	62 69	円	135	122	21	土704切		平3 A	縄中中
2	62	楕円	83	66	12				
3	62	隅丸方	80	66	7				
4	62	円	60	56	19				
5	69 219	〃	80	75	19	大石（30×35）		深4（九II）	縄中初
6	69 219	楕円	80	70	14			神木 深（九Ⅰ後）	〃 〃 〃
7	69	円	70	68	18			深 浅3	〃 〃 〃
8	62	楕円	88	67	17				
9	62 74 219	〃	85	65	10			深 浅（九Ⅰ）	縄中初
90	74 219 293 296	〃	85	70	11		凹石 石皿	深6（九Ⅰ）	
1	74	円	107	104	20		ｏｂフ	深	〃 〃 〃

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	出土遺物 土器	時期
692	74	円	70	70	19				
3	74	楕円	80	57	18	人頭大石	砂岩剝片 obフ	深	縄中初
4	74	〃	73	60	19				
5	74 219	卵	93	82	25			小深2（九I）	縄中初
6	74	不整楕円	102	83	22				
7	74	楕円	98	87	21				
8	69 296	卵	100	70	20	石(10×20)石(30×25)	石皿		
9	69	楕円	98	75	14				
700	69	円	85	79	15	覆土に炭粉		大深（新）	縄中中
1	69	楕円	85	76	12				
2	69	卵	80	66	18				
3	69 219	楕円	107	83	16	右（15×10）		深（九I）	縄中初
4	69	〃	?	115	15	切土705・681			
5	69	〃	125	103	16	土704切			
6	69	円	125	120	20	土707切			
7	69	楕円	?	85	12	切土706			
8	61 219	卵	122	85	17	小ピット（深22）		深（九I）	縄中初
9	69	楕円	105	92	15				
10	69	〃	70	60	9				
1	69	〃	105	86	11				
2	69	〃	110	80	12				
3	69	〃	74	68	10				
4	69 230	隅丸方	112	90	17	土175切		平3A（狢～新）	縄中中
5	69	円	87	80	15	土717切・切土714	UF2 obフ		縄
6	69	楕円	90	80	15				
7	69	円?	?	55	14	切土715			
8	69	〃	77	75	22				
9	69	楕円	125	100	12	土720切			
20	69	〃	105	75	16	切土719			
1	69	楕円	113	80	14	ピットのため二段底			
2	70	円	62	60	10				
3	70	〃	75	74	10	石		深3	縄中中
4	70 219	楕円	108	97	24			深（九I）狢2	〃〃〃
5	70	〃	73	65	29				
6	70	〃	80	73	21	石（30×30）			
7	70	円	76	70	20				
8	70	楕円	105	85	20				
9	70	〃	78	60	19	土743切			
30	69 230	卵	85	83	12	木炭多 石(30×20)		深（新）	縄中中
1	69	〃	95	70	20				
2	60	長楕円	120	84	21				
3	74	円	65	58	17				
4	74 230	楕円	90	70	22			深3 平3A3	縄中中
5	70 230	〃	168	153	19	中石（30×20）		中初浅 深（新）	〃〃〃
6	70	〃	77	72	21				
7	70	卵	87	65	8				
8	74 230	楕円	125	115	25	墓壙?		深（新）	縄中中
9	70	〃	130	95	21	P 有人頭大石			
40	70 220	不整円	73	62	24		緑泥片岩 obフ	深3（九I）	
1	71	楕円	119	110	23	人頭大石			
2	71	〃	103	97	15	〃			
3	70 230	長楕円	142	90	22	切土729	絹雲母片岩	有鍔付（新）	縄中中
4	71 230	不整楕円	105	94	17			深2（新）	〃〃〃

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	土器	時期
745	70	楕円	73	64	19		凹石		縄
6	70 219	〃	90	70	19			深（九Ⅰ）	〃 中 初
7	71	〃	90	85	14				
8	70	円	126	118	19				
9	70	隅丸三角	120	110	18	石			
50	72	卵	96	80	15	炭粉多混入暗褐	割石		
1	72 220 296	楕円	178	155	13	黒褐	石皿（上層）	黒浜２ 深３（九II）	縄 中 初
2	72 220	〃	96	80	22	暗褐 土767切		深（九II）	〃 〃 〃
3	72	〃	96	89	15	黒褐			
4	72 219	〃	130	96	15	暗褐 礫多		深（九II）	縄 中 初
5	72 220	〃	162	133	41	炭混入黒褐		深（九II）	〃 〃 〃
6	72 220	卵	136	119	33	〃		深（九II）	〃 〃 〃
7	72	〃	150	116	15	炭混入暗褐 礫		土	〃 〃
8	72	楕円	114	80	26	〃			
9	72	〃	100	70	14	炭混入黒褐			
60	72 293	〃	87	70	15	黒土	磨石１		縄
1	74	〃	97	70	13	暗褐			
2	74 220	〃	100	68	20	炭混入暗褐		深（九Ⅰ）	縄 中 初
3	72 209	卵	110	90	28	黒土		諸B 押型文	〃 前 中
4	72	〃	92	74	18	暗褐			
5	72 220	円	83	78	15	黒褐	剝片	深４（九II）	縄 中 初
6	72 230	〃	74	71	16	炭少量混入暗褐	チャートUF	深２（新・平３A）	〃 〃 中
7	72	楕円	100	95	22	黒褐 切土752			
8	72	不整楕円	95	87	13	炭混入暗褐			
9	72	楕円	74	58	10	黒褐			
70	72 220	〃	138	103	30	暗褐	obUF	深３（九II）	縄 中 初
1	73	円	75	70	10	黒褐			
2	72	〃	95	93	11	木炭混入暗褐			
3	72	楕円	87	66	10	黒土			
4	73 220	〃	105	83	36	暗褐 中・下層木炭	砂岩フ	深（九II）	縄 中 初
5	73	円	90	85	12	炭混入暗褐			
6	72	〃	108	96	11	暗褐			
7	73 220	楕円	120	103	24	炭混入暗褐 上部焼土	obフ 砂岩	深７（九II）	縄 中 初
8	72 220 294	不整楕円	220	190	63	炭多混黒土 集石（礫110）	凹石	深２（九Ⅰ）	〃 〃 〃
9	73 220	楕円	98	91	35	炭混入黒褐	obフ	深２（九II）	〃 〃 〃
80	73	不整楕円	73	65	16	黒土			
1	73 220	楕円	89	77	29	下層炭少混入暗褐		深 浅４（九II）	縄 中 初
2	73	〃	82	68	36	黒褐	obフ	土	〃
3	73	〃	105	80	41	〃	obフ		〃
4	73 220	〃	83	82	28	〃		深２（九II）	縄 中 初
5	73	〃	104	82	21	〃			
6	73 220	〃	83	74	20	炭混入暗褐		深（九II）	縄 中 初
7	73	〃	82	65	10	黒褐			
8	73	〃	60	48	10	〃			
9	73 220	長楕円	92	57	10	炭混入黒褐		深２（九II）	縄 中 初
90	73	楕円	74	60	33	黒褐			
1	73	〃	70	55	11	〃			
2	73	〃	74	60	13	炭混入黒褐			
3	73 220 297	〃	82	70	33	下層木炭混入	obフ 打斧	深（九II）	縄 中 初
4	73	不整楕円	80	63	18	黒褐			
5	73	楕円	80	72	17	暗褐			
6	73	〃	75	62	10	炭混入黒褐			
7	73 297	〃	90	77	14	暗褐 石	obフ 打斧		縄
8	73	不整楕円	80	64	17	黒褐			

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	土器	時期
799	73	楕円	78	63	8	黒土			
800	75	〃	137	113	21	〃			
1	75 230	長楕円	95	55	13	炭混入黒土		浅（新）	縄中中？
2	75	楕円	82	67	21	暗褐 礫	ｏｂフ		縄
3	75	〃	80	65	17	木炭混入黒褐	ｏｂフ		〃
4	75	〃	93	65	21	〃	〃		
5	75	〃	95	70	105	〃	〃		
6	75	〃	68	62	13	〃			
7	75	〃	82	66	9	〃			
8	73	円	73	80	11	下層木炭混入黒褐			
9	73 296	楕円	83	65	15	黒褐 土811切	石柱	土	縄
10	11	不整楕円	97	84	16	〃			
1	73	長楕円	105	65	16	〃 切土809			
2	75 221	円	75	74	21	下層木炭少含暗褐		浅（九Ⅰ）	縄 中 初
3	75 221	卵	133	103	20	〃		深２（九Ⅱ）	〃 〃 〃
4	73 294	楕円	118	100	14	黒土	ｏｂフ 凹石		〃
5	75	不整円	58	55	13	炭混入暗褐		土	〃
6	75	〃	96	90	19	暗褐			
7	75	不整楕円	167	150	42	炭少混入黒褐			
8	75	〃	137	91	15	暗褐			
9	73	楕円	115	78	36	炭少混入黒土	蜂ノ巣石		縄
20	75	〃	93	77	11	炭多混入黒褐			
1	75	〃	86	65	24	暗褐			
2	75 221	円	94	83	22	炭混入暗褐		深（九Ⅱ）	縄 中 初
3	73	不整楕円	123	111	30	黒土		土３	〃
4	75	円	75	75	35	炭少混入黒褐			
5	75	楕円	110	90	18	黒褐			
6	75	円	73	73	24	暗褐			
7	75	楕円	92	77	18	木炭少混入暗褐			
8	75	〃	77	65	12	黒土			
9	75 221	〃	86	77	38	暗褐		深	縄 中
30	76	円	64	64	24	木炭少混入暗褐			
1	76	〃	71	70	27	〃			
2	76	〃	82	82	22	暗褐			
3	76 230	楕円	77	63	56	〃	ｏｂフ	深５（新）	縄 中 中
4	76	円	72	68	48	〃			
5	76	楕円	77	72	23	〃			
6	76	不整楕円	102	78	31	〃			
7	76	楕円	135	110	27	炭粉混入暗褐 底深鉢		半完深（新）	縄 中 中
8	209	円	105	95	22	〃 検出面で緑泥原石		諸Ｂ	〃 前 〃
9	76 77 230	楕円	97	78	48	黒褐 片袋状貯蔵穴	ｏｂフ２	深２（新）浅	〃 中 〃
40	76 230	円	95	87	20	暗褐	緑泥岩片多	深２（狢）	〃 〃 初
1	76 77	〃	89	85	31	〃 ローム直上	ｏｂフ	深	〃 〃 初
2	76 77 221	〃	92	86	31	〃		深２	〃 〃 中
3	76 209	〃	92	81	32	〃		諸Ｂ２	〃 前 〃
4	76 230	長楕円	70＋x	45	35	〃 切土854	ｏｂ原	深 浅（新）	〃 中 〃
5	76 230	円	80	77	27	黒褐			〃 〃 〃
6	82 230	〃	100	94	27	〃 土1274切		深（中初）深２（新）	〃 〃 〃
7	78 221	〃	110	108	28	暗褐 緑泥岩割石	ｏｂフ	諸Ｂ１深（中初）	〃 〃 初
8	78 221	〃	121	112	44	黒褐	ｏｂフ 片岩片	小深２浅（九Ⅰ）	〃 〃 〃
9	78 221 287	〃	128	117	36	暗褐	打斧片	深（新）	〃 〃 中
50	78	楕円	142	123	44	黒褐	炭化クリ散在		
1	78 209	〃	70	59	18			諸Ｂ２	縄 前 中

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	土器	時期
852	79 209	円	134	122	44	黒褐 人頭大石	打斧	深2（黒）	縄前前
3	76 77	〃	92	82	27	焼土混暗褐	砂岩フ		
4	76 230 294	〃	100	90	60	黒褐 土844切	凹石	深3（中初） 深（新）	縄中中
5	79 221 294	〃	139	130	39	〃 土1007切	クリ1粒 ob	半完深（篭畑II）	〃〃初
6	79 231 296	〃	127	121	48	〃 緑泥岩片	石皿 ob	深多 浅（新）	〃〃中
7	79 231	楕円	70	63	26	暗褐 浅鉢底より15cm		浅½（狢）	〃〃〃
8	79 221	円	100	92	13	〃		深4	〃〃初
9	79	卵	90	70	14	〃	凝灰質砂岩片	深	〃〃〃
60	80 81	楕円	115	104	19	〃 土998・1004切			
1	80 231	円	123	123	31	〃	ob 砂岩原石	深8（新・平3A）	縄中中
2	80	〃	90	83	14	黒褐		深（中初）土師器坏片1	平
3	80	卵	116	93	27	暗褐 人頭挙大石			
4	80	楕円	86	73	12	〃			
5	59 80 294	円	140	138	65	黒褐 土866・996切	凹石 砂岩片	深3（中初）	縄中中？
6	59 80 231	〃	86	85	16	暗褐 土911切 切土865		深2（新）	縄中中
7	80 231 287	楕円	103	85	21	〃 人頭大石	打斧2	深3（狢）	〃〃〃
8	80 83 231	〃	174	173	21	〃 土1267切	ob2	中初3 深（新） 土846同一体	〃〃〃
9	80 231 318	円	107	105	36	黒褐	石匙	中初9 深2（新）	〃〃〃
70	59	〃	91	90	13	暗褐 人頭大石			
1	80 83 221 287	楕円	80	71	36	〃	打斧2 礫器	深	縄中初
2	80 83	不整円	120	83	10	〃			
3	80 221	楕円	67	56	18	〃	obフ	深底 深10（九I）	〃〃中
4	80 231 294 319	〃	90	75	18	〃	凹石 特殊礫	深3（新）	〃〃中
5	80 231 294	円	110	110	34	〃	凹石 obフ	深5（中初）深（新～藤）	〃〃〃
6	83	三角形	70	56	13	〃			
7	80 231	不整楕円	99	71	21	黒褐 石	敲打器	深（新・平3A）	縄中中
8	80	〃	88	75	18	暗褐	ob石核		〃
9	80	円	69	69	11	〃		深2	〃中中
80	81 94 231	〃	80	78	16	〃		深2（新）	〃〃〃
1	59	楕円	116	105	27	黒褐 石 土822切	ob原石	深	〃中初
2	59 94	不整円	90	80	31	暗褐 切I:881 石I:1263切			
3	81 231	円	90	88	18	炭混黒褐	砂岩片 obフ4	深10（中初・新・狢）	〃〃中
4	81 94 221 222	楕円	83	74	30	焼土混〃	片磨石フ	深下半½ 深6（九I）	〃〃初
5	59	円	97	95	45	黒褐	obフ4 凝灰質砂1	深5（平3A他）	〃〃中
6	81 231 319	〃	68	66	33	〃	石金鏃	深6（九I・中葉）	〃〃〃
7	81 221 287	隅丸方？	87	80	23	暗褐	打斧 ob原石・同フ	深3（新）	〃〃〃
8	81 231 294	卵	92	84	27	黒褐 石多	凹石 石皿	深5（新）	〃〃〃
9	81 287 297 221 222	円	76	68	45	礫混入黒褐	打斧 北外に石皿	深9（九I～II）	〃〃中
90	78 234	卵	76	64	10	暗褐 土891切	硬砂岩 砂岩フ	平3A½周（床上5cm）	〃〃中
1	78 222	楕円	60	55	31	〃 切土890		深14（狢）	〃〃〃
2	83	円	98	95	46	黒褐 人頭大石			
3	78	〃	68	68	16	暗褐 土897切			
4	78	〃	56	54	24	暗褐			
5	78 231	不整円	57	57	26	〃		深2（中初・新）	縄中中
6	78 297	長楕円	91	58	11	〃	石柱 緑泥岩片 石皿		〃〃
7	78	円	80	?	24	〃 切土893		深底	〃〃
8	93	楕円	118	105	28	炭多混暗褐 12住貝床下			
9	78	円	90	85	35	炭混黒褐			
900	33 222	楕円	115	85	27		obフ obUF	深（九I）	縄中初
1	74	〃	100	88	27	二段底	obフ		縄
2	74	〃	72	60	12				
3	74	半楕円	65	65	19				
4	74	楕円	110	80	7				

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm			状態	出土遺物		時期
			長径	短径	深さ		石器他	石器	
905	74	半楕円	100	90	15				
6	74	円	63	62	8				
7	74	楕円	67	55	15	石3			
8	70	〃	85	69	35				
9	70	隅丸三角	52	55	23	大石（35×30）			
10	70	卵	97	75	23		安山岩台石		
1	70 319 222	楕円	98	79	10	ピットと切合い 石	石鏃	深（九Ⅰ？）	縄中初
2	70	〃	97	78	6				
3	82 232	卵	93	82	43	二段底	緑泥岩割石 obフ	深4（新）	縄中中
4	82	〃	76	63	14				
5	82	楕円	70	54	39	一方壁穴状 二段底			
6	71	半楕円	110	?	24	石2 切土917	obフ5	深	縄中
7	71	円	125	65	43	二段底			
8	82	楕円	107	82	15	45住と関連？			平
9	71 287 231	不整円	170	158	34	人頭大石 中石(20×25)	打斧	神木2 深2(中葉)	縄中中
20	71 294 222	楕円	130	78	13	人頭大石	凹石	半完深（九Ⅰ後）	〃〃初
1	71	円	108	101	28	切土922		浅	縄中初
2	71	楕円	129	115	38	土921切			
3	71	不整楕円	128	110	18	切土924			
4	71 222	長楕円	120	65	13	土923		深	縄中初
5	71 222	楕円	95	85	15			深（土891と同一体）	〃〃中
6	70 71	〃	102	90	18			深2	〃〃初
7	70	長楕円	128	74	13				
8	70 222	不整楕円	145	137	20	小石 人頭大石4挙大		深	縄中初
9	71	〃	115	93	25				
30	71	長楕円	80	51	13	石			
1	71 232	円	82	65	17	小石3	打斧 砂岩片	深2（新 平3A）	縄中中
2	71 232	楕円	165	85	33		obフ 片磨岩片	深	〃〃〃
3	71	円	86	78	22				
4	71	楕円	100	70	20	P 有			
5	71	〃	93	80	13				
6	71	〃	93	80	16				
7	71	長楕円	132	80	20				
8	71 231	〃	183	117	42	二段底	obフ 覆土に木炭片	深9（狢）	縄中中
9	71	不整楕円	156	127	26				
40	71	半円	35	55	20				
1	71 263 232	卵	129	91	37	覆土に木炭	ob原石 obフ	諸B2 土円板（新）	縄中中
2	71 319	楕円	82	70	14	P	横刃		〃
3	82 294 222	〃	168	148	28	小ピット2	凹石	諸B 深（北陸）	〃中中
4	82	隅丸三角	83	80	30	二段底			
5	82	円	80	74	19	木炭 炭粉含			
6	82 209	楕円	165	122	32	二段底 土947切		諸B2	縄前中
7	82	不整楕円	135	70	10	切土0.46			
8	82	楕円	107	83	27			深2（狢・平3A）	縄中中
9	82	不整長楕円	190	58	18				
50	82	卵	108	91	47	P			
1	82 232	不整楕円	186	128	30	P 二段底		深2（九II）深（狢）	縄中中
2	83 223	〃	117	105	23	墓壙？		ミニ完深2深底(九Ⅰ)	〃〃初
3	83 222	円	94	93	25			深2（九Ⅰ後）	〃〃〃
4	83 287	楕円	96	73	46		打斧 obフ2	深2浅	〃〃〃
5	83 232	円	75	72	43	土956切大石L 一方袋状		深13（狢）	〃〃中
6	83	楕円	?	84	8	切土955			
7	84	不整楕円	105	85	20				
8	84	円	73	68	16				

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	土器	時期
959	83 222	不整楕円	113	100	35	切土960		深9（九II）	縄中初
60	83 232	円	81	?	14	土959切	砂岩片	深2（中初）浅2（新）	〃〃中
1	84	楕円	95	87	35				
2	84	〃	108	81	12				
3	84 222	不整楕円	143	127	49	竪穴状 P 3		深（九II）	縄中初
4	84 319	〃	128	87	27		小石匙 obフ	浅（土960接合）	〃〃中
5	84	円	110	100	18				
6	84	楕円	60	51	36				
7	84 232	楕円	62	48	43		obフ2	深（狢・平3A）	縄中中
8	84	卵	82	70	8				
9	84	長楕円	162	100	44	P			
70	84 232	楕円	102	73	31			深（新）他中初	縄中中
1	84 232	長楕円	124	80	27		obUF	深3（中初・新）	〃〃〃
2	84	円	97	90	51	P	ob小原石	深2（中初）浅2（中葉）	〃〃〃
3	84	〃	90	85	25	二段底			
4	84	楕円	132	97	72	土975切 二段底		深	縄中初？
5	84 223	〃	125	87	64	切土974	obフ	深 浅（中初）	〃中中
6	84 232	〃	114	92	35	二段底		深	〃〃〃
7	84	円	78	65	50		obUF	深（中初）深（中葉）	〃〃〃
8	84 232	長楕円	100	70	40	ピットのため二段底		浅（狢）	〃〃〃
9	84 232	不整楕円	117	110	57	ピット3ケ 三段底	obフ	深（新・平3A）	〃〃〃
80	82	楕円	141	122	26	中石7			
1		楕円	115	93	44		打斧		縄
2	82 209 210	円	110	104	44		obフ	諸B15	〃前中
3	78 232	楕円	135	125	39	暗褐 土984 985切 石	obフ2	浅（狢）深13（新）	〃中〃
4	78	〃	113	?	44	〃 切土983 焼土			
5	78 232	円	?	67	15	〃 切土983	obフ2	繊土 深1（新）	縄中中
6	78 232 319	楕円	95	75	19	〃	PS obフ	深5（狢）	〃〃〃
7	78 223 287	〃	127	118	34	〃 石	打斧 ob・砂岩UF	深10浅3（九I）	〃〃初
8	78 232	円	105	101	47	暗褐	obUF 1	深2（狢・新）	〃〃中
9	77	隅丸方	80	73	28	〃 人頭大石		深2（新以降）	〃〃〃
90	77 294	隅丸三角	48	48	29		凹石		〃
1	59	楕円	?	112	22	ローム混入暗褐 礫 切土866			
2	81 223 294	円	105	100	26	黒褐	凹石	深	縄中中？
3	59 319	〃	115	115	39	暗褐	石匙	深	縄中初
4	81	楕円	91	81	29	〃			
5	59 223	円	115	113	29	ローム粒混暗褐 切土1006		深2（篭畑）	縄中初
6	59	〃？	100	?	36	黒褐 切土865			
7	59	〃	113	110	23	暗褐			
8	81	楕円	134	?	27	〃 切土860			
9	81	円	136	110	40	黒褐			
1000	81 320	楕円	160	140	54	ローム粒混黒褐	石匙 obフ		縄
1	81 232	楕円	170	130	34	暗褐 切土1002		深（中初）完浅2 深6（狢）	縄中中
2	82	〃	110	85	31	〃 切土1001			〃中中？
3	59	円	101	93	21	〃			
4	81 233	〃	130	127	41	〃 切土860		神木 諸B 中初 中中	縄中中
5	86 233	〃	167	162	21	〃		深2	〃〃〃
6	59 233	〃	113	102	39	〃		深（狢）	〃〃〃
7	86	〃	95？	95	22	〃 切土855			
8	86	楕円	91	86	39	〃			
9	86 233	円	178	160	23	〃		深2（新）	縄中中
10	82	〃	78	76	40	〃			
1	82	〃	71	63	43	〃			

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	土器	時期
1012	82 223	楕円	95	77	28	暗褐		深（狢？）	縄中中？
3	86 233	円	123	120	40	黒褐 北より P（60×50）		深3	〃 中 中
4	86 223 288	〃	82	82	23	黒褐	打斧	浅 深2（九II）	〃 〃 初
5	86 223	楕円	111	90	27	〃	ｏｂ	深7（九Ⅰ～II）	〃 〃 〃
6	86 223 288	円	140	137	50	暗褐	打斧2 横刃	深7（九II）平3A	〃中初？
7	86	不整楕円	135	115	46	〃 大石埋没 土1255切	緑泥岩割石		近現代？
8	34 83	不整円	130	120	38	〃 切8住			
9	86 233 288	円	82	80	25	〃	打斧2	深4（中初・狢）	縄 中 中
20	50 233	不整楕円	74	66	32		ｏｂフ3	神木 中初 浅	〃 〃 〃
1	85 294	円	82	75	15	一方摺鉢状 二段底	乳石斧		縄
2	85	楕円	?	60	12	周囲にP（深さ24cm）			
3	85 224	〃	124	100	14	P（深22cm）	ｏｂフ	深5（九II）	縄 中 初
4	85 224 294	〃	135	110	23	石（20×30）～挙大10	凹石3	深80 浅2（九II）	〃 〃 〃
5	50 224	〃	82	68	12		砂岩フ ｏｂフ	深（九II？）	〃 〃 〃
6	50	長楕円	175	98	18	土1030切	ｏｂフ		〃
7	50	楕円	96	80	16				
8	84	〃	88	63	11				
9	84	長楕円	127	68	11				
30	50	楕円	?	86	10	切土1026			
1	50	〃	92	84	11				
2	50	楕円	88	70	11	上面 石（25×30）1			
3	50	〃	85	65	7				
4	50 233	卵	101	80	8			深（新）	縄 中 中
5	50	長楕円	133	88	9				
6	56 233	〃	100	65	17	pあり（深21cm） 二段底	ｏｂフ	深15（新）	縄 中 中
7	56	円	93	85	13			深	〃中初？
8	56 224	楕円	112	93	11		ｏｂフ	浅（九II～狢）	〃〃〃〃
9	56	長楕円	90	65	17	土1040切 人頭大石			
40	56	楕円	105	96	14	切土1039			
1	56	楕円	65	50	11	人頭大石1		深	縄 中 初
2	56	〃	95	70	23			深3（縄中中）土師器方	平
3	56	〃	85	70	21				
4	85 288 320	〃	?	98	14	P（深44cm）切合	スクレイパー2 ドリル ハンマー 石匙	土	縄中初？
5	85 224	〃	75	52	38			深（九Ⅰ）	縄 中 初
6	85 224	円	60	53	20	切土1047	ｏｂフ	深	〃 〃 〃
7	85 233	楕円	132	100	16	切土1046 壁にPあり		深3（中初・平3A）	〃 〃 中
8	85	〃	101	75	19	土1049切			
9	85 224 320	〃	148	112	21	切土1048・1090	スクレイパー	深8（篭畑III）	縄 中 初
50	16 224 288	〃	125	117	19		打斧	浅（九Ⅰ）	〃 〃 〃
1	16 224	長楕円	125	87	28		ｏｂフ	深4浅（九Ⅰ・狢）	〃 〃 中
2	16	円	90	80	27.5				
3	16	〃	105	100	36.5				
4	16	〃	110	100	40	暗褐			
5	16	楕円	120	105	21.5	〃 石5			
6	16	円	78	72	23.5	〃			
7	16 295	不整円	154	158	39.5	〃	凹石	灰釉片	平
8	16	楕円	142	?	31.5	〃 石			
9	16 224 288	〃	95	72	20	〃 切土884	打斧2	深（九Ⅰ）	縄 中 初
60	16 224	〃	94	83	13.5	〃 土1210切 検出面に石		深2（九Ⅰ・新）	〃 〃 中
1	87	楕円	122	94	34.5	〃 人頭大石			
2	87 224	〃	99	94	16	〃		深（九II）	縄 中 初
3	87	〃	89	82	17	〃 切土882			
4	87	円	78	77	31.5	〃			

番号	図版番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	出土遺物 土器	時期
1065	16	長楕円	126	83	17.5	暗褐			
6	16	楕円	90	70	19.5	〃			
7	87	〃	80	70	12	〃 検出面異る 切土868			
8	87	円	72	70	27.5	〃 大石埋没			
9	16	長楕円	110	73	21.5	〃 石	ｏｂフ		
70	60	円	83	80	27	〃 切土1260			
1	60	不整楕円	91	82	31.5	〃			
2	36 233	楕円	76	65	22	〃		諸B（貉）	縄中中
3	60	〃	115	82	12	〃 石			
4	60	〃	74	67	14	〃 底凹凸	炭化種子	土（多）	
5	86	〃	?	75	28	〃			縄中
6	86	不整楕円	73	65	18	炭混暗褐			
7	86 224	楕円	112	102	34	炭粉 〃 土448切		深（九Ｉ）	縄中初
8	60	円	81	78	15	暗褐 礫			
9	59	〃	65	56	24	〃 数コ平石の下に礫			
80	86	不整楕円	74	60	65	〃 石 切土448		深2	縄中中
1	59	円	78	76	24	暗褐			
2	86	楕円	85	72	23	炭粉混暗褐 上面礫3		諸Ｂ1	縄前中
3	86	円	58	55	16	暗褐 切土1086			
4	86	〃	104	102	16	〃			
5	86	楕円	83	77	37	〃			
6	86	〃	82	72	27	〃 土1083切			
7	59	〃	80	69	36	黒褐			
8	60	〃	55	44	22	〃			
9	60	〃	120	110	14	暗褐 石（45×20）			
90	85 224 225	〃	120	93	19	人頭大石2土1049切石	ｏｂフ2	深3（九Ｉ後）	縄中初
1	85	〃	123	96	27				
2	85 233	〃	108	92	19			深	縄中中
3	85	〃	140	120	28				
4	85	〃	96	87	18	暗褐			
5	85	〃	100	74	15				
6	85 225	〃	80	65	23		ｏｂフ	深2（九Ｉ）	縄中初
7	85 233	〃	110	100	34			深（新～藤）	〃〃中
8	85	〃	140	115	28	凹凸あり 土1099・1100切	ｏｂフ	深	〃〃〃
9	85	長楕円	?	75	11	切土1098Ｐ			
1100	85	円	112	90	27	切土1098 壁にP(深36)	ｏｂフ	深	縄中
1	56	不整円	114	108	15				
2	85	楕円	90	68	10			深3	縄中初
3	65	不整円	75	70	12				
4	56225	楕円	121	100	23	石(38×8×9) 小P2		深 椀形土13(九Ｉ後)	縄中初
5	56 295 233	〃	126	107	18	Ｐ（深26）	凹石 P.S	深6（中初・新・平3Ａ）	〃〃中
6	56	円	73	70	9				
7	56 225 263	楕円	117	86	22	Ｐ石	土製円板（中初）	深2（九Ｉ後）	縄中初
8	56	〃	92	81	20	Ｐ2			
9	56 225	〃	82	75	17	二段底 Ｐあり(深15)		深	縄中初
10	56	〃	110	94	20		ｏｂフ	深3（中初・新）	〃〃中
1	84	長楕円	95	78	18			深	〃中
2	84	〃	117	102	16				
3	84	円	92	90	13				
4	84	長楕円	128	75	12		ｏｂフ	深	縄中
5	84	楕円	98	80	16		ｏｂフ		縄
6	88	〃	96	76	16				
7	88	円	80	77	21				
8	88 210	楕円	140	105	15	土1120切		諸Ｂ	縄前中

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	出土遺物 土器	時期
1119	88 233	円	95	90	17		ｏｂフ	深	縄中中
20	88	不整楕円	80	70	20	切土1118			
1	88	楕円	87	66	18				
2	88 225	〃	86	80	19			深３（篭～九Ｉ）	縄中初
3	88	円	98	97	13				
4	88 225 295	楕円	85	69	16	人頭大石（10×５）	凹石	深 浅４（九Ｉ）	縄中初
5	88	〃	105	79	16				
6	88	楕円	102	82	16	土1127切 Ｐ（深10cm）			
7	88	円	103	?	15	切土1126			
8	88 233	楕円	100	72	16			ミニチュア土器底２個	縄中中
9	88 233	〃	100	93	28	底凹凸 壁Ｐ(深25cm)		深１（平３Ａ？）	〃〃〃
30	88 225	〃	128	105	20			浅２（九Ｉ）	〃〃初
1	60	円	86	85	12	Ｐ２			
2	60	楕円	113	75	33	Ｐ 二段底			
3	60	〃	90	78	19	Ｐ 一方竪穴 二段底			
4	60	不整円	92	85	17			深	縄中初
5	89 225	〃	107	105	23		ｏｂフ	深２（九Ｉ）	〃〃〃
6	89 233	長不整楕円	130	73	40	Ｐ		深（狢）	〃〃中
7	89 233	不整楕円?	187	?	34	Ｐ	ｏｂフ５	有鍔付（平３Ａ・新・船元）	〃〃〃
8	89 233	〃	123	115	23	緑泥岩片石（35）土1139切	ｏｂフ	深９（九II・狢）	〃〃〃
9	89 225	〃	125	105	26	切土1138・石		深（九Ｉ）	〃〃初
40	60	隅丸方	100	87	16				
1	60	楕円	100	77	26				
2	87	円	87	79	20				
3	89	楕円	90	70	17				
4	89 233	〃	107	83	17		ｏｂｕＦ	深３（九Ｉ・狢）	縄中中
5	87	〃	135	117	36	Ｐ			
6	87	不整楕円	85	78	14				
7	87	楕円	115	85	15	石（25×25）			
8	60	〃	110	97	21	土1149切 小Ｐ			
9	60	円	135	130	18	切土1148			
50	60 233	〃	121	115	28			深⅔・深５（狢）	縄中中
1	87	楕円	85	76	25				
2	60	不整円	68	65	44	Ｐ 二段底			
3	87	楕円	76	48	17				
4	87	隅丸方	80	76	34	Ｐ			
5	87	楕円	90	72	20				
6	87	卵	78	57	18				
7	87 225	円	96	95	20		ｏｂフ	深½（九Ｉ後）	縄中初
8	87 225	不整楕円	128	100	40			深２（九Ｉ）	〃〃〃
9	87	長方	148	83	19				
60	89	円	82	81	22				
1	89	楕円	97	63	69	大石（45×35）			
2	89	円	60	55	12				
3	89	楕円	83	74	15				
4	89	円	100	95	20				
5	89	楕円	82	73	14				
6	89	円	77	77	24	小Ｐ２			
7	89	卵	90	77	17				
8	89	円	93	93	23				
9	89	楕円	76	57	16				
70	89	円	185	184	25				
1	89 90	〃	102	98	22				

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	出土遺物 土器	時期
1172	90 233	楕円	93	85	18			深7（中初・新）	縄中中
3	90	卵	84	74	16				
4	89 233	円	?	150	25	P2 土1137切合	obフ	深4（中初・中葉）	縄中中
5	90 233	楕円	?	84	17	壁上に大P（32cm）		深（狢）	〃〃〃
6	90	円	114	109	14				
7	90	楕円	100	80	22	凹凸有			
8	90 225	円	105	104	15	人頭大石 土1179切 石（20×30） 2		深2（九I）	縄中初
9	90 225	〃	72	65	18	切土1178		深2（九II）	〃〃〃
80	90	〃	90	85	32	二段底 土1181切			
1	90	楕円	125	93	13	切土1180			
2	90	〃	84	67	15				
3	90	不整楕円	96	75	21	石			
4	90 233	楕円	110	87	17		obフ	深（狢）	縄中中
5	90 225	〃	103	88	18			深	〃〃初
6	90 225 226 295	〃	115	97	23	土1187切 P 石	打斧 obフ4	深上半 深20（中初・狢）	〃〃〃
7	90 226	〃	125	102	22	切土1186		深2（九I）	〃〃〃
8	90	〃	84	74	43				
9	90	卵	73	65	11				
90	90	〃	70	57	13				
1	90	楕円	107	94	14				
2	90	〃	107	95	20				
3	90 233 320	卵	116	107	31	拳大石 人頭大石	石鏃	有鍔付2	縄中中
4	87	円	70	70	20				
5	89	楕円	155	130	35				
6	92	〃	100	76	22				
7	92	〃	103	86	22		obフ		縄
8	92	卵	95	76	35	P 切15住			
9	91 226	楕円	166	110	18			深2（九I）	縄中初
1200	91	円	87	85	17				
1	91	楕円	75	64	14	黒褐			
2	91	不整楕円	102	93	25	〃 P			
3	91 226 288	楕円	95	83	15		打斧 炭化ドングリ1	深	縄中初
4	91	〃	110	98	26	人頭大石			
5	91	不整円	130	120	34	人頭大石			
6	91	楕円	117	100	18				
7	91 226	円	114	107	33	土1246切 小石		浅（九I）	縄中初
8	91 210	楕円	155	?	45	P半未掘		黒浜	〃前中
9	91	卵	137	110	23				
10	91	楕円	125	110	15	切土1261（新）			縄
1	91	〃	87	72	12				
2	92	円	80	75	22	二段底			
3	91	〃	130	125	17				
4	88 288	卵	90	72	29		横刃	深	縄中初？
5	88	円	68	63	25				
6	88	卵	93	78	18				
7	91 233	円	74	67	15			深（狢）	縄中中
8	88	楕円	88	51	22	拳大石			
9	88	〃	90+X	93	16	切5住		深	縄中中？
20	88 226	〃	90	72	16		obフ	深5（篭畑）	縄中初
1	77	楕円	80	75	11				
2	88 288	円	82	83	15		打斧	深	縄中中
3	77	卵	97	82	10				
4	77	楕円	100	83	16	土1242切			

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 土器他	出土遺物 石器	時期
1225	77	楕円	115	?	13	土1242切 切土837 人頭大石 拳大石			
6	77 288	三角	55	52	14	石 土1232切	打斧		縄
7	88 226	円	66	61	10	炭化物2点（径1cmと6mm） 拳大1		深（九Ⅰ）	縄中初
8	77	楕円	98	79	12				
9	93	円	77	74	10				
30	93	楕円	93	86	10	大石(55×35)土1243切			
1	91	〃	91	90	12	石（径30～拳大） 6		周辺より土器	
2	77	卵	125	97	17	切土1226 土1253切	ｏｂフ	浅	縄中中
3	93	楕円	80	65	14				
4	88	円	74	74	14				
5	93 226	不整楕円	85	67	16			黒浜 深3（九Ⅰ）	縄中初
6	93 226	不整円	101	82	29		ｏｂフ	深7（九Ⅰ）	〃〃〃
7	93 226	楕円	92	85	12	土1248 土1249初	ｏｂフ	深 浅2（九Ⅰ？）	〃〃〃
8	93	〃	82	60	11			深	
9	77 320	円	77	75	49	切土3	石鏃3		
40	93	〃	67	60	9				
1	77 233 288	楕円	112	101	39	アワ状炭化種子塊	横刃	深7（狢・平3A・新）	縄中中
2	77 288	円	118	?	17	切土1224・1225	横刃	深	〃〃〃
3	93 226	不整円	115	100	27	切土1230		深	〃〃初
4	93	楕円	86	74	12	土1250切			
5	91	不整楕円	93	82	12				
6	91	楕円	92	67	15	切土1207 小石4		土	
7	93	〃	?	68	13	切5住			
8	93	〃	100	78	14	切土1237 土1250切			
9	93	不整円	157	155	21	切土1237			
50	93	〃	123	?	14	切土1244・1248			
1	93	楕円	112	78	18	拳大1		深	縄中
2	77	円	93	85	38	?			
3	77 288	楕円	105	82	14	切土1・1232			
4	59	円	133	132	24				
5	86	不整円	75	65	37	切土1077 石1 石埋没			近・現代？
6	77	円	108	100	40				
7	82	〃	75	73	20	石1 切土1002 アワ状炭化種子塊		深2（平3A）	縄中中
8	94	楕円	75	68	14	礫（40×10）			
9	94 226	円	?	86	17	切土884 石		深 浅1（九Ⅰ）	縄中初
60	94	〃	90	80	22	土1270切			
1	86 234 288	円	107	100	27	土1210切	刃器	半完深 他破片(新)	縄中中
2	94	〃	106	106	35				
3	94	楕円	105	93	17	切土882	横刃		縄
4	94	〃	94	80	22				
5	94	〃	128	113	28		砂岩フ		縄
6	83 234	〃	116	95	24		ｏｂフ	深	縄中中
7	80 83	円	123	120	25	切土868（検出異）			
8	83	不整楕円	106	82	35	大石（65×55×40）	ｏｂフ	深	縄中初？
9	83 226	円	105	103	21	人頭大石		深2	〃中初
70	94	楕円	80	75	26	切土1260			
1	88	円	105	98	15			土	縄
2	82 234	〃	90	85	16			深5（新）	〃中中
3	86 234	〃	84	73	19	人頭大石		深（新）	〃〃〃
4	82 234	楕円	?	85	23	切土846 木炭 クリ炭化粒多		深（新）	〃〃〃
5	92 235	円	155	140	53	拳大2 人頭大石		土器（諸B）	〃前中
6	92 235	〃	93	89	36	大石～拳大数			
7	92	〃	117	109	36				
8	92 235	楕円	86	72	36				

番号	図番号	プラン平面	大きさ cm 長径	短径	深さ	状態	出土遺物 石器他	出土遺物 土器	時期
1279	92 210	円	100	97	46	平石下に数個礫	ｏｂフ	深10（諸B）	縄前中
80	93	〃	108	106	49	人頭大石			
1	93	円	104	98	26				
2	94 236	〃	200	195	29				
3	94	楕円	98	85	18	小石多 拳大4			
4	93 234	〃	118	89	52	黒土	ｏｂフ	神木 深14（九II）	縄中初
5	93 226 320	〃	91	75	30	暗褐 切側溝	玦状耳飾	深4（九I）	〃〃〃
6	93 226	不整円	98	90	14	黒土 〃		深2（九I）	〃〃〃
7	93	楕円	60	52	11	暗褐 土1288切			
8	93	不整円	75	70	11	〃 切土1288			
9	93	不整楕円	81	55	22	黒褐			
90	93	楕円	?	75	20	黒土 切19住			
1	93	〃	90	75	29	黒褐 土1292切	凹石		
2	93	方	?	55	19	暗褐 切土1291	フ	深	縄
3	93 234 295 320	隅丸三角	85	73	17	人頭大石2	石匙 凹石	深10（九I）	〃中初
4	94	楕円	115	85	50		打斧	深3（新 平3A）	〃〃中
5	50	卵	152	120	67				
6	49	楕円	104	84	47				
7	58	卵	109	80	31	土350切			
8	58	不整楕円	95	88	34				
9	58	円	67	65	23				
1300	57	〃	83	78	19				
1	50	円	79	73	30				
2	25	不整楕円	176		29	20住重			
3	25	円	77		24	20住重			
4	25	楕円	70	65	15				
5	30	〃	160	143	31		緑泥片岩 ｏｂフ3	深3（中初・平3A）	縄中中
6	27 226 295	〃	118	90	15	石	凹石 ｏｂフ 凝灰質砂岩	深6（九I）	〃〃初
7	6 226	円	78	77	37			深2	〃〃〃
8	14 226	〃	125	110	27	石 P 30住切るが付属施設？		深（九I後）	〃〃〃
9	14 94 226	楕円	105	93	38			深3（九I）	〃〃〃
10	32 295	〃	80	53	44	36住の施設か	砂岩片 凹石		〃
1	32 234 228 295	円	73	73	14	36住切	打斧 横刃2 凹石1	深5（平3A・船元II）	〃中中
2	33	卵	90	80	8				
3	95	隅丸方	50	45	10	礫群中黒褐色土の落込			
4	95	楕円	82	56	22	〃 〃		土	縄
5	95 236	〃	147	124	11	〃 〃 壁不明確		中初片6～8	〃中初
6	95	〃	62	47	8	〃 〃			
7	95	〃	115	75	11	〃 〃 壁不明			
8	95	〃	108	94	7	〃 〃 検出面で遺物		深50（九I）	縄中初
9	95	〃	123	87	11	〃 〃			
20	95	〃	125	89	11	〃 〃			
1	96	楕円	87	73	6	〃 〃			
2	96	〃	125	74	28	〃 褐色土落込壁不明			
3	96	〃	132	97	22	〃 黒褐色土落込			
4	96	〃	113	75	31	〃 〃			
5	96	〃	109	90	18	〃 〃			
6	96	〃	166	140	16	〃 〃			
7	96	隅丸方	75	61	15	〃 〃			
8	96	楕円	67	63	8	〃 〃			
9	95	方	100	95	38	〃 方形に立石 暗褐色土落込 縄後配石墓類似			
30	95	楕円	125	105	16	〃 上部礫間に土器片 黒褐色土		中初20	縄中初
1	95	〃	75	60	9	〃 黒褐色土			

付表２　大石遺跡出土石器一覧表

(1) 住居址（遺構別）
(2) 土　坑（　〃　）
(3) 遺構外（器種別）　①打製石斧　②横刃型石器　③凹　石　④その他
(4) ピエス・エスキーユ（遺構別）

凡　　例

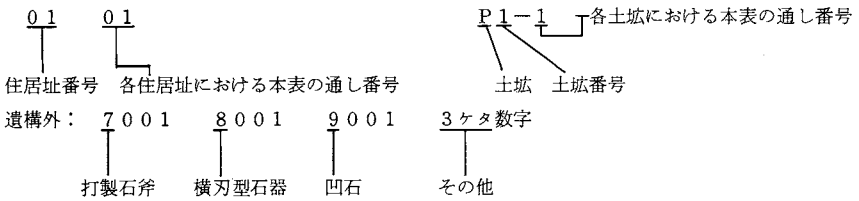
1　本表に収載した石器は調査者が、各遺構にともなうと判断したものであるが、遺物の取り上げ方法は調査途上の種々の制約により一定していない。そのため、床面出土石器以外は、何らかのセット関係を示すものとは、断言できない。

2　石器は整理当初に器種認定したものを以下の順に通し番号を付してならべた。器種分類は後に変更したものもある。

1）打製石斧　2）横刃型石器　3）乳棒状石斧　4）定角石斧・小形磨製石斧
5）石錐・石皿・刃器　6）凹石・磨石　7）石鏃　8）石匙　9）スクレイパー類
10）ドリル　11）他

以上の順であるが、多少の前後がある。

3　図版中の遺物番号は次のように示されている。



4　計側値は次のように示され、長さはcm、重さはｇを単位とする。

長・巾・厚：最大値　　刃巾：刃部と認定した部分の両端間の直線距離
重：大形品は基本的には５ｇ単位、小形品は0.1ｇ単位
刃部角：10°単位で切り込まれたプラスチック板を刃部中央に差し込み、刃端がそれに接しうる最低の角度。

5　各器種別の類型は本文中で器種ごとに示してある。

6　折損、使用痕、石材の類型と略称は本文中に示してある。折損の欄で、――はAと同義（完形品）、他の欄で――は観察不能を示す。空欄になっているのは次のようなものである。

使用痕：認定できなかったもの（ただし、土坑出土石器は観察していない）
石材：不明

7　註記は調査過程を示していると考えられるので、一部に不備もあるが、そのまま記載した。次のように示される。

ＡＲ66：ＡＲ66グリットから出土したが、調査者が当該遺構にともなうとしたもの
１－29：１号住居址から出土した遺物で、29番という番号が発掘時に与えられたもの
１住フ：１号住居址覆土から出土したとされたもの
上、中、下、Ⅰ、Ⅱは土層名　ユは床面　Ｐはピット　生は生活面　――は註記がないことを示す。

8　遺物番号の前に「○」を付したものは実測図を収載したものであり、番号が丸数字になっているものは床面あるいは生活面の遺物として断定できるものである。

9　遺物出土図中の石器に付された番号は本表の註記欄にある番号であり、石器の通し番号ではない。

(1) 住居址出土石器

1号住

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
1	打石斧	ⅡA	10.3	5.7	5.5	2.0	145	B_1	—	ss 3B	AR—66
②	〃	ⅠC	(10.6)	5.6	—	1.8	180	〃	—	Gs 1A	1—29
3	〃	ⅡC	(9.4)	4.8	—	1.0	90	〃	—	〃 1B	1—122
4	〃	ⅢBa	11.1	—	4.6 (70)	1.6	120	C_2	—	〃 2B	AS—66Ⅱ
5	〃	ⅡDa	(9.9)	5.2	2.9 (60)	1.7	130	B_2	a 1	ss 3A	1住フ
○6	〃	ⅡB	(11.6)	5.8	—	1.1	115	B_1	—	Gs 1B	1—70
○7	〃	ⅣAb	9.2	5.4	4.9 (30)	1.1	70	A	—	ms 1A	1住フ
8	〃	ⅢCb	(6.0)	4.7	4.7 (40)	1.0	60	B_2	a 1	Gs 2B	〃
9	〃	ⅡDb	(9.6)	4.2	3.1 (60)	1.8	90	C_1	—	〃 3B	AR—65—Ⅰ
10	〃	ⅡBb	(7.9)	5.6	4.8 (30)	0.9	65	B_2	a 1	〃 1B	1—12
⑪	〃	ⅣCa	(9.9)	4.1	4.1 (50)	1.2	100	A	b 2	〃 2B	1—98
○12	〃	ⅢCc	10.7	4.8	2.4 (30)	1.4	95	〃	—	〃 〃	1—117
⑬	〃	ⅢCa	11.4	4.6	3.9 (60)	1.1	85	〃	—	〃 3B	1—100
14	〃	ⅣCc	9.6	4.3	4.3 (50)	0.9	50	〃	a 2	〃 2A	1—36
15	〃	ⅤCc	7.5	4.0	3.7 (40)	0.7	30	C_2	—	〃 2B	1—55
○16	〃	ⅡCc	12.1	5.2	5.2 (70)	1.5	140	A	ab2	〃 2A	1—108
17	〃	ⅣDa	10.0	3.5	3.5 (60)	1.6	80	〃	—	〃 1B	1住フ
○18	〃	ⅣDc	11.0	3.6	3.1 (40)	1.4	80	〃	abde2	〃 〃	AR65—1
○19	〃	ⅢAa	10.8	4.3	4.0 (50)	1.2	80	〃	a 2	〃 〃	1—131
20	〃	ⅢBb	10.8	4.4	4.4 (70)	1.4	90	〃	abcde2	〃 1A	1—11
○21	〃	ⅢDb	13.0	4.6	3.7 (80)	1.9	150	A	a 1	Gs2A	1—90
○㉒	〃	ⅣCa	9.2	4.5	3.4 (40)	1.0	60	〃	—	ms1A	1—109
○23	〃	ⅢDc	11.9	3.9	3.6 (40)	1.8	95	〃	局部磨製	ss1A	1—71
○㉔	〃	ⅣAa	8.8	4.5	4.5	1.2	75	〃	b 2	ms1A	1—98
○㉕	〃	ⅤBb	8.0	4.4	3.7 (50)	0.9	40	〃	—	Gs2C	1—86
26	〃	ⅢBa	12.9	4.5	3.7 (30)	2.3	165	〃	—	〃 3A	AR65—1
㉗	〃	ⅢCc	10.9	5.5	4.7 (50)	2.0	140	〃	—	〃 3B	1—94
○28	〃	ⅣAa	10.1	4.8	4.4 (60)	1.5	100	〃	abc2	〃 2A	AS66Ⅱ
○29	〃	ⅣAb	9.4	4.6	4.6 (40)	1.4	65	〃	—	ss2B	1—56
○30	〃	ⅣBa	9.2	4.9	4.0 (80)	1.9	110	〃	—	〃 〃	1住フ
○31	〃	ⅣDb	11.6	3.5	2.1 (60)	1.8	115	〃	a 2	Gs3A	1—116
○32	〃	ⅢD	(9.4)	3.7	—	1.0	45	C_1	—	〃 1A	1住フ
○33	〃	ⅣCc	10.1	5.5	4.9 (60)	1.6	130	A	—	ss2A	AS66Ⅱ
○34	〃	ⅣBc	8.4	4.2	4.2 (60)	1.2	70	〃	abc2	Gs2A	AQ62Ⅰ
35	〃	ⅤCa	9.0	3.5	2.6 (50)	1.0	45	〃	—	〃 2B	AS66Ⅱ
36	〃	ⅢC	(9.9)	5.0	—	1.4	115	C_1	—	Bs2B	AQ62—Ⅰ
37	〃	D	(7.1)	4.3	—	2.1	100	D_3	—	Gs2A	AS66Ⅱ
38	〃	ⅢCc	12.0	4.7	3.9 (40)	1.8	120	A	—	ss2A	1—49
39	〃	ⅢBb	9.2	5.0	— (40)	1.1	55	C_1	—	〃 1C	AR65—1
㊵	〃	ⅢCc	10.4	4.1	3.8 (40)	1.6	75	A	—	Bs1A	1—133
41	〃	ⅡC	(8.2)	(5.0)	—	1.8	110	C_1	—	Gs2A	AR65
42	〃	ⅣA	(7.2)	3.6	—	0.8	30	B_1	—	ss1A	AS66Ⅱ
43	〃	ⅣB	(8.5)	4.1	—	1.5	75	〃	—	Gs2B	AR65
44	〃	Ⅴ	(5.4)	3.5	—	1.2	25	〃	—	ss1A	1住フ
45	〃	ⅢDa	(4.9)	4.0	3.5 (60)	1.0	30	B_2	abc2	Gs3A	AQ62Ⅰ
46	〃	ⅤB	(7.0)	4.1	—	1.0	45	B_1	—	〃 〃	—
47	〃	ⅡC	(6.2)	4.7	—	1.6	80	〃	—	ss2A	1住フ
48	〃	ⅢD	(8.3)	3.9	—	2.1	85	〃	—	Gs3B	AR66

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
49	打石斧	a	(3.3)	7.2	5.0 (70)	1.7	65	B_2	a1	Gs2B	—
50	〃	—	(4.4)	—	—	0.9	25	B_1	—	〃〃	1住フ
51	〃	ⅢC	(10.6)	3.5	—	1.0	50	C_1	—	〃〃	1住フ
52	〃	ⅡD	(6.8)	3.8	—	2.1	60	B_1	—	〃〃	1住フ
53	〃	C	(7.1)	5.1	—	1.2	60	—	—	ms1C	AQ62Ⅰ
54	〃	〃	(5.7)	5.0	—	0.9	50	D_3	—	〃1A	AT65Ⅰ
55	〃	〃	(5.6)	4.5	—	0.8	30	—	—	Gs1B	—
56	〃	—	(3.3)	4.7	—	1.0	25	B_1	—	ms1B	1住フ
57	〃	—	—	—	—	1.4	35	C_2	—	Gs2A	—
58	〃	—	—	—	—	2.1	70	D_1	—	〃2C	1住フ
59	〃	ⅡC	(11.4)	5.1	—	2.2	130	C_1	—	〃2A	AS66Ⅱ
60	〃	ⅣD	(5.9)	3.3	—	1.2	30	B_1	—	〃1A	—
○61	〃	ⅤDc	9.0	2.8	2.4 (20)	1.0	25	A	—	ms1C	—
○62	横刃	ⅠA	9.6	4.9	8.7 (60)	1.3	80	?	a2	Gs1B	1住フ
63	〃	ⅤD	6.2	5.7	6.2 (40)	0.7	35	—	—	〃2C	1住フ
○64	〃	ⅡC	6.4	4.6	6.2 (70)	1.2	50	—	a2	ss2A	AQ62Ⅰ
65	〃	ⅢC	6.7	4.7	6.6 (20)	0.7	40	—	—	Gs1C	1住フ
66	〃	ⅡC	6.6	5.5	5.4 (20)	1.1	40	—	—	ss2A	1—78
○67	〃	ⅤC	5.9	5.0	5.5 (40)	1.4	50	—	a2	Gs2B	1住フ
68	〃	ⅣD	8.1	4.4	6.7 (20)	0.8	35	—	—	〃〃	1住フ
69	〃	ⅢC	5.6	3.3	4.2 (40)	0.9	25	—	a1	〃1B	AR65
70	〃	ⅢA	10.5	4.4	9.4 (20)	0.6	40	—	—	〃2B	AR66
71	〃	ⅢD	8.9	5.3	7.8 (40)	1.1	60	—	—	〃1B	AS66
○72	〃	ⅢC	8.1	4.6	6.6 (10)	0.6	30	—	alf2	Bs1A	1—89
○73	〃	ⅠA	10.9	4.3	10.6 (30)	1.1	60	—	a1	Gs2A	1—18
74	〃	ⅡD	6.2	5.5	5.5 (30)	1.2	70	—	〃	Gb1A	1住フ
○75	〃	ⅣB	6.2	2.9	6.2 (60)	0.6	20	—	a2	Gs1B	AV71
○76	〃	ⅢC	5.5	3.2	5.5 (40)	0.8	20	—	a1	〃1A	AQ62Ⅰ
○77	〃	ⅠC	5.3	3.3	5.3 (60)	1.1	25	—	—	Ch1A	—
78	〃	ⅡC	6.6	4.7	6.2 (30)	1.4	45	—	ab2	ss1B	1住フ
79	乳石斧	Ⅱ	(7.7)	(4.0)	3.4	—	50	E_2		Gs	AQ62Ⅰ
80	〃	ⅠA	(13.8)	5.0	2.0	4.3	465	B_2		〃	1—42
81	〃	Ⅰ	(10.5)	(4.5)	—	—	95	E_1		〃	1住フ
82	〃	ⅠA	(13.9)	(4.8)	—	(3.7)	335	B_1		〃	1—32
83	〃	〃	(13.5)	5.3	—	3.9	390	C_1		〃	1住フ
84	凹石	E	11.6	7.8		5.8	665	—		Ab	AR65—1
85	〃	J	9.7	9.3		4.7	420	B		〃	BR56
86	〃	H	8.9	7.7		4.8	335	—		〃	1住123
87	〃	I	7.0	5.8		4.4	175	—		〃	1住66
88	〃	B	11.8	6.0		4.7	485	—		〃	1住121
89	〃	A	10.3	5.5		3.9	310	—		〃	1住125
90	〃	F	9.1	5.3		4.4	310	B		〃	AR65—1
91	石錘？	I	5.5	5.3		2.0	70	—		〃	1住フ
92	凹石	D	10.1	6.1		3.4	255	—		〃	1住フ
93	〃	G	9.1	8.1		6.0	525	—		〃	1—46
94	〃	D	10.4	6.0		3.8	315	—		〃	1住フ
95	〃	A	9.3	7.0		4.0	380	—		〃	1—4
㊻	〃	E	11.6	8.8		5.9	790	—		〃	1—120
97	〃	D	11.3	7.4		4.9	505	—		〃	1—33
98	〃	E	12.3	8.3		6.2	905	—		〃	1住フ
○㊾	石鏃		1.8	1.6		0.4	0.95	—		ob	1住67

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
○100	石鏃		1.4	1.2		0.25	0.25	—		ob	1住87
○101	〃		2.0	1.4		0.25	0.55	—		ch	1住88
○102	〃		2.0	1.6		0.25	0.55	—		ob	AR65
○103	〃		(1.9)	(1.4)		0.5	0.9	先・両脚		〃	AS65
○104	〃		2.7	(2.4)		0.6	3.0	片脚		〃	AT65
○105	スクレ		3.9	2.2		0.8	6.5	—		〃	1住フ
○106	〃		2.8	1.8		0.8	3.4	—		〃	〃
○107	〃		3.0	2.2		0.9	4.0	—		〃	〃
○108	〃		3.2	1.1		0.7	2.6	—		〃	AT66
○109	〃		2.5	0.9		0.3	0.8	—		〃	1住フ
○110	ドリル		3.3	1.8		1.2	3.9	—		〃	AR65
○111	〃		2.0	0.6		0.4	0.5	—		〃	〃

2号住

①	打石斧	V	(3.3)	—	—	0.7	10	B_1	—	Gs2A	2住A区ユ
○2	〃	ⅢBa	10.3	4.5	2.8 (60)	1.2	90	A	a1	〃 〃	2住フ
3	〃	ⅡB	12.6	5.6	—	1.3	120	C_1	—	〃 〃	2住—20
4	〃	VBc	9.4	4.1	3.1 (50)	1.6	80	A	de2	〃1A	2住フ
5	〃	ⅢBc	10.0	4.7	3.6 (50)	1.1	75	〃	a1	ss2A	2住Iフ
○⑥	〃	VAc	8.5	4.0	3.6 (60)	1.1	45	〃	a2	Gs1A	2住A区ユ
7	〃	VC	10.3	5.1	—	1.0	60	C_1	—	〃3A	2住Iフ
8	〃	ⅣCb	10.7	4.9	4.8 (60)	1.7	105	A	—	〃2C	AS72ユ
○9	〃	ⅣDc	10.3	3.0	1.6 (30)	1.3	70	〃	a2	〃1A	2住P1中層
10	〃	—	9.1	—	— (60)	1.8	50	C_2	ab3	〃2B	AR72—1
○11	横刃	ⅡC	9.5	4.2	5.2 (20)	0.7	30	A	a1	Bs1A	2住B区フ
○12	〃	ⅠD	9.8	4.9	4.7 (50)	1.2	70	〃	〃	Gs1A	AT72—1
○13	〃	ⅠC	8.1	5.2	7.6 (30)	1.4	65	—	ade2	〃2A	2住B区フ
○14	〃	ⅢC	(6.8)	4.4	— (20)	0.7	25	—	a1	〃1A	2住フ
15	〃	ⅠC	(6.9)	4.6	4.0 (20)	0.8	30	—	—	〃3B	2住Iフ
16	〃	〃	8.1	4.7	8.5 (30)	1.2	60	—	a1	〃2B	AT72I
17	〃	VB	7.1	3.7	5.1 (30)	0.6	20	—	a2	〃1A	2住フ
18	〃	ⅢC	8.0	6.5	6.5 (50)	1.6	85	—	—	ss2B	AS72I
19	乳石斧	ⅠA	(18.4)	5.4	—	4.4	700	B_1		Gs	2住18
○20	定角石斧		12.4	4.1	2.8	1.8	160	—		〃	2住23
○21	石錘		7.1	3.1		2.7	85	—		〃2A	AT72—1
○22	石皿		20.5	15.5		5.3		B_1		Ab3B	2住ユ21
○23	刃器	ⅣA	14.5	4.0	9.5 5.3 (30)	0.8	60	—	a2	Gs2A	2住フ
24	乳石斧	I	(5.8)	(4.1)	—	(3.1)	100	B_1		〃	—
25	凹石	D	11.7	7.0		4.8	470	—		Ab	2住22
○26	石鏃		1.8	1.3		0.3	0.4	—		ob	2住フ
○27	ドリル		2.4	0.6	—	0.4	0.65	先端		〃	〃
○㉘	〃		1.7	1.9	—	0.6	2.0	〃		〃	2住Aユ
○29	ドリル?		4.1	2.2	1.1	1.0	8.7	—		〃	2住フ
○30	台石		44.8	27.4	—	10.6	—	—		Ab	2住15

3号住

○1	打石斧	ⅠCc	14.2	7.1	6.7 (30)	2.2	300	A	a1	Gs3B	3住—8上
2	〃	ⅡAb	12.5	5.0	4.2 (20)	2.7	195	〃	—	ss3A	3住—43下
3	〃	ⅢBb	(9.6)	5.4	3.6 (60)	1.2	80	C_2	a1	Gs3A	3住—95中

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
④	打石斧	ⅡCb	13.0	5.5	4.4 (60)	1.4	140	C_2	abc2	Gs2A	3住— 121生
○5	〃	ⅢCc	11.4	4.5	4.3 (50)	1.3	85	A	a1	ms1A	3住— 156下
⑥	〃	ⅢDb	12.3	3.6	2.5 (60)	2.0	110	〃	〃	Gs2A	3住— 52生
○⑦	〃	ⅣCa	10.4	4.7	4.3 (70)	1.9	130	〃	〃	〃 〃	3住— 50生
⑧	横刃	ⅠC	7.0	4.5	6.3 (20)	0.8	40	〃	—	〃1B	3住— 145生
○9	打石斧	ⅣCa	8.5	5.3	5.1 (50)	1.3	75	〃	—	ss2A	3住— 131
○⑩	〃	ⅢAc	10.7	4.6	5.0 (40)	1.1	87	〃	b2	Gs1A	3住— 111生
○11	〃	ⅠDb	16.8	5.5	4.0 (60)	2.3	310	〃	a2	〃2A	AV74ヨ
12	〃	ⅣAc	9.7	4.3	4.7 (80)	1.5	85	〃	—	ms1C	AV72
13	〃	ⅤAb	10.1	4.1	3.2 (50)	1.1	80	〃	a1	ss2A	3住ヲ
14	〃	ⅢBc	10.2	4.9	—	2.0	135	B_1	—	〃3C	3住—26中
15	〃	ⅣDc	10.3	3.8	3.2 (50)	1.5	80	A	a2	Gs1A	3住ヲ
16	〃	ⅢCa	11.6	5.0	3.7 (50)	2.2	150	〃	—	ss2C	3住—57中
○17	〃	ⅢAa	11.1	5.6	4.1 (50)	1.4	135	〃	a2	Gs3A	3住—139
○⑱	〃	ⅣCc	(8.6)	4.3	5.0 (50)	1.8	110	〃	ab2	ss2A	3住—88生
⑲	〃	ⅣCa	9.4	4.3	4.1 (50)	1.5	70	〃	a2	Gs2A	3住—68ヨ
○20	〃	ⅡAb	12.4	5.1	3.9 (40)	0.7	60	〃	〃	〃2B	3住—10中
㉑	〃	ⅣCa	9.3	4.7	4.9 (90)	1.8	95	〃	a1	〃3B	3住—88生
○㉒	〃	ⅣDb	12.1	4.0	3.2 (80)	1.7	120	〃	a2	〃2A	3住—122生
○㉓	〃	ⅣCa	10.4	4.6	4.0 (80)	1.6	105	〃	abcd2	〃 〃	3住—83生
○24	〃	ⅢAb	11.5	5.3	3.2 (90)	1.2	100	〃	a2	〃2B	3住—41中
㉕	〃	ⅡCc	10.6	5.0	4.0 (60)	1.7	125	〃	abc3	〃3B	3住—142床
26	〃	c	(4.7)	4.8	4.8 (60)	1.7	50	B_2	a1	〃2A	3住集
○㉗	〃	ⅣDc	9.7	2.9	2.7 (40)	1.4	65	A	—	〃1A	3住—77床
○28	〃	ⅢDa	12.4	4.0	3.2 (50)	2.2	125	〃	ab2	〃3B	3住—123下
29	〃	ⅣBa	8.5	4.3	4.3 (80)	2.1	115	A	a1	Gs3A	3住— 5下
30	〃	ⅣBc	(8.0)	4.6	4.5 (70)	1.3	80	B_2	ab2	〃2B	3住—51上
31	〃	ⅤBb	7.7	4.8	4.8 (30)	0.9	40	A	—	ms1C	3住—71中
32	〃	ⅠBa	(7.5)	6.6	5.1 (40)	1.5	95	B_2	—	Ab3C	3住—72上
33	〃	—	(5.2)	4.4	—	1.4	45	B_1	—	Gs1A	3住—93下
㉞	〃	—	(7.9)	4.3	—	1.0	45	〃	—	〃2A	3住—100床
㉟	〃	ⅢC	(8.2)	3.8	—	0.8	35	〃	—	〃 〃	3住—104生
㊱	〃	ⅢB	(5.1)	4.6	—	1.0	40	〃	—	〃1B	3住—108生
37	〃	—	(4.8)	4.9	—	0.7	30	〃	—	〃2B	3住—118上
○38	〃	ⅣCb	10.3	5.5	5.1 (50)	1.2	75	A	abc1	ss1A	3住—128上
○39	〃	ⅣAb	10.3	3.6	3.0 (60)	1.0	55	〃	—	Gs1B	3住—137中
㊵	〃	ⅤB	7.5	5.0	—	1.5	60	C_1	—	ss2B	3住—157生
㊶	〃	ⅤC	(6.8)	3.0	—	0.7	20	B_1	—	ms1C	3住ヨ
㊷	〃	ⅣC	(9.6)	5.1	—	1.6	100	C_1	—	Gs1B	〃
43	〃	ⅣCc	10.2	4.8	4.6 (70)	1.7	100	A	—	ms1C	3住ヲ
44	〃	〃	9.4	5.3	4.6 (40)	1.5	100	〃	a1	Gs2B	〃
○45	〃	ⅠC	(10.0)	5.7	—	2.5	180	B_1	—	〃1B	〃
46	〃	ⅣA	(7.6)	4.3	—	1.4	65	〃	—	〃1B	〃
47	〃	ⅡCc	(8.1)	5.1	4.6 (80)	1.7	90	B_2	a1	〃3A	〃
48	〃	—	(5.4)		—	0.8	20	E_1	—	〃1A	〃
49	〃	—	6.0	5.0	—	1.2	50	D_3	—	ms1C	〃
50	〃	ⅣCb	9.5	5.2	5.2 (60)	1.5	105	A	abcd2	Gs1A	AV73
51	〃	ⅡCc	11.0	5.5	5.4 (70)	1.6	165	〃	a2	〃2B	AV72
52	〃		(6.0)	5.0	—	1.8	60	B_1	—	Sp3A	〃
○53	横刃	ⅢC	8.4	4.6	7.3 (60)	1.1	60	—	a2	Gs1A	3住ヲ
㊹	〃	ⅢB	11.6	3.8	10.1 (50)	0.8	50	—	a1	Bs2B	3住—144生

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
㊺	横刃	ⅠD	8.1	3.6	7.1 (50)	0.7	30	—	a1	Gs1B	3住ユ
56	〃	ⅡB	7.7	3.5	7.7 (20)	1.1	30	—	〃	〃1A	3住
57	〃	ⅡE	9.5	5.8	9.5 (60)	2.0	120	—	a2	〃3B	3住—38上
○58	〃	ⅢD	7.3	4.2	7.3 (40)	0.9	40	—	a1	〃2B	AV72
59	〃	ⅠC	8.5	4.4	8.5 (60)	1.5	70	—	a2	ms1B	3住—120上
○60	〃	ⅤA	11.3	5.4	11.3 (50)	1.8	120	—	〃	ss2A	3住集石
○61	〃	ⅡB	9.0	3.3	8.8 (40)	1.0	40	—	〃	Gs2B	3住フ
62	〃	ⅢB	7.9	(2.1)	6.8 (60)	0.8	15	上半欠	a1	〃1A	〃
63	〃	ⅢC	6.8	4.7	6.2 (30)	0.9	30	—	〃	〃3B	〃
㊹	〃	〃	6.9	6.3	5.7 (20)	1.7	70	—	〃	ss1A	3住ユ
65	〃	〃	8.3	6.4	4.5 5.0 (30)	1.1	60	—	a2	Gs1A	3住フ
66	〃	ⅢE	7.5	4.6	4.8 (50)	2.1	55	—	a1	〃3B	3住集石
67	乳石斧	ⅠB	(11.1)	4.9	3.0	—	190	B_2	〃	〃	3住—116上
68	〃	ⅡAB	(5.8)	5.0	3.6	2.6	125	〃	〃	〃	3住—26上
㊾	〃	ⅠAB	(7.8)	—	—	4.8	155	D_3	〃	〃	3住—92生
70	〃	Ⅰ	(9.7)	—	—	—	60	C_1	〃	〃	3住—46上
○㊶	小型磨石斧		7.3	3.7	3.2	1.3	50	B_2		〃1A	3住—147生
㊷	刃器	ⅠC	4.8	6.4	5.4 (60)	1.8	85	—		〃 〃	3住—83生
㊸	乳石斧	—	(6.0)	—	—	—	30	E_1		〃3A	3住—142床
㊹	凹石	D	10.0	7.9	—	4.3	480	B		Ab	3住—17床
㊺	〃	E	11.3	8.0	—	5.5	575	—		〃	3住—108生
76	〃	H	9.6	8.0	—	5.7	525	—		〃	3住—111下
77	〃	D	13.7	6.7	—	4.0	535	—		〃	3住—34上
78	〃	B	11.6	7.0	—	4.7	515	—		〃	3住集石
79	〃	Ⅰ	8.5	6.7	—	4.3	290	—		〃	3住集石
80	〃	H	9.3	8.4	—	5.3	485	—		〃	3住—128上
81	〃	D	(6.5)	7.1	—	4.4	260	B		〃	3住集石
82	〃	C	(10.8)	—	—	6.5	700	C		〃	3住集石
83	〃	E	11.8	6.0	—	4.5	410	B		〃	3住—106中
○84	石鏃		2.8	1.6		0.3	0.9	片脚		ob	3住フ78中
○85	〃		2.5	1.4		0.4	1.0	〃		〃	3住フ
○86	〃		2.1	1.3		0.3	0.5	〃		〃	〃
○87	〃		2.4	(1.1)		0.4	0.7	〃		〃	〃
○88	〃		(1.3)	1.5		0.25	0.5	先端		ch	〃
○89	〃		1.2	0.8		0.4	0.4	—		ob	〃
○90	スクレ		5.0	2.6	3.4	0.9	13.8	—		ms	〃
○91	〃		2.8	2.3	2.1 1.3	0.5	3.0	—		ob	〃
○92	〃		1.8	1.8		0.4	1.4	—		〃	〃
○㊸	ドリル		2.1	0.9	1.6	0.4	0.55	—		〃	3住床面
○㊹	〃		2.6	0.7	1.5	0.4	0.85	—		〃	〃
○㊺	〃		2.4	1.2	(0.8)	0.8	1.75	先端		〃	〃
○96	石皿		28.4	28.3	—	12.7	—	半欠		Ab	3住

4号住

○1	打石斧	ⅤBa	7.8	3.4	2.9 (80)	1.1	45	A	—	Gs1B	AV70—1
2	〃	ⅣBc	8.5	4.0	3.8 (50)	1.9	80	〃	a1	Bs2A	4住
3	〃	ⅣCa	7.1	4.7	4.0 (60)	1.5	65	〃	—	ms1C	〃
4	横刃	ⅢC	5.1	3.5	5.1 (30)	0.7	20	—	af1	Gs1A	〃
5	乳棒状石斧	—	(9.6)	4.3	—	(2.4)	90	D_3		Gs	AV70—1
○6	三角形剥片	ⅡE	7.7	6.0	7.8 (30)	1.3	55	—	—	ms1C	4住
○7	石鏃		1.8	1.3		0.3	0.45	—		ob	〃
○8	〃		2.0	1.6		0.7	2.15	—		〃	〃
○9	ドリル		3.6	1.6	1.7	0.6	3.25	—		〃	〃
○10	石皿		29.6	22.3	—	0.9	—	—		Ab	〃

5号住

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 g	折損	使用痕	石材	註記
○1	打石斧		(8.4)	6.3	5.8 (40)	1.7	150	B_2	a_1	Gs2A	AY68, 5住一1
○2	〃	ⅠAa	12.5	7.4	6.4 (70)	2.9	275	A	—	ms2C	AV68Ⅱ
○3	〃	ⅣCb	9.6	5.1	5.0 (40)	1.5	90	A	a_2	Gs1B	AV66—Ⅰ
4	〃	ⅣB	(7.9)	4.7	—	0.7	35	C_1	—	〃〃	AV67
5	〃	ⅢBa	(9.7)	5.6	4.8 (70)	2.1	180	B_2	—	〃3A	AV68Ⅱ
6	〃	ⅡB	(8.7)	5.3	—	1.3	110	B_1	—	Bs1A	5住フ
7	〃	ⅠB	(13.5)	5.8	—	2.4	225	$D_{1,3}$	—	〃3A	〃
8	〃	ⅣC	(7.6)	5.7	—	1.2	60	C_1	—	〃2A	5住南ギ
9	〃	(乳石斧?)	(8.5)		—	2.0	65	E_2		〃	5住フAV67
10	〃	ⅤCc	9.0	2.6	2.2 (30)	0.6	20	A	—	ms1C	5住フ
⑪	横刃	ⅡC	7.1	4.0	6.7 (30)	0.8	35	—	—	Gs3A	5住炉内
12	〃	ⅤA	12.2	5.9	11.3 (40)	0.8	80	—	a_2	〃2B	5住南際
13	〃	ⅢC	6.7	3.9	5.9 (30)	1.0	25	—	〃	ms1A	5住フ
14	〃	ⅢB	8.4	4.3	8.0 (30)	1.1	40	—	—	〃2C	5住一1
○15	〃	ⅠA	9.5	5.5	8.8 (30)	1.6	90	—	a_1	Gs3B	AV66
○16	〃	ⅠE	8.4	8.6	8.2 (60)	1.9	185	—	a_2	〃3A	5住南ギ
17	〃	ⅡC	5.4	4.2	5.3 (50)	0.6	15	?	—	ms1C	5住フ
18	〃	〃	6.8	(3.4)	6.5 (20)	1.0	30	上半欠	a_1	Gs2A	〃
○19	乳棒状石斧	ⅠA	(11.7)	5.1	—	4.2	470	B_2		〃	5住一2
20	〃	ⅡAB	17.0	4.2	3.1	2.7	305	A		〃	5住一1
○㉑	横刃	ⅢB	7.1	3.7	6.3 (50)	0.7	30	〃	—	〃1B	5住ユ
22	凹石	E	10.0	6.0		3.9	320	—		Ab	5住南際
23	〃	H	9.0	7.9		5.0	395	—		〃	5住一3
24	〃	H	10.2	8.9		3.8	475	—		〃	5住一2
25	〃	D	10.8	4.3		3.0	(105)	—		Gr	5住一1
26	特磨	B	16.8	6.4		5.7	835	C		Ab	5住南ギ
○㉗	石鏃		2.2	1.3		0.4	0.8	—		ob	5住床面
○28	〃		2.0	1.8		0.5	1.0	—		〃	5住フ
○29	スクレ		(2.4)	2.2	2.8	0.8	5.8	半欠		ch	5住南壁上
○30	〃		3.1	3.1	3.1	0.9	7.0	—		ob	5住フ
○31	〃		2.7	2.1	1.8	0.8	4.8	—		〃	〃
○32	〃		1.8	2.6	2.6	0.7	2.5	—		〃	〃
○33	〃		3.6	2.2	3.4	1.1	8.7	—		〃	〃
○34	〃		1.7	1.7	1.5	0.6	1.6	—		〃	〃
○35	ドリル		3.5	1.3	(1.7)	0.8	3.0	先端		〃	AV69
○36	〃		2.3	0.9	0.9	0.5	1.0	—		〃	5住フ
37	欠番										
○38	石皿		12.5	24.0	—	6.9	2200	半欠		Ab	〃

6号住

1	打石斧	—	(5.6)	4.7	—(50)	1.0	40	B_2	a_1	Gs2A	6住フ
2	〃	ⅣA	(8.0)	4.5	—	1.2	50	B_1	—	ms2C	〃
3	〃	ⅡD	(10.7)	3.0	—(60)	1.7	60	D_2	—	ss3C	袋状ピット
4	〃	—	(9.2)	3.5	3.1 (70)	1.4	55	C_2	a_1	Gs3A	6住一8
⑤	〃	ⅤCb	(6.0)	3.6	3.7 (50)	0.7	20	B_2	—	ms1A	6住一20
6	〃	ⅣB	(9.5)	4.3	—	2.0	85	C_1	—	Gs3B	6住フ
○7	〃	ⅡCc	12.0	4.8	4.4 (60)	1.8	130	A	—	ms1C	6住22
8	〃	ⅢAb	16.0	5.2	5.2 (50)	1.7	95	〃	—	〃〃	AX74—コ
○9	〃	ⅢAa	11.2	4.7	4.3 (80)	2.5	175	〃	ab_2	Gs2A	AX74—コ
○10	〃	ⅢCa	10.4	4.3	3.4 (50)	1.2	65	〃	a_1	〃〃	6住—17

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
11	打石斧	ⅣC	9.8	5.1	3.3 (50)	2.1	105	$D_{1,3}$	—	ss 2A	AX75—コ
○12	横刃	ⅡB	7.7	3.7	7.7 (20)	1.4	40	〃	a_2	〃 1A	6住フ
○13	〃	〃	8.5	4.2	8.2 (60)	0.9	50	〃	〃	Gs1A	〃
14	〃	ⅣA	10.9	4.9	10.8 (30)	0.7	40	〃	—	ms2C	6住12
15	〃	ⅡC	7.7	4.5	7.2 (20)	0.8	30	〃	—	〃 1C	6住13
○16	〃	VB	9.1	3.2	6.3 (30)	0.9	20	〃	ade3	Gs1A	6住6
17	〃	IE	6.3	4.6	7.7 (40)	1.3	50	〃	—	ms2C	6住3
18	〃	VC	4.3	3.8	4.3 (20)	0.6	15	〃	a1	〃 2B	6住フ
○19	先端研磨		5.5	2.7	—	1.6	35	〃		ss2A	6住—10
⑳	凹石	D	9.0	6.0		3.8	245	〃		Ab	6住一床
21	〃	E	6.2	5.6		4.5	320	〃		〃	AX75—コ
22	〃	E	10.0	7.2		5.0	470	〃		〃	6住フ
○23	石鏃		2.0	1.3		0.3	0.65	〃		ob	6住24
○24	スクレ		2.9	2.6	3.3	0.6	6.1	?		Ch	6住フ
○25	〃		3.9	2.9	3.3	1.0	9.5	?		〃	〃
○㉖	石皿		11.6	19.2	—	5.8	1520	半欠		Ab	6住床

7号住

○1	打石斧	ⅡCa	11.2	6.2	5.9 (40)	1.2	105	A	局部磨製	Gs2A	7—4中
○2	〃	ⅣDb	10.4	4.0	3.4 (60)	1.6	90	〃	—	ms1C	AW—88Ⅰ層
○3	〃	ⅢAa	11.5	5.2	4.7 (40)	1.8	140	〃	bd3	Gs2B	(7住フ)
4	〃	—	(5.3)	5.0	—	0.7	30	B_1	—	ms1C	〃
5	〃	ⅣB	(8.2)	4.4	—	1.2	50	D_3	—	ss2A	〃
⑥	〃	ⅣCc	(7.6)	4.2	4.1 (50)	1.1	50	B_2	—	Gs3B	7—18生
7	〃	c	(3.9)	3.5	3.5 (60)	1.2	25	C_2	ab2	〃 2B	7住フ
○8	〃		(6.6)	5.6	4.9 (70)	1.0	60	D_3	—	〃 1B	7住フ
9	〃	—	(8.5)	5.8	—	1.4	70	C_1	—	ss3A	7—28中
○10	〃	IC	(11.1)	6.6	—	1.2	90	〃	—	〃 3A	7—2上
11	〃	VB	(6.6)	4.1	—	1.3	45	D_3	—	〃 2A	7住フ
12	〃	IC	(10.7)	5.4	—	1.7	120	C_1	—	ms1C	AV87
⑬	〃	C	(6.2)	4.6	—	1.0	50	B_1	—	Gs1B	7—10生
14	横刃	ⅡA	9.8	3.9	7.3 (30)	0.9	45	—	a1	〃 1A	AW87—Ⅰ
○15	〃	〃	8.2	4.1	6.3 (40)	2.5	90	—	a2	〃 〃	AW88—Ⅰ層
○16	〃	ⅣB	8.9	3.1	9.0 (40)	0.7	30	—	a1	〃 〃	7住フ
17	〃	ⅡB	9.0	3.5	9.0 (50)	1.1	40	—	a1	〃 2B	7—27上
18	〃	〃	10.6	3.7	10.6 (40)	0.9	35	—	—	ms1C	7—14下
○⑲	〃	ⅢC	6.0	4.7	4.8 (40)	1.0	40	—	a2	Gs1A	7—32生
○20	〃	ⅡE	8.7	6.0	7.7 (60)	1.8	95	—	a2	ss2A	AW87—Ⅰ
21	〃	ⅡB	11.0	2.8	10.3 (50)	1.2	40	—	a1	〃 〃	7住フ
22	〃	ⅢB	7.6	3.6	7.7 (30)	1.1	40	—	〃	Gs2A	〃
23	〃	IB	7.2	3.1	7.4 (30)	0.9	30	—	〃	〃 〃	〃
24	〃	ⅡB	8.7	2.5	8.4 (20)	0.7	15	—	—	〃 1A	〃
○25	粗大石ヒ		(6.7)	5.5	—	1.0	(45)	E_4		〃 1B	〃
26	乳石斧？	Ⅰ	(9.5)	4.7	—	—	135	D_3		〃	AW88Ⅰ層
○27	尖頭	石斧転用	9.9	3.3	—	1.0	35	—	—	〃 1A	AW87—Ⅰ
○28	打石斧	ⅣCc	11.7	2.7	1.3	1.3	70	A	a2	〃 〃	AW87—Ⅰ
29	凹石	J	9.6	7.2		6.7	420	—		Ab	AW87—Ⅰ
㉚	〃	E	8.6	6.5		4.9	350	—		〃	7住31生
31	〃	A	11.6	6.8		3.3	340	—		〃	7住20中
32	〃	F	11.8	9.2		5.1	670	—		〃	7住26中

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
○33	石鏃		1.6	1.2		0.3	0.4	—		ob	7住11フ
○㉞	〃		1.8	1.4		0.3	0.75	—		〃	7住ユ
○35	〃		1.9	1.4		0.5	0.9	—		〃	7住フ
○36	〃		1.9	1.6		0.6	1.5	—		〃	〃
○37	スクレ		3.7	2.6	3.7	0.7	5.6	—		〃	〃
○38	〃		2.7	1.8	2.6	0.8	4.0	—		〃	〃

9号住

○1	砥石		45.3	38.7		18.3	—	—		Ab	9住

10号住

○1	刃器	ⅢA	9.1	3.6	8.8 (30)	0.6	30	?	a1	Gs1A	10住フ

11号住

○1	打石斧	ⅣBb	9.6	6.3	4.1 (60)	1.8	110	A	—	ss2A	11住
2	凹石	D	11.4	7.9		4.0	375	—		Ab	〃 −2
○3	横刃		7.9	3.2	4.9 (50)	0.7		—	a1	Gs1A	〃

12号住

○1	打石斧	ⅡCa	12.0	5.2	5.0 (60)	2.1	190	A	a1	Gs2A	12住−28
○2	〃	ⅡCc	13.3	5.5	4.0 (60)	1.8	165	〃	a2	ss2A	12−28
○3	〃	ⅡAc	13.0	4.2	4.0 (50)	2.0	135	〃	b2	〃 3B	12住フ
4	〃	ⅢCb	11.5	5.0	4.7 (70)	2.1	185	〃	abc2	Gs3A	12住−68
○5	〃	ⅢCc	11.1	5.0	4.5 (40)	1.4	110	〃	〃	〃 2A	12住
6	〃	ⅢCa	12.0	5.0	3.6 (40)	1.2	110	〃	ab2	〃 2B	12住フ
7	〃	ⅠCa	10.6	6.4	5.7 (40)	1.8	170	〃	—	〃 1B	12住西フ
8	〃	ⅢBc	11.4	5.0	3.2 (30)	1.2	90	〃	—	〃 〃	〃
○9	〃	ⅣBb	8.4	4.2	3.6 (40)	1.5	80	〃	局部磨製	〃 1A	12住25
○10	〃	ⅠBa	10.4	7.7	5.5 (40)	3.2	345	B_2	b1	〃 2A	12住26
○11	〃	ⅣBa	8.8	4.8	4.1 (50)	1.8	95	A	—	ms1B	12住西フ
12	〃	ⅢBc	10.2	4.8	4.4 (70)	1.3	100	〃	abc2	Gs2A	12住47
13	〃	—	(4.5)	3.5	—	0.7	20	D_3	—	〃 2B	12住西フ
○14	〃	ⅤBb	7.8	4.2	2.8 (80)	1.5	65	A	a1	〃 1A	—
15	〃	ⅡD	(11.0)	4.4	—	2.5	155	B_1	—	〃 3A	12住フ
16	〃	ⅢC	(5.7)	4.5	—	1.0	35	〃	—	Sp1B	—
17	〃	—	(7.5)	(5.6)	—	1.0	45	E_2	—	Gs2A	12住西フ
○18	〃	ⅢBb	9.3	5.2	—(60)	1.0	70	A	abc3	〃 1A	12住64
19	〃	ⅢB	11.2	4.2	—	0.8	35	$E_{1,4}$	—	〃 〃	12住79
20	〃	C	(8.7)	4.9	—	1.3	70	B	—	ss2A	12住58
○21	〃	ⅢCa	10.5	4.1	4.1 (40)	2.0	105	A	a1	Gs3A	12住フ
22	〃	ⅢC	(9.2)	4.5	—	1.8	95	B_1	—	ss2B	12住29
23	〃	ⅡBc	11.3	5.0	4.0 (20)	0.9	60	C_2	—	ms1C	12住フ

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
24	打石斧	ⅢA	(9.7)	4.3	—	1.0	65	B_1		Gs1A	12住フ
25	〃	a	(4.8)	5.3	5.7 (70)	1.3	60	B_2	—	〃 1B	12住29
26	〃	c	(6.6)	4.1	3.6 (50)	0.9	30	C_2	—	ms1C	〃
27	〃	—	(6.7)	3.7	—	0.8	25	D_3	—	〃 〃	12住フ
28	〃	b	(6.3)	4.7	4.7 (40)	0.5	35	B_2	a_1	Gs2B	12住西フ
○29	横刃	ⅡA	13.3	4.5	3.3 (30)	1.0	70	A	〃	〃 1A	〃
30	〃	ⅡC	7.8	5.5	6.0 (50)	1.0	55	—	—	ms1B	12住—66
○31	〃	ⅢC	8.9	7.1	7.2 (50)	1.4	115	—	a1	Gs1A	12住西フ
32	〃	ⅢB	10.0	3.8	10.0 (60)	0.9	35	—	〃	〃 2A	12住—16
33	〃	ⅡB	6.6	3.1	6.0 (40)	0.4	15	—	〃	ms1B	12住
34	乳石斧	ⅠAB	4.5	4.3	—	2.7	75	B_1		Gs	AX80コ
35	凹石	A	9.6	6.6		3.7	345	—		Ab	12住フ
36	〃	A	9.7	6.6		3.6	320	—		〃	12住77
37	〃	Ⅰ	6.7	5.4		3.6	130	—		〃	12住21
38	〃	G	9.3	7.7		5.9	495	—		〃	12住東フ
○㊴	石鏃		(1.9)	(1.4)		0.3	0.7	先端・両脚		〃	12住ユ12
○40	〃		1.9	1.4		0.35	0.7	—		ob	12住フ
○41	〃		1.9	1.5		0.4	0.95	—		〃	〃
○42	〃		1.0	1.3		0.15	0.2	—		〃	〃
○43	〃		2.1	(1.5)		0.25	0.8	片脚		〃	〃
○44	〃		(1.5)	(1.3)		0.3	0.45	先端・片脚		〃	〃
○45	石匙		5.3	5.5	5.6	1.1	32.9	—		ms	〃
○46	スクレ		2.4	1.8	2.4	0.8	3.05	—		ob	〃
○47	〃		(2.1)	(1.9)	—	0.6	3.1	角部残		ch	〃
○48	ドリル		2.8	1.0	1.8	0.5	0.9	—		ob	〃
○49	〃		(2.8)	1.5	(1.3)	0.7	2.3	先端		〃	〃
○50	〃		(1.5)	1.2	—	0.5	1.25	〃		〃	〃
○51	〃		2.5	2.1	1.2	0.7	2.7	—		〃	12住東フ
○52	〃		(2.3)	1.8	—	0.6	2.1	先端		〃	12住フ
○㊸	石棒		41.3	1.5	—	12.5	—	一部欠		Ab	12住床

13号住

○①	打石斧	ⅢAa	12.2	5.1	4.2 (50)	1.6	1 25	A	a —	ms1C	13住床—36
2	〃	ⅢCc	11.0	4.6	4.1 (80)	1.2	95	〃	a2	Gs3B	BG71—1
○3	〃	ⅢCb	10.6	5.1	5.0 (50)	1.8	135	〃	ad3	〃 2A	13住フ
4	〃	ⅣCa	9.7	5.1	4.8 (50)	1.7	105	〃	a1	〃 〃	〃
○⑤	〃	ⅣDa	9.9	3.7	3.3 (30)	1.0	60	〃	〃	〃 2B	13住ユ6
6	〃	ⅢBb	(9.2)	5.1	4.1 (60)	1.1	90	B_2	—	〃 1B	13住フ
7	〃	—	(5.0)	4.1	3.8 (50)	1.4	50	〃	a2	〃 1A	〃
8	〃	—	(5.7)	4.4	—	0.9	35	B_1	—	〃 1C	〃
9	〃	C	(7.9)	4.7	—	1.0	55	C_1	—	ss3B	〃
10	〃	b	(6.3)	5.1	—(70)	1.3	45	E_2	ad2	Bs2A	BH91
11	〃	c	(8.5)	4.2	4.0 (30)	0.9	40	C_2	a1	Gs1B	13住フ
12	〃	ⅠB	(10.7)	6.7	—	1.6	120	C_1	—	ss2A	13住フ—59
13	〃	ⅣBc	9.6	4.5	4.3 (30)	1.5	80	A	—	Gs1B	13住フ
14	〃	ⅢC	7.8	4.2	—	1.2	60	C_1	—	ms1C	〃
15	〃	ⅢB	6.7	4.7	—	1.1	55	B_1	—	Gs1A	BH91
○16	〃	ⅣBc	9.8	4.1	3.8 (40)	1.2	65	A	a1	〃 2B	13住フ
17	〃	ⅢCb	10.2	4.4	4.3 (30)	0.7	50	〃	—	〃 2C	BG91Ⅰ
○18	〃	ⅠBa	9.1	7.2	7.2 (50)	2.1	195	〃	a1	〃 3A	13住フ

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
19	打石斧	—	(5.4)	5.1	—	1.1	50	D_3	—	ss2C	13住フ
20	〃	VC	(6.4)	(2.6)	—	1.0	15	E_1	—	Gs1A	〃
21	〃	〃	(6.8)	(2.4)	— (60)	0.9	20	E_2	a1	〃3A	〃
○㉒	横刃	ⅡD	9.7	6.5	9.2 (50)	1.7	130	—	a2	ss2A	13住ユ
㉓	〃	ⅢD	9.2	5.3	7.5 (40)	1.3	85	—	〃	Gs2A	13住床41
○24	〃	ⅢB	7.3	3.6	7.0 (40)	0.7	30	—	a1	〃1A	13住フ
○25	〃	ⅢA	14.0	3.3	11.6 (30)	0.6	40	—	〃	〃2A	13住フ−14
○26	〃	ⅢB	12.0	3.7	11.3 (60)	1.1	60	—	a2	〃1B	13住フ
27	〃	ⅢC	7.2	4.1	6.6 (50)	1.5	55	—	〃	〃1A	〃
○28	〃	ⅠD	8.9	4.6	8.9 (50)	0.9	45	—	—	〃2B	BG93
㉙	〃	ⅠE	8.9	6.8	8.3 (30)	2.1	120	—	a1	ss2A	13住ユ
30	〃	ⅠC	8.3	6.1	7.3 (20)	0.9	55	—	〃	Gs1B	13住フ
31	〃	ⅡC	6.2	5.6	4.6 (20)	1.0	40	—	〃	ss1A	〃
○32	〃	ⅡD	8.8	5.3	6.1 (30)	1.4	60	—	a2	ms1A	〃
33	〃	ⅢA	11.1	4.4	10.3 (30)	0.6	45	—	a2	Gs1A	〃
㉞	〃	ⅢB	(8.0)	2.8	5.5 (40)	0.8	25	右半欠	—	Gs2A	13住ユ
35	〃	ⅡB	7.6	2.9	6.2 (40)	1.1	30	—	af2	〃1A	13住フ
36	〃	〃	6.3	3.2	5.4 (30)	0.7	15	—	a2	〃1B	〃
37	〃	VB	9.5	1.8	9.2 (40)	0.6	20	—	〃	〃〃	〃
○38	〃	ⅡB	7.3	2.6	5.9 (50)	0.6	15	—	a1	〃1A	〃
39	〃	ⅠC	6.2	4.6	6.1 (20)	0.8	30	—	〃	〃〃	〃
40	〃	ⅢC	4.6	3.5	4.3 (30)	0.7	15	?	a2	〃〃	〃
41	乳石斧	ⅠA	(17.5)	5.1	—	4.2	625	B_1		〃	13住ピ
㊷	〃	ⅠAB	(5.6)	—	—	(3.5)	140	E_2		Gd	13住ユ−29
43	〃	ⅠA	(11.0)	(5.0	—	(4.0)	280	B_1		Gs	13住12
㊹	〃	ⅢB	12.8	4.4	3.9	2.3	210	A		〃	13住床16
45	〃	—	(8.4)	4.2	—	—	110	D_3		〃	13住フ−5
46	凹石	D	12.2	7.5		4.1	520	—		Ab	13住ピ
47	〃	D	13.1	6.6		3.4	390	—		〃	13住フ
48	〃	D	(6.0)	7.1		3.3	174	B		〃	13住フ55
49	〃	A	9.5	7.4		3.5	340	—		〃	13住フ
㊿	〃	F	12.4	9.2		5.1	740	—		〃	13住ユ
51	〃	?	8.2	6.3		2.1	135	—		〃	〃
52	〃	F	9.9	9.4		5.2	625	—		〃	13住フ
53	〃	D	8.9	5.8		2.7	195	—		〃	〃
54	〃	E	11.5	7.8		5.9	645	—		〃	13住フ55
55	〃	F	10.4	9.2		5.6	600	—		〃	13住フ
56	〃	E	12.9	6.3		4.8	430	—		〃	13住フ−2
57	〃	I	7.0	6.0		3.7	165	—		〃	13住フ
58	〃	J	13.4	7.0		4.8	530	—		〃	13住フ−21
○59	打石斧		16.1	3.7	3.3 (70)	1.8	165	—	—	Gs2B	BG93
60	凹石	E	10.8	5.9		4.5	375	—		Ab	13住フ−13
61	〃	F	10.4	7.8		3.5	330	—		〃	13住フ
㊷	〃	G	8.8	6.9		4.5	440	—		〃	13住ユ−7
63	〃	J	15.3	7.7		3.7	495	—		〃	13住フ
64	〃	E	10.8	7.2		4.9	520	—		〃	BH91
○65	石鏃		1.9	1.2		0.4	0.7	片脚		ob	13住74
○66	〃		2.3	(0.9)		0.3	0.85	半欠		〃	13住フ
○67	石匙		3.9	3.7	3.7	0.9	11.5	—		ms	〃
○㊽	台石		48.1	14.6		7.2	—	—		Ab	13住ユ
69	石皿		7.5	9.6		4.0	—	半欠		〃	BH91

14号住

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
1	打石斧		(10.1)	4.7	—	1.7	95	C_1	—	Gs1A	BG58
2	〃	ⅣBa	9.1	4.4	3.5 (80)	1.9	100	A	bc1	〃3A	BF59
③	〃		(8.8)	4.6	5.6 (50)	1.6	80	C_2	ab2	〃1A	14住ユ
○④	〃	—	(8.6)	—	— (60)	2.0	65	〃	a1	〃2A	〃
5	〃	—	(5.4)	4.5	—	1.7	55	B_1	—	Gs2A	14住
6	〃	ⅣAb	9.4	4.2	3.8 (60)	1.2	50	A	—	ss2A	〃
○⑦	〃	ⅤAa	6.9	5.2	5.1 (20)	0.8	30	〃	—	ms2A	14住ユ
8	〃	—	(7.9)	4.5	—	1.1	50	C_1	—	Gs2B	14住
9	〃	c	(6.5)	3.9	3.3 (30)	1.0	40	B_2	—	ms1C	〃
○⑩	横刃	ⅢD	10.8	5.7	8.1 (30)	1.1	70	—	a2	ss2A	14住ユ
11	〃	ⅣD	12.6	7.4	9.6 (30)	1.7	200	—	〃	〃3A	BF58
12	〃	ⅢB	7.2	3.6	4.8 (30)	0.8	25	—	a1	Gs1A	BE59
13	〃	ⅡC	7.2	5.2	6.3 (50)	1.5	55	—	〃	ss2A	14住P
○14	〃	ⅢB	10.0	3.0	7.7 (50)	0.8	35	—	〃	Gs1A	14住
15	〃	ⅡB	8.3	5.6	3.8 (50)	0.8	35	?	—	〃1B	—
⑯	〃	ⅢC	5.6	5.3	4.2 (20)	0.3	10	?	—	〃 〃	14住ユ
○17	石錘		5.0	4.7	—	1.0	40	—		ms	—
⑱	乳石斧	ⅠA	17.0	5.3	—	3.6	500	B_1		Gs	14住ユ
19	凹石	F	8.7	7.6		3.4	225	—		Ab	BF58
20	〃	D	(8.1)	7.5		4.2	320	B		〃	BG58
21	〃	F	11.7	9.7		5.2	580	—		〃	〃
○22	石鏃		2.7	(1.3)		0.4	0.85	片脚		ob	〃
○23	〃		2.0	(1.2)		0.4	0.7	〃		〃	BG59
○24	磨石	B						—		Ab	14住

15号住

1	打石斧	ⅢCc	11.0	4.6	4.7 (60)	1.7	105	A	abcd2	ss2A	15住フ
2	〃	〃	10.5	4.8	4.5 (50)	1.4	90	〃	a1	Gs2B	15住—39
○3	〃	ⅣBc	9.7	4.3	3.7 (60)	1.5	100	〃	〃	〃1B	15住—35
○4	〃	ⅣCc	9.0	4.2	3.7 (40)	1.9	85	〃	〃	〃1A	15住P
○5	〃	ⅣCb	10.1	5.2	5.0 (50)	1.9	135	〃	abc2s	〃2A	15住—72
6	〃	ⅣCa	8.9	4.8	4.1 (50)	1.6	90	〃	a1	〃 〃	15住—62
7	〃	ⅢBb	11.6	4.9	4.1 (50)	1.3	120	〃	abc2s	〃1B	15住—8
○8	〃	ⅡBb	11.7	5.8	5.5 (70)	1.5	115	C_2	abcde2	〃2A	15住—45
9	〃	ⅤBa	7.7	3.9	3.5 (50)	1.5	60	A	a1	〃 〃	15住—43
10	〃	—	(5.3)	4.1	—	1.2	35	B_1	—	〃 〃	15住—3
11	〃	—	7.6	4.5	—	1.9	90	C_1	—	〃2B	15住フ
12	〃	—	(5.1)	4.6	—	1.6	55	D_2	—	ms1C	〃
⑬	〃	a	(6.6)	4.3	4.0 (60)	1.9	80	B_2	a1	Gs2A	15住—49
14	〃	b	(3.9)	4.0	3.6 (100)	0.7	15	〃	a2	ms1A	15住—62AB
15	〃	—	(8.4)	6.1	—	1.3	80	D_3	—	Bs1C	15住フ
○16	横刃	ⅠA	11.8	5.5	11.8 (20)	1.3	95	—	a1	Gs1A	15住—30
17	〃	〃	10.3	5.5	10.0 (30)	1.0	70	—	〃	ss2A	15住
18	〃	ⅡC	7.6	4.7	7.6 (30)	1.3	55	—	〃	Gs1A	15住—2
19	〃	〃	4.9	5.0	3.8 (40)	1.3	35	—	?	ms1C	15住—22
20	〃	ⅢB	7.9	3.8	5.1 (50)	0.5	20	—	?	Gs1A	15住—34
21	乳石斧	ⅢA	(12.4)	3.9	—	—	190	C_1		Gs	15住フ
○㉒	ハンマー		5.7	8.2	— (80)	1.8	140	B_2		Gb2A	15住—20

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
㉓	凹石	E	10.2	6.6		4.2	315	C		Ab	15住ユ
24	〃	H	9.1	8.0		3.6	315	—		〃	15住56—3
25	〃	E	11.4	6.8		5.0	440	—		〃	15住52
26	〃	J	11.0	8.0		5.4	380	—		〃	15住貯
27	〃	?	(7.9)	5.5		5.0	265	B		〃	15住41
28	〃	E	12.4	7.9		5.3	645	—		〃	15住貯
29	磨石	I	6.7	5.4		3.5	155	—		〃	15住61
○30	スクレ		2.2	2.2	1.9	0.6	3.1	—		ob	—
○31	石匙		2.2	1.8	1.8	0.6	2.2	—		〃	15住フ
○32	ドリル		3.3	1.5	2.1	0.4	1.3	—		〃	〃
○33	〃		3.8	1.0	2.2	0.6	2.1	—		〃	〃
○34	〃 ?		2.6	0.6	—	0.5	0.7	—		〃	〃
○35	ドリル		(3.1)	1.3	(2.1)	0.5	1.7	先端		〃	〃
○36	〃		(2.4)	1.2	(1.2)	0.5	1.1	〃		〃	〃
38—欠番											
○㊲	石皿		33.3	22.0	—	9.2	—	一部欠		Ab	15住48床P
○39	〃		19.2	14.6	—	6.8	1900	半欠		〃	15住22

16号住

○1	打石斧	ⅣCa	9.9	4.8	4.6 (40)	0.9	55	A	?	ms1C	16住6
○②	〃	ⅡCc	13.9	5.0	4.7 (80)	2.0	180	〃	a2	ss2A	16住37
○3	横刃	ⅡA	13.1	4.3	(60)	1.8	115	〃	a1	Gs2A	16住12
○④	打石斧	ⅡAb	15.9	4.6	3.9 (40)	2.0	205	〃	abc2s	〃 〃	16住ショウド
○5	〃	ⅡAc	12.3	4.6	2.3 (60)	1.0	75	〃	a1	〃1A	16住
6	〃	c	(5.4)	5.5	—	1.3	50	B_1	—	ss2A	—
7	〃	—	(4.2)	4.1	—	1.4	30	C_1	—	Gs2B	16住フ
⑧	〃	—	(6.2)	5.8	—	1.5	75	D_3	—	altsm2B	16住62
9	〃	ⅡCb	(4.6)	7.4	3.3 (60)	1.8	75	B_2	?	Gs1B	AX59
10	〃	a	(7.1)	4.8	3.5 (50)	2.1	90	E_2	?	Bs1A	16住55
⑪	〃	a	(5.7)	5.0	4.1 (50)	1.1	35	B_2	?	Hr1B	16住57
12	〃	a	(8.1)	4.3	4.1 (70)	0.9	45	C_2	?	Gs2B	AY59Ⅰ
13	〃	ⅡC	(10.3)	5.4	—	1.6	100	C_1	—	ms1A	〃
14	〃	ⅢC	(9.8)	4.3	—	1.8	100	B_1	—	〃1C	AX60
15	〃	ⅡCc	13.7	5.0	— (80)	2.3	190	C_1	—	Gs2A	16住フ
16	横刃	ⅡA	9.7	5.0	9.6 (40)	1.4	75	—	ae3	ss2A	16住34
○17	〃	ⅢC	7.2	4.9	6.6 (50)	1.0	35	—	?	ms1B	16住48
18	〃	ⅤC	7.7	4.9	6.9 (40)	1.4	55	—	a1	Gs2B	16住36
⑲	〃	ⅡC	7.0	5.0	6.4 (40)	1.0	40	—	?	ms1C	16住15
20	〃	ⅢA	11.0	3.8	7.6 (50)	0.8	50	—	a1	Gs1B	—
○㉑	〃	ⅡA	9.6	4.4	8.5 (40)	1.9	90	—	〃	〃1A	16住19
㉒	〃	ⅤE	9.3	7.9	6.6 (40)	2.1	155	—	?	ss2C	16住51
㉓	〃	ⅣB	(8.7)	4.2	6.3 (20)	0.6	25	右半欠	a1	Gs2B	16住53
㉔	〃	ⅡD	(7.5)	5.9	9.2 (30)	1.4	75	右半欠	〃	ss2A	16住ユ
25	〃	ⅡB	(9.1)	3.9	8.5 (20)	0.8	30	—	〃	Gs1A	16住フ
26	〃	ⅠD	11.8	6.9	11.8 (50)	1.5	140	—	?	〃2B	〃
㉗	〃	ⅢC	8.0	4.2	7.7 (20)	0.6	20	—	?	〃2A	16住50
○㉘	〃	ⅣA	11.1	3.6	11.1 (30)	0.8	40	端欠	a1	〃 〃	16住38
○29	刃器	ⅡC	6.9	3.8	6.3 (50)	1.2	40	—	〃	ms1B	16住フ
30	〃	ⅢC	5.2	5.5	— (60)	1.0	30	?	?	ss2A	AY59Ⅰ
㉛	乳石斧	ⅡAB	18.2	4.5	4.1	2.9	370	A		Gs	16住60
○32	〃	ⅠA	(10.1)	(5.0)	3.0	(4.0)	265	C_2		〃	16住32

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
33	乳石斧	ⅡAB	(12.1)	4.5	3.0	3.3	285	C_2		Gs	AX60
○㉞	敲打器		9.0	2.6	—	1.8	70	B_2	—	Bs1	16住54
○35	球形磨石	Ⅰ	—		—	長径3.8 短径3.7	60	—	—	Ab3	16住フ
㊱	凹石	G	11.6	8.5		5.4	685	—		Ab	16住52
㊲	〃	H	9.0	8.3		5.2	535	—		〃	16住ユ
○㊳	石鏃		1.9	(1.9)		0.3	0.5	—		ob	〃
○㊴	〃		2.5	(1.5)		0.3	0.7	片脚		〃	〃
○㊵	〃		2.2	(1.6)		0.3	0.7	〃		〃	〃
○㊶	〃		(1.8)	(0.5)		0.3	0.2	先端片脚		〃	〃
○42	〃		(1.5)	1.7		0.5	1.0	先端		〃	—
○43	石匙		1.7	2.6	2.5	0.6	1.8	—		〃	—
○㊹	ドリル		3.2	1.4	1.2	0.6	2.0	—		〃	16住床
○㊺	〃		2.6	1.1	1.0	0.4	0.9	—		〃	〃
○㊻	〃		3.8	1.4	0.8	0.8	3.8	—		〃	〃
○㊼	〃		(2.5)	0.9	(1.3)	0.4	0.9	先端		〃	〃
○48	石皿		19.0	25.6	—	7.5	—	半欠		Ab	16住29

17号住

1	打石斧	ⅡCc	12.8	5.3	4.7 (40)	1.9	145	A	—	ms1C	17住24
○2	〃	ⅤBc	9.3	4.4	3.6 (40)	1.6	80	〃	ad2	Gs1A	17住35
3	〃	ⅡAb	12.6	5.1	4.2 (50)	2.6	155	〃	—	ss2A	17住40
○4	〃	ⅢBb	9.9	4.9	4.3 (40)	1.2	80	B_2	a1	Gs1A	17住46
5	〃	ⅣCc	9.2	4.3	3.9 (100)	1.2	70	A	〃	Bs1B	17住14
6	〃	ⅡBb	11.4	4.8	4.2 (50)	1.1	100	〃	〃	Gs2B	17住45
○7	〃	ⅤBa	6.7	3.7	2.9 (70)	1.3	45	〃	a2	ms1A	17住59
8	〃	ⅣBa	8.9	4.1	3.4 (70)	1.7	90	B_2	b2	Gs2B	17住84
9	〃	ⅠC	10.9	5.4	—	2.1	185	C_1	—	〃 〃	17住20
10	〃	ⅢB	10.1	4.3	—	1.7	110	B_1	—	Ab2A	17住55
11	〃	ⅣCc	9.5	4.9	5.0 (40)	0.9	55	A	—	altsm3C	17住33
○12	〃	ⅣDa	10.6	3.9	2.6 (40)	1.1	60	〃	a1	〃 2A	〃
13	〃	ⅢCc	10.2	3.9	— (50)	1.1	65	〃	—	〃 2B	17住73
○14	〃	ⅢBc	10.4	4.7	3.9 (60)	1.7	100	〃	a2	ss2A	17住
15	〃	ⅤCc	8.8	3.2	— (30)	1.0	35	〃	—	Gs2B	BB86
16	〃	ⅢCc	11.1	4.1	4.5 (50)	1.1	55	〃	—	〃 1A	BB87
○17	〃	ⅢCb	9.6	4.8	3.8 (50)	1.7	110	B_2	a1	ss2A	17住107
○18	〃	ⅢAc	11.4	4.8	4.4 (60)	1.5	110	A	b2	Gs2B	BB85
○19	〃	ⅢCb	11.1	5.3	5.2 (50)	1.8	160	〃	—	〃 1B	BB86
20	〃	ⅢAc	10.6	5.1	5.3 (50)	1.8	105	〃	—	ss2C	BB85
21	〃	ⅣCb	9.2	5.3	5.3 (60)	1.7	125	〃	a2	Gs2B	BB86
22	〃	ⅢDc	12.2	4.7	3.4 (50)	1.3	90	〃	a1	ss2A	BB87
23	〃	ⅡAb	14.1	5.5	4.5 (50)	1.8	160	〃	abc2	〃 〃	BB85
○24	〃	ⅤCc	9.0	3.4	— (50)	0.6	30	$D_{1\cdot3}$	局部磨製	altsm1A	BC87
○25	〃	ⅣCc	9.8	4.4	4.0 (50)	2.1	110	A	—	Gs2A	17住92
26	〃	ⅢAb	8.8	4.3	4.1 (60)	2.1	120	B_2	—	〃 2B	17住15
○27	〃	ⅣCa	8.7	5.0	4.8 (50)	0.8	45	A	a1	〃 2A	17住109
28	〃	ⅢD	(12.6)	4.2	—	2.1	125	C_1	—	〃 2B	BC87
29	〃	ⅡA	(12.4)	5.3	—	1.4	100	〃	—	〃 〃	17住71
○30	〃	ⅡCa	12.4	5.0	3.8 (60)	1.6	140	$E_{2\cdot4}$	局部磨製	〃 1C	17住9
㉛	〃	ⅡB	8.4	5.6	—	1.4	90	C_1	—	〃 〃	17住ユ
㉜	〃	a	(7.7)	4.5	4.0 (60)	0.7	30	$D_{1\cdot3}$	a2	〃 1C	〃

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
33	横刃	ⅠA	8.8	5.3	8.8 (40)	1.2	55	—	ad3	ss2A	17住114
○34	〃	ⅢC	6.6	4.4	5.2 (30)	0.5	20	—	a2	ms1A	BB85
○㉟	〃	ⅣB	7.9	3.6	8.6 (30)	0.7	30	—	〃	Gs1A	17住ユ
36	〃	ⅢB	9.3	2.9	8.8 (40)	0.9	30	—	〃	〃3A	BC87
37	〃	ⅡB	8.9	3.8	7.9 (60)	1.0	45	—	〃	〃2A	BB87
㊳	〃	ⅡC	6.6	2.2	6.9 (40)	0.6	15	—	a1	〃1A	17住ユ
39	〃	〃	7.0	5.9	7.0 (30)	1.1	50	—	〃	〃3A	17住89
○㊵	〃	ⅡA	10.7	4.2	10.9 (30)	1.5	85	—	a2	ss2A	17住床面
41	〃	ⅡB	10.5	3.2	10.1 (40)	1.5	50	—	〃	〃〃	17住フ
42	〃	ⅢB	8.9	4.1	4.9 (60)	1.1	45	—	a1	〃2B	〃
43	〃	〃	7.3	3.5	7.1 (40)	0.9	30	—	〃	〃3A	〃
44	〃		6.3	2.9	4.6	0.7	20	—	—	Gs1A	17住P_2
45	〃	ⅢC	6.6	4.5	5.2 (40)	0.9	40	—	—	〃2B	17住フ
46	刃器	〃	6.3	4.9	6.5 (30)	0.7	30	?	—	〃〃	〃
47	〃	ⅡC	5.3	5.0	— (20)	1.4	40	—	—	ss3A	〃
48	〃	〃	5.1	6.9	4.5 (60)	1.8	85	—	a2	ss2B	〃
49	乳石斧	Ⅰ	10.4	4.8	—	4.3	560	未成		Gs	17住72
50	〃	—	7.0	3.0				D_2		〃	17住フ
○51	小型磨石斧	局部磨製	6.2	3.3	2.8 (30)	1.2	30	$D_{3\cdot2}$	—	〃1A	BB87
○52	粗ドリル		15.7	2.2	—	1.3	45	—	—	〃3A	17住フ
○53	刃器	ⅠE	8.2	8.2	7.6 (40)	1.5	100	—	a2	〃〃	17住フ
54	横刃	ⅡE	10.5	6.8	10.5 (40)	3.0	200	—	—	〃1A	17住63
55	凹石	G	11.5	10.0		5.7	735	—		Ab	17住25
56	〃	H	10.5	9.0		4.8	495	C		〃	17住44
57	〃	I	8.2	7.1		4.5	210	—		〃	BB86
58	〃	I	7.8	6.2		5.2	290	—		〃	BC87
59	〃	I	8.8	5.7		3.2	225	C		〃	17住77
60	〃	?	(8.8)	—		3.5	130	B		Ab—	17住フ
61	〃	?	(6.0)	—		3.0	90	C		〃—	〃
○62	石鏃		2.1	1.6		0.25	0.6	—		ob	17住37
○63	〃		2.4	1.3		0.3	0.85	—		〃	17住38
○64	〃		2.4	(1.2)		0.4	0.75	片脚		〃	17住41
○65	〃		2.0	(1.1)		0.2	0.4	〃		〃	17住68
○66	〃		1.8	1.4		0.3	0.55	—		〃	17住115
○67	〃		1.6	1.7		0.5	0.9	—		〃	17住フ
○68	〃		(1.4)	1.2		0.3	0.4	先端		〃	〃
○69	〃		(1.8)	—		0.4	0.5	片脚残		〃	〃
○70	〃		1.7	(1.0)		0.4	0.45	片脚		〃	—
○71	石匙		3.3	2.9		0.8	6.2	—		〃	17住フ
○72	スクレ		2.0	1.3		0.4	1.15	—		〃	〃
○73	ドリル		2.7	1.3		0.7	2.5	—		〃	〃
○74	〃		2.9	0.9		0.8	1.8	—		〃	〃
○75	〃		3.1	2.2		1.5	7.5	先端		〃	—
○㊻	石棒?		33.3	17.6		12.9	—	半欠		Ab	炉北P内
77	凹石	G	17.0	15.2		8.3	2600	—		〃	17住フ
78	〃	F	11.1	9.5		3.6	380	—		〃	17住66

18号住

○①	打石斧	ⅤDb	9.0	3.3	2.5 (20)	1.0	35	A	—	Gs1A	18住ユ
②	〃	ⅢCb	10.6	4.5	4.1 (40)	1.3	80	〃	a1	ss2C	18住37生

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
○3	打石斧	ⅢCb	11.3	5.0	4.8 (50)	0.9	70	A	a2	Gs2A	18住36
○4	〃	ⅣAa	8.2	4.8	4.7 (40)	1.3	70	〃	—	ss2A	BI87
○5	〃	ⅣBa	9.5	4.4	4.0 (40)	1.1	75	〃	—	Gs1B	18住フ
○6	〃	ⅣDb	10.8	3.8	3.0 (40)	1.3	80	〃	ab2	〃〃	18住47
⑦	〃	ⅡBa	(7.2)	5.3	4.3 (40)	1.4	75	B_2	abc2	ss2A	18住8ユ
8	〃	ⅣDb	(8.5)	—	3.1 (40)	1.5	40	C_2	a1	〃1A	18住28
9	〃	c	(5.8)	4.9	— (50)	0.8	30	〃	a2	Gs1B	18住直上
10	〃	c	(6.7)	5.8	— (60)	1.3	60	D_3	b2	〃3B	18住47
○11	〃		(7.4)	5.4	—	2.1	110	B_1	—	ss2A	18住47 BF79
12	〃	ⅡC	(9.6)	4.4	—	2.3	125	C_1	—	Gs2A	18住17
13	〃	ⅢC	(8.5)	5.0	—	1.3	60	〃	—	〃〃	18住64
14	〃	ⅢD	(8.2)	3.7	—	1.5	55	E_1	—	ms1A	18住フ
⑮	横刃	ⅡC	9.6	5.2	7.6 (30)	0.9	55	—	a1	Bs2A	18住18(ユ)
16	〃	ⅡD	8.0	5.7	7.5 (30)	1.3	65	—	—	ms1C	18住フ
○17	〃	ⅢA	10.4	4.9	10.2 (30)	1.4	95	—	—	Gs1A	18住50
18	〃	ⅢB	8.0	3.0	7.8 (40)	0.8	20	—	a1	ms1A	18住55
19	〃	ⅡB	9.9	3.6	9.4 (50)	1.0	50	—	a1	Gs2A	18住47
20	乳石斧	IAB	(6.5)	—	—	3.3	70	E_1		〃	BH86
21	〃	I	(4.7)	—	—	—	25	E_2	—	〃	BH86
○22	刃器	ⅢE	10.2	5.3	7.5 (60)	3.1	210	—	—	Gb1A	18住フ
23	凹石	B	13.5	5.6		5.5	590	—		Ab	18住32
24	〃	D	9.9	6.1		3.2	250	—		〃	18住
㉕	〃	C	13.0	5.3		4.8	670	—		〃	18住ユ
26	〃	H	11.3	9.0		5.7	585	—		〃	BH86
㉗	〃	D	11.2	5.6		5.0	520	B		〃	18住ユ
28	〃	J	16.0	9.4		6.4	1150	—		〃	18住58
29	〃	G	12.0	10.6		7.0	950	—		〃	18住63
㉚	〃	B	12.0	6.9		4.8	525	—		〃	18住ユ
31	〃	?	—	7.3		—	175	B		〃	BH86—I
㉜	〃	H	10.0	8.0		4.0	440	—		〃	18住ユ
㉝	〃	E	11.9	6.6		4.8	530	—		〃	18住ユ
○34	石鏃		1.9	1.2		0.4	0.7	片脚		ob	BI87
○35	〃		2.1	1.9		0.8	2.35	—		〃	BI86
○36	〃		1.9	1.4		0.3	0.6	片脚		〃	BI87
○37	〃		1.9	1.7		0.5	1.75	—		〃	18住フ
○38	〃		2.0	1.1		0.4	0.65	—		〃	BI87
○39	石匙		(4.8)	4.2	(4.5)	0.9	16.4	左半欠		〃	18住9
○40	スクレ		8.4	3.5	5.6	0.8	25.5			Gs	BH86
○41	石皿		28.6	22.6	—	4.8	—	一部欠		Ab	18住41
○42	〃		31.1	28.0	—	7.6	5300	半欠		〃	18住43

19号住

○1	打石斧	ⅣCa	8.2	5.2	5.2 (60)	2.0	115	A	—	Gs1B	19住3
○2	〃	ⅡCa	13.2	4.8	4.3 (40)	1.1	95	〃	—	〃3A	19住48
○3	〃	ⅤCa	9.1	2.7	— (30)	0.7	20	$E_{1\cdot4}$	a1	ms1A	19住14
○4	〃	ⅡCa	11.1	5.2	—	1.0	105	B_1	bcd3	Gs1A	19住27
○5	〃	ⅢBc	11.8	5.1	4.2 (100)	2.1	190	A	a2	〃3A	19住61
○6	〃	ⅢD	(10.3)	3.9	—	2.2	110	B_1	—	〃1A	19住106
○7	〃		(8.2)	4.3	—	2.0	115	〃	—	〃2B	BE90 19住14
○8	〃	ⅢC	(9.5)	4.6	—	1.1	65	〃	—	ms1B	—

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
9	打石斧	—	(4.6)	3.4	—	1.0	25	D_3	—	Gs1A	—
10	〃	C	(10.3)	5.6	— (60)	1.3	80	〃	—	〃3A	19住11
11	〃	—	(8.8)	4.3	—	2.2	130	〃	—	〃1A	19住フ
○12	横刃	ⅤD	7.6	4.6	7.6 (20)	1.3	45	—	a1	〃〃	19住144
13	〃	ⅤC	8.8	4.4	8.8 (60)	0.8	35	—	〃	Bs1A	19住140
⑭	〃	ⅠC	9.2	6.7	9.0 (50)	1.7	125	—	〃	Gs3A	19住236
15	〃	ⅡA	9.7	4.1	8.7 (30)	0.9	40	—	〃	〃1A	—
16	〃	ⅢB	7.6	3.5	5.3 (30)	0.8	30	—	a2s	〃〃	19住43
○17	〃	ⅢA	10.2	4.0	9.8 (30)	0.7	40	—	〃	〃〃	19住68
○18	〃	ⅡA	11.2	5.4	11.0 (30)	1.0	75	—	a1	〃〃	19住13
○19	〃	ⅢB	8.9	3.6	8.9 (60)	1.1	35	—	〃	ms1A	19住フ
20	〃	ⅤB	6.5	3.6	5.6 (30)	1.0	35	—	a1	Gs3A	19住23
○㉑	〃	〃	6.1	3.1	5.6 (30)	0.8	20	—	—	〃1A	19住ユ
22	〃	ⅠB	5.9	4.2	5.8 (60)	1.4	40	—	a1	〃〃	19住36
23	〃	ⅤB	8.2	3.3	6.5 (70)	1.2	40	—	〃	〃2A	19住88
24	乳石斧	ⅡAB	20.0	4.4	—	3.4	480	D_3		〃	19住41
25	〃	ⅠB	(10.5)	—	—	2.8	210	E_2		〃	19住
㉖	〃	Ⅰ	7.6	—	—	—	30	〃		〃	19住212
27	凹石	J	10.7	7.8		6.8	600	—		Ab	19住67
28	〃	E	(5.6)	7.6		5.4	265	B		〃	19住8
29	〃	G	11.4	8.5		5.4	705	—		〃	19住35
30	〃	B	12.6	7.2		4.6	545	?		〃	19住16
31	〃	B	(6.6)	7.2		6.0	390	B		〃	19住158
㉜	〃	J	9.6	6.2		5.3	375	—		〃	19住223
33	〃	F	11.0	9.7		3.3	480	C		〃	19住137
34	〃	A	10.2	5.8		3.0	255	—		〃	19住フBK86
35	〃	D	(5.6)	5.5		3.1	115	B		〃	19住44
36	〃	A	9.4	7.1		3.4	320	—		〃	19住39
37	〃	H	9.0	7.2		4.2	350	—		〃	19住50
○38	石鏃		2.9	(1.2)		0.5	1.0	片脚		ob	19住12
○㊴	〃		2.1	0.8		0.4	0.7	—		〃	19住床
○㊵	〃		(1.2)	(0.8)		0.2	0.2	先端・下半		〃	19住199
○41	〃		1.3	1.2		0.25	0.3	—		〃	19住128
○42	〃		2.5	1.5		0.4	1.0	—		〃	19住33
○43	〃		2.5	(1.5)		0.4	1.4	片脚		〃	19住18
○44	〃		(1.7)	1.9		0.4	1.0	先端		〃	19住113
○45	〃		3.2	(1.7)		0.6	2.6	片脚		〃	19住3
○46	〃		1.6	1.2		0.4	0.6	—		ch	19住フ
○47	〃		2.6	1.5		0.25	1.0	—		ob	19住
○48	〃		(1.8)	1.8		0.4	1.6	先端		〃	〃
○49	〃		2.3	(1.3)		0.3	0.7	片脚		〃	〃
○50	スクレ		1.3	1.6	1.7	0.3	1.1	—		〃	19住フ
○51	ドリル		2.3	0.9	1.3	0.4	0.6	—		〃	19住31
○52	〃		2.3	1.0	1.5	0.4	0.95	—		〃	19住32
○53	〃		(2.6)	1.5	(0.8)	0.6	2.1	先端		〃	19住フ
○54	?		3.0	2.1		0.4	2.35	—		Sp	19住108
○㊺	石皿		20.3	24.0	—	9.4	—	半欠		Ab	(8住床面)
○56	〃		8.7	15.9	—	6.2	1100	¾欠		〃	(8住)

20号住

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
○①	打石斧	ⅢBb	12.2	4.1	3.1 (30)	1.2	80	A	a3	ss2A	20住ユ—48
2	〃	ⅢCa	11.6	4.8	3.9 (40)	1.4	90	〃	—	ms1C	BR54
3	〃	ⅣD	(9.8)	3.4	—	1.2	45	C_1	—	Gs2A	BT65—I
○ 4	〃	ⅢDa	13.1	4.2	3.4 (40)	1.6	125	A	—	ms1C	BR55
⑤	〃	ⅢB	(10.5)	4.9	—	1.2	80	C_1	—	Gs1A	20住17ユ
6	〃	ⅣDb	11.2	3.9	3.1 (20)	1.3	75	A	—	ms1C	20住フ45
○ 7	〃	ⅣBa	9.6	4.0	2.8 (50)	1.3	75	〃	ab2	Gs1A	BT65—I
○ 8	〃	ⅢBc	10.4	5.3	4.7 (40)	0.8	75	〃	—	〃 〃	20住—9—フ
9	〃	a	(7.3)	5.7	4.8 (40)	1.6	90	B_2	—	〃 2A	BR55
10	〃	c	(7.3)	5.4	5.6 (40)	2.0	95	〃	ad2	〃 3A	20住37
11	〃	—	(7.5)	—	—	1.7	85	E_1	—	ms1A	20住23
12	〃	—	(4.0)	4.7	—	(0.8)	20	D_3	—	〃 〃	—
13	〃	—	(5.9)	4.1	1.0	—	30	B_1	—	Gs1A	20住
○14	横刃	ⅡC	8.9	5.0	8.9 (30)	1.1	70	—	a1	〃 2B	BR55
15	〃	ⅢB	8.7	3.6	8.7 (40)	0.9	40	—	—	〃 2B	20住フ
16	〃	ⅤC	8.4	4.3	6.5 (40)	1.3	55	—	a1	〃 3B	20住25
17	〃	ⅢB	9.9	3.6	8.0 (40)	0.8	35	—	—	〃 1B	BR55
18	乳石斧	IAB	(11.6)	5.8	4.3	3.8	490	B_2		〃	20住17
19	〃	〃	(8.7)	4.9	2.0	3.2	200	〃		〃	BS56
20	〃	I	(10.6)	4.6	—	—	115	D_1		〃	20住
21	〃	I	(7.0)	—	—	(3.6)	45	E_1		〃	20住フ
22	凹石	G	9.7	7.8		5.7	440	C		Ab	20住52
23	〃	G	12.6	10.4		7.5	1050	—		〃	BR55
24	〃	I	8.8	7.0		3.8	240	—		〃	BR56
25	〃	D	9.3	5.6		3.8	250	—		〃	20住28
26	〃	G	10.2	7.2		7.0	555	—		〃	20住フBS55
○27	石鏃		2.0	1.9		0.3	0.9	—		ob	20住フ
○28	〃		2.1	1.4		0.3	0.7	—		〃	〃
○29	〃		2.2	(1.1)		0.4	0.7	片脚		〃	〃
○㉚	〃		1.8	(1.2)		0.25	0.5	〃		〃	20住51—ユ
○31	石皿									Ab	1842と接合，20住フ

21号住

○ 1	打石斧	ⅢCa	10.8	4.6	3.3 (40)	1.5	90	A	局部磨製	Gs1A	BJ—57
○ 2	〃	ⅢCc	10.1	4.4	4.3 (80)	2.1	110	〃	—	ms1C	21住86上
○ 3	〃	〃	11.2	5.1	4.7 (50)	1.4	105	〃	b1	ss1A	21住82上
○ 4	〃	ⅣDa	12.6	3.0	2.0 (30)	1.0	50	〃	d2s	Gs2A	21住9下
5	〃	ⅢB	8.8	5.3	—	1.3	75	B_1	—	〃 3A	21住17下
○ 6	〃	ⅢCc	10.2	4.1	3.8 (50)	1.3	90	A	—	〃 2A	21住26上
7	〃	ⅣDc	10.3	3.4	1.3 (30)	1.2	55	〃	ab2	〃 1A	21住BK56III
8	〃	ⅢCc	11.6	4.4	4.5 (30)	1.8	115	〃	—	ms2C	21住BK56III
○ 9	〃	IB	15.9	5.3	—(30)	2.1	170	$E_{1,4}$	ab2	Gs2A	21住34上
10	〃	ⅢB	(7.2)	4.9	—	1.3	60	C_1	—	〃 3A	21住83上
11	〃	ⅣC	(9.2)	5.7	—	1.2	85	〃	—	〃 1A	21住8中
12	〃	C	(9.2)	4.1	—	1.3	60	$D_{1,3}$	—	〃 3A	21住フ
13	〃	D	(8.4)	3.6	—	2.2	85	B_1	—	〃 1A	21住13上
14	〃	Db	(5.5)	3.3	3.1 (40)	1.4	40	D_3	a1	〃 〃	21住53下
○15	〃	IC	(10.0)	5.9	—	1.0	70	C_1	—	ms1C	21住78

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
○16	打石斧	ⅣCc	8.3	4.7	4.7 (60)	1.1	55	A	a3	Gs1A	21住71上
17	〃	Cc	7.5	5.6	5.5 (40)	0.6	50	B_2	〃	〃 〃	21住フ
18	〃	c	(7.4)	4.9	4.7 (70)	1.6	75	C_2	ad2	〃 3A	21—
19	〃	ⅢDb	(6.5)	3.8	3.3 (50)	1.3	45	〃	局部磨製	〃 2A	21—
20	〃	ⅡAc	(9.6)	5.7	5.2 (40)	1.0	75	B_2	ab2	〃 1A	21住49中
21	〃	b	(6.2)	4.4	3.7 (30)	1.4	50	〃	〃	〃 2A	21住フ
22	〃	a	(5.5)	4.9	4.0 (70)	0.8	35	C_2	—	〃 2B	〃
○23	横刃	ⅠA	9.9	4.1	9.9 (30)	1.2	60	—	a1	〃 2A	21住11中
○24	〃	ⅢB	11.9	3.1	10.7 (30)	0.6	25	—	〃	〃 〃	21住88中
○25	〃	ⅢC	7.3	3.7	7.0 (30)	0.6	25	—	a2	1A	21住80上
26	〃	ⅢA	10.7	3.8	9.1 (50)	1.0	60	—	a1	〃 〃	21住79上
○27	〃	ⅤA	12.2	3.9	3.9 (60)	1.5	75	—	a2	〃 3A	21住5下
28	〃	ⅤE	7.4	6.6	7.1 (40)	1.2	55	—	a1	〃 3B	21住フ
29	〃	ⅡE	12.1	6.8	7.0 (30)	1.5	150	—	—	〃 〃	〃
30	〃	ⅢD	8.3	4.7	5.6 (40)	1.9	60	—	—	〃 1B	〃
31	〃	ⅡC	4.6	7.4	3.7 (20)	1.1	50	—	a1	ss2A	—
32	〃	ⅢB	(4.2)	1.8	3.5 (30)	(0.7)	5	右半欠	〃	Gs1A	21住49中
○33	打石斧	ⅣDb	10.3	2.8	1.8 (50)	1.3	55	A	〃	〃 3A	21住27上
34	凹石	A	9.2	7.0		4.3	390	—		Ab	21住P_1
35	〃	G	10.4	8.6		5.5	615	—		〃	21住47中
○36	石鏃		2.1	2.2		0.4	1.1	—		ob	21住28上
○37	〃		2.3	1.6		0.5	1.5	—		〃	21住フ
○38	〃		2.3	1.7		0.3	0.8	—		〃	〃
○39	〃		1.7	1.3		0.4	0.6	—		〃	〃
○40	〃		1.9	1.5		0.7	2.1	—		〃	〃
○41	〃		1.7	(1.2)		0.3	0.4	片脚		〃	21住38上
○42	〃		1.9	(1.3)		0.4	0.8	〃		〃	21住フ
○43	〃		(1.9)	(1.5)		0.25	0.6	先端・片脚		〃	〃
○44	石匙		7.1	4.2		0.6	20.3	—		Gs	21住87上
○45	スクレ		2.4	2.2		0.6	2.6	—		ch	21住フ
○46	ドリル		2.7	2.2		0.8	2.5	—		ob	21住3上
○47	〃		2.1	1.2		0.5	1.15	—		〃	21住フ

22号住

○1	打石斧	ⅢCc	11.0	5.1	7.5 (50)	0.9	65	A	a1	Gs2A	22住フ
2	〃	ⅣDc	11.5	4.0	4.5 (20)	1.1	65	〃	〃	〃 〃	BT64
3	〃	b	6.3	4.4	3.8 (40)	0.8	25	C_2	〃	〃 1B	〃
○4	〃	ⅢAc	11.2	5.5	5.5 (60)	2.3	165	A	bc1	〃 1A	Bu65
○5	〃	ⅤBa	8.7	3.1	2.3 (30)	1.3	55	〃	ab1	〃 2A	〃
○6	〃	ⅣCc	9.4	4.1	3.8 (40)	1.3	60	〃	ab2	〃 1A	〃
7	〃	ⅢBc	11.2	4.8	4.5 (100)	1.6	105	〃	a2	ss2B	Bu63
8	〃	ⅡCb	12.8	4.3	3.5 (80)	1.7	105	〃	ab1	Gs3A	Bu63
○9	〃	ⅡAc	13.1	6.0	5.2 (50)	1.9	155	〃	—	ss2A	Bu65
10	〃	ⅢCc	10.5	4.3	3.8 (30)	1.1	75	〃	a1	Gs2A	〃
○11	〃	ⅣCb	(9.4)	4.9	4.7 (40)	1.1	80	〃	〃	〃 〃	〃
12	〃	Cc	(9.0)	4.0	3.7 (40)	0.9	55	C_2	〃	〃 2B	Bu63
13	〃	ⅤCc	9.8	3.3	2.3 (20)	0.6	35	A	b1	〃 〃	22住フ
○14	〃	ⅣBa	8.9	4.5	—	1.8	110	C_1	—	〃 1A	〃
○15	〃	ⅣAa	8.9	4.0	3.6 (80)	1.2	75	A	—	〃 2B	22住80
16	〃	ⅡD	14.4	3.9	—(50)	2.3	130	$E_{1,4}$	a2	〃 2A	Bu65

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
17	打石斧	ⅣCc	8.5	4.7	4.5 (40)	1.5	80	A	—	ss2B	BU65
○18	〃	ⅠBc	15.2	5.4	3.3 (80)	2.0	235	〃	a1	Gs3A	BV65
○⑲	〃	ⅡDc	(8.8)	4.2	3.6 (60)	1.7	110	B_2	〃	Gs2A	22住112
20	〃	ⅣD	(8.7)	3.3	—	1.1	40	B_1	—	〃1C	Bu65
○21	〃	ⅣBc	10.0	4.3	3.6 (20)	1.2	65	A	—	〃2C	〃
22	〃	ⅢB	(9.8)	4.5	—	1.6	90	B_1	—	〃1A	〃
○23	〃		(9.1)	5.4	—	2.1	135	D_3	—	〃2C	45住 Bu66
24	〃	ⅣCc	9.9	4.8	4.5 (40)	1.3	90	A	abcd2	〃2A	BT64
25	〃	ⅠBa	(7.3)	5.7	—	1.3	75	B_1	—	〃1A	22住フ
26	〃	D	(5.5)	3.4	—	1.4	35	C_1	—	〃1A	BV64
27	〃	C	(7.2)	3.6	—	1.1	35	E_1	—	Bs1A	22住フ
28	〃	b	(7.2)	3.7	— (40)	1.5	50	E_2	a1	Gs2A	—
29	〃	a	(6.4)	4.4	4.0 (40)	1.9	60	B_2	—	ss2B	BV64
30	〃	b	(5.4)	5.5	5.0 (40)	1.1	50	〃	bcd2	Gs1A	〃
○31	横刃	ⅤB	7.1	4.1	6.2 (20)	0.9	20	—	a1	Bs1A	22住フ
32	〃	ⅠB	7.7	3.5	7.5 (20)	0.8	30	—	de1	Gs2A	22住83
○33	〃	ⅢC	8.9	4.7	8.5 (20)	1.2	55	—	a2	〃2B	BV65
○34	〃	ⅡC	8.2	4.8	7.8 (20)	0.6	40	—	〃	〃2A	BV64
35	〃	ⅢB	8.2	3.9	7.1 (30)	1.3	50	—	—	〃〃	22住95
36	〃	ⅤC	7.6	4.8	6.0 (40)	1.2	70	—	a2	〃1B	BT63
37	〃	ⅠC	7.3	4.2	7.3 (30)	1.4	55	—	—	ss2C	22住113
38	〃	ⅢB	7.6	3.3	5.7 (20)	0.6	20	—	af2	Gs1A	22住フ
39	〃	ⅡC	6.3	6.1	5.6 (40)	1.3	70	?	a1	〃2A	22住66
40	〃	ⅡD	7.1	5.6	7.2 (40)	1.4	75	—	—	ms1C	22住フ
41	乳石斧		(9.8)	3.8	—	2.9	180	B_1		Gs	BV64
42	〃	ⅠB	(10.1)	5.7	3.8	3.5	275	B_2		〃	Bu63 コクド
㊸	〃	ⅠAB	7.3	4.8	—	2.8	150	B_1		〃	22住117
44	横刃?	ⅡB	10.5	1.8	9.7 (50)	1.4	35	—	a1	Gs1A	Bu65
45	凹石	F	12.4	11.3		5.2	885	—		Ab	22住77
46	〃	B	9.1	6.2		5.8	420	—		〃	22住102
47	〃	B	13.9	6.7		5.5	550	—		〃	BV65
48	〃	E	15.9	9.7		5.5	1130	—		〃	BV63
49	〃	D	9.5	5.2		3.1	200	—		〃	Bu63
50	〃	A	10.9	8.0		3.8	435	—		〃	BT64
51	〃	D	13.2	5.8		2.5	240	C		Ab	22住75
52	〃	I	6.8	5.5		2.2	75	〃		〃	BT65
53	〃	E	11.9	6.8		4.7	460	—		〃	Bu63
㊹	〃	A	10.0	7.6		5.3	520	—		〃	22住119
55	〃	D	10.5	5.1		3.1	200	—		〃	22住69
56	〃	D	12.1	5.4		4.8	470	—		〃	22住87
57	〃	B	13.7	5.9		5.7	670	—		〃	22住88
㊽	石皿		12.0	10.2		5.6	805	小片		〃	22住118
㊾	特磨	B	7.5	5.5		5.6	430	B		Gd	22住115
60	磨石	I	5.8	5.1		2.3	75	—		Ab	Bu65
○61	石鏃		3.3	1.6		0.4	1.55	片脚先		ob	22住62
○62	〃		1.5	1.3		0.4	0.7	—		〃	22住81
○63	〃		2.9	1.6		0.6	2.65	—		〃	22住フ
○64	〃		1.0	1.2		0.25	0.3	—		〃	〃
○65	〃		2.1	1.5		0.6	1.35	—		〃	〃
○66	〃		2.4	(1.4)		0.4	1.0	片脚		〃	〃
○67	〃		2.4	(1.4)		0.4	0.9	〃		〃	〃

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
○68	石鏃		2.2	(1.2)		0.3	0.6	片脚		ob	22住フ
○69	〃		2.4	(1.4)		0.4	0.8	〃		〃	〃
○70	〃		2.7	(1.3)		0.35	0.8	〃		〃	〃
○71	〃		2.6	(1.0)		0.4	0.75	〃		〃	〃
○72	石匙		3.9	4.0	4.0	0.9	11.3	—		ch	〃
○73	〃		9.3	5.3	9.3	0.7	35.4	—		Gs	Bu66
○74	スクレ		2.9	3.2	(2.3)	0.8	8.1	—		ch	22住フ
○75	〃		2.2	2.3	2.1	0.6	1.0	—		ob	〃
○76	〃		2.8	1.8	2.8	0.9	3.6	—		〃	22住114下
○77	〃		2.8	1.8	2.4	0.8	4.8	—		〃	22住フ
○78	〃		2.1	1.9	1.5	0.7	3.0	—		〃	〃
○79	〃		2.4	2.1	1.8	0.4	2.8	—		〃	〃
○80	ドリル		3.5	1.7	1.7	0.9	4.3	—		〃	〃
○81	〃		2.3	0.7	0.9	0.5	0.7	—		〃	〃
○82	〃		(3.6)	2.2	(1.0)	1.4	5.6	先端		〃	〃
○83	〃		(2.7)	1.3	(0.9)	0.8	2.6	〃		〃	Bu68
○84	〃		(3.5)	1.8	(0.8)	0.9	5.5	〃		〃	22住フ
○85	〃		5.4	1.1	0.9	0.7	4.6	—		Gs	Bu68

23号住

1	打石斧	ⅢCa	11.6	4.5	3.5 (60)	1.8	150	A	a2	Gs2A	BW63
○2	〃	〃	10.8	4.5	4.3 (60)	1.4	110	〃	—	〃1A	23住フ
○3	〃	ⅣCa	8.0	4.2	3.7 (40)	1.2	60	〃	a1	〃2A	23住63上
○4	〃	ⅣCc	9.9	4.2	3.9 (50)	0.8	50	〃	a2	〃1A	BX63Ⅰ
5	〃	ⅢC	(11.2)	4.2	—	0.6	40	C_1	—	ms1C	23—50上
6	〃	ⅣCb	9.5	4.7	4.5 (40)	1.3	80	A	ad1	Gs2A	23住フ
7	〃	ⅡCa	10.7	5.3	4.9 (50)	1.5	125	〃	a2	〃3A	BW63
8	〃	ⅤCa	9.0	3.3	3.1 (30)	0.9	30	〃	—	ms2C	BX63—Ⅰ
9	〃	ⅣCc	9.1	4.8	5.2 (30)	1.1	60	〃	—	〃1C	BX62Ⅰ
○10	〃	ⅠCb	13.0	6.4	5.1 (70)	1.9	240	〃	a1	Gs2A	23—46中
11	〃	ⅤBb	(7.4)	3.6	3.3 (30)	1.0	40	B_2	—	〃1B	23住フ
12	〃	—	(9.2)	4.5	—	1.6	95	D_3	—	〃1C	BW63
13	〃	—	(6.3)	4.2	—	1.1	40	C_1	—	〃1A	BX62
14	〃	C	(7.7)	4.8	—	1.6	85	B_1	—	〃1B	23住—7
15	〃	D	(8.5)	3.9	—	1.0	65	C_1	—	〃2A	23住—8中
16	〃	ⅣBb	(8.8)	3.6	— (30)	1.3	75	D_3	—	〃1A	BW63
17	〃	ⅡC	11.8	4.4	— (30)	1.7	100	〃	ab2	〃〃	〃
18	〃	ⅣAc	8.8	4.2	3.8 (30)	1.6	55	A	—	ms1C	BX63Ⅰ
19	〃	ⅣCa	8.2	4.1	4.0 (30)	1.4	65	〃	a1	Gs1A	BX62
20	〃	〃	8.2	5.1	4.7 (30)	1.0	65	〃	—	〃2A	23住43中
○21	横刃	ⅤD	7.8	6.1	7.9 (30)	1.0	55	—	a1	ms1A	BX62Ⅰ
○22	〃	ⅡC	7.7	6.1	7.0 (40)	1.6	105	—	a1	ss2A	BX63Ⅰ
23	〃	ⅢC	8.7	4.9	7.5 (20)	1.5	60	—	a1	Gs1A	23住フ
㉔	?	ⅡC	10.9	4.4	7.7 (30)	1.3	60	—	a2	〃3A	23住21生
25	乳石斧	ⅠAB	(13.0)	5.0	—	3.2	370	B_1		〃	23住30
○26	敲打器		13.6	5.8		4.0	475	—			BW63
㉗	凹石	H	9.8	7.3		4.9	450	—		Ab	23住24生
28	〃	H	9.0	8.3		5.2	415	C		〃	23住フ(B×6)
29	〃	B	8.6	7.2		5.1	410	—		〃	BX62Ⅰ
30	〃	A	14.4	—		4.2	375	B		〃	BW63

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
31	凹石	D	11.7	7.4		3.7	355	—		Ab	23住47中
32	〃	B	12.5	6.7		5.7	485	C		〃	BX62－2
33	〃	I	8.2	6.3		4.2	300	—		〃	23住44中
34	〃	J	9.6	8.2		4.8	360	—		〃	BW63
35	〃	D	11.0	6.7		4.2	440	—		〃	BX62－I
○㊱	石鏃		1.7	1.2		0.2	0.4	—		ob	23住床
○㊲	〃		1.8	1.1		0.25	0.4	片脚		〃	〃
○38	〃		2.3	1.7		0.75	2.7	—		〃	23住フ
○39	〃		1.8	1.6		0.4	1.5	—		〃	〃
○40	〃		(1.6)	(1.3)		0.3	0.6	下半		〃	〃
○41	〃		(1.9)	2.1		0.5	1.8	先端		〃	〃
○㊷	〃		2.2	(1.2)		0.4	0.85	片脚		〃	23住床
○43	〃		2.7	1.2		0.7	1.8	—		〃	23住フ
○44	スクレ		5.3	3.1	5.2	1.2	15.3	—		〃	BX63I
○45	〃		4.5	2.5	3.2	1.3	11.9	—		〃	23住フ
○46	〃		3.1	2.3	2.9	0.7	5.0	—		〃	〃
○47	〃		3.4	2.1	2.7	0.7	4.8	—		〃	〃
○㊽	ドリル		3.9	0.9	1.9	0.8	1.8	—		〃	23住床
○49	〃		(2.2)	1.4	—	0.7	1.8	先端		〃	23住フ
○50	石皿		29.4	18.1	—	6.5	4060	⅔欠		Ab	23住12上
○51	石棒？		44.7	16.7		12.3	—	—		Ab	23住

24号住

○①	打石斧	ⅣAa	10.0	4.6	4.3 (60)	1.1	75	A		Gs	24住－5床
②	〃	ⅡCc	11.9	5.7	5.7 (70)	2.3	175	〃		ss	24住周溝内P7～P10床
③	〃	ⅢCa	9.8	4.0	3.9 (60)	0.7	50	〃		Gs	24住77床
4	〃	ⅢBa	(9.2)	4.8	3.2 (70)	1.2	80	B_2		〃	24住23フ
○⑤	〃	ⅢCb	10.4	4.5	4.2 (40)	1.0	65	A	局部磨製	〃	24住7生
6	〃	ⅢBa	12.0	5.1	3.5 (60)	1.7	135	〃		〃	24住50
○7	〃	ⅡCc	12.5	4.8	4.6 (70)	1.3	140	〃		〃	24住17フ
⑧	〃	ⅡAc	14.2	5.2	4.7 (30)	1.6	135	〃		〃	24住32生
○⑨	〃	ⅣAa	9.6	5.3	5.3 (50)	1.4	75	〃		ss	24住14生
10	〃	Ⅰb	(6.4)	6.0	5.5 (40)	1.7	80	B_2		Ab	24住24フ
○11	〃	ⅡC	(12.6)	4.7	—	2.4	125	C_1		Gs	24住6上
⑫	〃	ⅢC	(7.9)	4.5	—	0.9	40	D_3		〃	24住8床
13	〃	ⅣB	(7.8)	4.0	—	0.8	45	C_2		〃	24住22フ
○⑭	横刃	ⅣC	8.6	5.6	8.6 (40)	1.0	70	—		〃	24住85床
○15	〃	ⅡB	7.0	2.4	6.7 (50)	0.8	30	—		〃	24住19フ中
16	〃	〃	7.2	2.7	7.2 (30)	0.4	20	—		〃	BR62
17	〃	〃	8.0	3.1	8.0 (20)	0.5	20	—		〃	24住フ
18	刃器	ⅡD	5.3	4.8	4.8 (20)	0.7	30	—		〃	—
19	〃	ⅣB	7.6	3.8	4.7 (20)	0.7	20	?		〃	24住P－12
⑳	〃	〃	11.3	2.6	11.0 (50)	1.0	40	—		〃	24住12生
21	乳石斧	ⅢAB	13.2	4.2	3.5	2.7	245	A		〃	24住P－30
㉒	〃	ⅠAB	20.2	5.2	3.7	3.3	545	〃		〃	24住27床
㉓	〃	ⅢB	11.1	4.5	3.9	1.8	155	〃		〃	24住P7
㉔	〃	ⅠA	(9.9)	—	3.4	—	130	B_2		〃	24住82ユ
○25	刃器	ⅣA	15.7	5.0	15.5 (40)	1.8	135	—		ms	24住21上
26	凹石	J	9.7	7.9		6.8	515	—		Ab	24住79中
27	〃	E	11.2	8.4		6.3	690	—		〃	24住10中

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
28	凹石	D	12.8	6.0		3.6	355	—		Ab	24住15上
29	〃	E	11.2	7.2		6.0	715	—		〃	24住34上
30	〃	H	9.6	9.0		4.4	470	—		〃	24住37上
31	〃	G	11.3	10.7		6.3	670	—		〃	24住36
32	〃	H	10.3	8.3		3.9	430	—		〃	BQ61
33	〃	J	9.9	6.2		4.5	455	—		〃	24住28下
㉞	〃	G	9.0	7.8		6.1	470	—		〃	24住42床
35	〃	I	8.9	5.7		4.0	235	—		〃	24住P12
36	〃	E	11.6	7.7		5.3	585	—		〃	24住P23
37	〃	A	8.3	6.7		3.5	280	—		〃	24住P1
㊳	〃	A	8.7	7.0		3.6	325	—		〃	24住9床
39	〃	I	6.7	4.6		3.2	110	—		〃	BQ61
○㊵	石鏃		2.3	1.5		0.4	0.8	—		ob	24住20生
○41	〃		1.9	1.6		0.3	0.7	—		〃	24住フ
○42	〃		1.4	1.4		0.2	0.35	—		〃	〃
○43	〃		1.5	0.9		0.25	0.25	—		〃	24住13上
○44	〃		2.1	1.6		0.6	1.7	—		〃	24住フ
○45	〃		2.0	1.5		0.5	1.35	—		〃	〃
○46	〃		2.9	1.6		0.3	1.4	—		〃	〃
○47	〃		2.0	1.3		0.3	0.85	—		〃	〃
○48	〃		2.7	1.6		0.7	3.0	—		〃	〃
○49	〃		2.2	(1.2)		0.5	0.9	片脚		〃	24住59中
○50	〃		2.2	1.4		0.4	1.25	〃?		〃	24住70
○51	〃		(1.1)	1.8		0.3	0.7	上半		ob	24住フ
○52	〃		(1.4)	2.1		0.4	1.05	〃		〃	24住39中
○53	〃		(1.3)	1.5		0.4	0.65	先端		〃	24住P7
○54	〃		2.2	(1.3)		0.3	0.7	片脚		〃	24住フ
○55	〃		2.0	1.6		0.5	1.6	—		〃	〃
○56	〃		1.8	1.3		0.5	1.05	—		〃	〃
○57	〃		2.2	1.7		0.5	1.8	—		〃	〃
○58	〃		1.9	0.9		0.3	0.65	—		〃	〃
○59	〃		1.5	1.6		0.45	0.7	—		〃	24住61中
○㊿	石匙		6.5	5.7	6.5	1.2	41.3	—		ms	生活面で打石斧と一緒 24住32
○㊶	〃		4.2	2.2	4.0	0.6	4.2	—		ch	生活面で凹石と共伴 24住44
○62	スクレ		7.7	5.2	6.1	1.9	69.7	—		ob	24住3中
○63	〃		5.7	4.8	3.7 4.2	1.3	29.3	—		〃	24住4中
○64	〃		4.4	3.7	3.8	1.4	22.8	—		ch	24住37—2中
○65	〃		9.2	5.8	9.0	1.6	84.8	—		Gs	24住63下
○66	〃		3.8	2.3	1.6	1.0	7.7	—		ob	24住フ
○67	〃		2.9	0.9	2.9	0.3	0.8	?		〃	〃
○68	〃		2.1	1.9	2.0	0.9	2.8	—		〃	〃
○㊾	〃		2.7	2.4	2.4	0.6	3.8	—		〃	24住P
○70	〃		2.2	2.0	1.6	0.7	3.3	—		〃	24住フ
○71	〃		2.2	1.6	1.6	0.8	3.3	—		〃	〃
○72	〃		(3.2)	1.5	2.5 3.2	0.9	3.6	半欠		〃	〃
○㊸	ドリル		2.5	1.3	0.8	0.6	1.5	—		〃	24住P
○㊹	〃		2.8	0.8	1.4	0.6	1.0	—		〃	24住P9内
○75	〃		2.7	1.7	0.6	0.8	2.9	—		〃	24住フ
○76	〃		2.2	1.3	0.4	1.0	2.5	—		〃	〃
○77	〃		2.6	1.4	—	0.7	1.8	—		〃	〃
○78	〃		2.2	0.9	0.5	0.4	0.6	—		〃	〃

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
○79	石棒		20.3	15.7	—	6.9	—	一部		Ab	24住71下
○80	〃		25.0	14.5	—	13.0	—	〃		〃	24住47中
○81	〃		17.5	14.7	—	7.4	1980	¾欠		〃	24住33

25号住

○①	打石斧	ⅣCb	8.6	5.2	4.6 (30)	0.9	65	A	局部磨製	Gs1A	25住88(ユ)生
②	〃	ⅡB	11.5	5.2	4.1	2.0	160	C_1	—	〃 3A	25住84ユ
○3	〃	ⅢCa	10.1	5.2	5.2 (40)	1.8	120	A	—	〃 1A	25住63中
○④	〃	ⅢCc	10.2	4.1	4.1 (30)	1.1	60	〃	e2	〃 2A	25住22生
5	〃	ⅢBb	10.4	4.5	4.5 (60)	1.6	140	〃	ab2	〃 〃	BL59—Ⅰ—Ⅱ
○⑥	〃	ⅠA	(13.7)	(7.0)	—	2.0	255	B_1	—	ms1B	25住57生
○⑦	〃	ⅡCa	13.5	5.0	5.0 (40)	2.1	180	A	e2	ss2A	25住8ユ
○⑧	〃	ⅤB	8.0	4.6	—	1.0	55	C_1	—	Gs1A	25住107ユ
○9	〃	ⅢBb	11.0	5.0	3.8 (30)	1.2	110	A	de2	〃 3A	25住3下
⑩	〃	ⅤC	(8.9)	3.5	— (50)	0.9	35	C_1	de3	〃 2A	25住ユ—1床
⑪	〃	B	(9.8)	5.0	—	1.0	70	B_1	—	〃 1A	25住97(ユ)下
○12	〃		(7.3)	5.4	4.6 (60)	2.0	115	B_2	a2	〃 3A	25住115中
⑬	〃	—	(6.8)	3.8	—	1.2	45	B_1	—	〃 1A	25住112床
14	〃	—	(5.5)	3.9	—	1.2	40	〃	—	ss2A	25住677
15	〃	ⅡB	(8.6)	5.2	—	1.6	160	C_1	—	Gs1B	25住10下
○⑯	〃		(7.1)	5.2	—	1.7	95	D_3	—	〃 3A	25住85床
17	〃	—	(5.9)	3.6	—	1.1	40	B_1	—	ms1A	BK59—Ⅰ—Ⅱ
18	〃	—	(8.2)	4.9	—	1.1	45	C_1	—	〃 1C	25住94上
19	〃	ⅠCa	(9.5)	6.8	5.4 (50)	1.3	125	C_2	—	Gs3B	BL59ⅠⅡ
⑳	〃	ⅠC	(7.5)	6.6	—	2.0	120	D_3	—	ms1C	25住76床
○㉑	横刃	ⅢC	7.4	4.6	7.4 (30)	0.6	30	—	a1	Gs3A	25住38ユ
22	〃	ⅢD	10.0	4.9	10.0 (40)	0.6	40	—	a2	ms1A	25住46中
○㉓	〃	ⅢB	(8.6)	3.9	4.8 (40)	0.7	25	先端欠	a1f3	Gs1A	25住85床
㉔	〃	〃	9.5	3.7	7.5 (40)	0.8	25	—	—	ms1C	25住11ユ
㉕	〃	ⅢC	5.1	3.4	—(30)	0.4	10	端欠	a1	Gs1A	25住24床
26	〃	〃	6.1	4.7	4.9 (50)	0.6	25	—	—	ms1B	25住フ
○27	乳石斧	ⅠA	8.7	4.7	—	4.0	270	B_1		Gs	25住78フ
28	〃	ⅠAB	8.0	—	—	5.0	250	E_2		〃	BJ58
29	粗大刃	ⅢE	8.7	5.4	7.5 (70)	2.3	135	—	d2	Gs3A	102—フ
㉚	凹石	E	14.4	11.0		6.4	1040	—		Ab	25住44ユ
㉛	〃	E	10.0	8.0		5.4	405	—		〃	25住—110下
32	〃	H	10.9	8.5		5.8	615	—		〃	25住
㉝	〃	E	9.3	6.3		5.2	430	—		〃	25住103ユ
○㉞	石鏃		1.8	(1.3)		0.5	0.9	片脚		ob	25住101ユ
○㉟	〃		1.7	1.0		0.3	0.3	—		〃	25住炉西側床
○36	〃		1.8	1.3		0.4	0.7	—		〃	25住フ
○㊲	石匙		2.6	1.9	2.4	0.6	2.4	—		〃	25住55ユ
○38	〃		4.3	4.0	4.0	0.8	13.0	—		ms	BL59
○39	台石		26.2	10.4	—	7.3	—	—		Ab	25住27下

26号住

①	打石斧	—	(7.3)	3.4	—	1.3	35	C_1	—	Gs1A	26住—59
○2	〃	Bb	(8.0)	6.0	5.8 (50)	1.1	80	B_2	—	ms1B	26住36

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
○3	打石斧		(10.3)	5.2	4.6 (80)	1.6	165	B_2	a1	Gs1A	26住103
○4	〃	ⅣAc	8.9	3.6	3.1 (50)	1.5	65	A	〃	ms1A	26住フ
○5	〃	Cc	(7.6)	4.5	3.8 (60)	1.3	80	B_2	abc2	Gs2B	〃
6	〃	A	(7.3)	4.7	—	1.1	50	B_1	—	〃 1B	〃
7	〃	ⅣBc	8.5	3.9	3.0 (70)	1.5	75	A	a1	〃 2A	〃
8	〃	Ba	8.4	4.8	4.2 (90)	1.8	105	B_2	—	ms1C	〃
9	〃	ⅤCa	9.1	3.6	2.7 (80)	0.7	35	A	—	Gs3B	〃
10	〃	〃	7.5	3.8	3.6 (50)	1.1	35	〃	—	ms1B	26住41
○11	〃	ⅠDb	21.2	5.6	3.6 (40)	1.8	340	〃	—	Gs3A	26住46
○12	〃	ⅢCc	11.4	3.9	3.4 (80)	1.3	95	〃	abd3	〃 1A	26住52
13	〃	c	5.5	4.7	4.3 (50)	1.3	50	B_2	a1	〃 3A	26住49
14	〃	〃	5.1	5.0	4.9 (60)	1.2	50	〃	—	〃 1B	26住フ
15	横刃	ⅡC	6.9	4.4	6.7 (20)	0.5	20	—	—	〃 1A	26住29
○16	〃	ⅠC	8.0	5.0	6.3 (30)	1.6	60	—	a1	〃 1B	26住フ
17	〃	ⅣB	8.4	3.8	7.9 (40)	1.6	65	—	〃	〃 2A	26住17
18	〃	ⅡB	7.7	2.8	6.9 (60)	1.0	35	—	—	ms1C	26住
⑲	〃	ⅡA	10.2	5.0	6.3 (50)	0.7	65	—	ade2	Gs1B	26住50
○20	〃	ⅡC	(7.5)	4.0	7.5 (40)	1.0	35	—	a1f3	〃 1A	26住43
21	乳石斧	ⅡA	11.1	4.4	—	2.9	210	C_1		〃	26住フ
○22	〃	ⅠA	(10.7)	—	—	—	220	E_1		〃	26住20
○㉓	小型磨石斧		—	—	—	1.1	15	〃	—	Sp1A	26住48
24	刃器	ⅣD	7.5	6.0	7.5 (60)	0.9	40	—	a1	Gs1A	26住6
25	〃	ⅣC	7.7	6.7	7.7 (60)	1.3	85	—	—	ss2A	26住フ
26	凹石	H	8.3	7.9		3.6	290	—		Ab	26住34
27	〃	H	10.6	8.4		4.6	360	—		〃	26住24
28	〃	G	9.6	8.4		5.8	445	C		〃	26住33
29	〃	?	(7.1)	(6.7)		5.0	220	B		〃	26住21
○30	石鏃		2.3	1.3		0.3	0.8	先端少		水晶	26住47
○31	〃		1.5	1.2		0.3	0.25	—		ob	26住フ

27号住

1	凹石	H	8.8	7.7		5.2	525	—		Ab	27住フ53
2	〃	D	10.6	5.1		3.6	240	—		〃	27住フ18
③	〃	D	9.7	5.1		3.5	195	—		〃	27住生14
4	乳石斧	Ⅱ	14.6	4.5	—	3.7	400	未成		Gs	27住フ
5	凹石	E	12.1	9.3		5.9	760	—		Ab	27住フ
○⑥	石鏃		1.7	1.3		0.3	0.5	—		ob	〃58
○⑦	〃		(1.9)	1.4		0.5	1.2	先端		〃	27住59ユ
○8	石匙		5.7	3.9		0.6	13.1	—		ms ?	27住30
○9	ドリル		4.5	0.9	0.5	0.6	2.45	—		ch	27住中45
○10	〃		2.3	1.0	1.1	0.6	1.15	—		〃	27住39フ
○11	石皿		24.7	22.9	—	5.3	—	—		Ab	27住フ

28号住

○1	打石斧	ⅡB	(8.8)	4.7	—	2.0	105	$D_{1,3}$	—	ss3A	28住43
2	〃	ⅣBc	9.3	3.9	3.0 (50)	1.4	55	A	—	ms1C	28住67
③	〃	—	8.1	3.8	3.4 (50)	1.2	45	〃	—	〃 〃	28住41
4	〃	a	(8.0)	4.8	3.7 (20)	0.7	40	C_2	—	〃 〃	BM56, 28住フ

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
5	打石斧	—	(7.8)	4.5	—	1.5	80	B_1	—	Gs 2B	BM56, 28住フ
○6	〃	ⅢAc	11.2	4.7	4.5 (70)	2.4	140	A	ab2	〃 2A	〃
○7	〃	ⅢB	(10.7)	4.6	—	1.4	80	C_1	b3	Bs 1A	28住31
8	〃	〃	(9.2)	4.6	—	1.6	85	〃	—	Gs 2A	BM56, 28住フ
9	〃	IDa	18.6	4.8	3.2 (50)	2.6	265	E_1	—	〃 3B	28住36
10	〃	—	7.4	5.7	—	1.9	95	C_1	—	ss 2A	28住フ
11	剥片	ⅡC	7.6	4.2	—	1.0	40	—	—	Gs 3B	28住33
12	石器	ⅡD	9.7	5.8	7.6 (30)	1.3	75	—	a1	〃 2A	28住51
13	乳石斧	I	(8.7)	5.1	—	—	140	E_2		〃	BM56, 28住フ
14	凹石	E	10.2	5.7		5.3	365	—		Ab	28住4
15	〃	〃	11.6	9.2		6.2	570	C		〃	28住42
16	〃	J	12.6	7.6		6.8	670	—		〃	28住53
⑰	〃	B	(7.5)	6.8		5.3	420	B		〃	3116と接合, 28住55
⑱	〃	J	8.6	6.4		5.1	290	—		〃	28住内炉内
⑲	〃	A	10.7	7.1		4.2	455	—		〃	28住71
20	〃	B	(6.1)	5.8		5.4	265	B		〃	9026と接合, 28住フ
㉑	〃	A	4.5	5.4		4.3	160	C		〃	28住44
22	〃	〃	(8.2)	6.1		2.6	195	〃		〃	28住9
23	〃	J	13.4	7.5		4.7	340	—		〃	28住32
㉔	〃	D	10.7	5.3		2.6	235	—		〃	28住70
㉕	〃	E	10.2	5.2		4.9	290	—		〃	28住40
㉖	磨石	J	(7.9)	8.0		3.6	365	B		〃	28住10
27	凹石	F	13.1	11.2		4.0	720	—		〃	28住35
○28	石鏃		1.9	1.3		0.35	0.7	—		ob	28住61
○29	〃		(1.9)	(1.4)		0.5	0.9	先、片脚		〃	BM57
○30	石匙		4.6	2.3	4.3	0.4	3.9	—		ch	BM55

29号住

1	打石斧	ⅢB	(11.1)	4.7	(4.3)(50)	1.3	95	B_1	—	Gs 2A	BS67
○2	〃	ⅡC	(12.8)	5.7	— (70)	1.7	140	$E_{1.4}$	a1	〃 2B	BS66
3	〃	Cc	(6.2)	5.0	4.0 (50)	1.0	45	B_2	a2	ms 1A	29住88
○4	〃	ⅣCb	7.4	5.7	5.6 (40)	1.0	50	A	a1	〃 〃	29住フ
○5	〃	ⅢDa	12.9	4.1	3.8 (50)	1.5	105	〃	a2	Gs 3A	29住フ
6	〃	ⅣAa	8.2	4.2	4.0 (50)	1.5	75	〃	—	ms 1C	BS67
○7	〃	ⅢAa	11.6	5.0	4.8 (50)	1.9	150	〃	—	ss 2B	29住フ
○8	〃	VBb	8.2	3.5	2.9 (30)	0.5	25	〃	a1	Gs 1B	〃
9	〃	C	(8.2)	4.3	—	1.5	75	C_1	—	〃 1A	〃
10	〃	ⅢA	(10.3)	4.5	—	1.2	80	$D_{1,3}$	—	〃 〃	〃
11	〃	C	(8.9)	4.6	—	1.4	65	B_1	—	〃 2A	〃
12	〃	ⅡB	(10.6)	5.3	—	1.8	125	C_1	—	〃 1B	BS67
13	〃	ⅢB	(10.2)	4.4	— (50)	1.3	80	D_3	ab2	〃 2A	29住フ
14	〃	Db	(8.9)	4.1	3.3 (40)	1.6	75	$D_{3,2}$	a1	〃 〃	〃
○15	〃	ⅣCa	(7.8)	3.8	3.6 (70)	1.0	50	〃	ab2	〃 1A	〃
16	〃	Cc	(6.7)	5.0	4.7 (40)	1.1	60	B_2	—	〃 2B	〃
17	〃	Bb	(8.0)	4.5	3.6 (60)	0.8	50	C_2	a2	〃 3B	〃
18	〃	Ba	(8.2)	5.6	4.7 (60)	0.8	70	B_2	〃	〃 2A	—
19	〃	Bb	(5.8)	4.8	4.7 (100)	1.4	55	C_2	〃	ss 2B	BQ55
○20	〃	ⅣBa	(9.4)	4.3	3 4 (80)	1.2	80	$D_{3,2}$	ab2	Gs 2A	29住フ
21	〃	C	(6.1)	4.6	—	1.4	65	D_3	—	〃 2B	〃
22	〃	c	(6.0)	4.2	—	1.0	35	〃	—	〃 1C	BS67

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
23	打石斧	—	(7.7)	4.5	—	1.2	70	$D_{1,3}$	—	Gs 1C	—
24	〃	A	(6.5)	4.6	—	1.1	50	B_1	—	〃 2A	—
25	〃	—	(7.2)	(4.0)	—	2.0	65	E_2	—	ms 1B	29住フ
○26	横刃	ⅡE	10.7	5.1	7.1 (30)	2.2	105	—	a 2	Gs 2A	〃
○27	〃	ⅣA	10.8	5.7	10.2 (20)	1.2	95	—	a 2 S	〃 1A	〃
28	〃	ⅢC	7.1	4.2	7.1 (30)	0.7	30	—	a 1	〃 2A	〃
29	〃	ⅢB	8.0	3.0	7.9 (50)	0.8	20	—	〃	〃 〃	BS67
30	〃	ⅡB	8.7	2.8	8.7 (40)	1.2	40	—	a 1 f 2	〃 1A	29住フ
○31	粗大石ヒ？	〃	11.6	3.3	8.2 (40)	1.0	45	—	a 1	〃 2A	BS67
32	凹石	E	12.6	7.7		4.8	615	—		Ab	〃
33	〃	E	(7.8)	7.6		4.8	370	B		〃	9226と接合，29住フ
34	〃	E	13.2	7.6		5.8	735	C		〃	〃
35	〃	E	9.8	6.0		5.2	325	—		〃	〃
36	〃	B	9.2	6.1		4.1	350	B		〃	〃
○37	石鏃		1.8	1.8		0.3	0.6	—		o b	BR56
○38	スクレ		2.7	2.1	1.8 2.7	0.7	3.8	—		〃	BS66
○39	敲石		23.5	9.8	—	7.6	—	—		Ab	29住フ
○40	石棒？		27.0	17.0	—	15.5	—	半欠		〃	〃
○41	〃		41.8	8.8	—	5.6	3300	端欠		Gs	〃

30号住

○1	打石斧	ⅢCb	11.3	4.5	3.8 (60)	1.2	80	A	abc 2	Gs 2A	30住58
○2	〃	ⅢCc	(8.9)	5.1	5.1 (60)	1.7	90	$D_{3,2}$	ab 3	s s 2A	30住45
○3	〃	ⅣDa	9.3	3.7	3.5 (60)	1.0	65	A	—	Gs 2A	30住47
○4	〃	ⅣBb	8.9	3.8	3.6 (60)	1.1	50	〃	abc 3	〃 1A	30住27
5	〃	ⅤDc	9.0	3.4	2.6 (60)	0.9	35	〃	a 1	Bs 1A	30住フ
6	〃	ⅣAc	9.8	3.7	3.5 (50)	0.8	50	〃	a 2	Gs 1A	30〃
7	〃	ⅢAb	10.8	4.5	4.3 (70)	1.0	80	〃	ab 2	〃 2A	30住50
○8	〃	ⅡBc	11.7	6.8	6.6 (30)	1.3	115	〃	bc 1	〃 1A	30住フ
○9	〃	ⅣAa	9.7	4.9	4.9 (60)	1.7	120	〃	a 1	ms 1A	〃
○10	〃	ⅣCb	8.9	4.8	4.3 (60)	1.3	95	〃	a 2	Gs 3A	〃
11	〃	〃	8.6	4.3	4.0 (60)	1.5	75	〃	a 1	〃 2A	BS65
○12	〃	ⅢCb	11.7	4.6	— (50)	1.4	100	$E_{1,4}$	ab 3	s s 2A	30住フ
13	〃	ⅣA	(7.3)	3.5	—	1.1	35	C_1	—	Gs 1B	BT65—Ⅰ
14	〃	B	(6.6)	—	—	1.1	25	〃	—	〃 2A	30住フ
15	〃	ⅣCc	9.8	4.3	4.2 (30)	1.0	45	A	—	ms 1C	30住43
16	〃	—	7.8	3.5	3.5 (70)	1.0	40	〃	a 1	Gs 1B	30住フ
○17	〃	ⅤDb	8.1	2.8	1.4 (20)	0.7	20	〃	〃	〃 1B	〃
18	〃	ⅠBb	(9.1)	5.9	5.2 (70)	1.5	105	B_2	—	s s 2A	30・31住フ
19	〃	ⅢDb	(11.7)	4.1	3.3 (70)	2.0	165	A	abc 2	Gs 2A	BS65
20	〃	ⅣCc	(8.9)	4.2	4.4 (70)	1.2	55	〃	a 2	〃 2A	30住29
21	〃	c	(7.0)	6.3	5.9 (70)	0.9	50	B_2	〃	〃 〃	30住フ
22	〃	〃	(8.6)	4.8	4.8 (80)	1.3	75	C_2	a 3	〃 1B	〃
23	〃	〃	(7.3)	5.7	5.6 (30)	0.8	50	〃	bd 3	〃 1A	〃
24	〃	ⅣA	(8.2)	3.5	— (30)	1.1	40	E_2	a 1	〃 2A	〃
○25	〃	ⅠAc	(9.2)	6.5	6.5 (90)	2.0	130	B_2	〃	s s 2A	BS65
26	〃	ⅡAc	(15.5)	4.0	— (30)	1.7	105	$D_{1,3}$	—	Gs 2A	30住フ
27	〃	—	(8.0)	4.6	—	1.3	55	C_1	—	ms 1B	30住19
28	〃	b	(7.2)	4.3	4.2 (60)	0.6	30	B_2	a 1	Gs 2A	30住50
29	〃	ⅣB	(8.9)	4.1	—	0.7	40	$D_{1,3}$	—	ms 1C	30住フ

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
30	打石斧	c	(6.4)	3.7	— (70)	1.1	30	B_2	a2	Gs2A	BS65
31	〃	—	(7.6)	4.3	—	0.7	30	C_1	—	〃1A	30住フ
32	〃	—	(7.1)	3.3	—	1.4	45	D_3	—	〃〃	〃
33	〃	—	(7.2)	4.1	—	1.2	55	〃	—	〃2A	〃
34	〃	ⅡAc	10.6	5.8	5.3 (40)	2.0	150	A	—	ms2C	30住60
35	横刃	ⅡC	5.8	4.3	5.8 (30)	0.6	20	—	a1	Gs2A	30住フ
○36	〃	ⅤB	7.5	3.0	7.3 (40)	0.6	20	—	a2	〃1A	〃
37	〃	ⅢC	6.8	3.9	6.8 (50)	1.0	30	—	—	ms2C	30住44
38	〃	ⅡB	6.5	2.4	5.7 (30)	0.6	10	—	a1	Gs1A	30住フ
39	〃	〃	8.0	3.3	7.7 (40)	0.5	20	—	a2	〃〃	Bu66
40	〃	〃	6.2	3.6	6.2 (50)	0.9	30	—	〃	〃〃	30住59
○41	〃	ⅡA	12.5	4.7	11.6 (60)	1.5	105	—	〃	〃〃	30住フ
42	〃	ⅡB	7.1	3.5	4.8 (40)	0.8	30	—	a1	〃〃	30・31住
○43	刃器	ⅡD	10.2	5.8	5.4 (30)	0.8	60	—	〃	〃〃	30住P
44	乳石斧	ⅡAB	(9.9)	4.6	—	2.6	165	B_1		〃	30住P
45	定角石斧		5.0	5.3	—	3.0	95	B_1	—	Sp3A	30住フ
46	刃器	ⅡE	7.4	6.6	6.1 (40)	1.0	65	—	a1	Gs2A	BS65
47	石錘		3.2	2.6		1.1	15	—	—	Gd2A	BS65
48	凹石	E	10.8	6.3		5.0	470	—		Ab	30住53
49	〃	E	13.9	8.9		5.5	645	—		〃	30住フ
50	〃	H	8.2	7.2		4.9	295	—		〃	BT65T
51	〃	D	9.7	6.1		3.9	250	—		Ab	30住フ
52	〃	E	9.9	6.1		4.3	355	—		〃	30住22
53	〃	G	10.3	7.9		7.0	665	—		〃	30住30
54	〃	G	10.1	7.3		6.0	560	—		〃	30住62
55	〃	A	12.5	5.8		5.1	615	—		〃	30住63
56	〃	E	12.9	8.4		6.0	725	—		〃	30住65
57	〃	I	6.2	5.4		4.6	170	—		〃	30住51
58	〃	G	10.3	7.8		6.6	600	—		〃	30住74
59	〃	J	11.3	6.5		4.1	295	—		〃	30住56
60	〃	B	8.2	4.2		4.1	185	—		〃	30住フ
61	〃	C	20.3	9.4		6.9	1590	—		〃	30住49
62	〃	I	7.1	5.9		3.3	180	—		〃	30住フ
63	〃	D	(6.8)	7.9		4.3	360	B		〃	30住36
64	〃	H	8.4	7.9		5.1	360	—		〃	30住25
65	〃	F	13.8	10.8		5.3	855	—		〃	BS65
66	磨石	B	8.3	6.5		6.8	425	C			30住57
67	〃	A	7.7	5.4		3.9	230	B		〃	BS65
68	?		5.2	4.0		3.3	115	—		〃	30住フ
○69	石鏃		1.7	1.4		0.4	0.95	片脚		ob	〃
○70	〃		2.2	1.0		0.4	0.6	〃		〃	〃
○71	スクレ		7.5	3.5	7.0	1.0	36.3	—		ms	〃
○72	〃		6.6	4.7	6.2	1.3	41.5	—		〃	〃
○73	〃		4.8	4.2	4.6	1.0	21.7	—		ch	〃
○74	ドリル		5.1	1.4	1.1	1.2	5.2	—		ob	〃
○75	〃		3.8	2.0	2.0	0.6	2.9	—		〃	〃
○76	?		2.1	1.1		0.4	0.9	?		〃	〃
○㊼	石皿		13.3	12.5	—	5.8	1400	¾欠		Ab	30住床

31号住

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
○1	打石斧	ⅠCa	13.0	7.1	7.1 (110)	2.9	325	A	a1	Gs3A	31住11
○2	〃	ⅢBb	10.7	4.2	3.0 (50)	1.9	115	〃	abc2	〃1A	31住5
3	〃	ⅡAb	13.1	5.0	4.5 (80)	1.9	190	〃	abc2	〃2A	31住16
○4	〃	ⅣCb	8.8	5.4	5.3 (90)	2.3	160	〃	—	ms1C	31住12
5	〃	ⅣAc	8.6	5.3	4.8 (80)	1.1	70	〃	—	〃〃	31住フ
○6	〃	ⅢAb	(9.7)	4.0	3.6 (70)	1.7	80	B_2	abc3	Gs2A	31住13
○7	〃	Db	(6.3)	3.6	3.4 (40)	1.6	45	C_2	abcde3	〃1A	31住フ
8	〃	ⅣB	(8.3)	3.8	—	1.3	55	$D_{1\cdot3}$	—	〃2A	〃
○9	横刃	ⅢC	6.3	4.2	5.0 (30)	0.6	20	—	f1	Bs1A	31住6
10	〃	ⅤC	6.9	3.5	6.9 (40)	0.8	25	—	—	Gs1A	31住7
11	刃器	ⅠE	7.1	6.4	5.4 (30)	2.5	120	—	a1	ss1A	31住2
12	凹石	B	12.9	6.1		5.1	575	—		Ab	31住フ
13	〃	J	10.1	7.7		2.7	230	—		〃	〃
14	〃	E	11.6	8.0		5.6	650	—		〃	31住1
15	〃	H	9.3	8.2		4.9	450	—		〃	31住8
16	〃	B	(6.5)	6.5		4.5	230	B		〃	31住9 2817と接合
17	〃	E	10.2	7.7		5.7	580	—		〃	31住14
○⑱	石鏃		2.2	(1.9)		0.4	1.5	片脚		ob	31住床
○19	ドリル		(3.2)	1.4	(1.1)	0.6	3.0	先端		〃	30、31
○20	〃		2.0	0.9	1.0	0.5	0.8	—		〃	31住フ

32号住

①	凹石	?	(9.7)	9.3		7.3	630	B		Ab	32住ユ
②	〃	J	9.7	10.6		7.8	625	〃		Gd	〃
3	特磨	B	8.5	6.8		5.5	410	〃		AbB	32住Ⅱ
4	凹石	I	4.4	3.9		3.1	55	—		〃I	32住フ
○⑤	石鏃		1.6	1.0		0.3	0.3	—		ob	32住床
○6	ドリル		2.5	1.4	1.5	0.9	2.65	—		ch	32住フ
○⑦	石核		2.0	2.0		2.0	10.5			ob	32住床

33号住

○①	石鏃		(1.8)	(2.0)		0.6	2.15	先・片脚		ob	33住ユ9

34号住

○1	打石斧	ⅢCb	10.9	4.3	4.3 (50)	1.5	105	A	abc2	Gs2B	34住フ
○2	〃	ⅣCa	9.6	4.8	4.8 (60)	1.1	80	〃	ad2	〃〃	〃
3	〃	ⅢBc	(8.3)	4.7	4.8 (50)	2.0	90	C_2	—	ms1C	BW68
④	〃	—	(5.8)	5.0	—	1.2	40	C_1	—	Gs1A	34住フ
5	〃	—	(5.8)	4.4	—	1.4	45	〃	—	〃2A	〃
6	〃	ⅣB	(6.9)	4.8	—	1.3	70	〃	—	ss2B	〃
7	〃	—	(8.5)	4.7	—	1.1	60	〃	—	Gs2A	〃
8	〃	—	(6.3)	4.7	3.8 (40)	1.4	50	C_2	—	ss2B	〃
○9	横刃	ⅣB	8.9	3.9	7.5 (50)	0.8	30	—	—	Gs1B	〃
10	〃	ⅢC	8.1	4.7	6.0 (30)	1.3	45	—	a1	ss2A	BW68
11	〃	ⅡC	(5.1)	4.9	—	1.2	30	左半欠	—	〃〃	34住フ
12	〃	ⅡB	8.2	3.1	8.2 (30)	0.4	20	—	—	ms1C	34住フ

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
13	横刃	ⅡC	7.1	4.3	7.2 (30)	0.6	25	—	—	Gs1C	34住フ
14	〃	ⅤC	6.9	4.2	6.5 (40)	0.7	30	右半欠	a1	〃3A	〃
15	〃	ⅡE	9.9	4.8	7.9 (50)	2.3	115	—	—	〃〃	〃
○16	剝片	ⅢB	10.2	2.0	— (40)	0.6	20	—	a1	〃1A	〃
17	凹石	Ⅰ	8.1	6.7		4.0	250	—		Ab	〃
18	〃	D	9.2	8.2		5.1	470	B		〃	〃
19	〃	E	10.6	7.3		5.7	685	—		〃	〃
○20	石匙		6.3	3.3	5.3	0.6	17.3	つまみ		mb	〃
○21	スクレ		2.4	2.3	2.2	1.1	5.0	?		ob	〃
○22	ドリル		6.5	3.3	0.8	0.8	14.5	—		Gs	〃

35号住

○1	打石斧	ⅢB	(9.8)	4.4	—	1.3	85	B_2	—	Gs1A	35住4
○2	〃	ⅢDc	14.2	2.8	1.9 (30)	2.0	90	A	a1	〃〃	35住6
3	横刃	ⅤC	9.8	5.7	8.4 (30)	0.9		左半欠	a1	〃2A	35住7
○4	石鏃		2.1	(1.4)		0.4	1.05	片脚		ob	35住P_1周辺
○5	〃		1.6	(1.1)		0.25	0.35	〃		〃	〃
○6	石匙		2.5	1.8	2.4	0.5	2.0	—		〃	〃
○7	スクレ		4.2	3.8	2.9	0.9	17.0	—		Gs	35住フ
○8	〃		3.0	1.9	(2.4 1.5)	0.8	3.2	—		ob	35住P_1周辺
○9	ドリル		3.0	1.7	0.5	0.9	3.5	—		〃	35住フ
○10	〃		2.5	1.3	0.6	0.7	1.4	—		〃	35住P_1周辺
○11	〃		(2.1)	1.9	—	0.6	2.3	刃部		〃	〃
○12	?		(2.1	0.9	2.0	0.5	0.95	?		〃	35住フ

36号住

1	打石斧	ⅢB	10.3	4.9	—	0.8	55	C_1	—	Gs2B	36住42中
2	〃	ⅡB	8.4	6.1	—	1.0	85	D_3	—	〃〃	36住22中
○③	〃	ⅡDa	14.4	4.3	2.7 (30)	1.6	130	A	局部磨製	〃1A	36住15ユ
4	〃	ⅣBb	8.6	4.3	4.0 (50)	1.3	70	〃	—	〃2A	36住
5	〃	a	(4.4)	4.7	— (50)	1.5	30	D_3	a1	ss2A	〃
○6	〃	ⅡCb	12.8	5.8	4.8 (30)	1.8	175	A	abc2	Gs1A	36住フ
○7	〃	ⅡCc	(7.8)	5.1	5.1 (50)	1.0	60	C_2	ab2	Bs1A	36住
8	〃	ⅠC	(9.4)	6.2	—	2.1	140	C_1	—	Gs2A	36住52中
9	〃	b	(8.2)	4.9	—	1.5	70	〃	—	〃〃	36住フ
10	〃	ⅣD	9.7	3.4	3.1	1.5	65	A	—	Sp3A	36住34中
11	〃	ⅣDb	10.3	3.0	30 (20)	1.1	40	〃	—	ms1C	36住フ
12	〃	—	(10.9)	—	49 (30)	1.2	50	D_{23}	a1	ss2A	〃
13	〃	—	(7.9)	4.3	—	—	40	C_1	—	Gs2B	〃
⑭	〃	—	(5.6)	4.1	—	0.8	25	B_1	—	〃	36住16ユ
○15	〃	—	(8.6)	—	— (40)	0.7	15	C_2	a1	〃1A	36住33中
16	〃	—	(5.8)	4.8	—	1.6	55	D_3	—	ss2C	36住フ
17	〃	—	(6.5)	—	— (40)	1.0	20	E_2	a1	Bs1A	〃
18	横刃	ⅠC	8.5	6.8	(6.8) (30)	1.3	95	—	—	Gs2B	36住
⑲	〃	ⅠD	9.4	5.1	7.6 (40)	0.7	45	—	—	Ab3B	36住21
20	〃	ⅢB	8.0	3.2	5.1 (20)	0.8	20	—	a1	Gs2A	36住フ
21	〃	ⅠB	7.3	3.1	6.0 (30)	0.6	20	—	a1	〃1A	36住33中
22	〃	〃	7.2	3.4	6.7 (30)	1.0	35	—	af2	〃1B	36住25中

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
○㉓	横刃	ⅡD	9.7	4.9	9.7 (50)	1.5	75	—	a1	Gs1A	36住14生
24	〃	ⅡC	7.1	4.7	5.2 (60)	0.9	35	—	a1	ss2A	36住
25	〃	ⅡE	8.0	6.2	8.0 (30)	1.7	100	—	a1	Gs2A	36住56下
○26	〃	ⅠD	8.1	4.8	6.6 (50)	1.8	80	—	a2	Gs2B	36住
27	〃	ⅠA	10.8	5.4	10.8 (50)	1.3	90	—	a1	Gs3A	〃
28	?	ⅢC	5.8	4.4	— (40)	1.0	40	?	—	Gs1C	〃
29	乳石斧	ⅠB	(6.2)	5.3	4.3	2.7	145	C_2		Gs	36住53中
30	〃	ⅡA	(8.9)	4.3	3.8	3.1	180	B_2		〃	36住
31	〃	ⅠB	(10.0)	—	—	2.6	115	D_2		〃	〃
32	凹石	D	11.2	7.1		5.1	440	—		Ab	36住フ
33	〃	D	9.5	6.5		3.3	270	—		〃	36住10中
34	〃	H	8.8	6.8		3.7	240	—		〃	36住8上
35	〃	J	9.8	8.4		6.4	570	—		〃	36住55下
36	石皿?		14.8	9.2		7.7		小片		〃	36住54中
○37	石鏃		1.6	(1.2)		0.2	0.45	片脚		ob	36住39中
○㊳	〃		2.4	(1.2)		0.5	0.9	〃		〃	36住59ユ
○39	〃		2.1	1.2		0.25	0.5	基部		〃	36住
○40	〃		2.6	1.6		0.5	2.1	—		〃	〃
○41	〃		2.1	1.5		0.4	1.2	—		〃	〃
○42	〃		2.2	1.7		0.5	1.65	—		〃	〃
○43	〃		2.3	1.7		0.5	1.7	片脚		〃	〃
○㊹	石匙		4.3	3.5	4.3	0.7	10.1	—		ch	36住19ユ
○45	〃		2.1	1.7	1.9	0.4	1.1	端		ob	36住51上
○46	スクレ		2.3	1.8	1.7	0.6	2.0	—		〃	36住
○47	〃		1.8	1.6	1.6	0.5	1.55	—		〃	36住5
○48	ドリル		2.9	1.0	0.8	0.5	1.4	—		〃	36住フ
○49	〃		3.6	1.0	1.2	0.8	2.6	—		〃	〃
○50	〃		(2.7)	1.1	—	0.8	1.8	先端		〃	〃
○51	〃		4.4	2.9	0.9	0.4	7.3	—		ms	〃
○52	石皿?									Ab	3636に接合
53	凹石	G	16.6	7.7		6.7	1240	—		〃	

38号住

1	打石斧	ⅤCa	9.2	3.9	3.8 (20)	0.4	20	A	?	Bs2B	38住37上
2	〃	ⅢCa	10.5	4.9	4.4 (60)	1.6	115	〃	a1	Gs1A	38住フ
3	〃	D	8.0	4.2	—	1.5	90	C_1	—	〃2A	38住13中
○4	〃	ⅡC	13.1	4.5	— (60)	1.8	140	$D_{1\cdot3}$	?	〃〃	38住36中
○5	〃	ⅢDc	12.6	4.2	3.0 (20)	0.9	60	A	a1	〃1A	38住5中
○6	〃	ⅠDb	17.6	4.7	4.3 (40)	2.2	205	〃	〃	〃〃	38住フ
○7	〃	ⅣDb	10.0	3.6	2.0 (30)	1.5	75	〃	〃	〃〃	〃
8	〃	ⅣC	(9.2)	4.6	— (60)	1.2	65	B_1	〃	〃2A	38住14中
○⑨	〃	ⅤC	(9.7)	3.4	—	0.9	35	$D_{1\cdot3}$	?	altsm2B	38住1ユ
10	〃	ⅤDb	9.4	3.4	2.6 (40)	1.7	65	A	?	Gs3B	38住
⑪	〃	ⅣBb	8.8	4.5	3.8 (100)	1.2	50	〃	?	ms1C	38住43ユ
12	〃	ⅣBa	7.3	5.1	4.8 (60)	1.0	50	〃	?	〃〃	38住4下
13	〃	ⅣCc	(8.4)	4.1	4.0 (20)	0.9	35	B_2	?	〃〃	38住フ
14	〃	b	(5.7)	4.3	4.3 (40)	1.1	30	C_2	a2	Gs1A	38住39上
15	〃	C	(7.3)	4.6	—	1.5	65	B_1	—	ss2A	38住フ
16	〃	B	(6.4)	3.8	—	1.0	35	C_1	—	Gs1A	〃
17	〃	b	(5.6)	5.5	5.5 (40)	1.3	45	C_2	a2	〃〃	〃

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
18	打石斧	c	(5.1)	3.1	3.1 (60)	0.9	20	c_2	a_2	ms 1A	38住フ
⑲	横刃		(6.7)	3.5	6.8	1.1	40	—			38住15生
○⑳	〃	ⅣD	9.3	5.1	7.3 (50)	1.0	60	—	a_2	Gs 1A	38住44生
21	〃	ⅡB	8.9	3.9	8.0 (40)	0.8	35	—	〃	〃 2A	38住P_2
22	〃	VE	9.4	7.4	6.7 (30)	1.2	100	—	?	ms 1C	38住フ
23	剥片	VD	4.7	6.0	5.1 (20)	0.8	25	—	?	〃 1B	38住フ
㉔	刃器	ⅢC	5.6	6.1	6.1 (60)	1.8	90	—	—	〃 1A	38住25生
25	〃	ⅣB	9.6	3.1	7.4 (40)	0.6	21	—	a_1	〃 1A	38住40
○26	横刃	ⅢC	6.6	4.7	6.0 (40)	0.9	45	—	a_2	Gs 2A	38住フ
27	乳石斧	AB	13.1	5.8	—	3.4	370	$E_{1,4}$			38住フ
28	〃 ?		(4.8)	3.9	—	—	40	D_3	—	Gs 2A	〃
○29	尖頭		8.3	0.3	7.5	1.1	32	—	a_2	〃 1A	38住33中
30	凹石	D	6.7	8.8		5.1	345	B		Ab	38住フ
31	〃	?	(4.8)	7.9		4.1	195	〃		〃	〃
32	〃	H	9.1	8.7		5.7	455	—		〃	〃
33	〃	G	8.4	7.5		5.6	390	—		〃	〃
㉞	〃	I	7.7	6.2		3.0	165	—		〃	38—20生
㉟	〃	H	9.3	8.1		5.5	490	—		〃	〃
36	〃	E	10.5	6.2		4.7	370	—		〃	38住フ中
○㊲	石鏃		1.9	1.5		0.5	0.9	—		ob	38住41ユ
○38	〃		1.6	(1.1)		0.3	0.3	片脚		〃	38住42下
○39	〃		(1.5)	2.5		0.4	1.3	上半		〃	38住下
○40	〃		(2.8)	2.4		0.4	2.2	先端		〃	38住27中
○41	スクレ		1.8	1.6	—	0.4	1.25	—		〃	38住フ
○42	〃		1.7	1.6	—	0.4	1.4	—		〃	〃
○43	〃		2.9	2.6	2.3	1.3	11.7	—		〃	〃
○44	ドリル		3.3	2.7	1.2	0.6	3.3	—		ch	〃

39号住

1	打石斧	ⅣCa	(8.4)	5.6	4.7 (40)	1.2	65	A	—	ms 1C	39住104
○②	〃	ⅢCc	10.8	4.8	4.3 (30)	1.5	90	〃	a 2	Gs 3A	39住ユ
3	〃	c	(5.7)	5.1	5.1 (40)	0.8	30	C_2	—	ms 1C	39住105
4	横刃	IC	7.4	4.5	— (50)	0.9	35	刃端欠	—	〃 〃	39住フ
⑤	乳石斧	IB	9.5	5.5	—	2.9	245	D_3		Gs	39住54
⑥	凹石	E	11.9	8.6		5.7	710	—		Ab	39住57
7	〃	E	10.8	7.4		5.5	545	—		〃	39住P 8
8	〃	H	9.2	7.6		4.9	385	—		〃	39住132
9	〃	D	10.0	6.5		4.1	340	—		〃	39住フ
⑩	〃	J	12.1	6.8		7.8	400	—		〃	39住133
⑪	〃	D	15.6	7.9		3.9	660	—		〃	39住196
○12	石鏃		2.8	2.5		0.3	1.7	—		ob	39住47，遺構外
○⑬	〃		1.8	(1.6)		0.3	0.45	片脚		〃	39住70
○14	〃		2.0	(1.7)		0.3	0.8	〃		〃	39住110フ
○15	〃		1.4	1.4		0.3	0.45	—		〃	39住
○⑯	〃		1.6	(1.5)		0.4	1.0	下端		〃	39住ユ
○17	〃		2.2	2.3		0.5	1.9	—		〃	39住
○⑱	〃		1.8	1.9		0.6	1.4	—		〃	39住23
○19	スクレ		3.4	2.5	2.6	1.0	10.0	—		〃	39住フ
○⑳	〃		3.0	2.4	2.7	1.0	7.8	—		〃	39住ユ
○21	〃		4.7	2.7	3.3	0.8	10.4	—		〃	39住164下

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
○㉒	スクレ		2.3	2.8	1.4	1.1	8.9	—		ob	39住187
○㉓	ドリル		2.3	3.0	0.8	0.7	2.9	—		〃	39住15

40号住

1	打石斧	C	(6.6)	4.1	—	1.3	40	D_3	—	ss 2A	40住フ
○2	〃	VBc	(7.1)	3.4	2.9 (40)	1.5	55	A	a1	Gs 1A	〃
○3	〃	IVCc	8.8	5.3	4.8 (70)	2.6	165	〃	a2	〃 1B	40住1
4	〃	IIIC	(9.3)	3.5	—	0.9	35	C_1	—	〃 2A	40住2
5	〃	—	(7.1)	5.0	—	1.4	65	$D_{1,3}$	—	〃 3A	40住13
○6	石鏃		2.2	1.6		0.6	1.85	—		ob	40住フ
○7	スクレ		2.8	2.0	2.5	0.6	3.3	—		〃	〃

41号住

○1	横刃	IID	10.8	5.7	8.9 (60)	1.5	90	—	a1	Gs 3A	41住フ
2	〃	IB	9.8	4.0	9.8 (20)	0.7	30	—	〃	〃 2A	〃

42号住

○①	剥片	IIC	7.5	4.5	— (40)	0.7	30	—	—	Gs 1B	42住ユ9
2	凹石	G	9.5	9.5	—	7.3	715	—		Ab	42住13
③	〃	E	9.7	6.6	—	4.8	470	—		〃	42住ユ8

43号住

○1	打石斧	IICc	12.8	5.0	5.0 (70)	1.5	125	A	ab2	Gs 3A	43住
2	〃	乳石斧?	11.5	3.9	3.2	1.8	110	〃		〃	〃
③	〃	IICa	(9.0)	6.2	5.9 (30)	1.2	85	C_2	局部磨製	〃 1B	43住—22生
4	乳石斧	IB	(11.3)	5.4	4.2 (50)	2.8	260	B_2	—	〃 3B	43住P_5柱穴
○5	横刃	IIIA	9.1	3.9	8.4 (30)	0.6	35	—	a_2	ms 1A	43住7中
6	〃	IIC	7.0	3.8	4.7 (40)	1.1	40	—	a_1	Gs 1A	43住1下
7	〃	—	(4.4)	3.0	3.0 (40)	0.6	10	左半欠	〃	〃 〃	43住9下
8	〃	IIIC	6.9	4.0	5.8 (30)	0.7	25	—	〃	〃 3A	43住6中
9	乳石斧	IAB	(16.2)	5.2	—	3.7	415	B_1		〃	43住7中
10	〃	IB	(6.6)	4.8	—	2.1	95	〃	—	〃 3B	

44号住

1	打石斧	IVBc	9.8	4.4	2.8 (40)	1.5	95	A	—	Gs 2B	44住23
○2	〃	IVAb	8.6	3.8	3.5 (50)	1.1	55	〃	abcde3	〃 1A	44住28
○3	〃	VBb	7.8	4.8	4.4 (40)	1.1	50	〃	—	〃 〃	44住43
○④	〃	IA	13.8	(5.8)	— (50)	1.4	125	$D_{1,3}$	ab2	〃 2A	44住ユ
5	〃	IIICa	10.8	4.7	4.4 (70)	2.0	140	A	bc2	〃 1A	44住39
6	〃	IVDa	10.4	3.9	3.7 (40)	1.1	70	〃	a2	〃 2B	44住28
7	〃	IBb	(9.2)	5.5	4.7 (30)	1.0	90	B_2	—	ms 1C	44住フ—1
8	〃	—	(3.5)	—	—	—	5	E_2	—	Gs 1C	44住32
○9	横刃	IC	6.1	5.4	4.5 (30)	1.1	45	—	a2	ss 2B	44住15
10	〃	IIB	9.6	2.5	9.5 (40)	0.5	15	—	〃	Gs 2A	44住28
○11	〃	IIIB	9.5	1.8	7.8 (40)	0.8	20	—	〃	〃 1A	44住17

No.	器種	類型	長さ (mm)	幅 (mm)	刃幅 (角度)	厚さ (mm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
12	〃	ⅠB	9.3	3.8	8.6 (50)	1.5	65	—	a1	Gs1A	44住BE
13	〃	ⅡD	9.7	5.1	9.0 (30)	1.7	80	—	a1	ss2A	44住E
14	〃	ⅠB	8.4	3.7	7.3 (30)	1.3	40	—	a2	Gs1A	44住BE
15	乳石斧	ⅠAB	(13.6)	4.7	—	3.5	390	C_1		〃	44住40
16	砥石		(4.8)	(3.6)	—	1.1	35	小片		〃1A	BX62
17	凹石	H	8.9	7.3		4.8	405	—		Ab H	44住42
18	〃	C	(11.4)	8.0		5.5	850	B		〃 C	44住19
19	〃	H	9.8	7.9		4.2	465	—		〃 H	44住フ2
20	〃	J	10.2	7.1		7.1	685	—		Gs J	44住41
21	?		21.9	16.5		6.0				Ab	44住5
○22	石鏃		2.0	1.5		0.3	0.65	—		ch	44住フ
○23	〃		1.9	1.6		0.4	0.85	—		ob	〃
○24	〃		1.9	1.4		0.6	1.45	—		〃	〃
○25	〃		1.9	1.5		0.3	0.7	片脚		〃	〃
○26	石匙		4.2	3.7	3.9	0.7	10.3	—		ch	44住4
○27	ドリル		2.8	2.1	0.9	0.8	3.2	—		ob	44住フ
○28	?		1.6	1.5	—	0.5	1.5	—		〃	44住37
○㉙	石棒?		38.0	15.5	—	10.2	—	—		Ab	44住ユ
○30	石皿		33.0	20.5	—	7.5	—	—		〃	44住1
○31	台石?		25.5	15.7	—	9.7	—	半欠		〃	44住
○32	石皿		14.6	21.5	—	6.6	—	—		〃	44住3
○33	台石		16.5	14.3	—	5.3	—	—		〃	44住2

47号住

○1	打石斧	C	(8.0)	4.3	—	0.9	30	C_1	—	Gs1A	47住25
2	〃	ⅤCa	(8.7)	3.6	3.1 (30)	1.0	25	D_3	—	ms1B	47住
③	横刃	ⅠB	7.7	3.4	7.7 (20)	0.8	25	—	a1	Gs2A	47住ユ
○4	〃	ⅢC	5.5	4.9	5.2 (10)	0.4	20	?	a1	〃1B	47住フ
5	凹石	E	11.9	8.8		5.3	620	—		Ab E	47住23
6	〃	G	8.1	8.1		6.0	580	—		G	47住12
○7	石鏃		1.8	1.5		0.3	0.55	—		ob	47住24
○8	スクレ		2.1	1.7	1.4	0.3	1.3	?		〃	47住16
○⑨	立石		67.5	20.8	—	11.3	—	—		Ab	47住立石

48号住

1	打石斧	ⅡCb	13.1	5.8	5.3 (50)	1.3	145	—	d2	Gs3B	48住フ
2	〃	ⅢCc	10.5	5.0	4.9 (70)	1.4	100	—	—	ms1C	48住外
○3	〃	ⅣBc	10.0	5.0	4.9 (60)	2.1	150	—	—	〃 〃	48住フ
4	〃	ⅤA	(3.4	—	—	—	10	E_2	—	Gs2B	48住
○5	横刃	ⅠA	9.7	4.5	8.8 (30)	1.2	65	—	—	ms2B	48住フ
6	〃	ⅢC	(7.2	5.8	6.1 (40)	0.8	35	片端欠	a1	〃1A	〃
⑦	凹石	A	8.4	5.8		3.8	280	—		Ab A	48住ユ2
8	〃	D	15.7	6.9		2.9	415	—		Gs D	48住フ
○9	スクレ		4.4	1.8	4.4	0.9	8.0	?		ch	〃
○10	?		2.3	1.5		0.6	3.0	—		?	〃
○11	石皿		33.0	320	—	13.3	—	—		Ab	48住7

(2) 土坑出土石器 （土拡欄の数字は図番号を示す）

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	土坑 (P)
○1	刃器	ⅣD	9.9	6.5	8.3	1.2	85	A		ss	3
○2	打石斧	ⅤCa	9.3	3.2	2.2	1.0	45	〃		Gs	6
○3	横刃	ⅠA	12.4	4.3	10.6	1.7	95	〃		〃	14
4	石皿		(11.8)	(4.6)	—	5.0	415	E_2		Ab	40—1
○5	凹石	E	12.7	7.0	—	4.2	425	A		〃	—2
○6	〃	C	13.7	7.0	—	6.3	930	〃		〃	41
○7	打石斧	ⅢCc	9.7	4.6	4.5	1.3	60	〃		ms	42
○8	〃	〃	10.4	5.3	5.4	1.6	110	〃		〃	44
○9	凹石	E	(8.2)	7.2	—	4.8	320	B		Ab	45
○10	打石斧	ⅡCc	12.4	5.8	5.7	1.4	150	A		Gs	46—1
○11	横刃	ⅡC	9.2	7.5	8.3	1.7	140	〃		〃	—2
○12	石鏃		(2.0)	1.6	—	0.6	1.2	$D_{3\cdot2}$		ob	—3
○13	打石斧	ⅣBb	9.5	4.1	3.6	1.5	65	A		Gs	47—1
○14	横刃	ⅢD	9.0	8.1	8.1	1.1	120	〃		〃	—2
○15	凹石	E	10.2	7.3	—	5.6	450	〃		Ab	—3
○16	剝片		2.9	1.8	0.5	0.8	4.7	—		ob	—4
○17	打石斧	ⅣBb	9.6	3.9	3.5	1.6	75	A		Gs	50
○18	石鏃		1.9	1.4	—	0.5	1.3	〃		ch	63
○19	凹石	A	8.6	7.3	—	4.1	340	B		Ab	68—1
○20	剝片		2.3	2.3	2.1	0.7	4.1	—		ob	—2
○21	打石斧	ⅠCa	(8.4)	8.0	8.0	2.6	250	B_2		Gs	75—1
○22	凹石	J	13.6	8.5	—	8.3	1015	B		Ab	—2
○23	打石斧	ⅢBb	10.6	5.6	5.5	1.8	155	A		Gs	89—1
○24	凹石	D	12.5	8.2	—	5.2	535	〃		Ab	—2
○25	〃	〃	11.3	8.4	—	4.0	480	〃		〃	—3
26	敲打器		7.1	8.2	7.8	5.3	350	〃		Gs	—4
○27	凹石	H	10.8	9.1	—	5.6	605	〃		〃	94—1
○28	〃	F	9.3	9.1	—	4.0	385	〃		〃	—2
○29	ドリル		2.4	1.6	—	0.6	1.5	〃		ob	98
○30	ハンマ		10.8	2.6	—	1.9	75	〃		Gs	106
○31	凹石	D	(7.7)	5.8	—	3.1	195	B		Ab	121
○32	石皿		15.8	23.3	—	8.1	2850	半欠		〃	125
○33	横刃	ⅢA	10.2	3.9	8.8	0.8	45	A		Bs	128
○34	打石斧	ⅡDb	12.4	4.9	4.2	2.0	165	〃		Gs	134
○35	凹石	H	10.3	9.6	—	6.2	750	〃		Ab	155
○36	横刃		10.0	4.3	10.0	1.2	65	〃		Gs	178
○37	打石斧	ⅡDc	(8.3)	5.0	4.8	3.2	155	B_2		〃	185
○38	〃	VCc	7.6	3.5	2.8	1.0	35	A		〃	205
○39	〃	—	(7.4)	4.6	4.3	1.7	85	B_2		〃	214
○40	?		4.1	1.7	—	0.8	7.5	A		ob	226
41	横刃		7.1	5.9	7.1	1.0	42	〃		Ab	272—1
○42	凹石	J	12.2	8.7	—	7.0	955	〃		〃	—2
○43	横刃	ⅡC	7.7	5.0	6.8	1.2	70	〃		Gs	282
○44	打石斧	ⅣDb	11.9	2.8	2.0	0.8	35	〃		〃	289
○45	〃	ⅣBa	(8.9)	3.7	2.8	0.8	45	C_2		Gs	292
○46	石皿		29.3	25.2	—	5.9	3660	端欠		Ab	295
○47	横刃	ⅡD	10.9	5.8	10.7	1.4	90	A		ss	296
○48	打石斧	Db	(3.6)	3.7	3.4	1.1	25	C_2		Gs	298
○49	敲打器		11.6	5.6	—	5.1	420	A		Ab	300—1
○50	石皿		19.7	17.0	—	8.1	3640	半欠		〃	—2

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	土坑 (P)
○51	打石斧	D	(8.8)	3.2	—	1.2	50	B_1		Gs	325
○52	〃	Bb	(14.2)	5.1	4.7	1.4	125	D_2		〃	328
○53	凹石	D	11.6	7.7	—	3.5	385	A		Ab	362
○54	打石斧	ⅣBc	9.5	4.6	4.5	1.4	90	〃		Gs	374
○55	〃	ⅣCa	(8.2)	5.2	5.2	1.2	70	B_2		ss	386
○56	横刃	VA	10.9	3.1	6.2	1.2	45	A		Gs	409
57	石皿		(15.4)	26.7	—	9.6	3290	半欠		Ab	435
○58	横刃	ⅢA	12.3	4.8	8.0	1.2	80	A		Gs	481－1
○59	打石斧	ⅢAb	11.8	4.9	4.8	2.4	165	〃		〃	－2
○60	〃	ⅢCc	10.4	4.3	4.3	1.7	115	〃		〃	－3
○61	石匙		7.1	4.4	6.8	0.4	20	つまみ欠		〃	－4
○62	スクレ		5.3	3.6	4.6 3.8	0.6	10	A		ms	－5
63	凹石	I	9.1	4.4	—	4.6	210	〃		Ab	－6
○64	石皿		51.6	40.5	—	10.0	—	—		〃	－7
65	磨石	C	14.0	7.9	—	7.3	1000	A		〃	501
○66	凹石	D	10.1	6.8	—	3.6	300	〃		〃	525
○67	〃	B	(11.3)	6.8	—	6.5	605	C		〃	529
○68	石匙		(3.0)	3.0	—	0.5	5	右半欠		ms	538
○69	凹石	J	13.0	8.2	—	4.2	620	A		Ab	549
○70	乳石斧	IA	(6.3)	4.0	—	(3.3)	110	B_1		Gs	551
○71	横刃	ⅡB	9.8	2.8	6.4	0.9	30	A		〃	584－1
○72	凹石	D	12.3	7.2	—	3.2	455	〃		Ab	－2
○73	打石斧	Ⅲ	(7.2)	5.3	4.8	1.6	70	B_2		Gs	599
74	磨石	G	11.9	6.9	—	7.8	955	A		Ab	602
○75	凹石	E	10.8	5.3	—	4.3	320	〃		〃	603
○76	〃	G	11.0	9.7	—	6.7	765	〃		〃	613－1
○77	〃	H	10.3	8.2	—	(4.5)	370	C		〃	－2
○78	スクレ		2.2	1.9	—	0.5	3.2	A		ch	－3
○79	〃		2.3	2.1	2.0	0.9	4.8	?		〃	－4
○80	〃		3.0	2.5	3.2	1.0	10.6	?		〃	－5
○81	〃		2.6	2.0	2.6	0.9	4.9	A		ob	－6
○82	凹石	G	15.5	12.4	—	6.1	1270	〃		Ab	620
○83	横刃	ID	9.2	4.8	7.0	1.3	90	〃		Gs	622－1
○84	乳石斧	IAB	7.3	4.8	—	3.3	155	B_1		〃	－2
○85	ドリル		2.7	1.6	—	1.1	3.3	A		ob	634
○86	打石斧	Aa	10.9	5.6	5.1	2.4	175	C_2		Gs	638
○87	凹石	J	10.4	4.3	—	4.3	240	A		Ab	646
○88	〃	F	10.7	8.9	—	5.1	670	〃		〃	647
○89	打石斧	ⅢDa	(6.7)	3.4	3.3	1.1	30	C_2		Gs	648－1
○90	横刃	ID	10.0	5.7	9.9	0.9	70	A		Gs	－2
○91	打石斧	ⅡCa	12.1	4.8	4.4	1.7	110	〃		〃	652
92	石皿		23.4	19.7	—	7.6	4400	—		Ab	655
93	凹石	J	(10.8)	7.6	—	5.3	575	B		〃	669
○94	石皿		16.0	23.8	—	8.9	3180	半欠		〃	676
○95	凹石	E	10.8	5.3	—	3.8	320	A		〃	690－1
○96	石皿		23.6	20.9	—	4.8	2780	—		〃	－2
○97	〃		25.5	18.9	—	9.8	—	—		〃	698
98	凹石	J	10.7	7.3	—	6.3	590	A		〃	745
○99	石皿		45.2	32.8	—	11.5	—	—		〃	751
○100	磨石	E	10.2	8.0	—	5.7	545	A		〃	760
101	剝片		2.5	1.7	—	0.4	1.9	—		ob	765

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	土坑 (P)
○102	凹石	F	9.7	8.9	—	3.9	425	A		ob	778
○103	打石斧	ⅣCc	(9.2)	4.5	4.0	1.8	105	B_2		Gs	793
○104	〃	ⅠBa	(13.5)	5.5	5.1	1.5	155	〃		ms	797
○105	石棒		34.0	11.7	—	11.5	—	?		Ab	809
○106	凹石	E	(4.8)	6.5	—	5.8	250	B		〃	814
107	蜂巣石		25.5	17.9	—	8.5		A		〃	819
○108	打石斧	ⅣBa	8.9	4.2	4.2	1.4	85	〃		Gs	849
109	凹石	Ⅰ	6.9	5.6	—	4.0	170	〃		〃	852
○110	〃	〃	7.8	5.8	—	4.2	260	〃		Ab	854
○111	〃	A	9.8	6.7	—	4.2	400	〃		〃	855
○112	石皿				P751 と 接 合						856
○113	凹石	D	10.7	6.5	—	3.6	315	A		Ab	865
○114	打石斧	ⅣBa	8.4	5.0	4.7	1.4	100	〃		Gs	867
○115	石匕		7.3	4.7	7.3	1.5	50	つまみ欠		ms	869
○116	打石斧	ⅢCc	12.2	4.7	4.5	1.4	130	A		Gs	871－1
○117	〃	ⅢBb	(7.5)	5.1	4.4	2.3	115	B_2		〃	－2
118	礫器		7.7	2.4	2.6	2.4	75	A		〃	－3
○119	凹石	G	9.7	8.2	—	5.5	495	〃		Ab	874－1
○120	特殊礫		11.5	1.6	—	1.1	30	〃		ms	－2
○121	凹石	C	8.0	7.0	—	6.0	440	B		Ab	875
○122	石鏃		1.9	1.1	—	0.3	0.5	片脚欠		ob	886
○123	打石斧	ⅢCb	9.4	5.5	5.4	1.2	85	A		Gs	887
○124	凹石	G	9.1	8.5	—	7.3	680	〃		Ab	888－1
125	石皿		(13.0)	25.0	—	5.2		B_1		〃	－2
○126	打石斧	ⅣAa	9.9	4.2	4.0	1.3	75	A		Gs	889－1
○127	石皿		21.7	12.5	—	7.9	3190	端部		Ab	－2
○128	石棒		30.7	15.5	—	12.8	—	両端欠		〃	896－1
○129	石皿		22.5	26.0	—	7.2	—	半欠		〃	－2
○130	石鏃		2.3	(1.3)	—	0.3	0.5	片脚欠		ob	911
○131	打石斧	ⅢCb	10.6	4.9	4.6	1.1	65	A		ms	919
○132	凹石	D	10.5	6.6	—	3.9	350	〃		Ab	920
○133	横刃	ⅡB	8.2	3.1	8.2	0.8	30	〃		Gs	942
○134	凹石	J	12.0	8.1	—	7.3	815	〃		Ab	943
○135	打石斧	ⅢBb	12.7	4.8	4.5	1.6	130	〃		Gs	954
○136	小形石匕		2.1	1.5	2.1	0.4	0.8	〃		ob	964
○137	ヨア		3.1	2.7	—	1.0	7.1	〃		〃	986
○138	打石斧	ⅣDc	10.4	3.6	2.6	1.3	55	〃		Gs	987
○139	凹石	B	12.6	5.6	—	5.1	470	〃		Ab	990
○140	〃	F	10.2	8.8	—	4.4	465	〃		〃	992
○141	石匕		5.4	5.2	5.4	1.2	33	〃		ms	993
○142	〃		6.0	5.0	6.0	1.4	32	〃		〃	1000－1
○143	剝片		3.9	1.2	—	0.9	4.7	〃		ob	－2
○144	打石斧	ⅣCb	8.9	4.4	4.4	1.3	75	〃		Gs	1014
○145	〃	ⅢCc	10.6	5.5	5.4	1.3	115	〃		〃	1016－1
○146	〃	〃	10.6	5.2	5.2	1.7	135	〃		〃	－2
○147	横刃	ⅡC	8.0	4.3	5.6	0.7	35	〃		〃	－3
○148	打石斧	ⅤDb	9.9	3.3	2.1	1.0	45	〃		〃	1019－1
○149	〃	—	5.4	3.8	—	0.8	30	B_1		〃	－2
○150	乳石斧	ⅡA	17.6	4.7	3.6	3.4	480	A		〃	1021
○151	凹石	C	13.2	8.1	—	4.8	665	〃		Ab	1024－1
○152	〃	E	(7.5)	7.3	—	5.3	340	B		〃	－2

No.	器種	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅(角度) (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	土坑 (P)
○153	凹石	J	8.8	8.7	—	6.3	575	A		Ab	1024—3
○154	スクレ		5.8	5.9	5.4 5.3	3.4	25	〃		Ch	1044—1
○155	〃		3.6	2.3	3.6	0.6	5.2	〃		〃	—2
○156	石匙		6.4	2.6	5.1 4.3	0.8	17.5	〃		〃	—3
○157	ドリル		2.8	1.5	—	0.5	1.1	〃		〃(良)	—4
○158	ハンマ		10.6	3.3	—	1.9	120	〃		ss	—5
○159	スクレ		3.4	3.1	3.4	1.3	13	—		ch	1049
○160	打石斧	IB	(10.8)	5.8	—	2.5	200	B_1		ms	1050
○161	凹石	E	14.5	9.0	—	6.0	1025	A		Ab	1057
○162	打石斧	IIDa	14.0	4.2	3.8	1.9	140	〃		Gs	1059—1
○163	〃	IIDc	14.0	4.4	3.7	1.9	160	〃		〃	—2
○164	凹石	D	10.4	8.0	—	3.5	390	〃		Ab	1105
○165	〃	C	14.6	6.6	—	6.1	670	〃		〃	1124
○166	打石斧	ICc	26.8	7.3	5.5	2.6	650	〃		Gs	1186
○167	石鏃		2.0	(1.8)	—	0.35	1.1	両脚端欠		ob	1193
○168	打石斧	IICc	12.7	4.5	4.5	1.6	110	A		Gs	1203
○169	横刃	IIA	11.8	5.4	11.8	1.6	100	〃		〃	1214
○170	打石斧	IIB	(10.3)	4.9	4.4	2.0	100	C_2		ss	1222
○171	〃	IICc	13.1	4.9	5.3	2.0	165	A		〃	1226
○172	石鏃		2.6	2.1	—	0.4	1.5	〃		ch	1239
○173	横刃	IC	8.4	4.8	7.6	0.8	50	〃		Gs	1241
○174	〃	IIA	11.0	3.8	10.6	1.0	50	〃		〃	1242
○175	〃	IIC	8.8	4.9	7.4	0.8	50	〃		ss	1253
○176	刃器	IIIC	6.5	5.2	6.4	0.5	30	—		Gs	1261
177	耳飾		—	—	—	0.55	1.4	¾ 欠		滑石	1285
○178	石匙		6.7	3.1	6.7	0.8	15	A		ch	1293—1
○179	凹石	D	8.7	5.2	—	2.8	125	B		Ab	—2
○180	〃	E	10.5	7.6	—	5.6	510	A		Ab	1306
○181	〃	E	9.5	6.8	—	4.8	345	〃		〃	1310
○182	打石斧	VC	(6.1)	2.9	—	1.0	25	B_1		Gs	1311—1
○183	横刃	IIB	10.9	2.9	5.3	0.9	35	A		〃	—2
○184	〃	IIIA	12.2	3.3	8.6	2.0	90	〃		〃	—3
○185	凹石	H	10.5	8.6	—	5.4	680	〃		Ab	—4
○186	横刃	IIC	8.3	7.4			80	〃		〃	87

(3) 遺構外出土石器

① 打製石斧 (7000番台)

No.	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
7001	IIDa	13.5	4.4	4.2	130	2.2	180		—	Gs2C	BO75—II
2	IVCc	10.6	4.8	4.8	60	2.2	150		〃2A	AO54—I
3	IVCa	9.4	5.1	5.0	50	1.6	85		—	ms1C	AS80
4	〃	8.7	5.4	4.55	20	1.4	75		de1	Gs1B	BA86
5	〃	7.8	5.3	5.2	40	1.3	80		a1	〃2B	BA60
6	〃	7.7	4.7	4.5	40	0.9	45		—	ms2C	AY84
7	〃	10.4	5.5	5.5	30	0.9	65		—	altsm1A	AY53
8	IIICa	10.7	4.8	4.4	70	1.6	100		—	ms1C	44住BE
9	〃	9.5	4.3	3.5	110	1.8	100		—	ss2C	AO66—I
10	〃	10.4	4.0	3.9	110	1.1	80		ade1	Gs2B	BA88
11	IIBb	13.4	5.4	4.35	90	1.8	200		abcd2	〃2A	AU77

No.	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
12	ⅠBa	18.9	5.3	5.2	90	2.2	240		—	ms1C	BD88
13	ⅢCb	11.4	4.5	4.3	100	1.7	140		abcd2	Gs1B	AX77
14	ⅣCb	8.2	5.0	4.7	60	1.3	80		—	〃2B	AM76
15	〃	8.7	4.8	4.7	50	1.4	70		a1	〃1A	BK90
16	ⅢCb	10.3	5.3	5.05	70	1.3	100		〃	Bs1A	AW80
17	ⅢBb	10.0	5.0	4.8	20	0.9	80		—	Gs2B	BA85
18	ⅣBb	8.6	4.3	4.4	80	0.8	40		—	ms1C	AO80—2
19	ⅢCb	12.4	5.4	4.3	80	1.9	170		ad2	Gs2B	BQ56
20	ⅤCa	8.5	3.9	3.8	60	0.8	40		abcde2	〃2A	BC60
21	ⅢDa	12.0	4.4	4.3	60	1.4	110		—	〃 〃	BA75—Ⅰ
22	〃	12.0	4.0	3.8	70	1.7	120		ad2	〃1A	BT40
23	〃	11.2	3.9	3.65	40	1.5	85		ad1	〃 〃	B
24	ⅢCb	9.2	4.2	4.75	90	1.7	90		—	ms1C	BV68
25	ⅢBb	10.0	3.6	3.0	40	1.2	60		—	altsm1C	AW83—Ⅰ
26	ⅤBb	7.1	3.5	3.5	80	0.8	30		—	ms1A	BJ90—ⅠⅡ
27	ⅣDb	10.2	3.9	3.8	50	1.1	70		—	Gs1B	BO69
28	ⅣCb	9.9	3.8	4.0	70	1.3	70		—	〃2B	BK87
29	〃	11.2	5.1	4.5	110	2.0	70		—	ms2C	AW74
30	〃	10.1	4.5	4.4	90	1.4	90		abcde2	Gs2B	BS72
31	〃	11.1	5.7	5.5	80	2.0	145		—	ss2A	BB50
32	〃	8.3	4.2	3.85	30	1.0	40		—	ms1C	BA56
33	ⅢCb	11.6	5.1	3.7	90	1.6	110		abcde2	ss2A	44住BE
34	〃	11.6	4.9	3.35	100	1.5	95		—	〃2C	BK92Ⅰ
35	〃	11.8	4.0	3.7	100	1.4	85		abcde2	Gs2B	44住東Z
36	〃	12.1	5.0	4.8	30	1.7	125		—	〃3B	BO67
37	ⅣDc	10.9	3.8	3.9	80	1.6	110		a2	〃3A	AM76Ⅱ
38	ⅣBb	9.1	4.3	4.3	120	2.2	95		—	ms1C	BO73
39	ⅣDb	9.7	3.6	3.6	100	1.6	70		—	Gs2B	AW77
40	ⅣBb	10.1	4.4	4.4	100	1.4	110		—	〃1B	AU88Ⅰ
41	ⅢCc	11.6	5.0	5.0	40	1.3	105		a1	〃2B	BY74
42	ⅣBa	9.8	4.6	4.1	40	1.0	70		—	〃1B	BⅠ—Ⅰ
43	—	13.2	9.0			2.6	360		—	Ab4C	BY—60
44	—	10.5	7.1			1.9	170		—	altsm2C	AE
45	—	12.8	8.0			2.9	380		—	Gs3B	BU—72
46	ⅣCc	9.6	5.0			2.8	245		—	〃2A	BB—77
47	Ⅳ〃	10.0	5.2	4.9	90	1.3	90		ad2	ss2A	BW—64
48	〃	9.6	4.4	4.4	90	1.1	70		—	ms1C	BC—69
49	ⅢAc	10.1	5.1	4.4	60	2.0	155		a1	Gs1A	AW77
50	Ⅲ〃	12.0	4.7	4.3	70	1.4	130		—	〃2B	BT80
51	ⅢCc	10.0	4.0	4.5	60	0.9	50		—	〃1B	BP68
52	ⅣBb	10.1	3.9	3.3	70	1.7	90		a2	〃2B	AY56
53	ⅣBc	9.7	4.0	3.5	50	1.8	95		d2	〃1A	BY56—Ⅰ
54	ⅣBb	8.8	4.0	4.0	100	2.3	100		ade2	ss2A	BY71
55	ⅢCc	11.3	4.2	6.4	50	2.1	130		—	Gs2A	BG79—Ⅰ
56	ⅣBc	9.5	4.5	4.45	100	1.5	80		—	altsm2C	BY62
57	ⅢAc	11.8	5.0	4.5	80	1.1	100		ab1	Gs1A	BI92
58	ⅣBc	8.8	4.1	4.2	70	1.2	55		—	〃 〃	AS—70
59	ⅤDc	8.1	3.0	2.65	50	1.2	40		—	ms2C	AV73ヨ
60	ⅣBc	9.1	3.8	3.3	80	1.4	80		a1	Gs1B	BA85
61	〃	9.5	3.8	3.5	20	1.0	50		〃	ss2B	AO82
62	〃	9.2	3.5	3.1	20	1.2	60		—	Gs1B	AW59

No.	類　型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	折　損	使用痕	石　材	註　記
63	ⅣCc	9.7	4.5	4.0	90	1.4	100		abc2	Gs2A	BA80
64	ⅢBc	11.3	5.3	3.4	100	1.5	125		a1	Bs1A	AO80黒
65	〃	11.1	5.1	4.9	90	1.5	120		a2	Gs2A	Ⅱ旧テ跡
66	ⅣCc	8.1	4.4	4.0	80	1.0	40		a1	ss2A	44住東Z
67	〃	8.5	3.8	4.6	70	1.2	55		—	Gs1C	27住
68	ⅤDc	9.5	3.0	1.1	90	0.7	30		—	ms1C	ド610周
69	ⅤBc	8.9	3.7	3.0	30	0.9	35		—	〃1C	BY72
70	ⅤCc	10.1	2.8	1.7	60	0.8	30		d1	Gs1A	36住
71	ⅣCc	9.6	4.7	4.6	100	1.4	90		—	ms1C	BJ76Ⅰ
72	ⅢCc	12.1	5.1	5.5	110	1.4	130		a1	Bs2A	BU72
73	〃	10.2	5.0	5.1	80	1.1	80		—	ms1C	BF86
74	〃	9.9	4.9	5.0	50	1.4	105		—	〃 〃	BQ72
75	ⅣAb	8.2	3.7	3.9	80	1.0	50		a1	〃1A	BU71
76	ⅤBc	7.0	3.0	1.8	30	1.0	30		—	Gs1C	BF63
77	ⅢAa	14.6	4.4	3.8	70	1.25	120		bc1	Gs2A	BB55
78	ⅢBb	11.9	4.5	3.7	80	2.1	145		—	ms2C	36住
79	ⅢAc	11.1	4.3	4.6	50	1.25	90		—	Gs1B	B区西南側
80	ⅤCb	9.0	3.4	2.6	60	1.0	40		—	〃2B	BV66
81	ⅣBb	9.4	4.55	4.2	60	1.1	80		—	〃1B	44住BE
82	ⅡCb	12.5	4.9	4.9	60	2.0	135		a1	〃2B	AW76
83	ⅢCb	11.2	4.9	4.7	90	1.35	95		〃	〃1B	BW74
84	ⅣCa	9.3	4.9	4.5	60	1.1	80		a1s	Bs2B	AW88Ⅰ
85	〃	9.9	4.8	4.7	40	1.2	75		—	ms1C	AQ68
86	ⅣCb	9.3	4.6	3.8	110	1.4	80		—	〃 〃	BL54
87	ⅣCa	8.75	5.2	4.4	110	1.8	105		a2	Gs2B	AO80黒
88	ⅣCb	8.7	5.0	4.5	80	1.0	65		—	〃1B	AQ82
89	ⅢBc	10.8	4.95	4.8	60	1.7	110		—	ss2C	AY62
90	ⅢCa	10.4	4.3	4.2	60	1.4	85		a1	Gs1B	BH91
91	ⅣCb	8.4	4.0	3.9	50	1.0	55		—	〃2B	BA89
92	ⅣBc	10.05	5.1	5.0	90	2.25	150		—	ms1C	BI79
93	ⅤBb	7.5	3.4	3.4	30	1.1	45		a1	Gs1A	AO— 8
94	ⅣCa	9.9	5.2	5.1	60	2.0	150		—	〃 〃	AO80—ヨ
95	ⅣCb	9.95	4.7	4.35	60	1.8	115		—	〃2B	AY—76
96	ⅣBc	9.3	3.8	3.1	70	1.15	55		a1	〃1A	BO71Ⅱ
97	ⅢBc	10.45	4.8	4.4	40	1.0	85		〃	〃2A	Z
98	ⅤC	8.9	3.25	3.0	50	0.85	40		〃	〃2B	AS80
99	ⅢDc	12.3	4.2	4.0	60	1.3	100		—	Bs2B	BJ91
100	ⅡBb	13.5	5.3	4.9	110	1.8	170		—	ms1C	8住ヲ
101	ⅡCc	12.2	4.8	4.8	30	2.4	135		—	Gs3A	BJ70
102	ⅢDc	12.2	4.3	3.6	110	2.3	170		—	〃2B	—
103	ⅢDb	12.6	3.8	3.1	50	1.3	110		—	〃2A	B
104	ⅣCc	8.3	4.3	4.2	50	1.1	50		—	ms1B	AY51
105	ⅢCc	11.1	4.7	3.9	60	1.4	120		ab2	Gs3A	AQ64Ⅱ
106	ⅣCc	9.8	4.0	3.35	80	1.45	70		—	〃2A	CM50
107	〃	9.2	5.45	5.5	90	1.5	90		—	〃 〃	36住
108	ⅣAa	8.0	4.4	4.1	80	1.3	65		—	altsm2B	AW76ヨ
109	ⅣDc	10.4	3.7	2.9	30	1.4	85		—	Gs1C	AV72
110	ⅢCc	11.5	4.7	3.7	70	1.7	115		—	altsm2C	AV70Ⅰ
111	ⅣCc	9.55	4.3	4.1	80	1.6	70		—	ms1C	BJ90
112	ⅤDc	8.0	2.8	2.7	80	1.1	40		—	Gs2B	AQ82
113	ⅤBc	8.4	3.75	3.8	70	1.25	45		abc1	〃1B	AW76

No.	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
114	ⅤBc	8.2	4.2	3.7	70	1.3	60		—	Gs3B	BA88
115	ⅢAb	12.4	5.8	5.6	120	2.5	230		—	〃3A	36住
116	ⅣAb	10.7	4.1	3.3	90	1.3	95		bd2	〃1A	AO68—Ⅰ
117	ⅢCb	11.1	5.6	5.1	110	1.3	120		a2	〃2B	8住ヲ
118	ⅢDb	12.9	4.3	2.8	110	1.6	105		〃	Bs3B	BK91
119	ⅢCb	10.5	4.4	3.35	90	1.4	85		abd2	Gs2A	BY78
120	Ⅲ C″b	11.3	4.25	3.1	50	1.1	85		bd2	〃1A	BR68
121	ⅢBb	10.2	4.3	3.5	110	1.5	120		abc2	〃2A	BJ62ⅠⅡ
122	ⅣCa	9.4	4.45	4.3	90	1.4	85		b2	〃 〃	BK90
123	〃	10.1	5.15	4.6	80	1.7	110		ade2	〃 〃	BY65
124	〃	9.75	6.0	6.0	80	1.1	90		a1	〃2B	AW76ヨ
125	ⅢBc	11.5	5.0	4.0	110	1.9	95		a2	〃 〃	BB67
126	ⅤBc	7.8	3.50	3.8	91	0.7	35		〃	〃1A	BU67
127	ⅣBa	8.7	4.4	4.2	110	1.0	65		acd3	〃 〃	AX53
128	ⅢCa	12.45	4.3	3.7	110	1.3	110		abcde2	〃2A	BF86
129	ⅢDb	13.2	3.95	3.7	100	1.8	130		ad2	〃 〃	AV84—Ⅰ
130	ⅡDa	14.7	4.15	3.9	130	2.5	220		a1	〃1A	BW66
131	ⅠBc	16.3	5.3	4.4	100	2.0	235		ad1	〃2A	BQ66Ⅱ
132	ⅠDc	18.2	5.0	4.9	70	2.5	275		ab2	〃 〃	BI83—Ⅰ
133	ⅢAc	12.15	3.8	1.8	50	1.6	95		d3	〃2A	BG89
134	〃	10.95	4.5	2.9	80	1.3	90		ad2	〃2B	BA83
135	ⅣBb	9.2	4.75	4.1	100	1.9	125		〃	〃2A	BF79
136	ⅡDc	15.5	4.9	2.5	160	3.0	310		—	〃1A	ド444附近
137	ⅢCc	11.4	4.75	4.85	90	1.7	120		—	〃2B	BI57
138	ⅡAb	12.5	5.8	4.3	90	1.8	165		ab3	〃1B	AU60
139	ⅣCc	9.8	4.9	4.0	70	1.6	120		a2	〃 〃	AQ64Ⅰ
140	ⅣBc	9.4	5.3	4.9	90	1.5	95		bd2	〃 〃	BI89
141	ⅡCa	13.1	4.5	3.3	70	1.5	115		—	〃2B	BC84
142	ⅢBb	11.5	4.95	3.0	80	1.5	140		a1	〃3A	BB84
143	ⅢDb	14.1	3.8	2.6	100	1.3	105		ad1	〃 〃	BU67
144	ⅣDa	11.1	3.8	3.0	90	1.35	85		bd2	〃1A	AE
145	ⅡDb	11.95	4.35	4.15	130	3.0	225		abd2	〃3A	AY57—Ⅰ
146	ⅣDa	10.4	4.1	3.6	90	2.35	130		ad3	〃1A	BK87
147	ⅣDb	10.1	3.8	3.5	90	1.5	90		a1	〃2B	AW76
148		12.8	3.8	2.9	50	2.5	160		d2	〃1A	BH80
149	ⅡCc	10.5	6.5	6.4	60	2.1	185		—	〃2B	BU67
150	ⅤBa	7.45	4.4	4.1	80	1.5	65		—	〃2A	44住BE
151	ⅣDc	9.7	3.1	3.0	100	1.4	60		—	Bs3B	BR71
152	ⅢCc	11.1	4.3	3.2	90	1.0	70		ade2	Gs1B	AE
153	ⅡDb	14.95	4.2	3.8		1.9	190		—	〃 〃	AZ4住周
154	ⅢCb	11.1	3.9	4.0	100	1.2	70		ade2s	〃 〃	B
155	ⅢBb	10.25	4.75	4.0	110	1.8	120		a2	〃 〃	AX54
156	ⅤBb	7.5	4.0	3.9	60	1.6	60		—	〃3A	BI—Ⅰ
157	ⅥCc	8.2	4.15	4.3	40	1.1	45		bc3	〃1A	BV—66
158	ⅣAc	7.95	4.0	4.0	110	1.1	45		abcd2	〃1B	AV—57
159	ⅢBc	11.5	5.55	4.85	90	1.6	115		d2	ss2A	BY71
160	ⅣBb	9.6	3.85	3.3	90	2.0	105		a1	Gs1A	Ⅱ旧テ跡
161	ⅣCa	8.35	4.4	4.0	110	1.4	80		abc2	〃2B	BB85ド
162	ⅢCc	11.4	4.7	4.8	80	2.3	165		a2	〃1A	AX53
163	ⅣDb	10.7	3.55	3.5	90	1.7	90		abcde3	〃2A	BY66
164	ⅢBc	10.5	4.7	4.3	90	1.35	75		a1	〃1B	44住BE

No.	類　型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	折　損	使用痕	石　材	註　記
165	ⅣBb	9.3	4.5	4.3	100	1.2	70		a2	Gs2A	AE
166	ⅢAc	11.4	4.7	4.35	120	2.8	160		〃	〃1A	BS55
167	ⅢBb	10.5	5.6	5.0	80	1.3	85		a1	〃 〃	BT58
168	ⅠCb	11.95	7.3	7.1	80	1.7	140		〃	〃 〃	38住西農道下
169	ⅣBc	9.8	4.5	4.4	40	1.8	110		abd2	〃2A	BY82
170	ⅤDa	10.4	2.6	1.2	40	1.25	45		—	〃1B	BQ69
171	ⅣBa	10.1	3.8	2.1	80	1.3	90		a1	〃1A	BS68
172	ⅡDa	8.3	5.2	3.7	110	2.2	130	B_2	〃	〃2A	BY65
173	ⅢDb	11.0	4.0			1.9	95	$D_{1,3}$	—	〃1A	AX59
174	ⅢC	12.1	4.6			1.25	90	B_1	—	〃1B	BNBJⅠⅡ
175	ⅣD	10.35	3.8			1.9	100	$D_{1,3}$	ab3	〃1A	Ⅱ旧テ跡
176	ⅠC	11.3	6.5			1.35	135	B_1	—	〃2A	BD82Ⅰ
177	ⅣB	9.0	4.35			1.0	50	B_1	—	〃3A	BE91
178	ⅣD	11.5	3.8			2.0	120	$D_{1,3}$	—	〃2A	BE90
179	ⅡC	10.9	5.3			1.05	75	〃	—	〃2B	BN66
180	—	5.35	4.7			1.2	35	B_1	—	〃1A	AE
181	ⅢD	8.5	3.7			1.6	80	〃	—	〃 〃	AS58Ⅰ
182	ⅣDa	10.4	3.7			1.3	65	〃	—	〃2C	BY71
183	ⅠDa	14.8	4.65	4.3	90	2.1	140	C_2	a1	〃3A	AH76—Ⅰ
184	ⅣD	6.3	3.45			1.5	40	B_1	—	〃1B	BG92Ⅰ
185	—	10.2	4.4			1.6	80	D_3	—	〃3A	BD66
186	ⅠB	8.7	6.4			2.5	180	B_1	—	〃 〃	BY66
187	—	8.5	3.4			1.6	55	C_1	—	〃1A	AW88Ⅰ層
188	—	8.6	6.75			1.55	135	B_1	—	〃1B	—
189	ⅣD	7.5	3.25			1.35	50	〃	—	〃 〃	BQ60
190	—	7.0	4.3			0.8	40	〃	—	〃2B	—
191	ⅠDb	16.15	5.4			1.8	225	$D_{1,3}$	ab1	〃1A	BH84
192	—	6.6	4.9			1.3	75	D_3	—	〃2C	BⅠ93—Ⅰ
193	ⅢD	10.5	3.4			2.0	100	B_1	—	〃2B	BⅠ83—Ⅰ
194	ⅢC	8.6	4.4			1.7	90	〃	—	〃3A	BⅠ—Ⅰ
195	ⅢBc	10.3	5.45			1.2	70	$D_{1,3}$	ad2	〃1A	BH81—Ⅰ
196	D	7.7	4.2			1.75	100	D_1	—	〃2A	AY55
197	D″	9.7	3.7			1.25	70	$D_{1,3}$	d1	〃2B	AM72—Ⅰ
198	ⅢC	10.3	4.0			1.6	90	〃	abc3	〃1B	AY62
199	ⅡD	9.3	4.3			1.5	85	〃	d1	〃2A	44住BE
200	ⅣC	10.2	4.9			1.8	85	〃	—	〃1C	AX51
201	ⅢA	9.75	3.7			1.4	70	C_1	—	〃2A	BN68
202	C	7.2	3.9			1.25	55	B_1	—	〃3A	BW66
203	ⅣD	8.9	3.7			1.5	70	〃	—	〃1A	AQ84
204	—	7.9	3.95			1.8	70	〃	—	〃2A	BH88
205	ⅡD	8.05	4.35			1.9	95	〃	—	〃 〃	BB54
206	〃	7.55	4.8			1.95	110	〃	—	〃3B	AW57
207	ⅣD	6.9	3.0			1.5	40	〃	—	〃2C	BG81
208	〃	5.7	2.7			1.4	25	C_1	—	〃1A	AQ86
209	ⅣB	8.9	4.75			1.4	70	〃	—	〃 〃	A—62—ヨ
210	〃	5.7	4.3			1.6	50	B_1	—	〃1B	BP73
211	b	9.0	4.1	3.9	60	1.3	55	C_2	a1	〃2A	BB65
212	—	12.15	4.2	4.85	40	2.1	125	B_2	—	〃2A	AY68
213	ⅠB	10.3	5.4			2.0	150	D_3	—	〃 〃	AX52—Ⅰ
214	—	7.95	4.7			1.0	60	〃	—	〃2B	BP68
215	Ⅰ	8.85	6.2		80	1.7	120	E_2	ab2	〃2A	AR67Ⅰ

No.	類　型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	折　損	使用痕	石　材	註　記
216	Ⅰ″	10.0	4.3			2.15	100	B_1	—	ms1A	BG90
217	—	11.0	3.4			1.7	70	E_1	—	Gs1A	Z
218	b	5.8	3.4	3.0	90	1.0	30	B_2	—	〃 〃	BZ
219	a	6.1	4.2	4.6	110	1.6	65	〃	a1	〃3A	BR71
220	b	5.7	4.95	3.8	100	1.1	55	〃	〃	〃2B	Z
221	b	5.5	4.45	4.2	100	0.7	30	B_2	ab2	〃2A	BN50
222	ⅣCa	8.1	4.4	3.8	80	1.0	60	C_2	〃	〃1A	BK48
223	c	7.3	4.1	3.7	110	1.2	50	B_2	ad2	〃2A	9住Pi＋8
224	ⅡD	8.0	4.3			1.5	80	B_1	—	Bs1B	AS74—ヨ
225	—	8.4	3.5			1.7	65	C_1	—	〃 〃	BZ
226	Ⅰc	8.8	5.7	7.1	70	1.85	85	B_2	a1	Gs1B	BY62
227	ⅣDb	6.0	3.3	3.0	90	1.35	40	〃	〃	〃2B	AD54—Ⅰ
228	Ⅲb	7.0	4.7			1.6	70	B_1	—	〃2″B	BB70—Ⅱ
229	—	7.7	3.2			1.0	35	E_1	—	〃1A	BA67—Ⅱ
230	ⅢBb	8.0	5.0	3.6	110	1.3	60	B_2	a2	〃2A	BD56
231	〃	6.0	5.45	4.75	90	1.3	70	〃	a1	〃2B	AO64Ⅰ
232	ⅣDc	5.45	3.5	2.7	90	1.2	30	〃	ab2	〃2A	BY71
233	ⅡBb	10.1	5.4	4.5	50	1.2	105	〃	—	〃2″A	AU73
234	ⅣAb	7.9	4.1	3.4	80	1.15	50	〃	—	ms1B	AE
235	ⅣCb	8.0	4.1			1.25	55	A	局部磨製	Gs1A	AZ4住周
236	ⅡCb	9.2	5.05	4.2	100	2.1	155	B_2	a1	〃2A	BO89
237	ⅤDb	7.4	3.2	2.2	100	1.5	55	〃	ab2	〃 〃	AY51
238	ⅡCc	10.6	4.4	3.1	100	1.8	115	$D_{2,3}$	—	〃 〃	AE
239	ⅢDb	8.9	4.0	2.5	110	2.0	100	B_2	a1	〃3A	BF84
240	—	6.95	4.5			1.7	70	B_1	—	〃1B	AU75Ⅰ
241	a	7.2	4.6	4.3	100	1.2	45	C_2	abe2	〃1A	BT60
242	—	6.9	4.4		70	8.0	30	D_2	ad2 bf3	〃〃	AX86
243	c	5.8	5.5	4.9	100	0.95	50	B_2	a2	〃2A	BT52
244	ⅡB	6.0	5.9			1.2	65	B_1	—	〃2B	BY82
245	—	5.1	4.9			1.25	50	〃	—	〃2A	BS86
246	—	9.1	3.9		70	1.6	65	E_2	ab2	〃〃	BH85
247	ⅣCb	8.5	4.65	4.3	80	1.3	65	C_2	a2	〃2B	AQ86
248	ⅢCc	8.65	4.6	4.5	60	1.0	60	B_2	a1	〃2A	BY73
249	ⅤCc	7.3	3.6			0.65	30	〃	局部磨製	〃1A	BI92
250	a	5.6	3.8	5.3	70	1.2	40	〃	a1bc2	〃〃	BX64
251	Cb	8.25	4.85	4.3	90	1.4	70	C_2	a1	〃2A	AE
252	Cc	6.8	5.5	5.0	70	1.65	60	B_2	abc2	〃〃	AT67—Ⅰ
253	ⅡDb	9.3	4.6	3.6	110	2.8	145	〃	a1	〃〃	BE83
254	ⅠBb	9.9	6.0	4.6	60	2.15	170	〃	—	〃2B	BR60ⅠⅡ
255	ⅡDb	8.85	4.6	4.1	110	1.85	105	〃	abc2	〃2A	BK90
256	ⅡC	9.4	4.95			1.7	110	〃	—	〃〃	AS62Ⅰ
257	—	6.8	4.3	3.2	30	1.1	40	C_2	—	〃1A	BB75
258	c	5.8	3.4	3.1	70	0.7	15	〃	abcde3s	〃〃	BW76
259	c	7.5	4.6	3.9	70	0.65	30	〃	a1	〃2A	BO90
260	—	8.05	4.7			1.5	80	B_1	—	〃1A	Z
261	C	6.95	4.9			2.1	100	〃	—	〃1B	AO80ヨ
262	Bc	7.7	5.2	5.0	60	1.1	50	C_2	ab1	〃2A	AT75
263	C	6.3	4.85			0.85	30	B_1	—	〃1B	BB55
264	ⅢA	6.3	3.9			1.3	50	〃	—	〃2A	BB54
265	D	5.7	3.8	3.9	60	1.3	40	B_2	a1	〃2A	BB52
266	C	7.7	4.4			1.4	60	B_1	—	〃〃	BS78

No.	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
267	D	8.7	4.5			2.5	100	B_1	—	Gs 2 A	C u 56
268	B	6.6	4.7			1.15	45	〃	—	〃 2 B	A O82 I
269	—	10.8	3.8			1.5	75	C_1	—	〃 3 B	A X53
270	C	8.7	4.8			1.3	70	B_1	—	〃 1 B	A W72
271	VB	7.15	3.2			0.8	20	C_1	—	〃 〃	A X63
272	C	9.0	4.45			1.0	65	B_1	—	〃 2 A	A U68—II
273	IIB	9.7	5.8			1.1	90	〃	—	〃 2 B	A X52—I
274	ID	9.8	4.5			1.8	145	〃	—	〃 2 A	B E90
275	IB	13.8	5.6			1.7	210	〃	—	〃 〃	B
276	IIB	7.25	5.4			1.4	80	〃	—	〃 1 C	B G89
277	C	6.7	3.9			1.3	60	〃	bc 3	〃 1 A	B D56
278	〃	6.1	3.8			1.8	40	〃	—	〃 〃	B A56
279	B	8.7	4.2			1.35	65	〃	—	〃 2 A	B Y66
280	IIIC	8.5	4.35			0.9	55	〃	—	〃 3 A	B K60—I II
281	B	8.3	4.2			1.1	55	〃	—	〃 2 A	B R74
282	VC	7.25	3.2			0.8	25	〃	—	〃 3 A	A X54
283	C	7.55	3.95			1.15	45	〃	—	〃 2 A	B W46—I
284	B	7.4	3.9			1.3	45	C_1	—	〃 2 B	B D56
285	—	6.0	4.5			1.3	40	B_1	—	〃 〃	A D80—I
286	IIIC	9.1	3.7			1.0	45	$D_{1,3}$	—	〃 1 A	B I 77—I
287	IIB	10.8	5.0			1.8	140	B_1	—	〃 3 A	36住付ミゾ
288	IIC	7.65	4.35			2.3	100	〃	—	〃 2 A	B Y69
289	b	8.1	4.1	3.3	90	1.20	60	B_2	a 1	〃 2 B	A Y74—I
290	—	8.2	4.8			1.35	55	B_1	—	〃 2 A	A U73
291	IIIC	8.7	4.4			1.5	80	C_1	—	〃 3 A	B G87
292	D	8.9	4.2			2.15	115	B_1	—	〃 2 A	A E
293	Da	7.8	4.7	3.4	100	2.6	120	B_2	a 1	〃 〃	B B52
294	IB	9.75	6.7			2.2	200	B_1	—	〃 3 A	A M64
295	IID	10.1	4.7			2.65	180	〃	—	〃 2 A	B D59
296	C	6.4	4.0			1.45	50	〃	—	〃 〃	36住
297	D	6.5	3.7			1.9	50	〃	—	〃 2 B	A X54
298	C	7.4	5.0			1.45	70	〃	—	〃 1 A	B Y65
299	—	7.7	5.15			1.6	60	〃	—	〃 〃	A Y61
300	VC	5.8	3.0			0.8	20	〃	—	〃 2 B	B X71
301	C	4.85	4.4			1.3	40	〃	—	〃 1 A	A Y54ヨ
302	IVD	6.3	2.7			1.2	25	〃	—	〃 2 A	—
303	C	6.35	4.6			1.3	50	D_3	—	〃 〃	A Y53—I
304	〃	8.6	4.35			1.45	65	B_1	—	〃 2 B	B P74
305	ID	9.9	5.0			2.95	195	〃	—	〃 2 A	B G83
306	IID	10.2	4.65			1.9	100	〃	—	〃 2 B	B Q69
307	C	7.9	4.1			1.3	50	〃	—	〃 2 A	B Q72
308	〃	5.2	4.2			1.1	40	〃	—	〃 1 A	B G68
309	—	6.2	3.8	3.6	50	1.8	50	B_2	a 1	〃 3 A	B J91
310	—	8.05	5.0	3.7	90	1.7	70	〃	—	〃 2 A	B R73
311	IIID	8.5	4.0			1.5	75	B_1	—	〃 1 A	A Y58—I
312	b	5.7	4.7	3.7	40	1.2	40	B_2	a 1	〃 2 A	A S73
313	IICc	9.3	4.8	4.0	90	1.65	95	C_2	ad 2	〃 1 A	B F53
314	IIIC	8.1	4.45			1.3	60	B_1	—	〃 2 B	B D84
315	IID	11.35	4.2			1.9	120	〃	—	〃 〃	A U65—I～II
316	—	9.7	4.9			1.4	90	〃	—	〃 〃	A U57
317	VC	4.9	3.0			0.95	20	〃	—	〃 2 A	A X84

No.	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
318	ⅣD	9.5	3.7			1.35	60	$D_{1,3}$	—	Gs 3 B	B S68
319	—	7.3	3.7		60	1.3	35	E_2	—	〃 2 B	A W59
320	C	5.5	4.0	2.9	90	1.5	45	B_2	ab 2	〃 〃	B D92
321	〃	8.35	4.6			1.25	60	B_1	—	〃 2 A	Z
322	D	7.95	4.0			1.8	60	〃	—	〃 2 B	A X77
323	C	7.8	4.3			1.4	50	〃	—	〃 2 A	A Q82
324	—	7.75	3.8			1.3	45	〃	—	〃 〃	B Y82
325	Ⅰ	9.0	3.8		80	1.7	80	E_2	—	〃 2 B	A Q64－Ⅰ
326	c	5.9	4.2			1.45	40	D_1	—	〃 2 A	A M76－Ⅰ
327	VD	5.8	2.85			1.05	30	B_1	bc 2	〃 1 A	B Y76
328	C	8.1	4.6			1.4	60	〃	—	〃 〃	B Y70
329	—	5.0	4.7			1.1	45	D_3	—	〃 2 C	B W72
330	ⅠC	10.25	6.0			2.0	140	B_1	—	〃 3 B	A O66－Ⅰ
331	—	5.65	4.9			1.5	70	D_3	bc 2	〃 2 B	A X61
332	ⅡC	8.8	5.05			1.3	85	B_1	—	〃 1 A	A O82－Ⅰ
333	—	4.85	4.75			1.1	40	D_3	—	〃 2 B	B K84
334	c	7.3	4.65	4.0	110	1.35	55	C_2	ab 1	〃 1 A	B A57－Ⅰ～Ⅱ
335	ⅡC	11.5	5.5			2.1	60	$D_{1,3}$	—	〃 2 A	5住外
336	C	5.0	3.8	3.3	90	1.2	30	B_2	a 2	〃 2 B	B X64
337	—	5.5	4.25			1.2	40	B_1	—	〃 2 A	B Y75
338	—	6.2	3.5	2.9	90	1.3	45	B_2	a 2	〃 2 B	A X51
339	—	6.4	5.9	6.2	110	1.35	55	C_2	a 1	〃 〃	B P54
340	D	6.75	4.8			2.5	100	B_1	—	〃 〃	A O66－Ⅰ
341	C	5.8	3.9			1.3	35	〃	—	ss 2 A	A W56
342	ⅠD	10.2	4.7			2.7	155	C_1	—	Gs 1 A	A Q84
343	—	5.75	4.0			1.3	40	B_1	—	〃 2 A	—
344	—	5.5	3.3			1.2	25	〃	—	〃 2 B	A S75
345	ⅣB	8.35	4.3			0.9	45	〃	—	〃 3 B	B X64
346	c	5.15	4.7	4.9	10	1.6	50	B_2	a 2	ss 2 B	B U71
347	ⅣC	9.6	4.35			1.4	80	$D_{1,3}$	—	〃 2 C	B N61－Ⅰ～Ⅱ
348	Ⅰc	8.9	5.15	3.8	90	1.45	70	C_2	a 1	〃 2 A	A S60
349	Cc	5.7	4.1			1.05	40	B_1	—	〃 2 C	B W72
350	C	8.3	4.45			1.2	50	C_1	—	〃 2 A	B H88
351	—	6.0	5.0			1.8	60	E_1	—	〃 〃	B I53
352	C	6.65	5.2			1.2	60	B_1	—	〃 2 B	A O78
353	B	6.0	4.6			1.3	45	B_1	—	〃 2 A	Ⅱ旧テ跡
354	ⅣC	9.7	4.3			1.55	90	$D_{1,3}$	—	〃 2 C	A R82
355	ⅡB	10.4	5.6			1.2	110	B_1	—	〃 2 B	Z
356	ⅠB	9.7	5.6			2.1	120	〃	—	〃 2 A	A Y51
357	ⅣC	7.55	4.0			1.65	60	〃	—	〃 1 B	A S98－Ⅰ
358	C	8.2	4.35			1.25	65	〃	—	〃 2 C	B N50
359	C	6.0	4.4			1.7	60	〃	—	〃 2 A	A O76－Ⅰ
360	ⅢB	6.8	5.0			1.45	65	D_3	—	〃 2 B	A Y54
361	b	6.5	5.3	4.4	90	1.35	45	B_2	a 1	〃 2 A	A O66－Ⅰ
362	a	5.95	4.95	4.0	90	1.5	60	〃	〃	〃 1 A	A Y53－Ⅰ
363	ⅢDc	6.7	4.55	3.5	90	2.0	80	〃	〃	〃 2 B	B Y72
364	Ⅱc	9.6	5.9			2.2	135	B_1	—	〃 2 C	B U70
365	b	6.1	4.7	4.0	80	1.5	55	B_2	a 2	〃 2 B	B D91
366	ⅡC	7.85	4.8			1.7	85	B_1	—	〃 〃	B U78
367	ⅢC	8.6	4.25			0.9	40	〃	—	〃 〃	B I89
368	—	8.25	4.1			1.3	60	〃	—	〃 〃	B A59

No.	類　型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	折　損	使用痕	石　材	註　記
369	a	6.9	5.0	3.8	60	1.6	45	B_2	a 1	ss 2 A	BU90
370	ⅠBb	10.7	5.9	5.6	110	2.4	205	$D_{3,2}$	a 2	〃 2 B	CC50
371	C	7.8	5.1			2.2	115	B_1	—	Gs 3 A	AY66
372	B	6.4	4.2			1.0	25	D_1	—	ss 2 B	BD65
373	D	7.0	3.9			1.8	60	C_1	—	〃 2 C	BⅠ—Ⅰ
374	ⅣA	9.55	4.4	4.5	90	1.2	70	$D_{3,2}$	a 1	〃 2 A	AU57
375	—	5.0	4.0			1.8	55	B_1	—	〃 2 B	BS56
376	VB	5.5	3.7			0.9	20	D_1	—	〃 〃	44住BE
377	Ⅰ b	8.35	6.4	6.6	90	1.55	85	C_2	a 1	〃 2 A	AH70—Ⅰ
378	—	7.0	3.5			1.4	45	B_1	—	〃 2 B	BB52
379	ⅡCa	9.2	5.8	5.1	80	1.3	90	B_2	a 1	〃 2 A	BQ70
380	a	5.75	5.75	5.4	110	1.8	65	〃	〃	〃 〃	AW53
381	C	6.2	3.9			1.0	40	B_1	—	Gs 1 C	AS86—Ⅰ
382	B	7.8	4.5			1.1	40	〃	—	ms 1 C	AW88—ⅠⅡ
383	C	5.3	3.7			1.05	30	〃	—	〃 1 B	AY54—コ
384	—	8.2	5.0			1.95	90	C_1	—	〃 1 C	AQ64—Ⅱ
385	B	5.8	4.4			1.8	75	D_1	—	〃 〃	CT54
386	A	6.56	4.2			1.15	40	B_1	—	〃 〃	AW59
387	—	4.5	3.5			0.95	20	〃	—	〃 〃	13
388	VB	6.9	3.2			0.9	20	$D_{1,3}$	—	〃 2 C	BC55
389	B	6.9	5.0			1.65	65	B_1	—	〃 1 C	BC74
390	C	4.7	4.6			1.2	45	D_3	—	〃 1 B	AV54—Ⅰ
391	ⅢB	8.0	5.0			1.15	60	B_1	—	〃 1 C	AE
392	ⅣBb	7.5	4.3	3.9	90	1.0	35	B_2	—	ss 2 C	BQ78
393	ⅢBa	7.45	4.8	4.6	40	1.0	60	〃	—	ms 1 C	AU73
394	ⅢBc	6.5	5.0	3.7	60	1.5	65	〃	a 1	Gs 1 B	ヤリ方内
395	ⅠBc	7.8	6.7	5.1	80	1.15	90	〃	—	〃 1 C	BU67
396	ⅠBa	7.75	5.9	5.4	80	2.1	130	D_3	—	〃 3 B	BG87
397	ⅠB	9.7	6.0			2.6	220	B_1	—	〃 1 C	BR42
398	ⅢB	9.9	4.8			1.6	80	$D_{1,3}$	—	ms 1 C	BK91
399	—	9.25	4.9			1.95	70	D_3	—	〃 1 B	AY51
400	ⅣA	6.5	4.2			1.5	65	B_1	—	〃 1 C	AQ86
401	ⅢBc	9.4	4.8	3.8	110	1.35	70	$D_{3,2}$	—	〃 〃	Z
402	ⅣBc	9.4	4.35			0.8	50	D_3	—	〃 〃	BX58—Ⅱ
403	—	8.6	5.2			1.4	85	B_1	—	〃 〃	BY64
404	ⅠBc	9.8	5.9	5.5	60	2.5	170	C_2	—	altsm 2 C	BH54Ⅰ—Ⅱ36住入
405	Ⅱ	10.75	5.4			1.9	160	B_1	—	ms 2 C	36住附ミゾ
406	〃	9.75	5.1			1.8	120	〃	—	〃 1 C	AV77
407	ⅡDa	11.35	4.5			2.1	135	D_3	—	〃 〃	AM60
408	—	6.25	6.1			1.2	55	〃	—	〃 〃	BD70
409	ⅡD	8.7	4.7			1.3	80	B_1	—	〃 〃	BK90
410	ⅢC	8.9	4.4			1.3	50	〃	—	〃 〃	AW71
411	—	7.35	4.5	3.7	60	1.5	55	B_2	—	〃 〃	AW56—Ⅰ
412	ⅡA	10.7	4.85			1.2	90		a 1	〃 1 A	BO75—Ⅱ
413	ⅡC	9.9	4.8			1.9	95	B_1	—	〃 1 C	BC84
414	ⅡD	10.1	5.35			1.8	125	D_3	—	〃 〃	BS76
415	ⅡC	9.3	6.1			1.65	100	B_1	—	〃 〃	BB75
416	〃	8.4	5.1			1.5	80	〃	—	〃 〃	BY71
417	ⅣC	9.5	5.3			1.2	60		a 1	〃 1 A	BY73
418	ⅡB	8.15	5.3			1.1	80	B_1	—	〃 2 B	BB84
419	ⅣCa	7.3	4.95	3.9	90	1.5	80	B_2	—	ss 2 B	B

No.	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記
420	C	7.8	4.35			1.1	55	D_3	—	altsm 2 B	Z
421	ⅡBb	6.35	5.05	4.5	60	0.8	45	B_2	a 1	ms 2 A	A R67 I
422	C	6.45	4.45			1.1	45	B_1	—	altsm 2 C	A88
423	Cc	5.6	4.65	4.5	100	1.5	45	B_2	a 2	ms 1 B	B F68
424	C	5.85	4.1			1.0	30	B_1	—	〃 1 A	B H52
425	B	5.9	5.1			0.8	30	B''_1	—	〃 1 C	B E90
426	C	7.55	4.7			1.5	40	C_1	—	altsm 2 B	B A87
427	B	5.0	4.45			1.05	40	B_1	—	ms 1 A	A Y53
428	—	6.0	4.45			1.0	25	D_3	b 2	〃 1 B	A Q86
429	Ca	4.55	5.35	4.3	100	0.6	25	B_2	abcd 2	〃 1 A	A S62 I
430	—	4.15	3.75			0.9	20	B_1	—	〃〃	Z
431	—	4.6	4.0			1.1	20	〃	—	altsm 2 B	A O84—I
432	b	5.3	4.2	4.0	100	1.3	30	B_2	ade 2	ms 1 A	A Y88
433	—	6.2	2.8			1.3	25	B_1	—	〃 1 B	4ト5住界
434		17.8	4.9	4.3	80	2.1	215		—	s s 2 B	B H81　B I 80
435	C	7.5	4.7	4.2	90	1.2	50		abcde 2	Gs 1 A	A Y69 I　A W88
436	ⅡDc	8.5	5.0	4.3	60	1.2	90	B_2	—	ms 1 C	B W65
437	ⅡBb	5.8	5.8	5.2	40	1.1	65	〃	a 1	s s 2 A	A Y54 I
438		8.3	4.3			1.1	40	D_{13}	—	ms 1 A	44住B E

② **横刃型石器** (8000番台)

No.	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	使用痕	石材	註記	備考
8001	ⅠA	10.0	5.2	8.2	30	1.0	60	a 2	Gs	B O77	石匙状
2		9.7	3.8	7.5	30	0.9	45	a 1	〃	A Q64 I	
3		10.4	5.4	8.4	20	0.8	55	—	ms	A X50	
4		11.1	4.1	9.8	40	0.95	65	af 1	Gs	B O63	
5		10.8	4.5	8.0	50	1.4	115	—	〃	A O84	打斧転用
6		10.8	6.7	7.0	70	1.2	180	a 2	〃	A W77	
7		10.7	5.7	10.2	110	2.4	155	a 1	Ab	A W76コ	
8		11.4	3.7	10.6	50	0.9	60	〃	Gs	A S88 I	
9		11.3	4.5	8.7	30	1.3	65	〃	〃	B O54	
10		13.8	5.1	12.7	50	1.2	100	〃	〃	B E75	
11	ⅠB	7.9	3.2	8.4	30	0.6	25	—	ms	A V71 I	
12		8.0	3.1	6.8	30	0.7	25	a 1	Gs	B J91	
13		9.7	3.3	8.5	60	1.2	50	a 1 c 2	〃	B B70	打斧転用
14		10.9	3.1	8.9	60	1.7	55	—	〃	A W54	
15		8.4	3.1	8.0	50	1.3	30	—	ms	29住周辺	
16		9.5	4.1	8.2	50	0.9	65	—	Gs	B Y76	
17		8.4	2.7	6.1	40	1.1	25	a 2	〃	A V87	
18	ⅠC	9.0	5.3	9.0	80	0.8	40	a 1	ms	B U65	
19		6.6	4.6	5.6	50	0.9	40	—	〃	A S86コ	
20		6.4	4.0	6.0	50	0.7	25	—	〃	B U68	
21		6.4	5.7	6.7	20	0.9	40	—	Ab	B A75 I	
22		7.7	4.6	6.8	60	1.5	60	a 1	〃	B I 89	
23		7.8	5.2	7.5	40	0.9	50	〃	〃	B W64	
24		7.0	4.3	6.7	50	1.0	50	〃	Gs	A O82 I	
25		7.7	4.5	7.7	50	0.9	45	—	〃	A E	
26		6.5	4.8	6.6	30	0.6	30	—	〃	Z	

No.	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	使用痕	石材	註記	備考
27	ⅠD	6.3	5.1	6.3	60	0.7	30	a2	Gs	BR71	
28		7.1	3.9	5.4	50	0.8	25	—	〃	BA65	
29		6.2	5.2	4.9	60	0.7	35	a1	〃	AY88	
30		5.8	4.5	5.0	30	0.9	35	〃	〃	BQ71	
31	ⅠE	9.7	6.2	8.8	20	1.9	120	〃	Ab	44住東	
32		8.2	5.3	8.3	40	1.0	50	—	Gs	AS58Ⅰ	
33		7.7	5.3	7.7	30	1.2	55	a1	〃	BF91	
34		9.2	7.2	9.7	40	1.2	95	—	Ab	44住E	
35		7.9	4.5	6.7	40	0.9	36	a1	Gs	B区西南	
36		9.6	7.7	7.6	30	1.1	80	—	Ab	BF87	
37		5.7	4.9	5.3	50	0.9	36	—	〃	AT67Ⅰ	
38		6.0	6.2	7.5	40	0.8	40	—	ms	BW70	
39		9.3	6.2	9.2	30	1.4	100	a1	Gs	AD66Ⅰ	
40		8.0	5.7	8.0	50	1.4	60	—	ms	BY64	
41	ⅡA	10.4	3.4	8.0	30	0.7	36	—	Gs	AD76Ⅰ	
42		9.4	4.5	7.8	40	1.1	56	—	〃	BL54	
43		10.1	2.4	8.7	40	0.7	26	a1	〃	Z	
44		10.9	4.1	9.0	50	0.9	54	—	〃	BB68	
45		12.3	3.8	9.9	60	1.4	90	a1	〃	AV58	
46		9.4	4.7	5.5	60	0.9	70	—	〃	BW76Ⅰ	抉
47		11.0	5.3	10.1	40	1.9	95	—	〃	BG90	
48	ⅡB	7.9	3.8	7.6	60	0.4	20	—	〃	BH84	
49		7.8	3.5	5.2	60	0.7	30	—	〃	BP68	鋸歯状
50		6.0	3.8	5.2	30	0.5	15	—	〃	BH81Ⅰ	
51		8.7	3.8	6.2	30	0.8	40	—	〃	BP68	
52		6.3	3.5	6.1	30	0.5	15	—	ms	AW56	
53		6.3	3.8	5.2	40	0.7	25	—	Gs	AS68Ⅱ	
54		8.0	3.4	7.6	50	0.7	25	a1	〃	BU71	
55		6.6	3.6	5.7	30	0.8	20	—	〃	BJ91	刃縁に付着物
56		7.4	3.5	5.8	80	1.4	50	—	〃	BX64	打斧転用
57		9.1	3.9	7.4	50	1.1	40	a1	〃	Z	
58		8.5	3.8	7.9	50	0.9	35	—	〃	BY72	
59		8.3	3.8	8.2	60	1.1	45	—	Ab	BB55	
60		8.3	4.0	8.0	60	1.0	40	—	Gs	BⅠ－1	
61		7.4	2.9	5.8	50	0.8	25	a1	〃	BW76Ⅰ	
62		5.3	3.3	4.6	50	1.0	25	〃	Ab	BO68	
63		6.6	3.5	5.7	40	0.8	25	—	Gs	BY71	
64		6.9	3.9	5.2	50	0.9	40	—	G″s	BA89	
65	ⅡC	7.6	4.6	6.4	20	0.7	40	—	〃	BA85	
66		7.7	5.5	6.7	40	0.8	55	—	〃	AW72Ⅰ	
67		6.7	6.3	7.2	40	0.7	50	—	〃	AY85	
68		8.7	5.2	5.8	80	0.9	75	—	〃	BF90	
69		7.2	5.4	5.7	50	0.8	40	—	ss	BY66	
70		7.1	5.7	5.2	80	1.5	90	—	Gs	AX53	
71		7.8	4.2	6.7	40	1.1	35	—	Ab	BY78	
72		10.2	5.1	8.5	30	0.7	60	—	Gs	Z	
73		7.9	5.0	6.5	80	1.7	90	—	Ab	BE66	
74		8.3	5.4	(5.3)	50	1.4	85	—	Gs	AY54	
75		6.7	4.3	3.8	50	1.4	50	—	Ab	AY73	
76		9.0	5.5	4.0	110	1.3	100	—	Gs	BA88	
77		8.5	4.4	7.5	50	1.2	75	—	〃	BG90	

No.	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	使用痕	石材	註記	備考
78	ⅡD	6.8	5.5	6.7	30	0.9	40	a1	Gs	BF86	
79		7.1	5.8	5.4	40	1.0	50	—	〃	AY53Ⅰ	
80		7.5	5.2	6.5	20	0.9	35	a1	〃	Z	石匙状
81		8.1	5.4	5.4	40	1.1	60	—	〃	AX53	
82		8.1	4.2	(4.6)	30	0.7	20	—	ms	76Ⅰ	
83		5.7	4.2	5.4	40	0.7	20	a1	Gs	AX87Ⅰ	
84		6.7	5.0	6.6	60	1.2	55	〃	〃	BA60	
85		9.1	7.9	5.6	70	1.4	120	—	〃	BB85	
86		7.3	4.0	7.3	50	1.5	55	a1	〃	BN62	
87		8.8	3.6	6.9	40	1.6	60	〃	〃	BK92Ⅰ	
88		5.1	4.3	4.4	60	0.8	25	—	ms	Z	
89		6.8	4.7	6.3	30	1.3	55	—	Gs	BP62Ⅰ－Ⅱ	
90		5.4	4.5	4.8	80	1.0	35	—	〃	BO63	
91		7.7	6.9	6.4	30	1.7	95	—	Ab	AS82	
92	ⅡE	9.6	5.0	8.6	30	0.6	35	—	Gs	29住周辺	
93		5.4	3.8	4.9	40	0.8	15	—	〃	AU57	
94		7.4	4.0	5.2	50	1.0	35	—	Ab	BL92Ⅰ	
95		9.7	5.7	9.5	70	1.6	85	a1	〃	BD64	
96		10.1	8.1	7.6	50	1.3	120	—	〃	BD83	
97		13.1	6.7	9.8	40	1.4	110	—	Gs	BS68	
98		7.1	6.1	6.4	50	1.1	60	—		BP73	
99	ⅢA	11.7	4.6	8.9	70	1.0	80	a1	Gs	BG90	
100		10.4	4.0	8.4	60	0.9	50	—	〃	BH85	
101		10.1	5.1	7.6	70	1.5	90	a1	〃	BS62Ⅰ－Ⅱ	
102		10.5	5.0	7.9	70	1.5	85	a2	〃	BF90	鋸歯状
103		10.7	3.7	9.0	60	1.4	60	〃	〃	BW76Ⅰ	
104		11.4	4.0	8.7	70	1.4	80	〃	〃	BV82	
105		10.0	4.4	7.8	50	1.3	60	—	Ab	BI82	
106		10.1	4.3	8.1	80	1.1	60	—	Gs	BE92	
107		6.2	3.7	(5.2)	50	0.8	30	—	〃	AU88Ⅰ	
108	ⅢB	7.9	3.3	5.6	40	0.6	30	adf2	〃	AU56Ⅰ	打斧転用
109		7.8	2.0	6.7	20	0.3	5	—	〃	AQ86	
110		5.9	2.9	(4.1)	70	0.7	15	—	〃	AI68	
111		8.8	3.0	6.7	40	0.8	20	—	〃	44住東	
112		7.9	4.2	4.7	70	0.9	45	a1	〃	AK64	
113		7.2	3.9	6.5	50	1.0	25	〃	ms	BJ87	
114		7.2	2.5	4.5	40	0.7	10	〃	Gs	AW88Ⅰ	
115		7.5	3.0	6.8	30	0.6	20	〃	〃	BI－Ⅰ	
116		9.5	3.3	8.2	60	1.2	40	—	〃	BC80	
117		6.5	3.0	5.7	60	1.0	25	—	〃	AX57	
118		4.8	3.8	(3.8)	60	1.2	25	—	ms	BO85	
119	ⅢC	6.3	5.4	6.2	30	0.8	35	—	ss	BG83	
120		7.3	4.2	4.0	60	0.6	25	—	Gs	AY53Ⅰ	
121		7.7	5.2	5.8	30	0.8	50	—	〃	AQ84	
122		7.1	5.5	5.2	60	0.8	45	—	〃	BK90	
123		6.0	4.7	6.0	80	0.8	35	a1	ms	Z	
124		7.3	5.3	6.6	60	1.5	100	—	Gs	BH88	
125		8.7	5.0	7.0	60	0.9	60	a1	〃	BH92	
126		7.2	4.5	6.8	40	0.8	50	—	〃	AY52Ⅰ	
127		8.7	5.4	8.0	80	1.3	85	—	Ab	BA88	
128		8.1	4.5	6.6	50	1.2	55	a1	Gs	Z	

No.	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	使用痕	石材	註記	備考
129	ⅢD	6.3	4.5	5.0	30	0.7	25	—	Gs	BJ90	
130		8.7	7.7	8.7	30	1.0	95	—	〃	BO73	
131		5.7	3.9	(5.6)	60	0.7	20	—	ms	AY54Ⅰ	
132		5.7	4.7	5.1	70	0.7	20	—	Gs	AM76	
133		7.0	4.5	6.1	40	0.7	30	—	〃	BV82	
134		7.8	4.5	4.6	60	1.0	50	—	〃	BU78	
135		7.6	5.2	4.7	30	2.5	100	—	〃	BY64	
136	ⅢE	6.5	4.9	4.4	60	0.9	45	a1	〃	AW59	
137		6.5	6.6	6.3	60	1.1	45	—	〃	BI89	
138		11.7	6.7	11.5	60	1.0	95	a1	Ab	BF64	両面研磨
139		8.9	5.2	5.1	60	1.0	50	—	Gs	BQ65	
140		9.2	5.4	7.1	50	0.8	45	—	Ab	AY71Ⅱ	
141		9.1	5.0	4.9	50	1.8	70	a2s	Gs	AV73	
142		8.3	3.7	4.0	20	1.3	35	—	〃	BA81	
143	ⅣA	9.5	4.5	9.3	60	1.2	65	—	ms	やり方内	
144		12.5	3.9	12.0	30	1.1	50	a1	Gs	BJ90	
145		10.3	3.0	10.0	50	0.8	35	〃	〃	BU67	
146		15.8	4.5	10.2	40	1.7	145	〃	〃	AE	
147		10.8	4.5	8.5	70	1.9	95	—	ms	BN67	
148		10.0	4.4	8.5	60	1.0	50	a1	Ab	AU75Ⅰ	
149		9.1	4.6	8.3	70	1.4	75	〃	〃	44住東	
150	ⅣB	7.7	3.0	7.8	30	0.8	25	—	Gs	BP73	
151		7.5	2.7	7.3	50	0.8	20	a1	ms	AX54	
152		6.1	2.6	(6.0)	40	0.7	15	af1	Gs	BM63	
153		7.9	2.9	6.9	60	0.8	30	a2	〃	BA68Ⅰ	
154		7.8	3.3	5.7	50	1.4	40	—	〃	BP70	
155		8.5	2.9	5.6	60	1.0	40	a1s	〃	AQ65Ⅰ	
156	ⅣC	8.7	4.4	8.7	40	0.9	45	—	〃	BN62	
157		7.2	4.9	7.2	60	0.9	45	a2s	〃	BY66	
158		5.7	5.9	5.1	30	0.8	40	a1	〃	BA75Ⅰ	
159		6.9	4.0	5.0	50	0.7	30	〃	〃	AK52	
160	ⅣD	7.1	3.9	6.8	30	0.6	25	〃	〃	AZ4住周	
161		5.2	5.0	(5.1)	30	1.1	35	—	〃	BW76Ⅰ	
162		5.4	5.0	3.8	40	0.8	30	—	Ab	配石北	
163		8.5	4.2	7.8	20	0.7	30	—	Gs	BU78	
164		6.4	4.4	5.8	40	1.0	40	—	〃	BY71	
165		7.7	3.9	(7.0)	70	1.5	40	a1	ms	BJ76Ⅰ	
166	ⅣE	8.8	4.7	8.3	30	0.4	25	〃	Gs	BN56	
167		6.7	3.6	6.2	40	0.9	20	—	〃	BL60	
168		9.7	8.2	7.2	30	1.7	120	—	Ab	BW76Ⅰ	
169		10.7	8.4	7.8	30	1.8	190	—	〃	BS72	
170		12.3	8.5	11.7	60	1.1	130	—	Gs	AW70Ⅰ	
171		10.3	6.9	9.4	30	1.1	95	—	〃	AE	
172	VA	10.8	3.7	6.6	20	0.9	40	a1	〃	BG87	炭化物付着
173		13.2	4.2	11.5	40	1.1	75	—	〃	B	
174		12.9	4.3	10.4	40	1.2	75	a1	〃	B	
175		11.1	3.8	5.9	60	1.4	65	—	〃	BB92	
176		10.2	4.0	6.6	30	1.1	55	a1	〃	44住東	
177		12.1	3.2	10.6	40	0.9	45	a1s	〃	BP71	
178	VB	8.1	2.8	8.2	40	0.7	20	a1	〃	AQ78	
179		6.9	3.8	6.2	20	0.7	15	—	〃	AY78	

No.	類型	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃角 (度)	厚さ (cm)	重量 (g)	使用痕	石材	註記	備考
180	VB	8.0	3.8	6.7	30	0.4	20	—	Gs	BW64	
181		5.7	2.8	(3.8)	30	0.7	20	—	〃	80Ⅱ	
182		8.7	3.2	8.1	40	0.9	35	a1	〃	BH69	
183		8.7	3.7	6.5	50	1.1	40	a2	〃	AQ68	
184		10.0	2.8	7.0	50	1.0	35	—	〃	BY71	
185	VC	7.1	5.2	5.6	80	1.7	85	—	〃	AR67Ⅰ	
186		7.2	5.2	7.0	70	1.3	75	—	〃	BR42	
187	VD	5.9	5.0	5.8	40	0.7	25	—	Ab	29住周辺	
188		7.3	7.5	6.8	20	1.0	75	—	Gs	Z	
189		8.4	5.1	6.3	60	1.3	65	—	Ab	BU75	
190		6.6	4.5	4.4	60	0.7	40	—	Gs	AY61	
191		6.4	3.4	4.4	40	1.1	35	a1	〃	BU44Ⅰ	
192		10.8	7.4	5.6	20	2.0	130	〃	Ab	AS80	
193	VE	6.9	4.3	6.0	30	0.8	25	—	ms	AQ86	
194		7.1	5.1	6.8	70	1.3	55	a2	Gs	BF90	
195		5.3	6.5	4.6	40	1.3	50	a1	〃	AE	
196		6.6	4.0	4.4	80	1.4	50	—	〃	AO65Ⅰ	
197	ⅠA	13.3	5.7	9.9	60	2.2	185	a1	〃	BⅠ—Ⅰ	
198	ⅡC	8.6	4.9	4.7	70	1.5	110	—	〃	BJ91	
199		9.7	4.8	5.4	110	1.7	110	—	〃	AE	
200	ⅢA	12.0	3.9	9.7	60	1.1	50	—	〃	BU67	
201	ⅢC	6.6	4.4	5.2	70	1.0	55	—	〃	BS76	
202		8.0	4.9	4.8	60	1.1	70	—	〃	AX57	
203		9.6	5.3	8.0	60	1.9	165	—	〃	BH81Ⅰ	
204	ⅣD	6.6	4.0	4.4		1.4	50	—	〃	AO65Ⅰ	
205		7.8	4.8	7.4	40	0.8	40	a1	ss	AX83—Ⅰ	
206		7.5	4.4	7.5	60	1.4	44	—	〃	AW57	

③ 凹石・磨石（9000番台）

No.	出土区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	備考
9001	BP37	11.4	6.3	4.5	560		花崗岩
2	BR60	9.7	5.3	3.9	360		
3	AZ	10.5	8.3	4.5	475		
4	BW92	99.5	8.4	3.6	455		
5	BS68	7.5	5.7	3.0	180		
6	BP69ⅠⅡ	7.6	5.7	3.3	190		
7	38住西	(6.7)	6.0	3.4	150	B	
8	Z	(8.8)	8.4	3.6	340	〃	
9	BD66	10.4	7.1	3.5	330		
○ 10	BD40	11.5	6.8	2.6	305		
○ 11	BL67	8.6	7.0	3.3	325		
12	AU57	(5.0)	7.8	3.8	235	B	
13	ド656周辺	(8.7)	(4.2)	3.7	145	〃	
14	AV68	9.4	7.2	4.4	430		
15	BG85	(5.2)	5.9	4.7	205	B	
16	BG84	(4.6)	6.3	5.2	225		
17	BF69	(7.3)	6.3	5.4	450	B	
○ 18	AX79ヨ	9.4	6.0	4.5	395		
19	BW58	12.0	6.4	4.6	430		
20	AV73	11.8	6.5	4.4	455		
21	BP85	(10.5)	7.4	4.5	480	B	以上、A
22	BW54	6.6	6.5	5.5	315		
23	AX ヨ	(6.6)	5.4	5.2	260	B	
24	BH84	(8.7)	6.3	5.0	415	〃	
25	30，31住	(13.0)	5.6	5.1	475	〃	
26	BL73	8.8	6.3	5.9	465		2820と接合
27	BY90	(6.0)	5.6	5.4	315	B	
28	Z	(11.7)	7.6	6.5	835	C	
29	BB67	(10.0)	5.5	5.3	360	B	
30	38住西	13.0	5.1	5.2	460		
○ 31	AX72—Ⅰ	13.7	6.0	5.9	610		
○ 32	BB89	11.7	5.8	5.0	475		
33	BJ87	(7.6)	7.2	6.0	485	B	

No.	出土区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	備考
9034	AZ	(12.3)	6.4	6.0	625	B	以上、B
○ 35	BZ	12.4	6.5	6.0	660		
36	AZ	16.0	8.0	6.5	1060		
37	AO80	14.5	7.5	5.8	670		
38	B	(11.4)	7.6	5.6	620	C	
39	BY90	14.1	7.2	5.6	605		
40	36住	16.8	7.7	6.7			
41	BU65	14.6	8.7	7.6			
42	36住	12.4	7.4	7.0	745		
43	BY60	11.9	6.7	5.3	520		
44	BK65	15.0	8.0	6.0	850		
○ 45	AX53	13.9	7.2	5.3	640		
46	AV76ヨ	(10.2)	7.3	4.3	370	B	
47	BL61，BW70	13.5	8.2	5.8	875		接合
48	BP54	(11.7)	(7.4)	7.1	605	C	以上、C
49	BH84	13.4	10.2	5.5	1015		
50	AO66—Ⅰ	12.5	8.5	4.0	545		
51	AM76	11.6	8.0	5.1	615		
○ 52	BG79—Ⅰ	9.2	6.6	3.0	225		
53	BH4	9.9	5.7	3.3	265		
54	BB50	11.7	7.3	3.5	320		
55	BL58	10.7	7.3	3.8	335		
○ 56	AM70—Ⅰ	12.5	8.0	3.8	560		
57	38住西	(8.6)	7.3	3.7	340	C	
58	AQ82	(8.5)	7.8	4.4	300	B	
59	BK62—Ⅰ	10.2	7.5	4.5	400		
60	BV62	10.5	8.0	4.6	490		
61	B Ⅰ	10.5	6.5	3.4	315		
○ 62	AZ	11.1	7.6	3.5	410		
63	〃	13.5	9.6	5.4	800		
64	BE・O56	12.9	7.2	4.3	480		
65	BV66	12.8	8.5	4.3	485		
66	BR67	11.8	7.2	3.5	360		

No.	出土区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	備考
67	BQ78	11.8	8.2	3.1	530		Gs
68	BN50	12.2	8.4	5.5	635		
69	Z	9.2	6.0	4.3	305		
70	BT66	12.3	8.0	4.0	485		
71	BQ72	12.4	7.5	4.5	540		
72	BR52－Ⅰ	13.5	9.0	4.7	680		
73	BQ66－Ⅱ	(10.4)	8.0	4.4	520	C	
74	BW37	9.1	7.0	3.4	245		
75	BB75	(8.0	7.1	4.3	320	B	
76	AX72－Ⅰ	9.2	6.1	3.6	250		
77	BB77	11.1	7.7	4.4	460		(9住ヲ)
78	BⅠ－Ⅰ	11.4	5.8	3.6	225		
79	B	11.6	6.5	2.9	345		以上、D
80	BU44－Ⅰ	10.5	7.3	5.1	340		
81	BY65	10.5	6.7	5.3	510		
82	AS74ヨ	9.6	6.5	5.0	350		
83	AX70－Ⅰ	8.7	5.8	4.5	300		
84	AV53	10.1	6.5	3.6	305		
85	CU56	11.5	6.5	5.0	385		
86	BX60	10.6	6.0	3.8	290		
87	CR50－Ⅰ・Ⅱ	11.8	7.1	5.1	495		
88	BN47	12.4	6.8	5.5	560		
89	36住	12.3	8.5	6.1	770		
90	BY73	10.4	5.8	4.7	360		
91	BC74	13.5	8.0	5.2	715		
○ 92	BN70	10.7	7.1	5.1	455		
93	Z	13.7	7.2	5.3	620		
94	BY67	11.5	7.4	5.7	510		
95	BY73	10.5	6.2	4.1	330		
96	AZ	9.4	6.0	3.7	260		
97	土593周辺	9.9	7.0	5.6	355		
98	BZ	10.8	7.5	6.3	590		
99	BV38	10.0	6.8	4.9	390		
100	AZ	11.2	6.7	5.1	510		

No.	出土区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	備考
101	Z	10.2	6.5	4.5	395		
102	BY72	10.4	6.5	4.3	360		
103	BY65	11.7	5.5	5.1	415		
104	AZ	10.7	6.1	6.0	535		
105	AY61	10.1	6.7	4.5	380		
106	BP68	11.9	7.2	4.7	525		
107	BA57－Ⅰ～Ⅱ	10.3	5.5	5.1	375		
108	44住BE	10.0	5.6	4.0	230		以上、E
109	BP74	9.5	7.7	4.5	445		
110	AY75	11.0	8.6	3.4	480		ss
111	AW56	(10.5)	7.8	4.8	520		
112	BO88	9.0	7.0	4.7	325		
113	土56・7	12.5	10.4	4.1	625		
114	AX72－Ⅰ	11.5	9.0	4.8	610		
115	BJ53	11.0	9.3	5.5	680		
116	BG78	9.9	8.5	3.4	350		
117	AM74	9.5	9.1	4.8	520		
118	BW70	11.4	9.0	4.5	620		
119	BW65	11.1	9.7	4.7	615		
120	BM60	11.8	8.9	5.3	630		
121	38住西	10.5	10.4	3.9	510		
122	BE87	(11.3)	9.2	5.0	695	C	
123	BG63	(11.5)	9.0	3.8	485	C	
○ 124	AM78	10.4	8.0	4.8	435		
125	AZ	(9.3)	9.4	4.3	490	C	
126	溝	9.7	7.8	3.8	365		以上、F
127	BY73	9.5	8.4	6.3	660		
128	15住40	10.6	8.0	5.8	695		
129	BQ72	10.0	9.2	5.9	595	C	
130	Z	10.6	8.9	6.0	740		
131	AW77	10.7	8.7	6.0	725		
132	BW66	12.2	8.8	6.0	730		
133	BT66	10.7	10.2	7.4	795		
134	Z	11.1	8.8	5.8	515		
135	B	11.4	10.0	6.6	690		

No.	出土区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	備考
136	44住BE	(10.1)	10.2	5.4	695	C	
137	BB52	9.2	9.2	6.2	675		
138	CU68—I	10.8	9.6	5.2	685		
139	BU67	9.4	9.1	5.4	525		
○ 140	AV84—I	10.0	8.0	5.4	490		
141	36住	11.2	9.6	5.8	670		
142	BP68	11.5	9.0	5.6	555		
143	BY71	13.3	(9.5)	5.0	790	C	
○ 144	BN50	11.1	8.9	7.1	825		以上、G
145	BT66	8.0	7.1	5.3	365		
○ 146	BH84	7.6	7.2	4.5	255		
147	BA84	8.1	7.0	4.9	320		
148	Z	9.3	6.4	4.1	285		
149	BA85	9.6	7.8	5.5	435		
150	BQ73	9.4	9.1	5.1	475		
151	B	8.7	7.6	5.1	385		
152	C58～62	9.4	6.6	6.7	475		
153	9住	9.1	7.5	3.9	310		
○ 154	AZ	10.7	8.7	4.7	555		
155	B	8.9	8.5	5.0	330		
156	30，31住	9.4	7.2	5.2	445		
157	CU60	8.3	7.8	5.8	420		
158	BI82	(8.0)	9.0	3.9	370	B	
159	AZ	9.8	7.8	3.8	320		
160	BJ90	8.7	7.2	3.8	320		
161	BB52	9.0	7.4	3.7	240		(BD91)
162	Z	11.1	8.9	4.8	595		
163	AX70	9.0	9.0	5.6	435		
164	土625周辺	8.3	8.0	5.7	435		
165	BY86	9.0	7.3	4.5	320		
166	AY58	8.7	7.7	4.8	435		
167	BQ74	9.2	8.8	4.5	420		
168	AV70	8.0	6.7	5.3	435		
169	BA84	8.9	7.7	5.3	410		
170	土483周辺	10.2	7.5	5.0	435		

No.	出土区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	備考
171	B	8.3	6.3	4.6	305		以上、H
172	AM76	7.5	5.1	4.8	290		
○ 173	BK89	6.4	5.7	4.8	160		
○ 174	BK83	8.3	5.4	3.3	180		
175	BW84	6.8	5.6	3.5	160		
○ 176	AX76	8.5	5.3	3.4	195		
177	BX64	7.2	5.8	3.2	150		
178	BU67	7.3	5.9	2.9	130		
179	BA83	7.6	6.8	4.7	255		
180	BW66	8.2	5.5	4.2	210		
181	AW53	6.2	5.5	3.4	145		
182	BV40	6.8	5.1	3.0	120		
183	BY60	7.7	5.5	4.6	210		以上、I
184	BU65	(12.8)	(9.8)	9.7		C	
185	土283	(12.1)	11.2	9.4		〃	
○ 186	BW68	9.7	5.5	4.3	200		
187	30，31住	9.3	7.2	6.5	555		
188	BJ76—I	13.3	9.7	7.8			
189	AM76—I	(9.9)	7.5	6.9	450	B	
190	19住周	(15.2)	(8.7)	8.0	875	C	
191	9住	12.4	8.3	8.0	920		
192	9住周	14.5	4.8	4.8	315		
193	BB77	11.5	9.6	6.3	765		
194	Z	11.7	10.0	6.6	885		
195	BS74	10.2	5.4	5.4	375	B	
196	Z	(11.2)	6.6	5.3	445	C	
○ 197	BT37	(10.1)	(5.3)	2.3	185	〃	Gs
198	44住BE	(15.6	6.4	2.6	425	〃	ss
199	AR68ヨ	11.7	7.8	5.0	425	〃	
200	BH85	11.2	7.7	6.5	650		
○ 201	BH68	(8.0)	9.4	4.6	350	B	
202	BI79	(8.7)	9.0	5.5	410	C	
○ 203	BJ90	(12.4)	3.9	2.4	210	〃	ss
204	BA75—II	8.3	7.5	6.8	390		
205	AW57	9.7	6.9	5.8	310		

No.	出土区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	備考
206	AQ64－Ⅱ	7.8	5.5	4.8	240		
207	BY66	7.6	6.5	4.3	230		
208	BY64	(11.5)	10.6	7.1	930	C	
209	BX64	(8.4)	(6.3)	(6.0)	235	〃	
210	36住	(8.3)	(7.4)	(5.5)	350		
211	BY72	10.4	10.0	8.0	945		
212	9住	(7.6)	(6.7)	4.8	335	B	
213	BV86	8.9	6.7	6.1	340		以上、J
214	BB51	(11.1)	(8.0)	5.1	445	C	以下、不明
215	BR68	(11.4)	(6.6)	(4.0)	345	B	
216	CU58	(9.7)	(6.2)	(4.0)	315	C	
217	Z	(8.4)	7.2	5.2	405	B	
218	BW65	(6.7)	8.3	3.6	230	B	
219	AW76	8.8	6.1	(3.4)	240		
220	BK87	(4.7)	(7.6)	5.2	250	B	
221	BY65	(7.7)	(7.2)	4.4	255	B	
222	AY55	(4.4)	(7.5)	4.9	205	〃	
223	BG68	(5.8)	(7.4)	4.7	255	〃	
224	BI89	(9.7)	(4.6)	4.8	220	〃	
225	BW65	(9.0)	(8.1)	4.3	415	〃	
226	BU65	(5.7)	(7.6)	5.2	280	〃	2933と接合
227	44住周	20.7	12.8	7.9	3120		
228	BQ54	23.2	20.7	5.6	3200		

④ **その他**（3ケタ番号）

No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記	備考
001	乳石斧ⅠA	(11.4)	4.4	—	3.4	236	C_1		Gs	BU71	着柄痕？
002	〃	(10.3)	4.9	—	3.9	270	B_1		〃	BY62	頭部敲打
003	〃	(9.8)	3.8	—	3.5	190	〃		〃	BC89	黒色付着物
004	〃	(6.5)	4.2	—	3.5	120	〃		〃	BB60	
005	〃	(15.8)	5.2	—	(3.6)	415	〃		〃	Z	
006	〃	(9.8)	5.5	3.8	3.7	269	B_2		〃	BC78Ⅰ	
007	〃	(11.7)	4.9	3.9	3.7	330	〃		〃	BG89	
008	〃	(11.4)	5.0	3.4	3.4	297	〃		〃	BA83	折損面敲打
009	〃	(6.7)	5.4	—	3.7	188	D_3		〃	BB84	両面敲打
010	ⅠAB	(9.5)	5.8	5.2	3.5	325	B_2		〃	BU71	
011	〃	(11.9)	(4.1)	—	3.3	243	E_2		〃	BW72	
012	〃	(9.3)	5.0	4.9	2.8	220	B_2		〃	BB90	刃部敲打
013	〃	(10.7)	4.7	—	(2.8)	168	B_1		〃	配石北	
014	〃	(9.2)	5.0	(2.5)	2.8	203	B_2		〃	AV84Ⅰ	刃部再成
015	〃	(7.5)	4.7	4.6	3.0	140	C_2		〃	BA86	
016	Ⅰ	(7.4)	4.2	—	(2.0)	115	B_1		?	BN72	石材不明
017	〃	(6.5)	(3.1)	—	(1.8)	40	E_2		Gs	BS68	
018	ⅡA	(9.7)	4.4	3.0	2.7	134	B_2		〃	BL62	
019	〃	(11.1)	4.5	3.1	3.3	243	〃		〃	AM72Ⅰ	
020	〃	(5.1)	(3.5)	—	2.2	55	D_3		〃	AW72Ⅰ	
021	〃	(7.2)	(2.9)	—	(1.3)	43	D_1		〃	Z	
022	〃	(12.5)	3.7	—	2.7	190	B_1		〃	AO80Ⅰ	
023	〃	15.3	4.0	2.9	3.1	310	A		〃	BP69	
024	〃	16.0	3.7	1.8	2.7	275	〃		〃	BO59	着柄痕？
025	ⅡAB	(11.3)	4.4	3.4	(2.2)	193	B_2		〃	BX38	
026	Ⅱ	(11.9)	4.2	3.4	(2.0)	120	〃		〃	AY53	刃部敲打
027	〃	(5.8)	4.0	2.3	(1.3)	47	〃		〃	BV70	
028	〃	(7.8)	(4.2)	—	(1.0)	42	D_2		〃	Z	横刃に転用？
029	〃	(7.4)	4.7	3.1	1.9	115	B_2	未成	〃	BI1	未成？
030	ⅢA	(11.6)	(4.5)	—	(2.7)	212	E_4		〃	BX52	
031	ⅢAB	13.5	4.6	2.8	3.0	280	A		〃	AY78	両面凹あり
032	〃	12.7	(3.8)	—	2.8	208	$D_{1.3}$		〃	Z	敲打仕上
033	ⅢB	10.8	4.5	3.9	2.4	190	A		〃	BX38	着柄痕？
034	〃	10.0	4.1	3.8	2.0	131	〃		〃	Z	黒色付着物
035	Ⅲ	(8.2)	3.7	—	2.0	86	C_1	未成	〃	AY74	未成？
036	〃	(6.5)	3.5	—	2.0	69	〃	〃	〃	AE	未成？
037	—	(7.8)	4.3	—	(1.5)	65	E_1		〃	BI－1	礫片？
038	—	(10.0)	(3.9)	—	(1.5)	63	D_1		〃	CV70	未成？
039	—	(13.0)	3.8	—	2.5	212	B_1		〃	BN63	
040	—	(10.7)	4.3	—	3.0	196	〃		〃	AO66－Ⅰ	頭部敲打
041	磨石斧	10.5	4.7	4.1	1.8	120	—	—	〃	BE62	局部磨製的
042	〃	7.8	3.2	3.2	1.0	35	—	少磨	〃	AX73	〃
043	〃	(4.3)	3.0	—	1.6	35	B_1	〃	〃	BP59	
044	〃	(3.9)	(2.3)	—	(1.3)	15	小片	〃	Sp	BX40	
045	磨石斧	(2.6)	(2.3)	2.0	(0.5)	5	B_2	—	〃	BY73	
046	粗石匙	12.2	7.4	8.0	1.5	120	—	少磨	Gs	ド993の横	
047	〃	(7.6)	(4.5)	—	1.3	50	先端欠	〃	Ab	BF93Ⅰ	
048	〃	7.2	6.7	7.2	1.0	35	—	?	ms	A－62－ヨ	
049	〃	12.7	4.2	7.3	1.0	60	—	少磨	ss	J84	石鎌状
050	〃	10.2	3.1	6.4	1.0	30	—	〃	Gs	AV78	〃

No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記	備考
051	粗石匙	7.9	3.2	4.6	0.7	25	—	少磨	Gs	BB90	石鎌状
052	〃	12.0	3.6	7.6	0.8	40	—	〃	〃	BT52	〃
053	刃器	(7.0)	(4.9)	4.7	1.2	45	?	—	〃	AS75	
054	尖頭	11.3	4.7	?	0.9	60	—	—	〃	B−I	抉あり
055	〃	7.8	3.5	?	0.9	25	—	—	〃	J84	〃
056	〃	7.6	4.0	?	1.0	35	—	—	〃	BC58	
057	〃	9.5	5.3	?	0.9	50	—	—	ms	AY55	
058	〃	8.2	4.1	?	0.7	25	—	—	Gs	BH52	
059	〃	8.2	4.1	?	0.7	35	—	—	〃	AD64I	
060	?	(6.9)	(5.4)	?	0.7	25	—	—	ss	RT40	
061	刃器	11.3	8.9	8.7	1.5	210	—	少磨	Gs	BW74	
062	〃	10.6	6.3	8.0	1.0	70	—	〃	ms	AY55	
063	〃	9.2	7.1	?	1.7	135	—	—	Gs	BK91	
064	〃	9.6	7.6	?	1.7	170	—	—	〃	BY65	
065	〃	11.0	7.4	?	1.9	155	—	—	〃	Z	
066	?	11.7	3.2	—	2.7	125	—	?	〃	AV57	打石斧類似
067	?	(9.8)	2.4	—	1.6	55	端欠	磨滅	〃	BF78	砥石状
068	ドリル	(6.7)	(2.1)	—	1.6	20	?	〃	〃	AO−68−I	
069	?	(5.8)	2.1	—	0.7	5	半折	—	〃	AY54	刃器？
070	?	12.5	4.7	—	4.8	490	—	両端敲打	〃	BW64	ハンマー？
071	?	(8.3)	3.4	—	3.1	165	—	〃	〃	AW54	〃
072	敲打器	11.2	8.2	—	6.5	695	—	一部敲打	Ab	Z	
073	〃	8.1	5.4	—	3.5	265	—	〃	Tr	BG84	研磨状
074	〃	8.5	(4.1)	—	3.0	130	半欠	〃	〃	AO76−I	
075	〃	8.6	6.7	—	5.0	370	—	〃	〃	ヤリ方内	
076	〃	6.8	6.2	—	5.1	315	—	〃	〃	BN65−I	
077	〃	8.2	5.7	—	4.8	230	—	〃	Ab	BD54	
078	磨石	17.8	7.6	—	5.1		—	側線磨滅	〃	BM61	
079	〃	16.5	7.2	—	5.6	930	—	〃	〃	BG50	
080	〃	15.5	9.5	—	5.7		—	〃	〃	BA50	
081	〃	16.7	8.3	—	7.1		—	〃	〃	A区	
082	〃	18.3	6.9	—	5.1	985	—	〃	〃	AK52	
083	〃	15.2	8.6	—	5.2		—	〃	〃	BW52	
084	〃	15.0	6.5	—	6.1	760	—	〃	〃	CT50III	
085	〃	(13.2)	7.0	—	4.6	725	C	〃	〃	BX38	
086	〃	(10.7)	6.5	—	5.2	650	B	〃	〃	Z	
087	〃	9.5	8.7	—	6.0	650	—	〃	〃	38住西	円礫
088	〃	(9.3)	7.7	—	4.2	470	C	〃	〃	BR71	
089	〃	(7.7)	8.4	—	5.6	460	〃	〃	〃	BY65	特殊磨石状
090	〃	12.2	8.2	—	6.3	910	—	〃	?	AZ	
091	〃	(15.0)	5.5	—	(3.8)	370	C	〃	ss	BN70	特殊磨石状
092	〃	(8.5)	8.8	—	7.0	745	〃	〃	Ab	AZ	
093	〃	(7.2)	6.2	—	5.6	320	〃	〃	〃	B	
094	〃	(7.3)	7.8	—	4.6	375	〃	〃	〃	AV75−I	
095	石錘	4.7	3.3	—	1.4	35	—	—	Tr	AX83−I	両端抉
096	〃	9.5	5.4	—	1.4	95	—	—	?	AY55	〃
097	〃	6.0	3.8	—	2.0	65	—	—	Tr	BS72	〃
098	〃	4.8	2.8	—	1.7	35	—	—	Ry	BS55	〃
099	砥石	(10.3)	(6.8)	—	3.2	200	小片	磨滅面	Hr	BS74	石皿状
100	〃	(7.2)	(7.0)	—	(1.3)	70	〃	〃	〃	BS74	99と同一
101		4.0	2.8	—	1.6	20	半折	〃	Ry	AS86−ユ	

No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	折損	使用痕	石材	註記	備考
102	砥石	(8.0)	2.7	—	2.6	65	半折	磨滅面	Ry	BS76	
103	?	(13.9)	5.2	—	3.0	330	—	—	Gs	AH76Ⅰ	乳石斧転用
104	石皿	(22.4)	(16.1)	—	5.8		端欠	—	Ab	BA84	
105	?	6.7	6.4	—	4.3	275	—	—	〃	BD83	小石皿状
○106	石皿	24.0	16.0	—	7.5		半欠	—	〃	Z	
○107	〃	12.0	20.0	—	7.5	2200	2/3欠	—	〃	BY60	
○108	〃	12.5	18.0	—	8.5	2200	3/4欠	—	〃	Z	
○109	〃	20.0	18.0	—	10.3		〃	—	〃	BV44	
○110	〃	20.0	14.5	—	11.5	3960	〃	—	〃	AM74	
○111	〃	13.0	21.0	—	8.2	2660	半欠	—	〃	AV57	
○112	〃	11.0	11.5	—	5.0	680	3/4欠	—	〃	BJ87	
○113	蜂巣石	23.2	17.4	—	8.7	2750	—	—	〃	BK92	
○114	石棒	20.5	13.8	—	5.2		小片	—	〃	AO64	
115	石皿	6.3	7.7	—	4.2	220	〃	—	〃	CK50	
116	石鏃	3.0	1.9		0.4	1.75			ch	—	
117	〃	2.2	1.4		0.4	1.00			ob	—	
118	〃	2.3	1.4		0.3	0.65			〃	BQ71	
119	〃	2.2	1.3		0.4	0.85			〃	AY67Ⅰ—Ⅱ	
120	〃	2.1	1.4		0.3	0.65			〃	BZ	
121	〃	1.7	1.1		0.25	0.30			〃	AX54	
122	〃	2.3	1.6		0.45	1.35			〃	AV71	
123	〃	1.9	1.5		0.35	0.85			〃	Z	
124	〃	2.1	1.3		0.4	0.80			〃	BK84ユ	
125	〃	1.6	1.1		0.4	0.70			〃	BC56	
126	〃	1.5	1.2		0.3	0.35			〃	—	
127	〃	2.0	1.7		0.2	0.70			〃	AY84	
128	〃	1.8	1.3		0.35	0.65			ch	BZ	
129	〃	1.2	1.3		0.3	0.35			ob	BB55	
130	〃	1.7	1.3		0.35	0.60			〃	AK53	
131	〃	1.3	1.2		0.25	0.25			〃	BZ	
132	〃	2.9	1.3		0.3	0.70	片脚		〃	BA56	
133	〃	2.1	1.5		0.35	0.95	〃		〃	BD84	
134	〃	2.5	1.2		0.30	0.60	〃		〃	AV68	(5住)
135	〃	1.5	1.5		0.30	0.70	〃		〃	BC55	
136	〃	2.3	1.6		0.55	1.45	下半		〃	BC86	(17住)
137	〃	(2.0)	1.0		0.4	0.55	両脚		〃	—	
138	〃	1.8	1.3		0.3	0.45	片脚		〃	BB56	
139	〃	2.0	(0.9)		0.4	0.70	〃		〃	BS78	
140	〃	(1.9)	1.4		0.4	0.85	先端・片脚		〃	AV57	
141	〃	(2.0)	1.4		0.3	0.55	片脚		〃	—	
142	〃	(1.8)	1.3		0.35	0.50	先端・片脚		〃	AZ,旧テントウラ	
143	〃	(2.0)	1.6		0.4	1.40	両脚		〃	BV66	
144	〃	(2.1)	1.4		0.3	0.90	〃		〃	南	
145	〃	(1.9)	1.5		0.5	1.20	先端		〃	AY55	
146	〃	2.0	(1.6)		0.2	0.35	片脚		〃	BR67	
147	〃	2.2	(0.9)		0.3	0.65	左半		〃	BF83	
148	〃	2.4	1.4		0.5	1.00	片脚		〃	BJ85	
149	〃	2.5	2.3		0.9	4.05			〃	AV71—Ⅰ	
150	〃	(2.4)	1.5		0.35	1.15	先端・片脚		〃	AW62Ⅰ	
151	〃	2.5	(1.7)		0.55	2.15			〃	AW70—1	
152	〃	1.3	0.6		0.25	0.20	片脚残		〃	—	

No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (度)	折損	使用痕	石材	註記	備考
153	石鏃	(1.8)	1.3		0.35	0.85	先端・片脚		ob	AM78	
154	〃	(1.9)	1.2		0.25	0.50	〃		〃	Z	
155	〃	1.7	(0.7)		0.4	0.40	片脚残		〃	BG83	
156	〃	(2.6)	2.0		0.3	1.00	上半		〃	Z	
157	〃	(1.7)	1.3		0.3	0.65	先端・下半		〃	BD86	
158	〃	(2.3)	1.3		0.4	1.30			〃	BZ	
159	〃	(1.7)	1.3		0.5	1.00			〃	AX55	
160	〃	1.9	1.6		0.45	1.25			〃	AV68	(5住)
161	〃	2.1	1.8		0.6	2.30			〃	AU74Ⅰ－Ⅱ	未成？
162	〃	(2.2)	1.9		0.5	2.30	下半		〃	AY77	〃
163	〃	3.0	(2.2)		0.7	3.15	片脚		〃	Z	
164	〃	2.9	1.8		0.8	3.90			〃	—	未成？
165	〃	(2.3)	2.3		0.7	3.00			〃	BD60	〃
166	〃	2.9	2.3		0.5	2.90	片脚		〃	BB73カツ	
167	〃	(2.2)	(1.4)		0.5	1.20	上半		〃	BY65	未成
168	〃	2.3	(0.9)		0.4	0.95			〃	BF80	
169	〃	(2.5)	(1.8)		0.8	2.65			〃	AY55	未成
170	〃	(2.5)	(1.4)		0.6	2.10	片脚		〃	BF85	〃
171	〃	(2.1)	1.3		0.3	0.95			〃	AY55	
172	〃	2.3	(1.6)		0.75	2.35			〃	BZ86	未成？
173	〃	2.0	(2.4)		0.7	3.15			〃	BU76	〃
174	ドリル	1.5	0.5		0.4	0.30			〃	AS65	(1住)
175	〃	2.9	1.5		0.6	1.80			〃	Z	
176	〃	2.6	(1.3)		0.6	1.10			〃	AW51	
177	〃	2.8	(2.7)		0.8	4.75			〃	AY51	
178	〃	3.3	0.7		0.5	1.40			〃	BD56	
179	〃	(1.9)	0.7		0.2	0.35	先端		〃	BC54	
180	〃	2.6	1.2		0.5	1.65			〃	BC86	(17住)
181	〃	(2.2)	0.7		0.5	0.85			〃	BV64	
182	〃	2.3	0.8		0.55	1.05			〃	Z	
183	〃	(3.2)	1.4		0.85	3.80			〃	BF77	
184	〃	3.2	1.8		0.5	2.50			〃	BW62Ⅰ	
185	〃	3.5	(1.1)		1.1	4.30			〃	BR74	
186	〃	(3.0)	1.4		0.85	3.95			〃	BY65	
187	〃	2.6	1.4		0.75	2.40	先端		〃	BP62Ⅰ－Ⅱ	(24住)
188	〃	3.4	1.2		0.6	1.80	〃		〃	AW57	
189	〃	2.1	0.8		0.85	1.40			〃	Z	
190	〃	(1.2)	0.7		0.4	0.70	先端		〃	BN71	
191	〃	2.8	0.9		0.65	2.45			ch	BR67	
192	スクレ	3.3	2.0	3.3	0.8	4.75			〃	AI51	
193	〃	3.5	2.2	3.6	0.8	8.10			〃		
194	〃	3.2	2.1	3.5	0.8	5.65			〃	BB90	
195	〃	3.3	2.0	3.6	0.85	6.35			〃	BD54	
196	〃	2.4	1.7	2.8	0.8	3.80			〃	Z	
197	〃	2.5	1.6	2.6	0.6	2.80			ob	AE	
198	〃	2.2	1.6	2.1	0.4	1.70			〃	BA672	
199	石匙	5.4	5.0	5.2	1.2	25.95			ms	Z	
200	〃	4.8	4.3	3.6	1.2	28.05			〃	BF93－Ⅰ	
201	〃	8.1	3.8	7.0	1.0	42.20			〃	BP62Ⅰ－Ⅱ	(24住)
○202	〃	4.8	2.9	5.0	0.8	10.10			ch	MB67	
203	〃	(4.1)	4.1	4.4	0.7	15.80	半欠		ms	BX50Ⅰ	

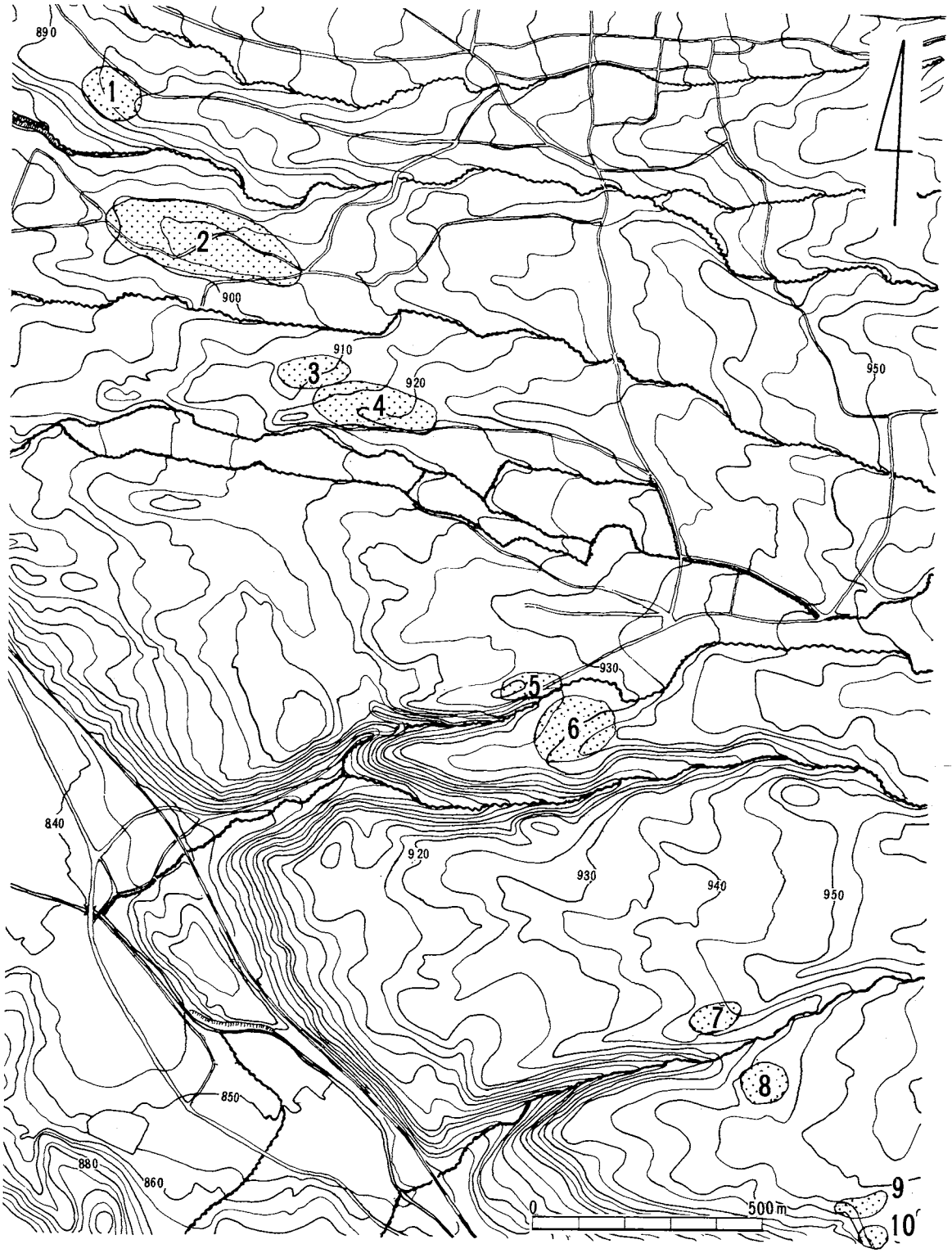
No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	折損	使用痕	石材	註記	備考
204	石匙	4.0	3.2	4.1	0.8	11.10			ch	AV61	
○205	〃?	7.8	4.3	7.6	1.2	39.15			〃	DE50	
○206	スクレ	5.0	4.8	5.0	1.5	35.25			ob	BU67	
207	〃	3.4	3.4	3.1	0.9	11.80			ch	AX57	石匙?
208	〃	3.1	2.4	1.5	0.8	6.85			〃	BC54	〃
209	〃	4.3	2.8	4.1	0.7	13.20			ms	AV86	〃
210	〃	4.9	3.8	4.1	0.9	15.85			ch?	AQ96	〃
211	〃	4.7	3.2	5.0	0.75	16.50			ms'	BB88	〃
212	〃	5.1	3.6	5.3	0.7	19.40			ch	BS67	〃
213	〃	5.3	3.95	4.3	1.0	25.85			〃?	AY89I	
214	〃	4.2	2.8	3.5	0.7	8.75			ob	Z	
215	〃	5.2	2.8	4.5	0.7	16.00			〃	Z	
216	〃	4.8	2.0	4.8	0.9	18.75			〃	BQ73	
217	〃	3.2	2.7	3.2	0.85	8.00			〃	AM78—I	
○218	垂飾					3.70			滑石	黒褐	
○219	玦状耳飾					1.75			〃	BC79	
○220	石核?								ob	BK91	ピエス・エスキーユ87
○221	?								ob	AW59	
○222	?	2.2	1.8	2.1	0.5	1.85			〃	—	抉入
223	?	8.1	4.3	4.0	2.5	80			ch	BJ55	ハンド・アックス状
224	石鏃	3.1	1.2		0.4	0.85	片脚		ob	—	
225	〃	1.3	1.8		0.35	0.5	〃		〃	AZ	
226	石匙	5.2	3.6	5.2	1.2	21.3			ms	—	
227	砥石	4.8	2.5		0.5	7.2	小片		ch	—	
228	乳石斧	21.0	5.8	4.0	2.7	505	B_1, B_2		Gs	BH91, BU71	接合資料
229	〃	8.1	5.4		5.0	225	胴部E_1		〃	AX59, 32住北	〃

(4)ピエス・エスキーユ

遺構別

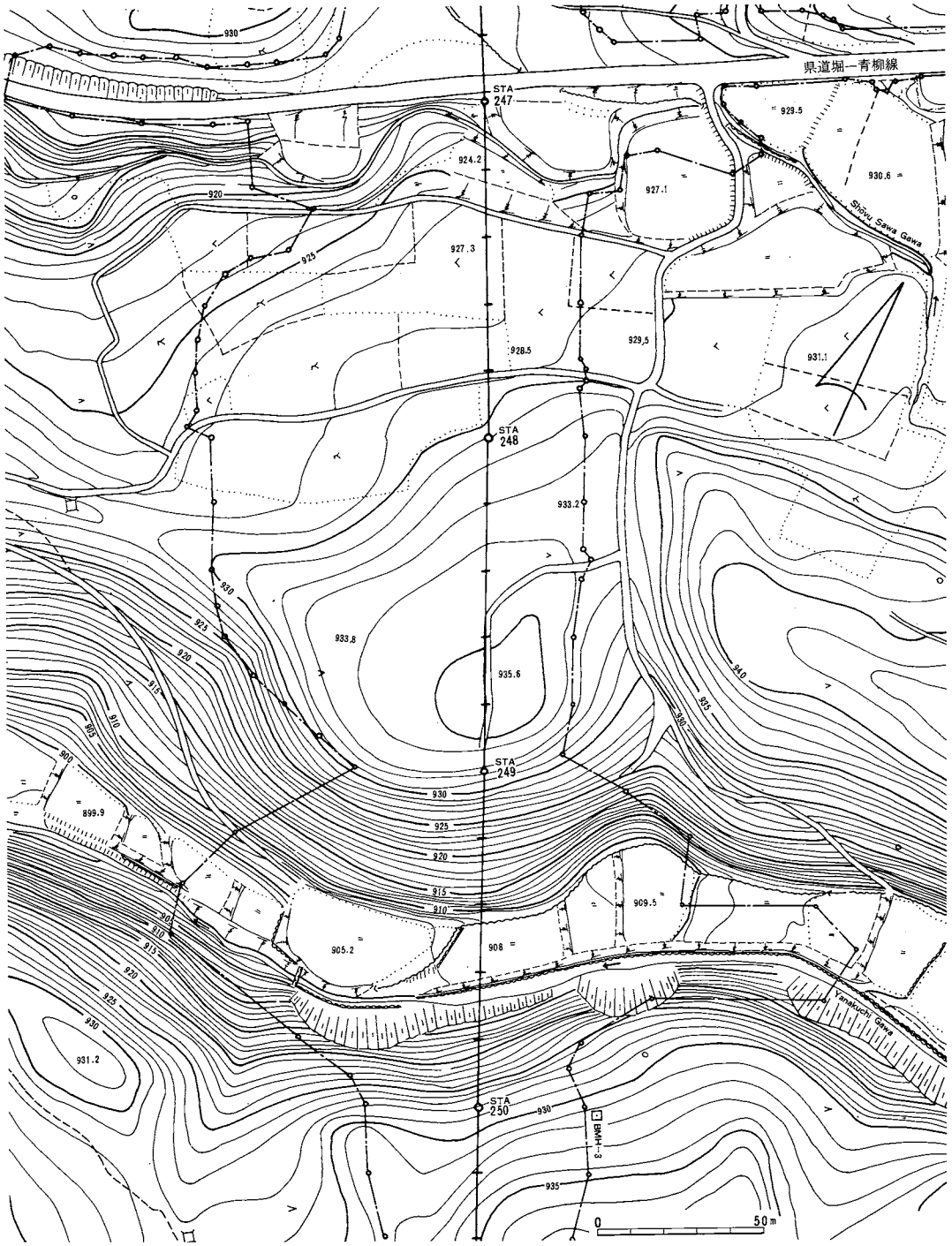
No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	刃角 (度)	備考	No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	刃角 (度)	備考
1	1住	1.90	1.80	0.65	2.50	50, 60		21		2.50	1.45	0.75	2.40	70, 110	
2		2.50	1.50	0.6	2.65	70, 100		22		2.45	1.25	0.70	2.20	50, 90	
3		2.80	1.60	1.0	4.05	50, 70		23		2.10	1.90	0.90	4.45	80, 50	
4		2.55	1.65	0.7	2.80	60, 70		24		2.10	1.40	0.60	1.30	60, 80	
5		1.80	1.70	0.7	2.60	60, 70		25	13住	3.00	1.50	1.30	6.20	90, 60	
6		2.00	1.40	0.6	2.00	60, 100		26		2.80	1.40	0.60	3.10	60, 70	
7		1.90	1.90	1.2	3.70	80, 50		27		1.90	1.70	0.75	2.10	30, 30	
8		1.60	1.45	0.85	2.00	60, 90		28		2.10	1.40	0.50	1.65	40, 20	
9		1.95	1.40	0.65	1.65	70, 60		29	14住ユ	3.20	2.30	0.90	4.35	40, 30	
10		2.90	0.70	0.70	1.25	90,		30	17住	4.25	2.85	2.00	21.45	50, 80	
11	2住	2.10	1.15	0.80	2.30	70, 60		31		3.00	2.20	1.20	8.05	60, 70	
12		2.30	1.65	0.60	1.10	30, 50		32		3.25	2.00	1.10	6.30	60, 80	
13	3住	2.35	1.40	0.60	1.60	50, 60		33		2.75	2.00	0.70	4.65	40, 100	
14		2.20	1.50	0.70	2.15	60, 100		34		2.10	1.60	0.80	2.25	70, 50	
15		2.90	2.35	0.65	4.70	30, 30		35		1.80	1.50	0.30	0.90	30, 70	
16	5住	1.85	2.00	0.60	2.75	50, 100		36		2.40	1.80	0.70	2.65	30, 60	
17		2.10	1.20	0.75	2.05	90, 60		37		2.70	1.55	1.20	4.95	80,	
18	6住	1.95	1.60	0.60	2.05	50, 60		38		2.70	1.30	0.60	2.35	50,	
19	12住	3.25	1.80	0.80	4.45	50, 30		39		2.80	1.45	0.90	3.05	30, 80	
20		2.20	1.15	0.60	2.20	50, 70		40		2.15	1.10	0.70	1.55	60,	

No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	刃角 (度)	備考
41	17住	2.50	1.65	0.90	2.95	60, 80	
42		1.75	1.20	0.65	1.75	110, 80	
43		2.30	1.35	1.15	2.80	80, 60	
44		1.70	1.30	0.50	1.25	30, 50	
45		2.05	1.20	0.70	1.45	70, 50	
46		1.80	1.45	0.80	1.45	60, 40	
47		1.00	1.10	0.70	1.00	30, 80	
48		2.00	1.25	0.40	1.00	40, 30	
49		1.75	1.25	0.40	0.75	50, 20	
50		1.95	1.00	0.50	0.85	70, 30	
51		1.95	1.30	0.55	1.15	50, 70	
52		1.20	0.80	0.50	0.45	80, 70	
53	18住	1.85	1.40	0.80	2.10	50, 100	
54	19住	3.40	1.60	0.70	4.05	30, 60	
55		2.70	2.00	0.70	2.80	20, 30	
56		2.25	1.90	0.90	3.65	80, 60	
57	21住	2.00	1.20	0.90	2.40	80, 90	
58		2.55	2.35	0.90	6.00	70,	
59		2.00	1.40	0.75	2.05	60, 60	
60		2.50	1.90	1.00	4.20	50, 80	
61		2.15	2.10	0.60	2.45	40, 60	
62	22住	2.40	1.45	0.70	3.35	40, 100	
63	24住	2.80	2.40	1.15	7.40	80, 70	
64		2.40	1.85	1.40	5.50	60, 90	
65		1.90	1.70	0.70	2.40	30, 70	
66		1.75	1.30	0.70	1.35	50, 20	
67	25住	2.30	1.20	0.70	1.95	70, 60	
68	28住	2.85	2.50	0.60	5.30	40, 70	
69		1.95	1.90	0.80	3.05	70, 60	
70	35住	2.10	1.00	0.80	1.90	60, 90	
71		2.00	1.45	1.15	3.40	60, 70	
72		2.20	1.05	0.65	1.60	30, 100	
73	36住	1.80	1.20	0.45	1.10	40, 40	
74		2.65	1.70	0.70	4.00	50, 40	
75		2.10	1.10	0.80	2.15	70, 100	
76	39住	2.40	1.35	0.80	2.85	60, 50	
77	40住	3.05	2.40	1.50	11.30	60,	
78		2.55	1.70	1.00	4.35	80, 80	
79	43住	2.95	1.80	0.50	2.75	50, 30	
80	47住	2.20	1.10	0.80	1.90	90, 50	
81	Z	3.00	1.65	0.90	4.80	50, 60	以下, 石核
82	BC85	2.25	1.80	0.95	4.75	70, 90	
83	BN50	2.70	2.00	1.45	7.40	60, 70	
84	BB77	2.60	1.80	0.70	3.90	30, 60	
85	AY61	3.15	2.05	1.10	6.45	50, 100	
86	UW77	3.60	1.80	1.30	8.90	60, 100	
87	BK91	2.90	2.30	1.45	10.40	90, 110	図220
88	AM78	2.70	1.30	0.80	2.65	50, 60	
89	AV84—Ⅰ	2.40	1.90	0.95	4.45	50, 90	
90	AW53	2.10	2.00	1.40	6.50	100, 100	
91	AY61	3.50	2.30	0.80	7.50	60, 70	
92	BH85	1.90	1.45	0.60	1.90	80, 100	
93	BI53	2.20	2.00	1.50	6.85	70, 100	
94	BP72	2.25	1.65	0.90	2.70	50, 60	
95	BA50	2.20	1.30	0.80	1.80	70, 40	
96	BE87	2.30	1.70	0.70	2.95	90, 70	
97	CU56	2.10	1.40	0.70	1.90	50, 60	
98	BC54	1.80	1.40	0.65	1.45	40, 60	
99	BA56	1.60	1.50	0.90	3.05	80, 50	
100	BA56	2.35	1.80	0.75	2.60	60, 80	
101	BA86	2.05	1.60	0.80	2.85	30, 60	
102	AY61	2.35	1.80	0.90	4.00	80, 80	
103	AV84	2.80	2.60	1.80	15.05	100, 70	
104	BC70Ⅰ	3.35	2.00	0.85	5.55	60, 50	以下, 剝片
105	AY61Ⅱ	3.50	1.60	0.70	3.75	20, 50	
106	—	3.05	1.50	0.60	2.45	90, 40	
107	—	3.90	1.50	0.80	2.50	40, 70	
108	AY61	1.95	1.85	0.65	1.95	70, 80	
109	AW57	2.05	2.00	0.45	1.55	50, 20	
110	AO80Ⅱ	1.95	1.40	0.75	2.10	50, 110	
111	BK60ⅠⅡ	2.00	1.60	0.60	2.30	30, 70	
112	AT44付近	2.50	1.70	0.70	2.45	80, 60	
113	BI53	2.50	1.10	0.70	2.10	60, 50	
114	AY61	2.30	1.90	0.50	2.45	40, 40	
115	—	2.05	15.5	0.50	1.40	50, 40	
116	1—85	2.75	1.40	0.50	2.20	70, 30	
117	AO64—Ⅰ	1.75	1.60	0.50	1.70	80, 90	
118	—	2.10	1.70	0.70	2.05	50, 70	
119	BO79—Ⅰ	2.10	1.80	0.90	2.60	30, 80	
120	BO84	1.60	1.20	0.30	0.70	30, 40	
121	BA71	1.60	1.30	0.60	1.30	60, 40	
122	BA85	1.65	1.60	0.60	1.65	50, 60	
123	BS74	2.45	1.75	0.60	2.50	60, 50	
124	AY61	1.80	2.35	0.40	2.55	60, 70	
125	BL65	2.20	1.90	0.60	2.00	30, 20	
126	AY54Ⅰ	2.75	2.30	0.90	4.55	60, 60	

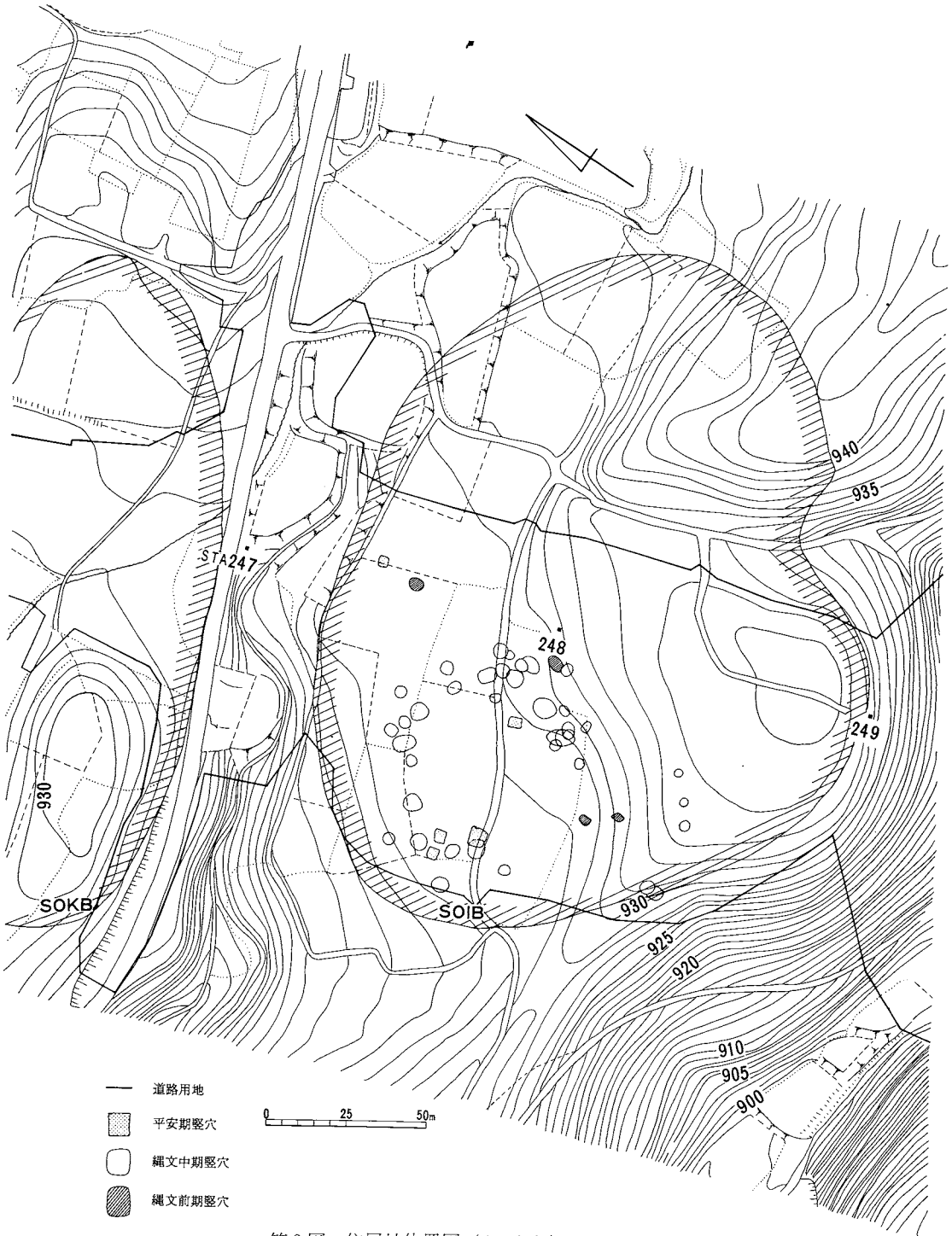


1．柏木南　2．阿久　3．中阿久　4．居沢尾根　5．オシキ　6．大石　7．上の原　8．判の木山西　9．判の木山東　10．金山沢北

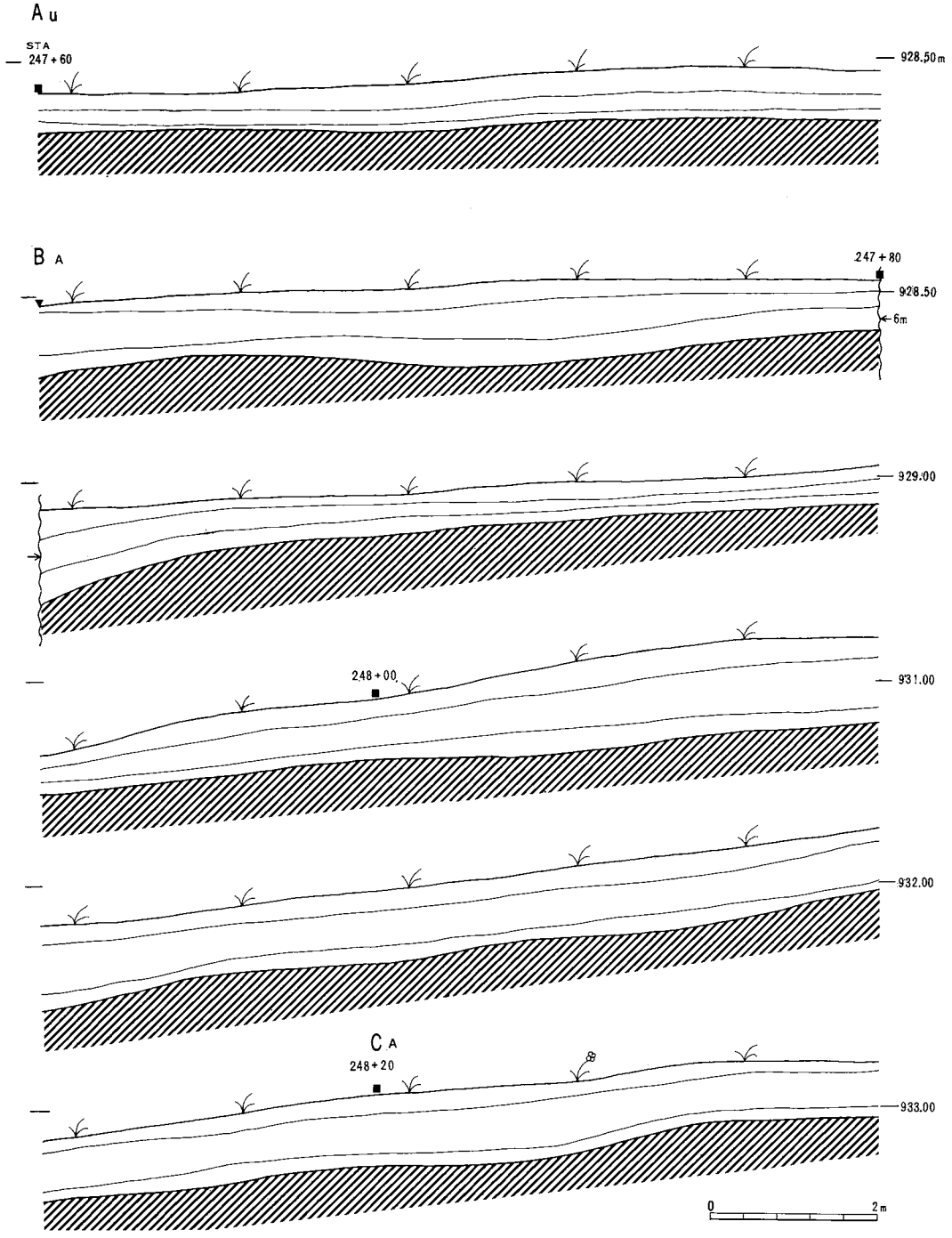
第1図　中央道関係遺跡位置図



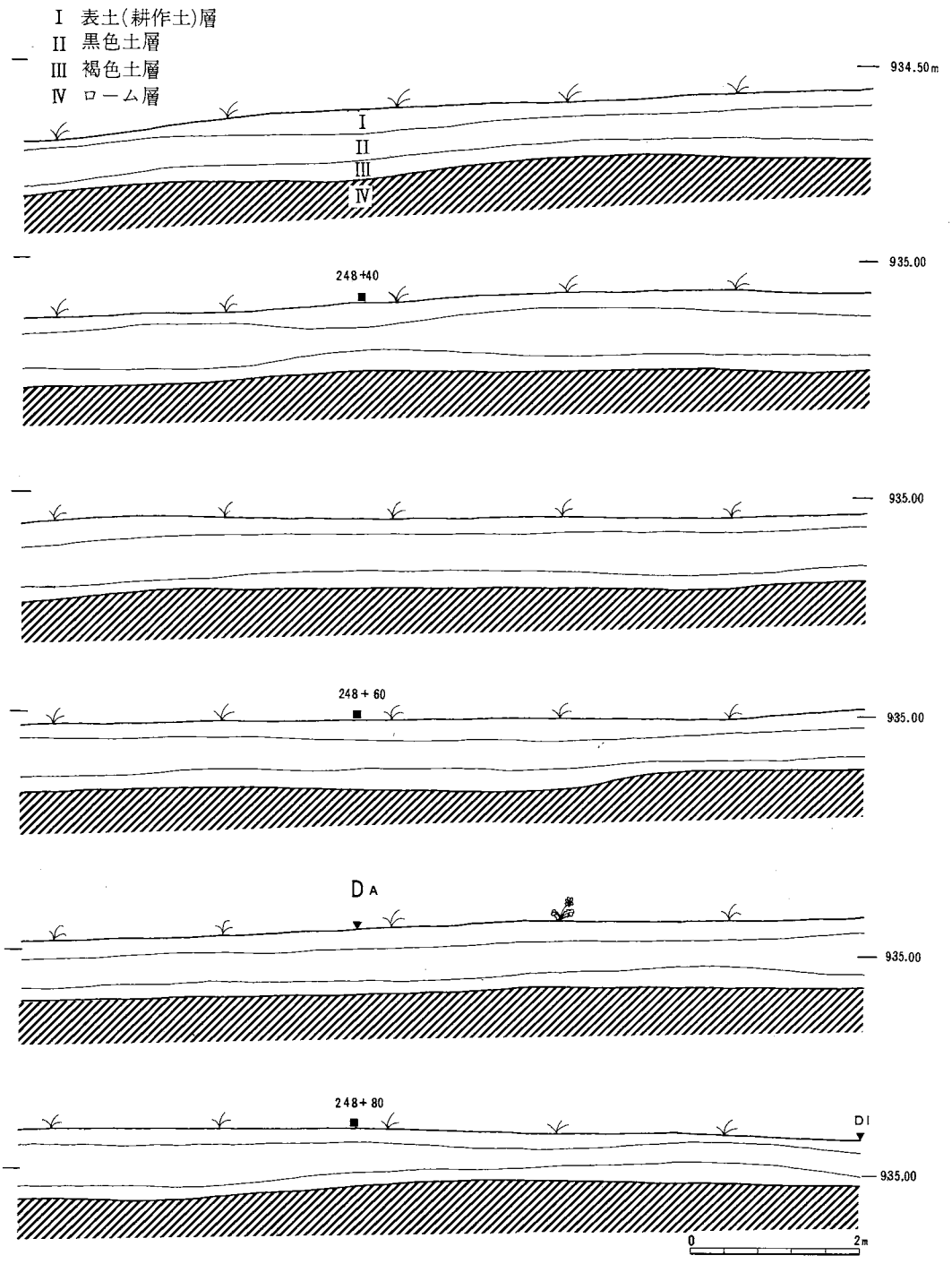
第２図　大石遺跡地形図　（１：2000）



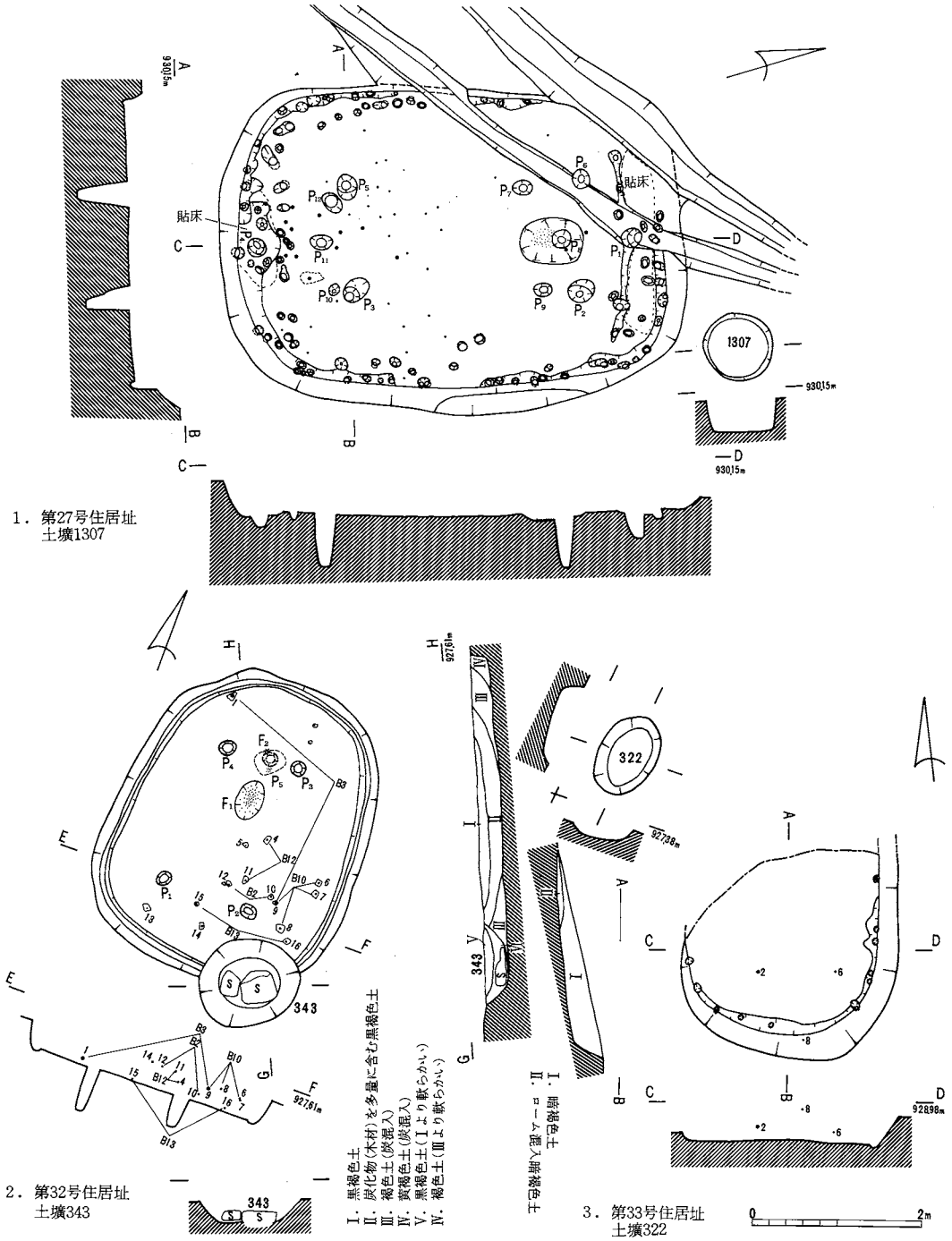
第３図　住居址位置図（１：2000）



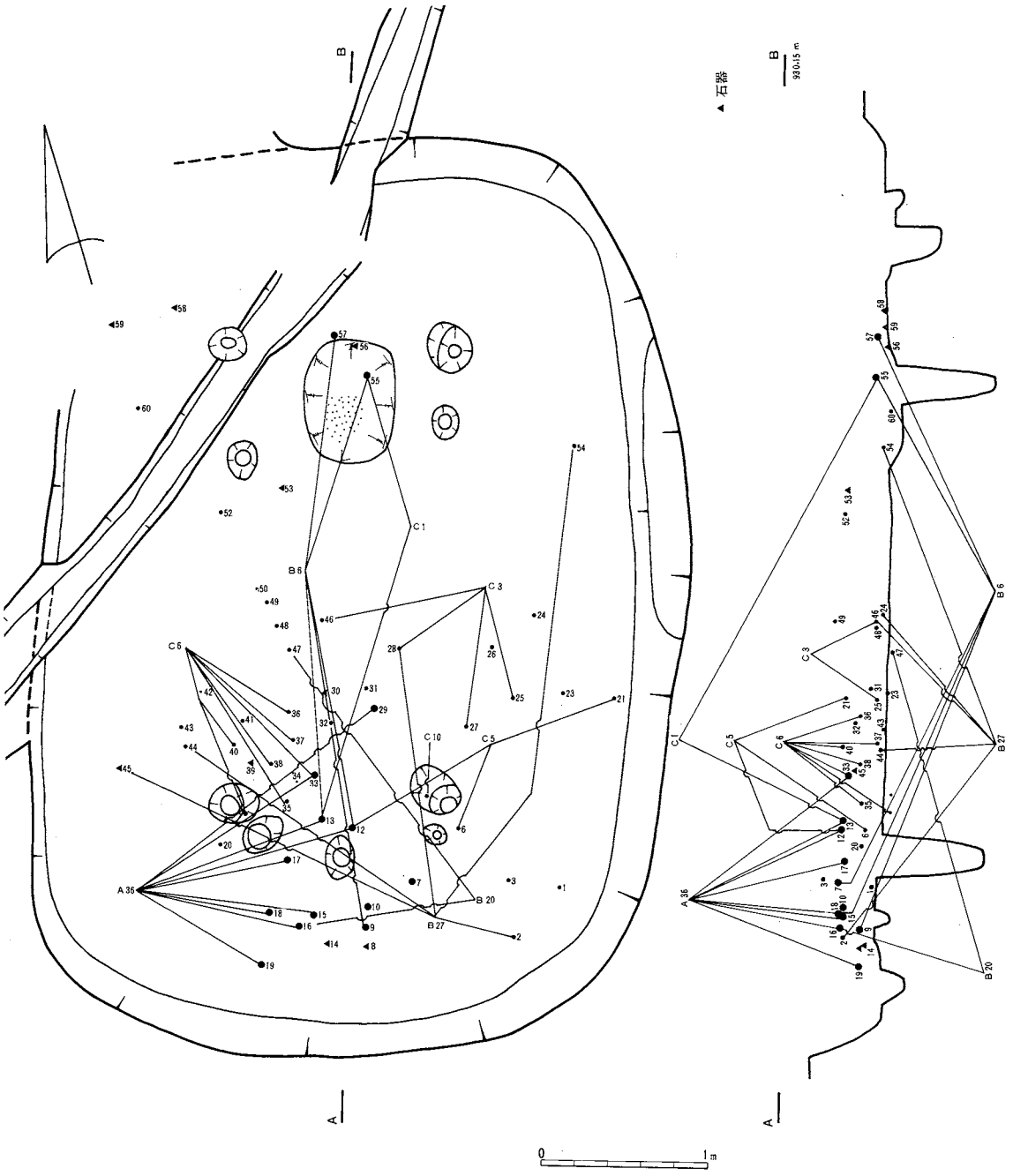
第4図　大石遺跡土層図(1)　(1:80)



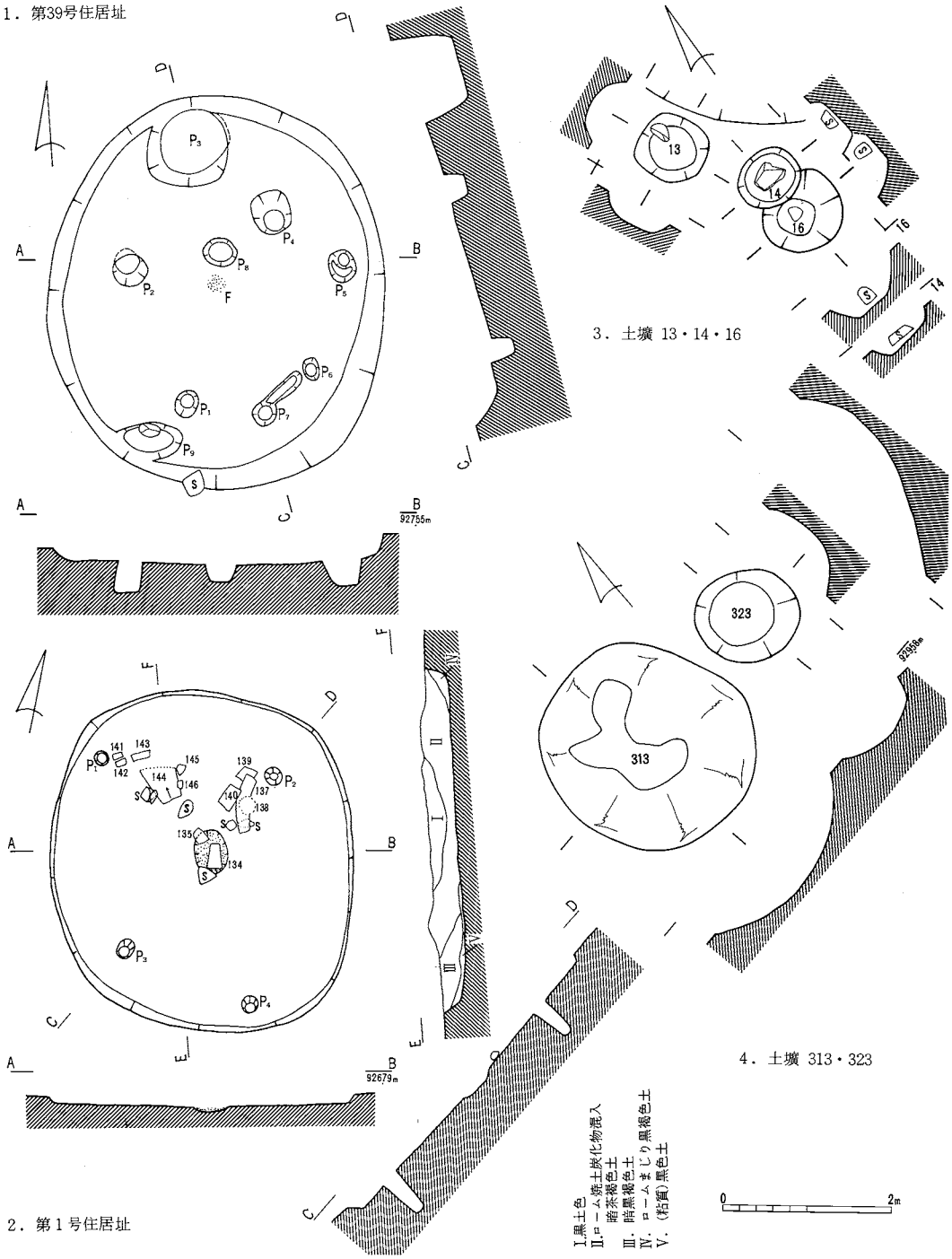
第５図　大石遺跡土層図(２)　(１：80)



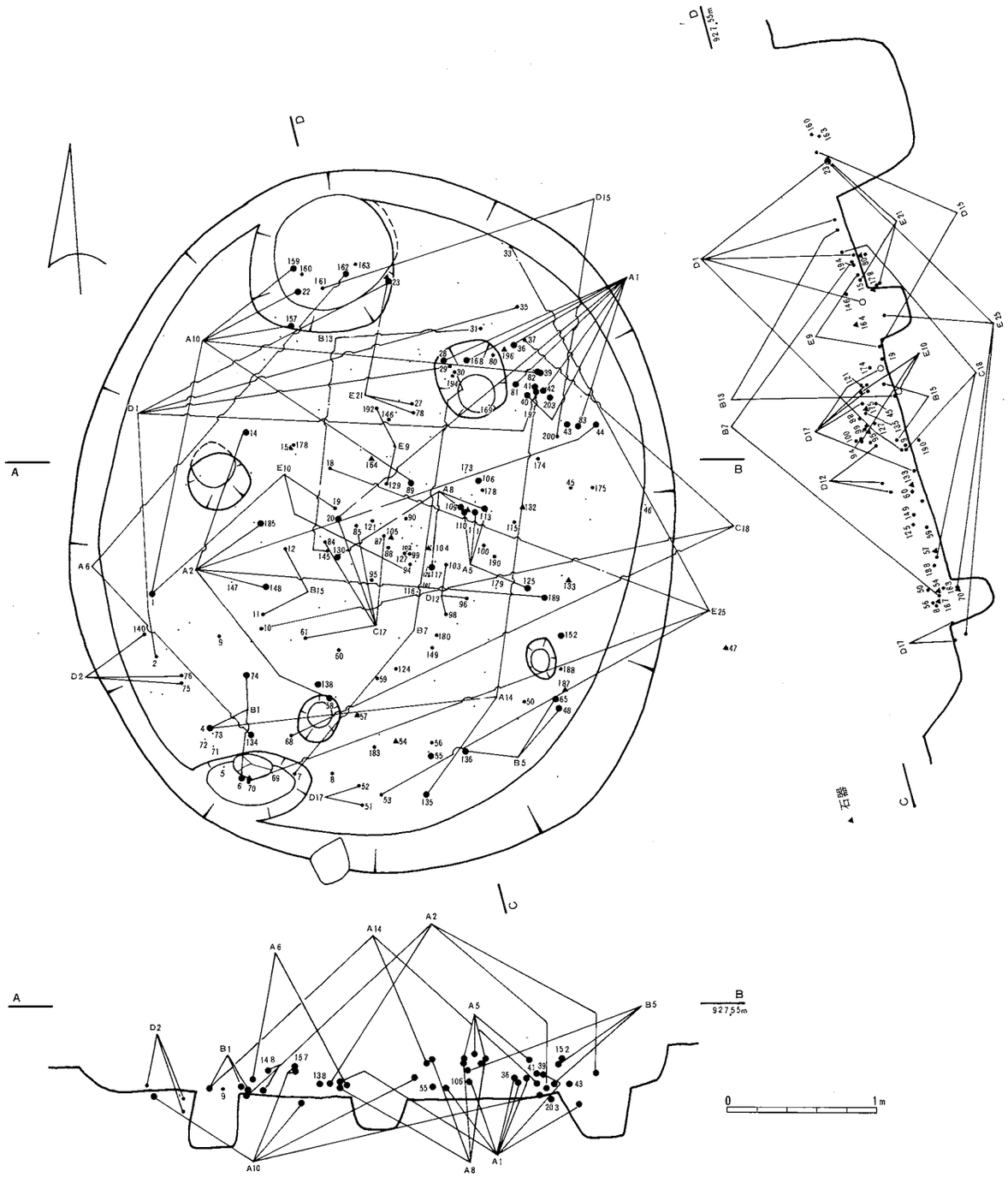
第6図　大石遺跡第27・32・33号 住居址・土壙実測図 (1：80)



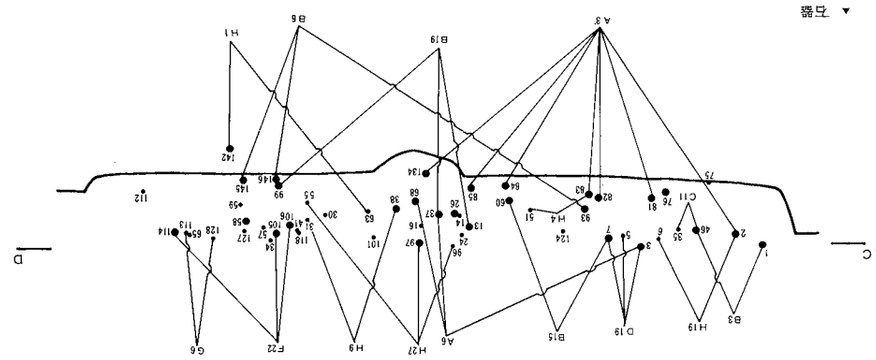
第７図　大石遺跡第27号住居址遺物出土状況図（1：40）

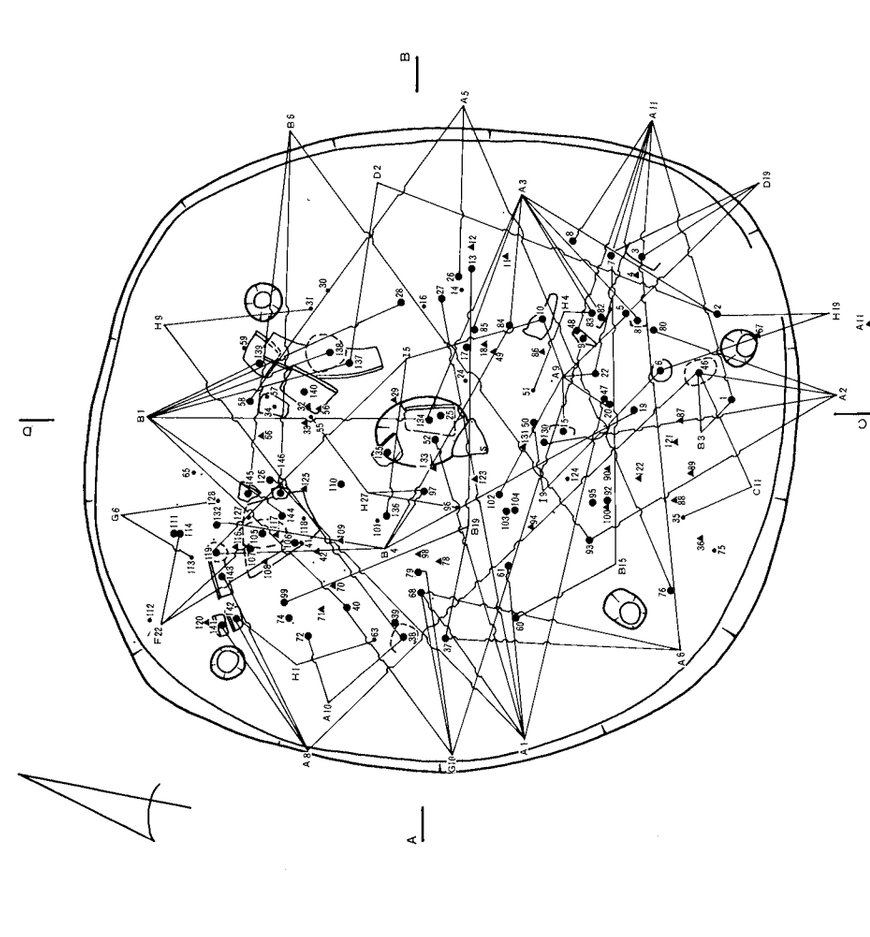


第8図　大石遺跡 第39・1号住居址・土壙実測図(1：80)



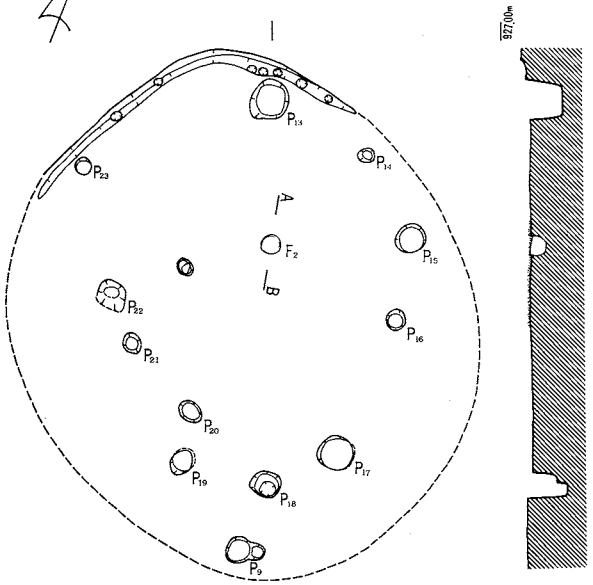
第９図　大石遺跡第39号住居址遺物出土状況図　（１：40）



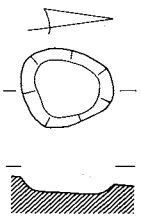


第10図　大石遺跡第１号住居址遺物出土状況図（１：40）

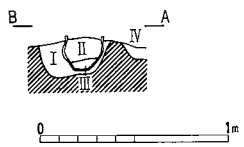
1．第５号旧住居址



4．土壙810

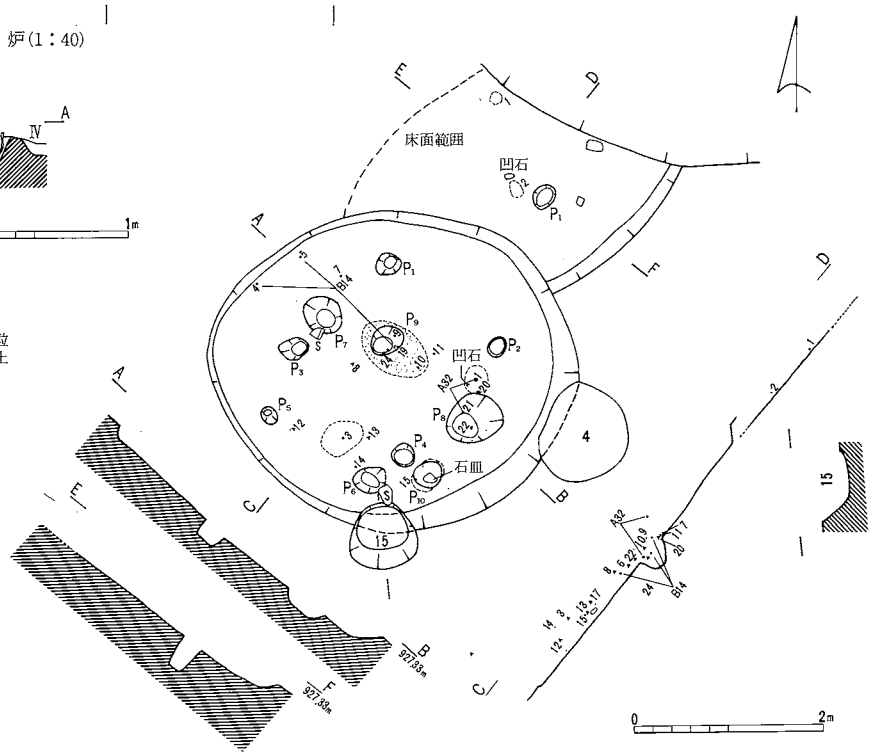


2．第５号旧住居址　炉(1：40)

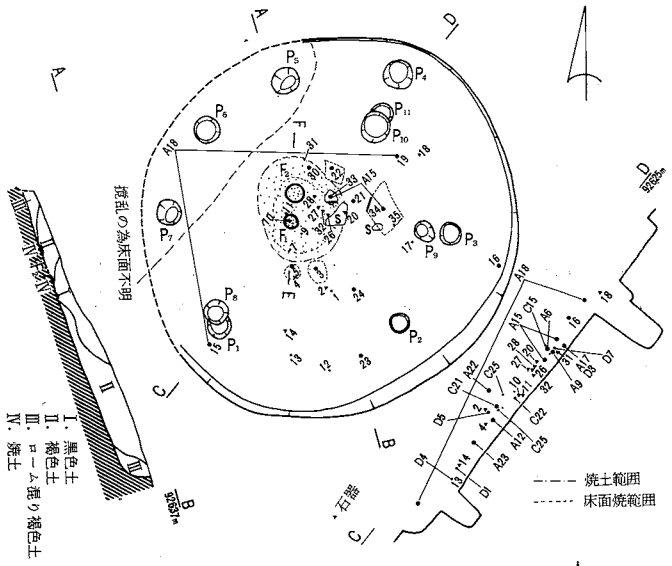


Ⅰ．ローム焼土入褐色土
Ⅱ．焼土粒入褐色土
Ⅲ．焼土灰入黒褐色土
Ⅳ．ロームブロック焼土粒
　　入褐色土

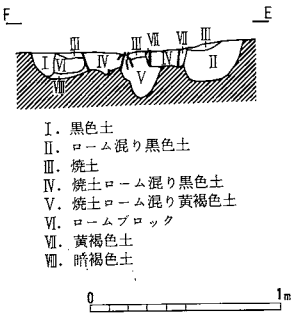
3．第６号・11号住居址・土壙15



第11図　大石遺跡第５号旧・６号・11号住居址・土壙実測図(1：80　但し2は1：40)

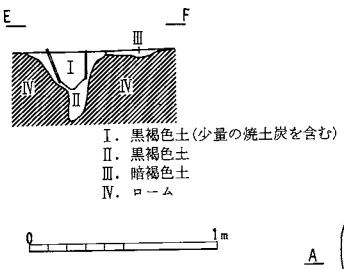


1．第７号住居址

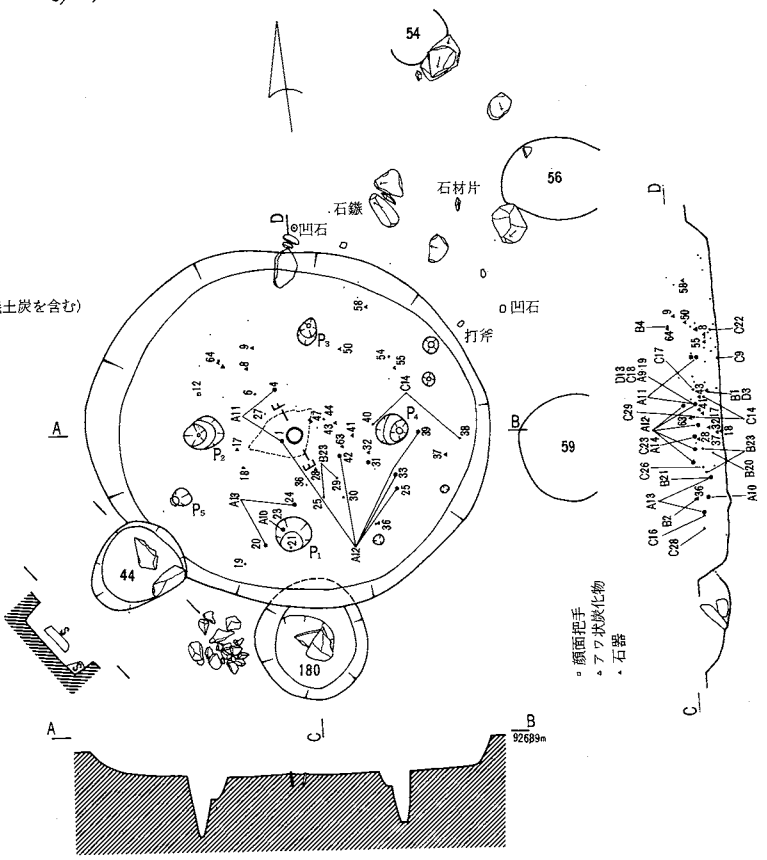


2．第７号住居址　炉(1：40)

3．第18号住居址・土壙44・180

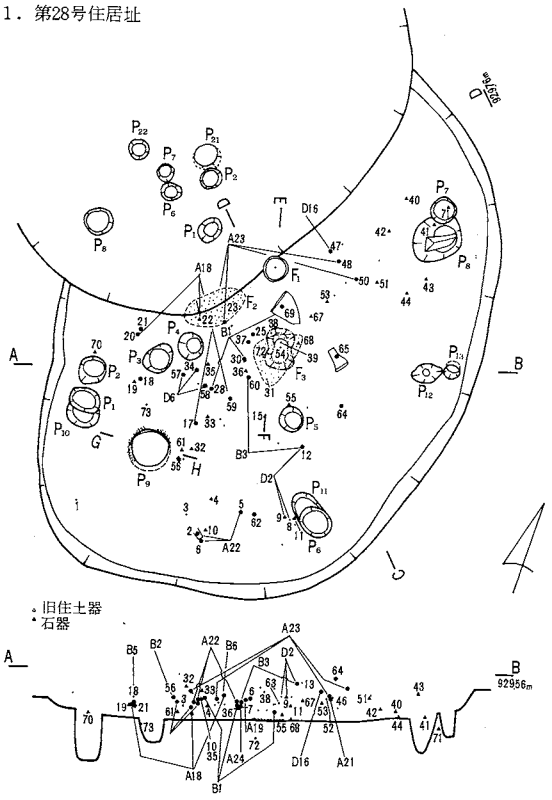


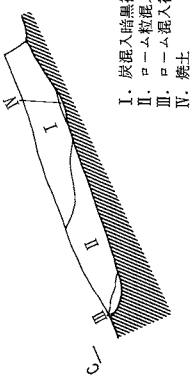
4．第18号住居址　炉(1：40)



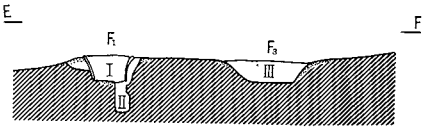
第12図　大石遺跡第７号・18号住居址・土壙実測図(1：80　但し２・４は1：40)

1．第28号住居址

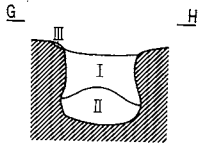




第　2．第28号住居址　炉(1：40)



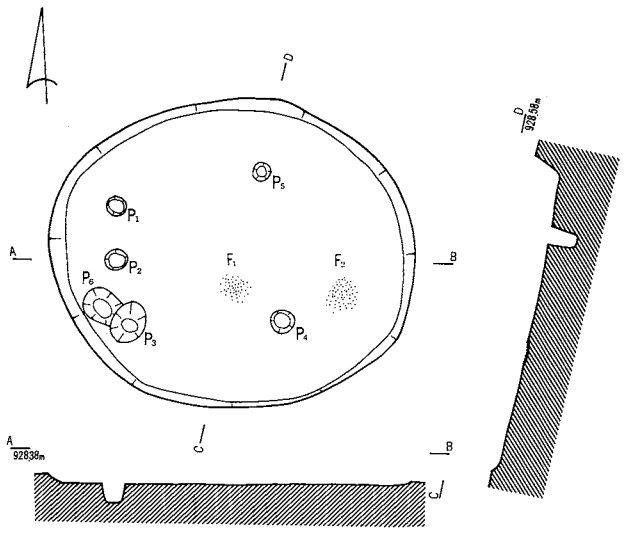
Ⅰ．焼土粒炭化物混入黒褐色土
Ⅱ．褐色土
Ⅲ．ローム粒焼土粒炭化物混入黒褐色土

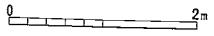


Ⅰ．ロームブロック粒炭化物混入黒褐色土
Ⅱ．ローム混入黄褐色土
Ⅲ．焼土

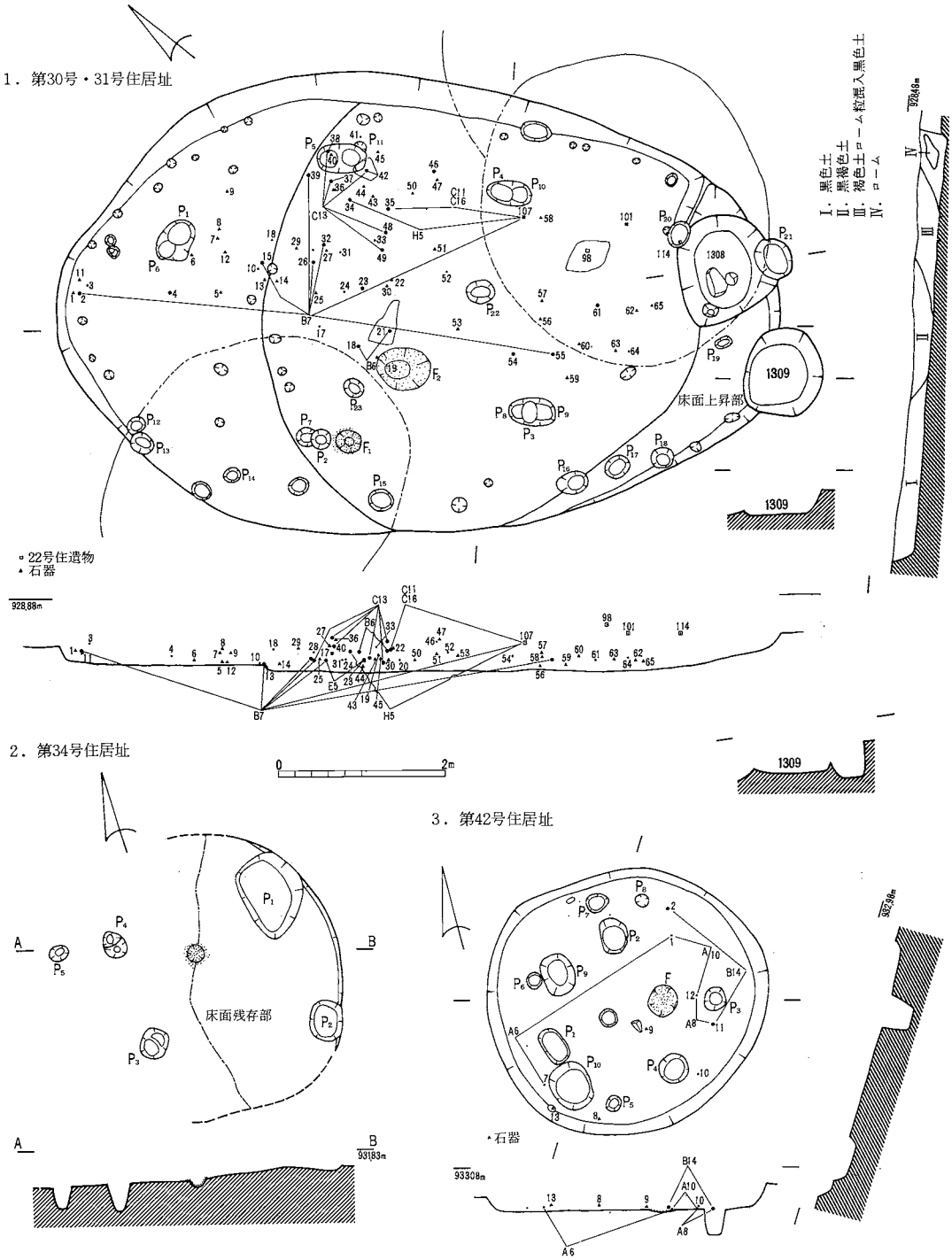
3．第28号住居址 P9 土層図(1：40)

4．第29号住居址



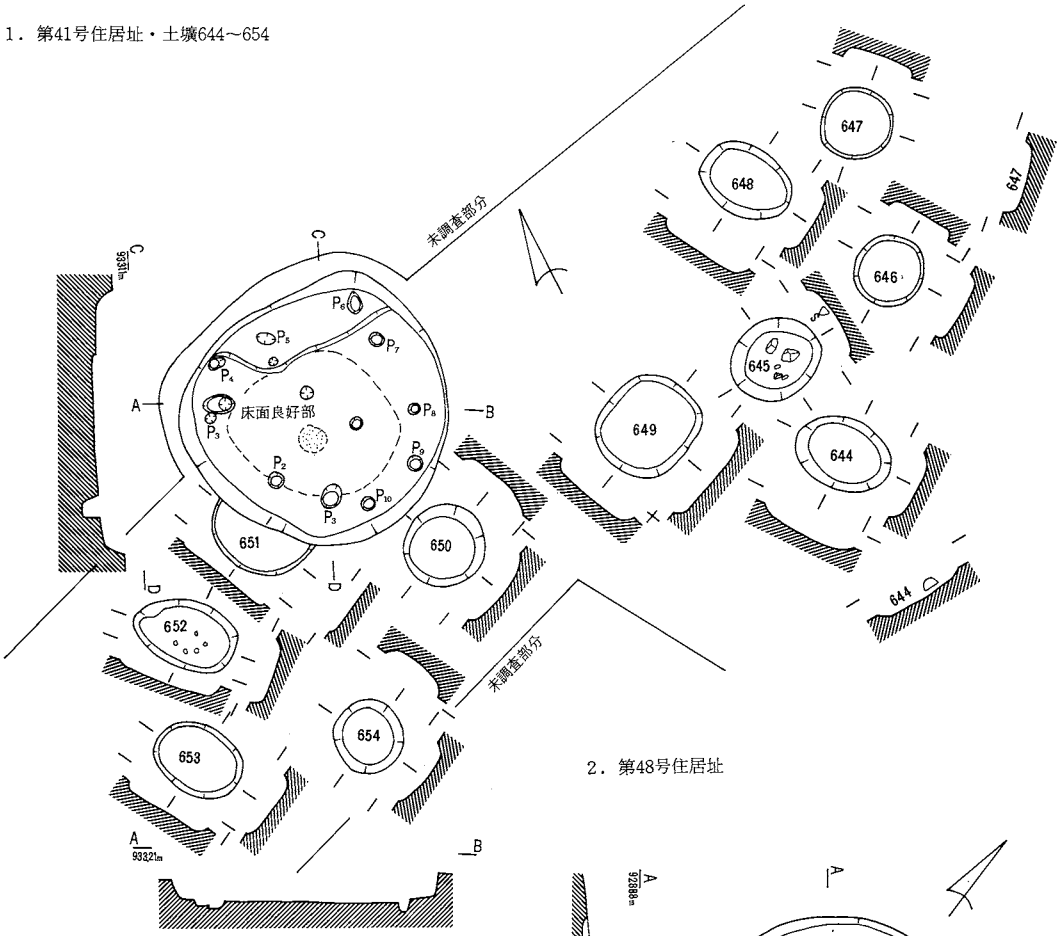


第13図　大石遺跡第28号・29号住居址 実測図(1：80 但し2・3は1：40)

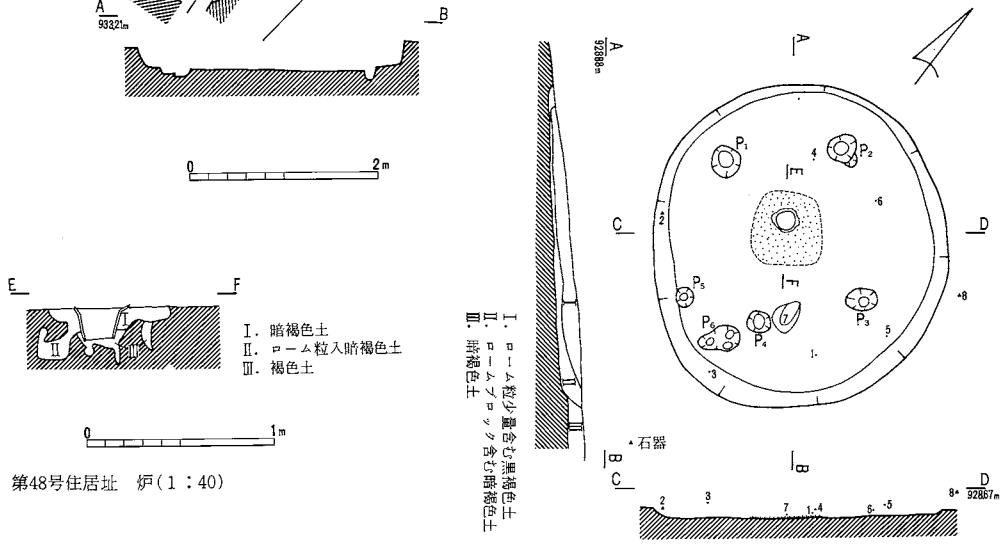


第14図　大石遺跡第30号・31号・34号・42号住居址実測図(1：80)

1．第41号住居址・土壙644～654



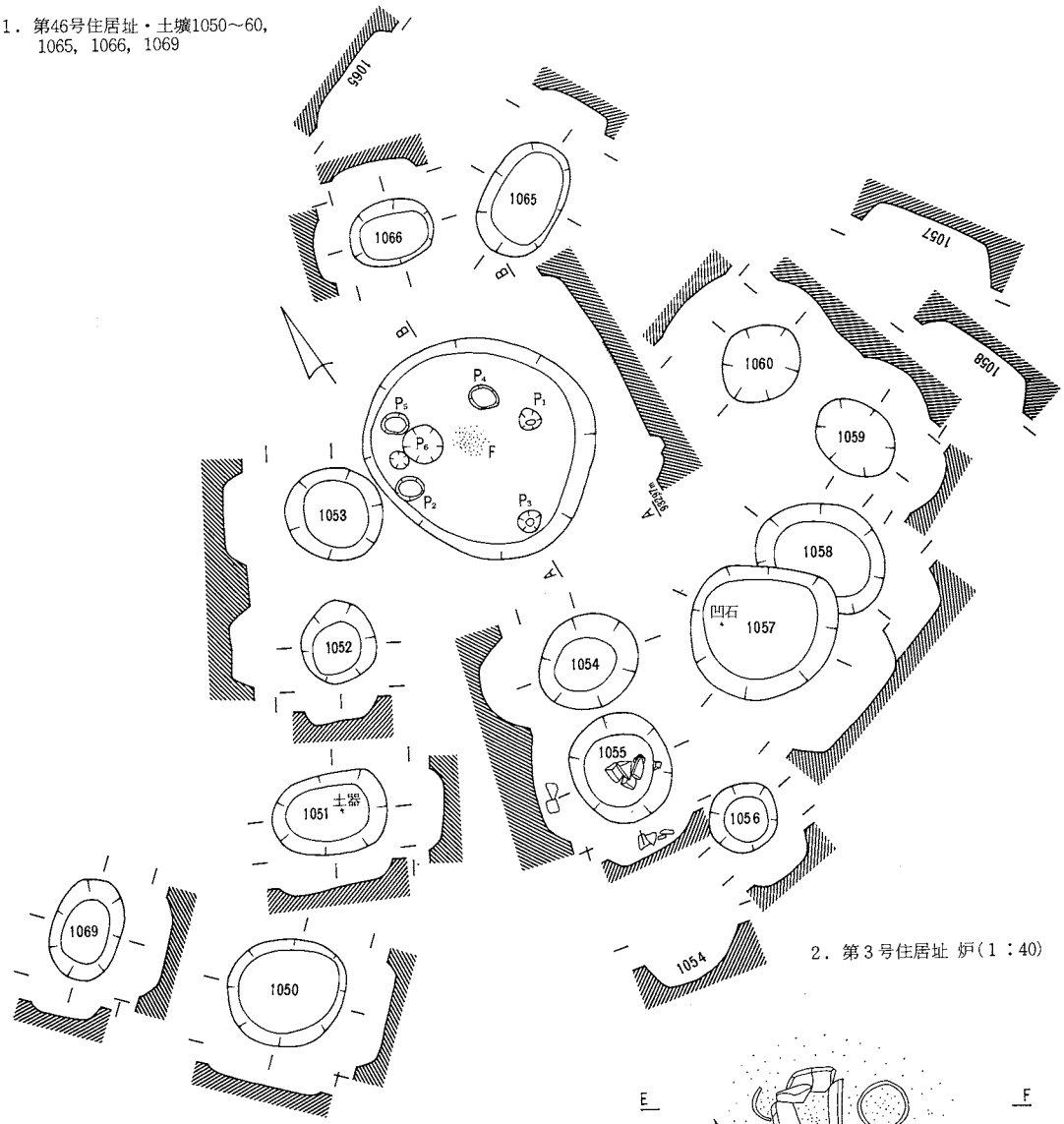
2．第48号住居址



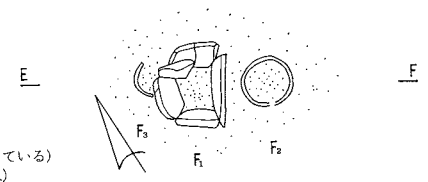
3．第48号住居址　炉（1：40）

第15図　大石遺跡第41号・48号住居址・土壙実測図（1：80　但し3は1：40）

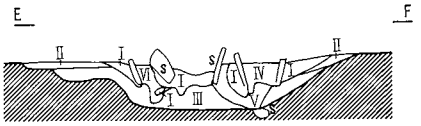
1．第46号住居址・土壙1050～60，
1065，1066，1069



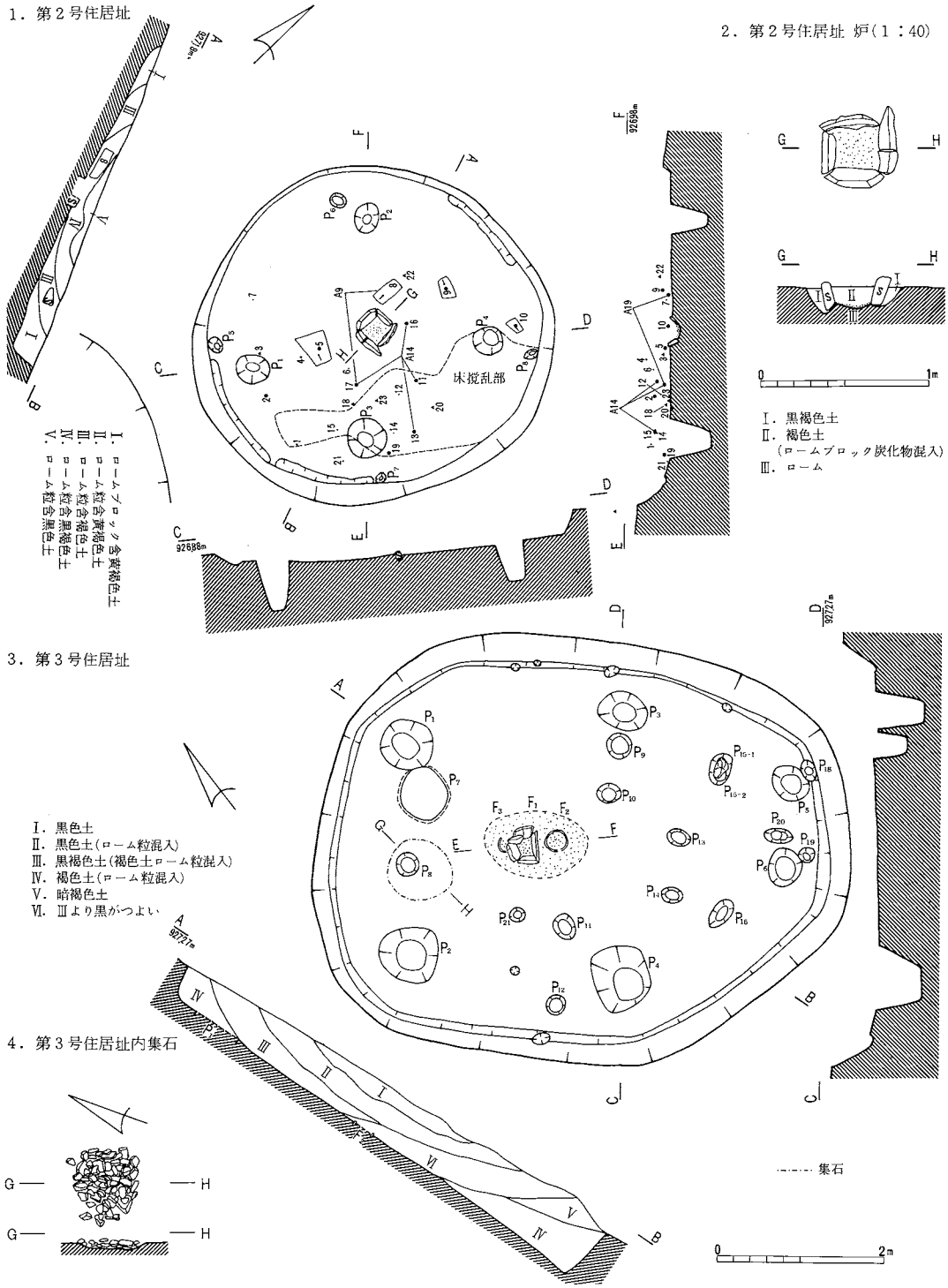
2．第３号住居址 炉（１：40）



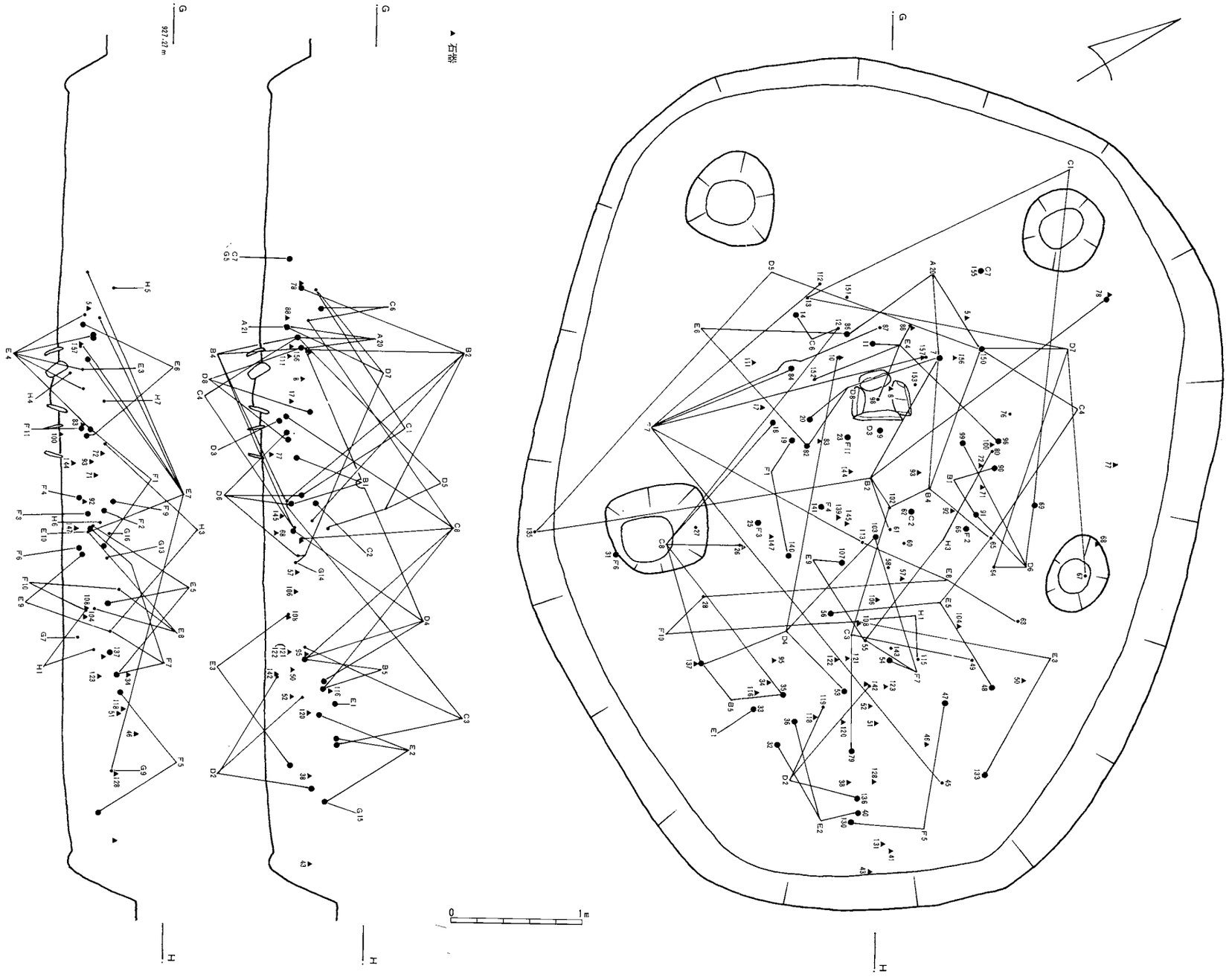
Ⅰ．焼土
Ⅱ．変質ローム（やゝ白っぽい）
Ⅲ．変質ローム（固くぼろぼろしている）
Ⅳ．黒色土(Ⅰ)（ローム粒焼土混入）
Ⅴ．黒色土(Ⅱ)（ローム粒焼土混入
黒色土(Ⅰ)より黒みが強い）
Ⅵ．褐色土（焼土混入）



第16図　大石遺跡第46号住居址・第3 号住居址炉・土壙実測図（1：80　但し２は１：40）

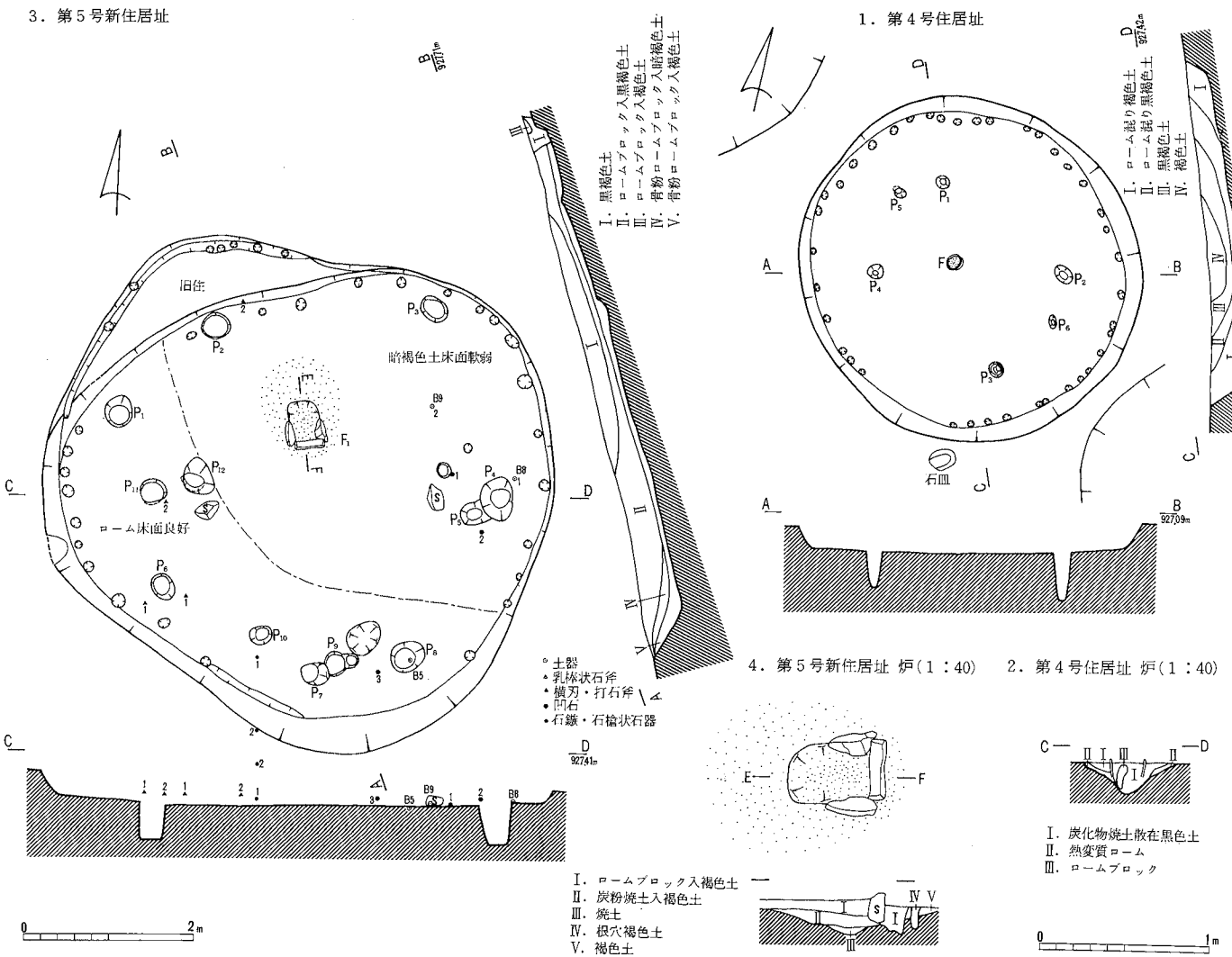


第17図　大石遺跡第２号・３号住居址実測図（1：80　但し２は１：40）

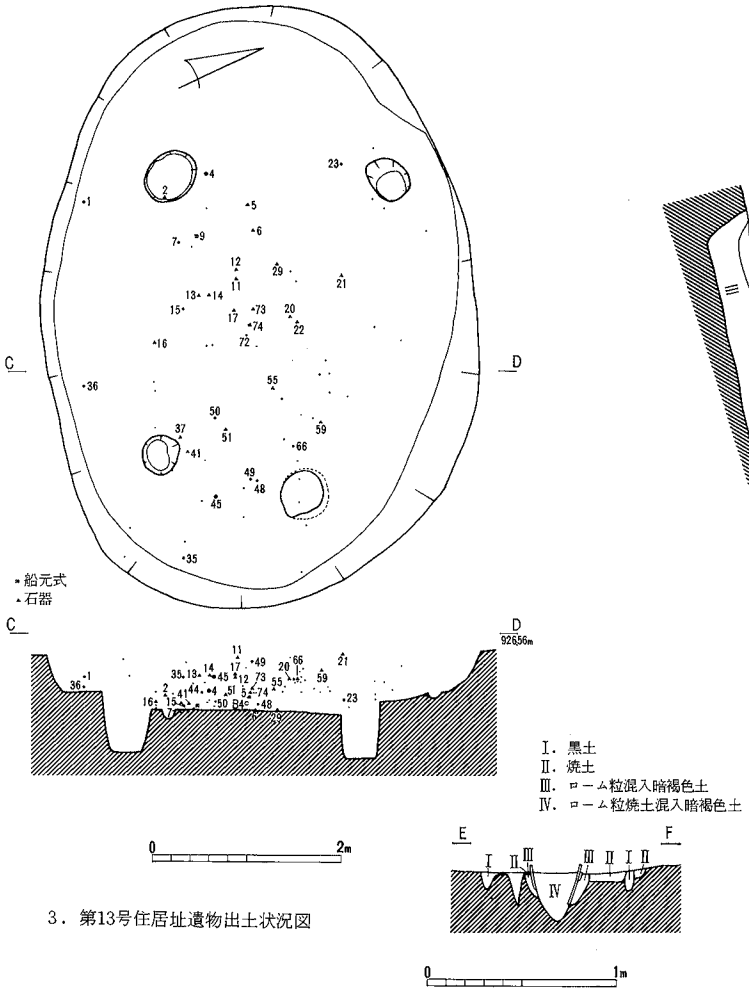


第18図　大石遺跡第３号住居址遺物出土状況図　（１：40）

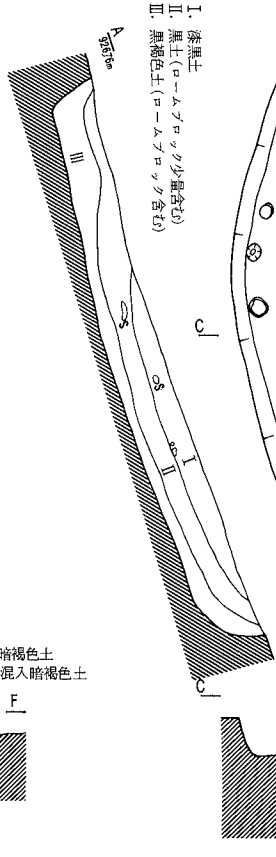
第19図　大石遺跡第４号・５号住居址実測図（１：80　但し２は１：40）



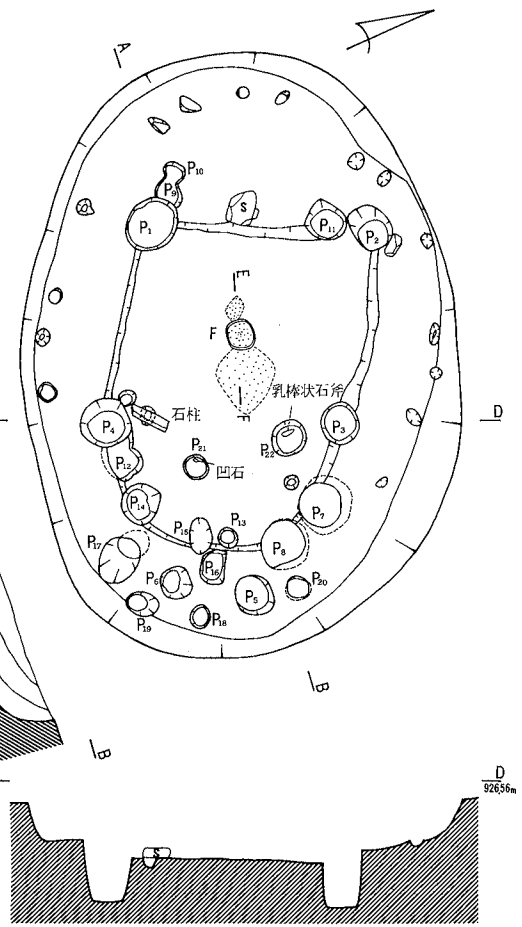
第20図　大石遺跡第13号住居址実測図(1：80　但し2は1：40)



3．第13号住居址遺物出土状況図

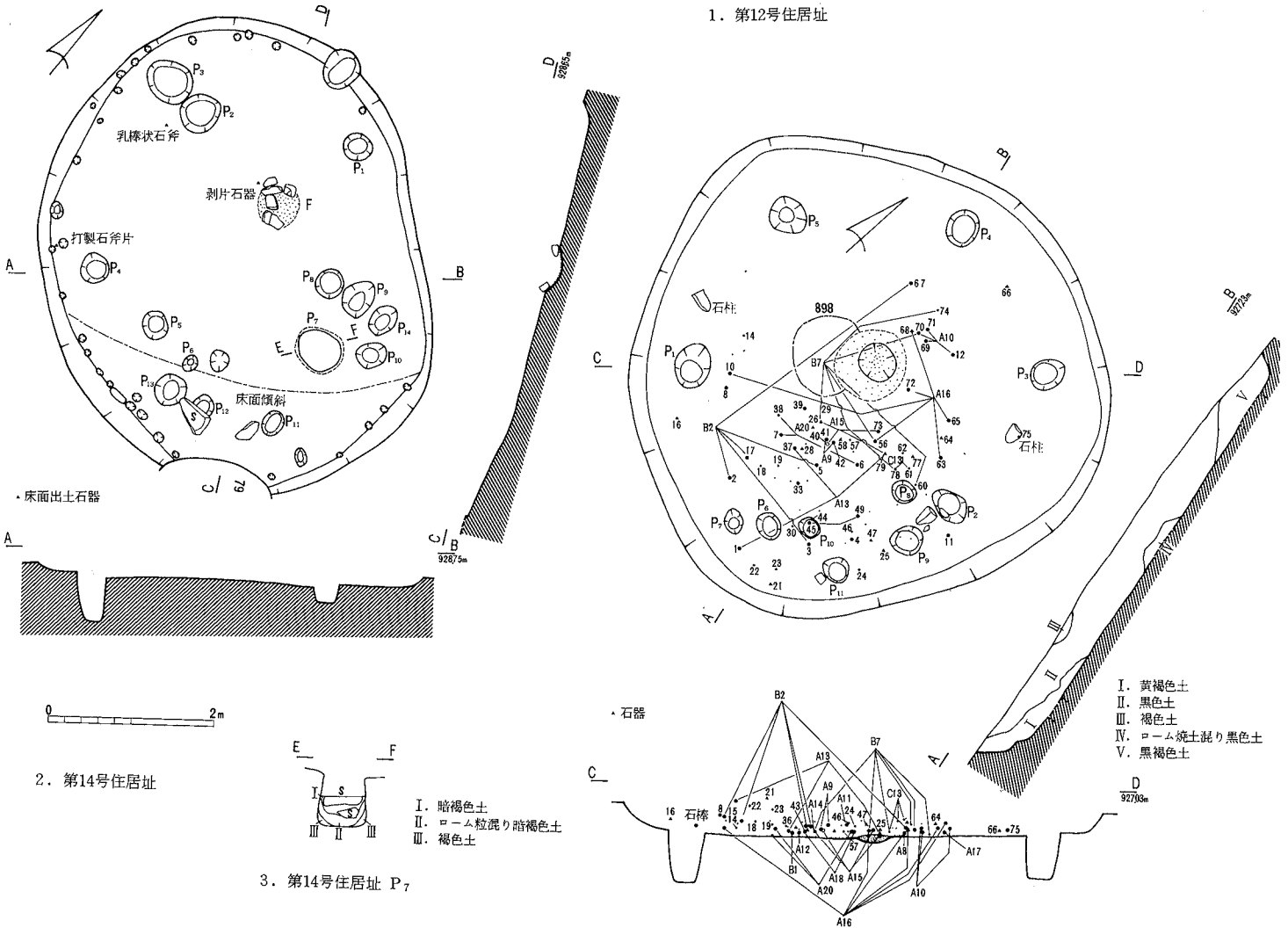


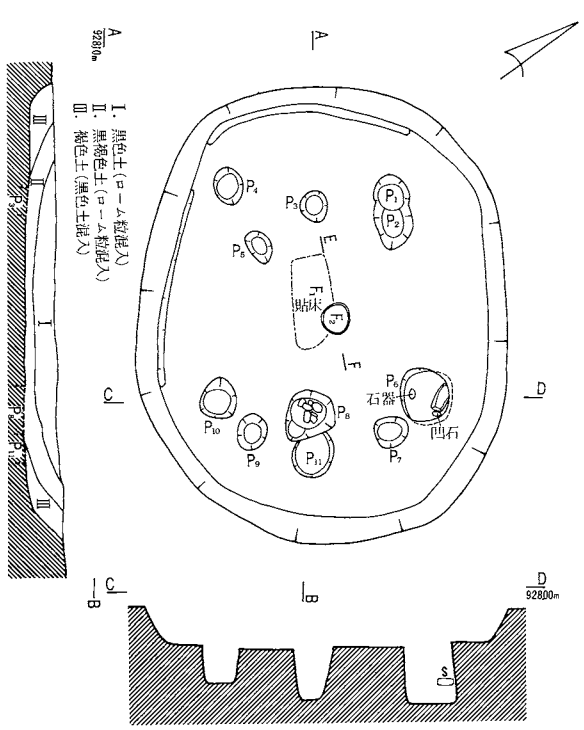
2．第13号住居址 炉(1：40)

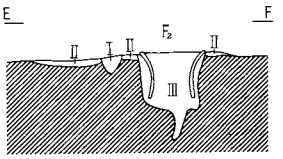


1．第13号住居址

第21図　大石遺跡第12号・14号住居址実測図（1：80）



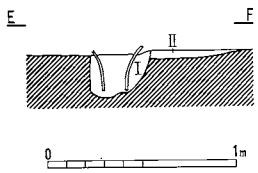




I. 黒色土(焼土ローム粒混入)
II. 焼土
III. 褐色土(焼土黒色土ローム粒混入)

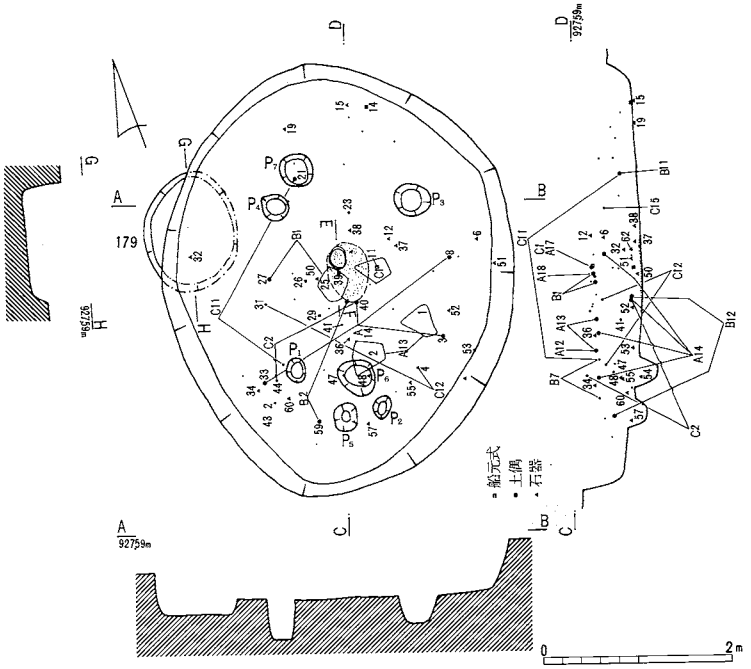
2. 第15号住居址 炉(1:40)

3. 第16号住居址・土壙179

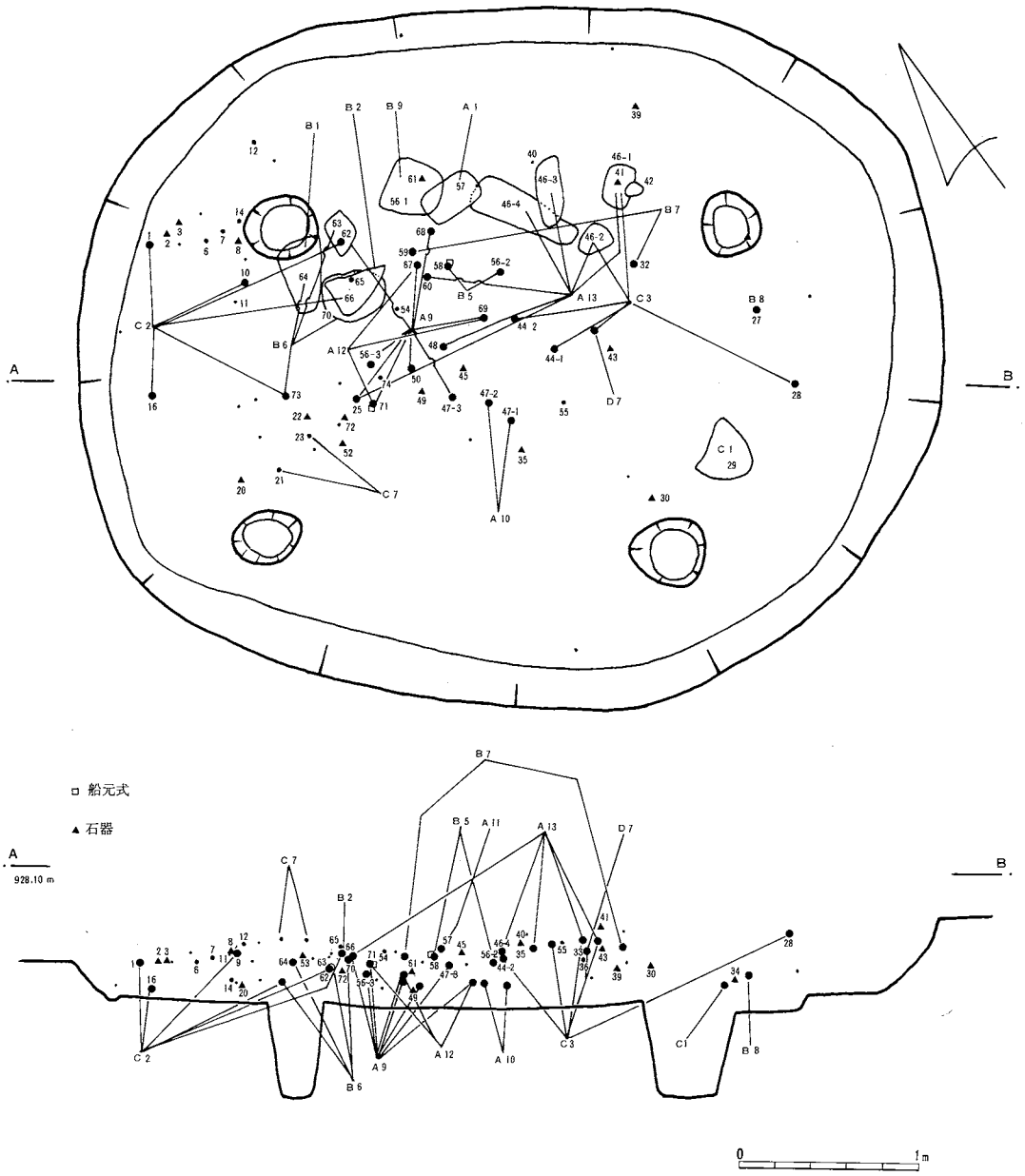


I. 黒色土(ローム粒混入)
II. 焼土

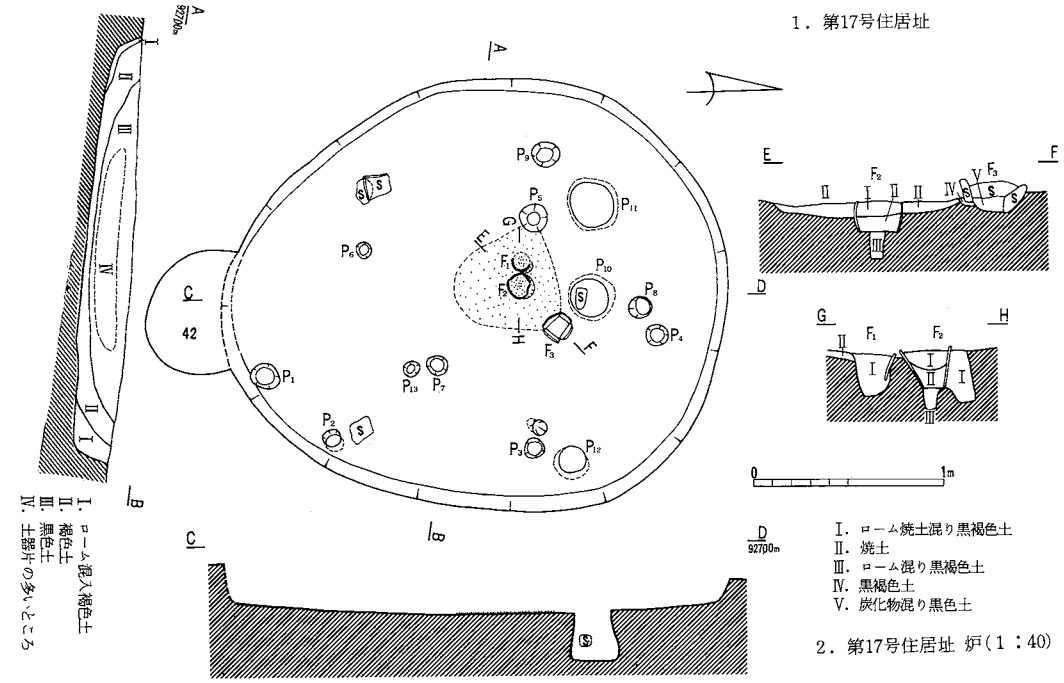
4. 第16号住居址 炉(1:40)



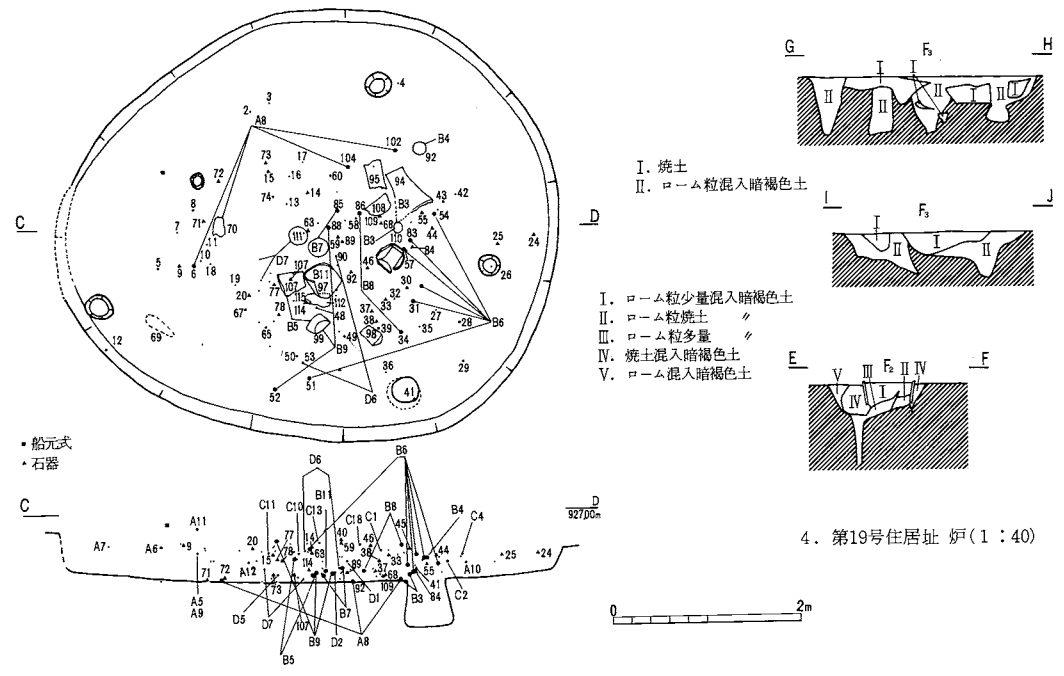
第22図　大石遺跡第15号・16号住居址実測図(1:80　但し2・4は1:40)



第23図　大石遺跡第15号住居址遺物出土状況図（1：40）

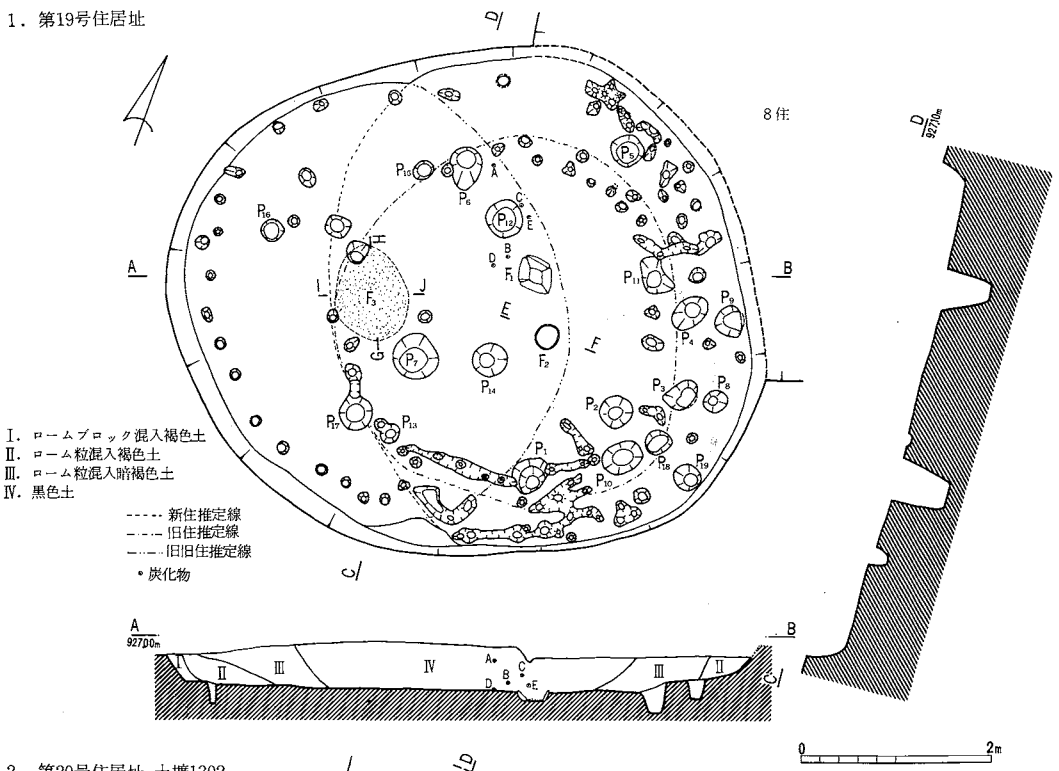


3．第17号住居址遺物出土状況図

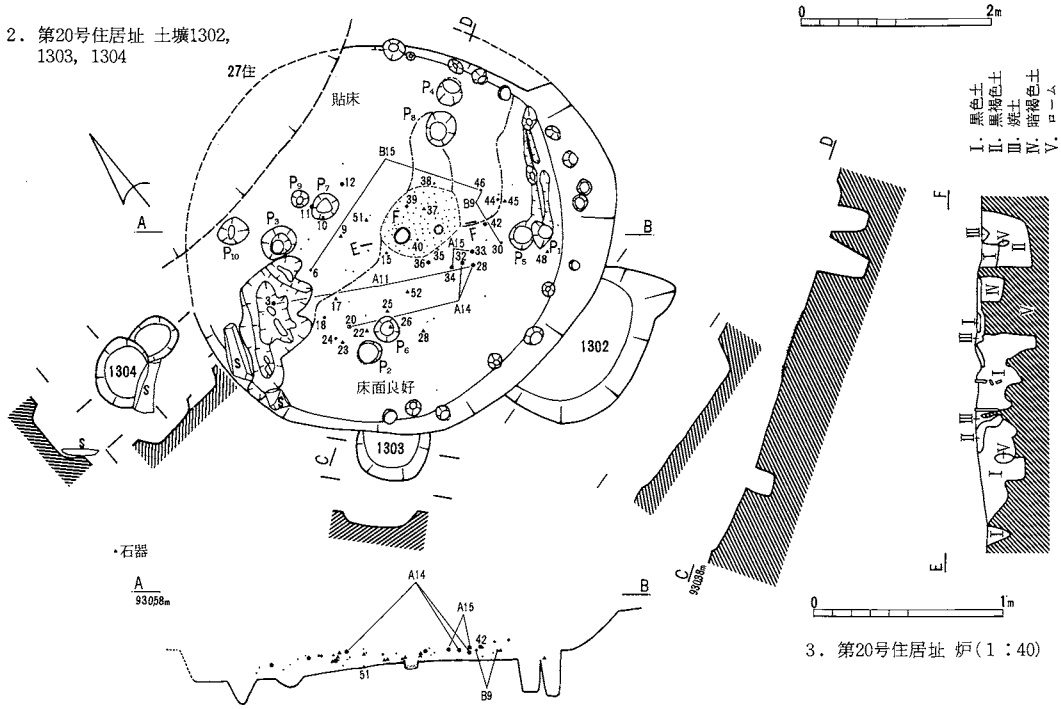


第24図　大石遺跡第17号住居址実測図(1：80　但し2は1：40)

1．第19号住居址

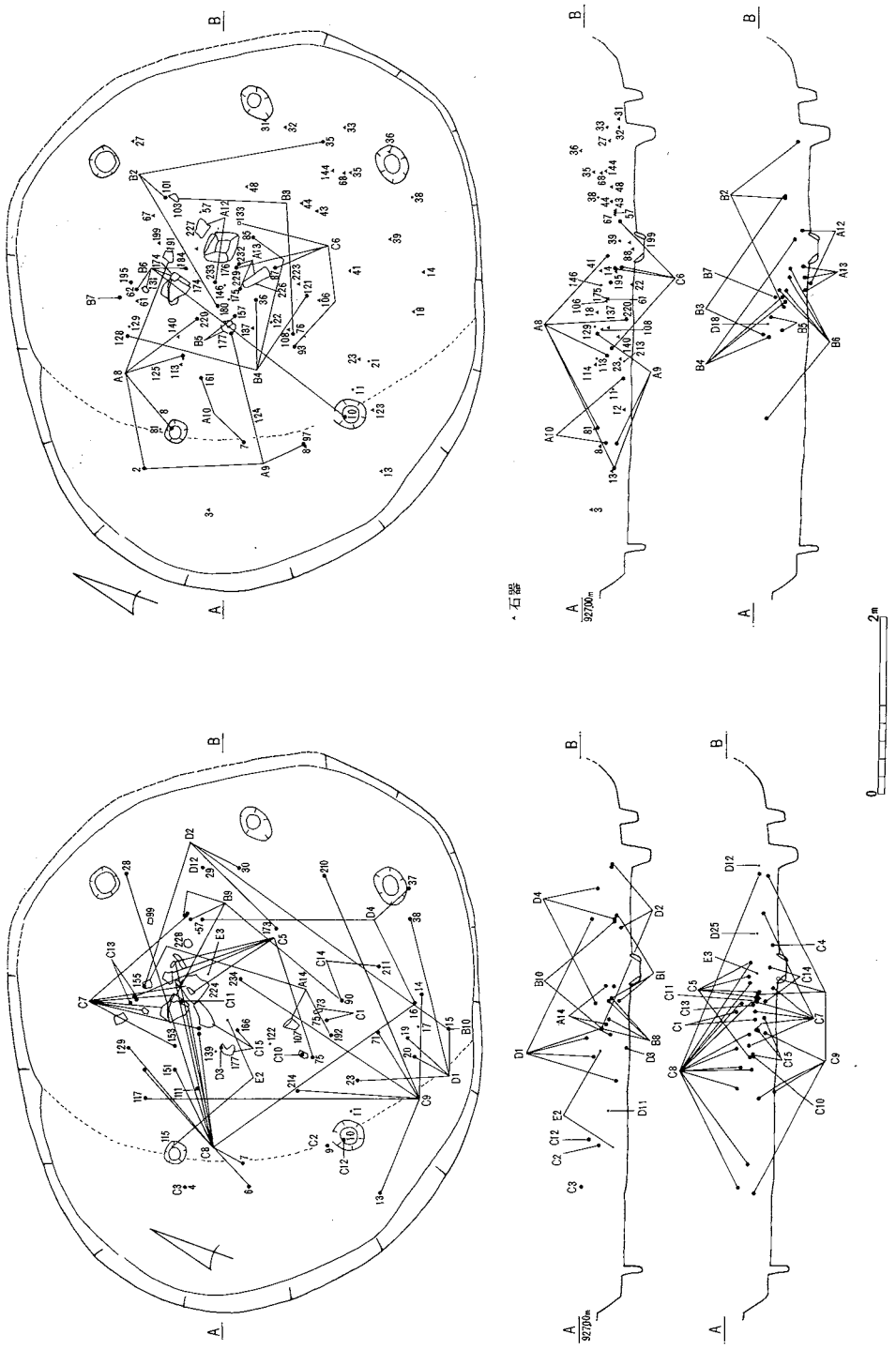


2．第20号住居址 土壙1302, 1303, 1304



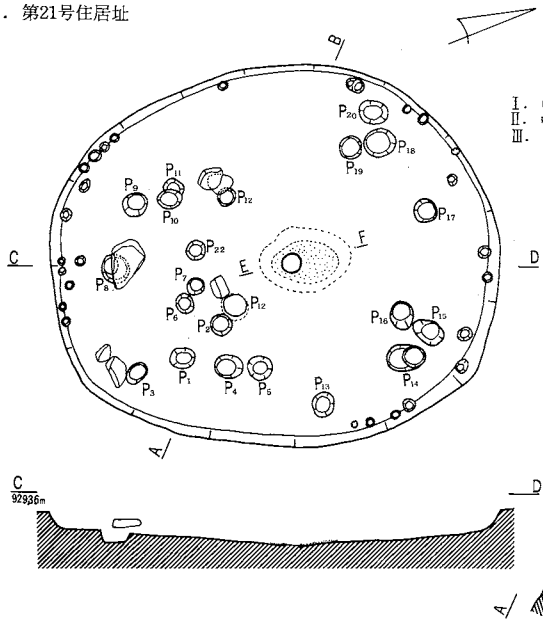
3．第20号住居址 炉（1：40）

第25図　大石遺跡第19・20号住居址土壙実測図(1：80　但し2は1：40)

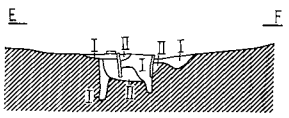


第26図　大石遺跡第19号住居址遺物出土状況図(1：80　但し2は1：40)

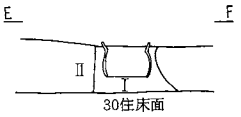
1．第21号住居址



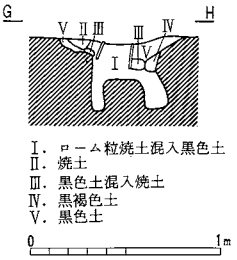
2．第21号住居址炉(1：40)



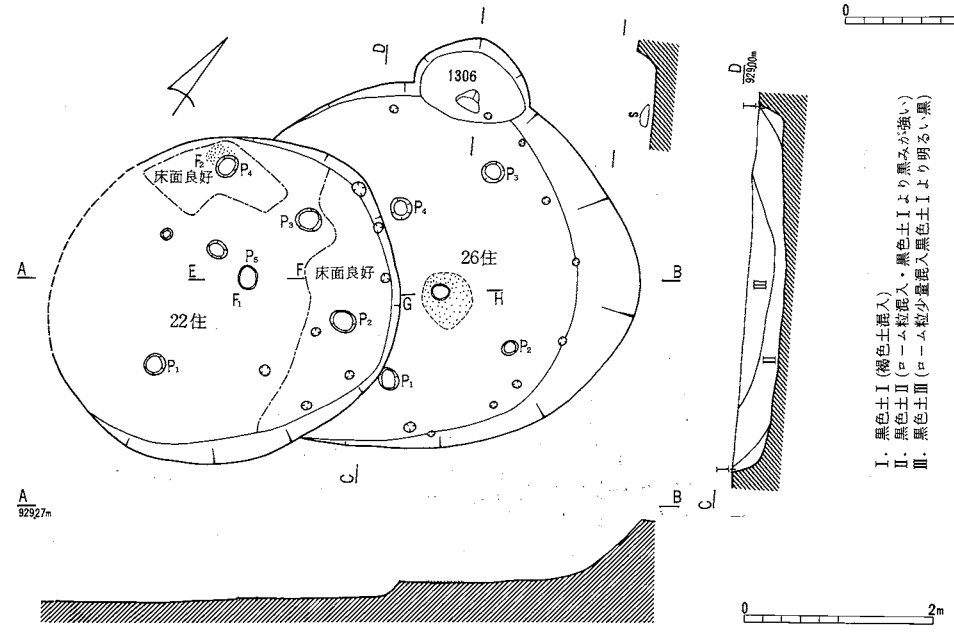
4．第22号住居址炉(1：40)



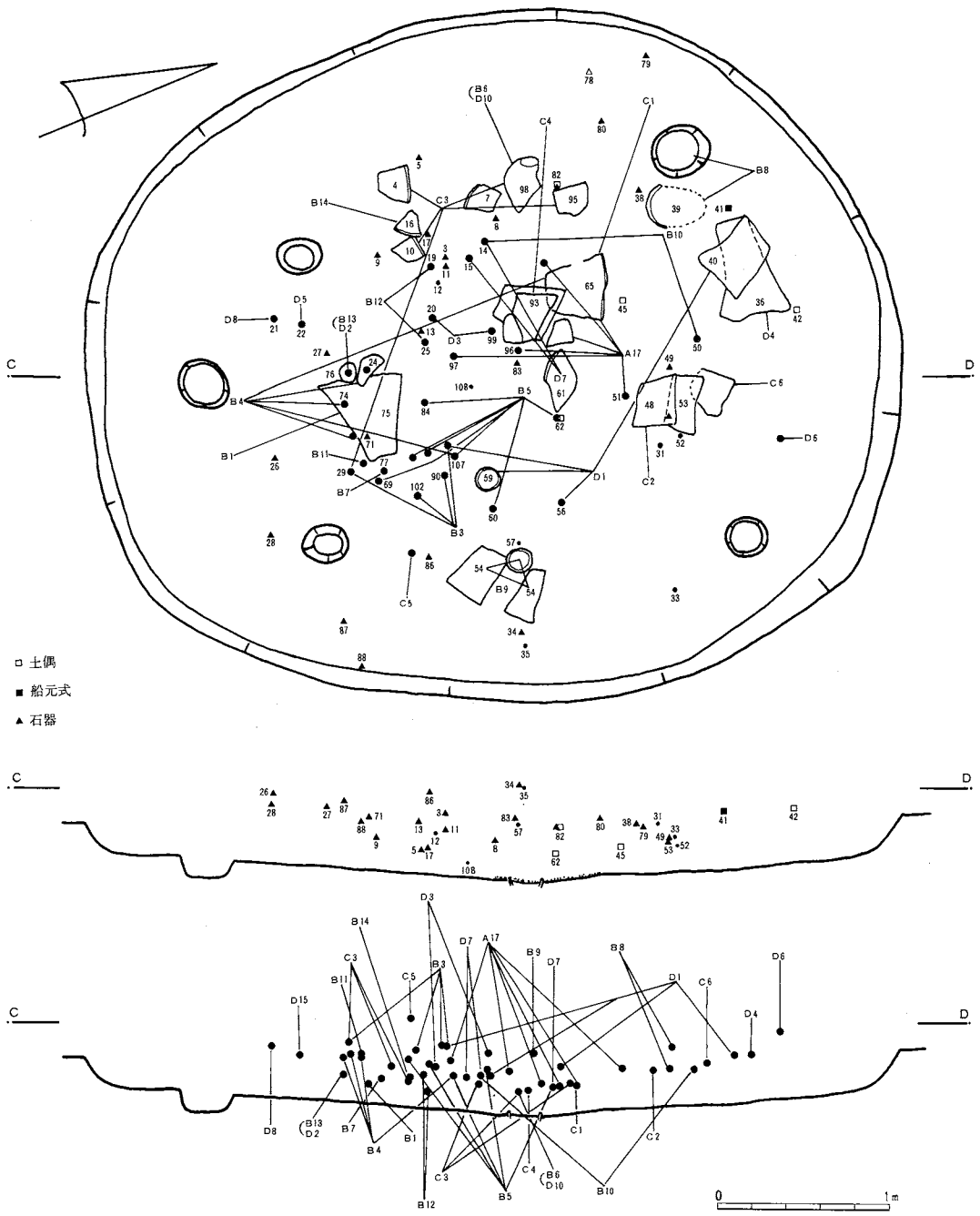
5．第26号住居址炉(1：40)



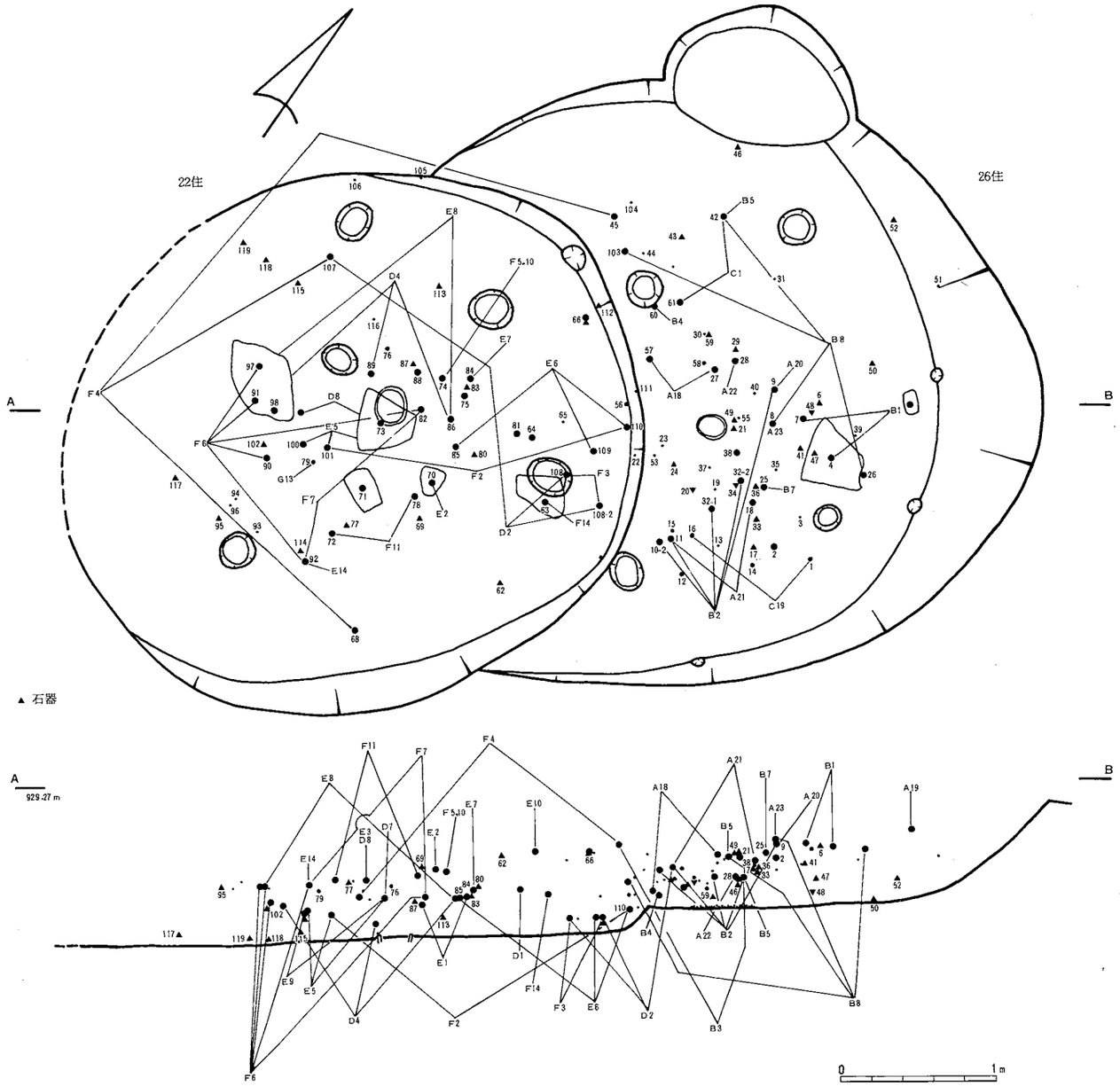
3．第22号・26号住居址・土壙1306



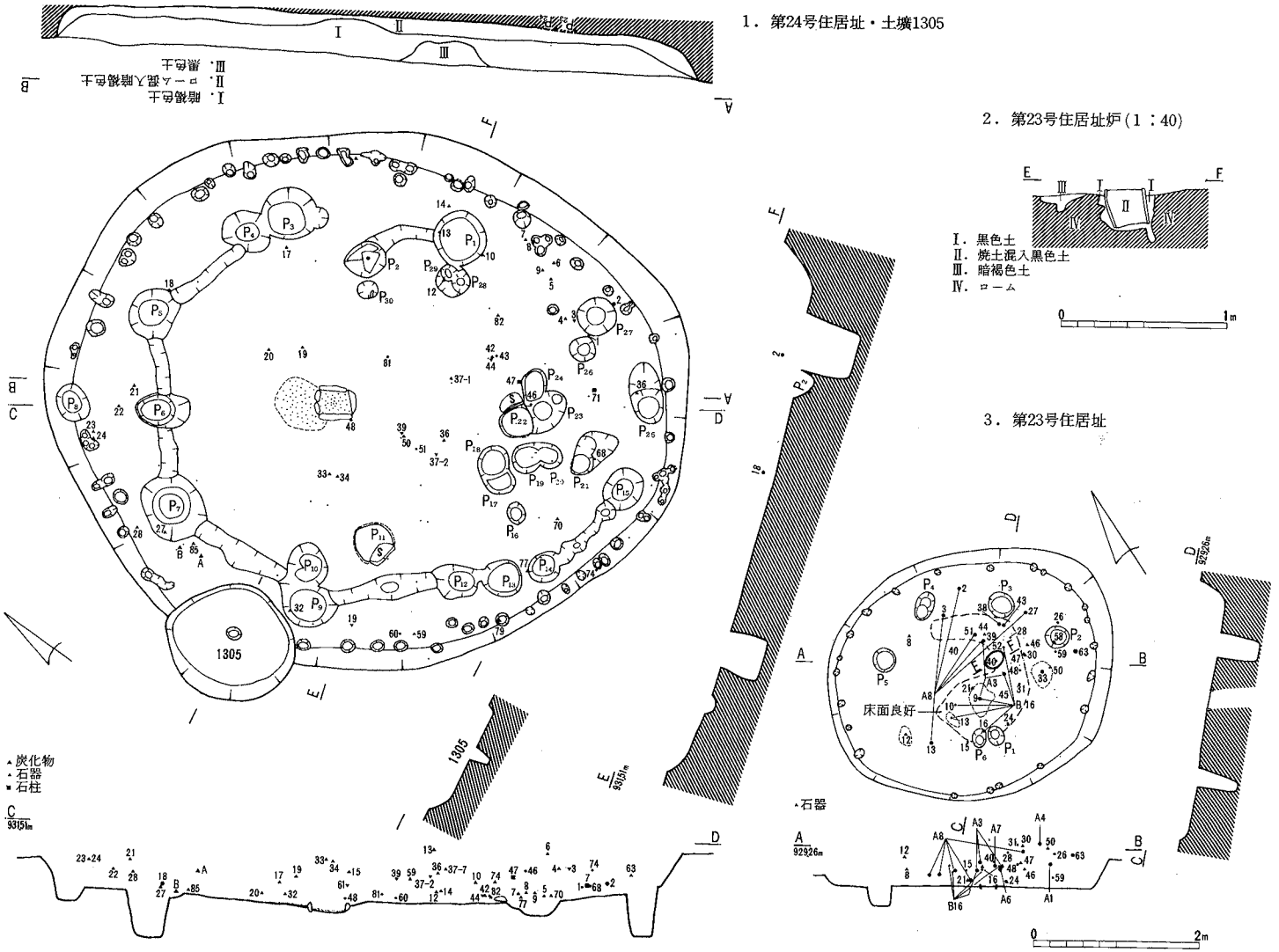
第27図　大石遺跡第21号・22号・26号住居址・土壙実測図(1：80　但し2～4は1：40)



第28図　大石遺跡第21号住居址遺物出土状況図（1：40）

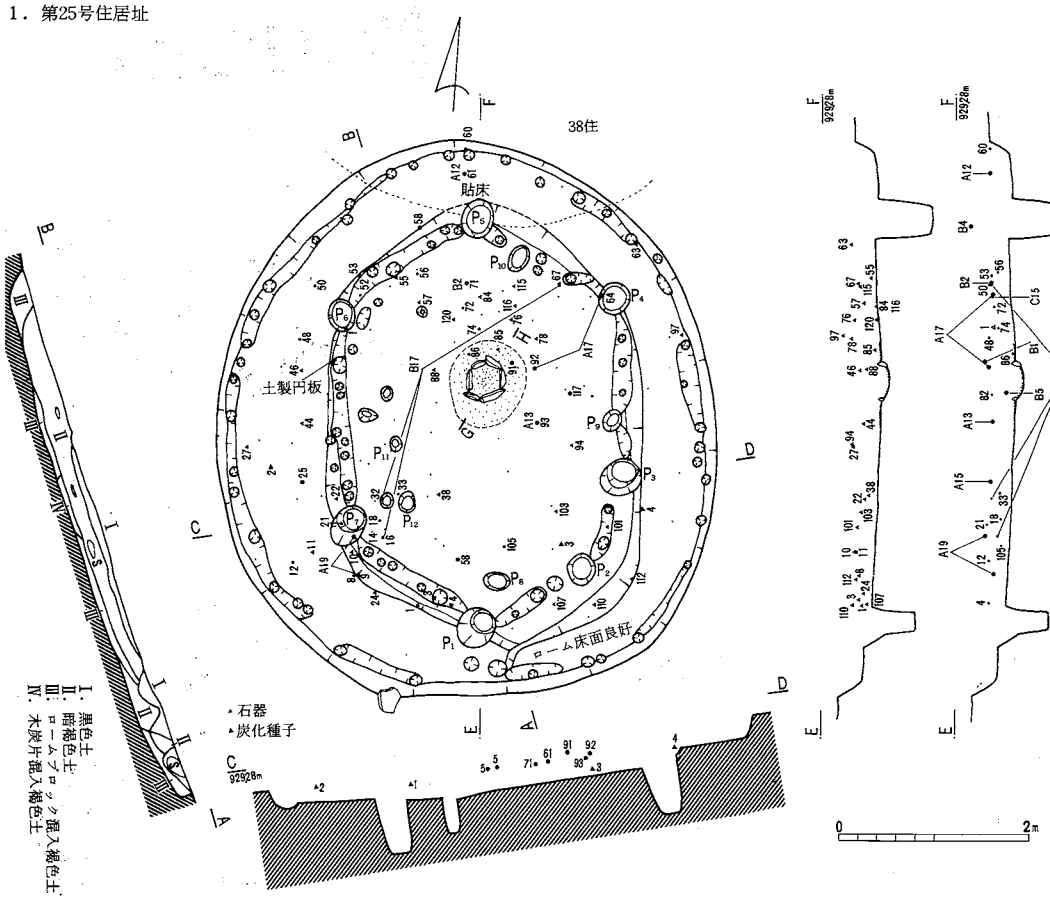


第29図　大石遺跡第22号・26号住居址遺物出土状況図　（1：40）

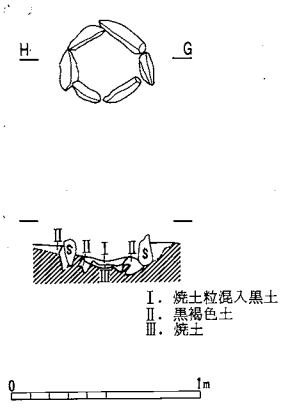


第30図　大石遺跡第23号・24号住居址土壙実測図（1：80　但し2は1：40）

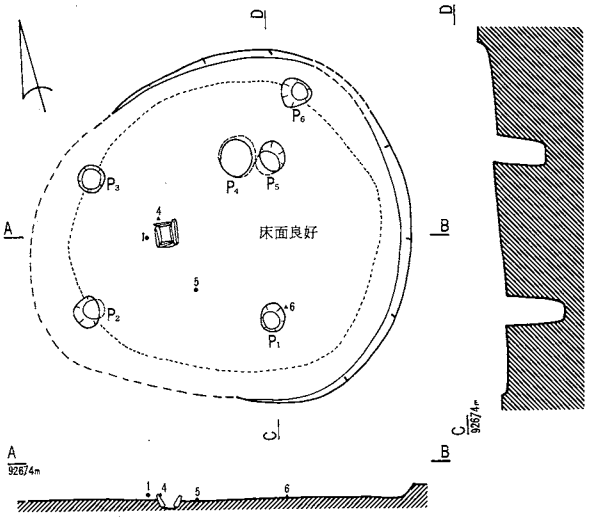
1．第25号住居址



2．第25号住居址炉(1：40)



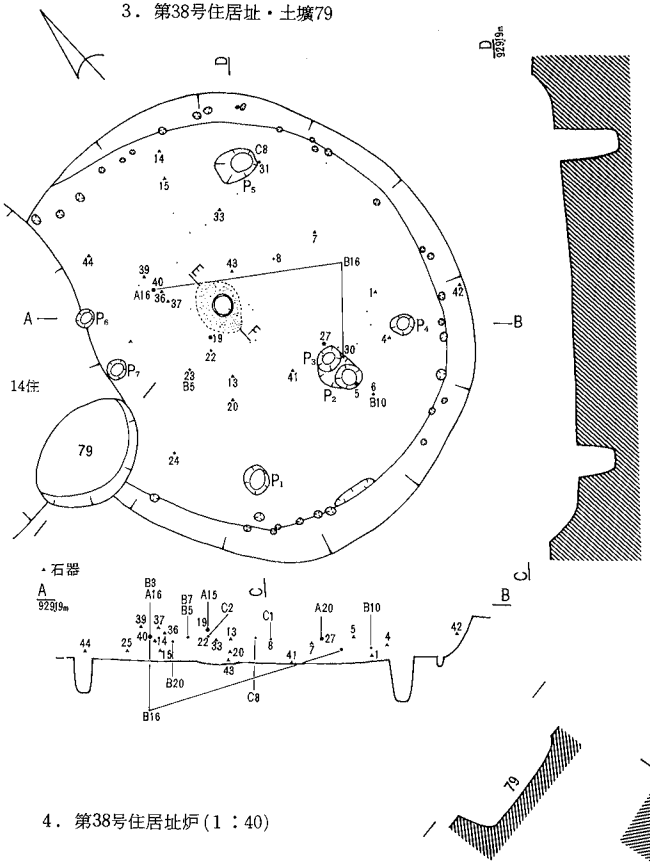
3．第35号住居址



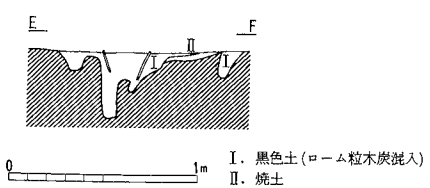
第31図　大石遺跡第25号・35号住居址実測図(1：80　但し2は1：40)

第32図　大石遺跡第36号・38号住居址実測図(1：80　但し2・3は1：40)

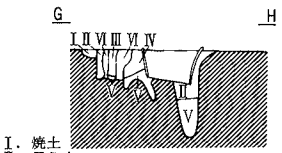
3．第38号住居址・土壙79



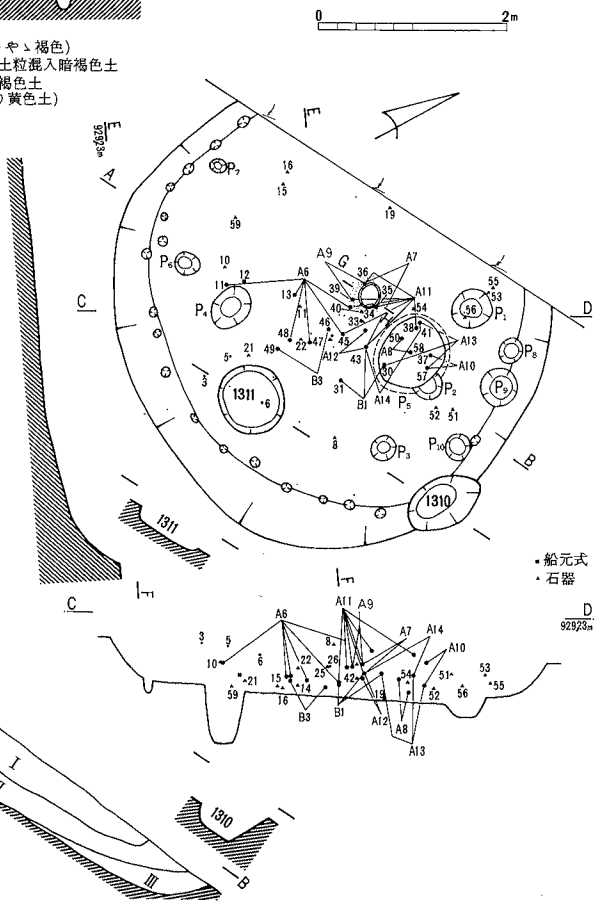
4．第38号住居址炉(1：40)



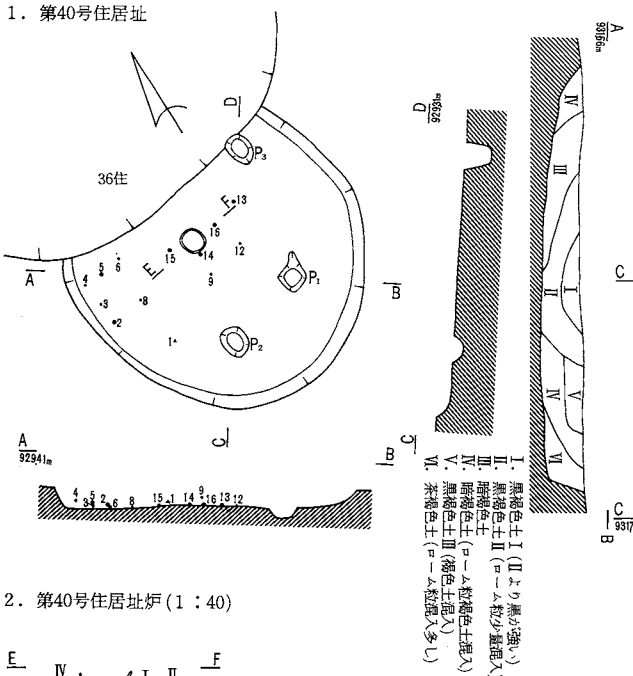
2．第36号住居址炉(1：40)



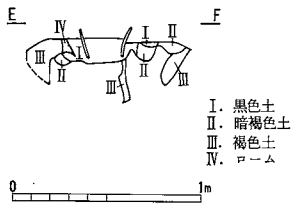
1．第36号住居址・土壙1310・1311



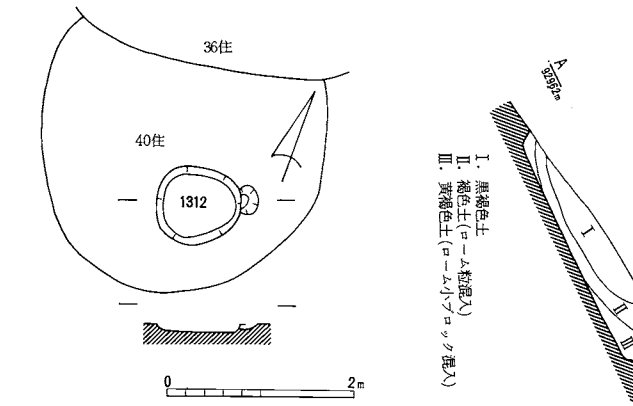
1．第40号住居址



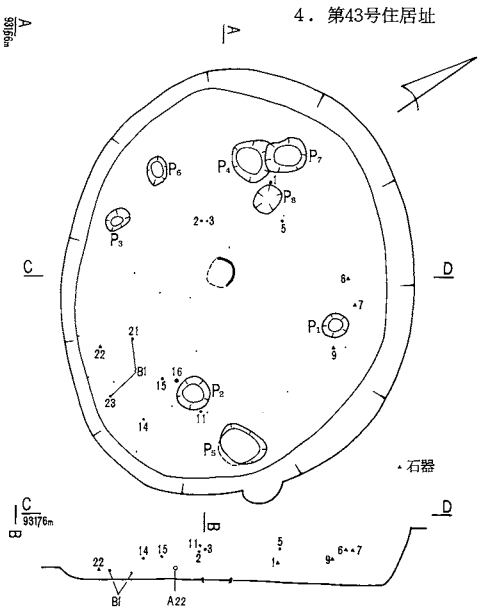
2．第40号住居址炉（1：40）



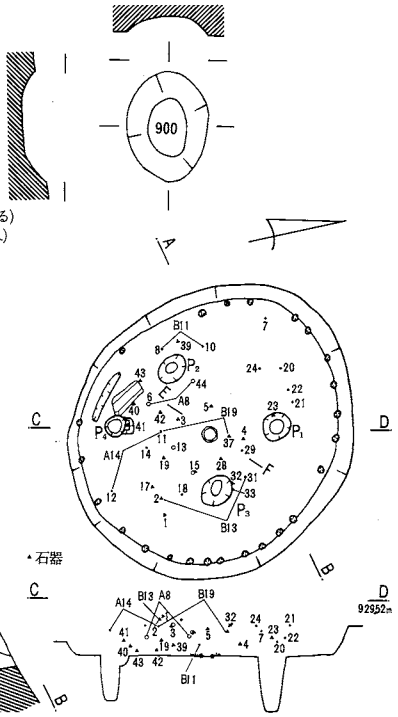
3．土壙1312



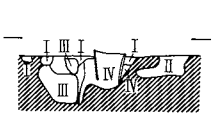
4．第43号住居址



5．第44号住居址・土壙900

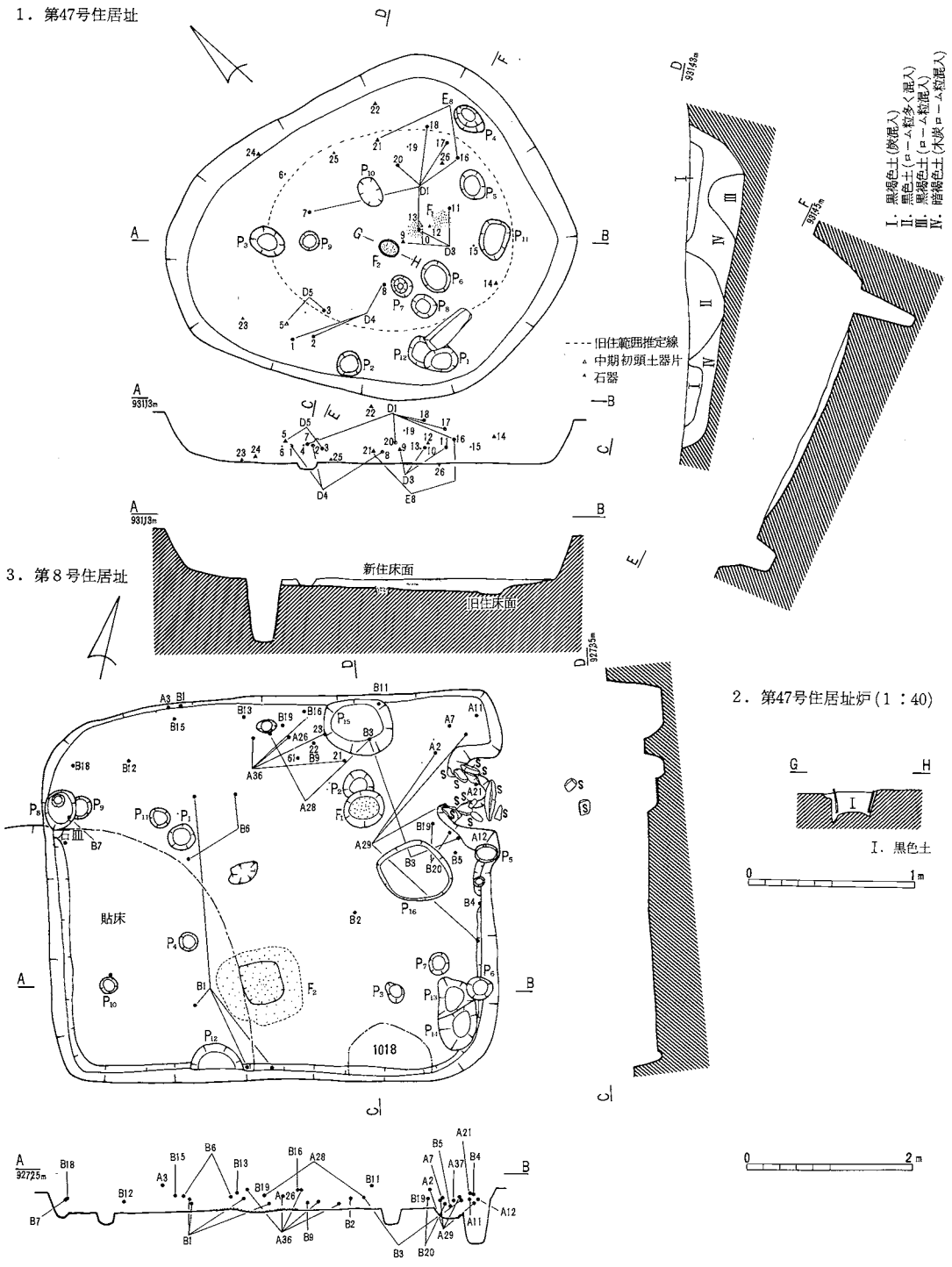


6．第44号住居址炉（1：40）



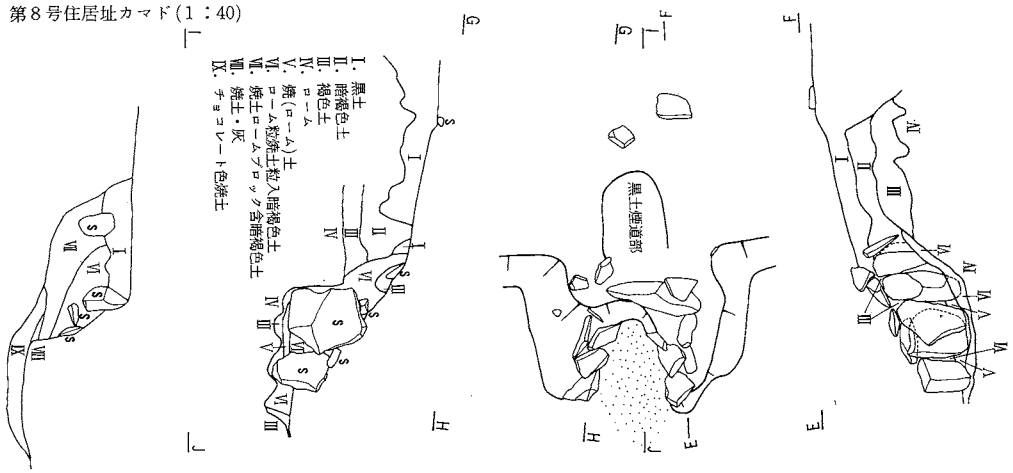
I．黒色土（焼土粒少々混入）
II．暗褐色土（ローム粒混入）
III．褐色土（黄土色がかっている）
IV．褐色土（焼土・ローム粒混入）

第33図　大石遺跡第40号・43号・44号住居址・土壙実測図（1：80　但し2・6は1：40）

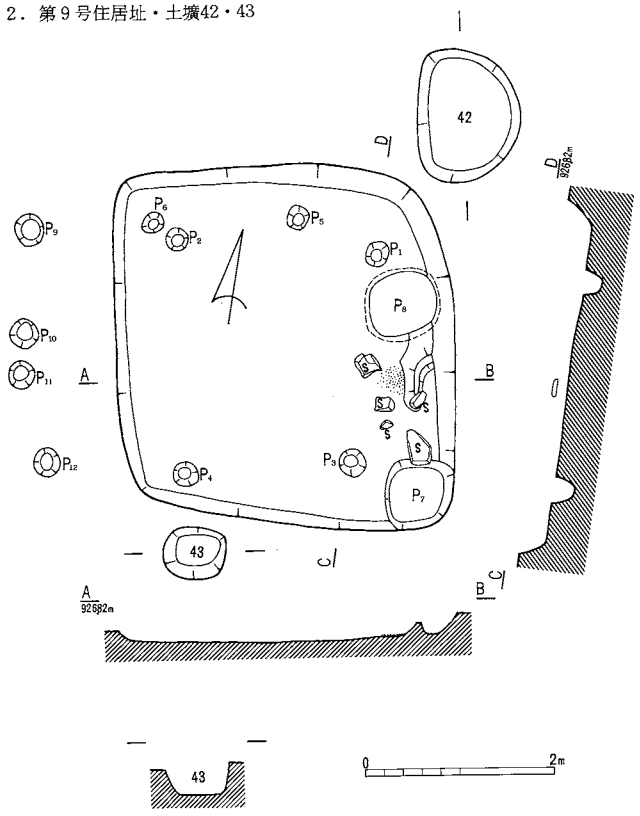


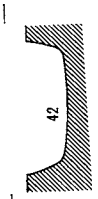
第34図　大石遺跡第47号・8号住居址実測図(1：80　但し2は1：40)

1．第８号住居址カマド(１：40)

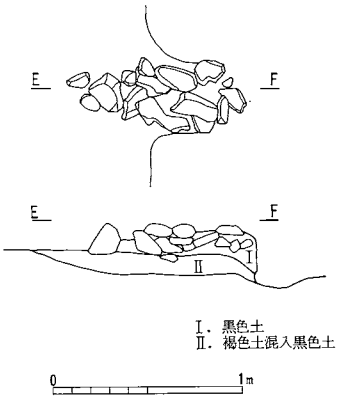


2．第９号住居址・土壙42・43



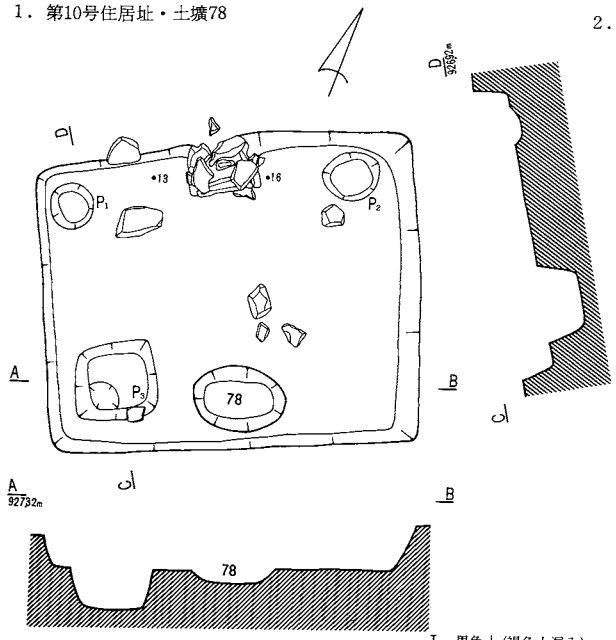


3．第９号住居址カマド(１：40)

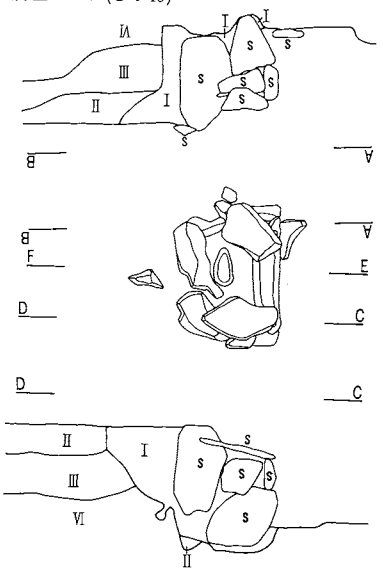


第35図　大石遺跡第８号・９号住居址・土壙実測図(１：80　但し１・３は１：40)

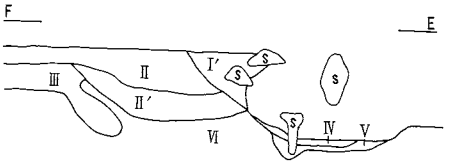
1．第10号住居址・土壙78



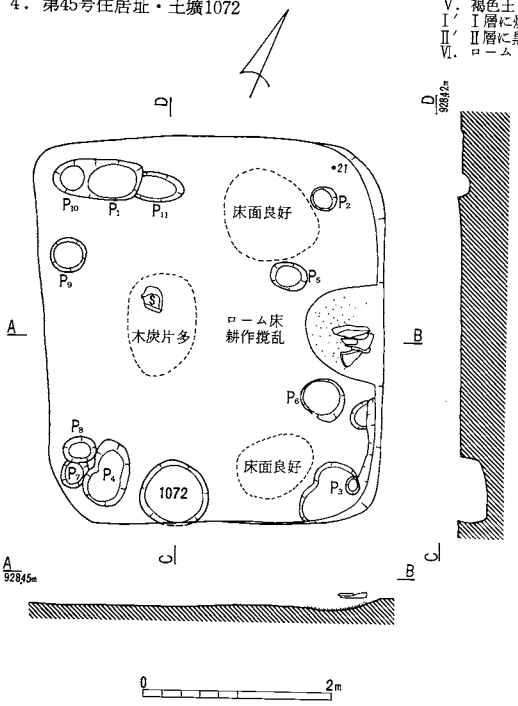
2．第10号住居址カマド(1：40)



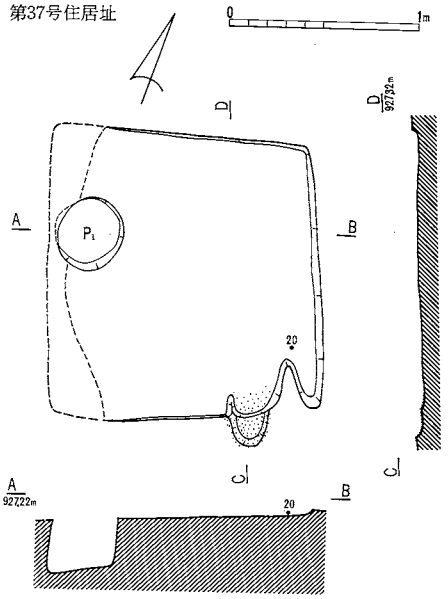
I．黒色土(褐色土混入)
II．暗褐色土
III．褐色土(黒色土混入)
IV．焼土
V．褐色土(焼土混入)
I′ I層に焼土が混入
II′ II層に黒色土混入
VI．ローム



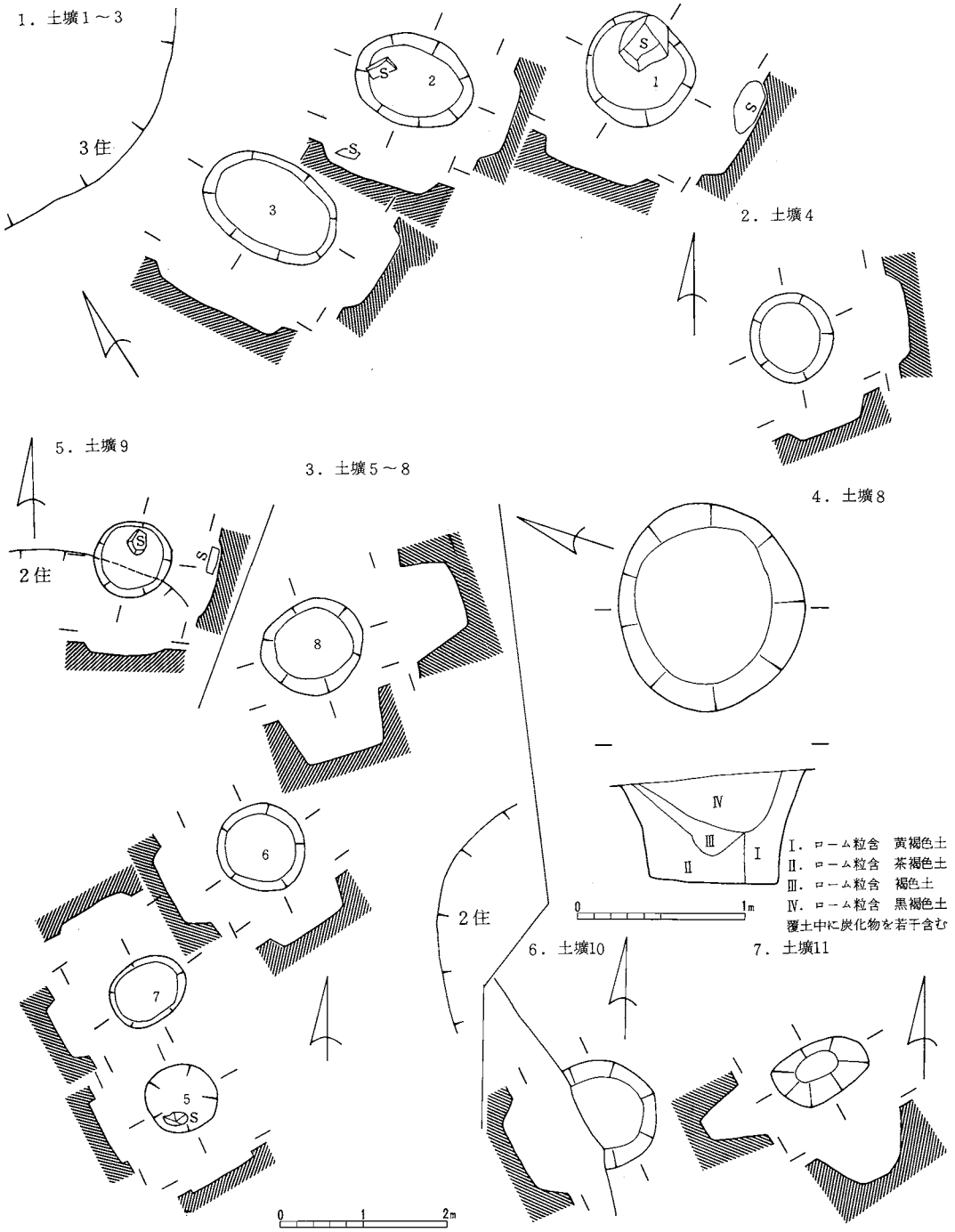
4．第45号住居址・土壙1072



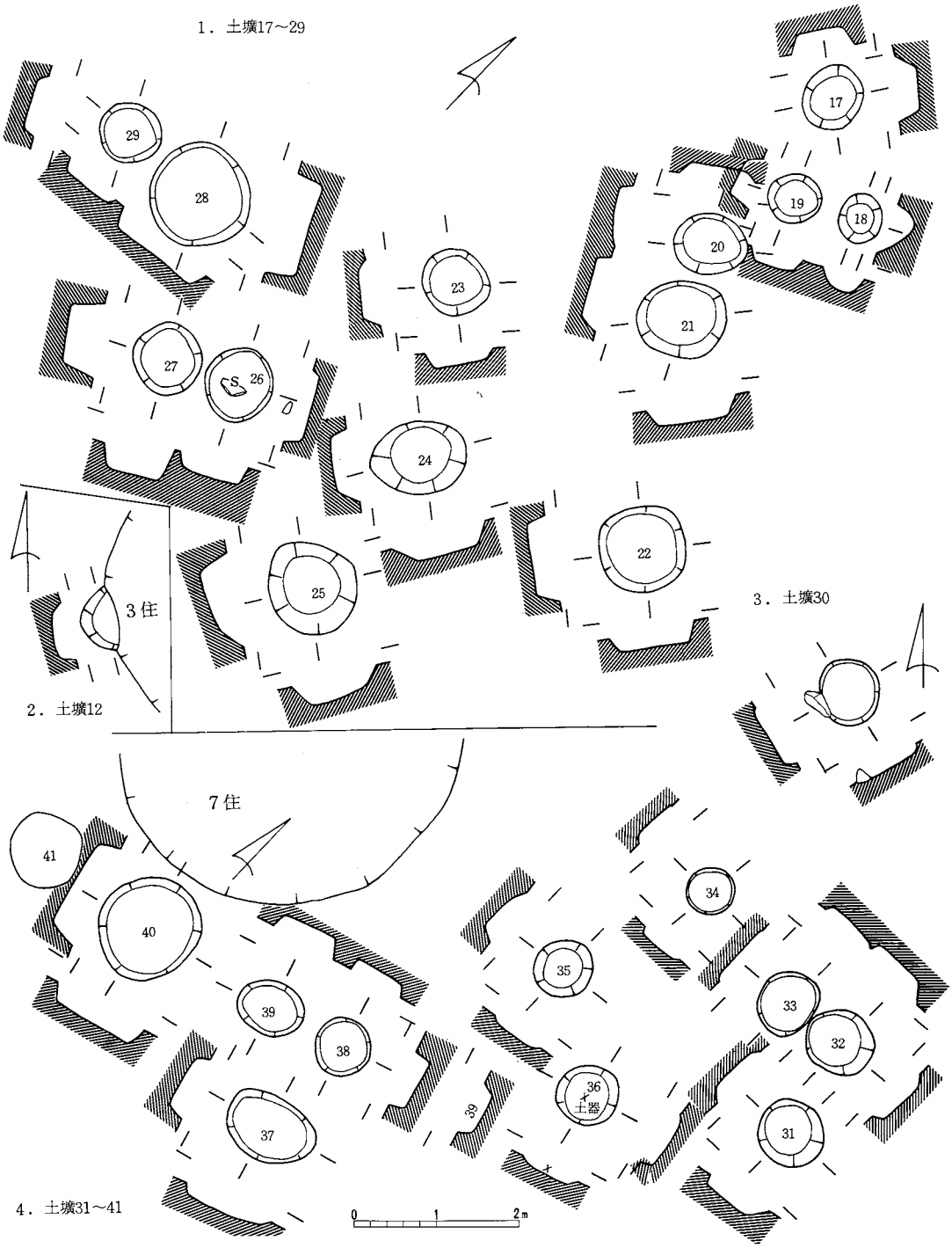
3．第37号住居址



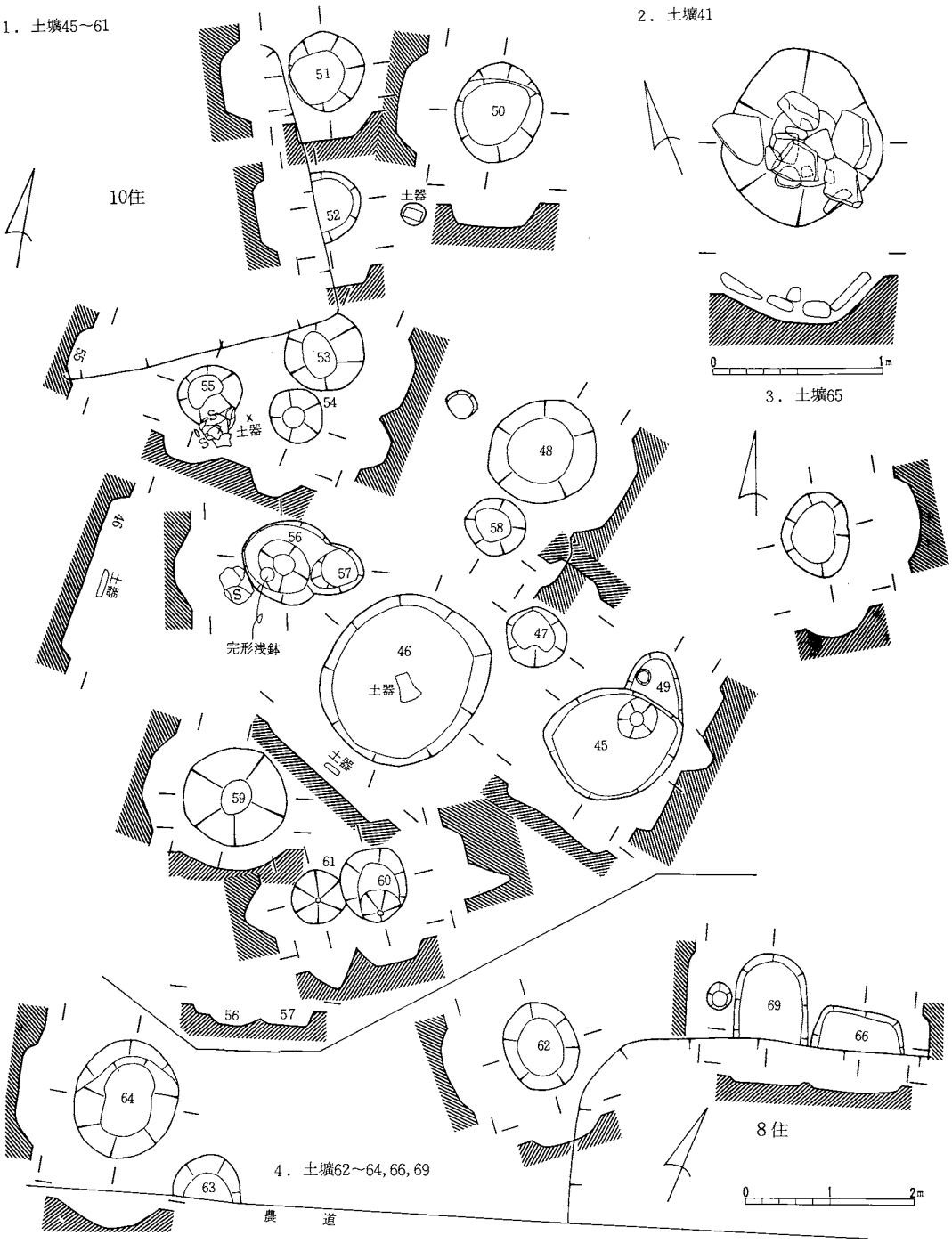
第36図　大石遺跡第10号・37号・45号住居址実測図(1：80　但し2は1：40)



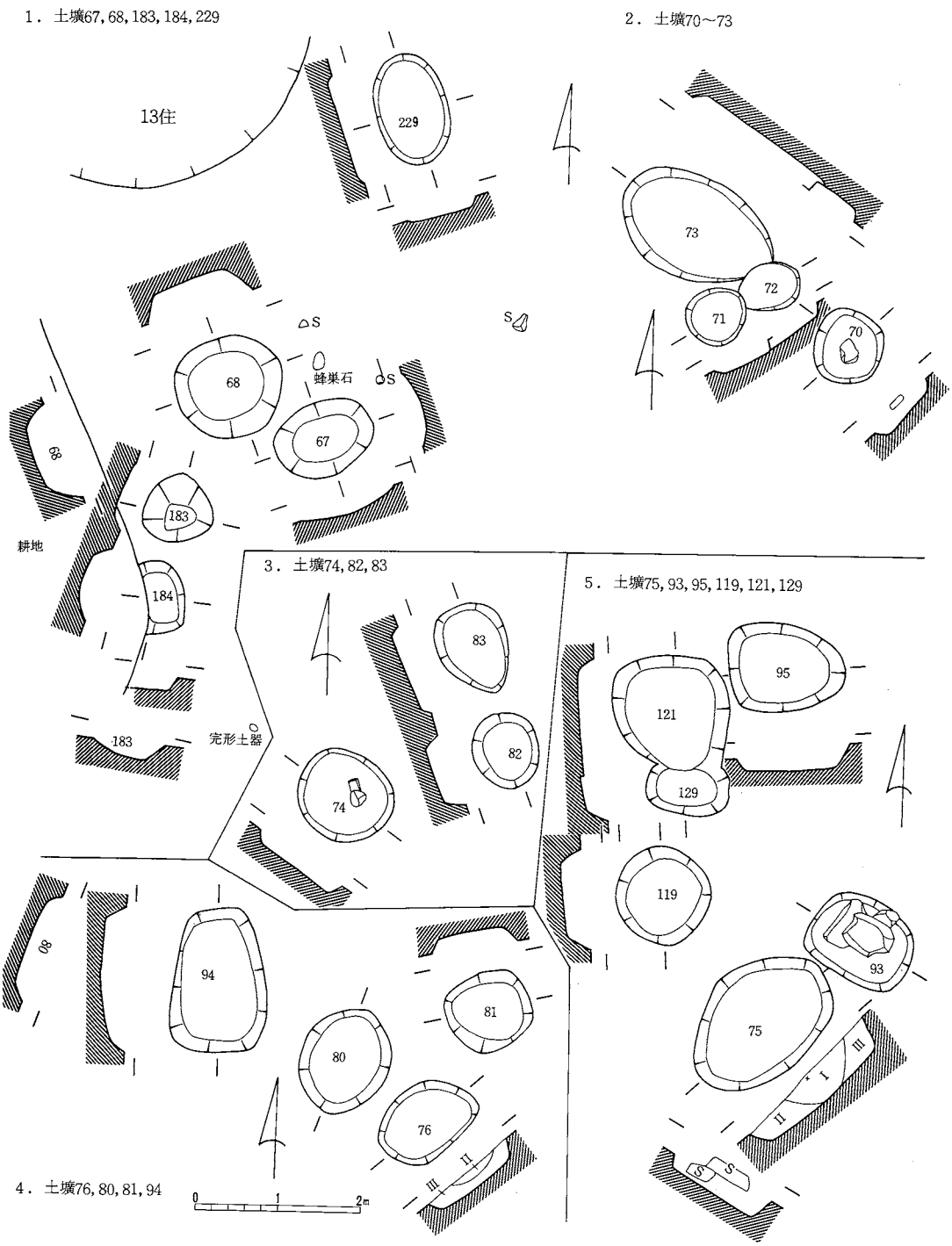
第37図　大石遺跡土壙実測図(その１)（1：80 但し4は1：40）



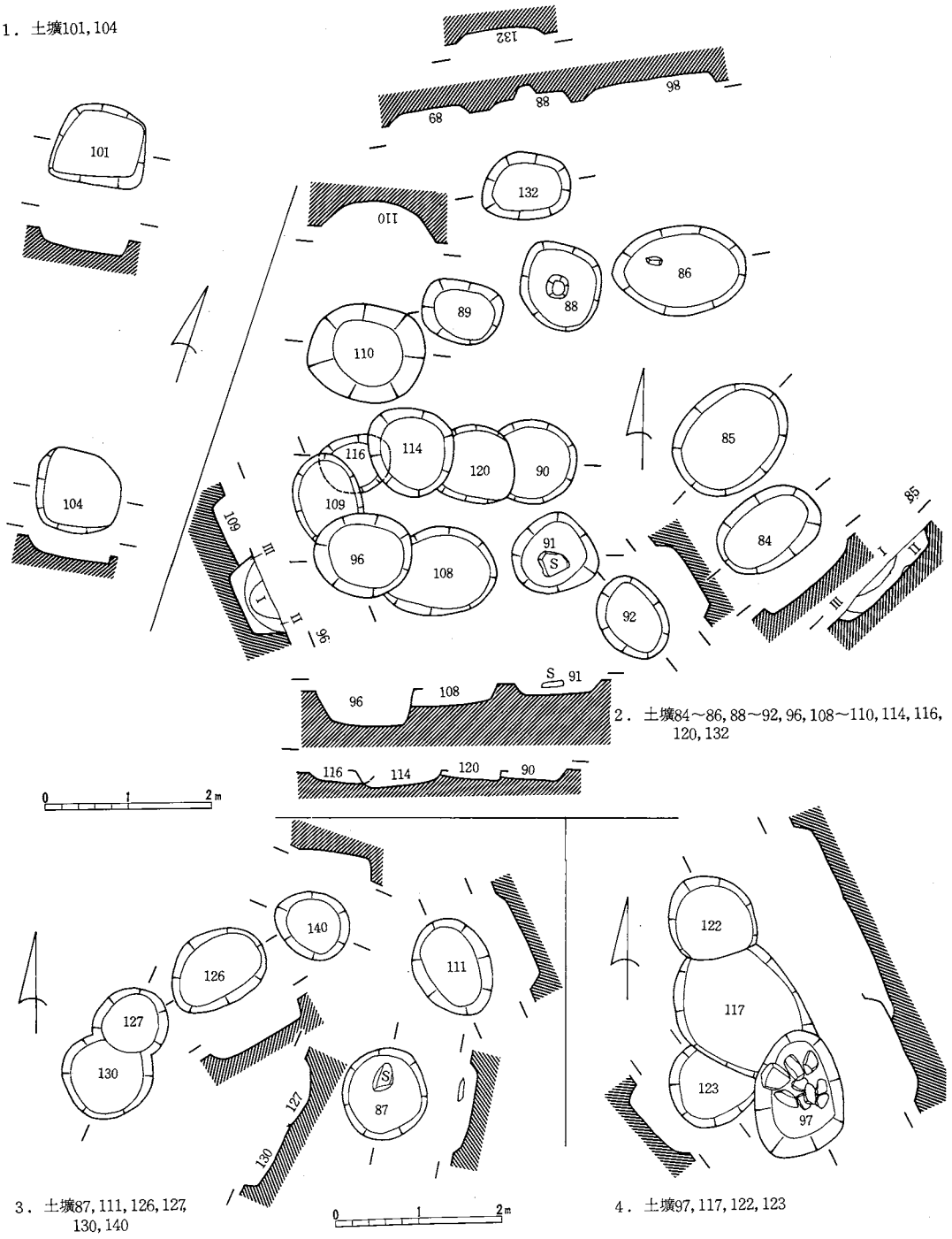
第38図　大石遺跡土壙実測図(その２)(1：80)



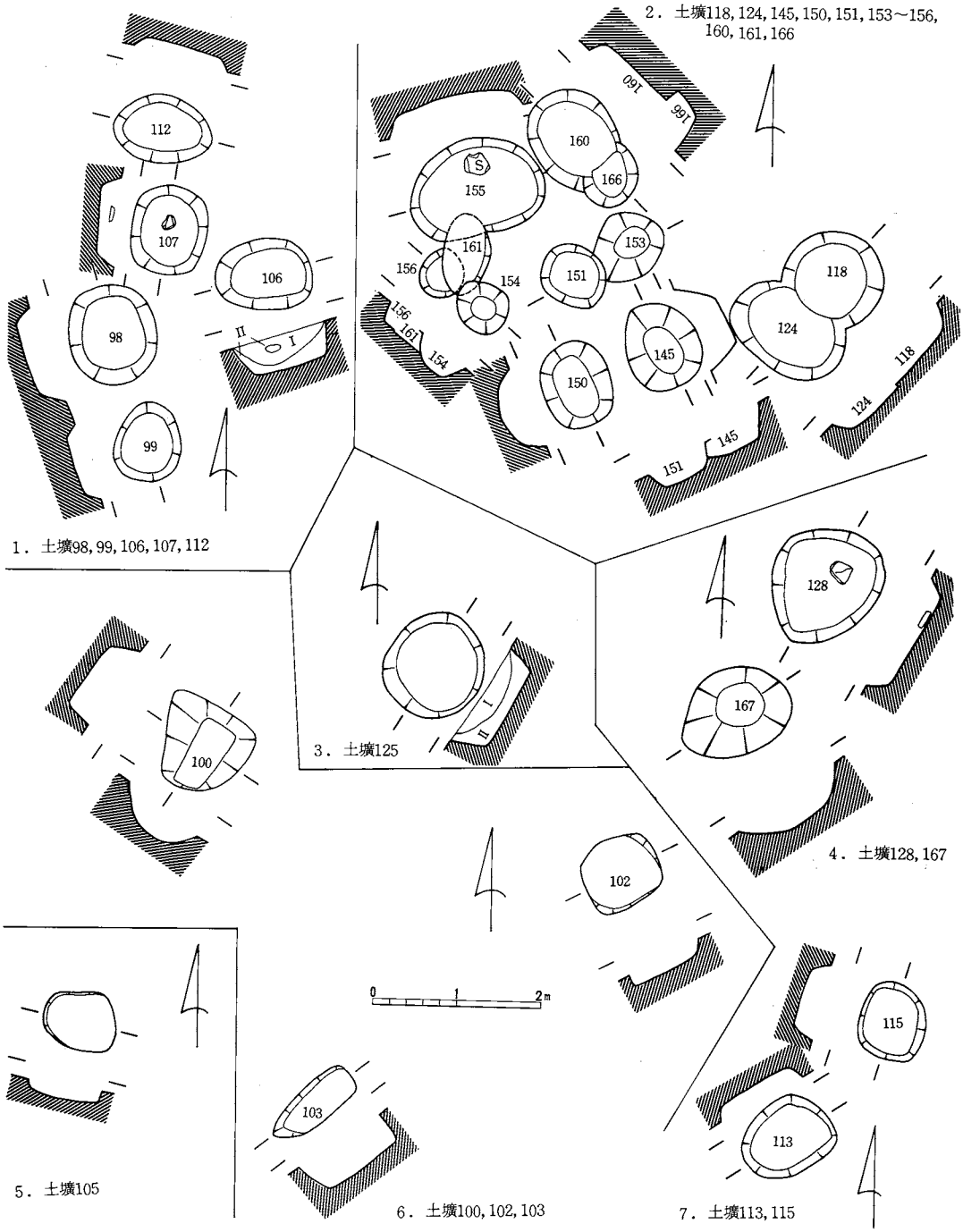
第39図　大石遺跡土壙実測図(その３)（1：80 但し2は1：40）



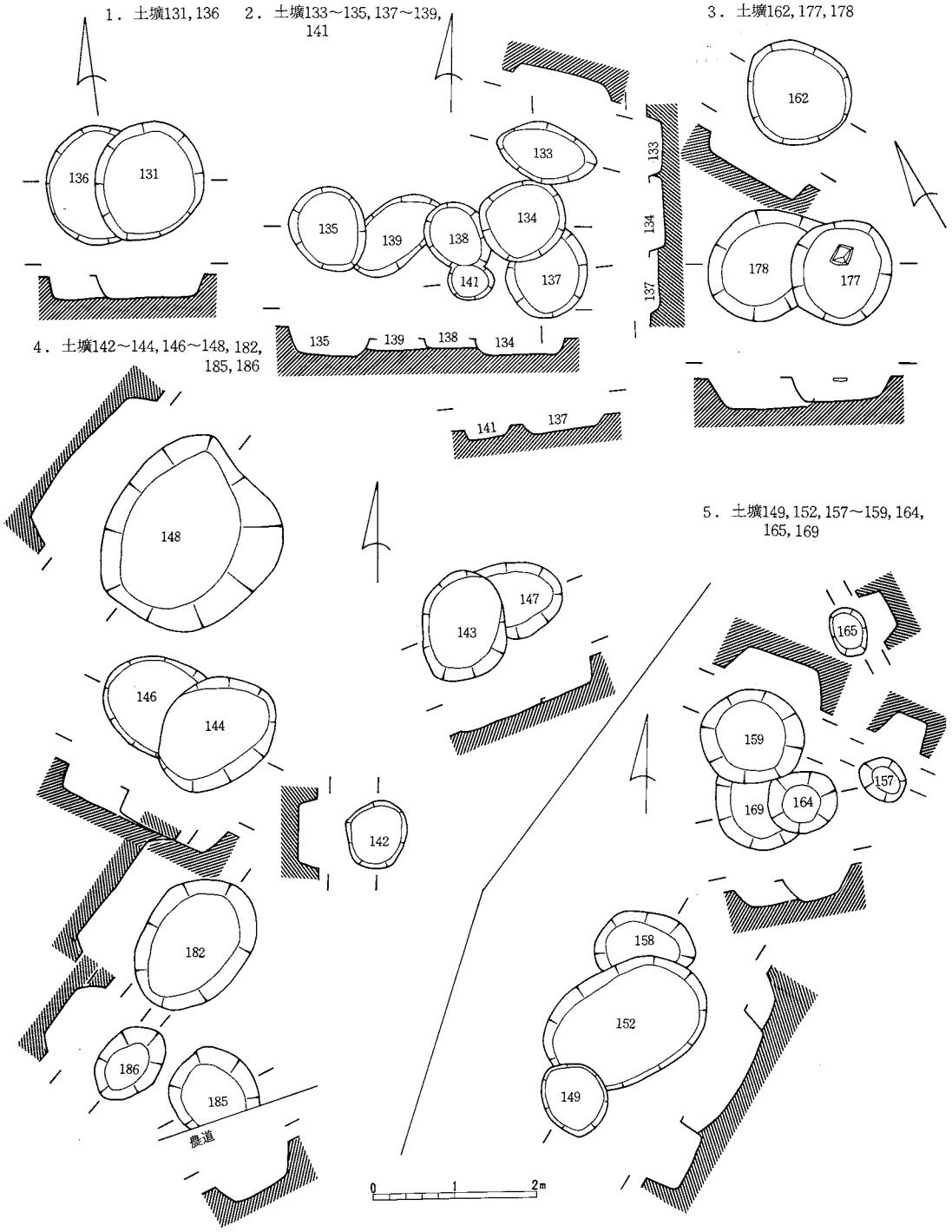
第40図　大石遺跡土壙実測図(その４)（1：80）



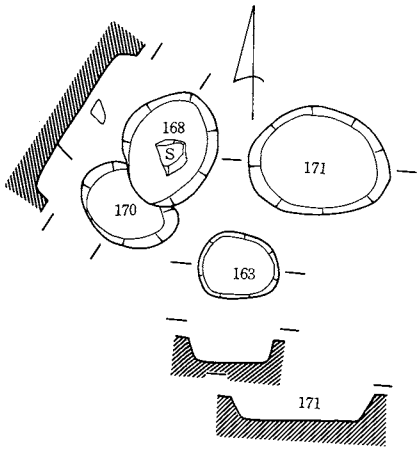
第41図　大石遺跡土壙実測図（その５）（1：80）



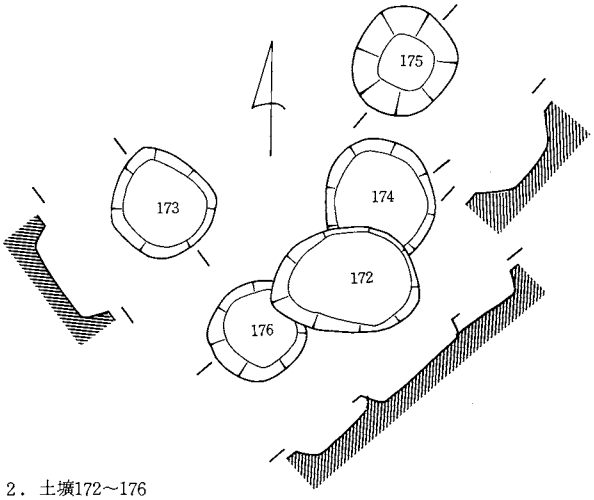
第42図　大石遺跡土壙実測図(その６)（1：80）



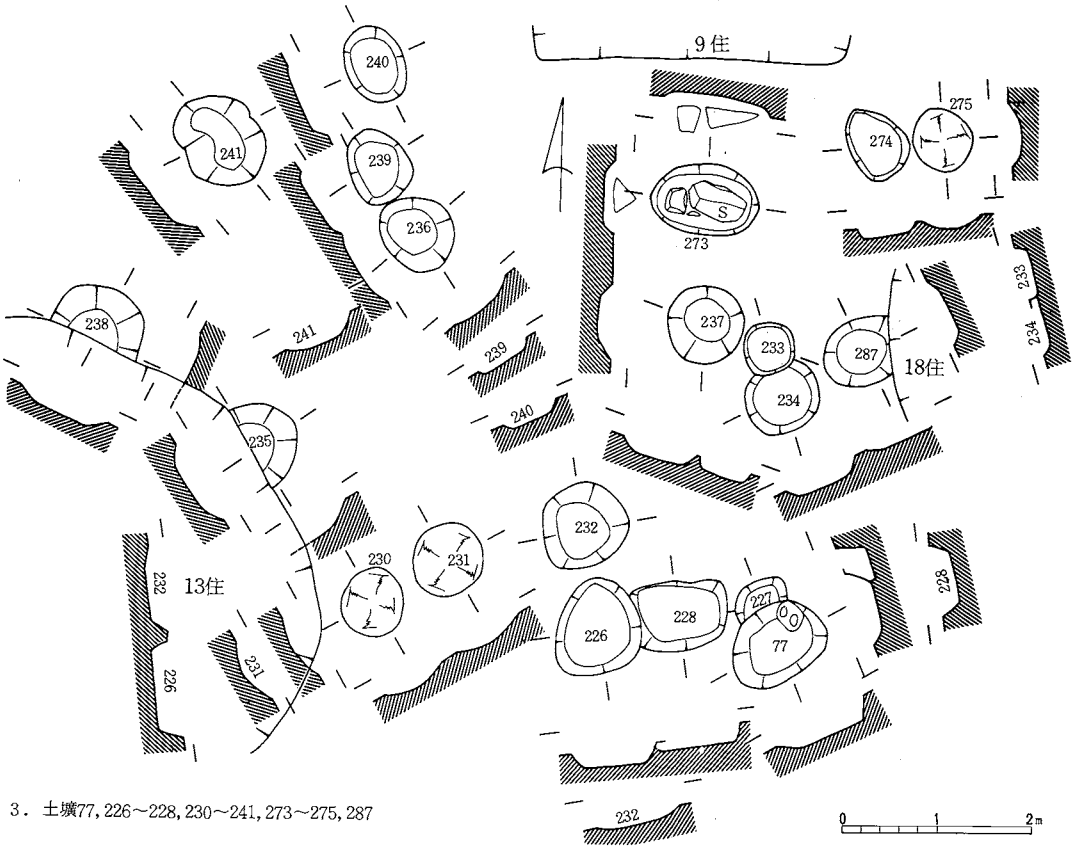
第43図　大石遺跡土壙実測図(その７)(1：80)



1．土壙163, 168, 170, 171

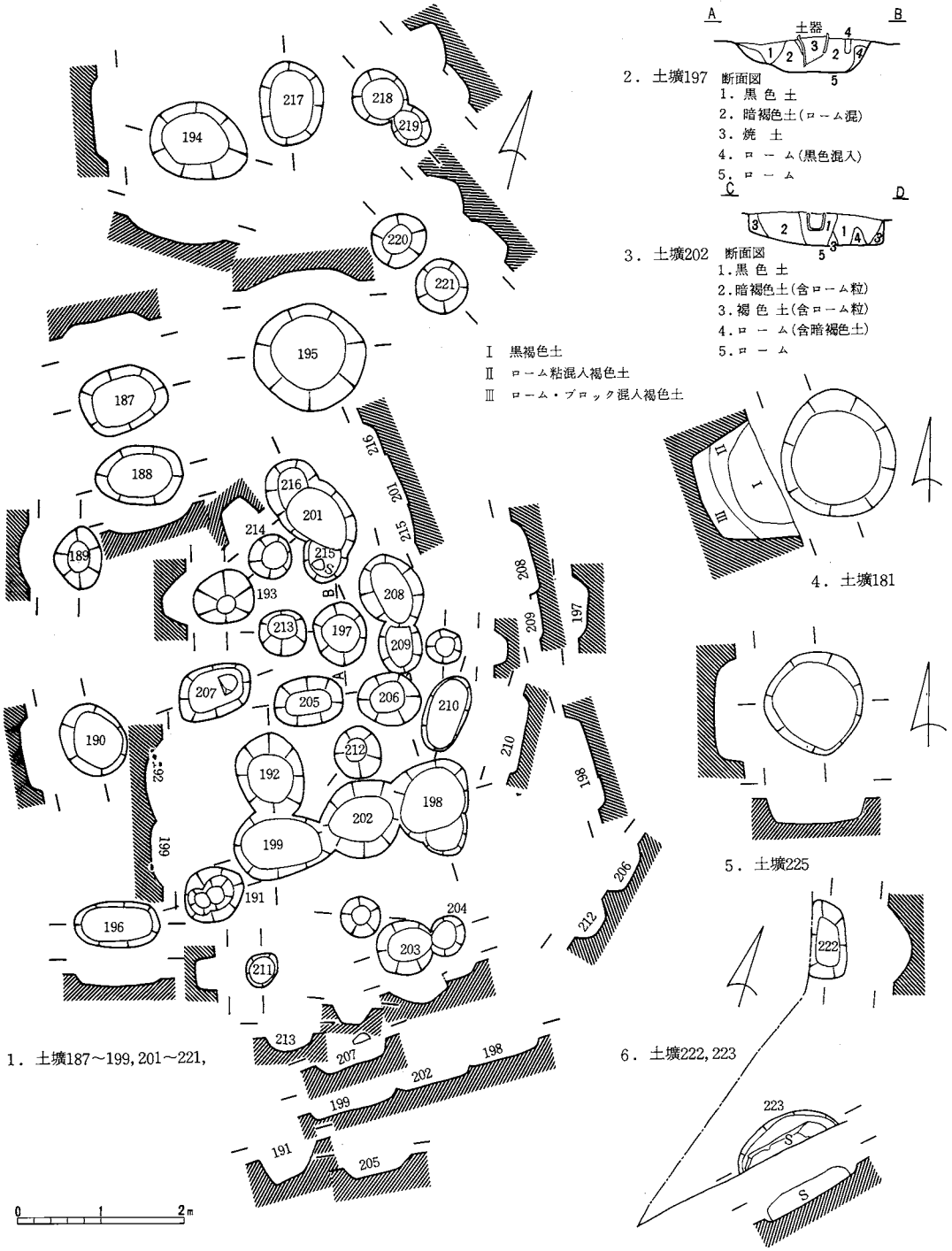


2．土壙172～176

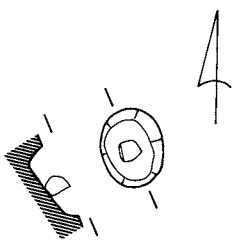


3．土壙77, 226～228, 230～241, 273～275, 287

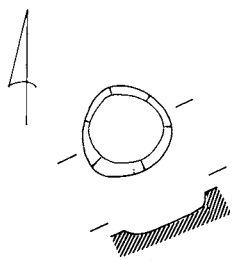
第44図　大石遺跡土壙実測図(その８)（1：80）



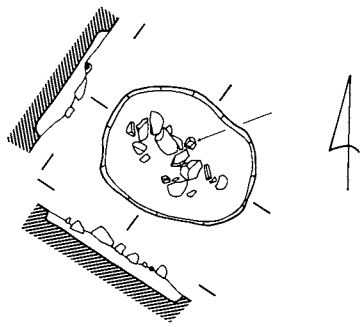
第45図　大石遺跡土壙実測図(その９)(1：80 但し2・3は1：40)



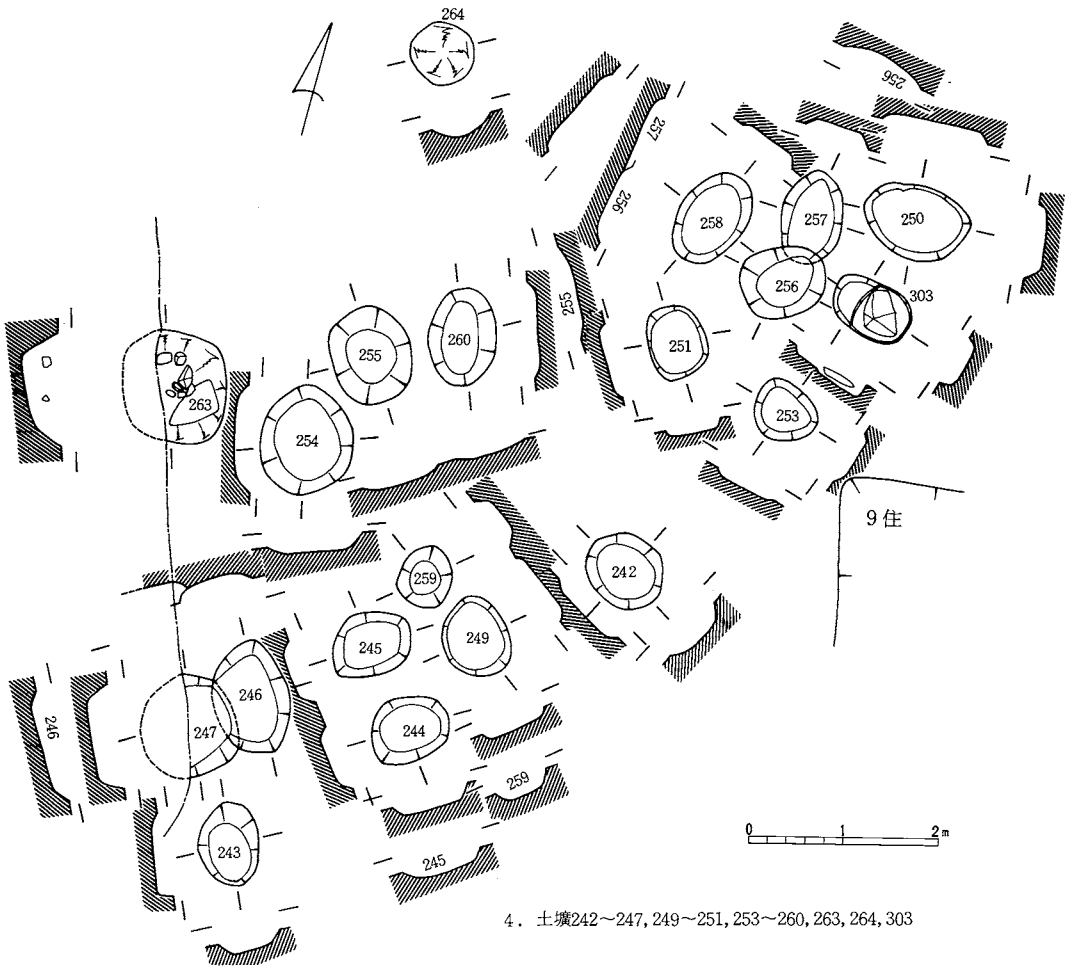
1．土壙200



2．土壙224

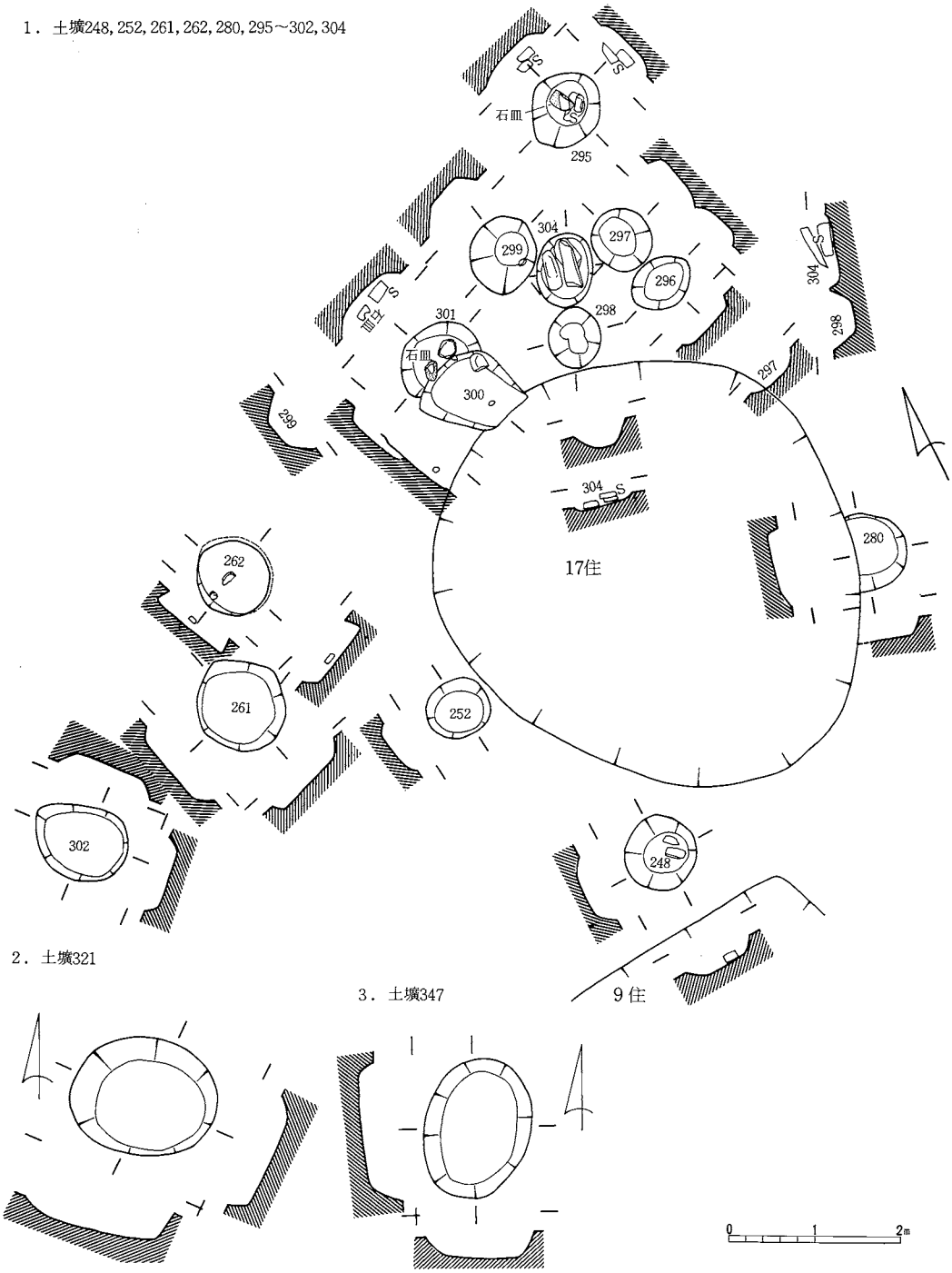


3．土壙283

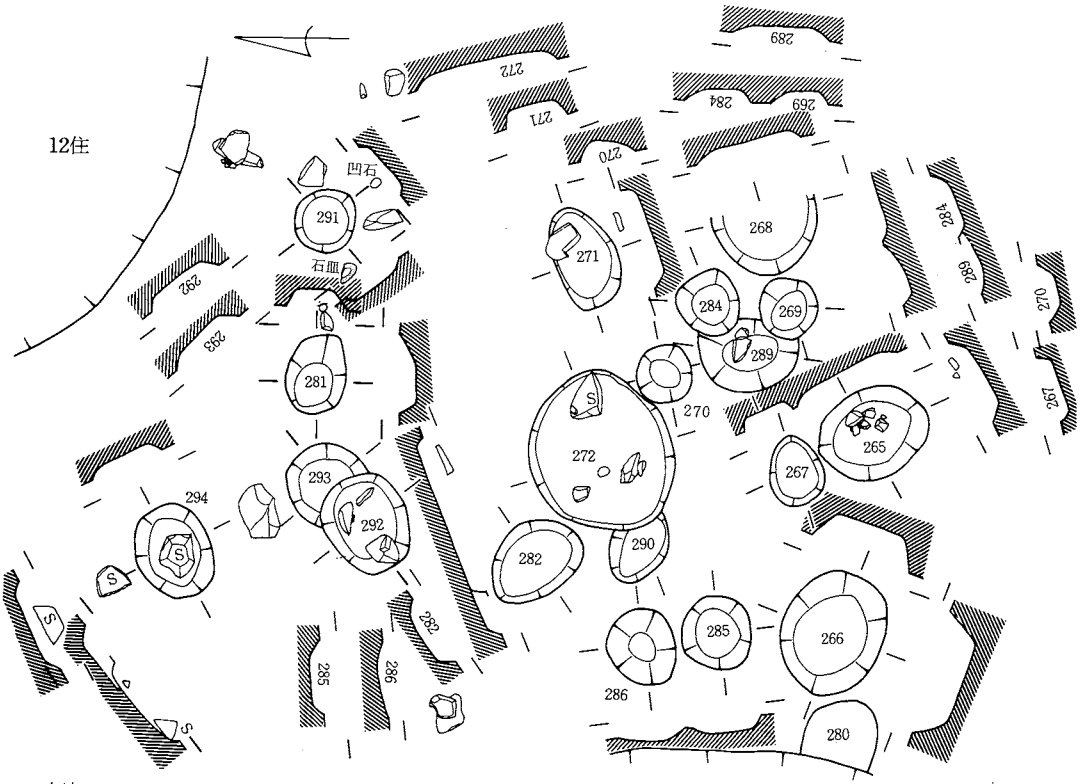


4．土壙242～247, 249～251, 253～260, 263, 264, 303

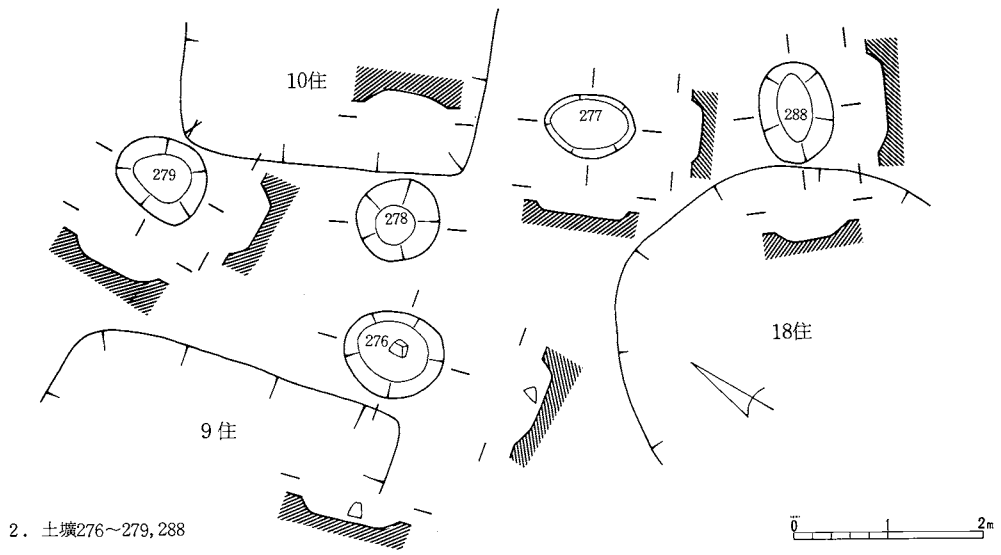
第46図　大石遺跡土壙実測図(その10)（1：80）



第47図　大石遺跡土壙実測図(その11)（1：80）

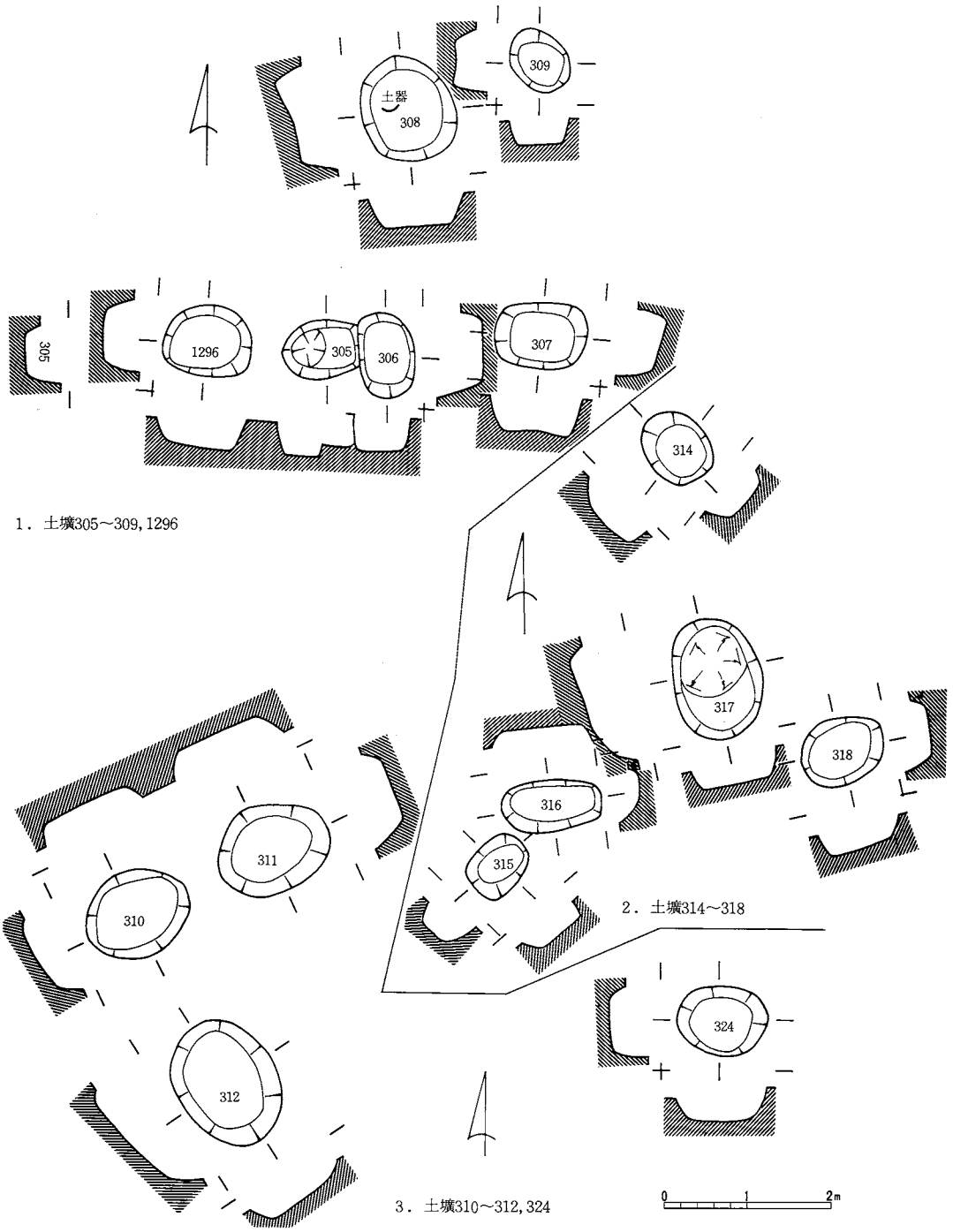


1　土壙265～272, 280～282, 284～286, 289～294

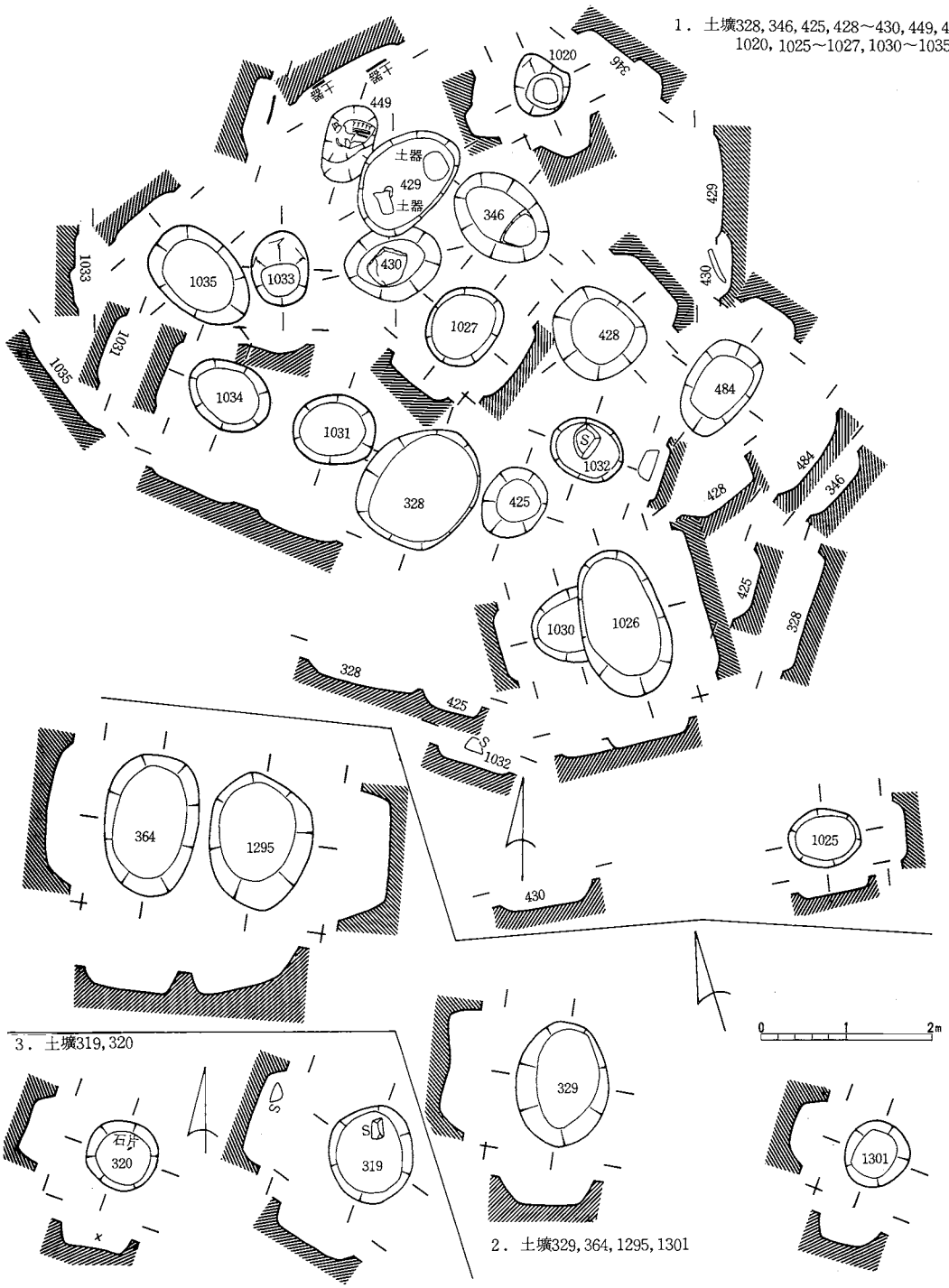


2．土壙276～279, 288

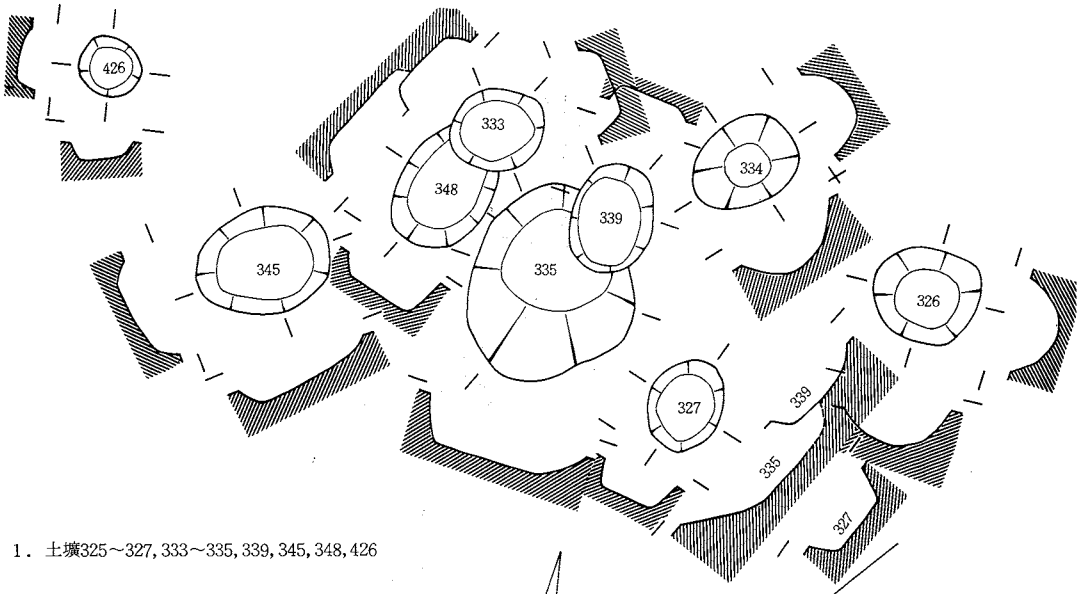
第48図　大石遺跡土壙実測図(その12)（1：80）



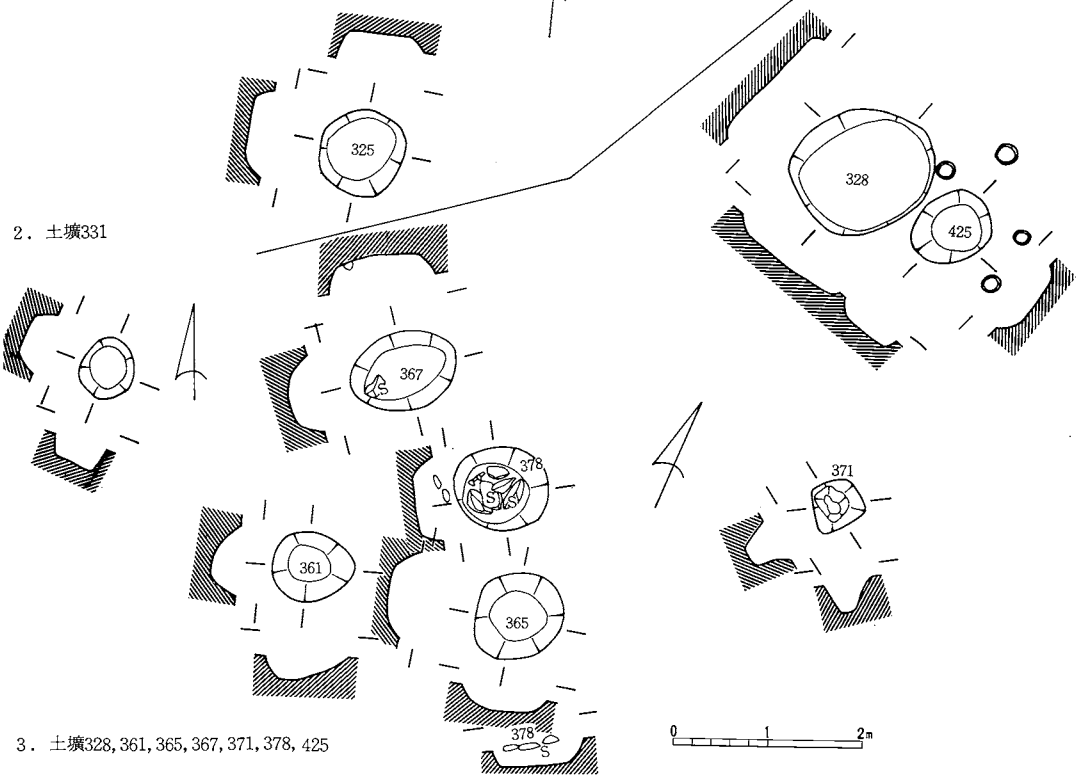
第49図　大石遺跡土壙実測図(その13)　　(1：80)



第50図　大石遺跡土壙実測図(その14)（1：80）



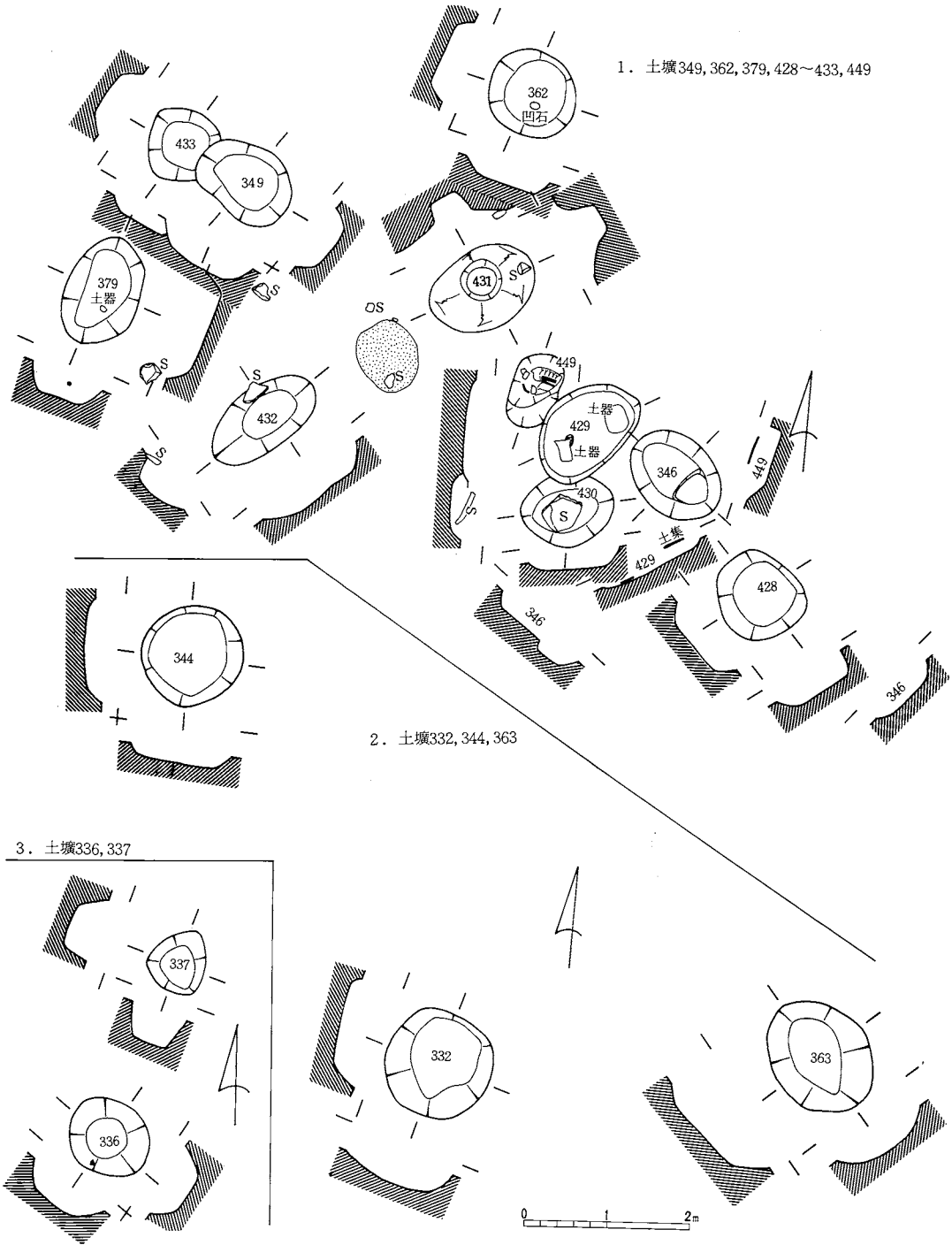
1．土壙325～327, 333～335, 339, 345, 348, 426



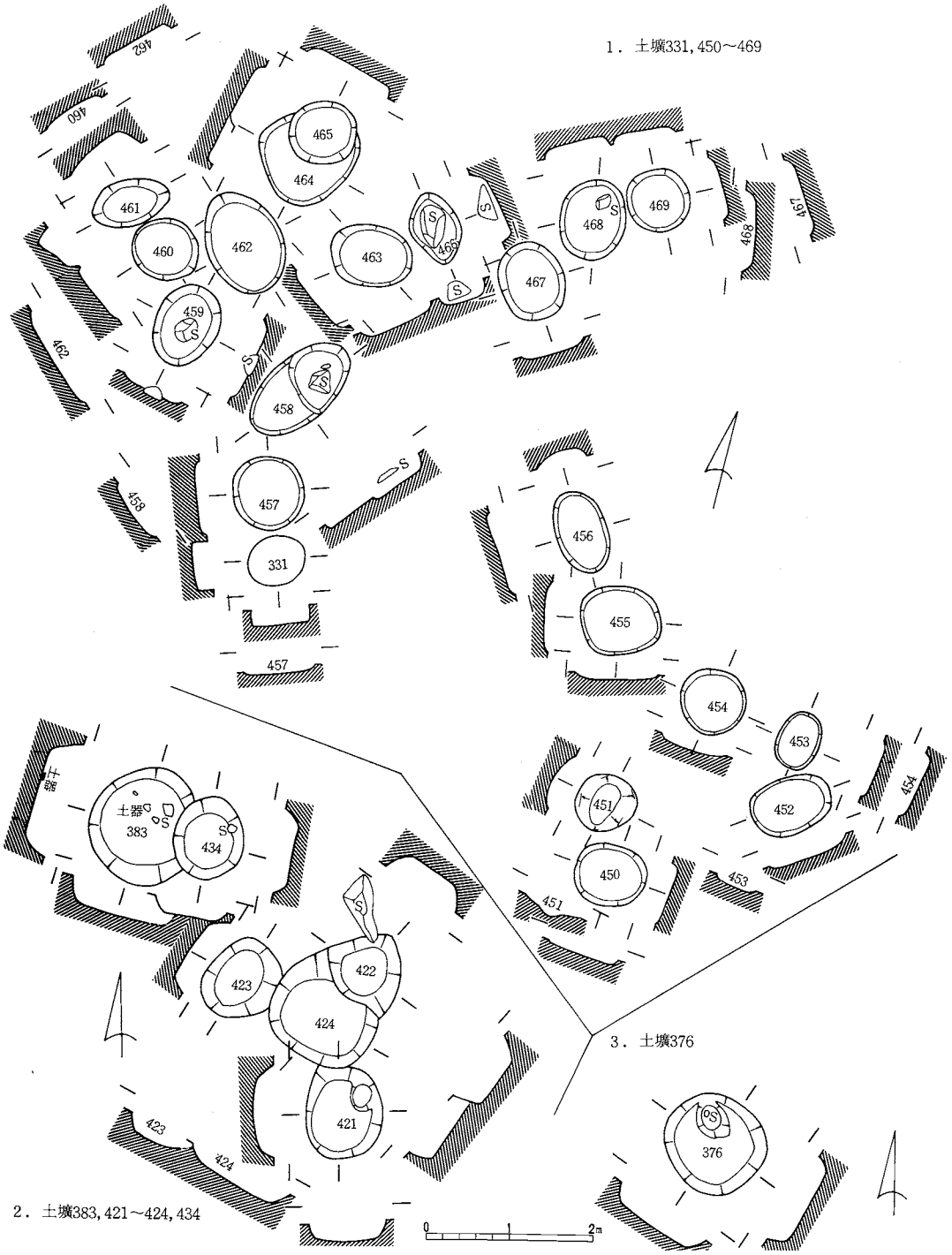
2．土壙331

3．土壙328, 361, 365, 367, 371, 378, 425

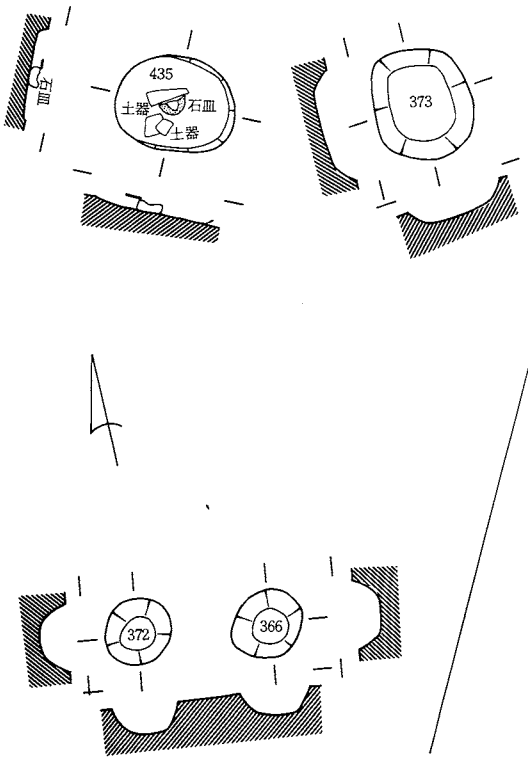
第51図　大石遺跡土壙実測図(その15)　(1：80)



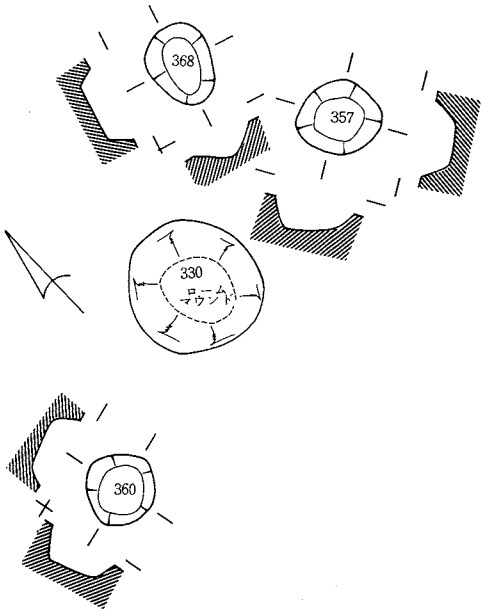
第52図　大石遺跡土壙実測図(その16)　(1：80)



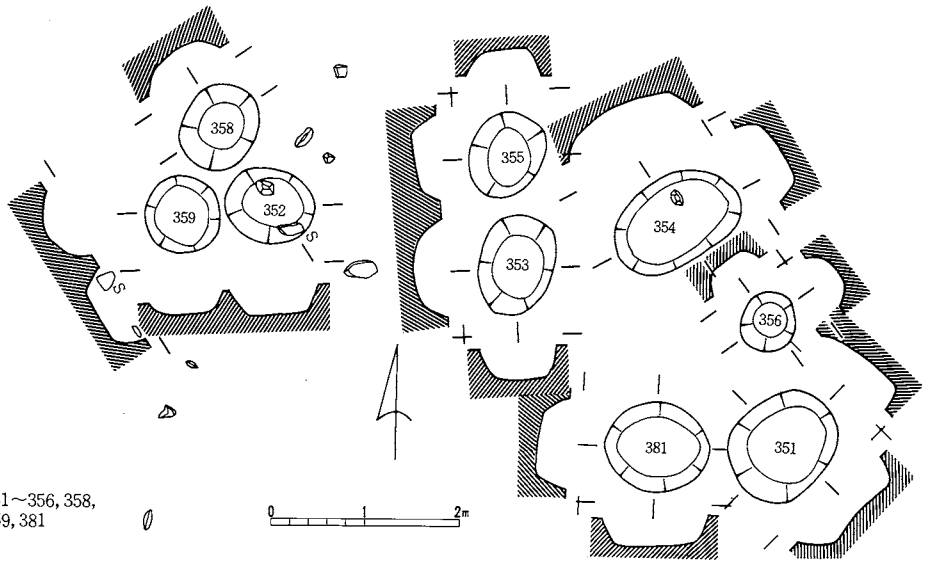
第53図　大石遺跡土壙実測図(その17)　(1：80)



1．土壙366, 372, 373, 435



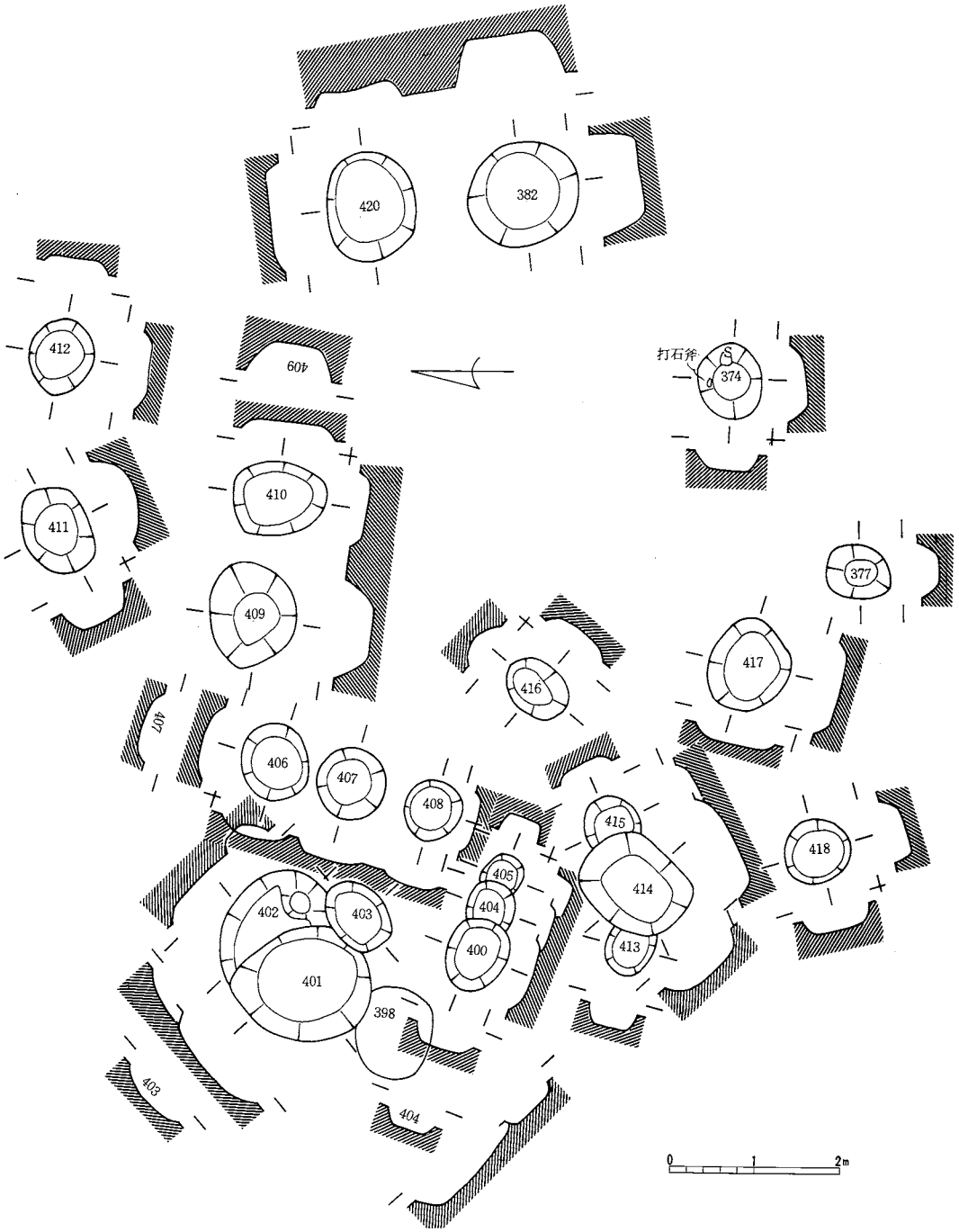
2．土壙330, 357, 360, 368



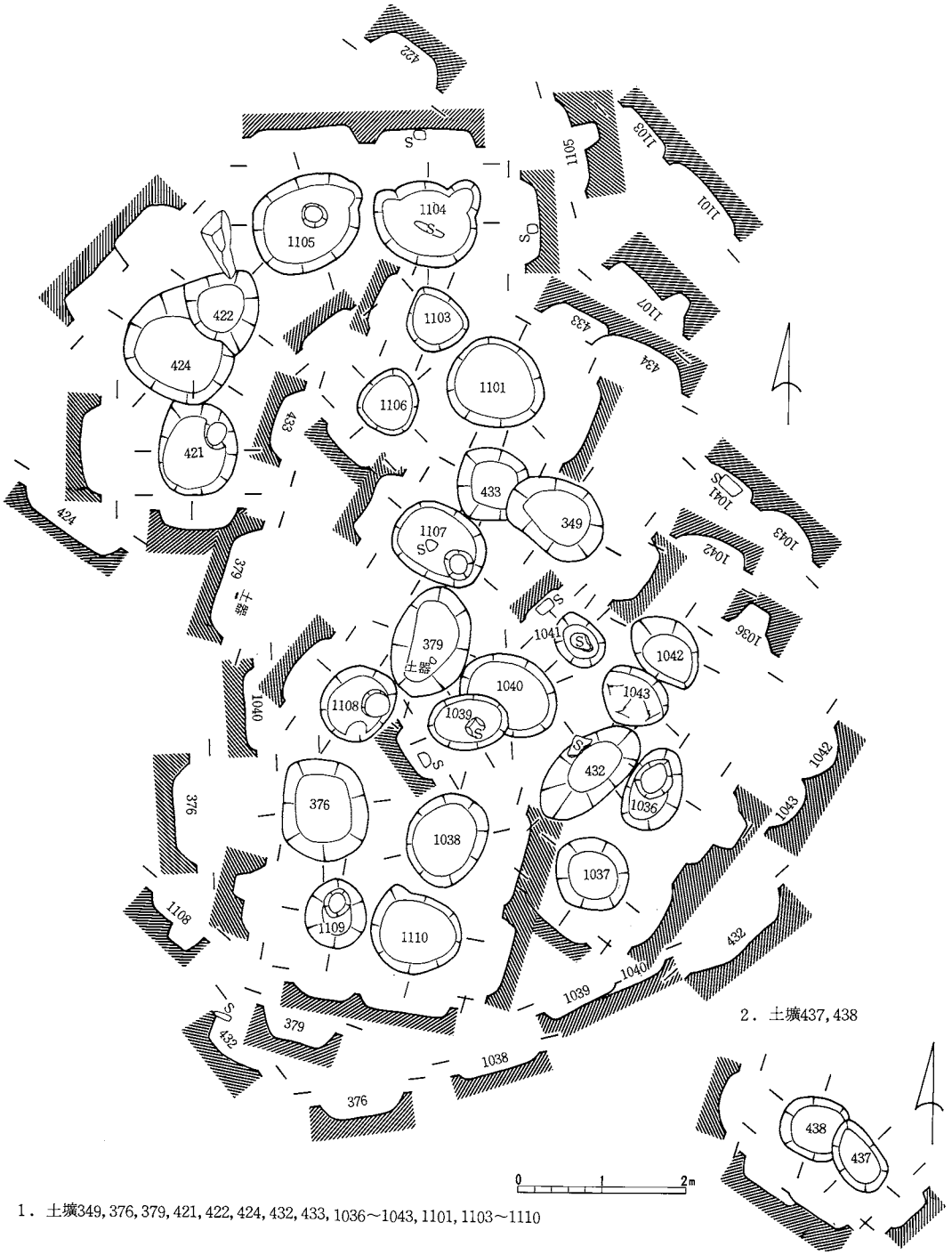
3．土壙351～356, 358, 359, 381

第54図　大石遺跡土壙実測図(その18)　(1：80)

1．土壙374, 377, 382, 400～418, 420

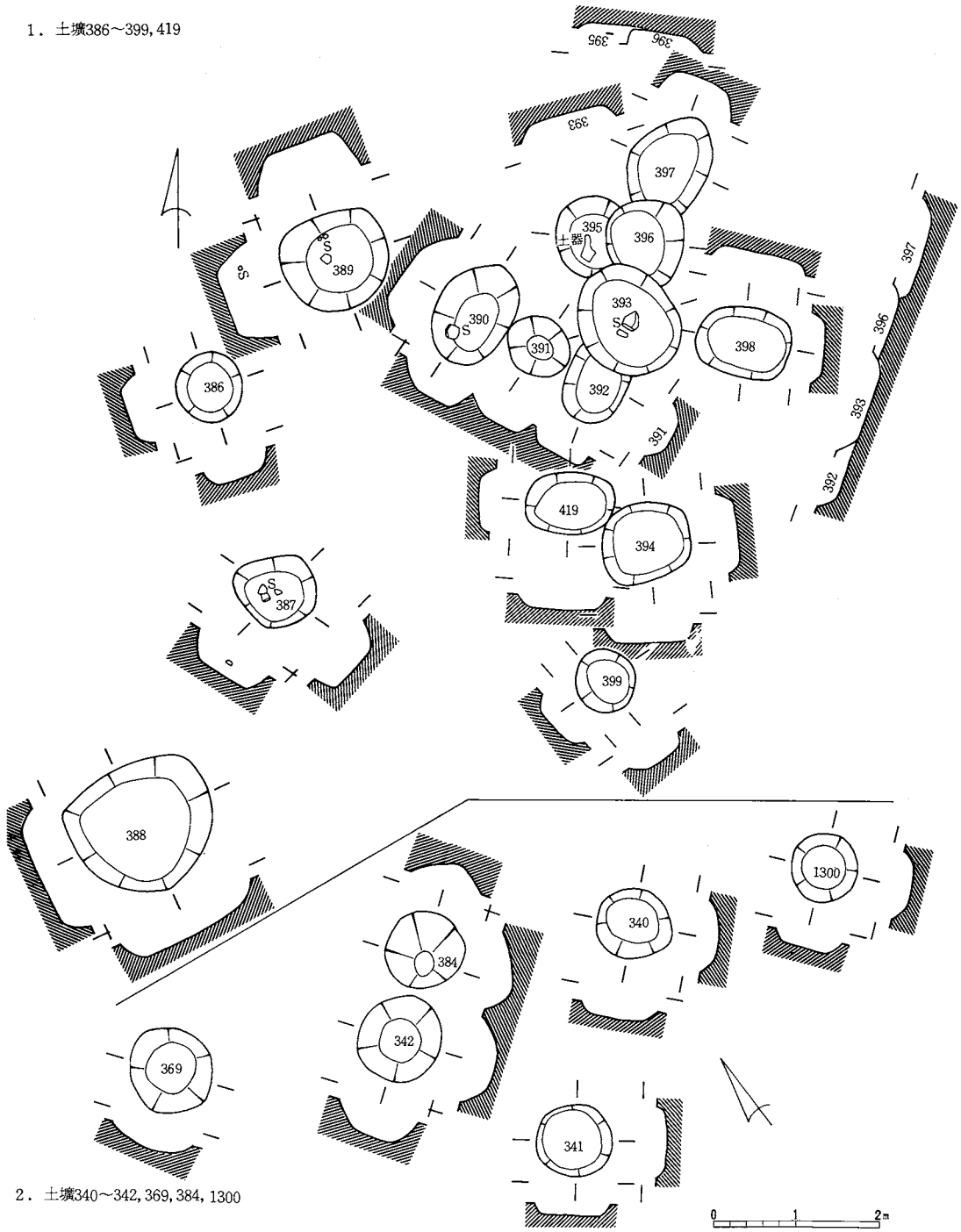


第55図　大石遺跡土壙実測図(その19)　(1：80)



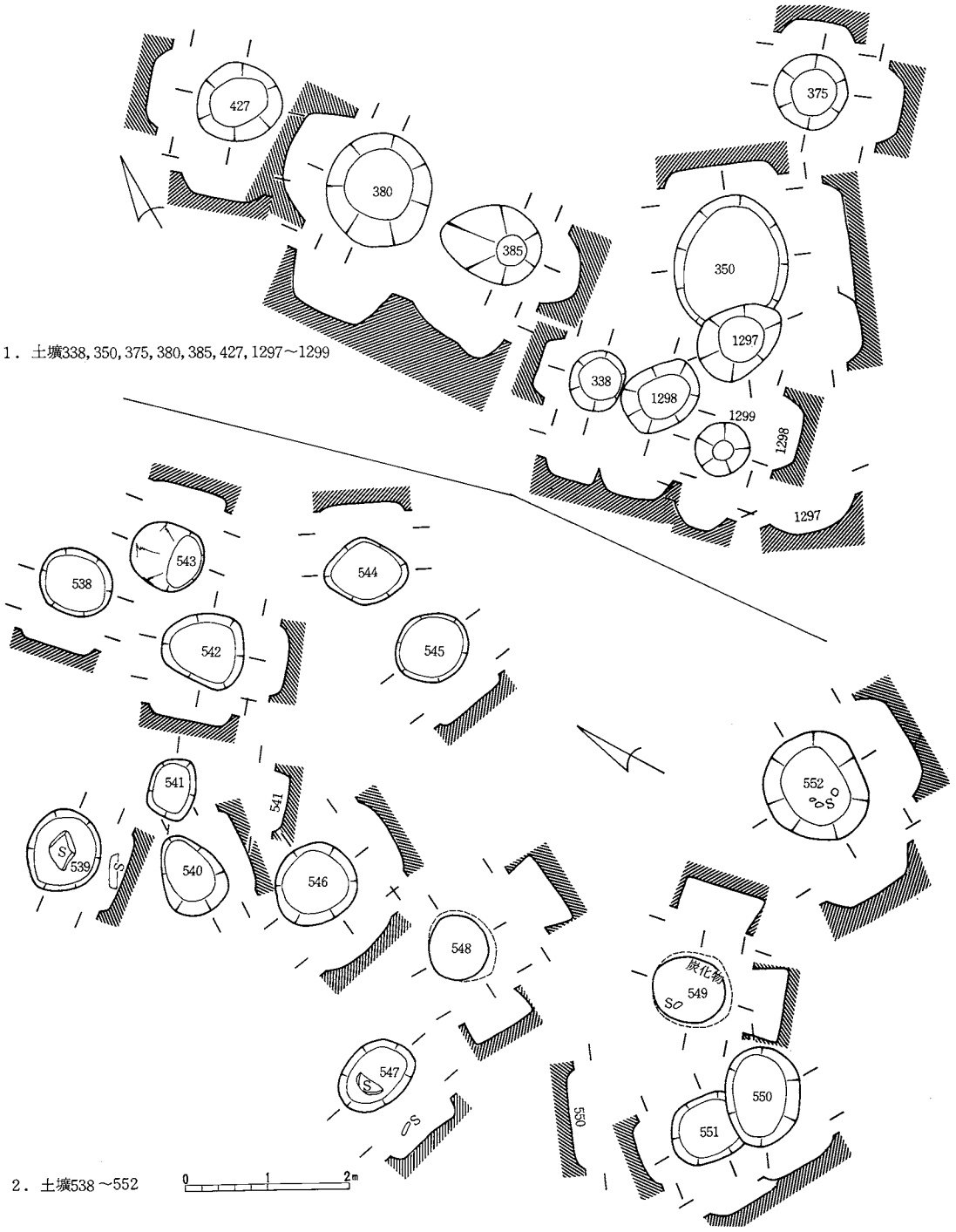
第56図　大石遺跡土壙実測図(その20)　(1：80)

1．土壙386～399，419

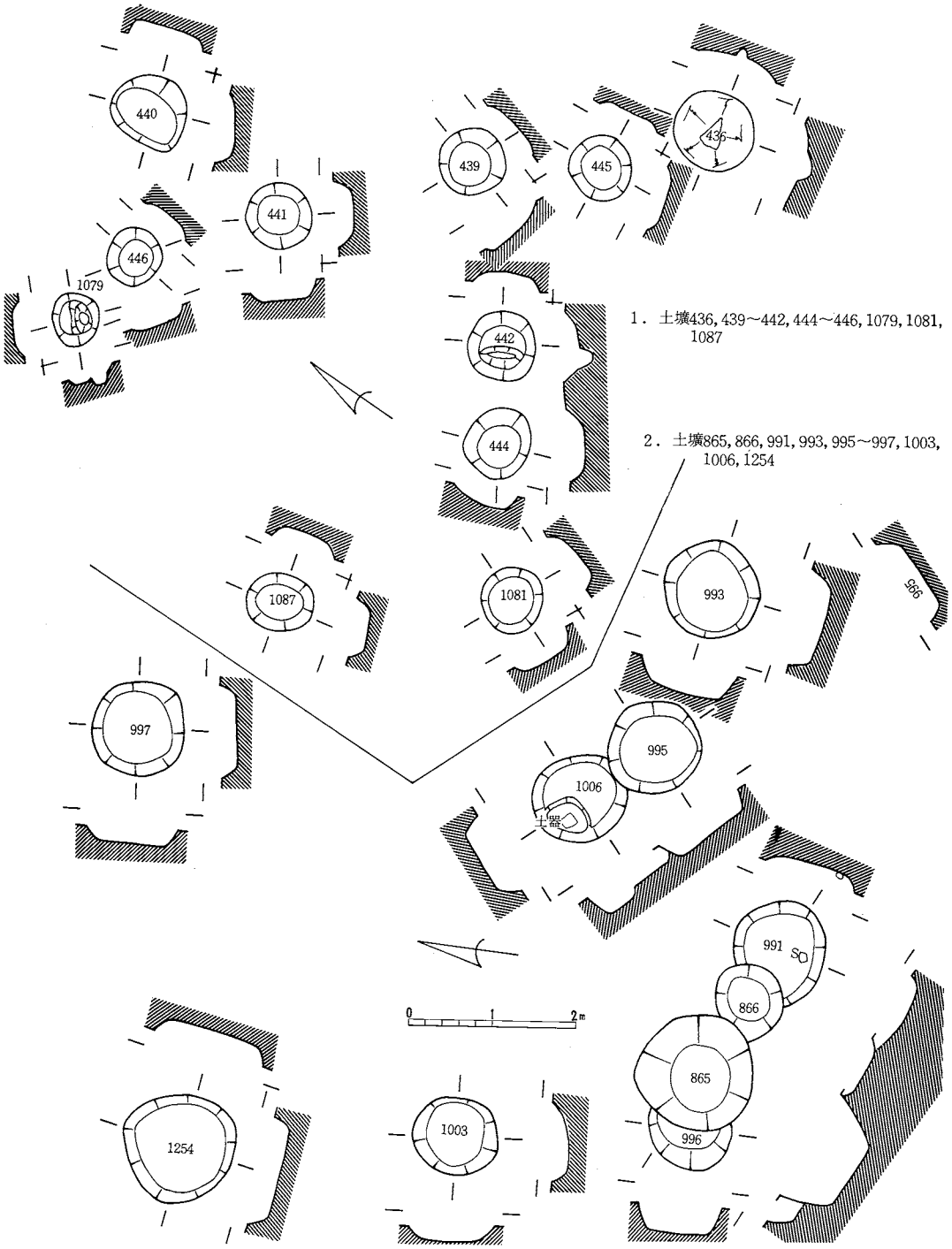


2．土壙340～342，369，384，1300

第57図　大石遺跡土壙実測図(その21)　(1：80)

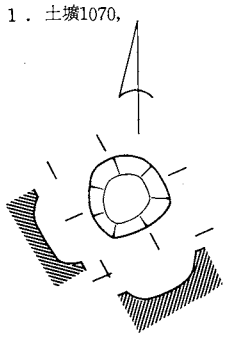


第58図　大石遺跡土壙実測図(その22)　　(1：80)

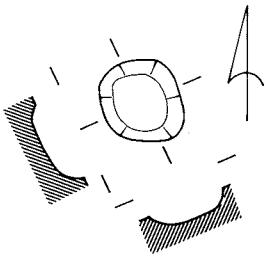


第59図　大石遺跡土壙実測図(その23)　(1：80)

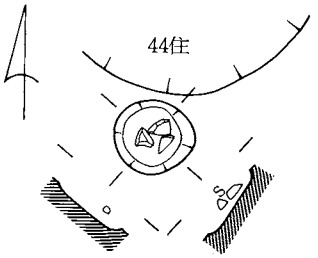
1．土壙1070,



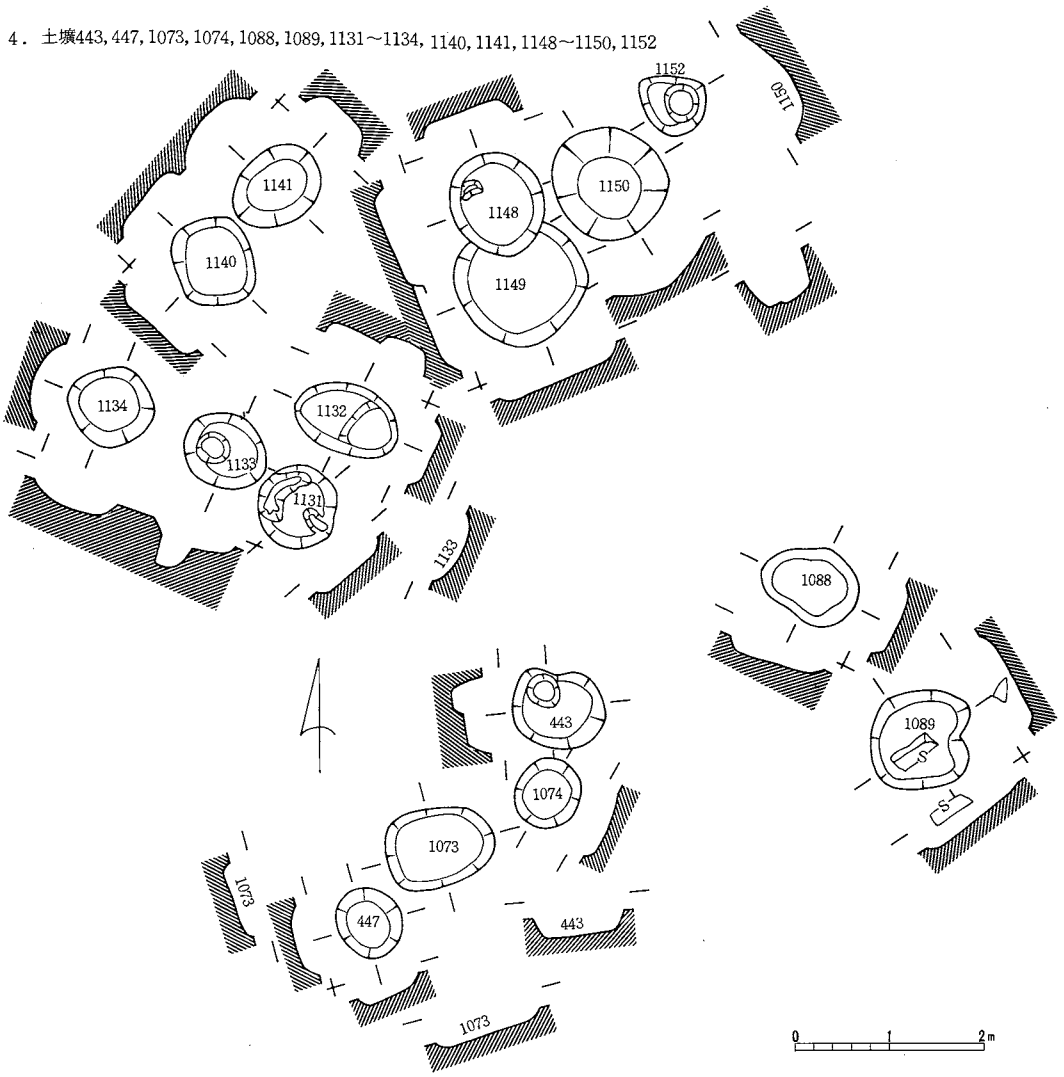
2．土壙1071



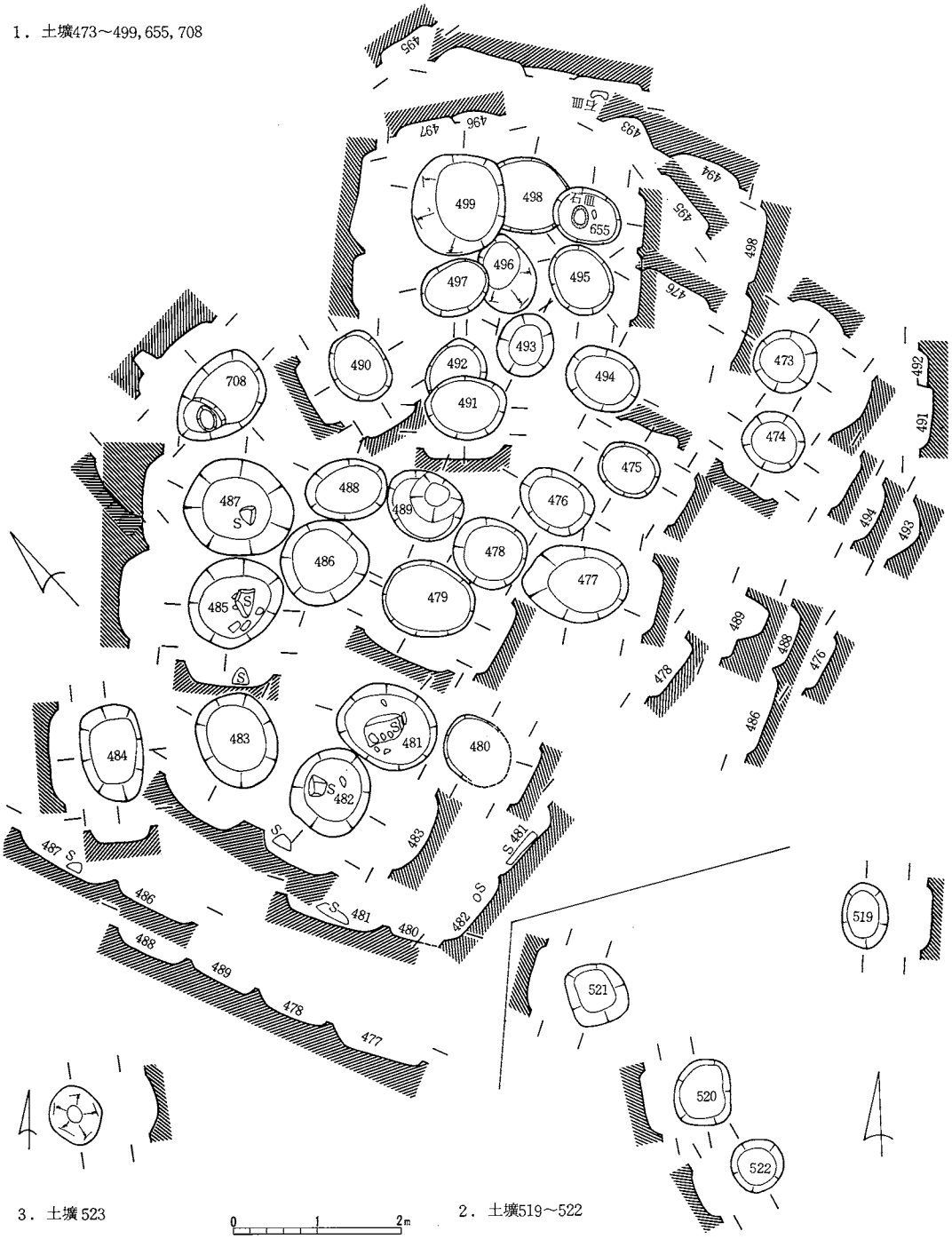
3．土壙1078



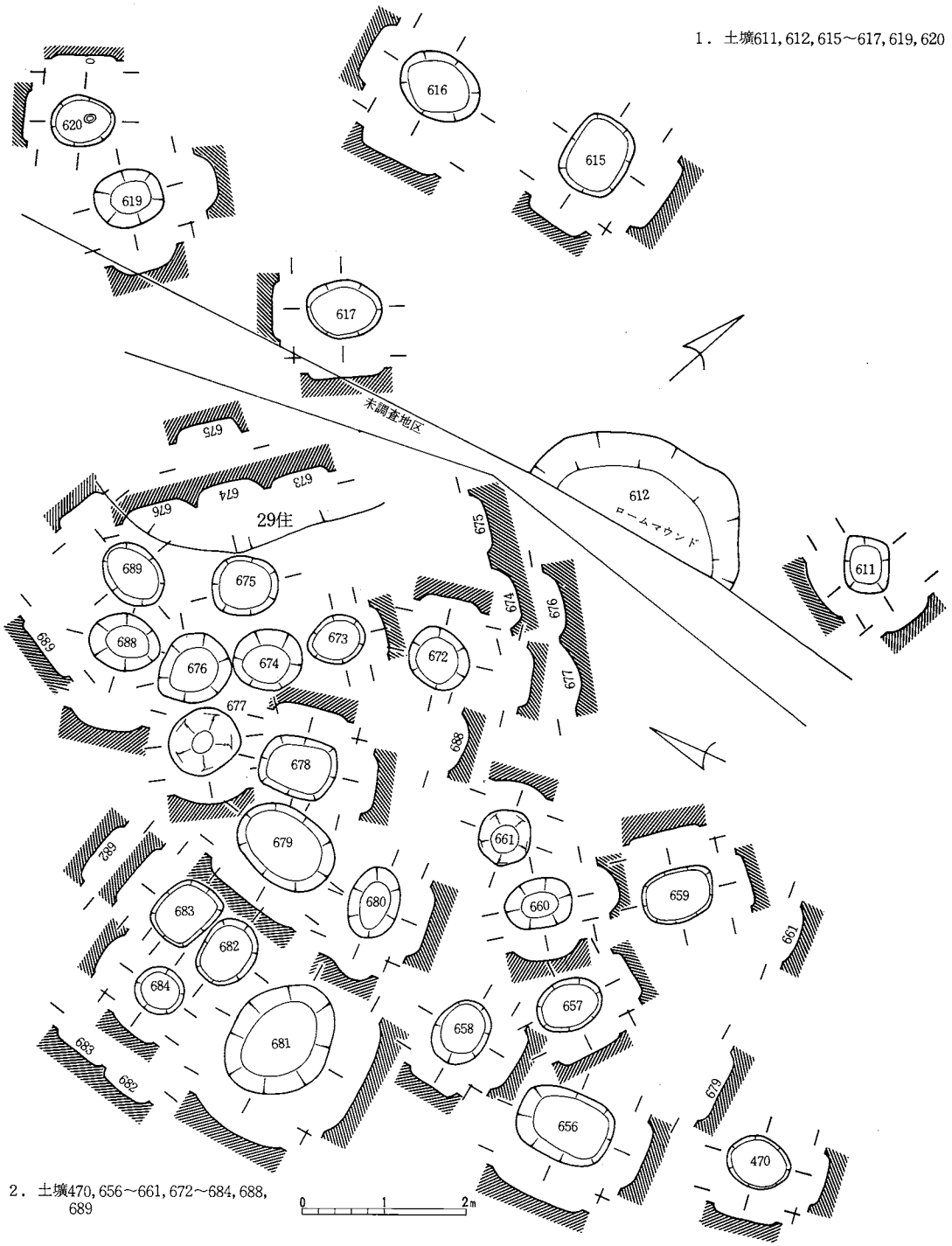
4．土壙443, 447, 1073, 1074, 1088, 1089, 1131～1134, 1140, 1141, 1148～1150, 1152



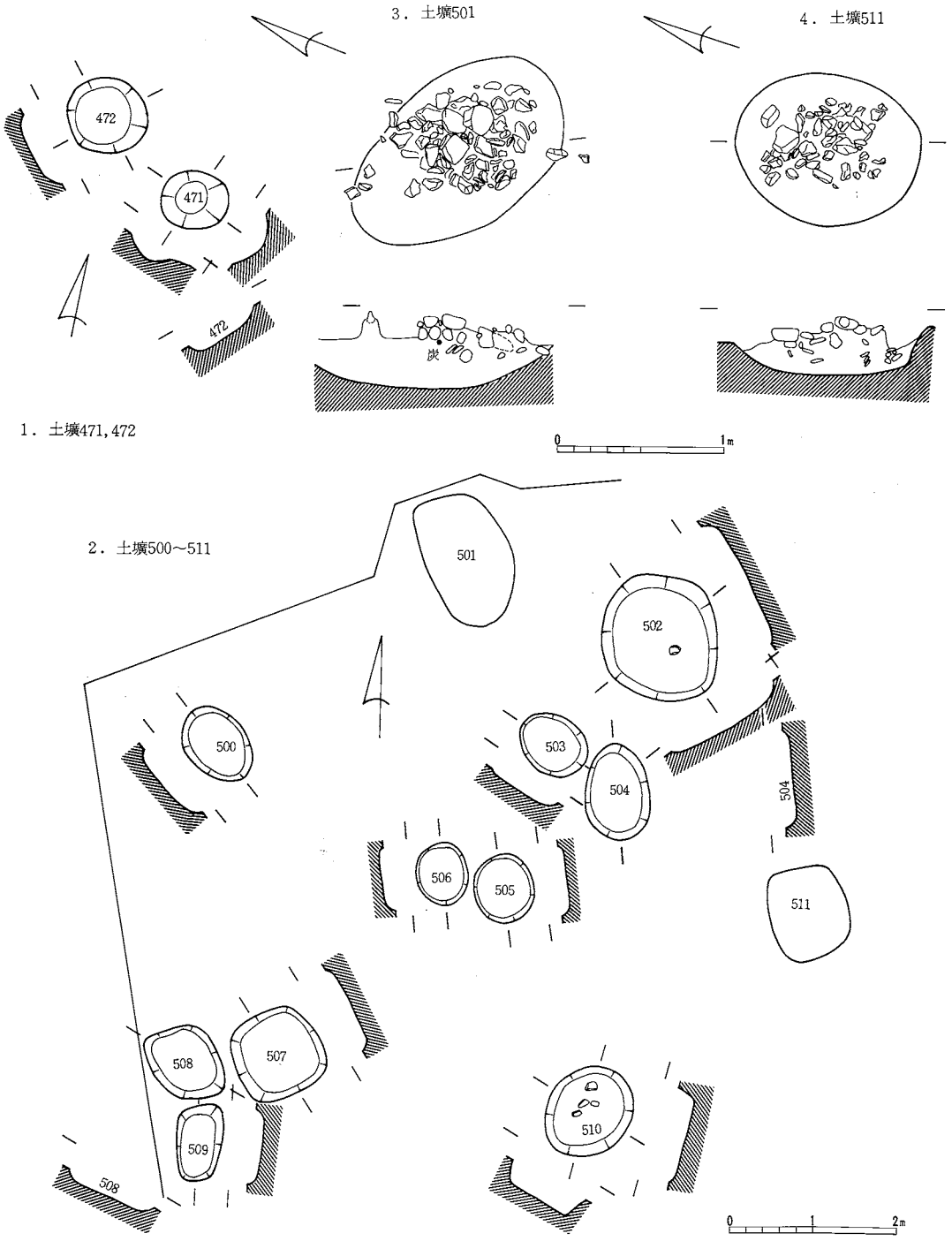
第60図　大石遺跡土壙実測図(その24)　(1：80)



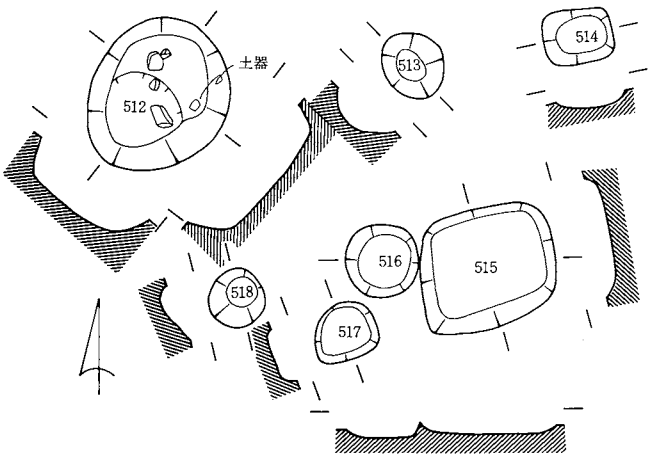
第61図　大石遺跡土壙実測図(その25)　(1：80)



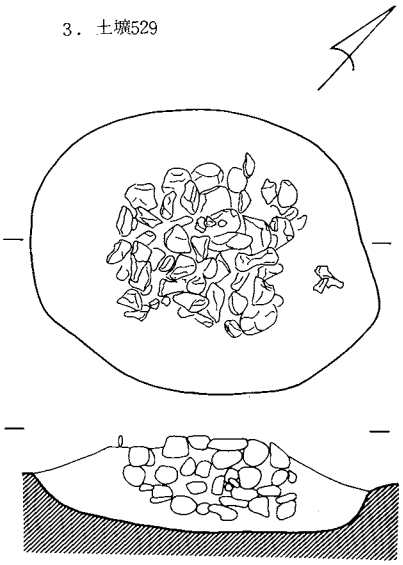
第62図　大石遺跡土壙実測図(その26)　(1：80)



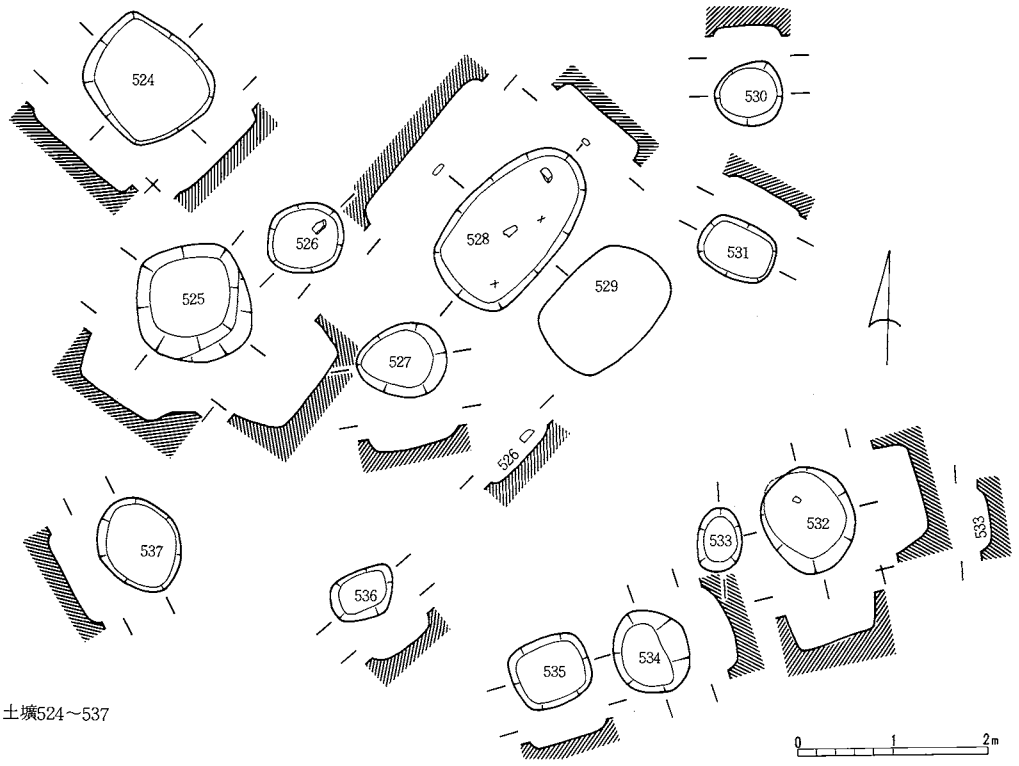
第63図　大石遺跡土壙実測図(その27)　(1：80 但し3・4は1：40)



1．土壙512～518

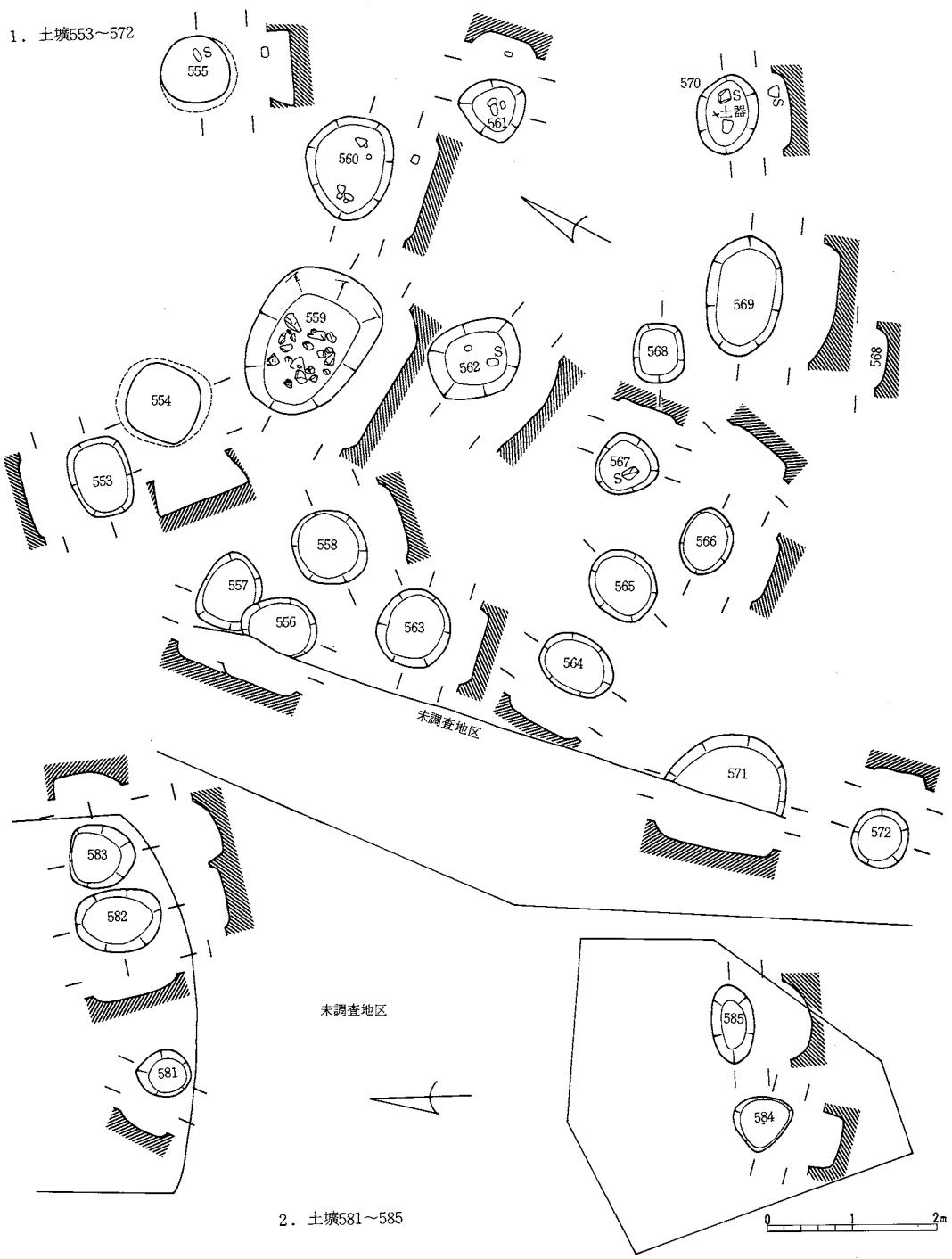


3．土壙529

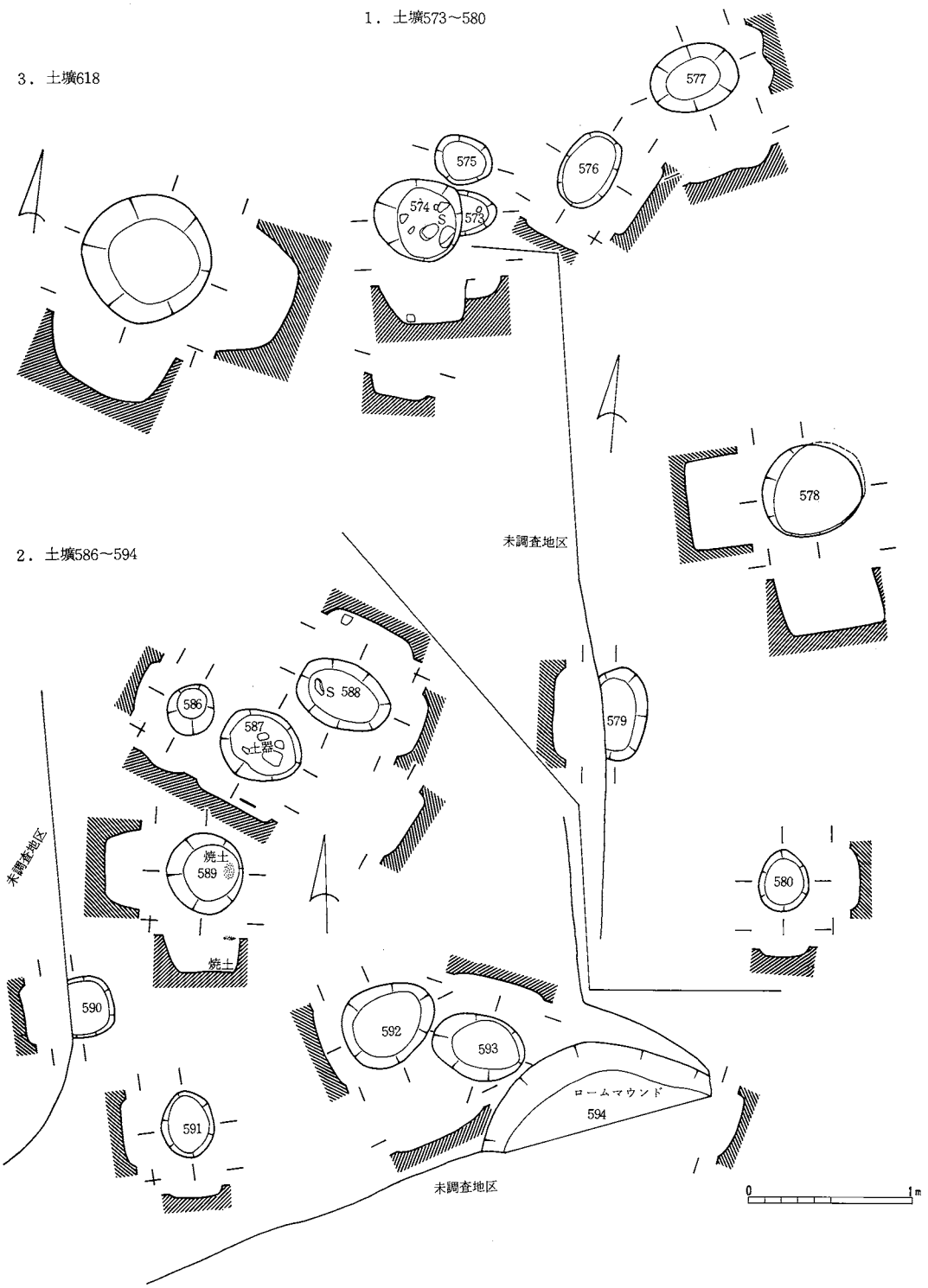


2．土壙524～537

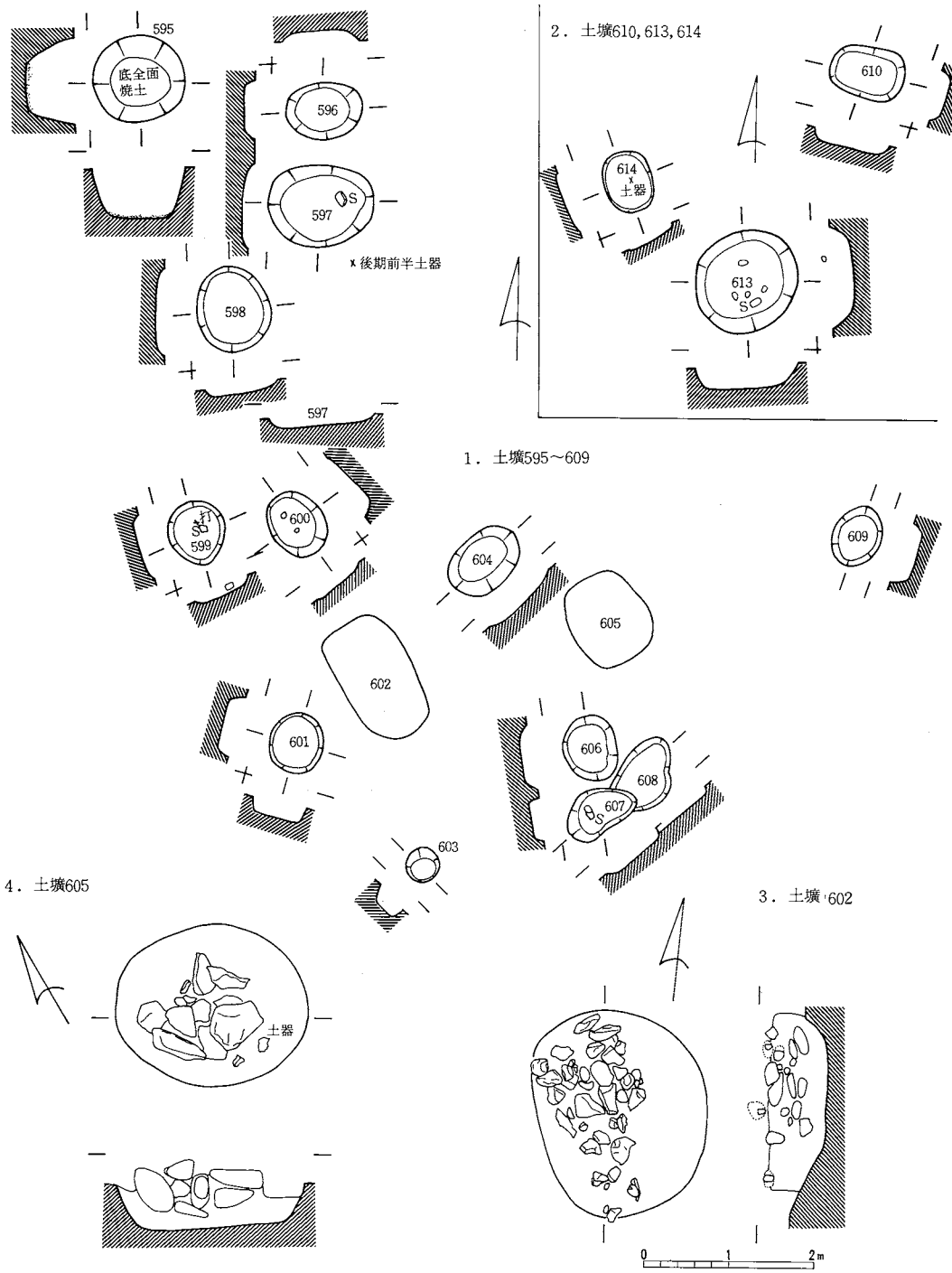
第64図　大石遺跡土壙実測図(その28)　(1：80)



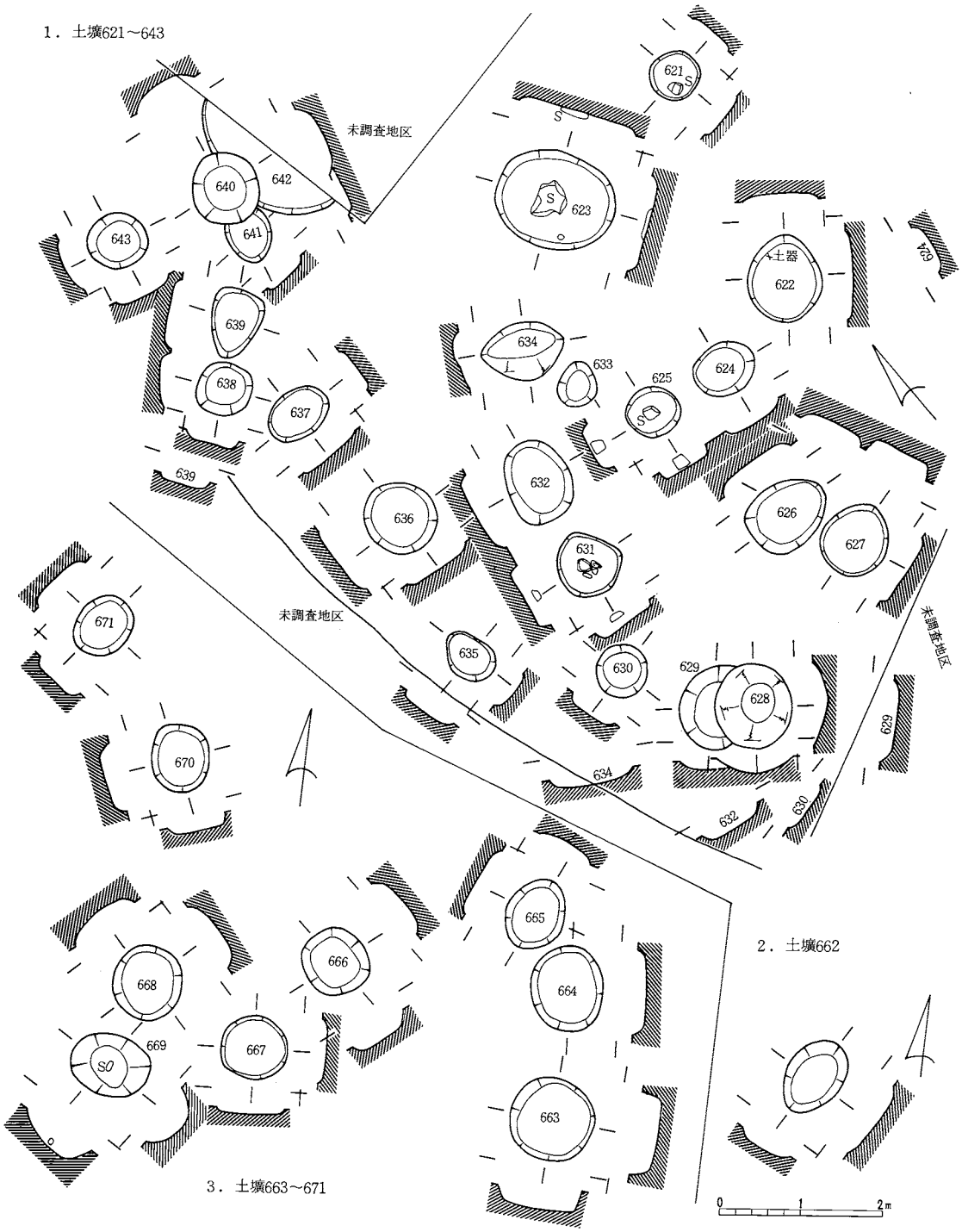
第65図　大石遺跡土壙実測図(その29)　(1：80)



第66図　大石遺跡土壙実測図(その30)　(1：80)

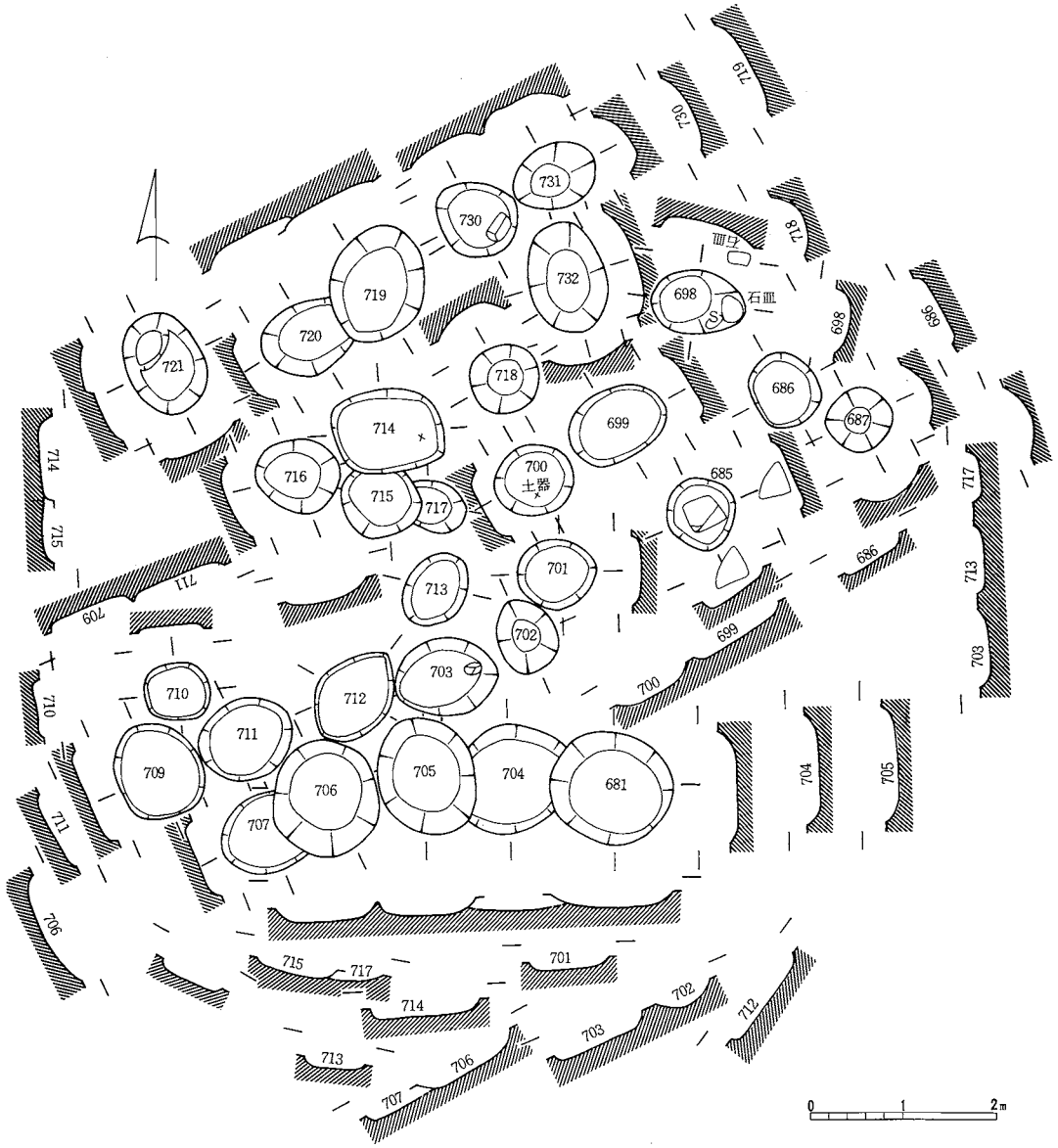


第67図　大石遺跡土壙実測図(その31)　(1：80 但し3・4は1：40)



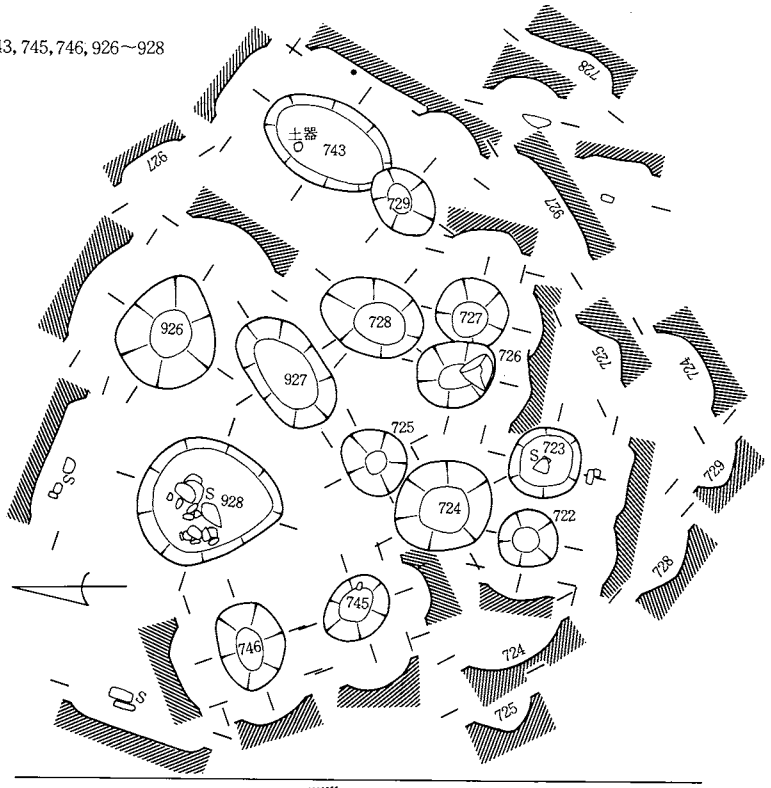
第68図　大石遺跡土壙実測図(その32)　(1：80)

1．土壙681，685～687，698～707，709～721，730～732

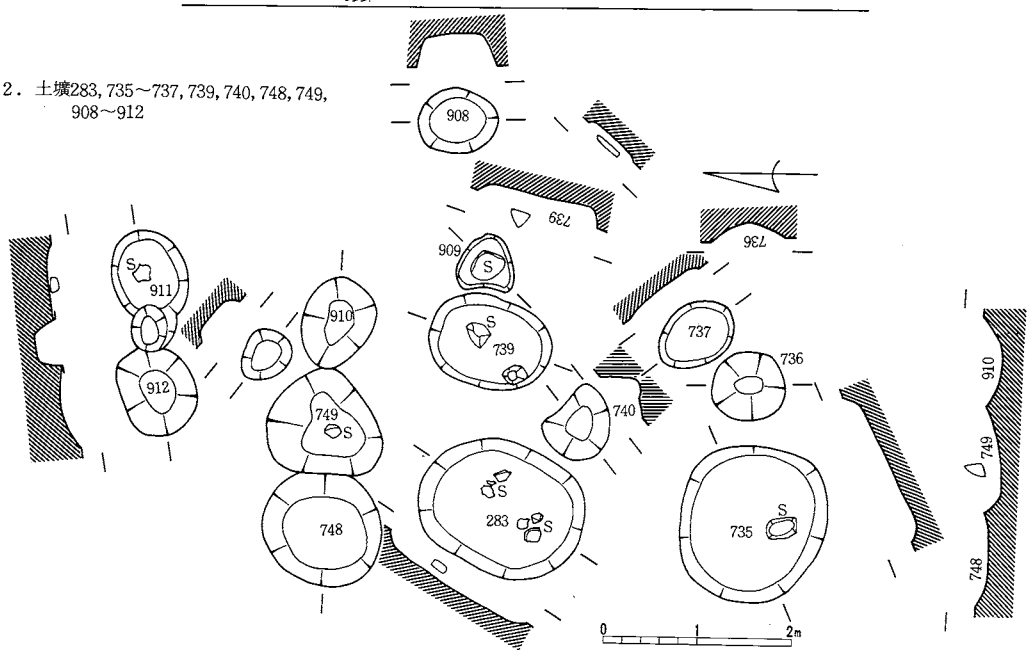


第69図　大石遺跡土壙実測図（その33）　（1：80）

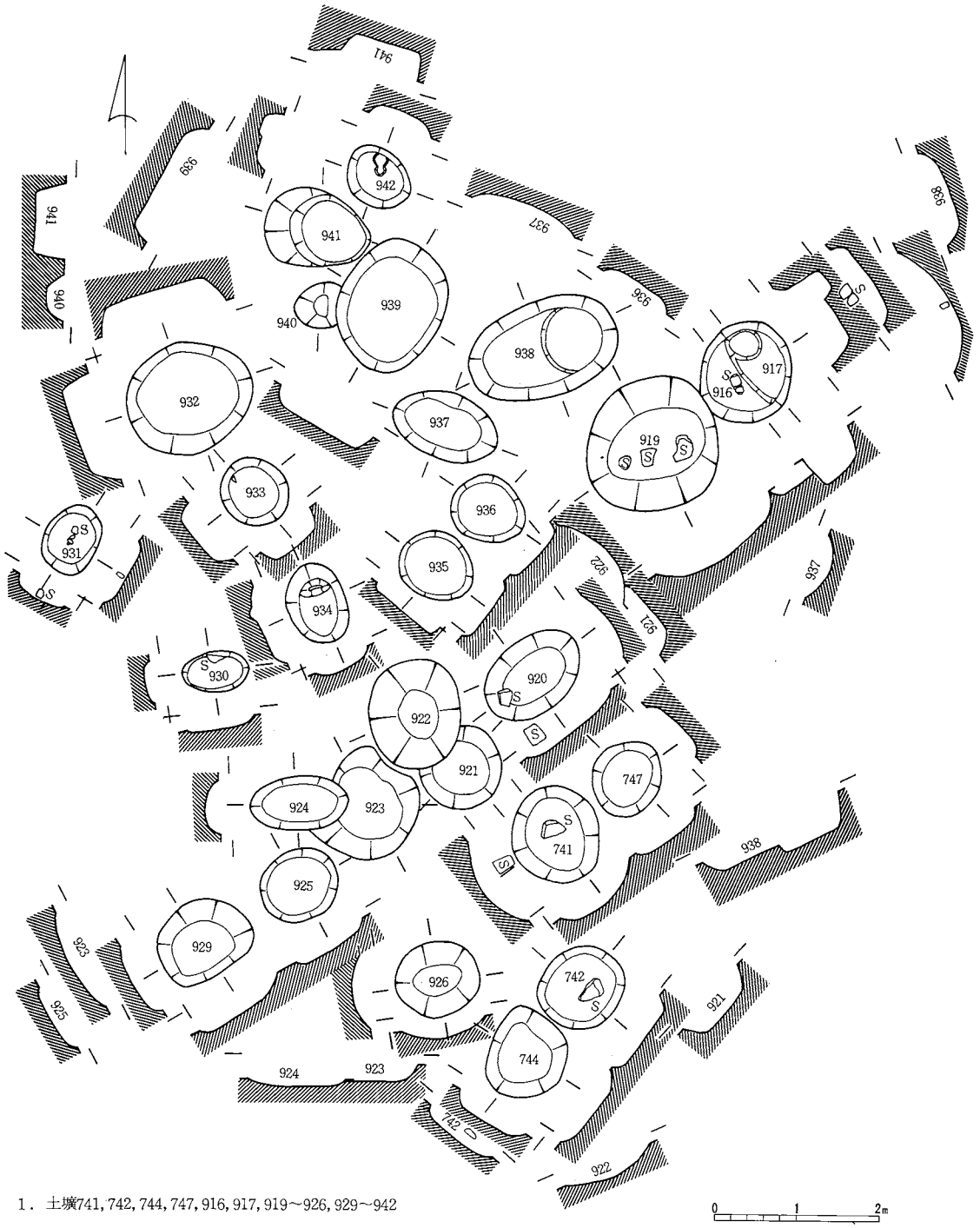
1．土壙722～729, 743, 745, 746, 926～928



2．土壙283, 735～737, 739, 740, 748, 749, 908～912



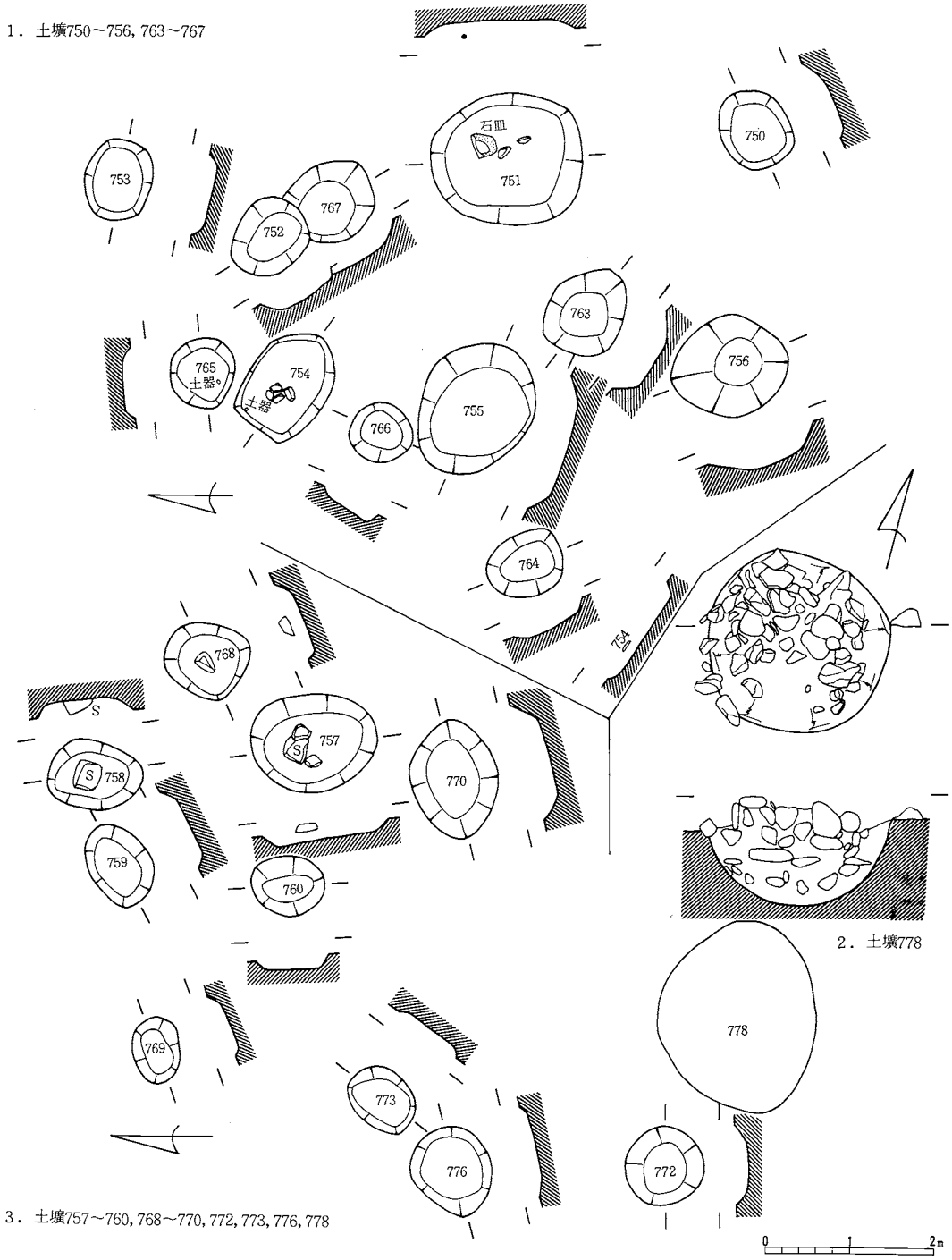
第70図　大石遺跡土壙実測図(その34)　(1：80)



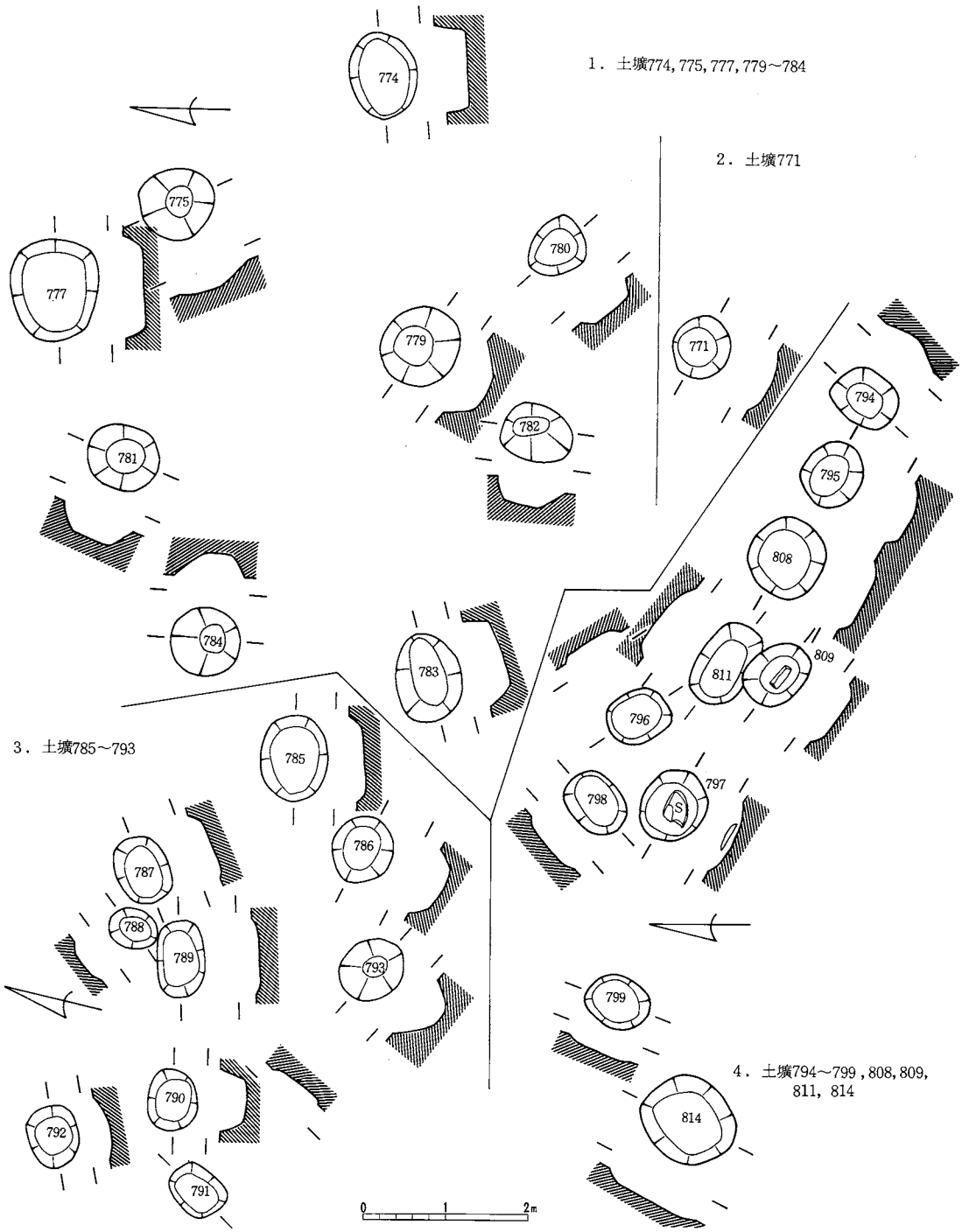
1．土壙741, 742, 744, 747, 916, 917, 919～926, 929～942

0 1 2m

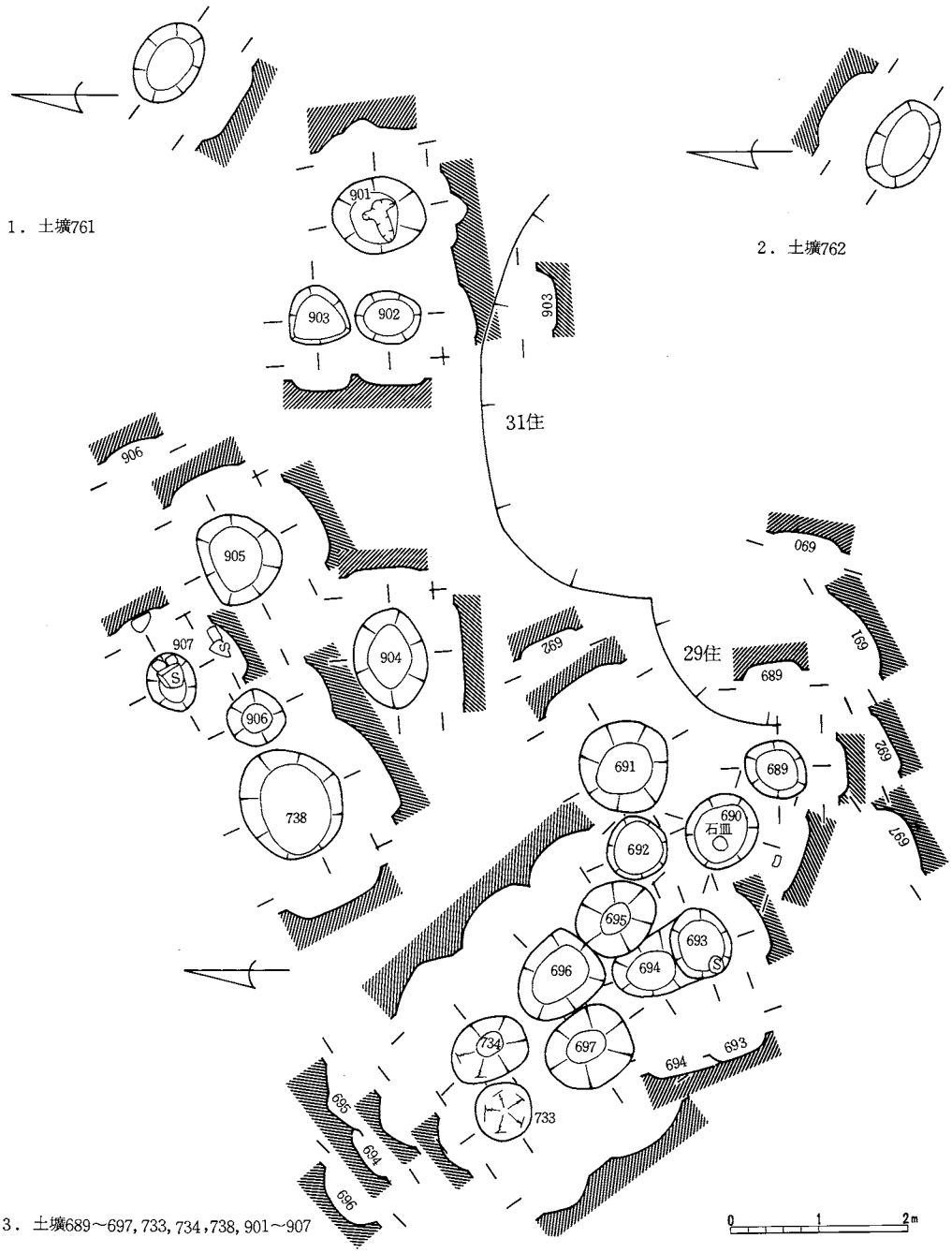
第71図　大石遺跡土壙実測図(その35)　(1：80)



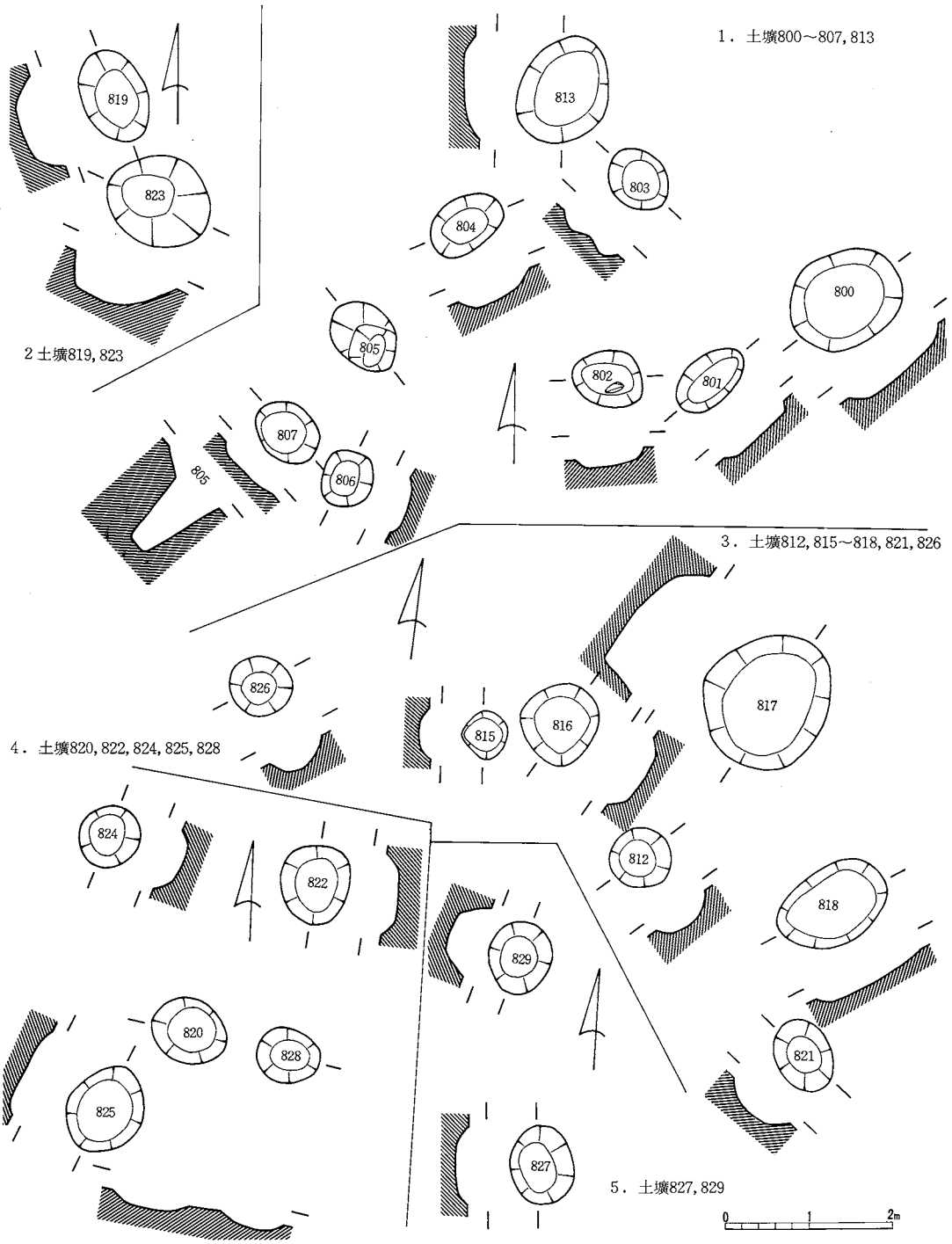
第72図　大石遺跡土壙実測図(その36)　(1：80 但し2は1：40)



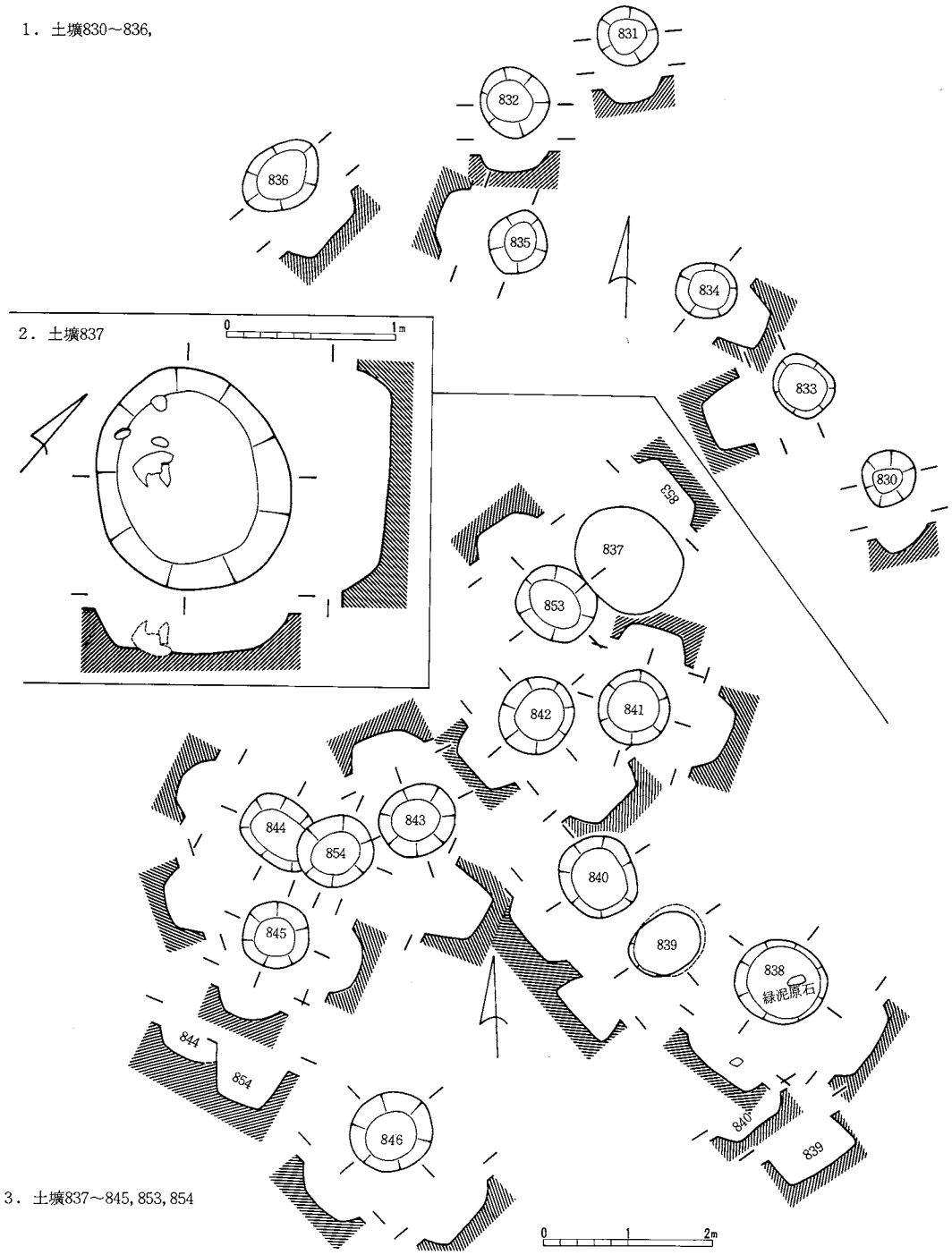
第73図　大石遺跡土壙実測図(その37)　(1：80)



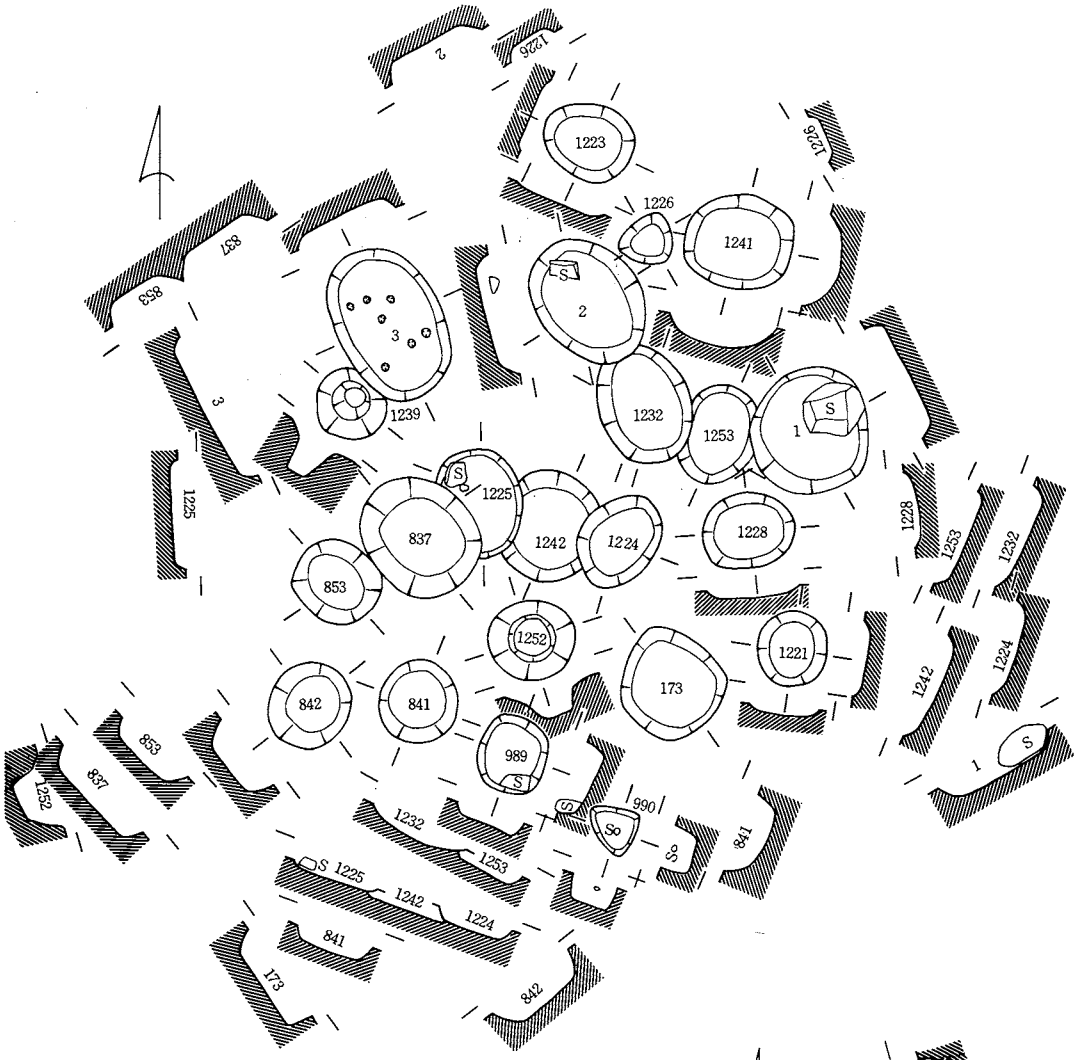
第74図　大石遺跡土壙実測図(その38)　　(1：80)



第75図　大石遺跡土壙実測図(その39)　(1：80)



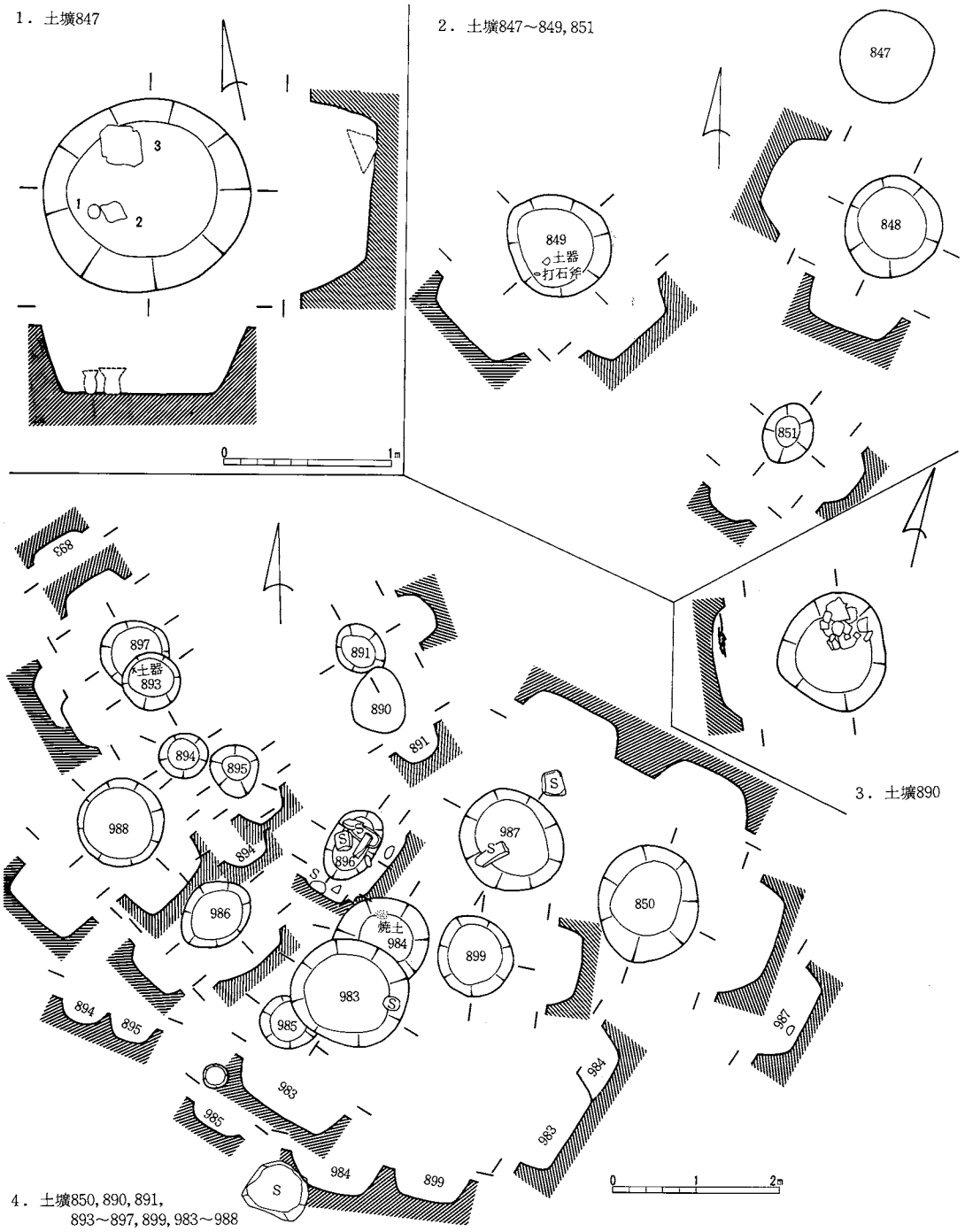
第76図　大石遺跡土壙実測図(その40)　(1：80 但し2は1：40)



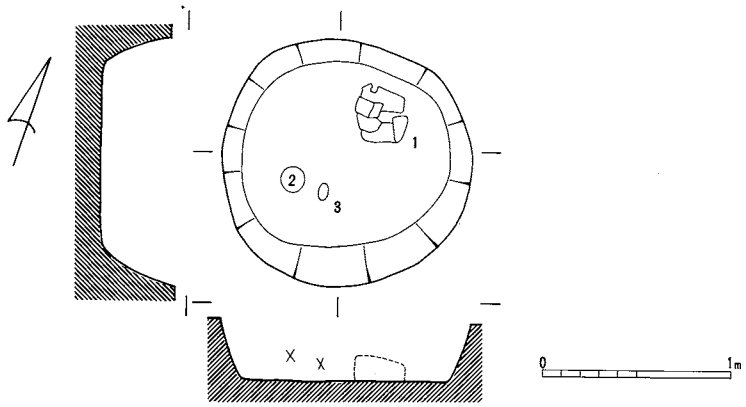
1．土壙1～3, 173, 837, 841, 842, 853, 989, 990, 1221, 1223～1226, 1228, 1232, 1239, 1241, 1242, 1252, 1253

2．土壙1256

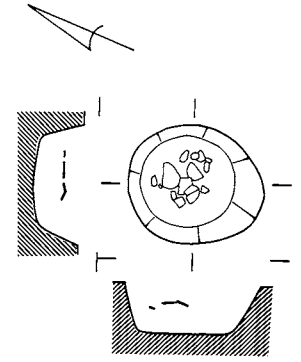
第77図　大石遺跡土壙実測図(その41)　　(1：80)



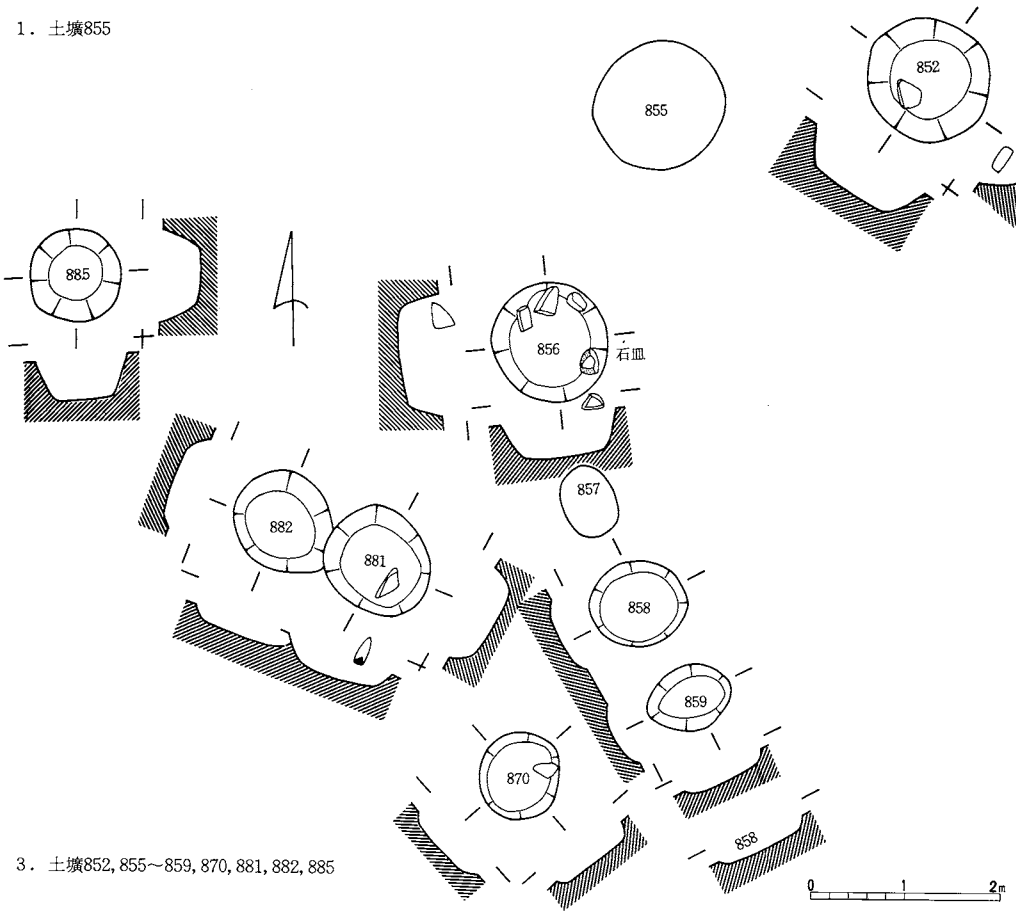
第78図　大石遺跡土壙実測図(その42)　(1：80 但し1・3は1：40)



1．土壙855

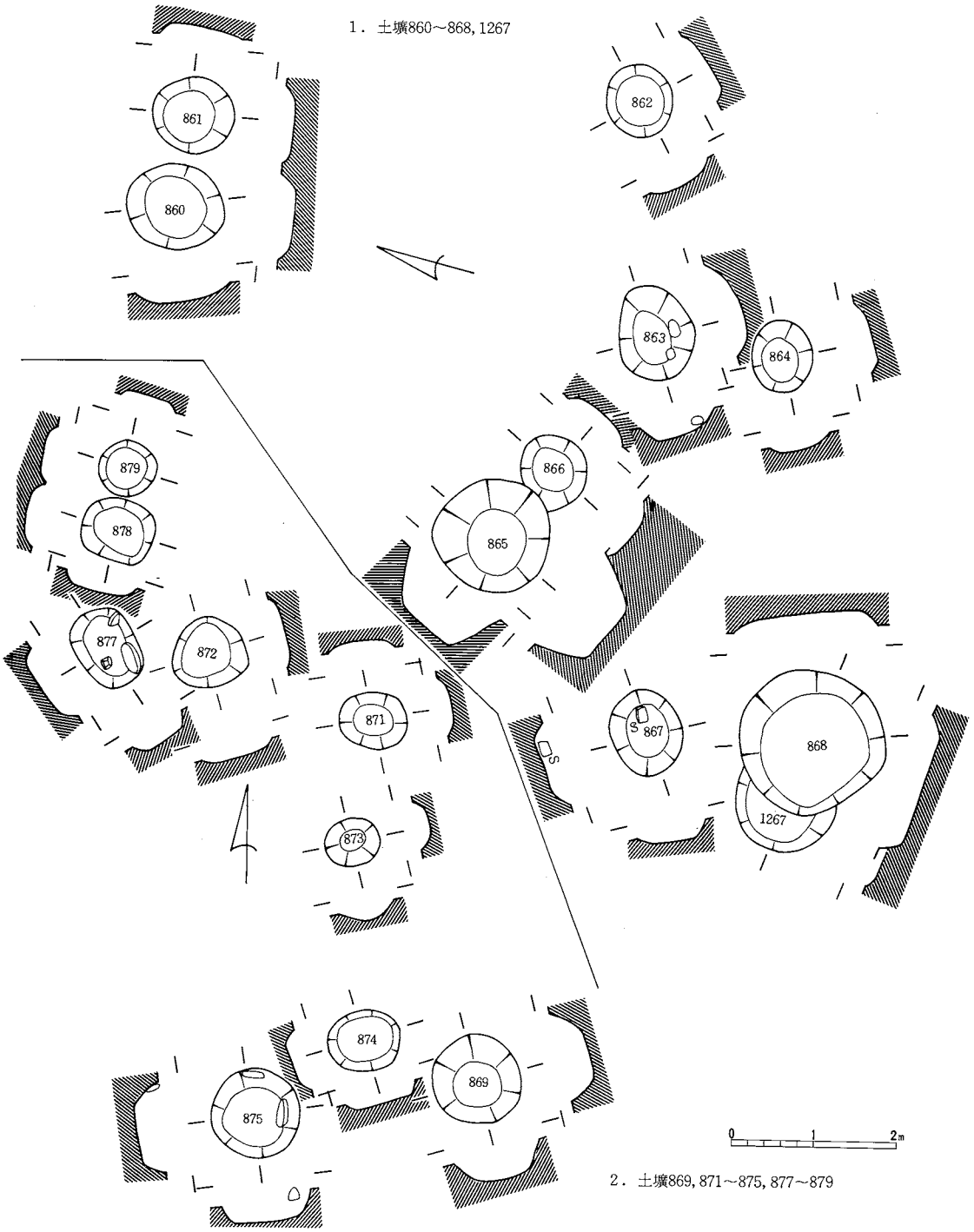


2．土壙857

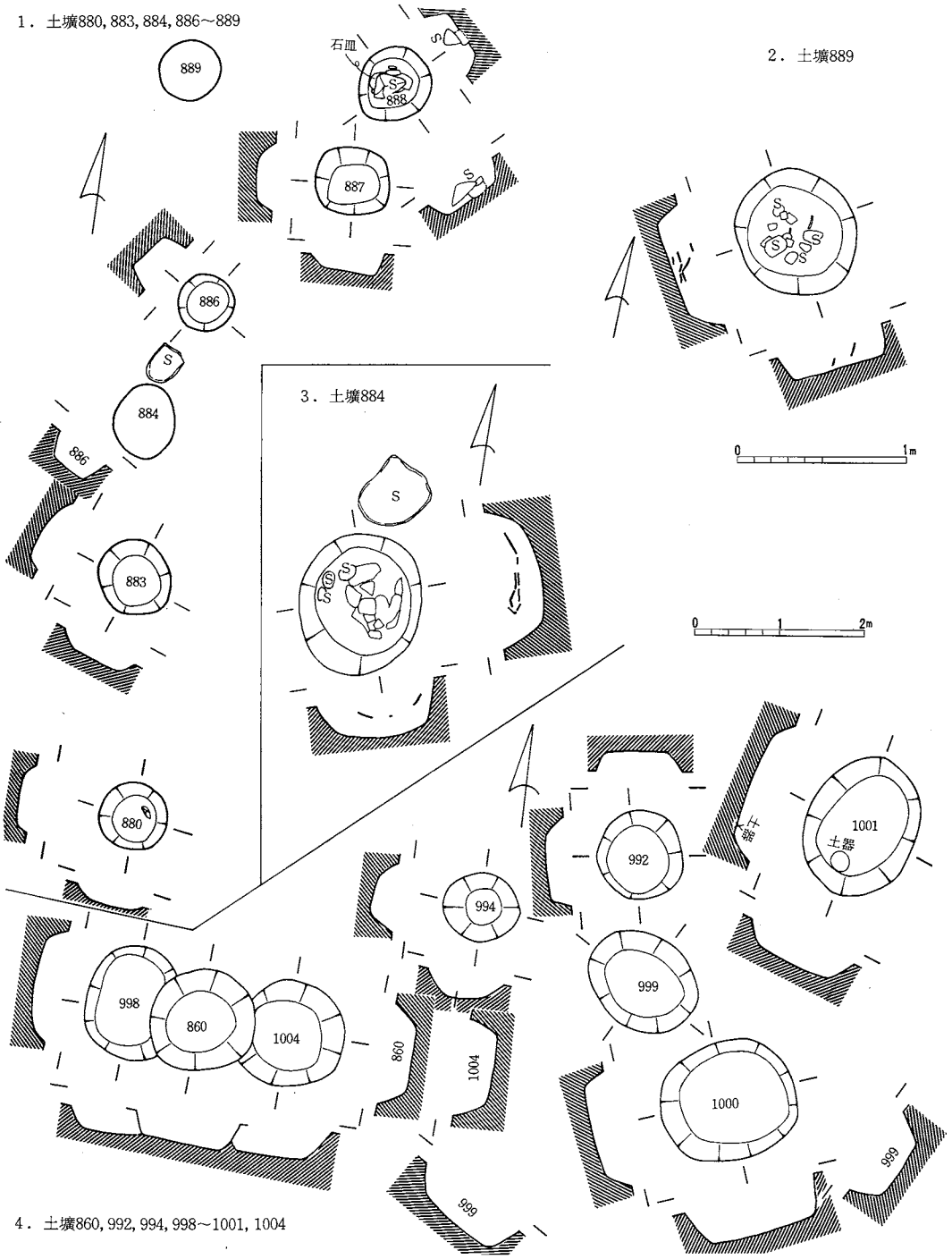


3．土壙852, 855～859, 870, 881, 882, 885

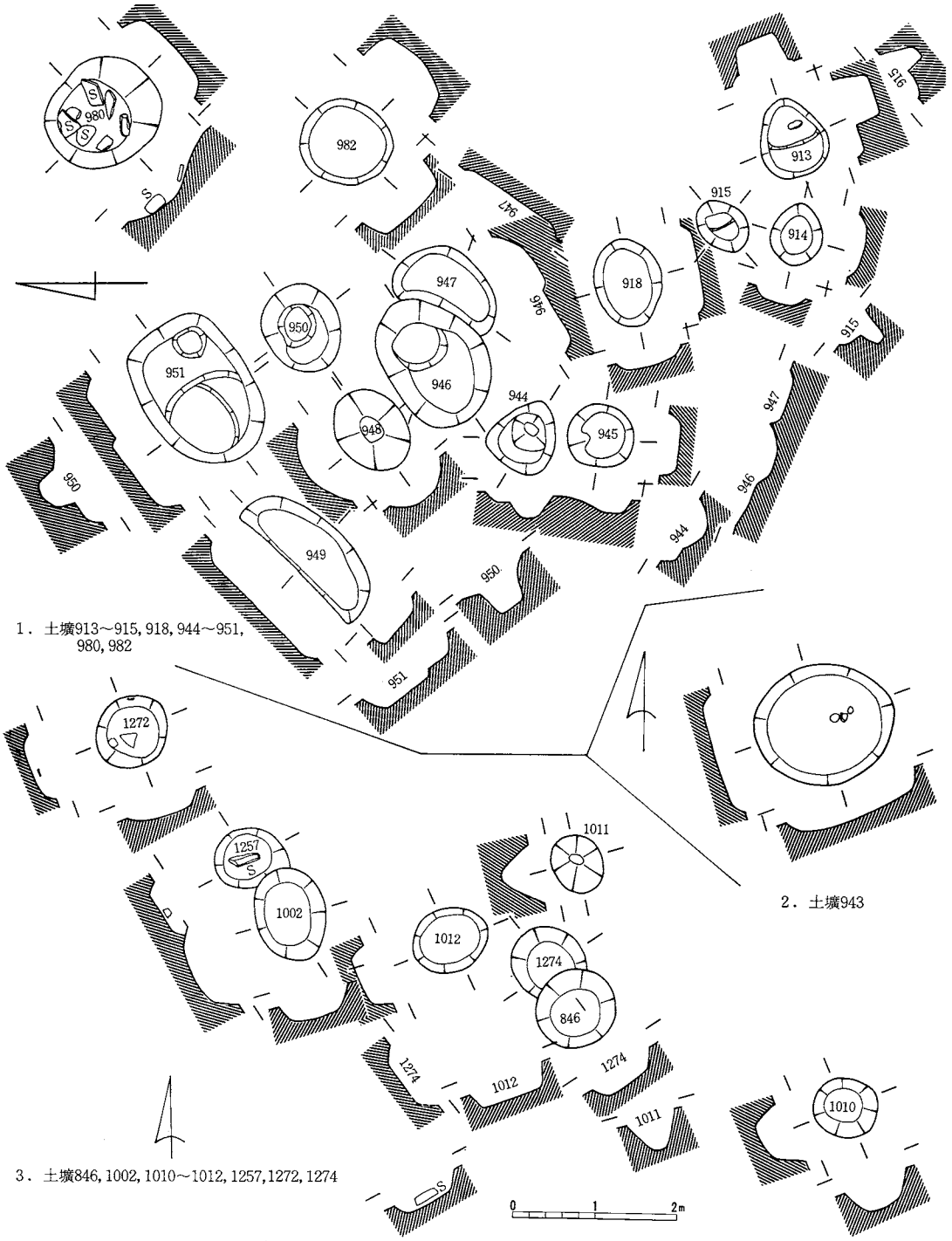
第79図　大石遺跡土壙実測図(その43)　(1：80 但し1・2は1：40)



第80図　大石遺跡土壙実測図(その44)　(1：80)



第81図　大石遺跡土壙実測図(その45)　(1：80 但し2・3は1：40)

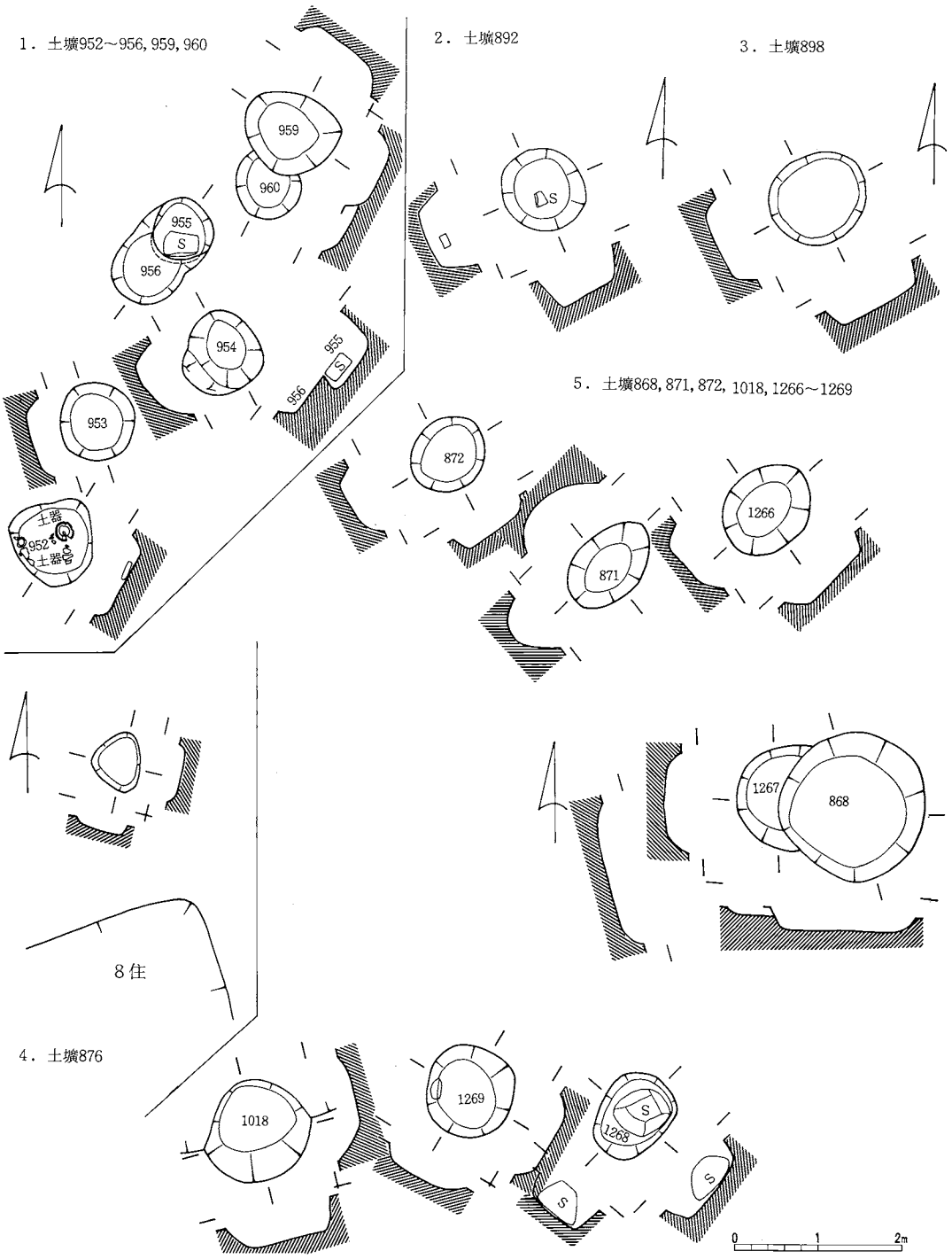


1．土壙913～915, 918, 944～951, 980, 982

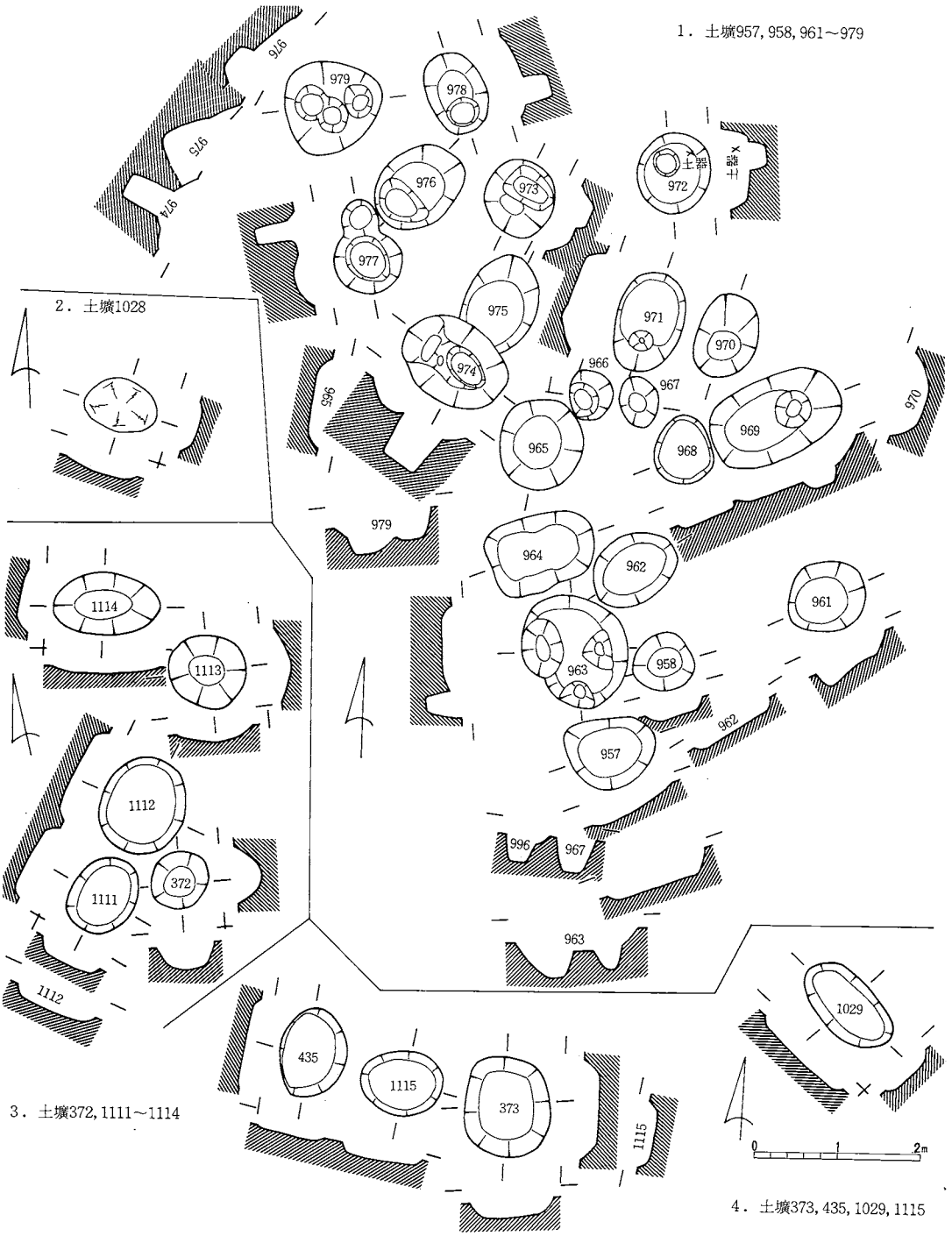
2．土壙943

3．土壙846, 1002, 1010～1012, 1257, 1272, 1274

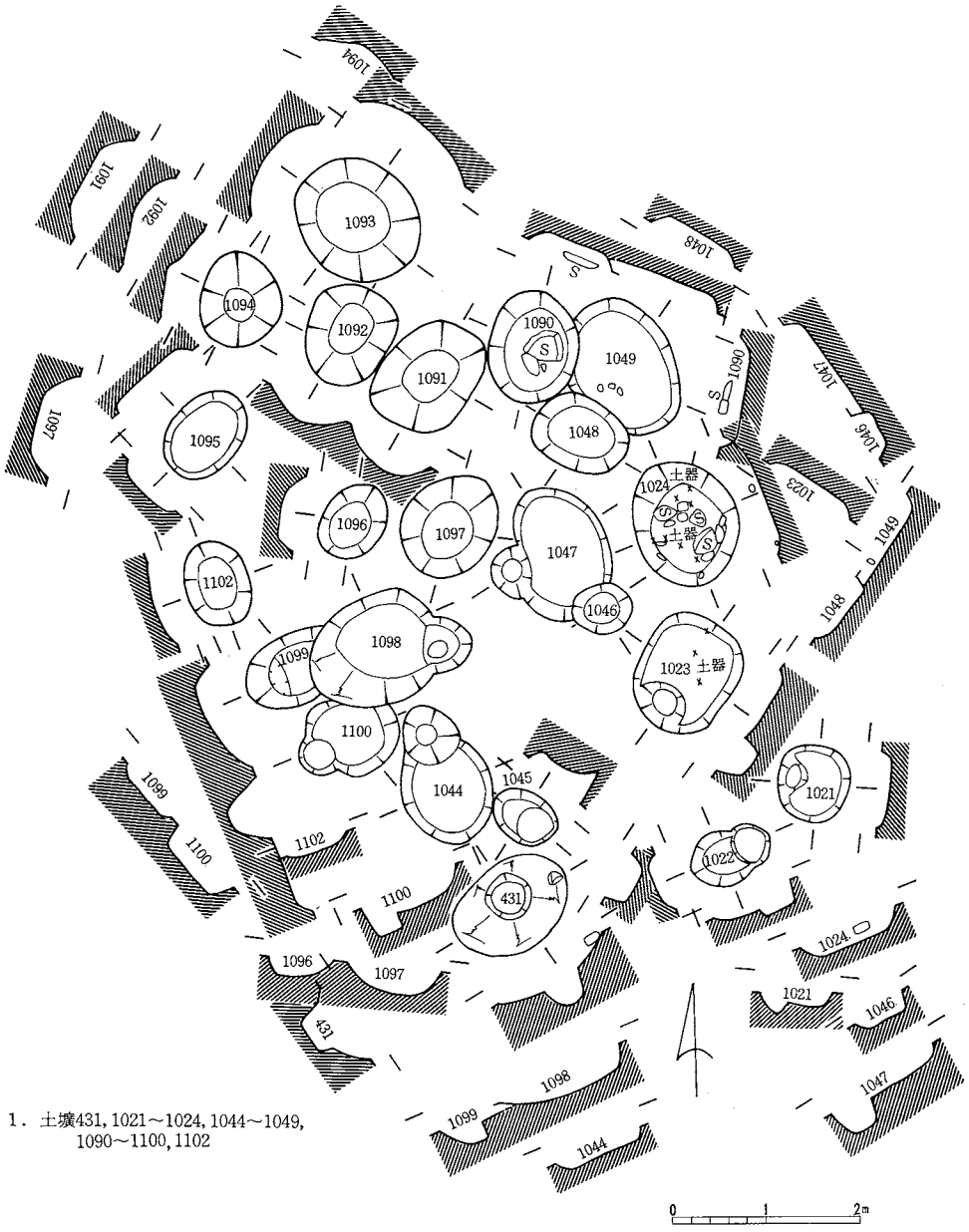
第82図　大石遺跡土壙実測図(その46)　(1：80)



第83図　大石遺跡土壙実測図(その47)　(1：80)

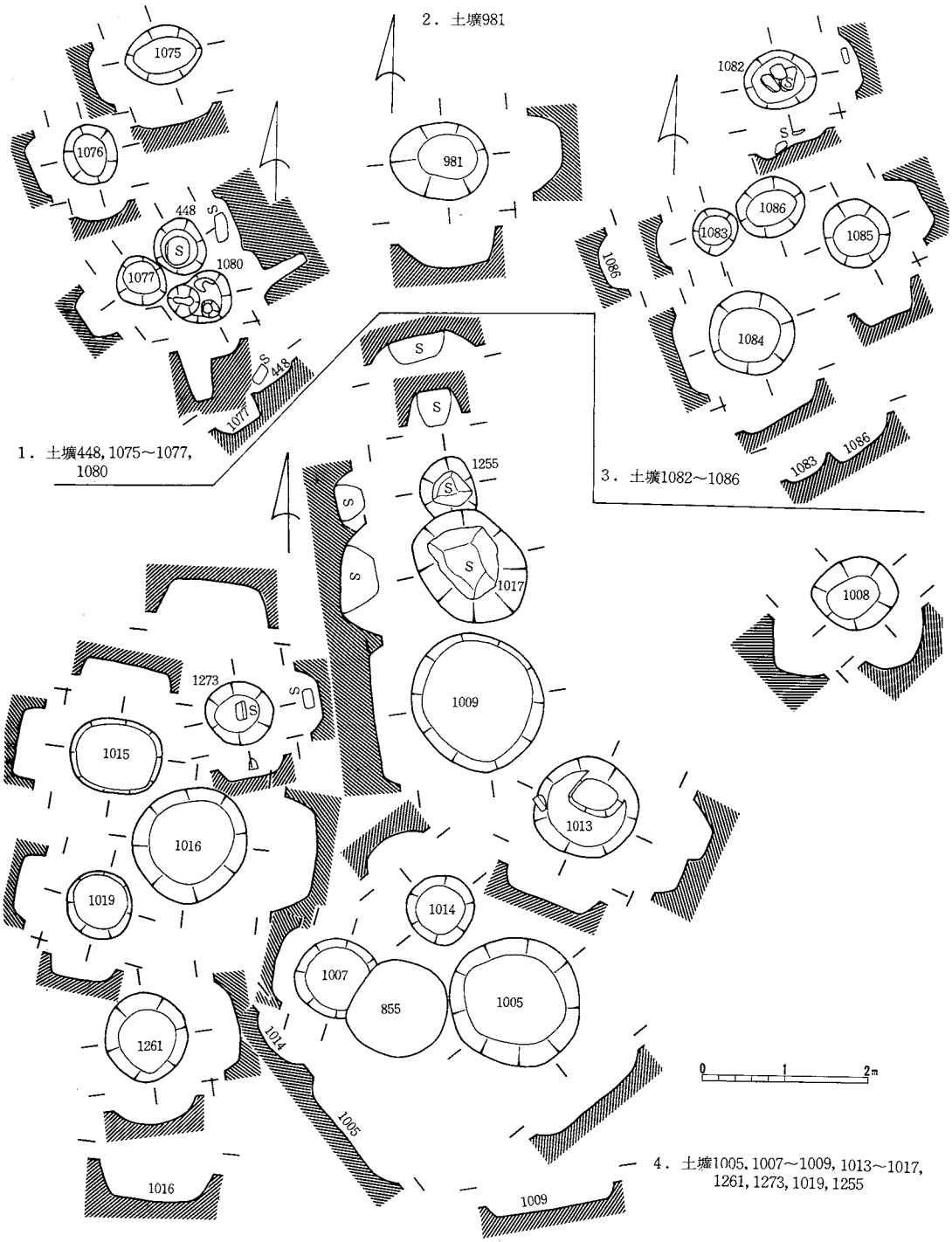


第84図　大石遺跡土壙実測図(その48)　(1：80)

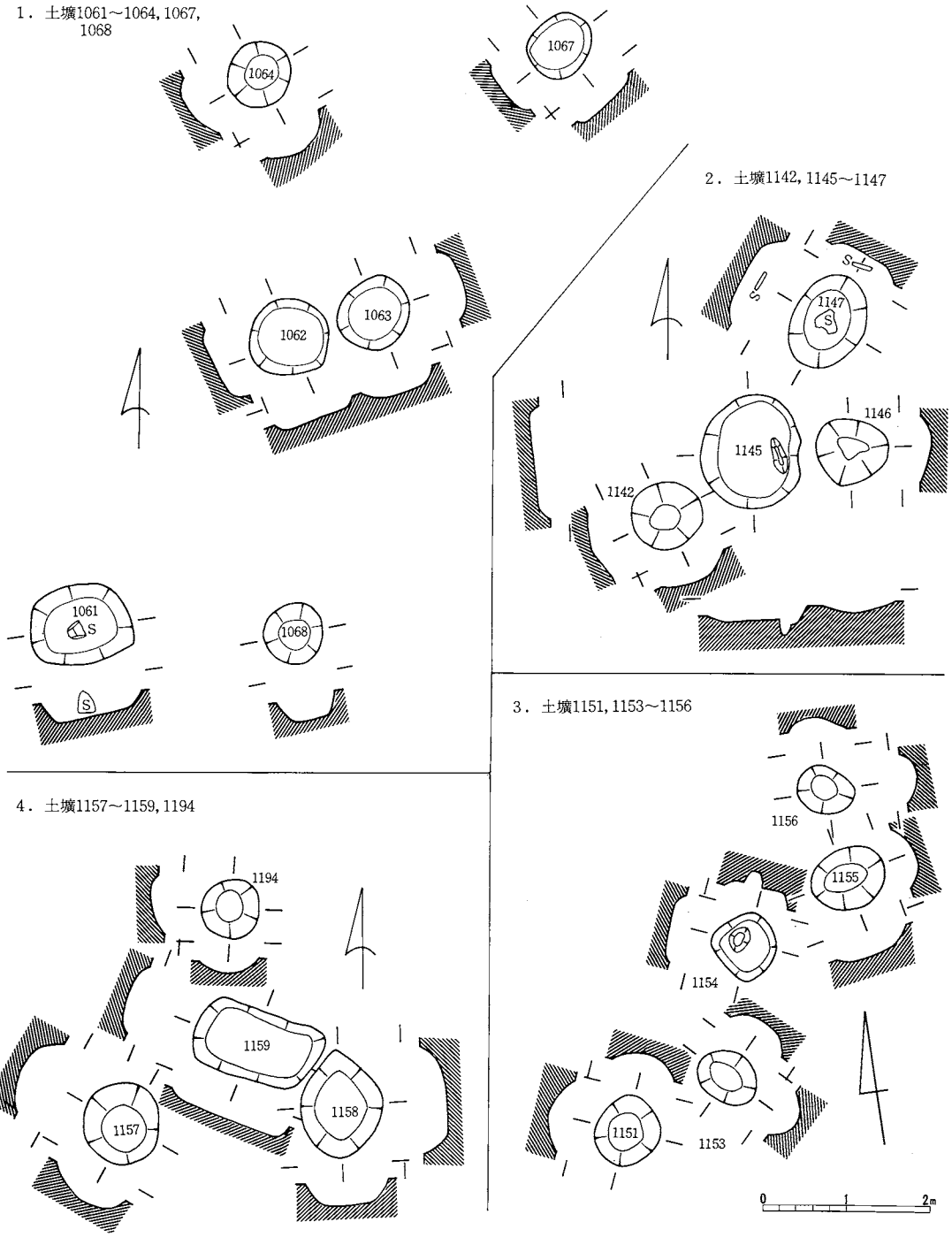


1．土壙431, 1021～1024, 1044～1049, 1090～1100, 1102

第85図　大石遺跡土壙実測図(その49)　(1：80)

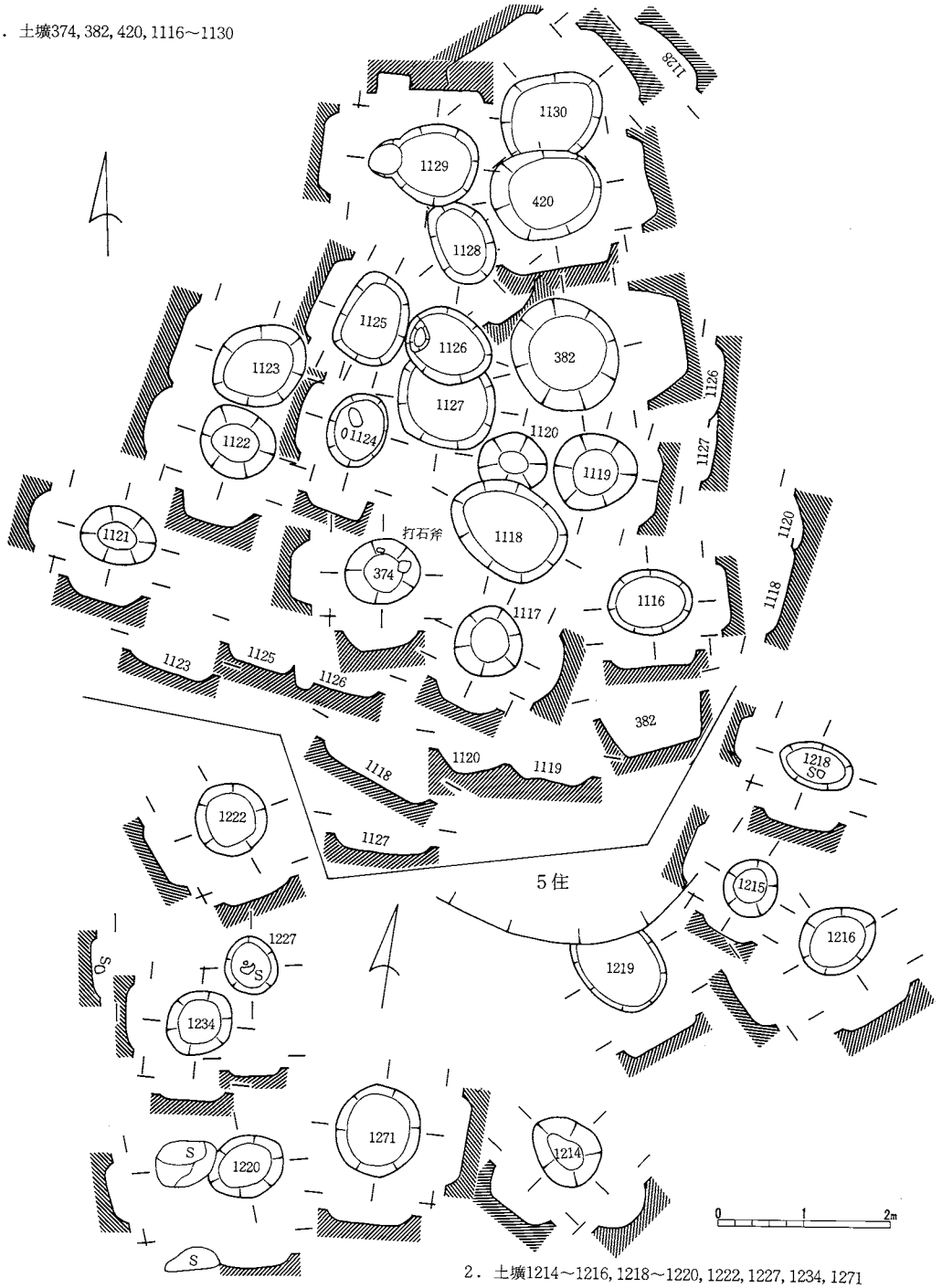


第86図　大石遺跡土壙実測図(その50)　(1：80)



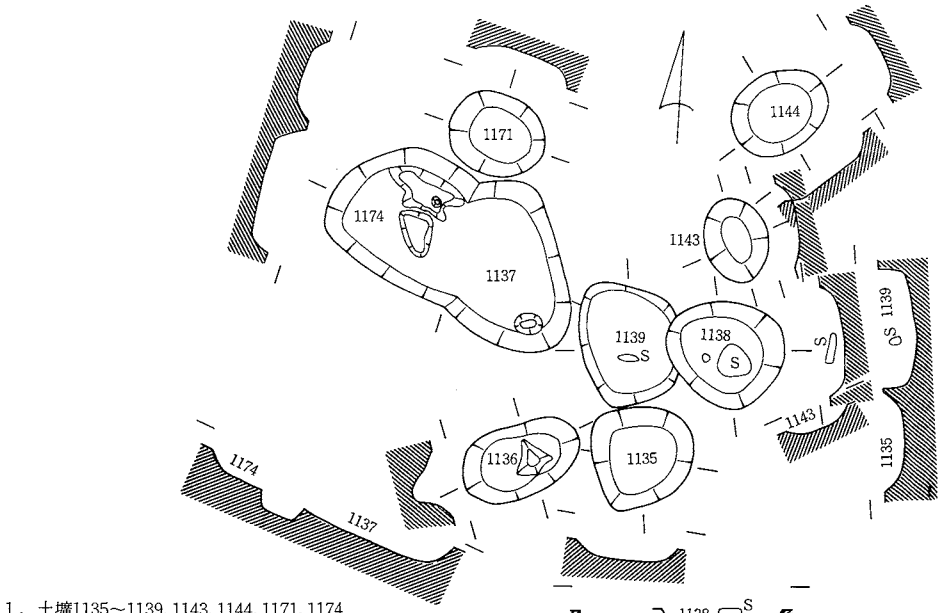
第87図　大石遺跡土壙実測図(その51)　　(1：80)

1．土壙374, 382, 420, 1116～1130

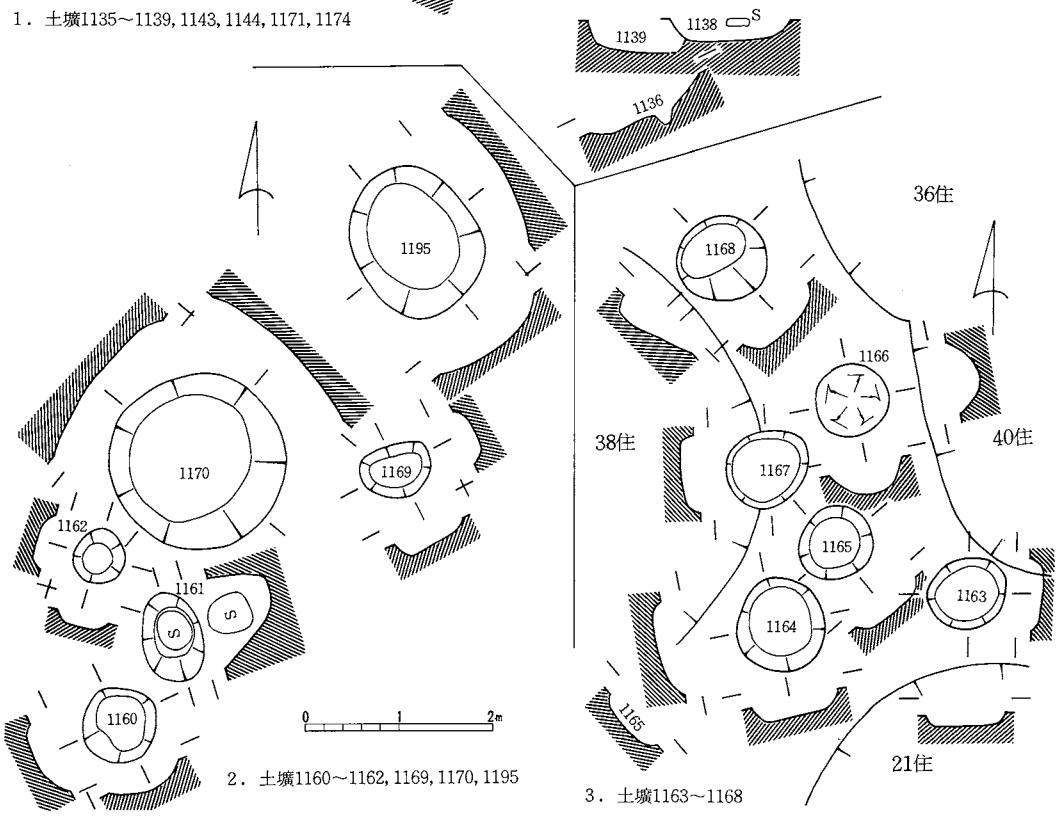


2．土壙1214～1216, 1218～1220, 1222, 1227, 1234, 1271

第88図　大石遺跡土壙実測図(その52)　(1：80)



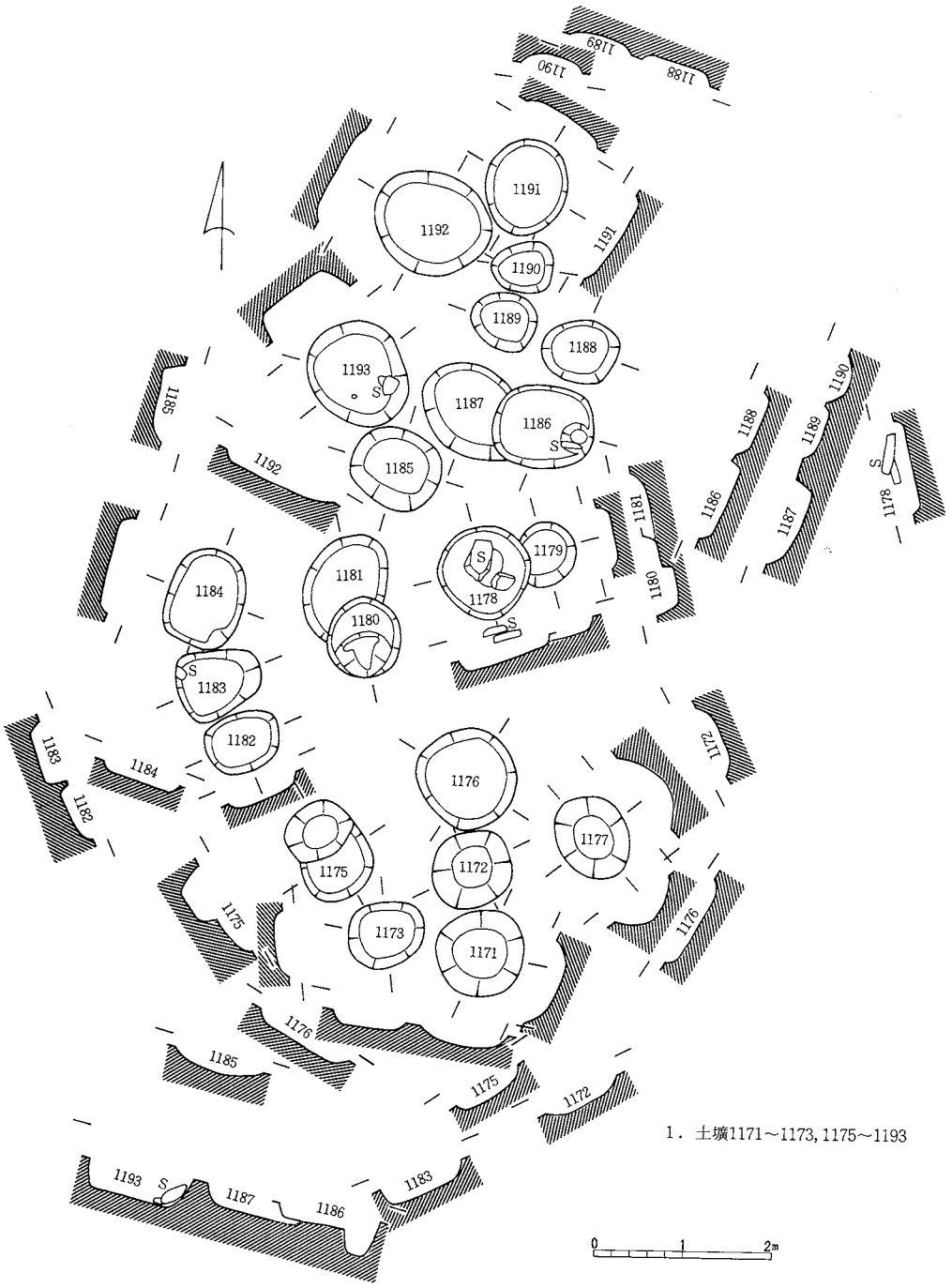
1．土壙1135～1139, 1143, 1144, 1171, 1174



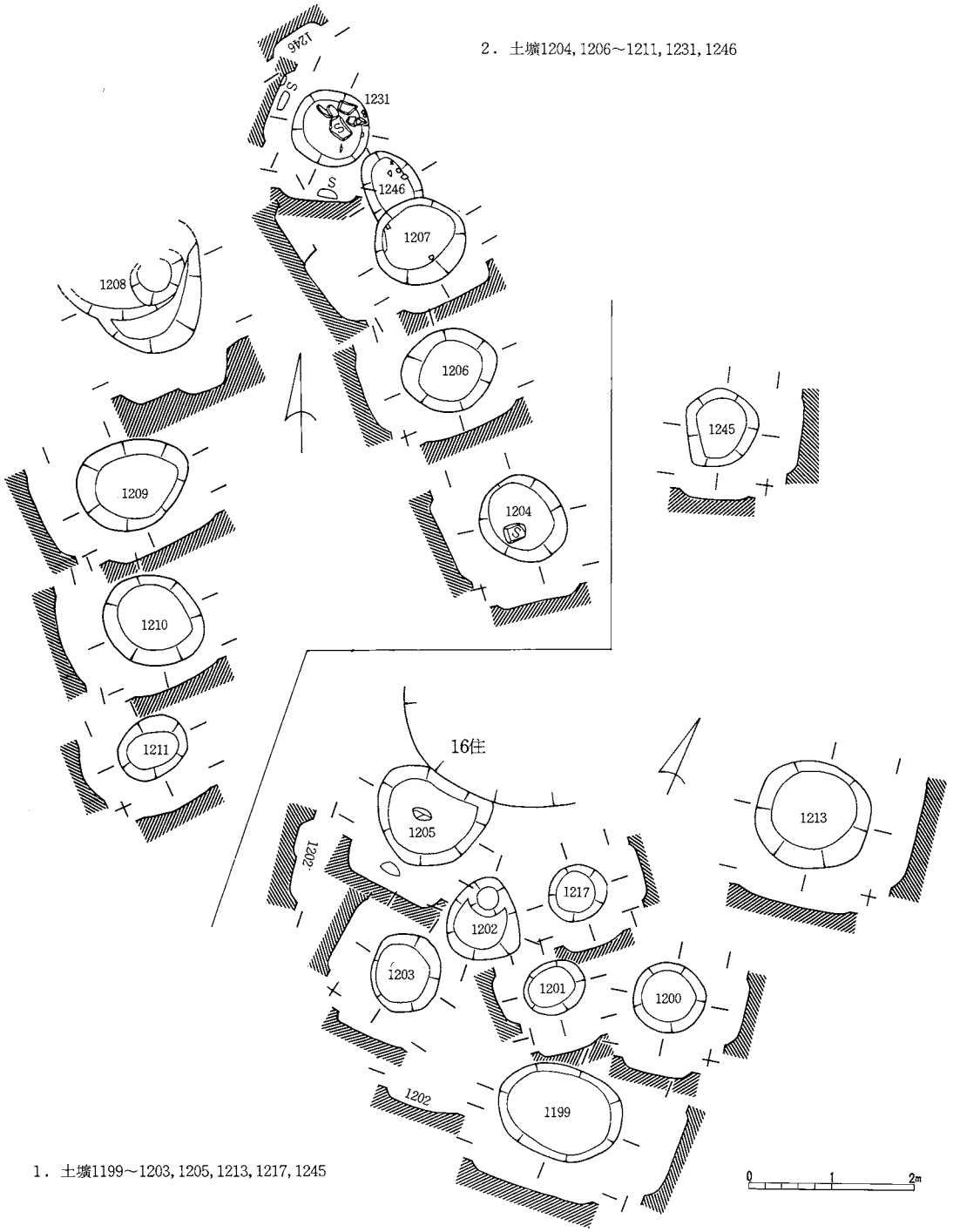
2．土壙1160～1162, 1169, 1170, 1195

3．土壙1163～1168

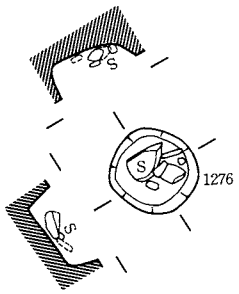
第89図　大石遺跡土壙実測図(その53)　　(1：80)

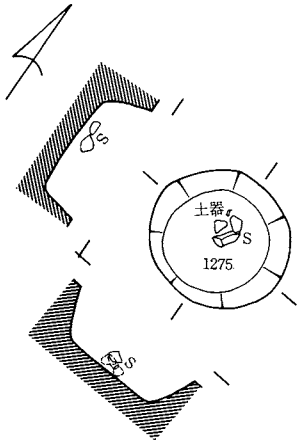


第90図　大石遺跡土壙実測図(その54)　(1：80)

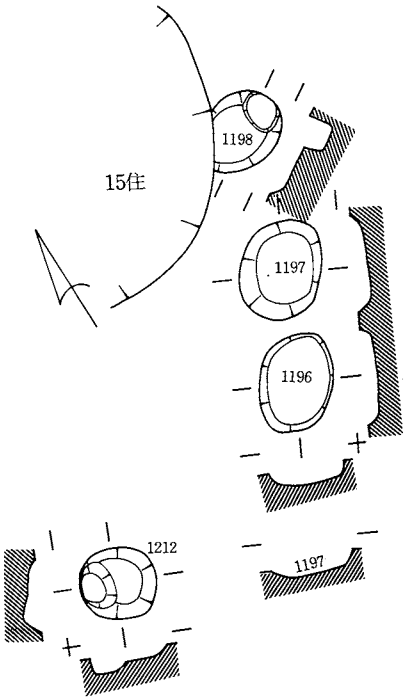


第91図　大石遺跡土壙実測図(その55)　　(1：80)

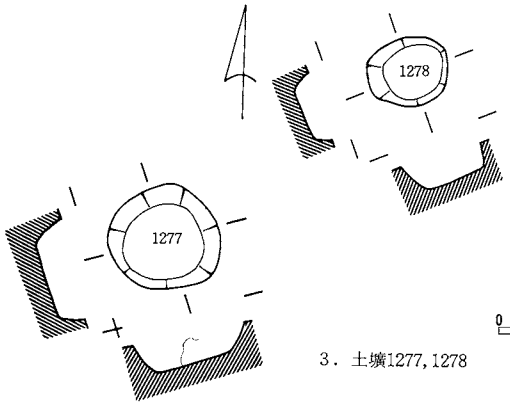




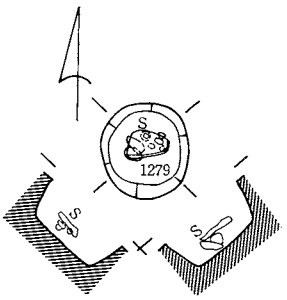
2．土壙1275, 1276



1．土壙1196～1198, 1212

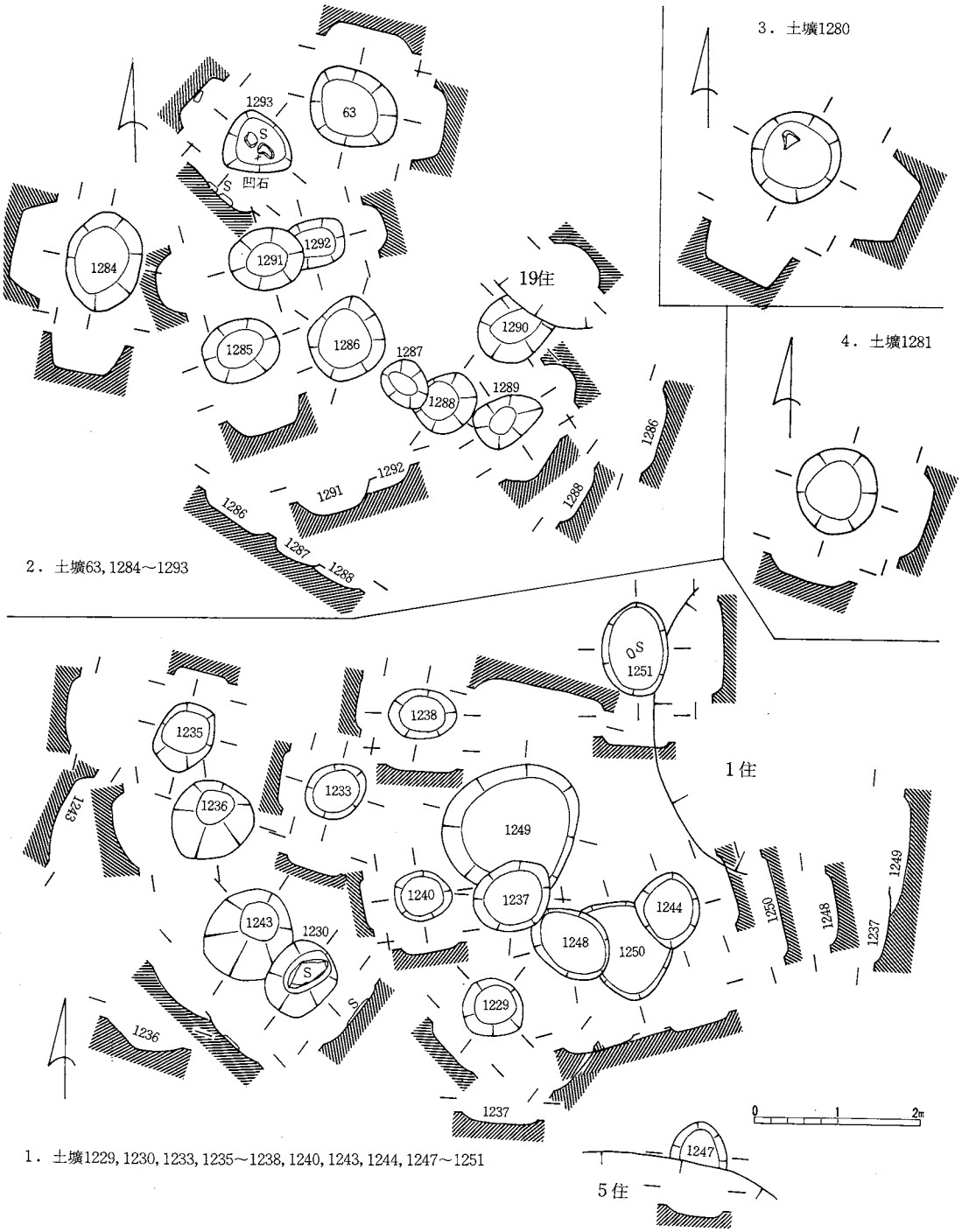


3．土壙1277, 1278

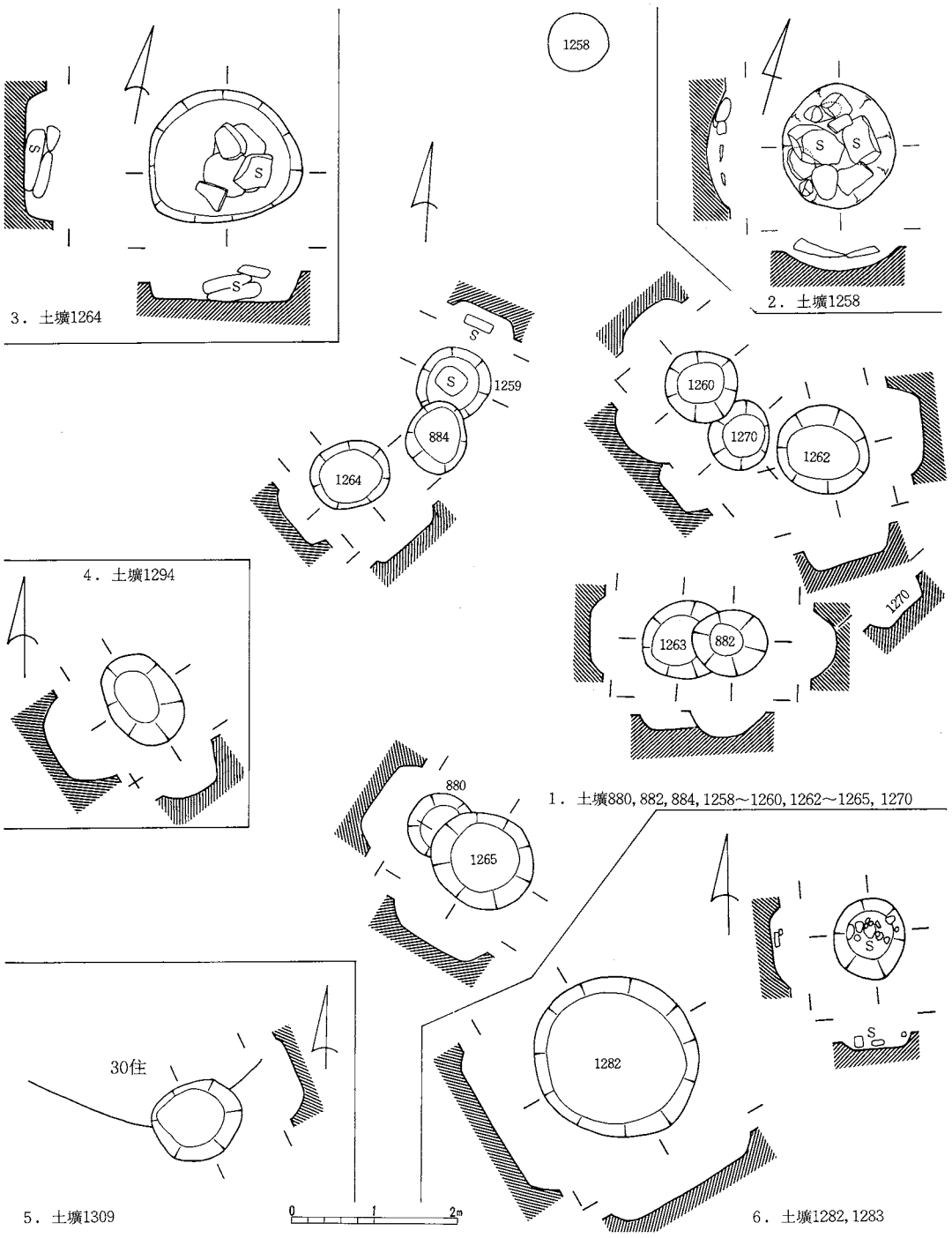


4．土壙1279

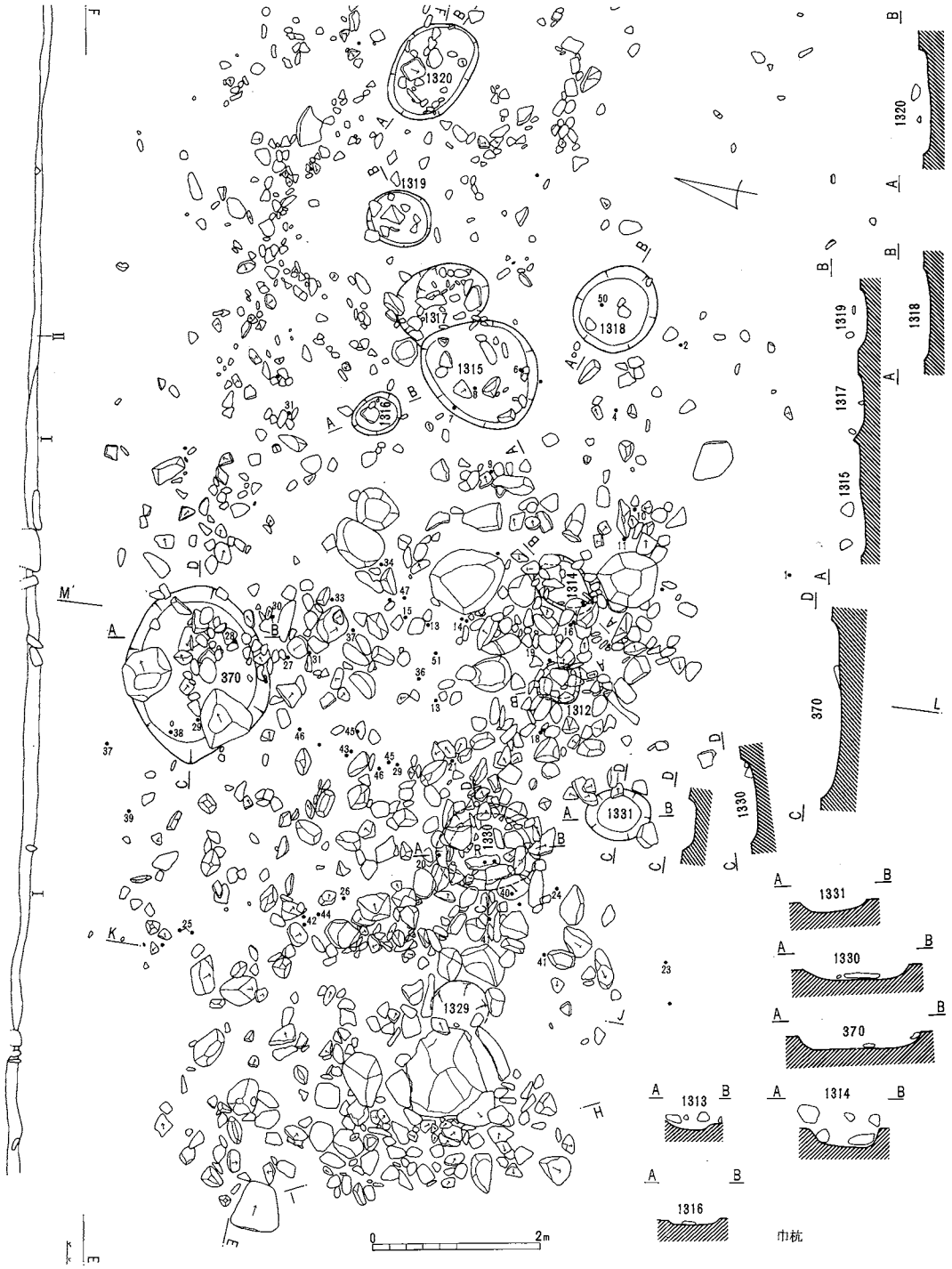
第92図　大石遺跡土壙実測図(その56)　　(1：80)



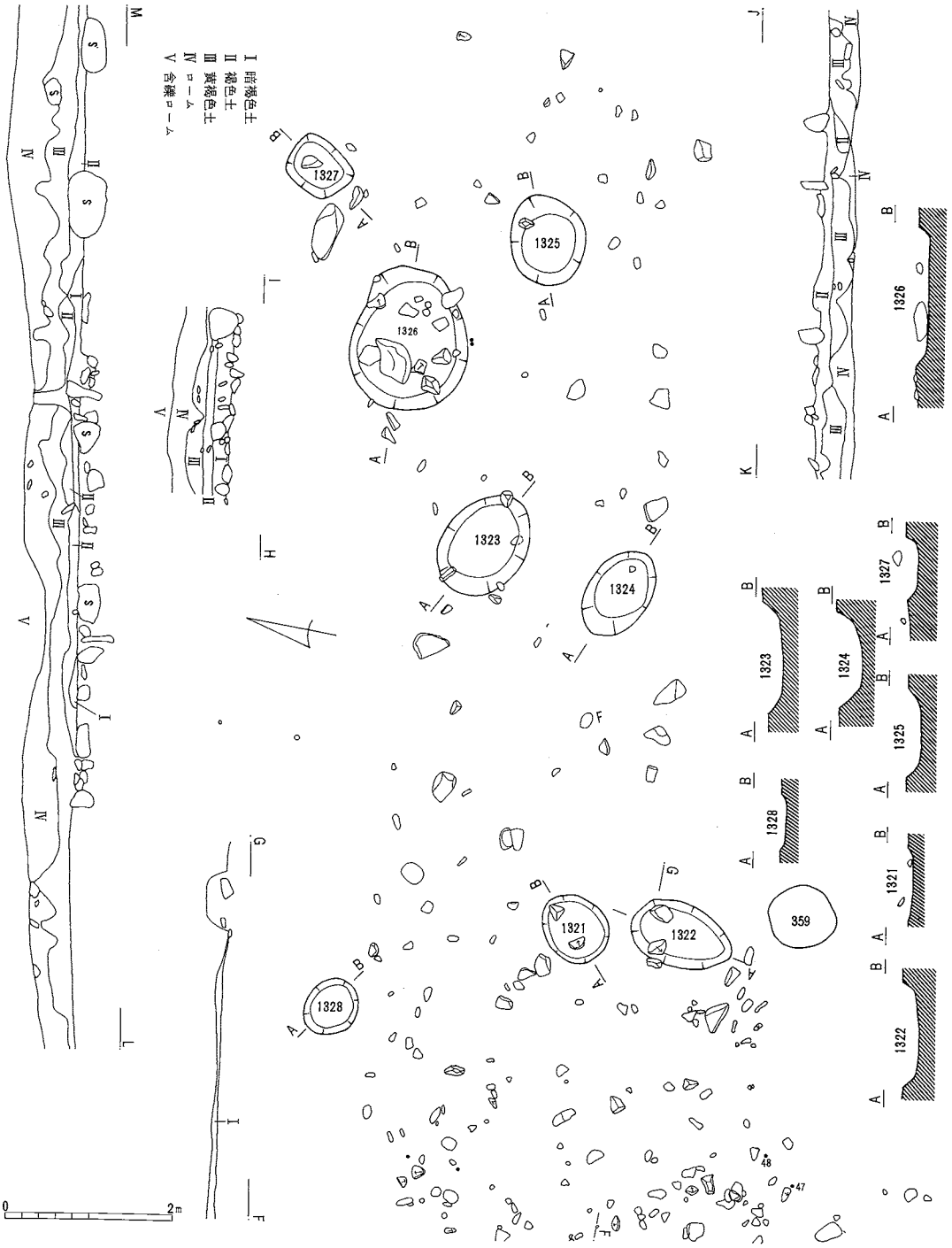
第93図　大石遺跡土壙実測図(その57)　(1：80)



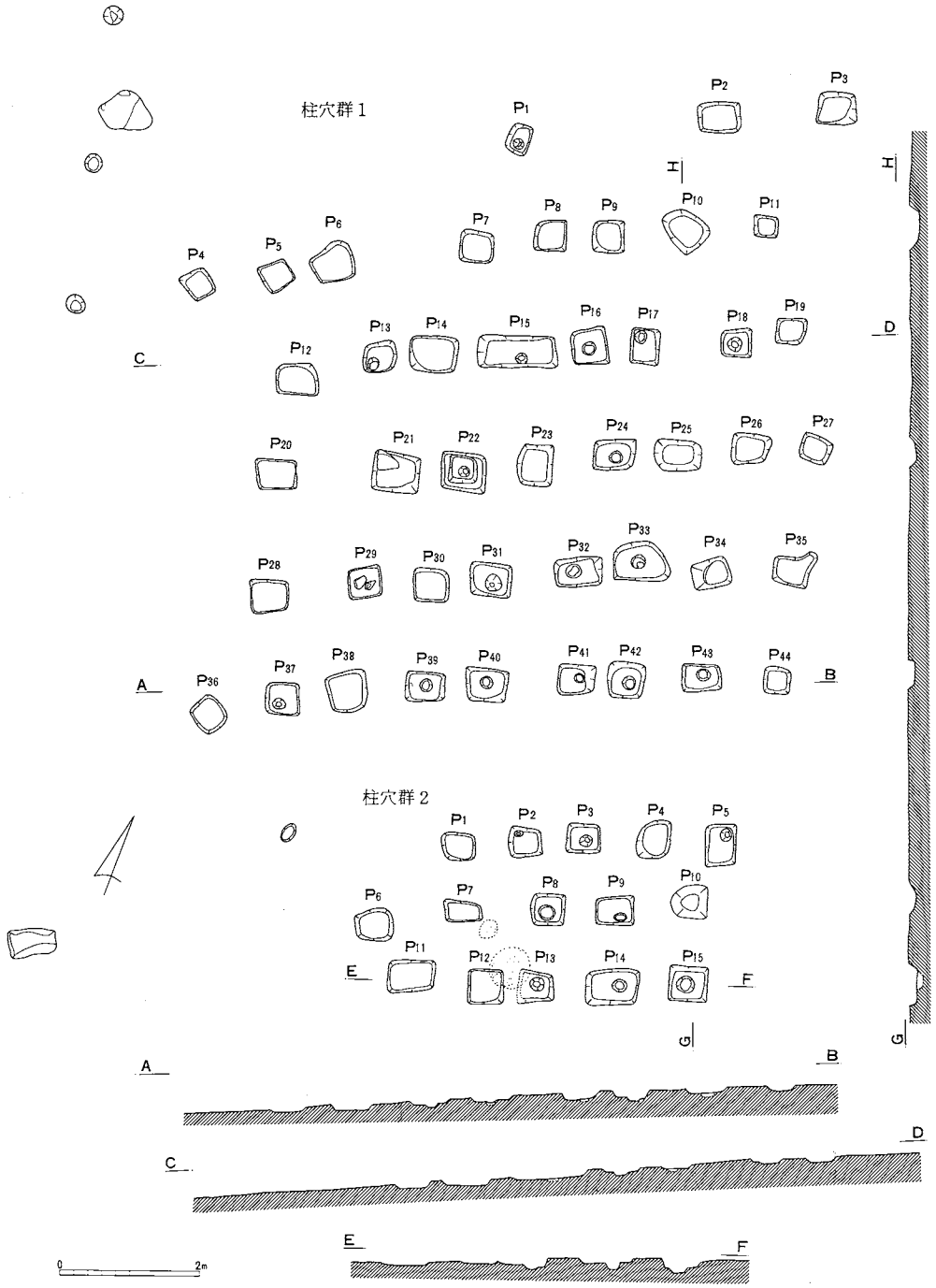
第94図　大石遺跡土壙実測図(その58)　(1：80 但し2・3は1：40)



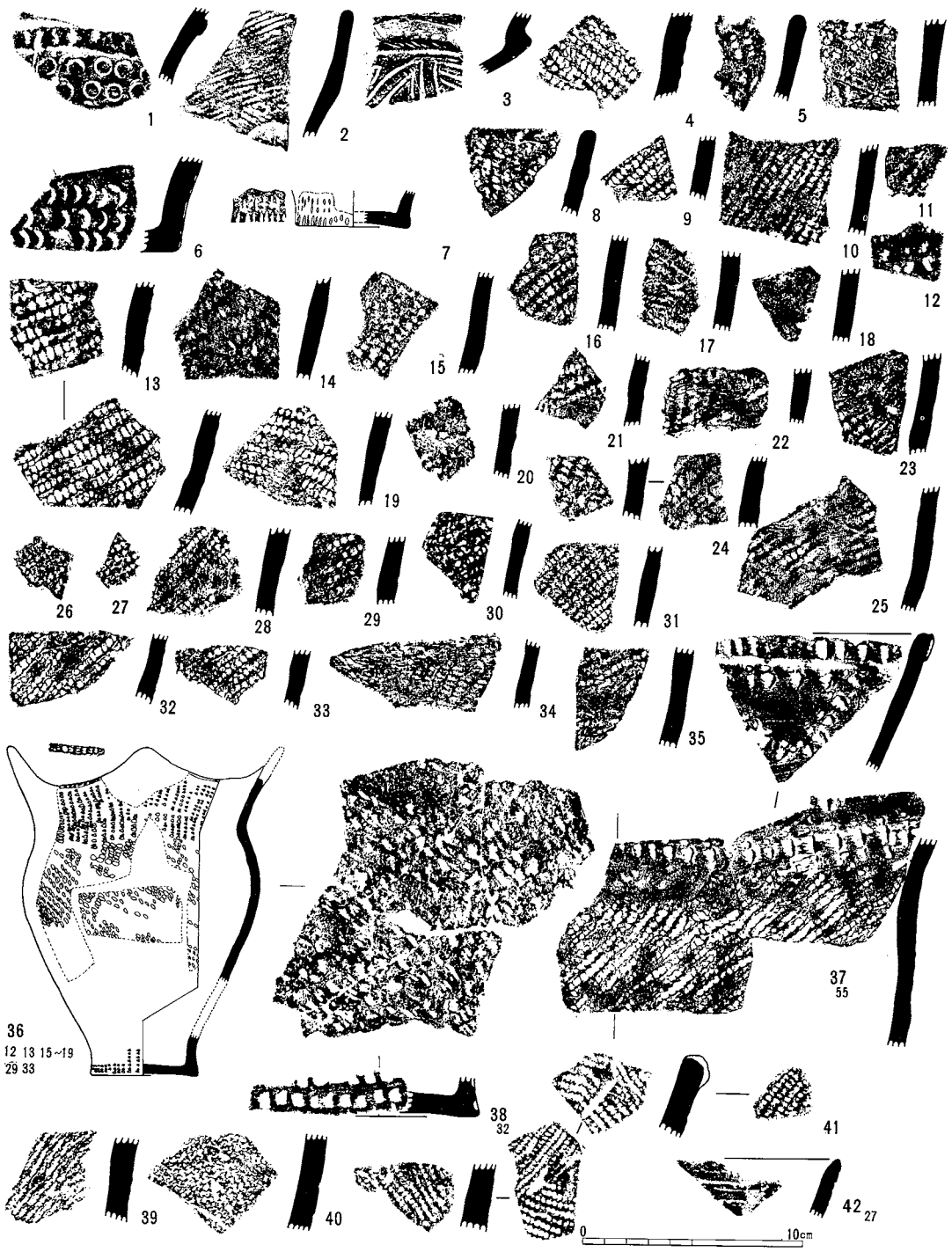
第95図　大石遺跡配石状礫群・土壙実測図(その59)(1：80)



第96図　大石遺跡配石状礫群・土壙実測図(その60)(1：80)

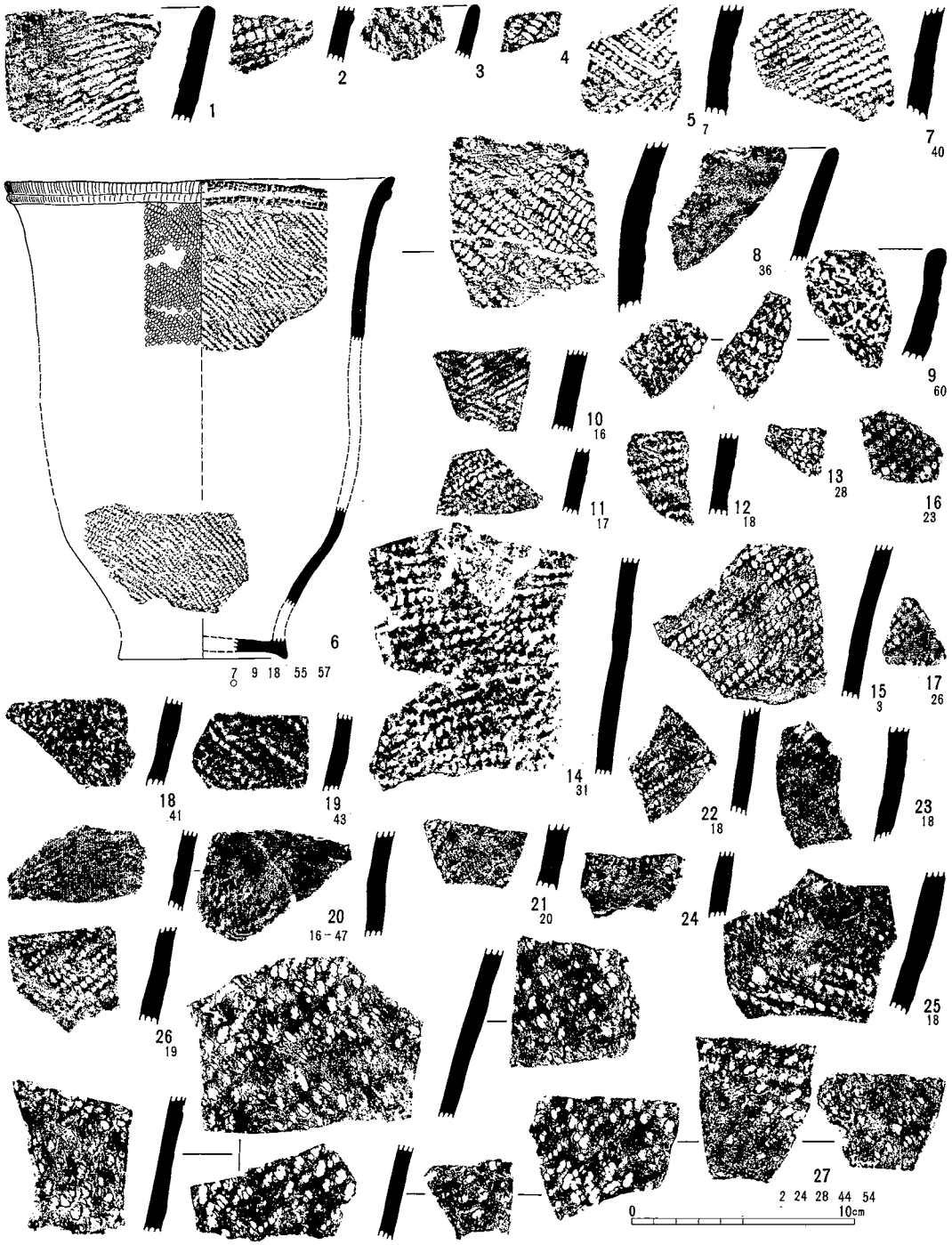


第97図　大石遺跡柱穴群１・２(１：100)　(基準線は標高927.78m)



第98図　大石遺跡第27号住居址出土土器(A)（1：3　但し7・36左は1：6）

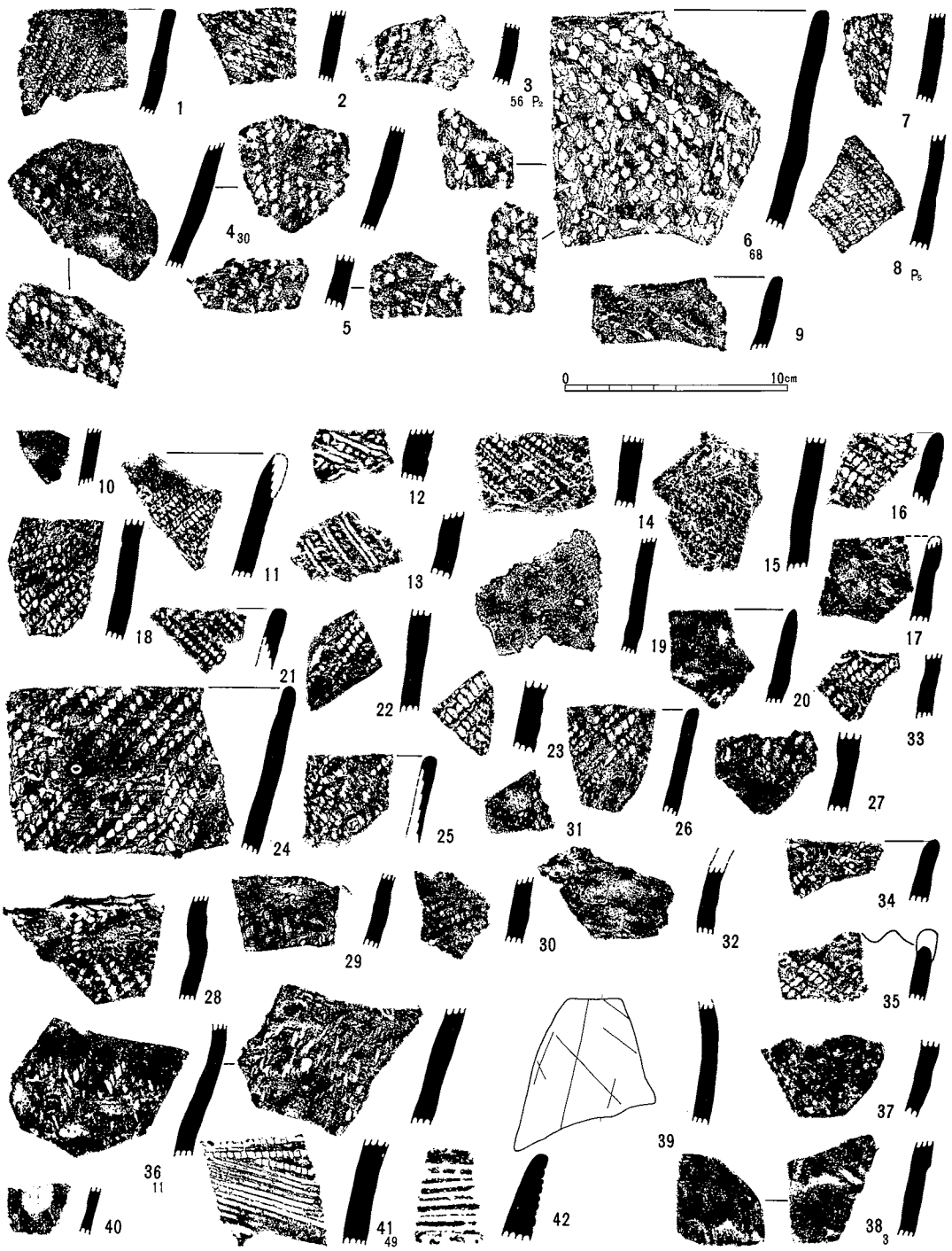
〈1～35・39～41　覆土上層〉



第99図　大石遺跡第27号住居址出土土器(B)（1：3　但し6は1：6）

（1～4　覆土上層

第100図　大石遺跡第27号住居址(C)・28号旧住居址(A)出土土器(1：3　但し1・9は1：6)
〈1～12・27住，13～25・28旧住〉

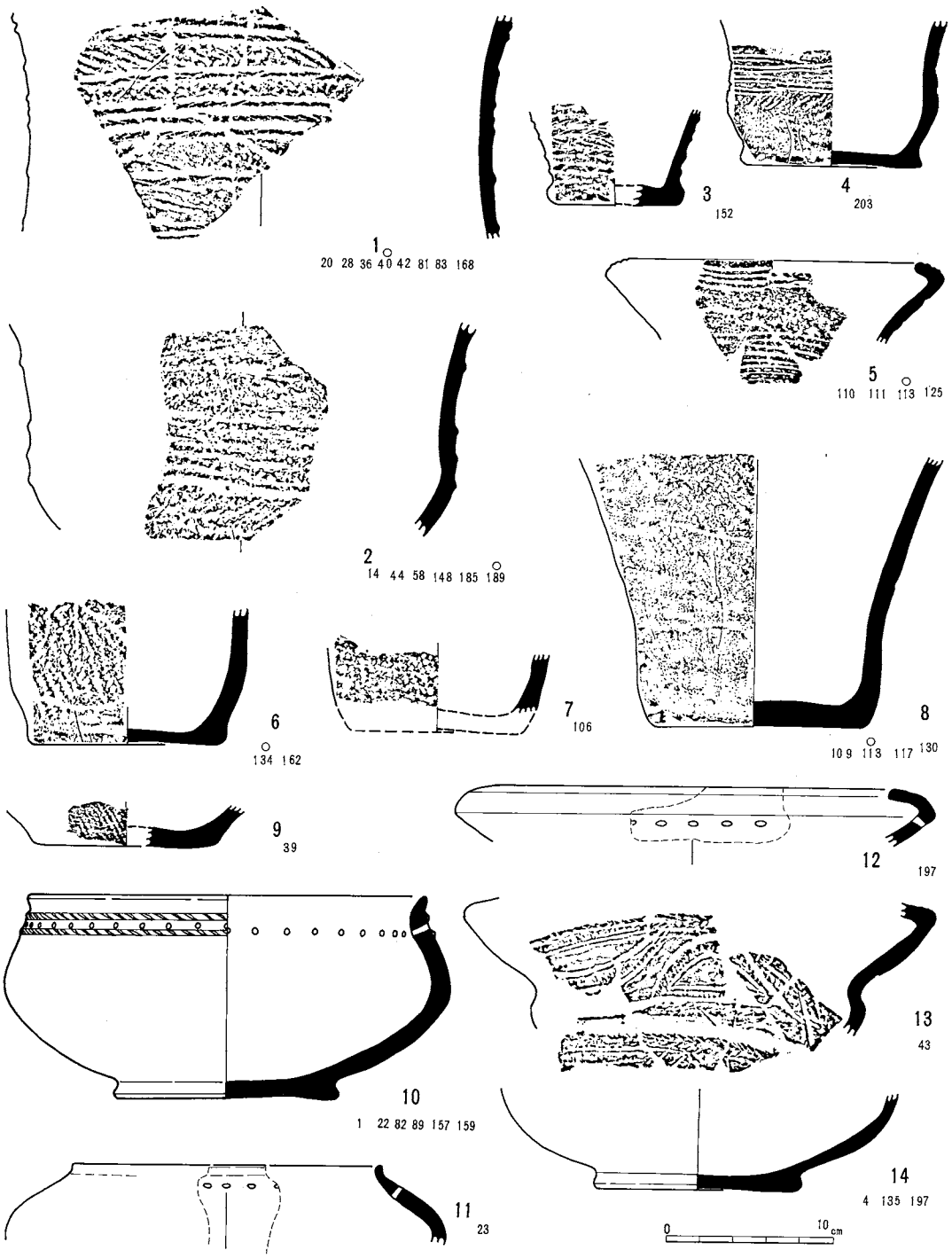


第101図　大石遺跡第28号旧住居址(B)・32号住居址出土土器(A)(1：3)

〈1～9・28住，10～35・37・40　32住覆土上層，36・38・42　32住，　41　27住〉

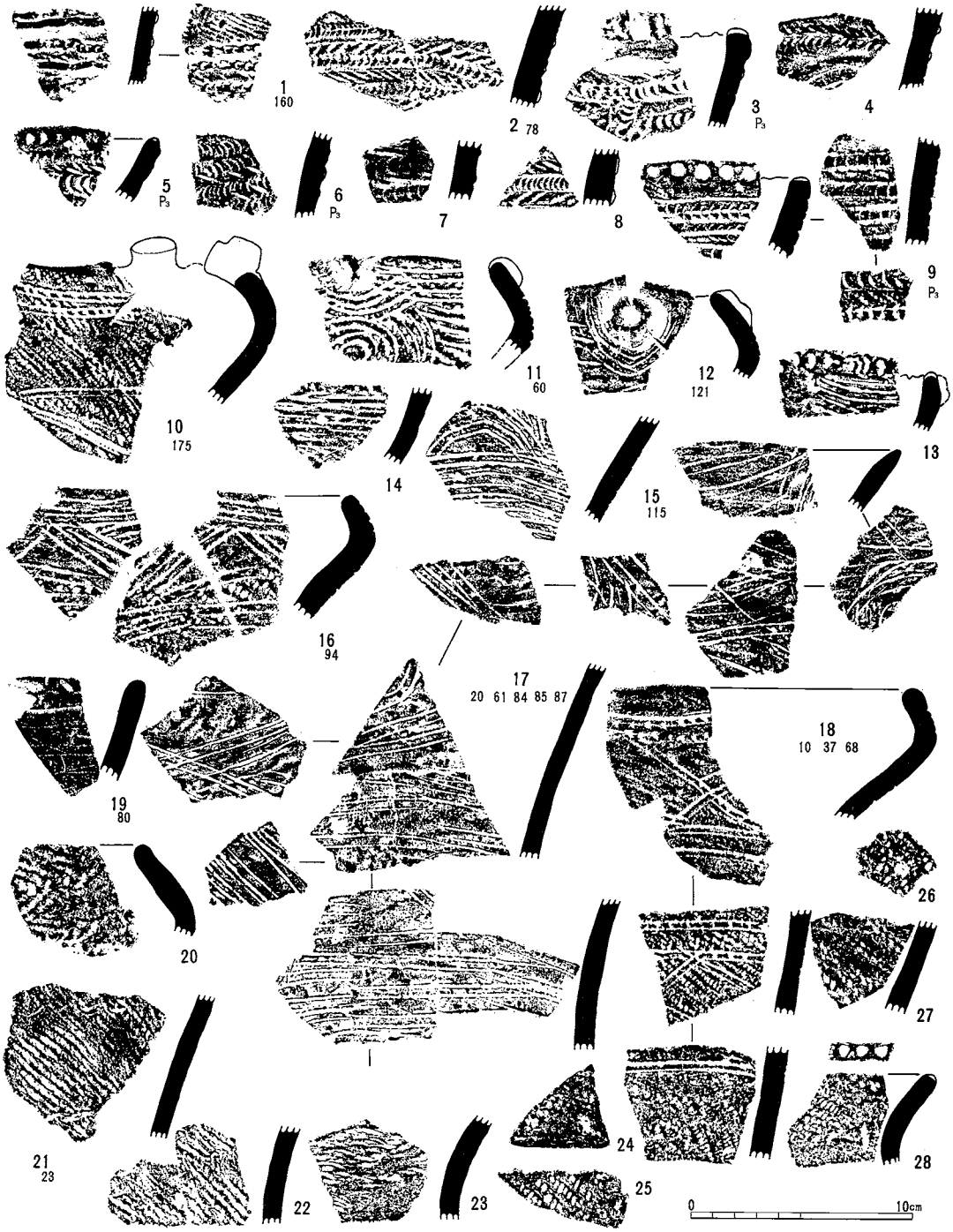
第102図　大石遺跡第32号住居址(B)・33号住居址出土土器（1：3　但し3・21は1：6）

〈1～19　32住，20～23　33住〉



第103図　大石遺跡第39号住居址出土土器(A)（1：4）

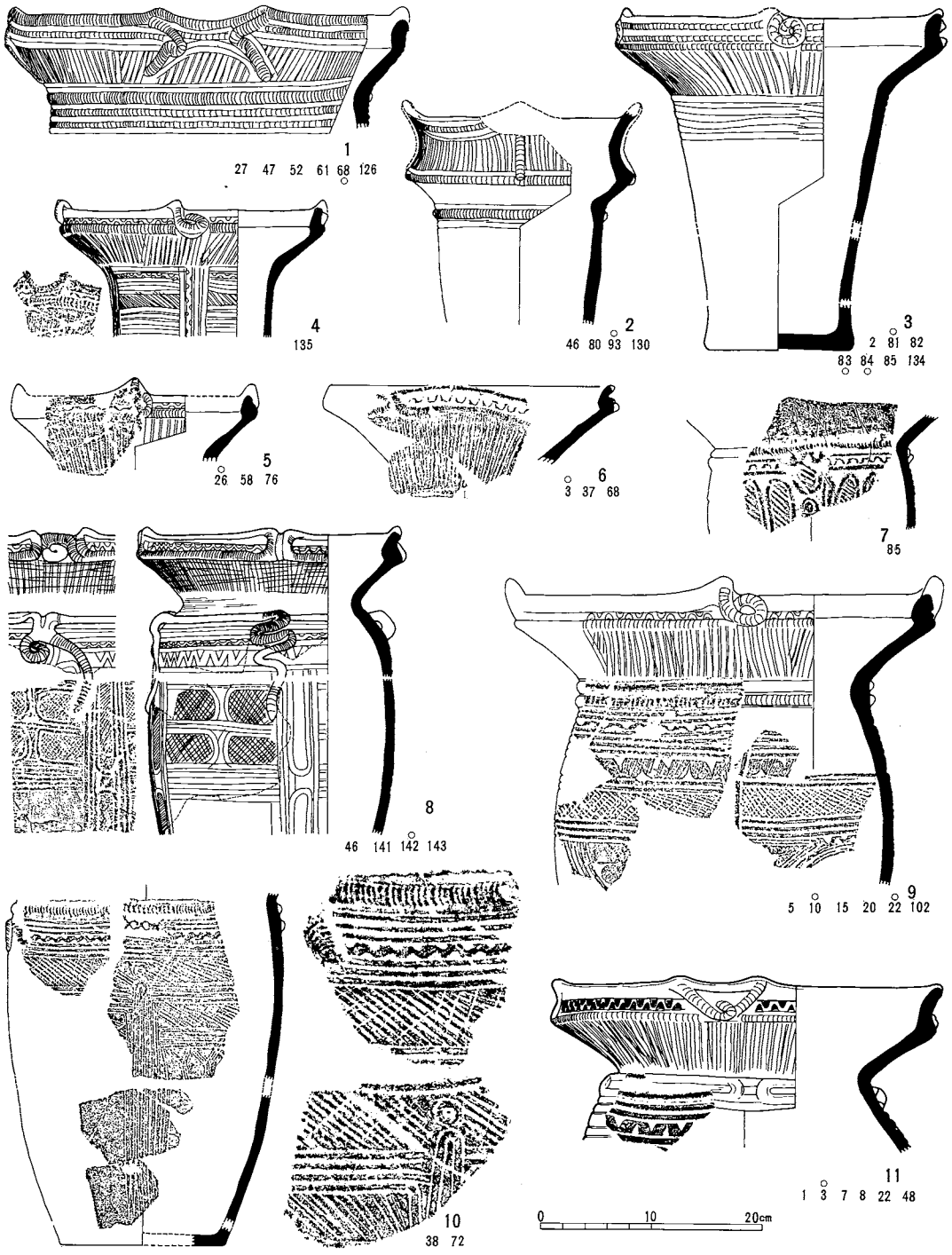
第104図　大石遺跡第39号住居址出土土器(B)（1：3　但し1～5は1：4）



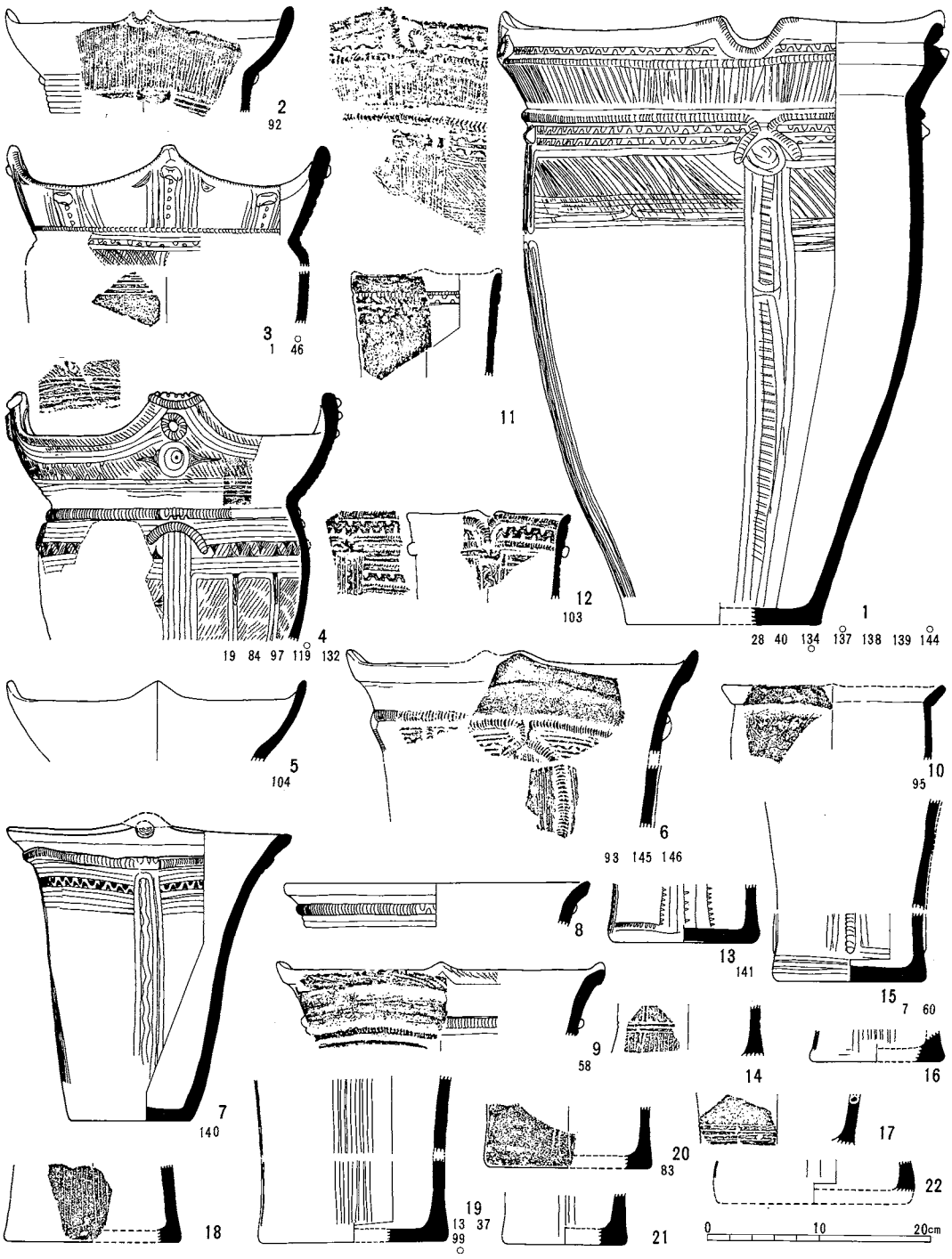
第105図　大石遺跡第39号住居址出土土器(C)(1：3)

第106図　大石遺跡第39号住居址出土土器(D)(1：3)

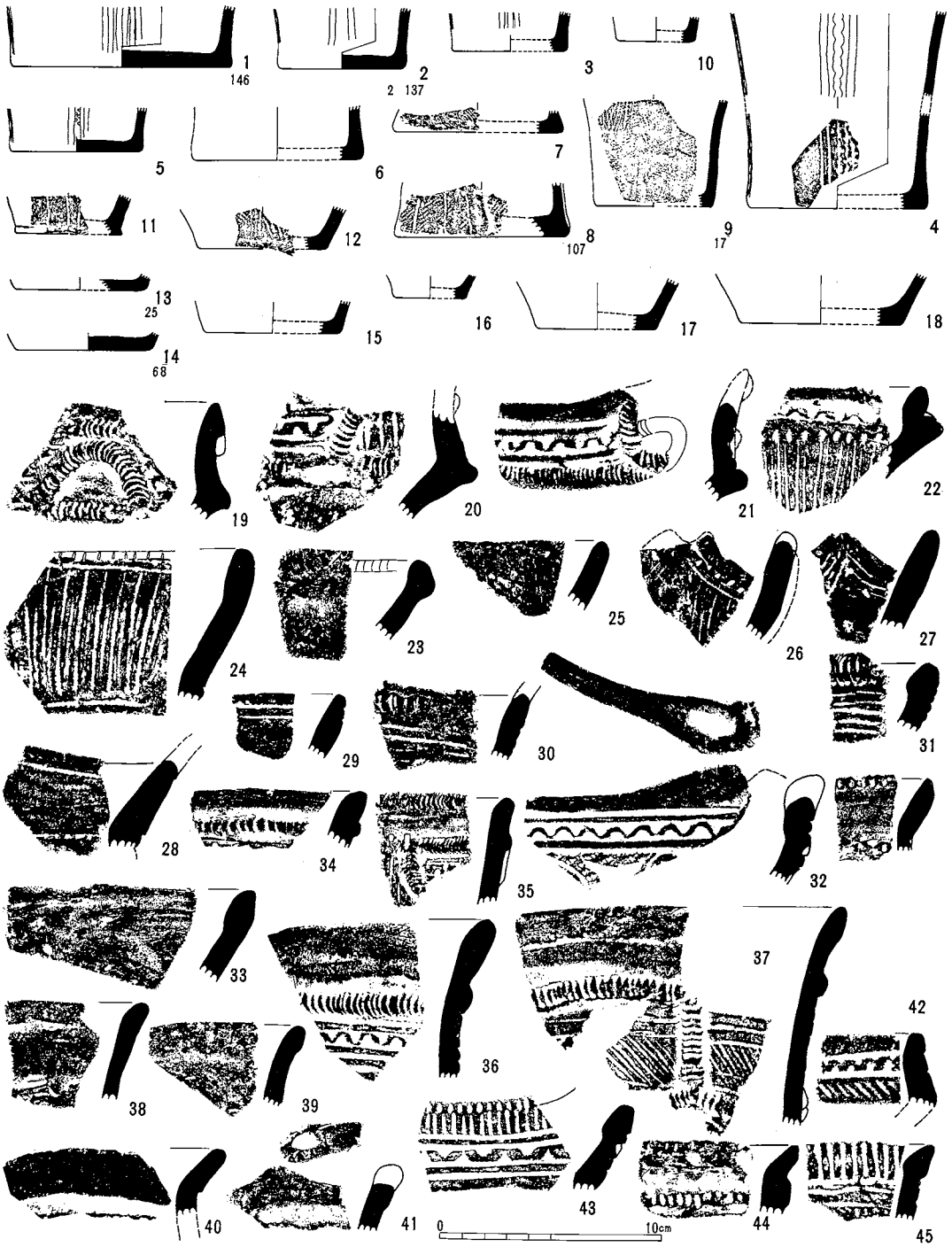
第107図　大石遺跡第39号住居址出土土器(E)(1：3)



第108図　大石遺跡第１号住居址出土土器(A)（１：６　但し10右は１：３）

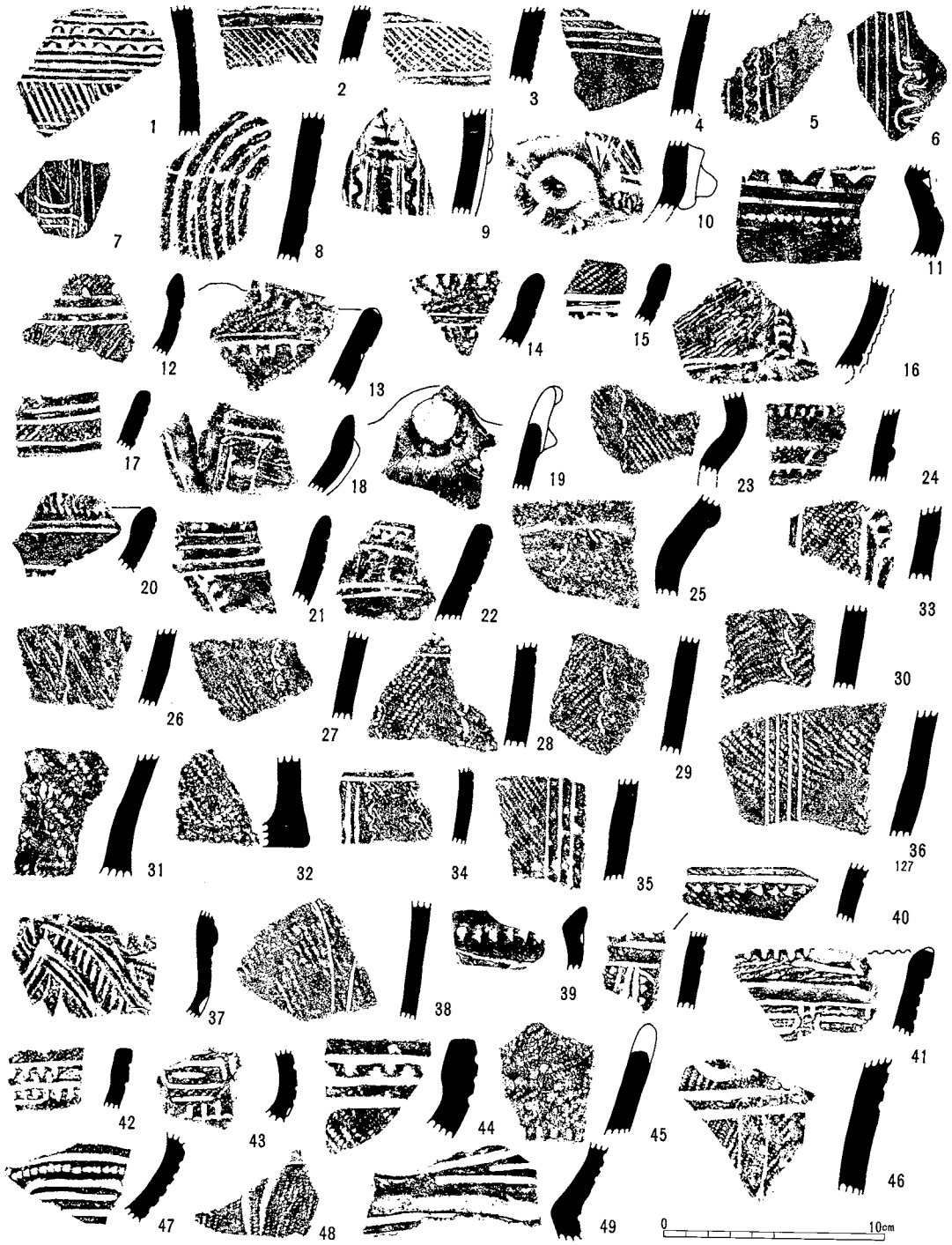


第109図　大石遺跡第１号住居址出土土器(B)(１：６)

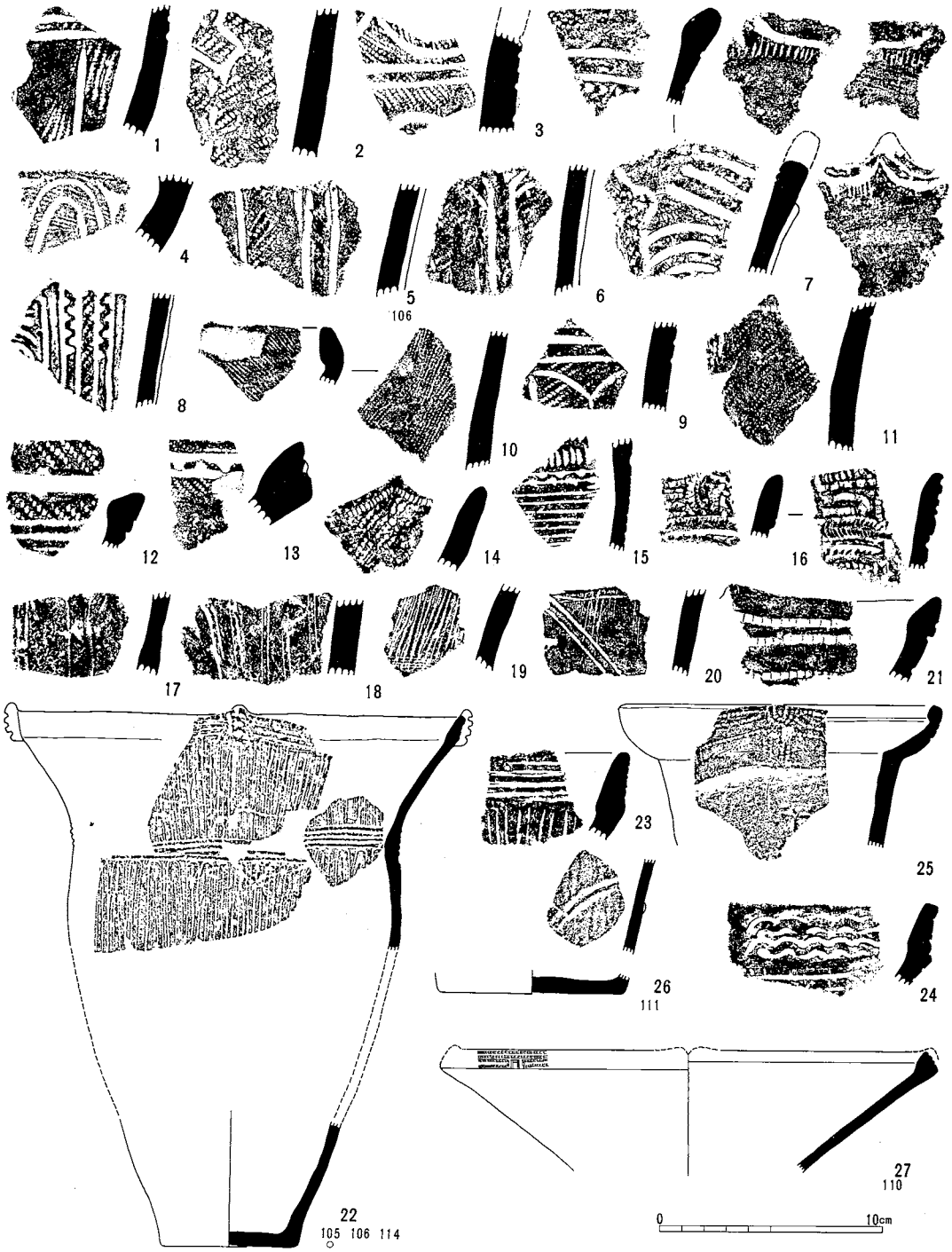


第110図　大石遺跡第１号住居址出土土器(C)（１～18は１：６，19～45は１：３）

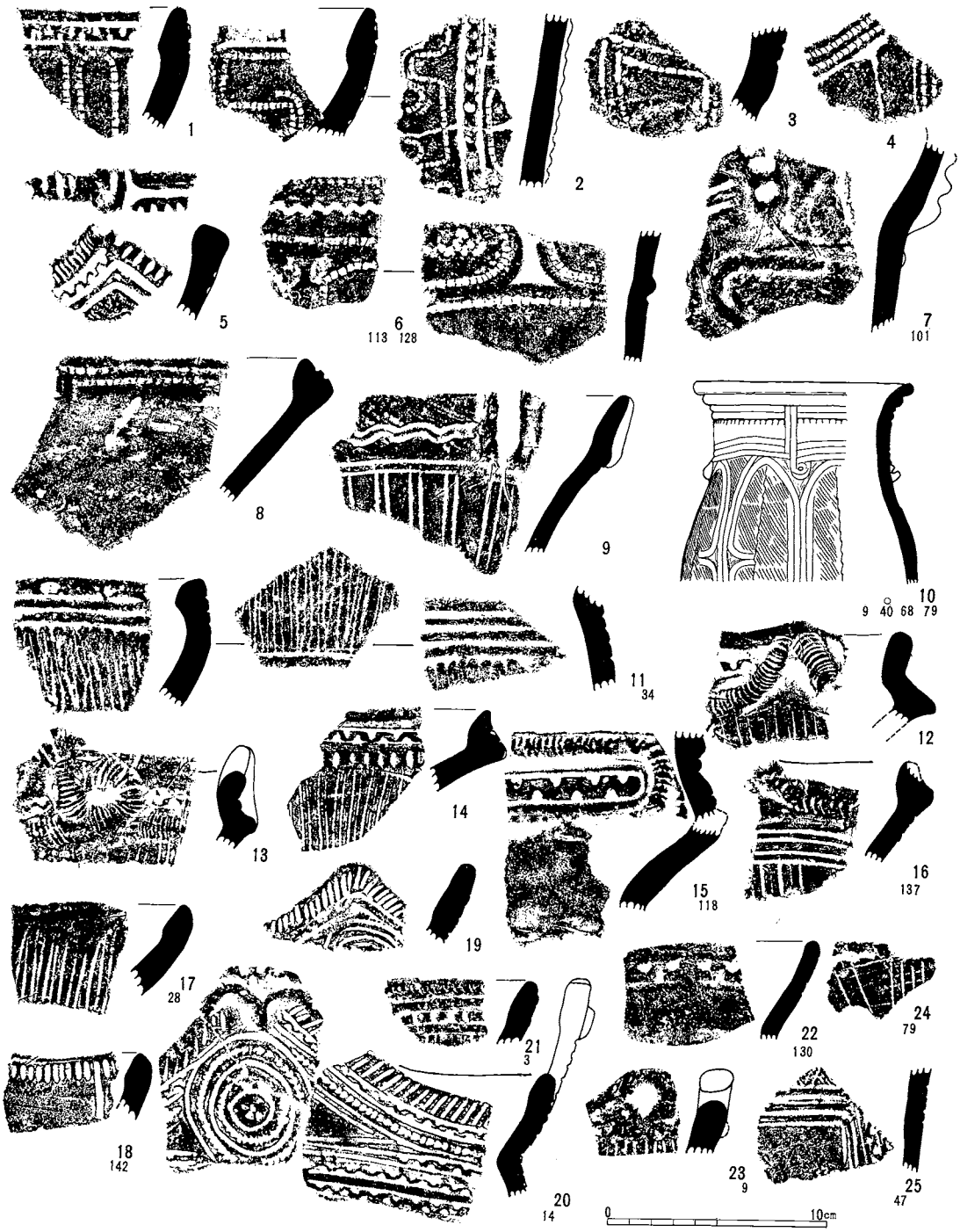
第111図　大石遺跡第１号住居址出土土器(D)(１：３)



第112図　大石遺跡第１号住居址出土土器(E)(１：３)

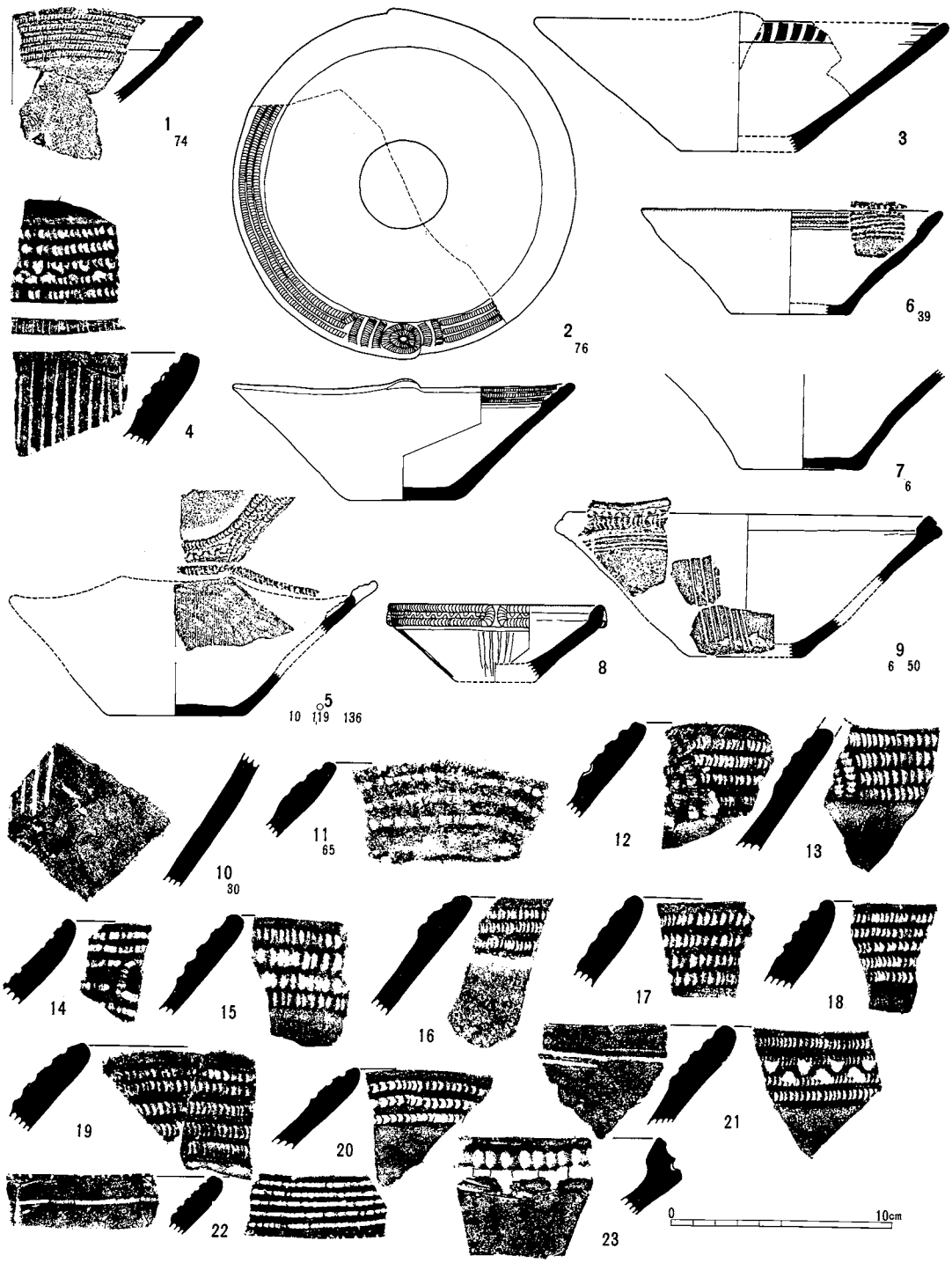


第113図　大石遺跡第１号住居址出土土器(F)（１：３　但し22・25～27は１：６）

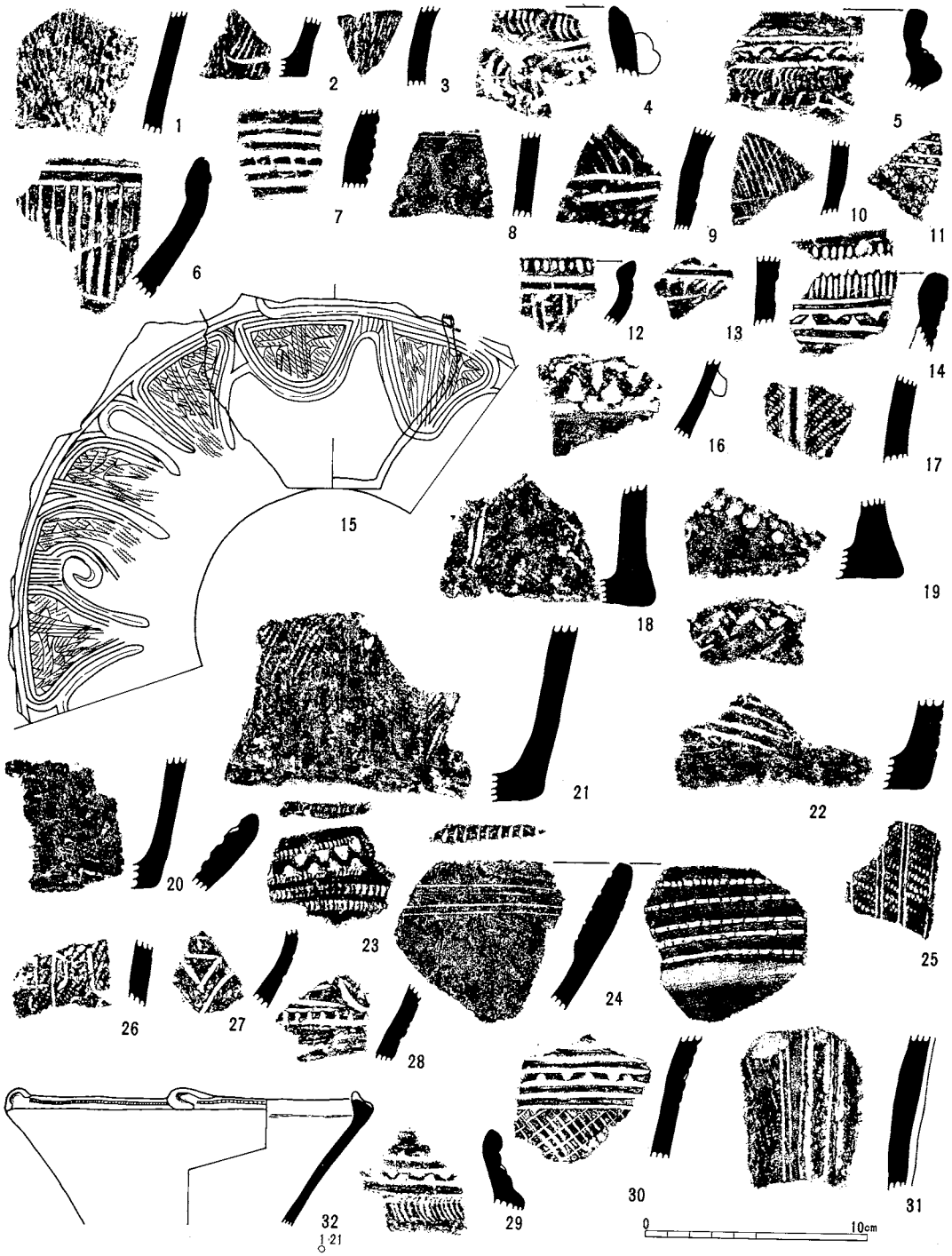


第114図　大石遺跡第１号住居址出土土器(G)（１：３　但し10は１：６）

第115図　大石遺跡第１号住居址出土土器(H)(１：３)

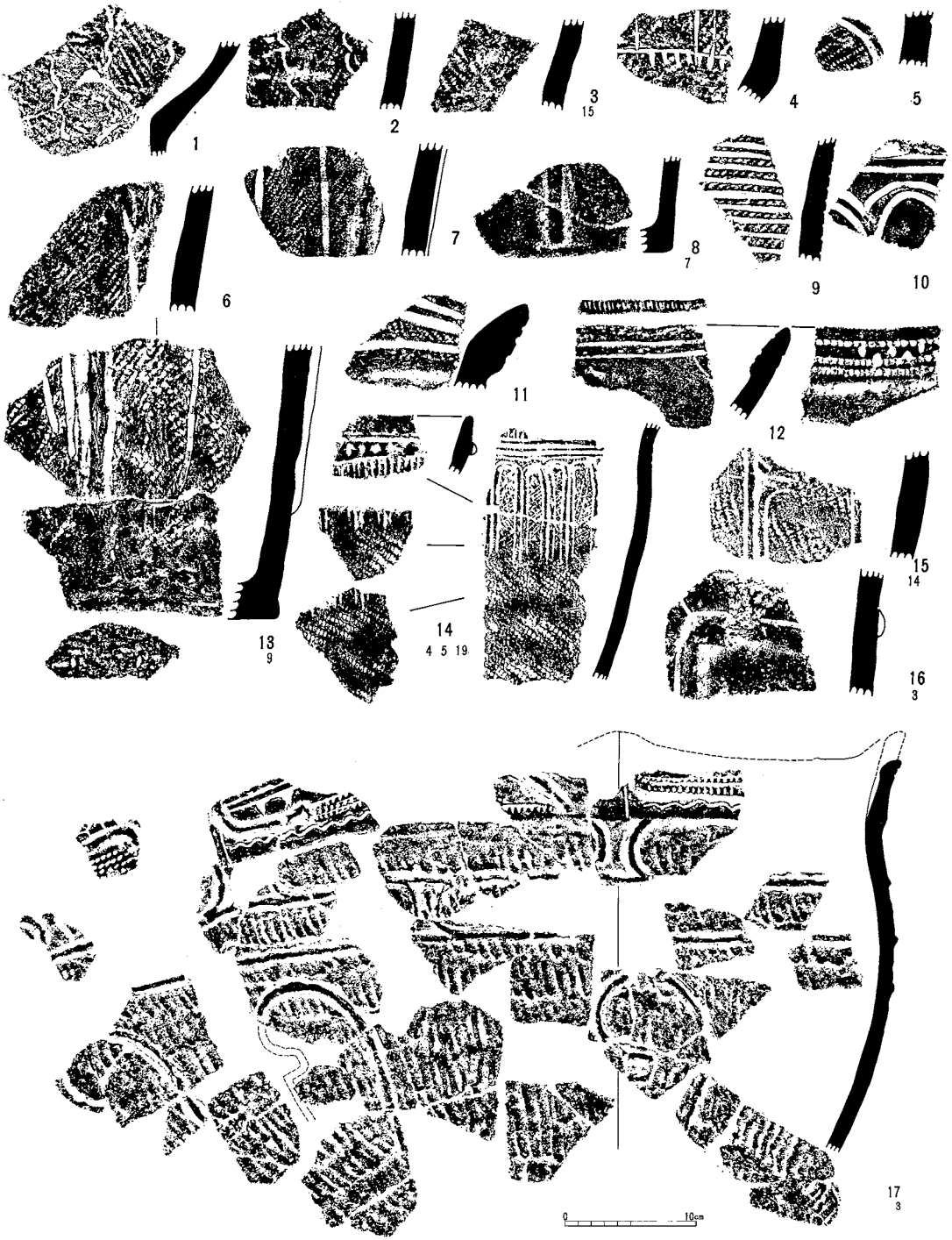


第116図　大石遺跡第１号住居址出土土器(I)(１：３　但し１～３・５～９は１：６)

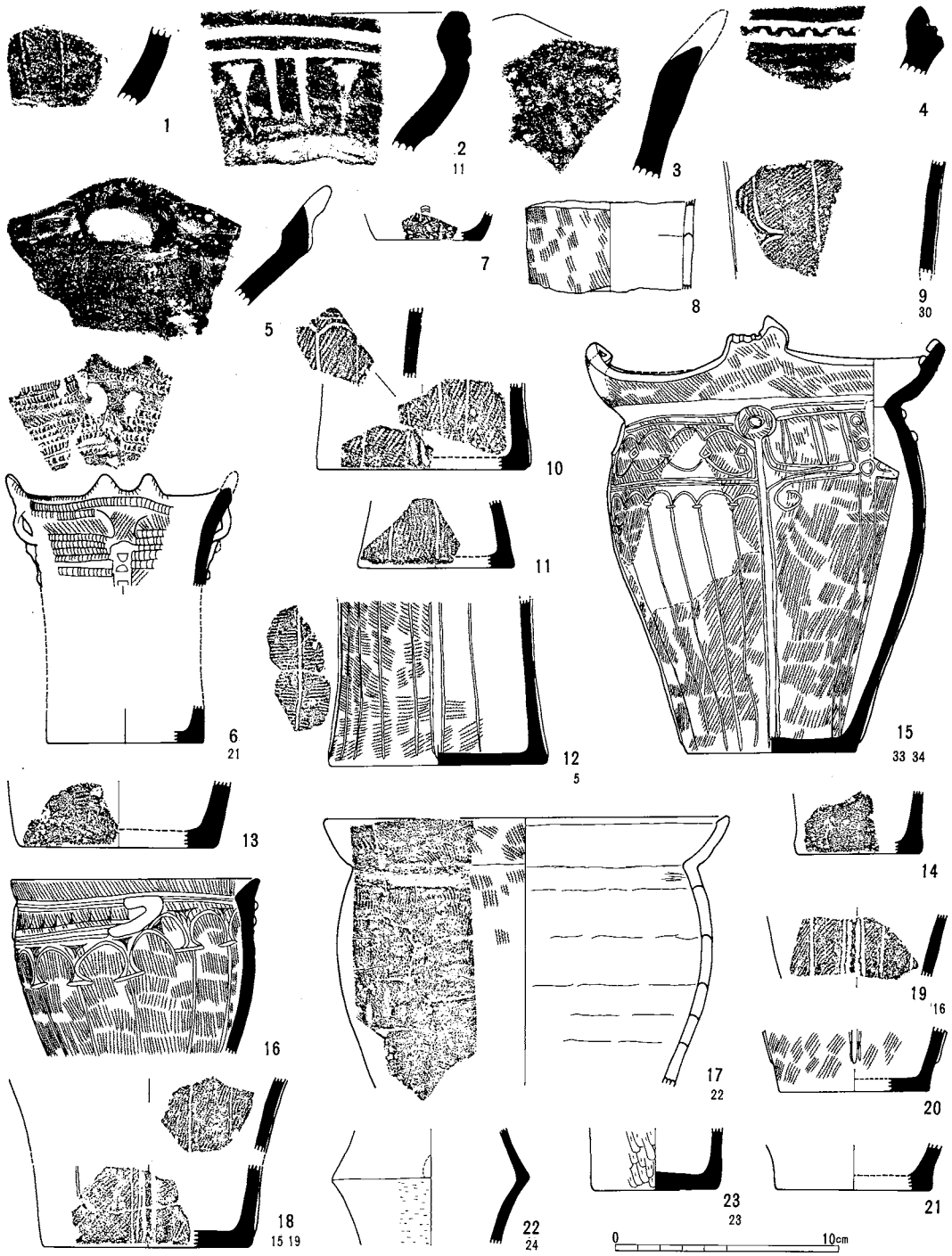


第117図　大石遺跡第１号住居址(J)・第５号旧住居址(A)・第６号住居址(A)

（１：３　但し15・32は１：６)(１～３・１住，４～28・５旧住，15・同理想炉，29～32・６住）

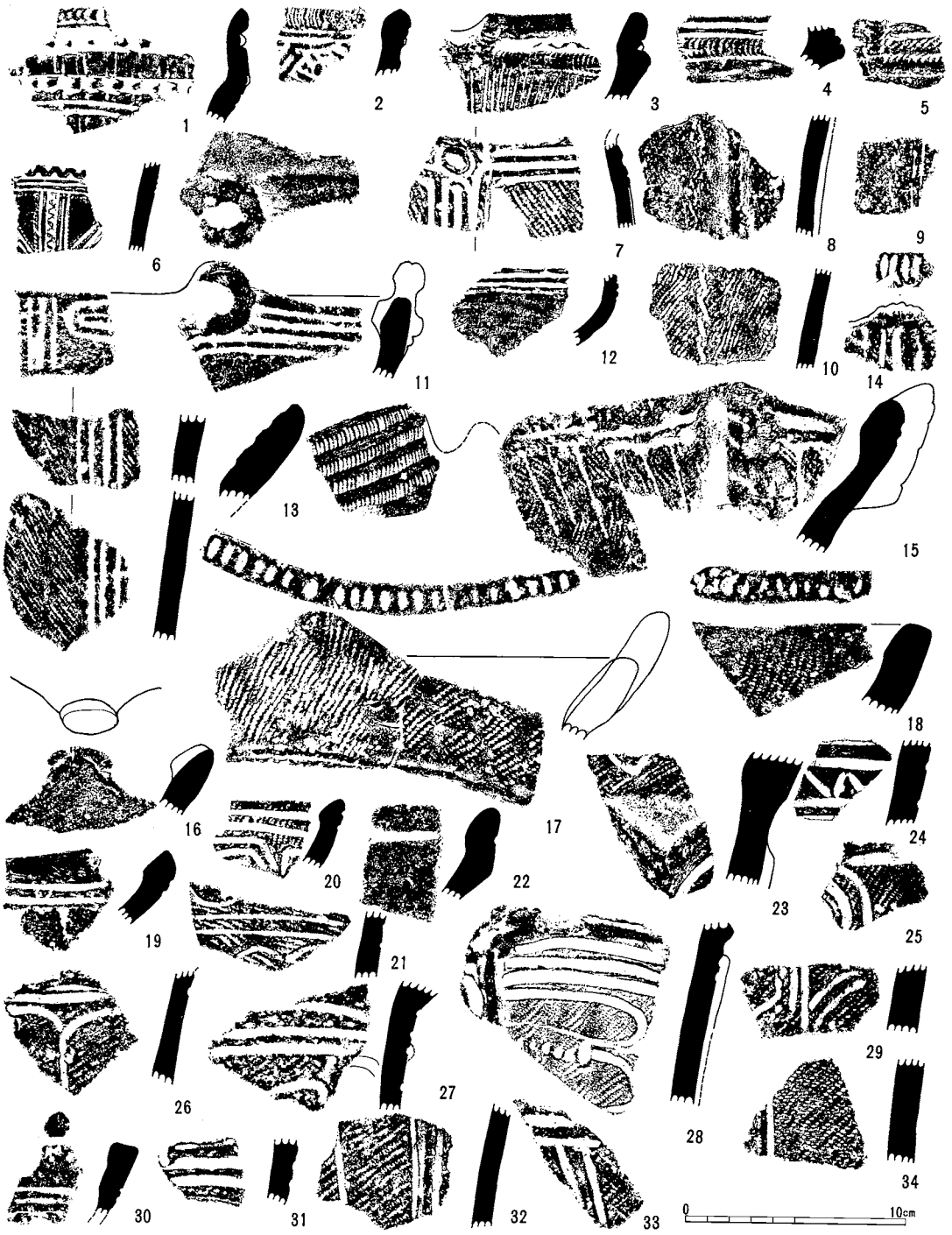


第118図　大石遺跡第６号住居址出土土器(B)（１：３　但し17は１：５）

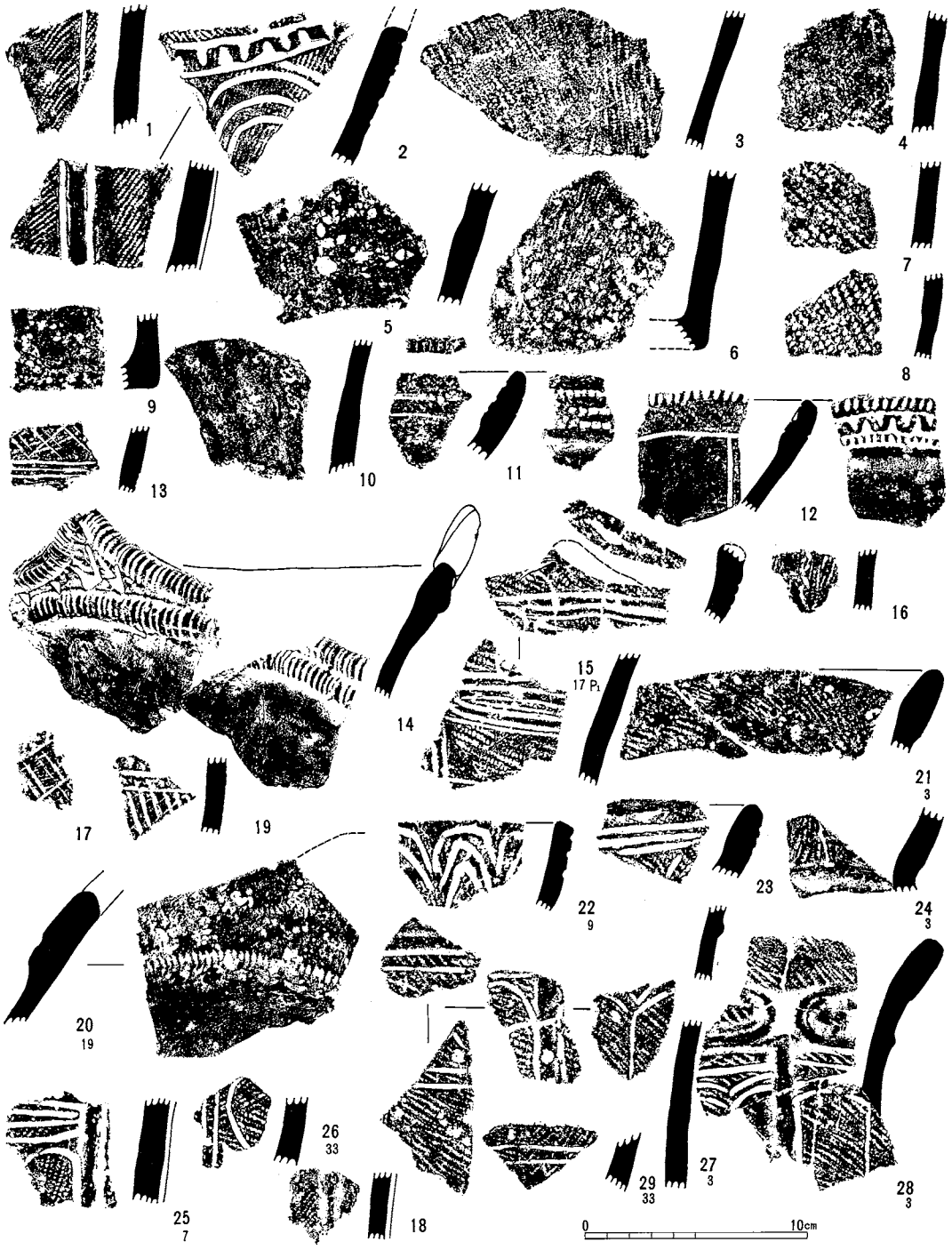


第119図　大石遺跡第６号住居址(C)・第７号住居址出土土器(A)（１：３　但し６～23は１：６）

〈１～５・６住，６～23・７住，８・16・７住埋甕炉〉

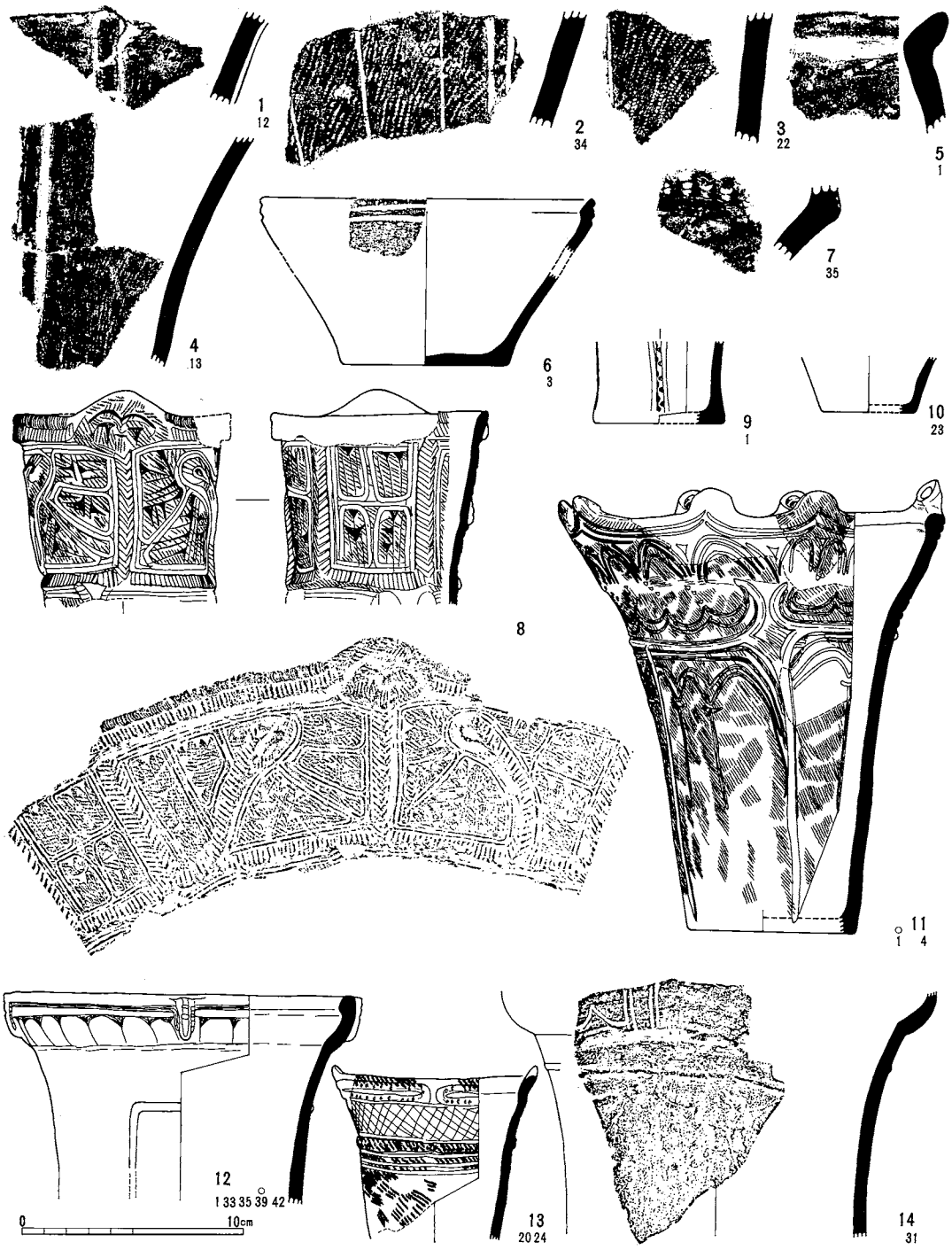


第120図　大石遺跡第７号住居址出土土器(B)(１：３)



第121図　大石遺跡第７号住居址出土土器(C)(１：３)

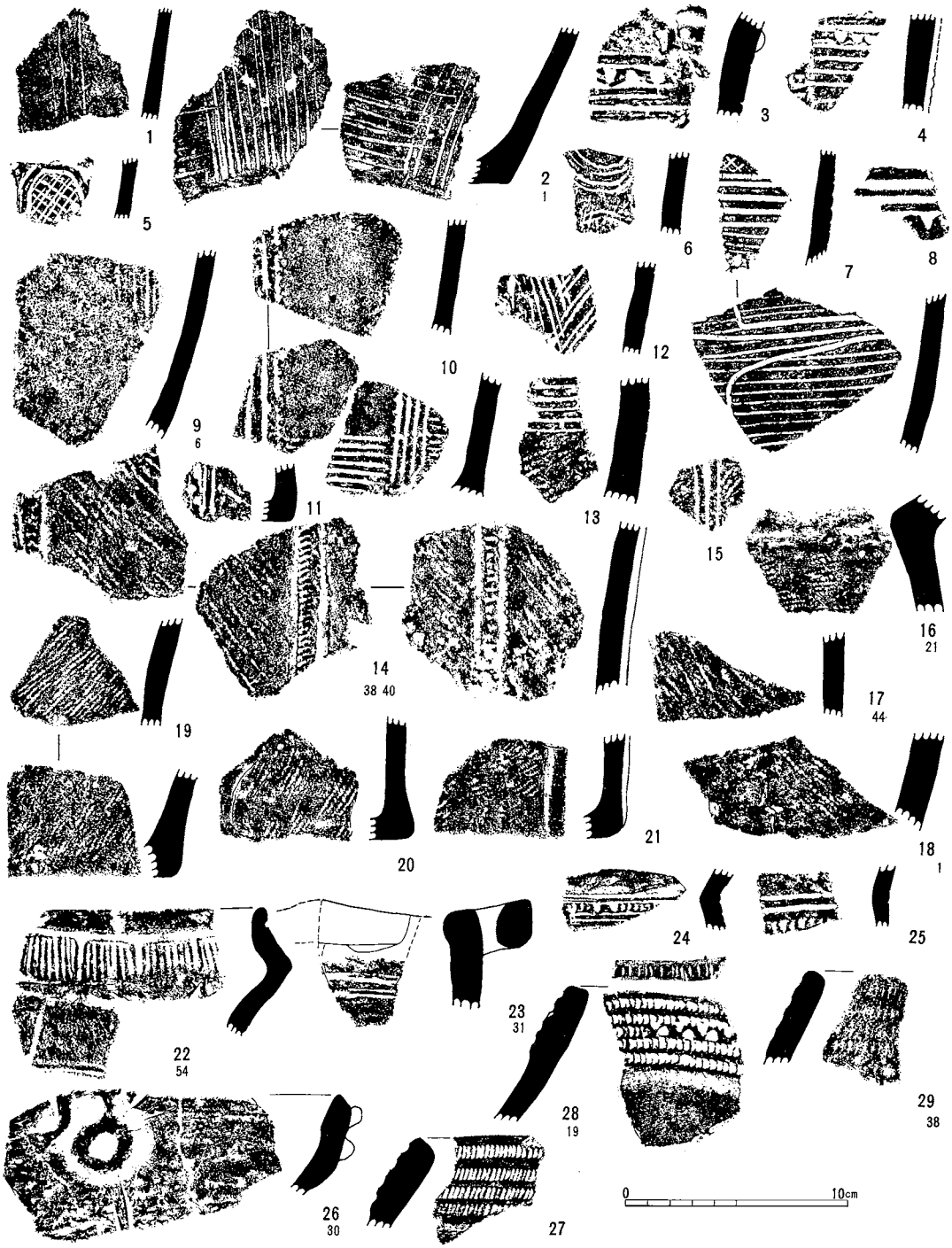
〈１～12　覆土上層〉



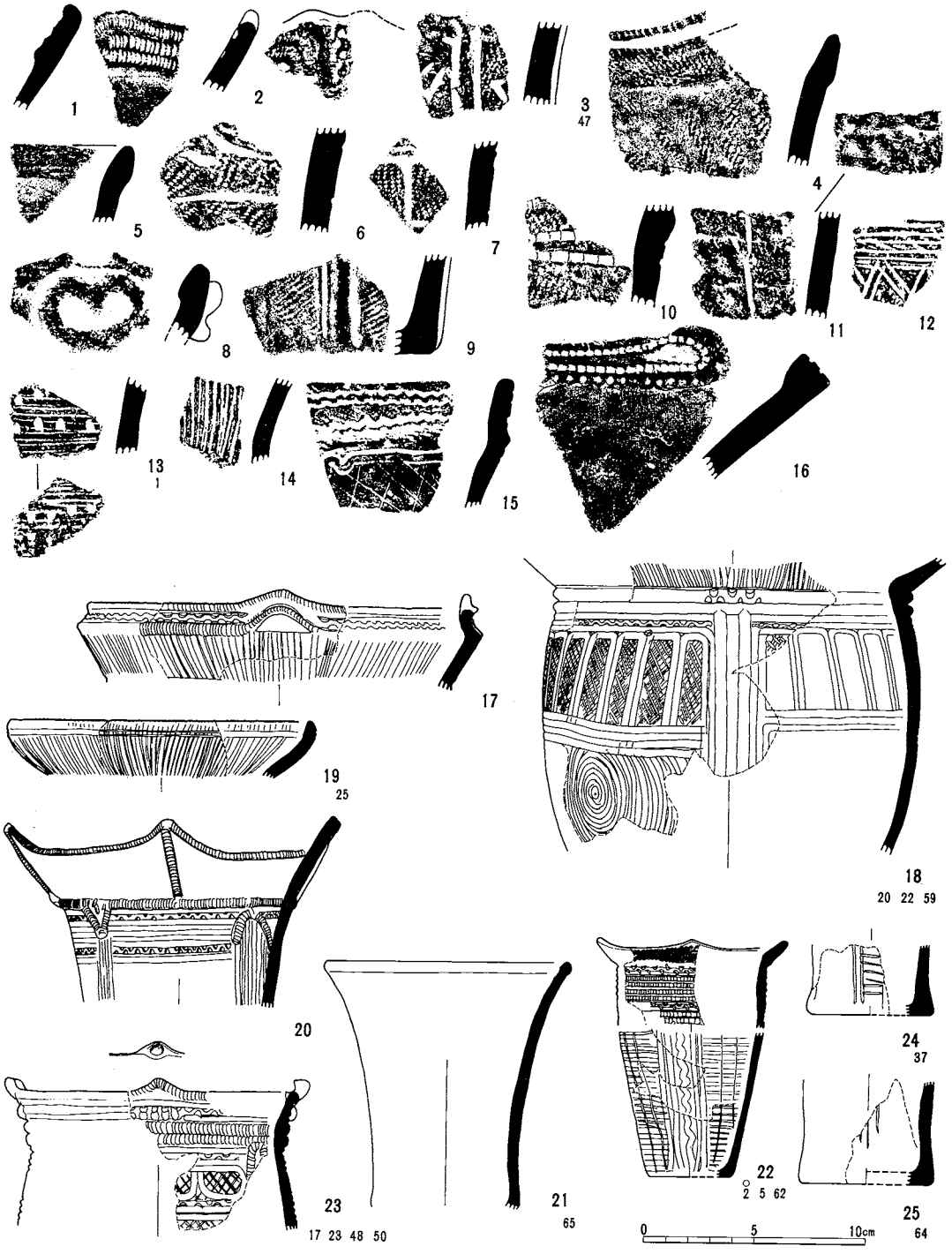
第122図　大石遺跡第７号住居址(D)・第18号住居址出土土器(A)（１：６　但し１～５・７は１：３）

〈１～７・７住，８・18住埋甕炉，９～14・18住〉

第123図　大石遺跡第18号住居址出土土器(B)(1：3)

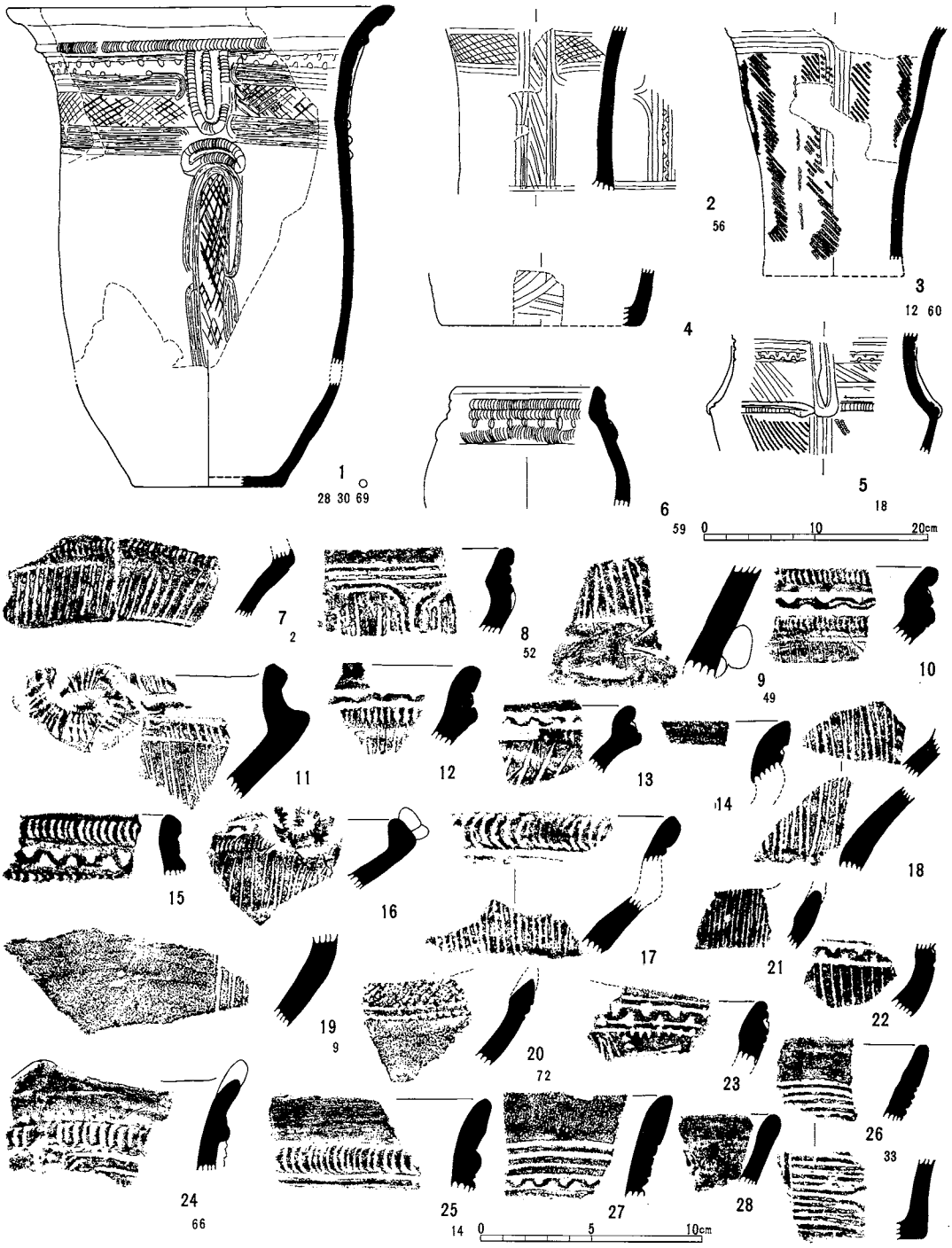


第124図　大石遺跡第18号住居址出土土器(C)(1：3)

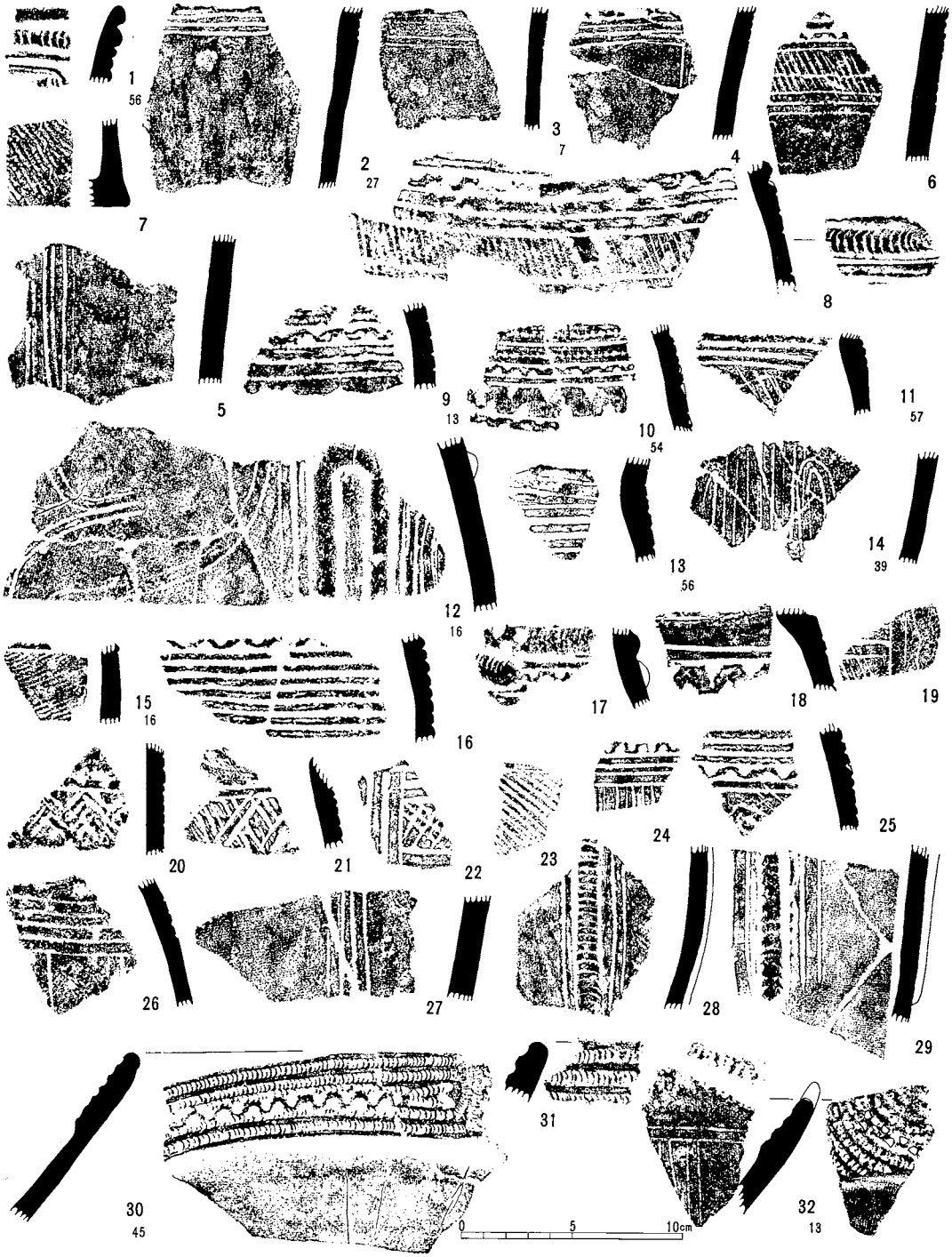


第125図　大石遺跡第18号住居址(D)・第28号住居址出土土器(A)(1：3　但し17～25は1：6)

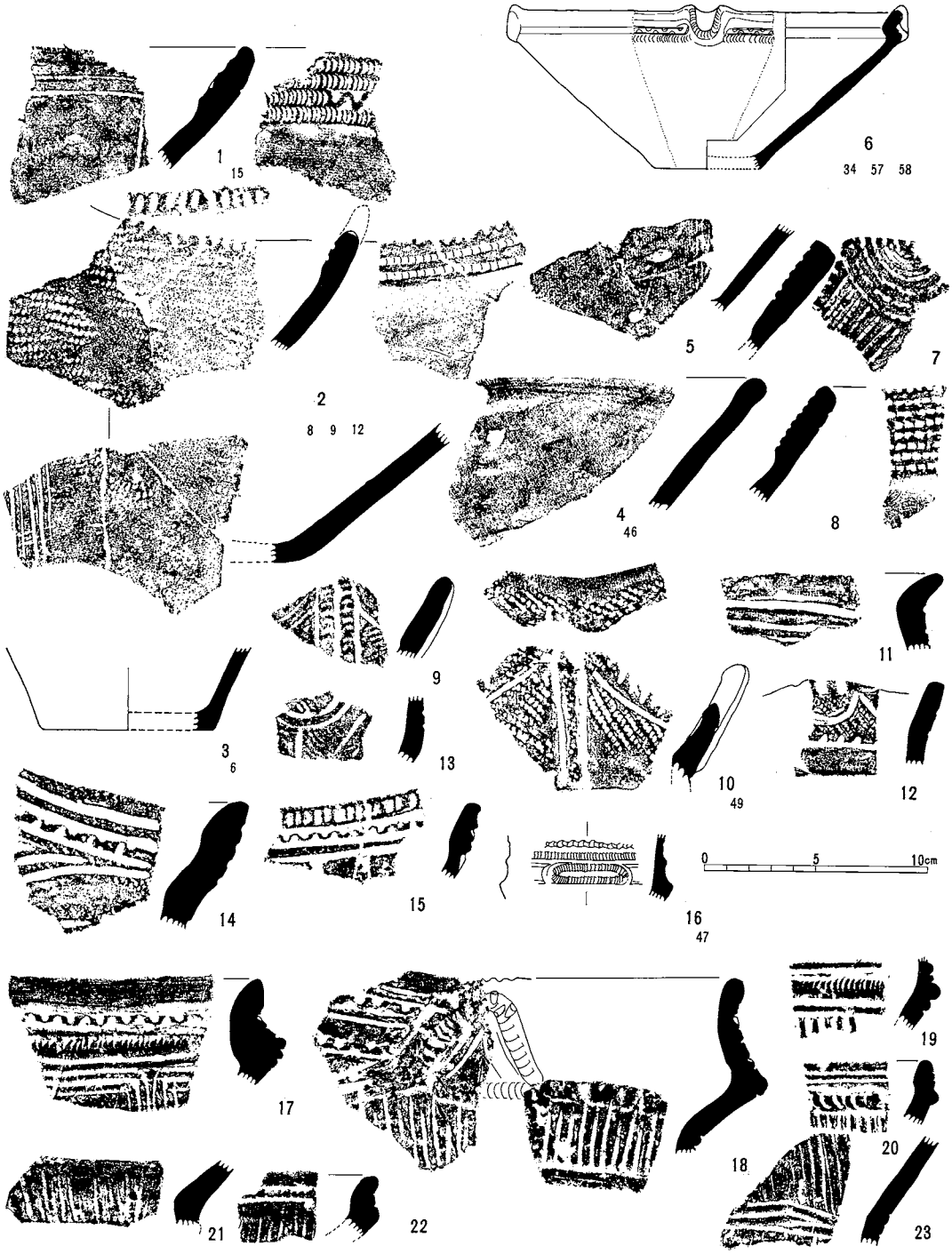
〈1～16　18住，17～25　28住〉



第126図　大石遺跡第28号住居址出土土器(B)(1：3　但し1～5は1：6)

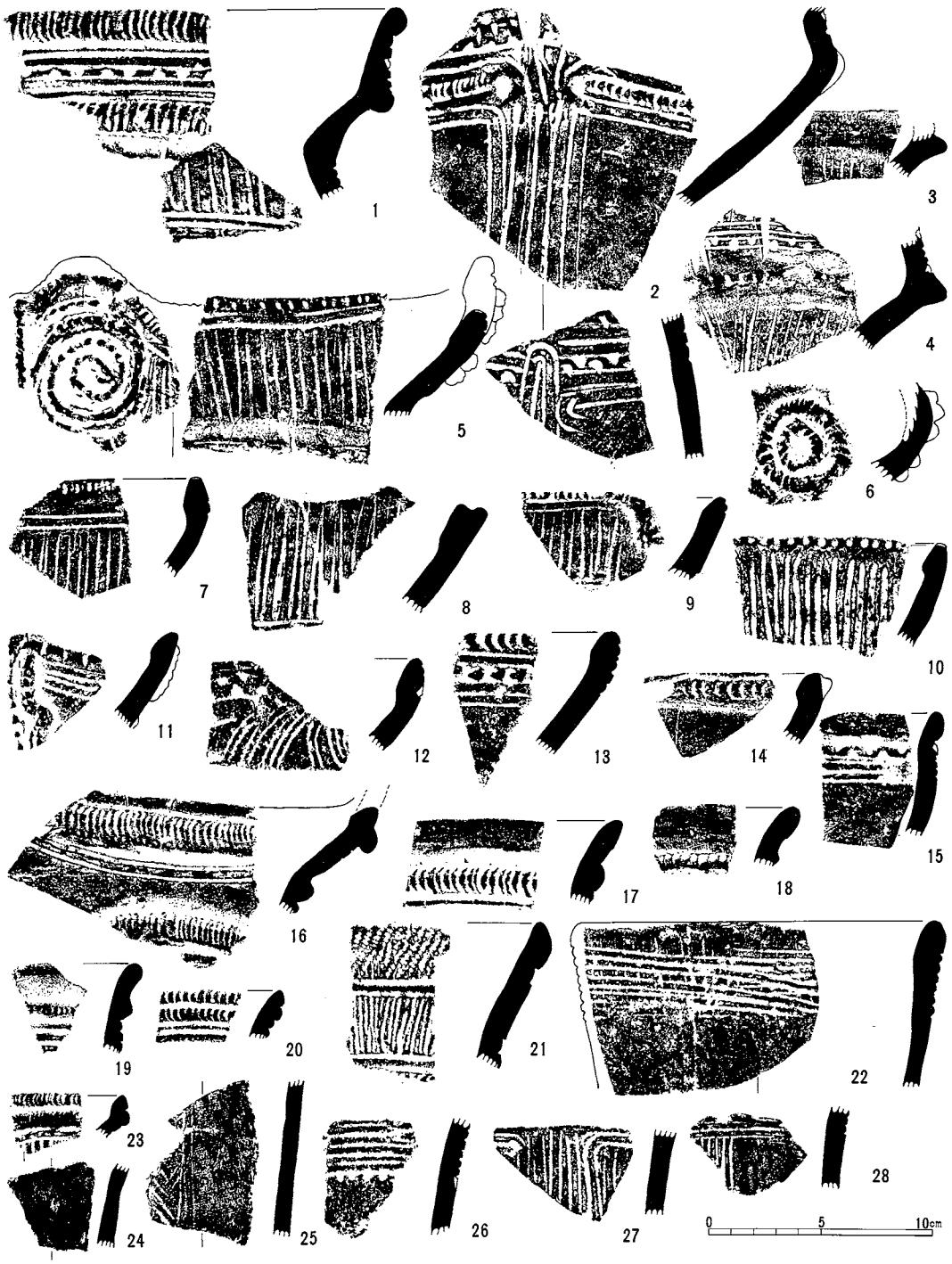


第127図　大石遺跡第28号住居址(C)（1：3）

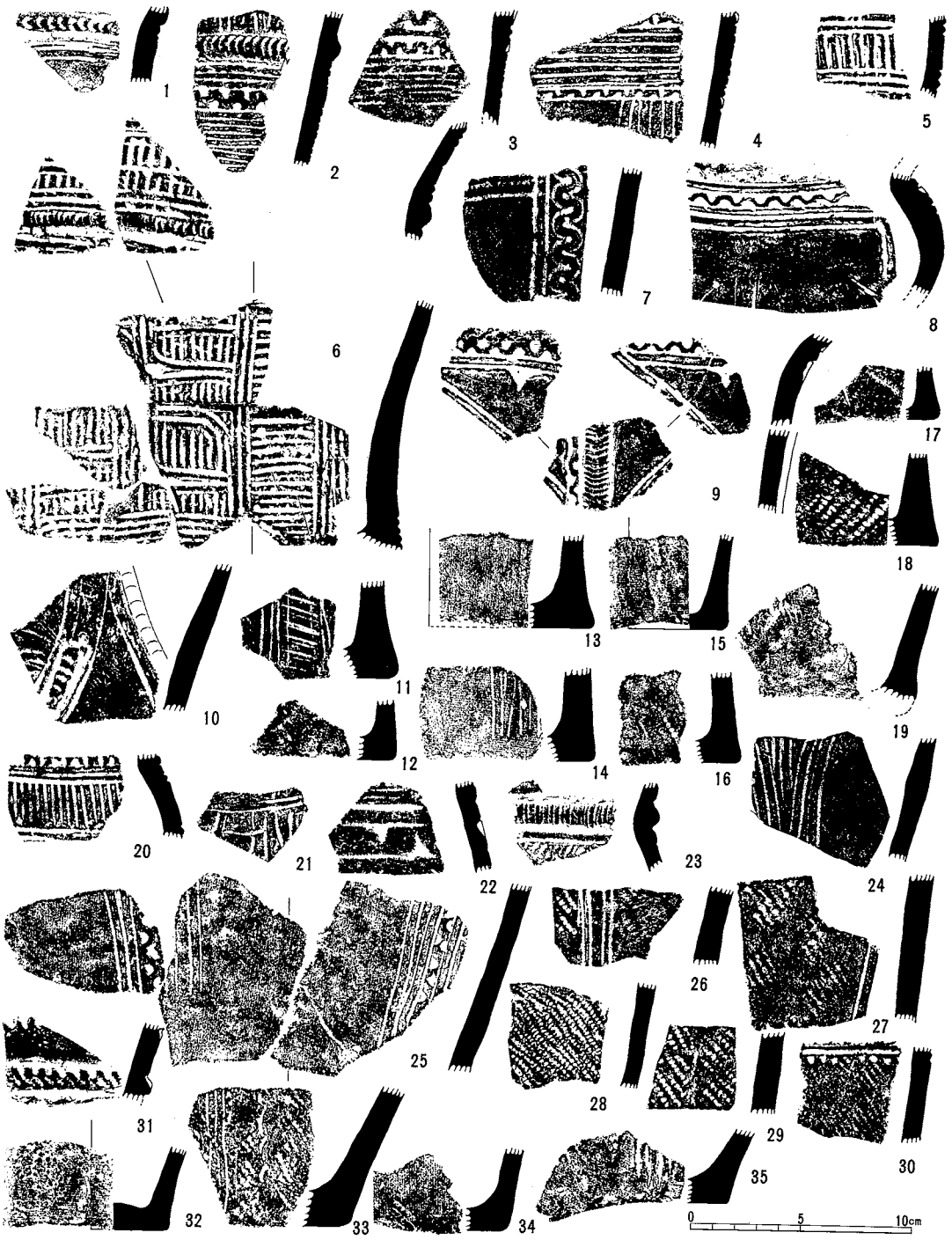


第128図　大石遺跡第28号住居址(D)・第29 号住居址出土土器(A)(1：3　但し6は1：6)

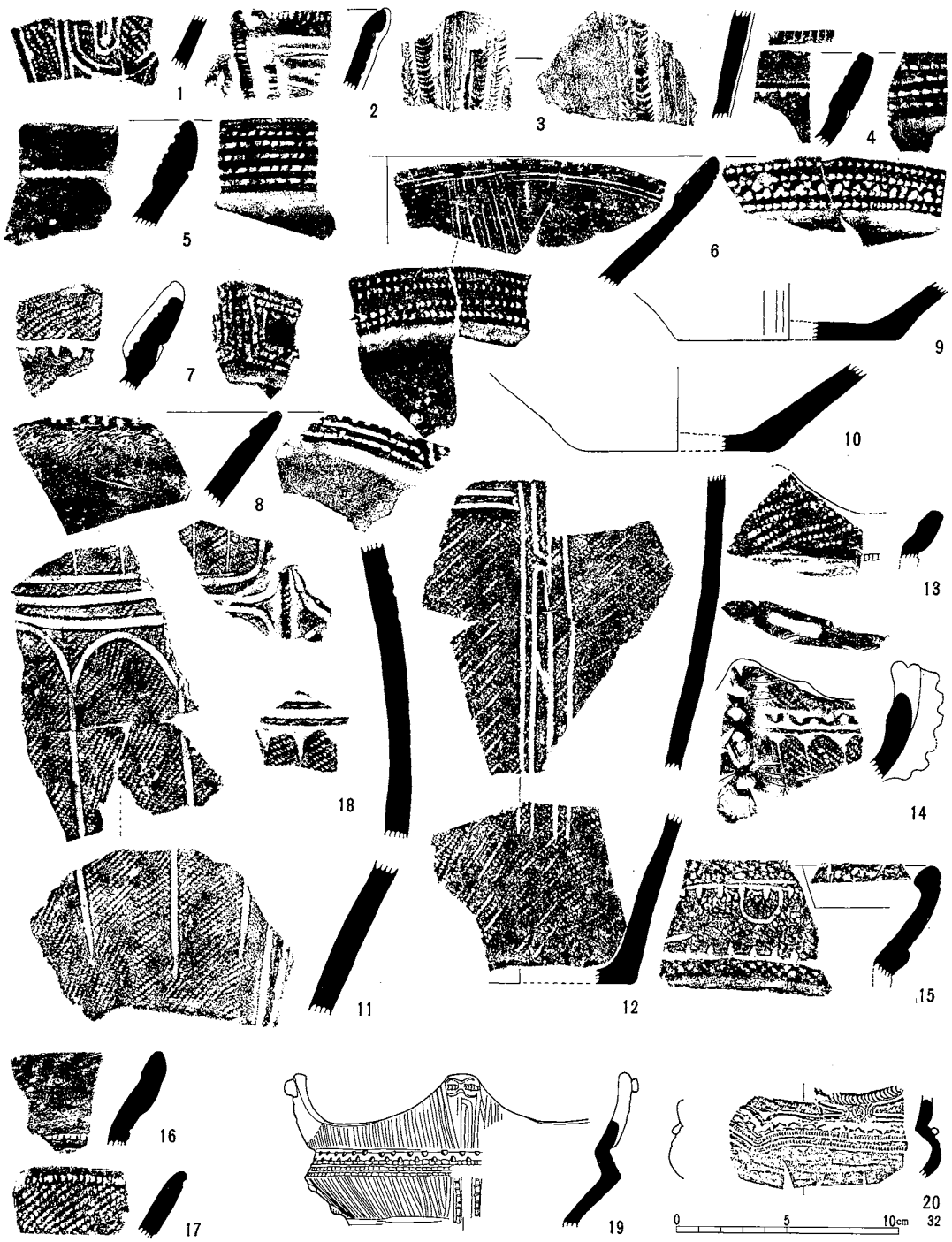
〈1～16　28住，17・18　29住床，19～23・29住〉



第129図　大石遺跡第29号住居址出土土器(B)(1：3)

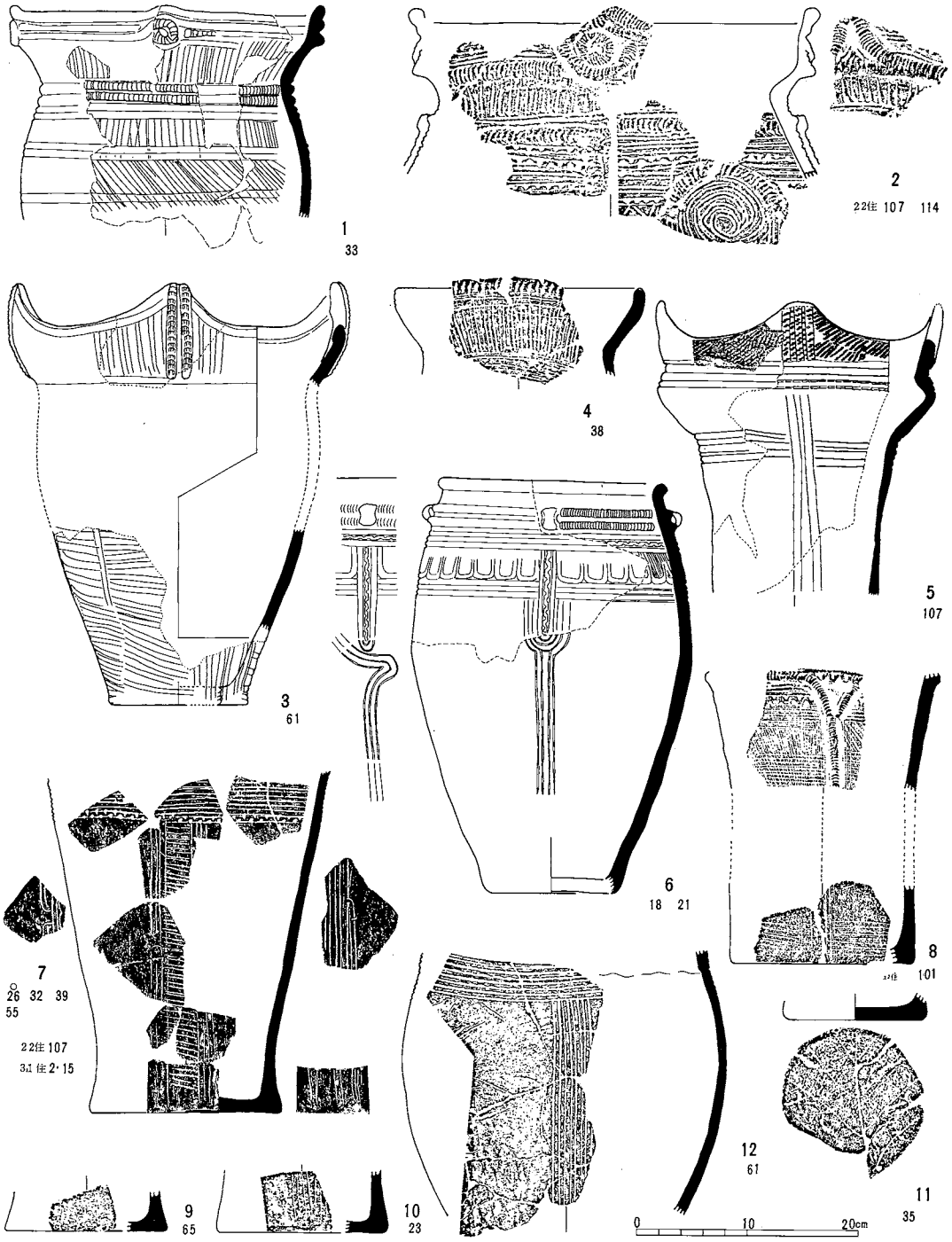


第130図　大石遺跡第29号住居址出土土器(C)(1：3)

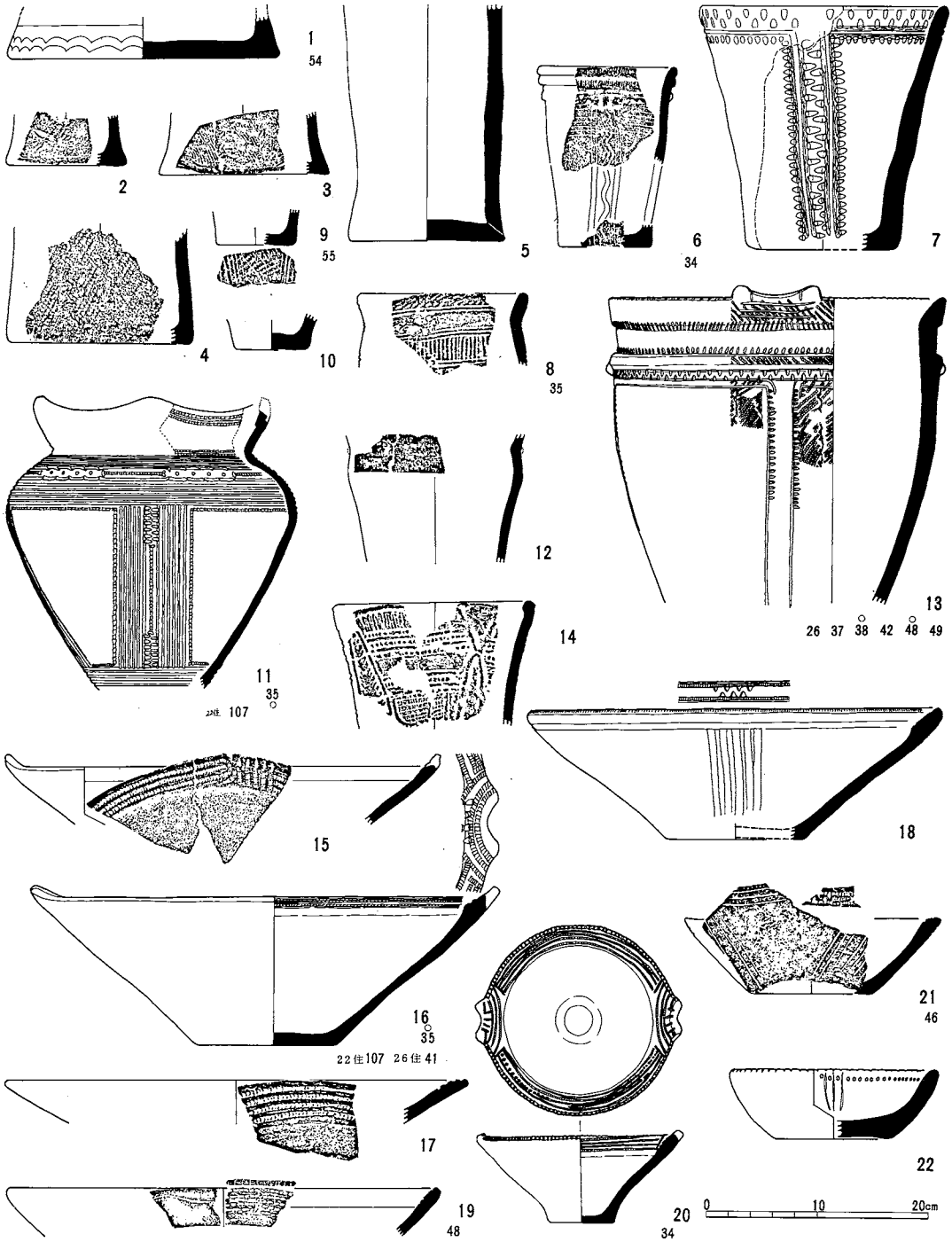


第131図　大石遺跡第29号住居址(D)・第30号住居址出土土器(A)(1：3　但し19・20は1：6)

〈1～17　29住，18～20　30住〉

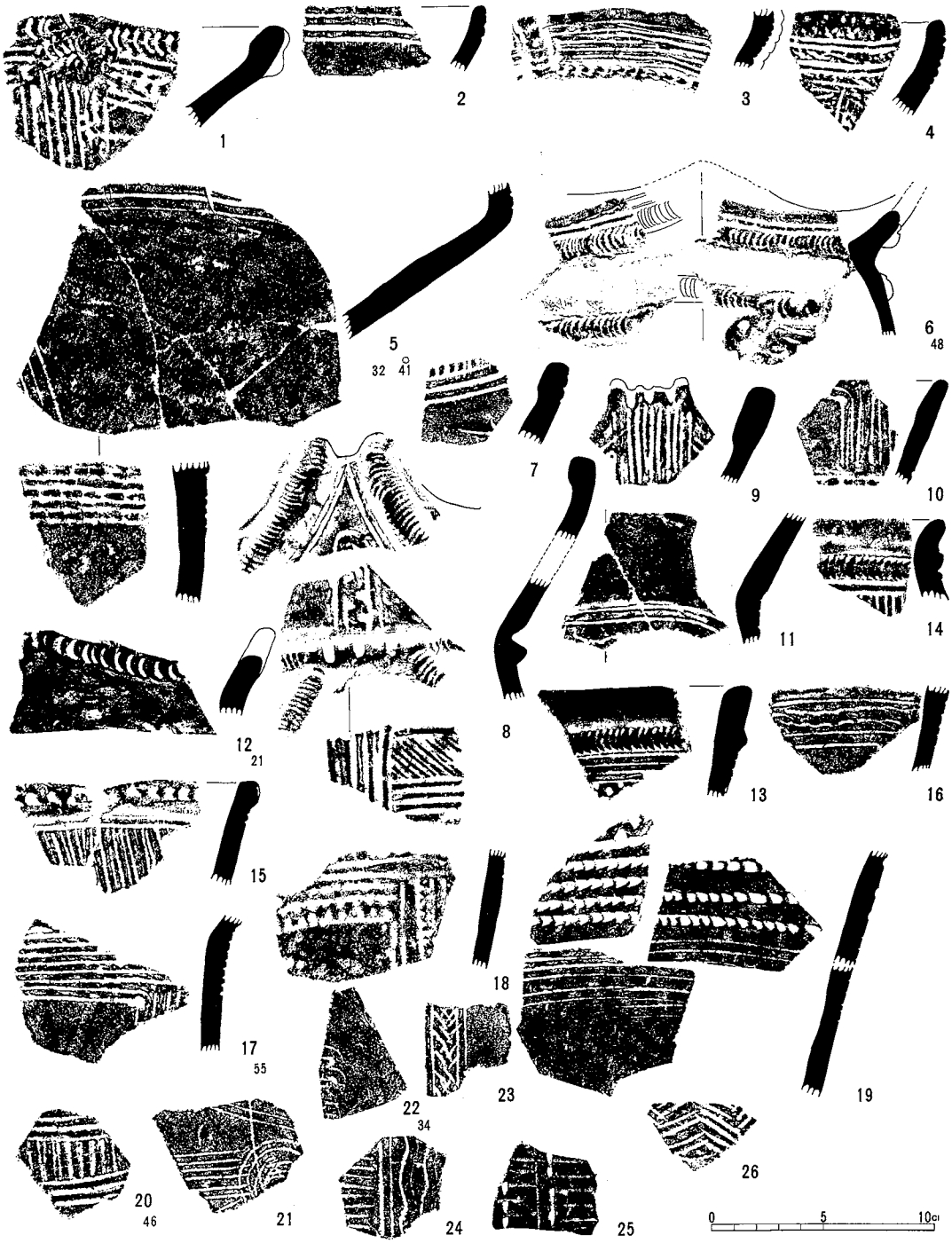


第132図　大石遺跡第30号住居址出土土器(B)(1：6)

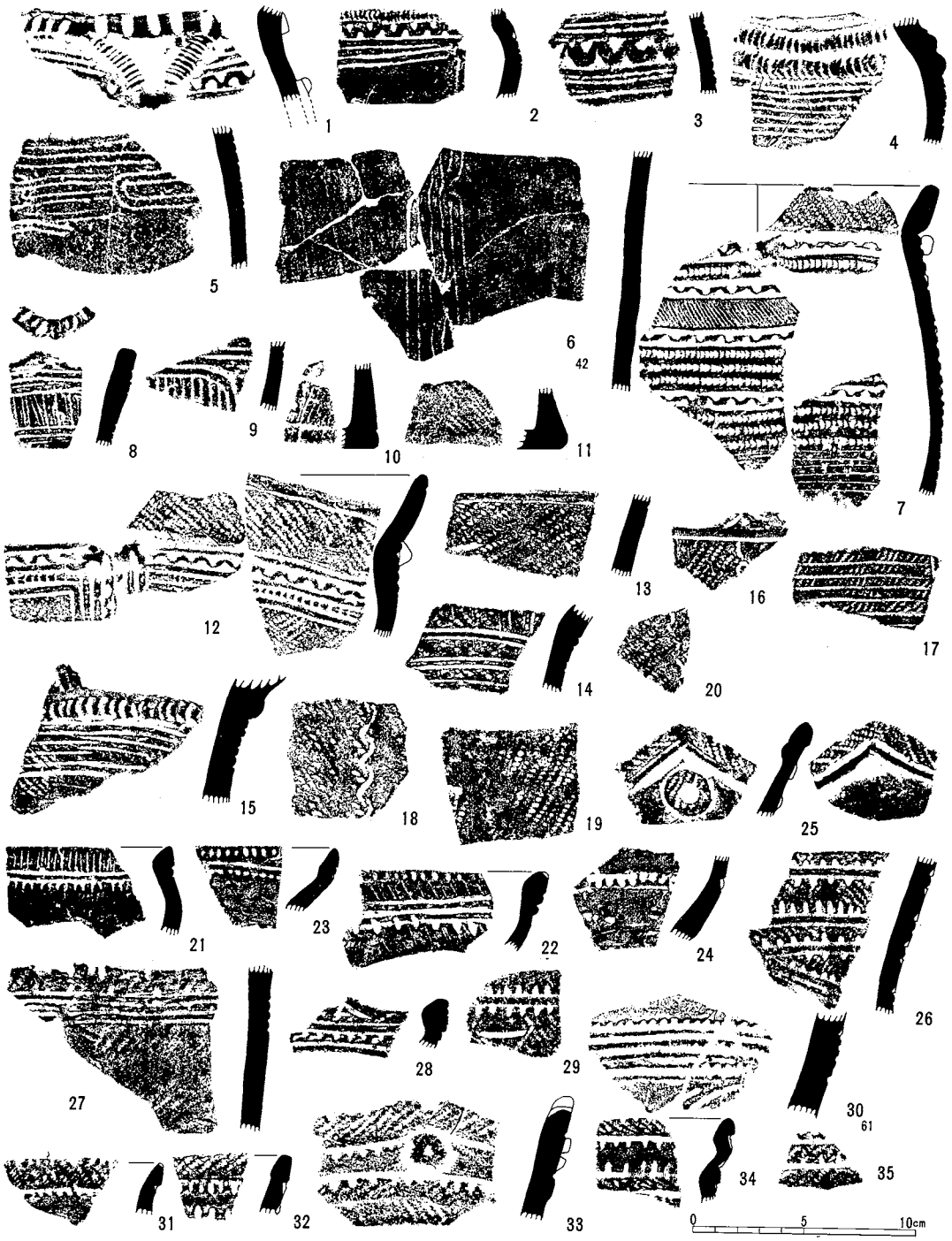


第133図　大石遺跡第30号住居址出土土器(C)（1：6　但し7・22は1：3）

第134図　大石遺跡第30号住居址出土土器(D)(1：3)

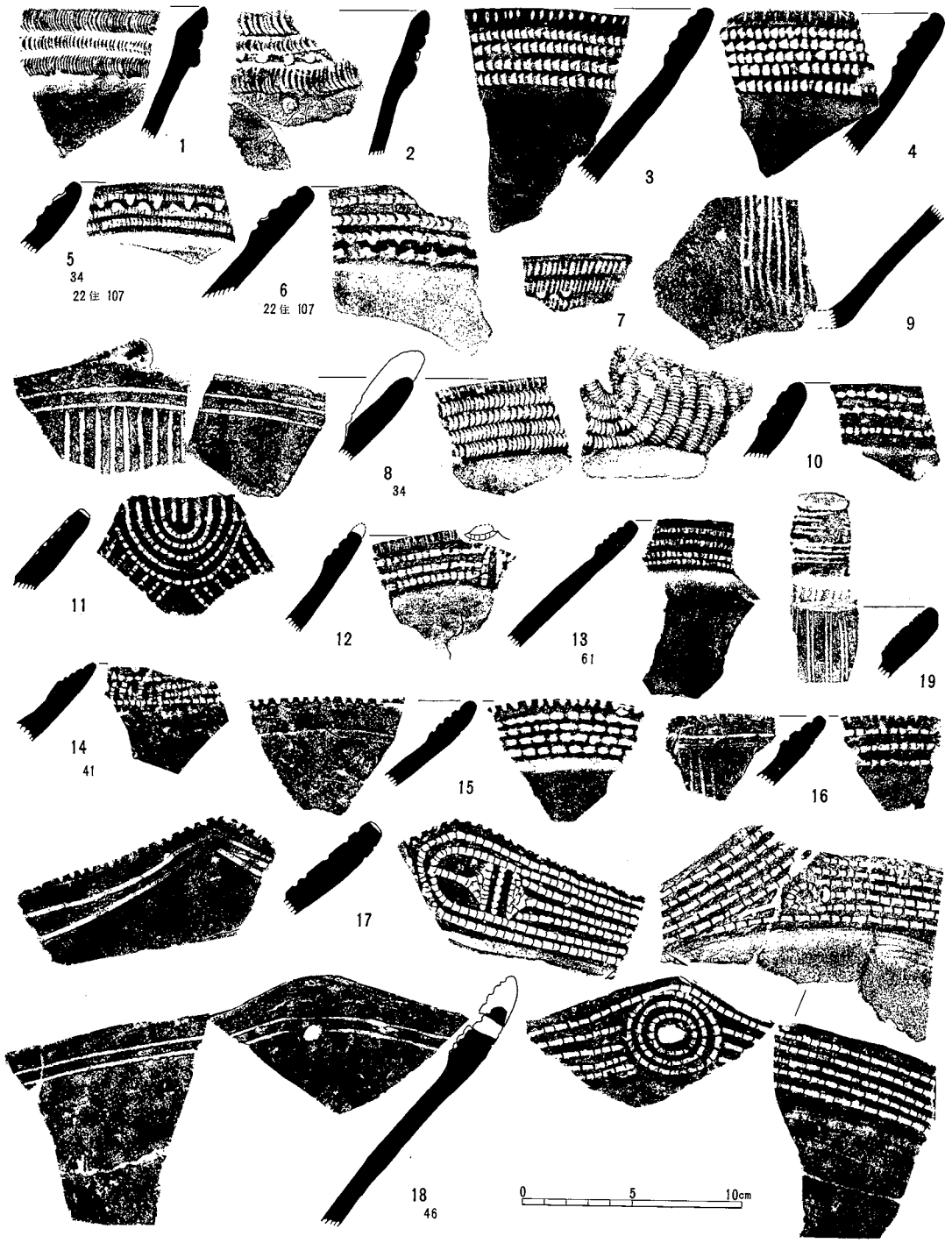


第135図　大石遺跡第30号住居址出土土器(E)(1：3)

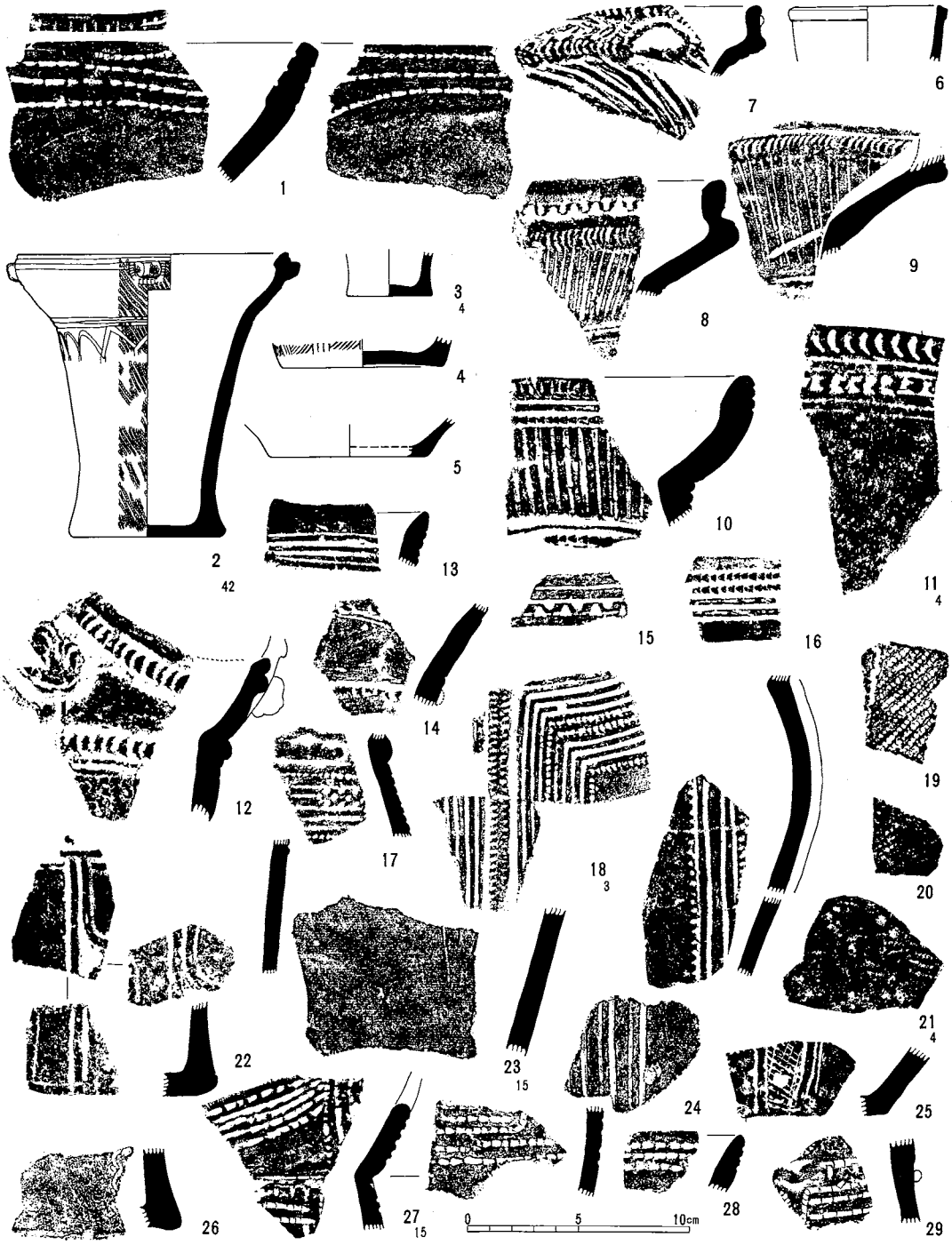


第136図　大石遺跡第30号住居址出土土器(F)(1：3)

第137図　大石遺跡第30号住居址出土土器(G)(1：3)

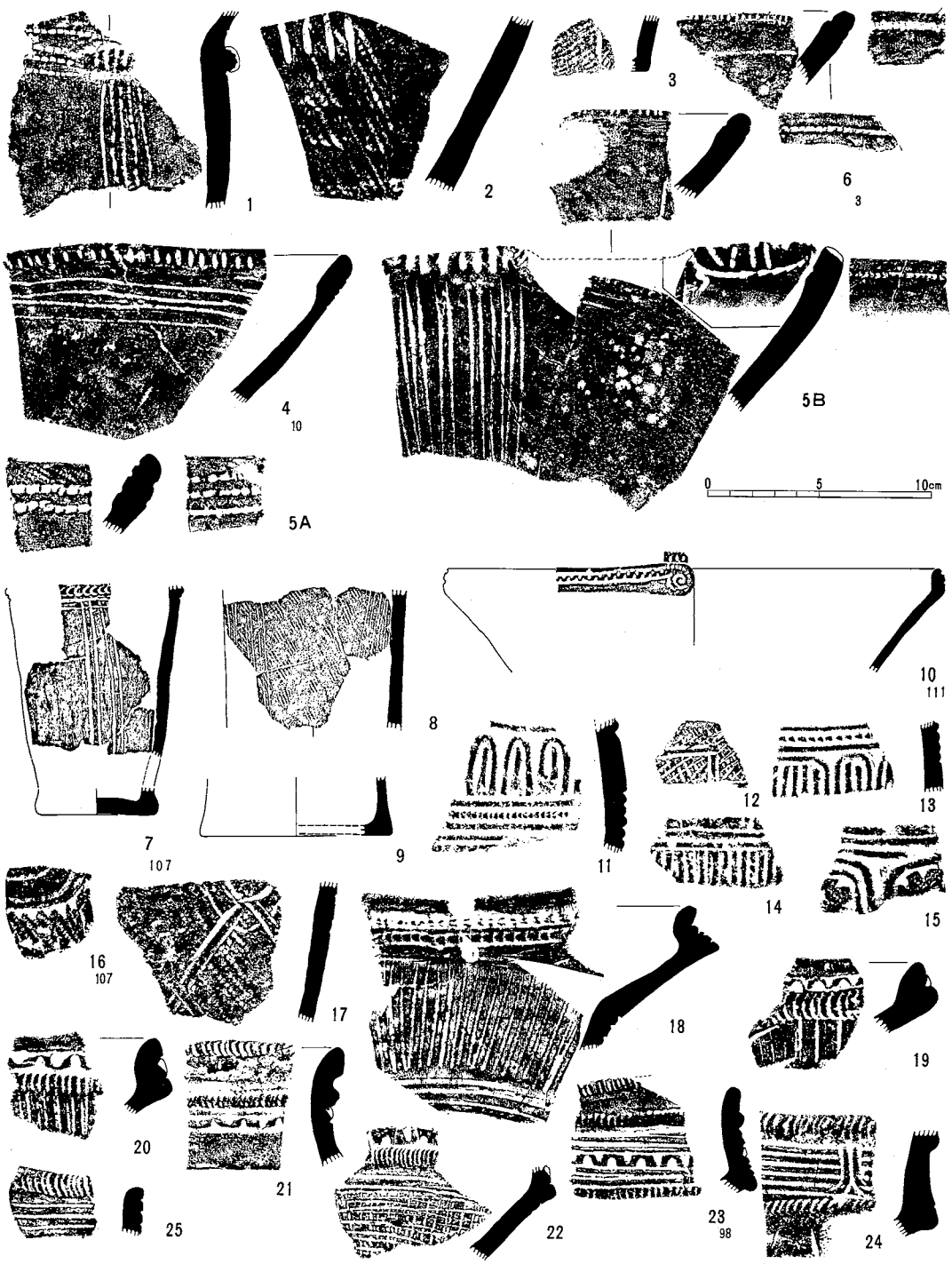


第138図　大石遺跡第30号住居址出土土器(H)(1：3)



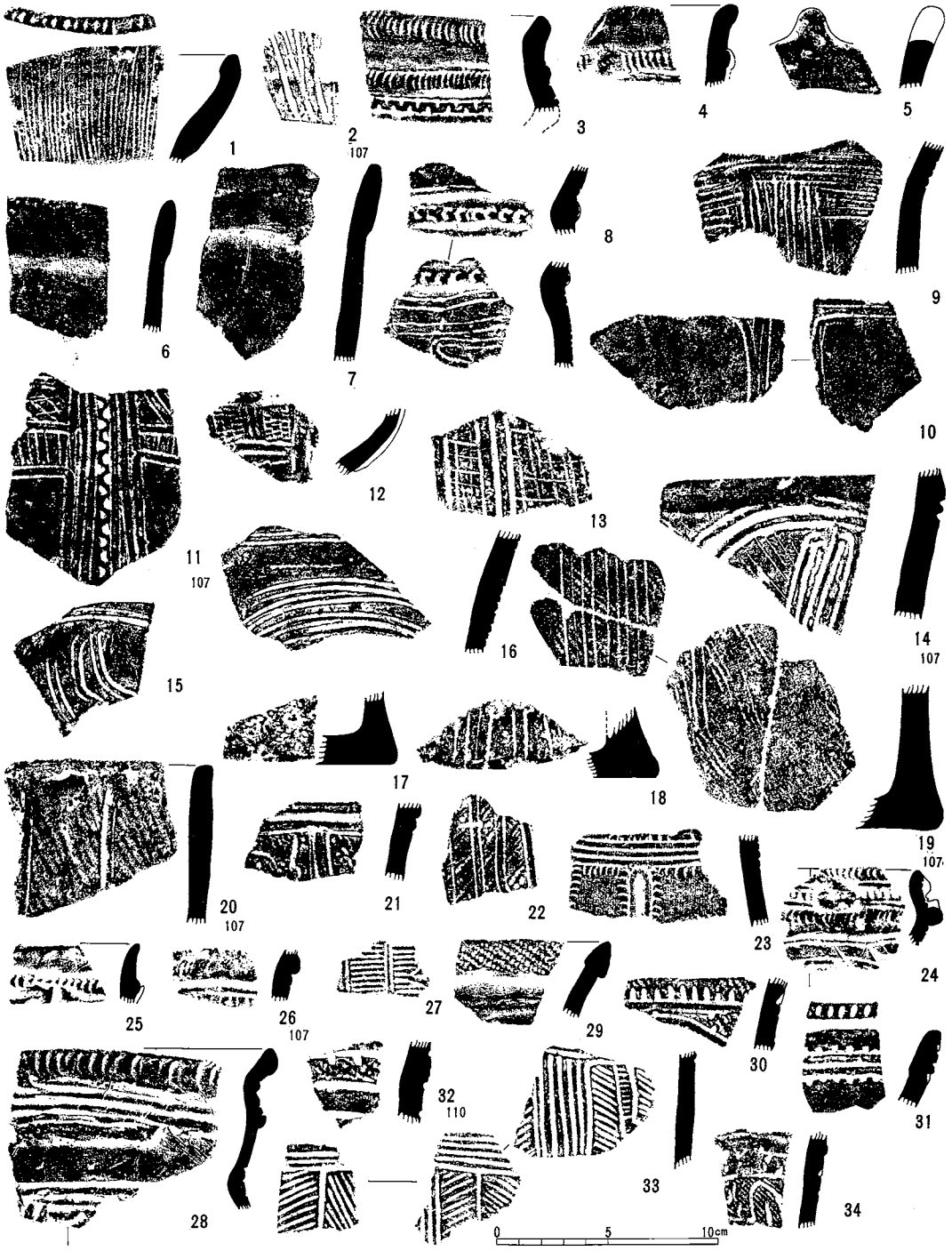
第139図　大石遺跡第30号住居址(I)・第31号住居址出土土器(A)（1：3　但し2～6は1：6）

〈1～2　30住，3～29　31住〉

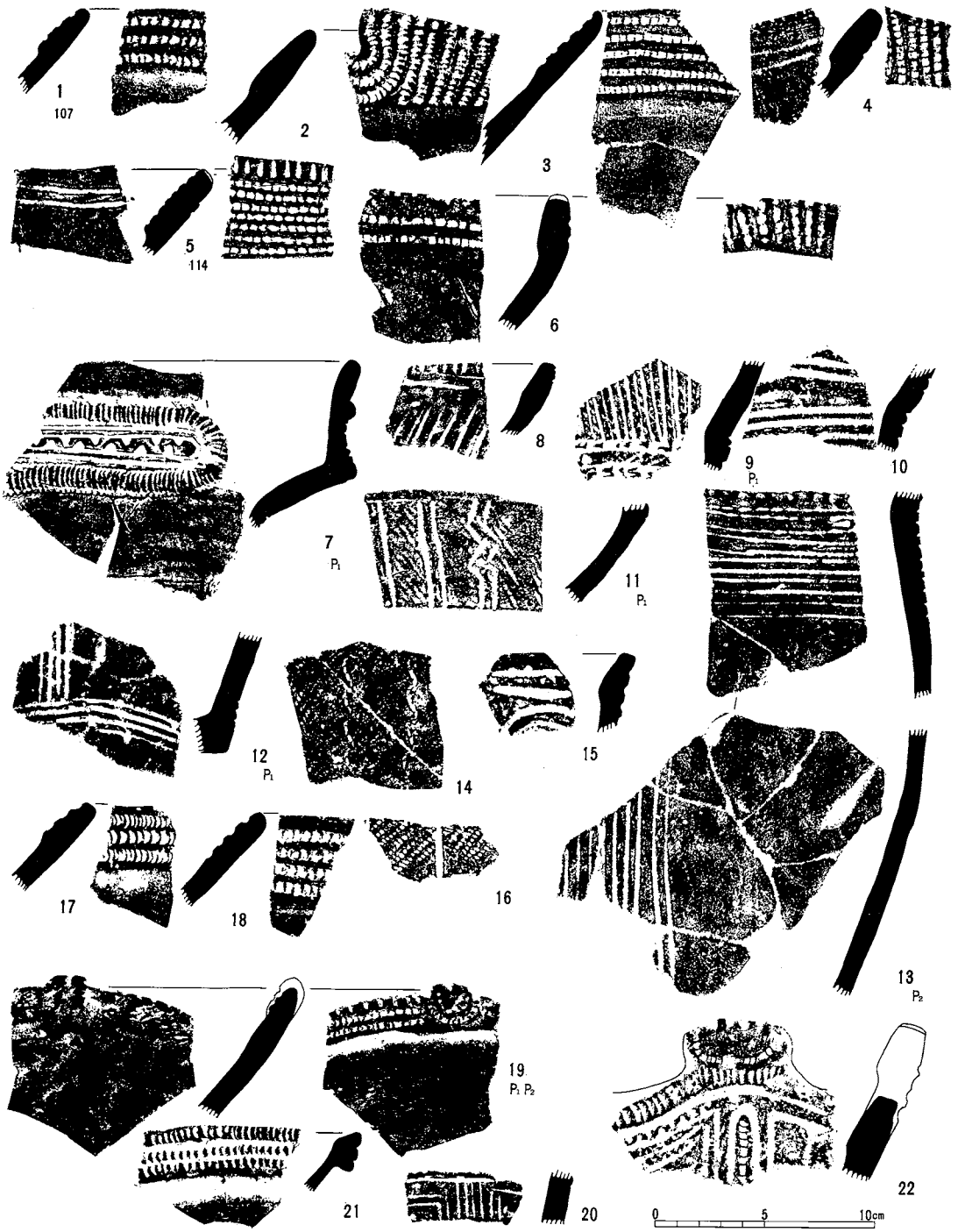


第140図　大石遺跡第31号住居址(B)・第22号住居址出土土器(A)(1：3　但し7～10は1：6)

〈1～6　31住，7～25　22住〉



第141図　大石遺跡第22号住居址出土土器(B)(1：3)

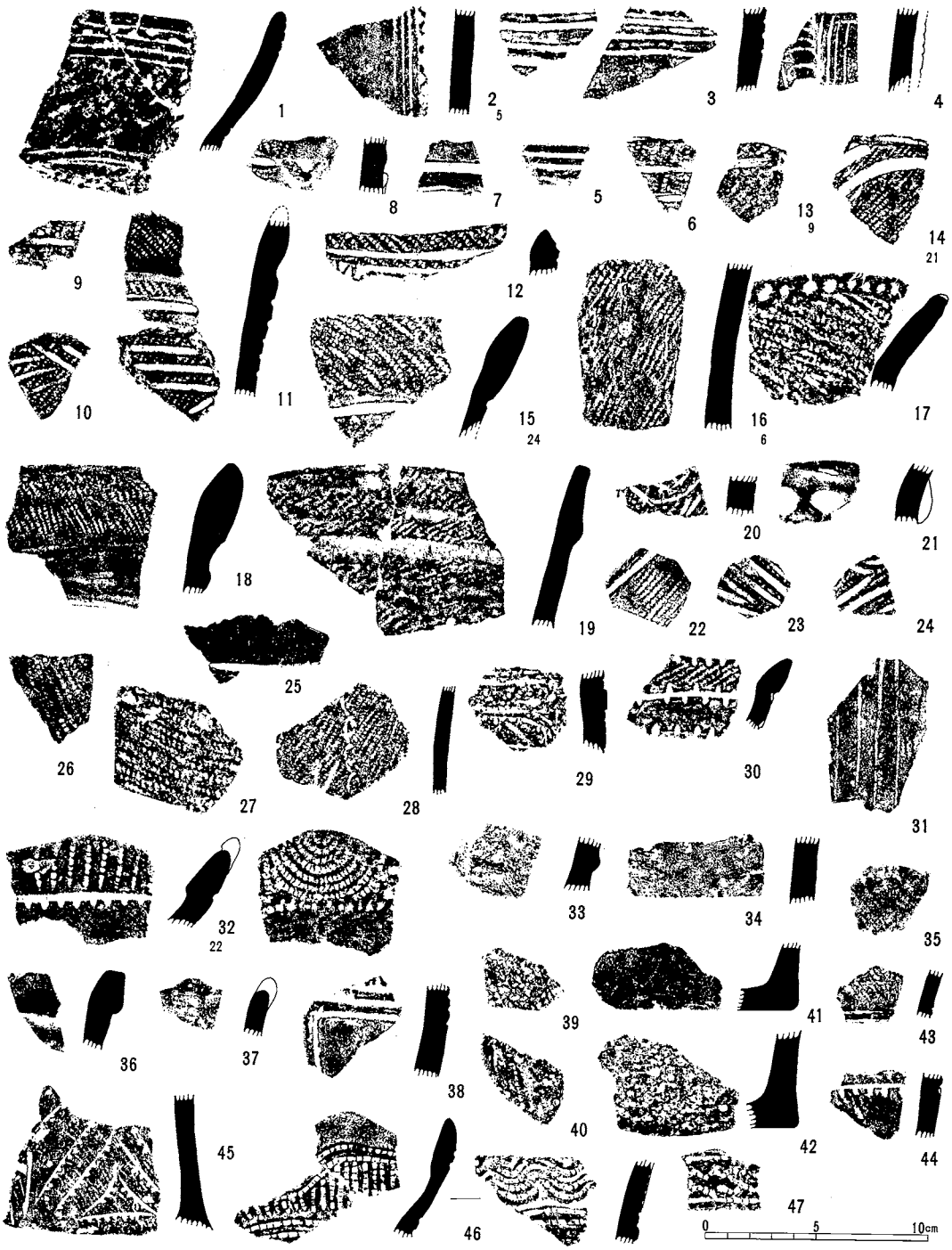


第142図　大石遺跡第22号住居址(C)・第34号住居址出土土器(1：3)

〈1～6　22住，7～22　34住〉

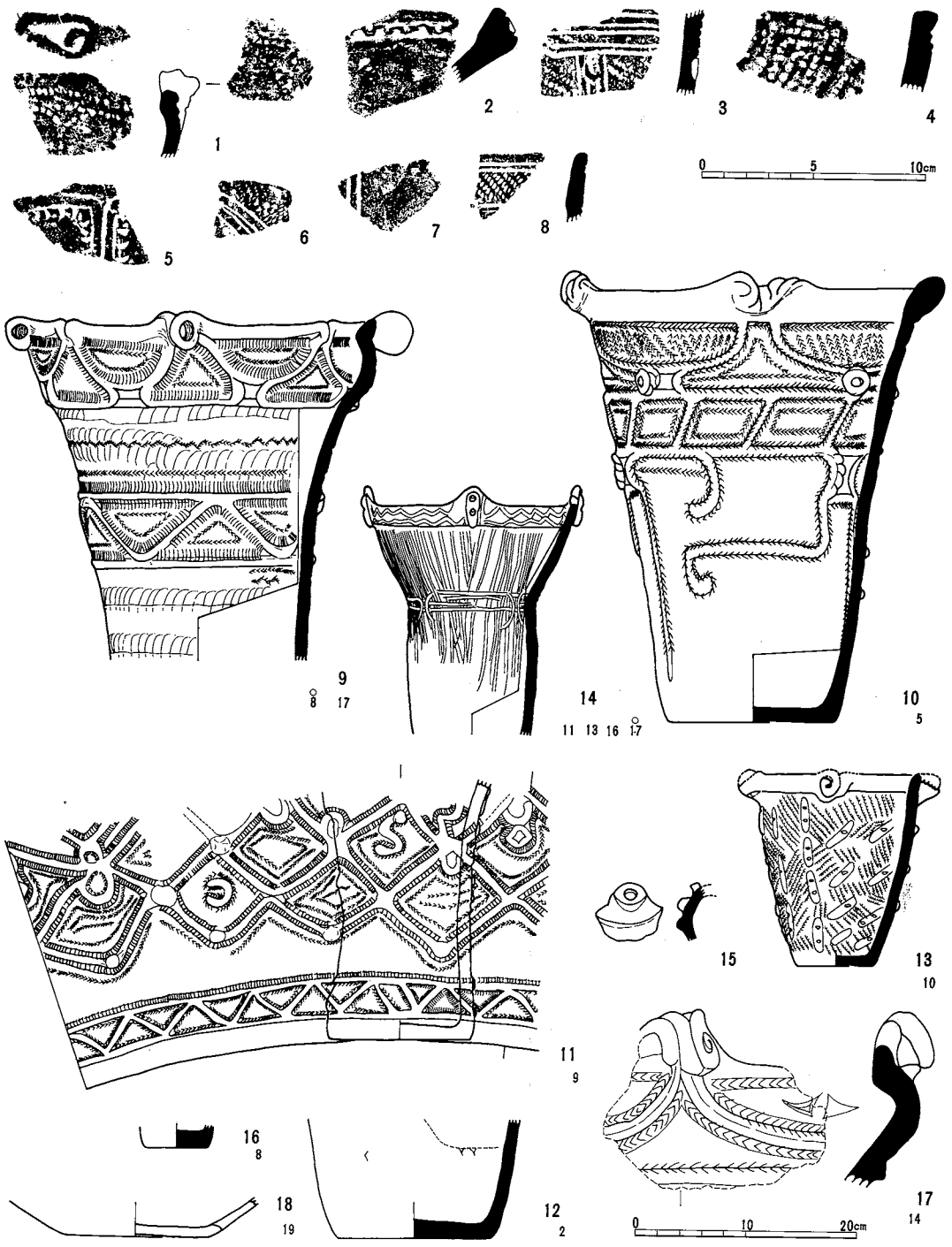
第143図　大石遺跡第41号住居址・第42号住居址・第46号住居址・第47号住居址出土土器(A)

（1：3　但し12A・15・16は1：6）　〈1～3　41住，4～10　42住，11～14　46住，15～19　47旧住〉



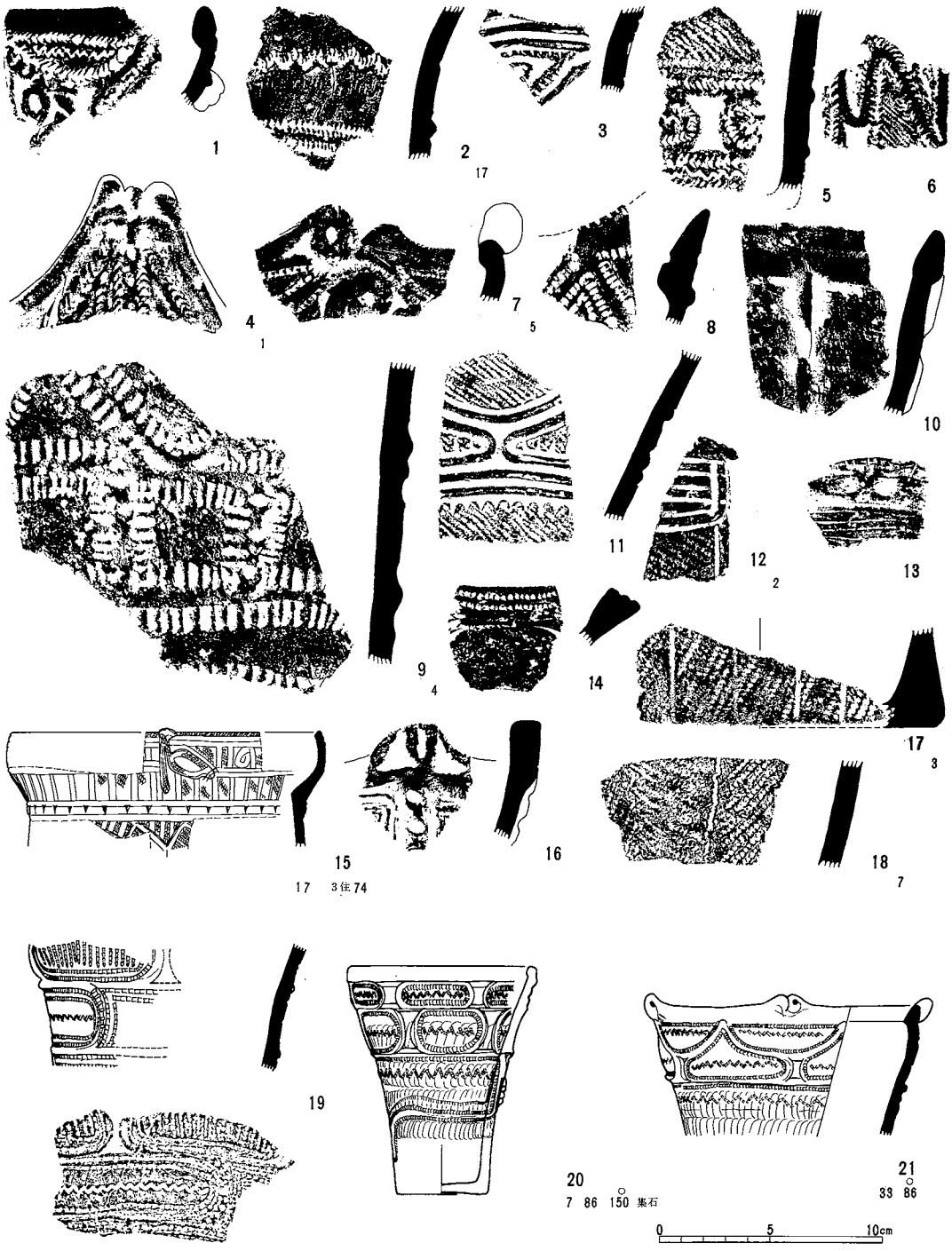
第144図　大石遺跡第47号旧住居址(B)・第48号住居址出土器(A)(1：3)

〈1～32　47旧住，33～47　48住〉



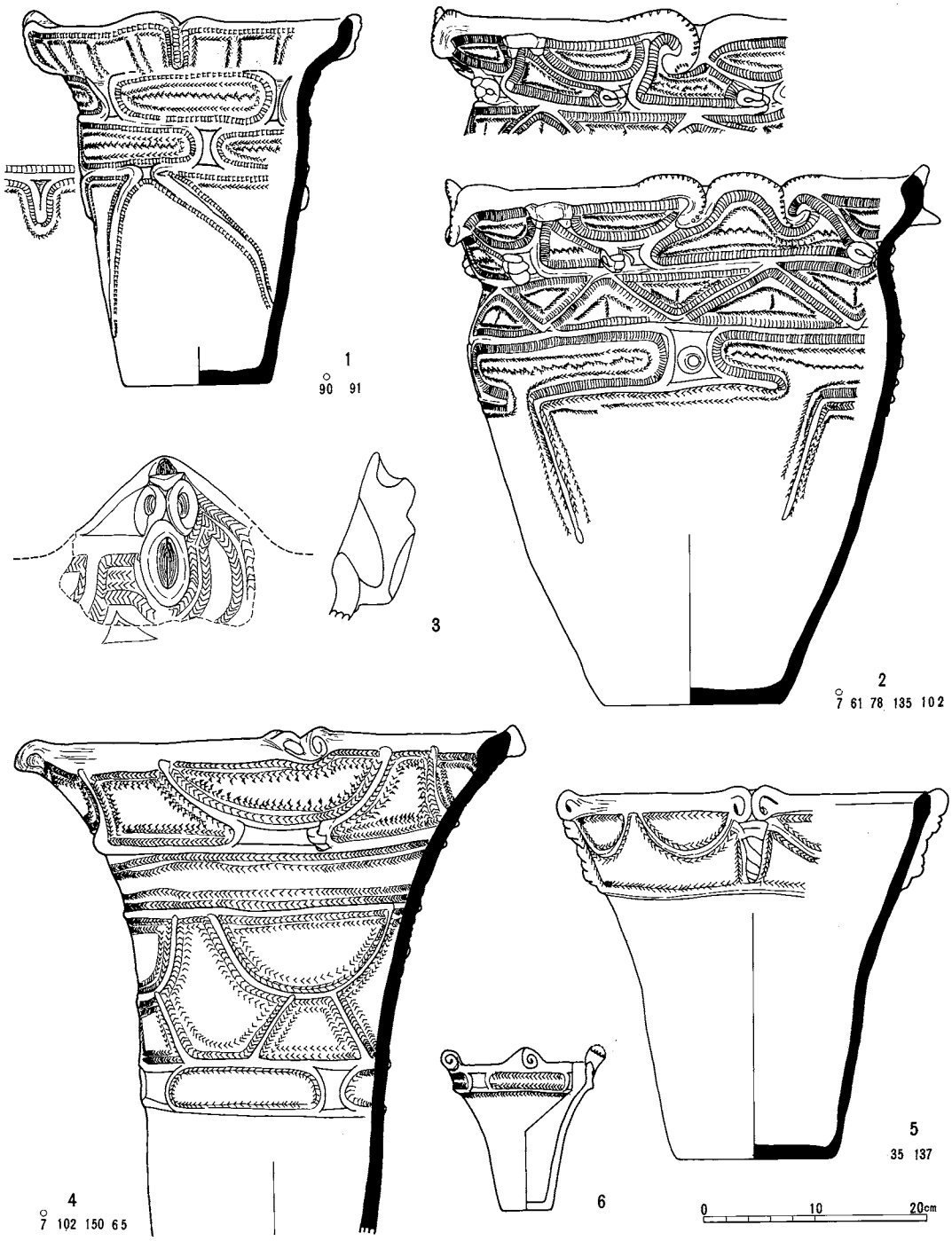
第145図　大石遺跡第48号住居址(B)・第２号住居址出土土器(A)(１：６　但し１～８・17は１：３)

〈１～８　48住，９～18　２住〉

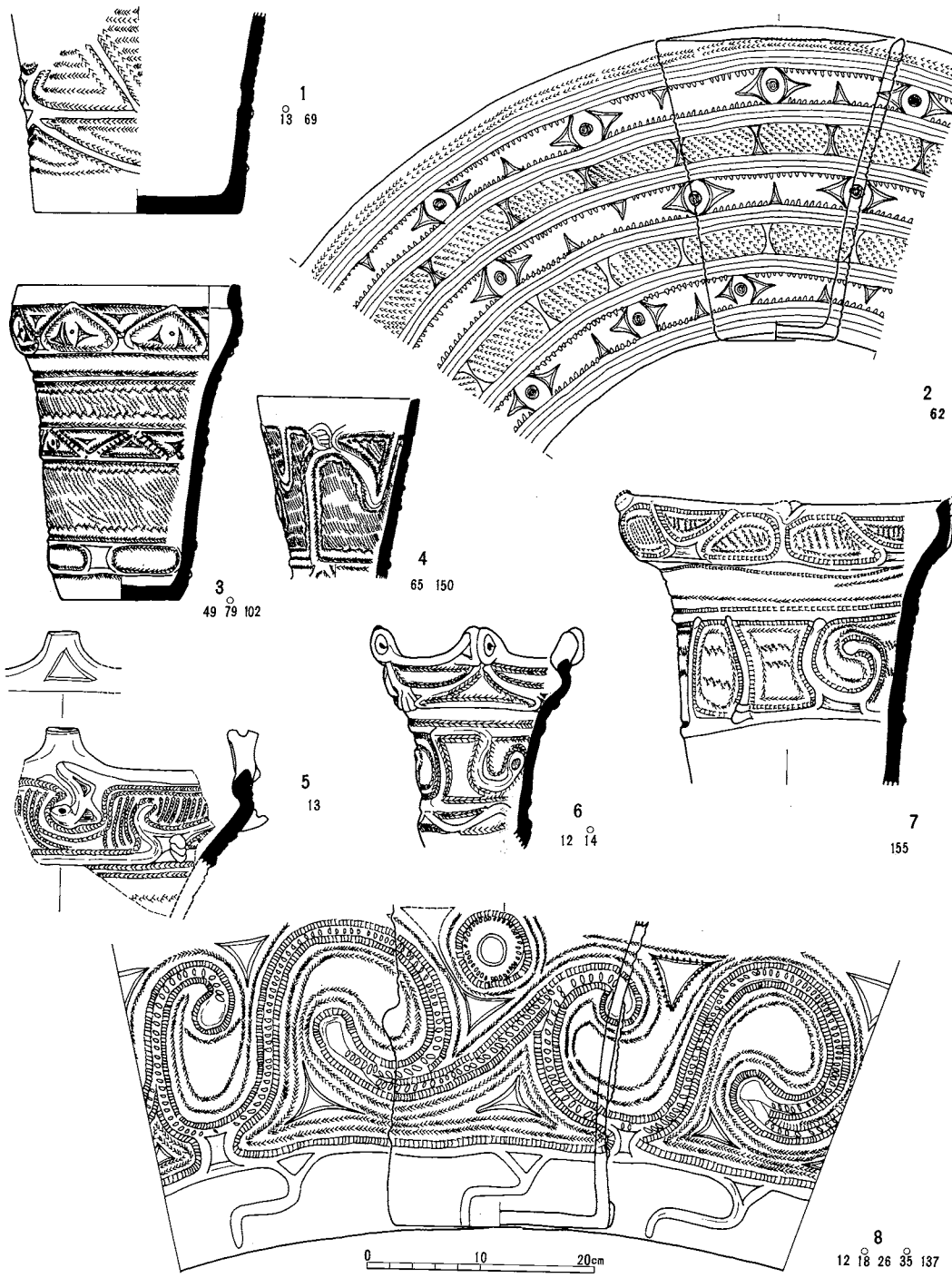


第146図　大石遺跡第２号住居址(B)・第３号住居址出土土器(A)（１：３　但し15・19～21は１：６）

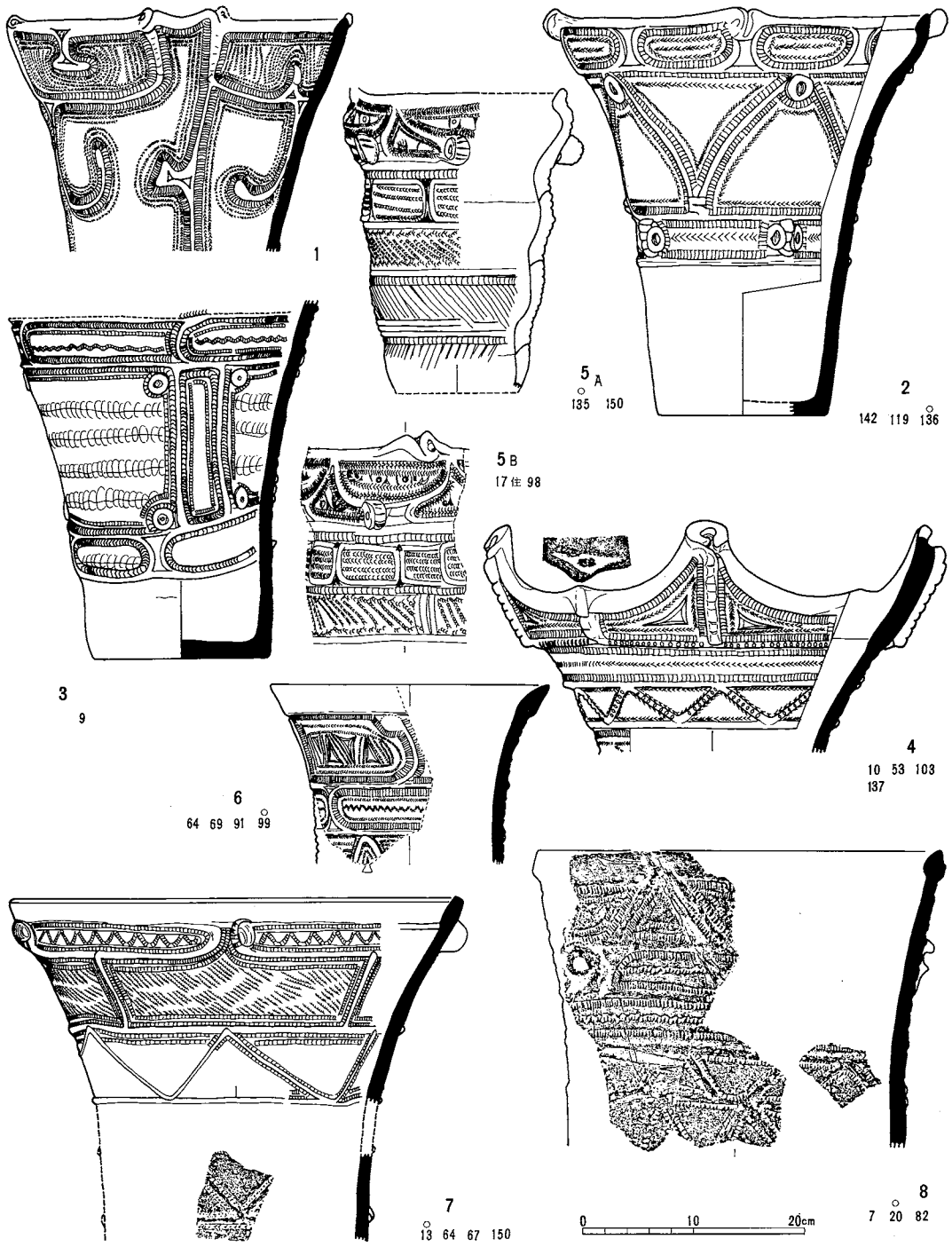
〈１～18　２住，19～21　３住〉



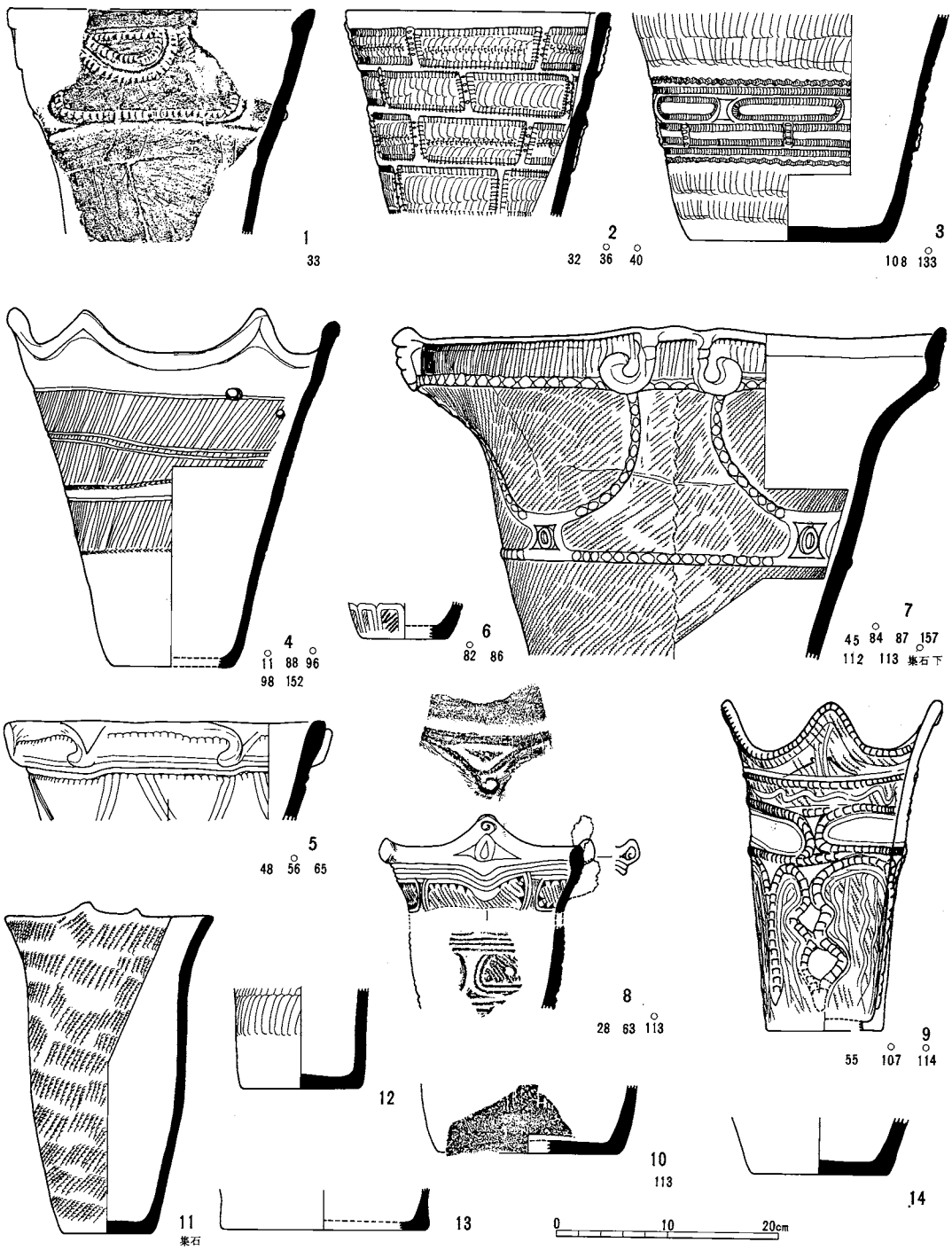
第147図　大石遺跡第３号住居址出土土器(B)（１：６　但し３は１：３）



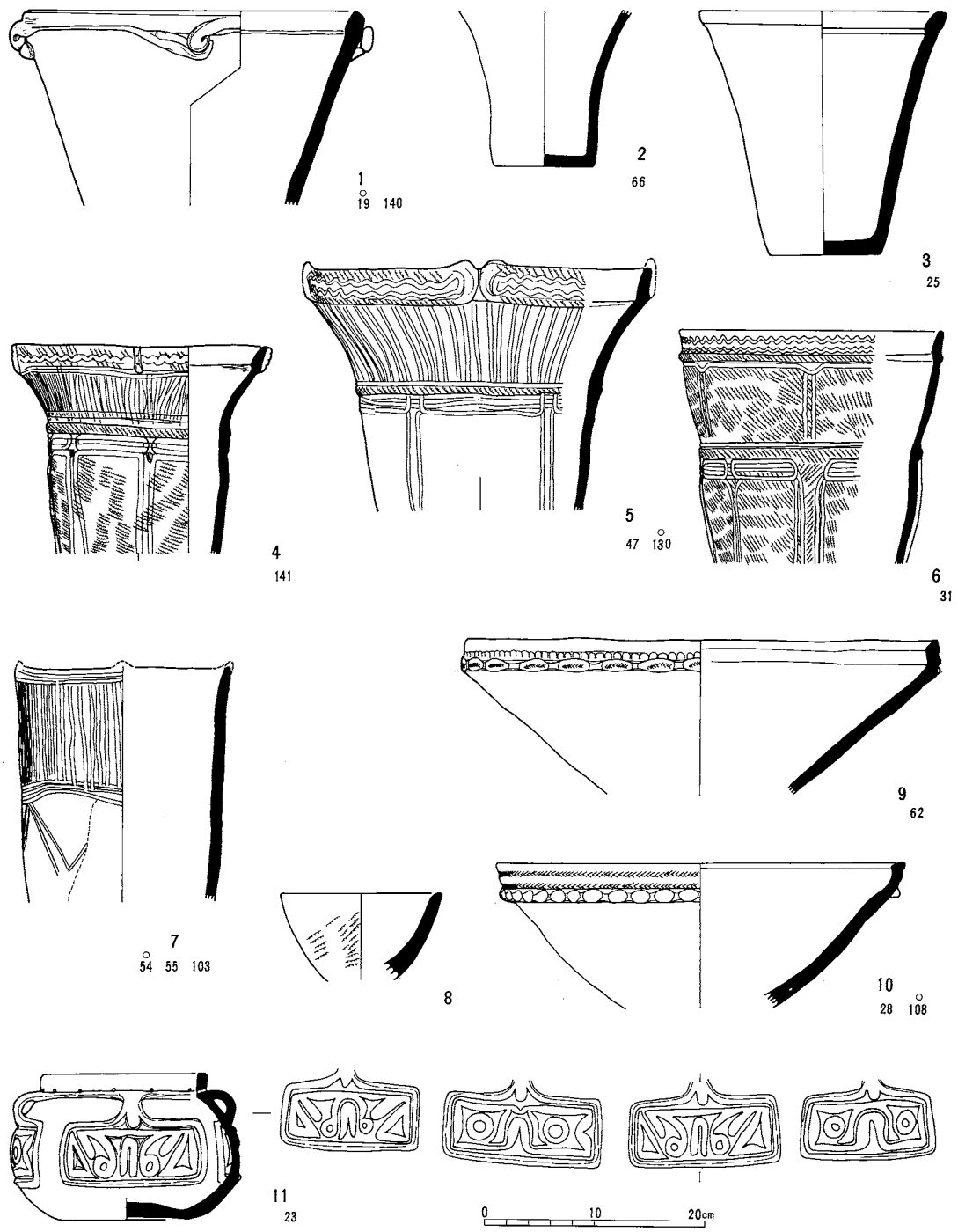
第148図　大石遺跡第３号住居址出土土器(C)(１：６)



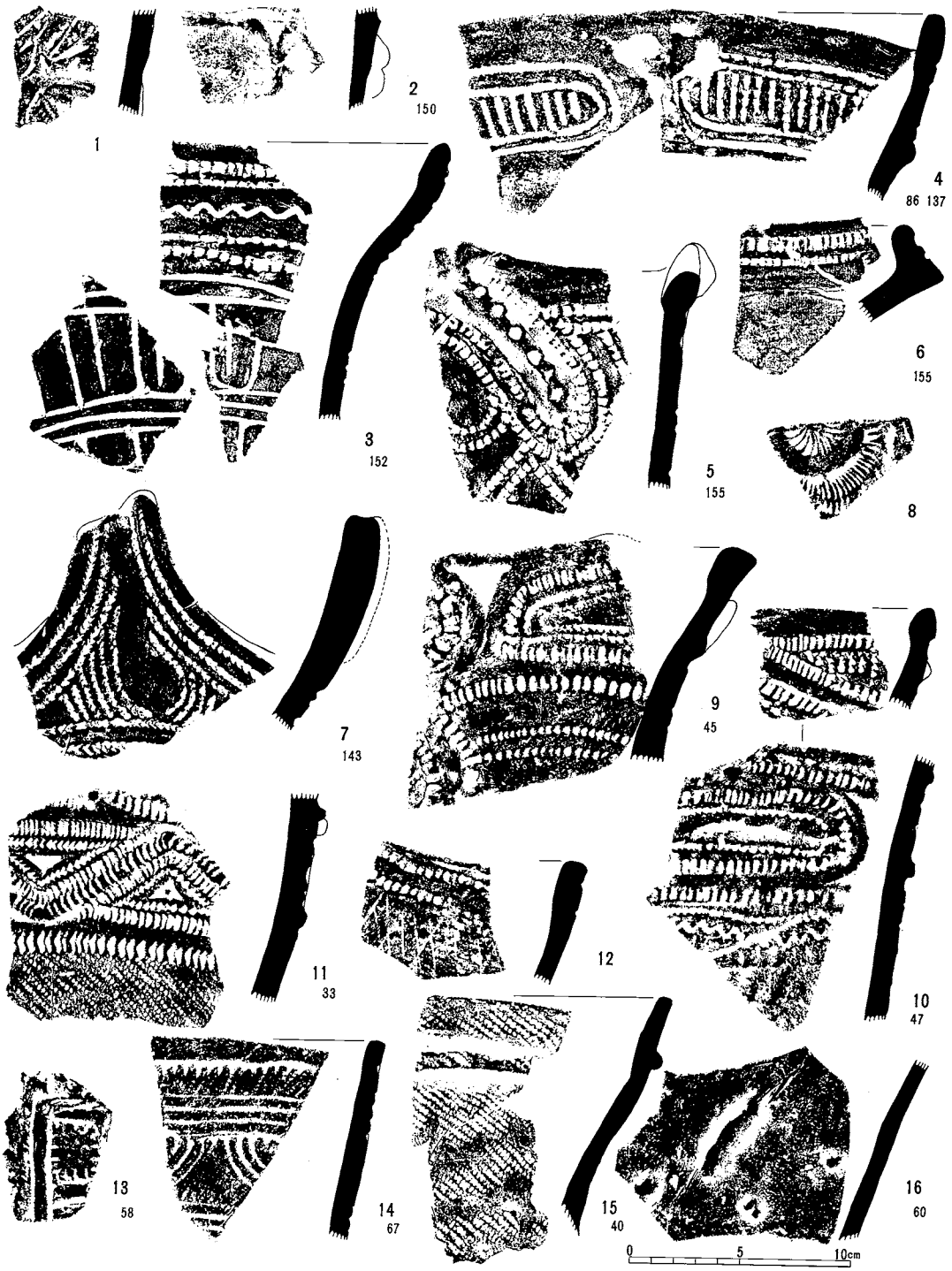
第149図　大石遺跡第３号住居址出土土器(D)(１：６)



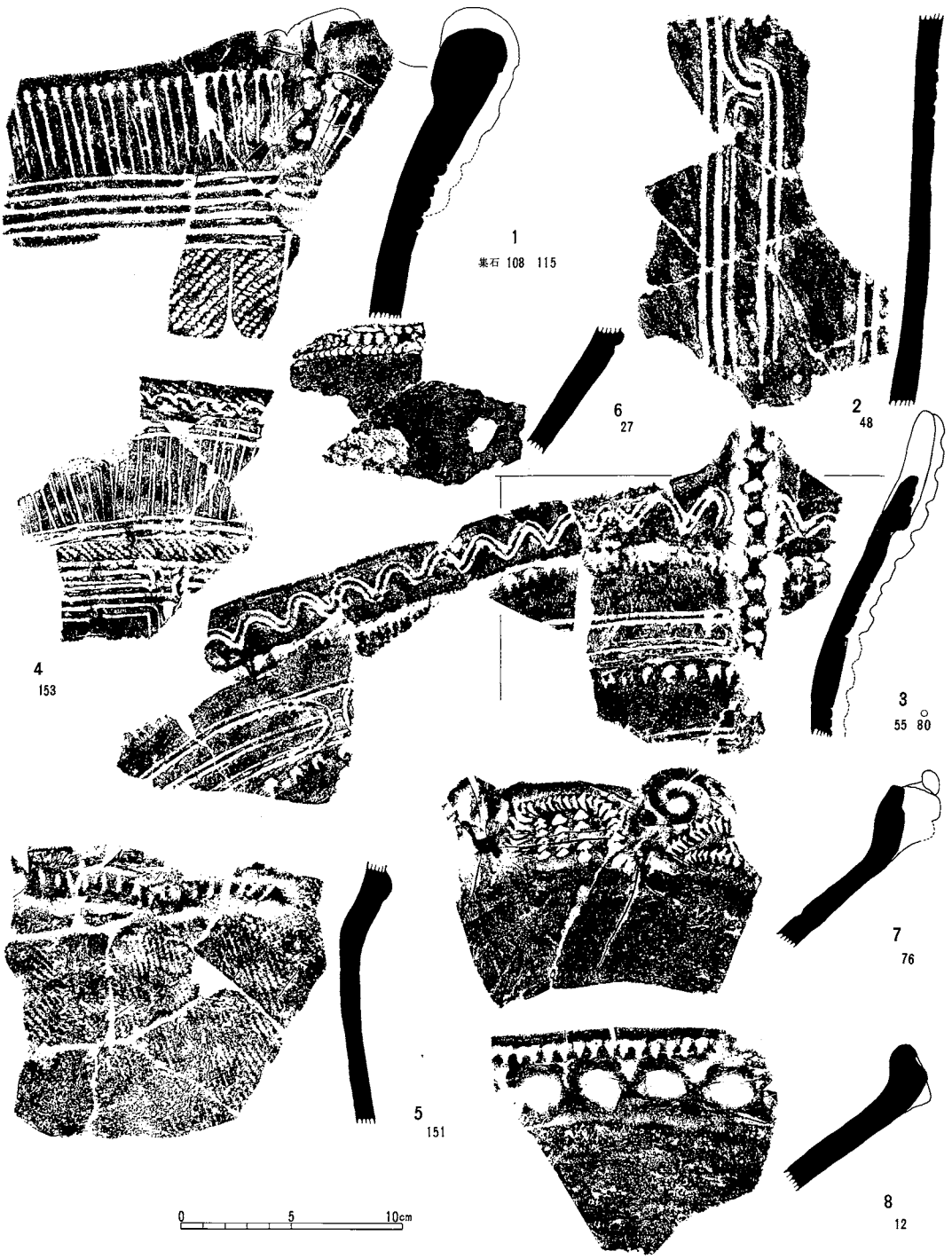
第150図　大石遺跡第３号住居址出土土器(E)(１：６)



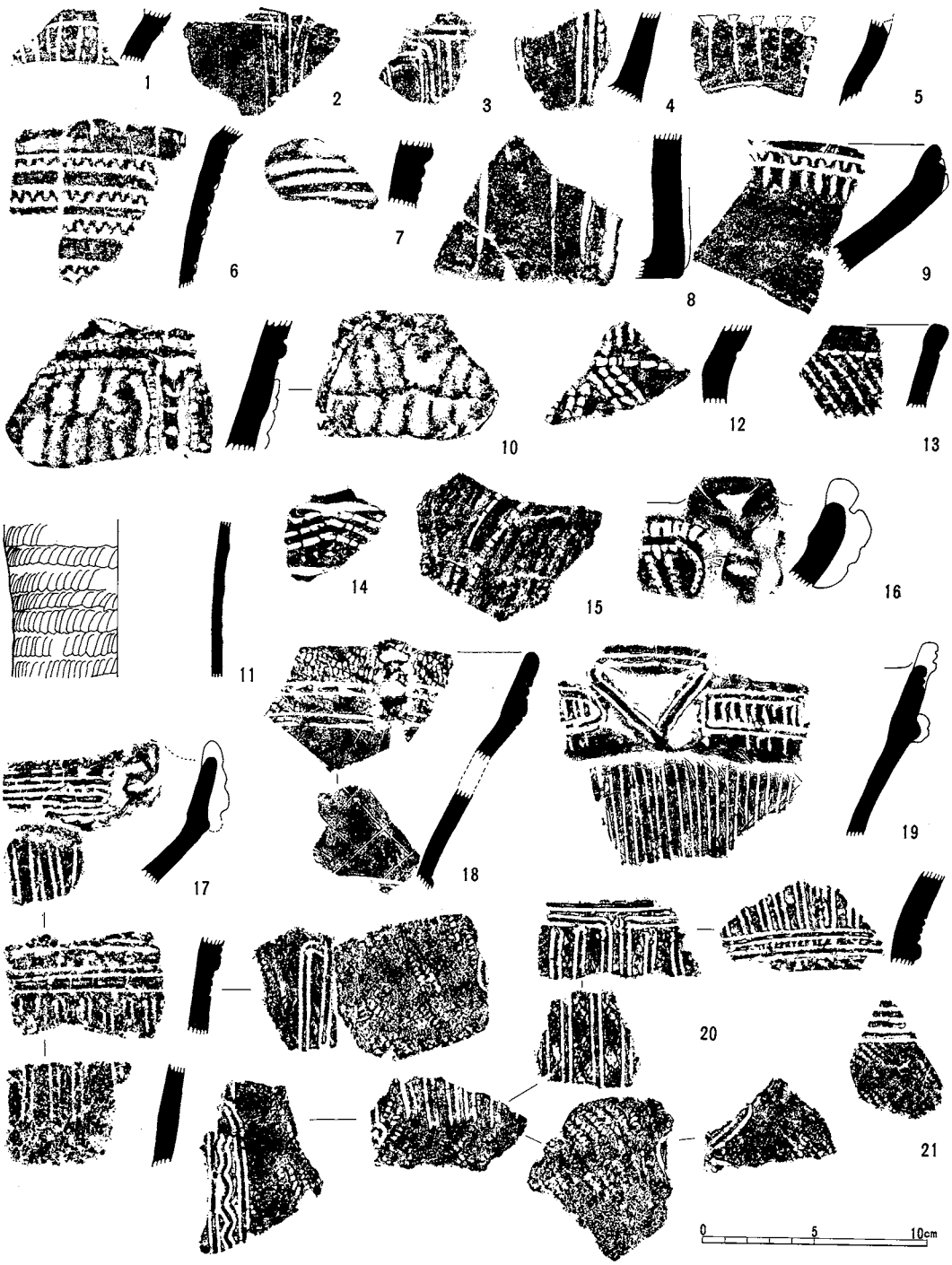
第151図　大石遺跡第３号住居址出土土器(F)（１：６　但し８は１：３）



第152図　大石遺跡第３号住居址出土土器(G)（１：３）

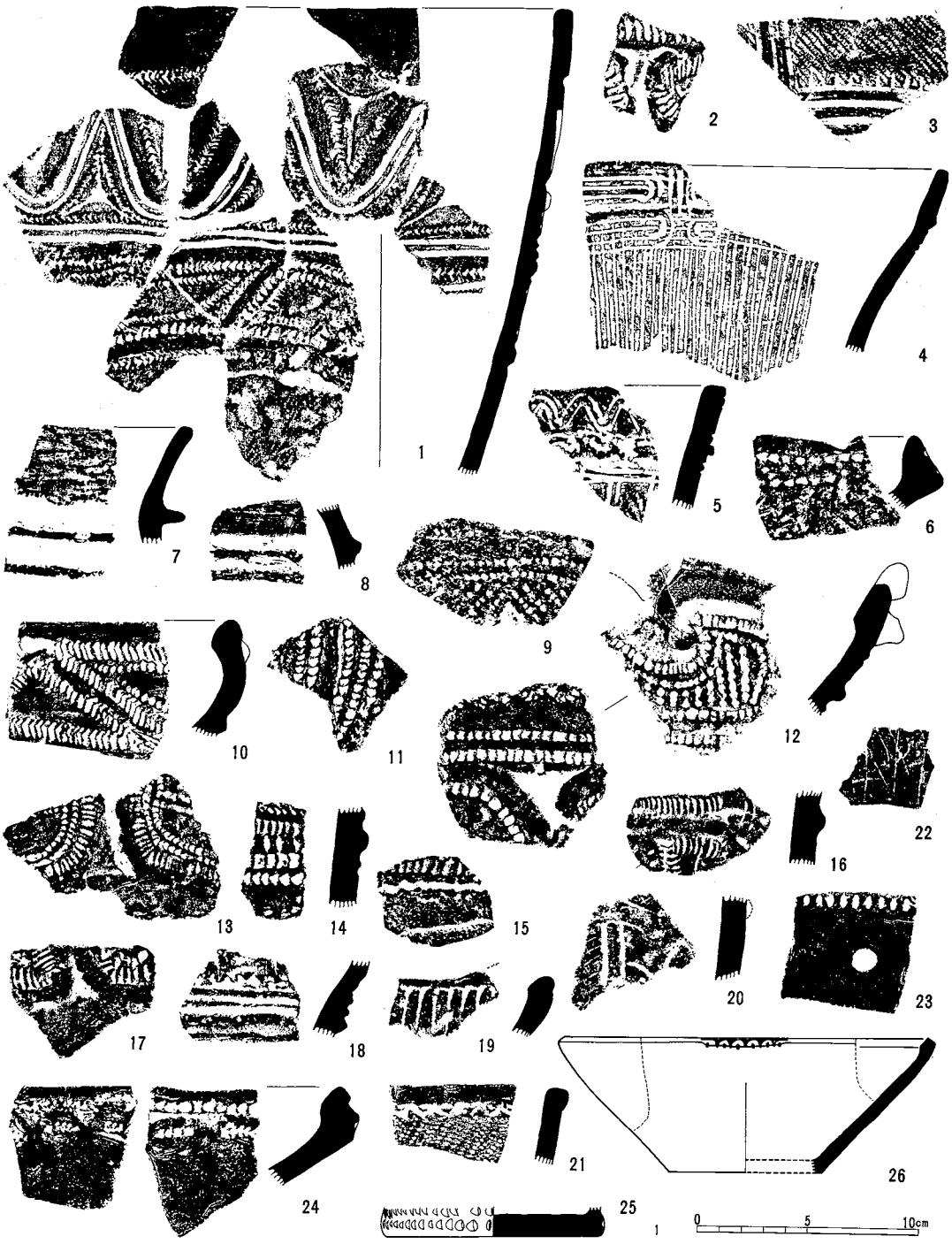


第153図　大石遺跡第３号住居址出土土器(H)(１：３)



第154図　大石遺跡第４号住居址出土土器(A)(１：３　但し11は１：６)

第155図　大石遺跡第４号住居址(B)・第５号新住居址出土土器(B)（１：３　但し３～10は１：６）
〈１・２　４住，３～17　５住〉

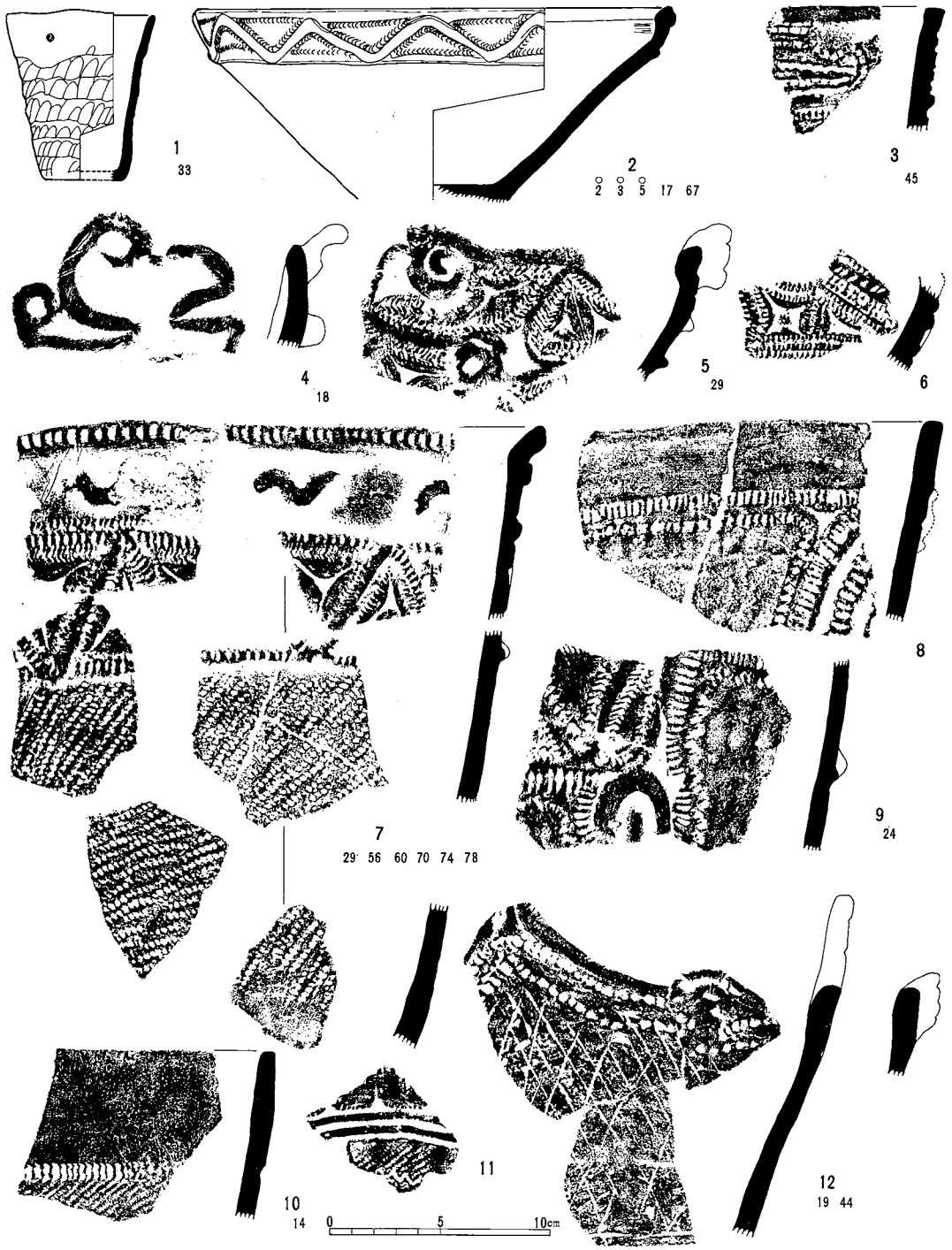


第156図　大石遺跡第５号住居址(C)・第11号住居出土土器(A)（１：３　但し25・26は１：６）

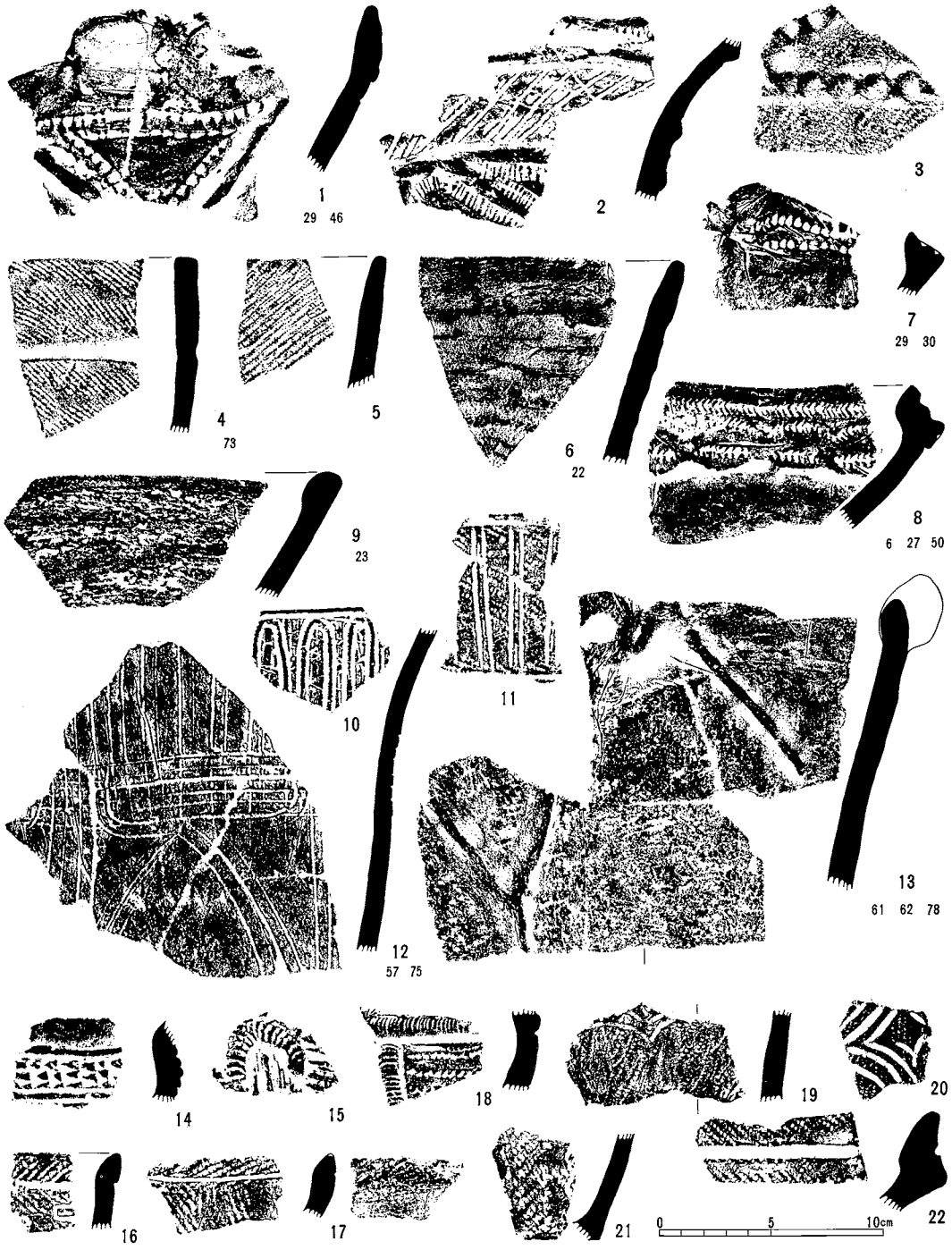
〈１～24　５住，25・26　11住〉

第157図　大石遺跡第11号住居址(B)・第12号住居址(A)(1：6　但し1～7は1：3)

〈1～7　11住，8～20　12住〉

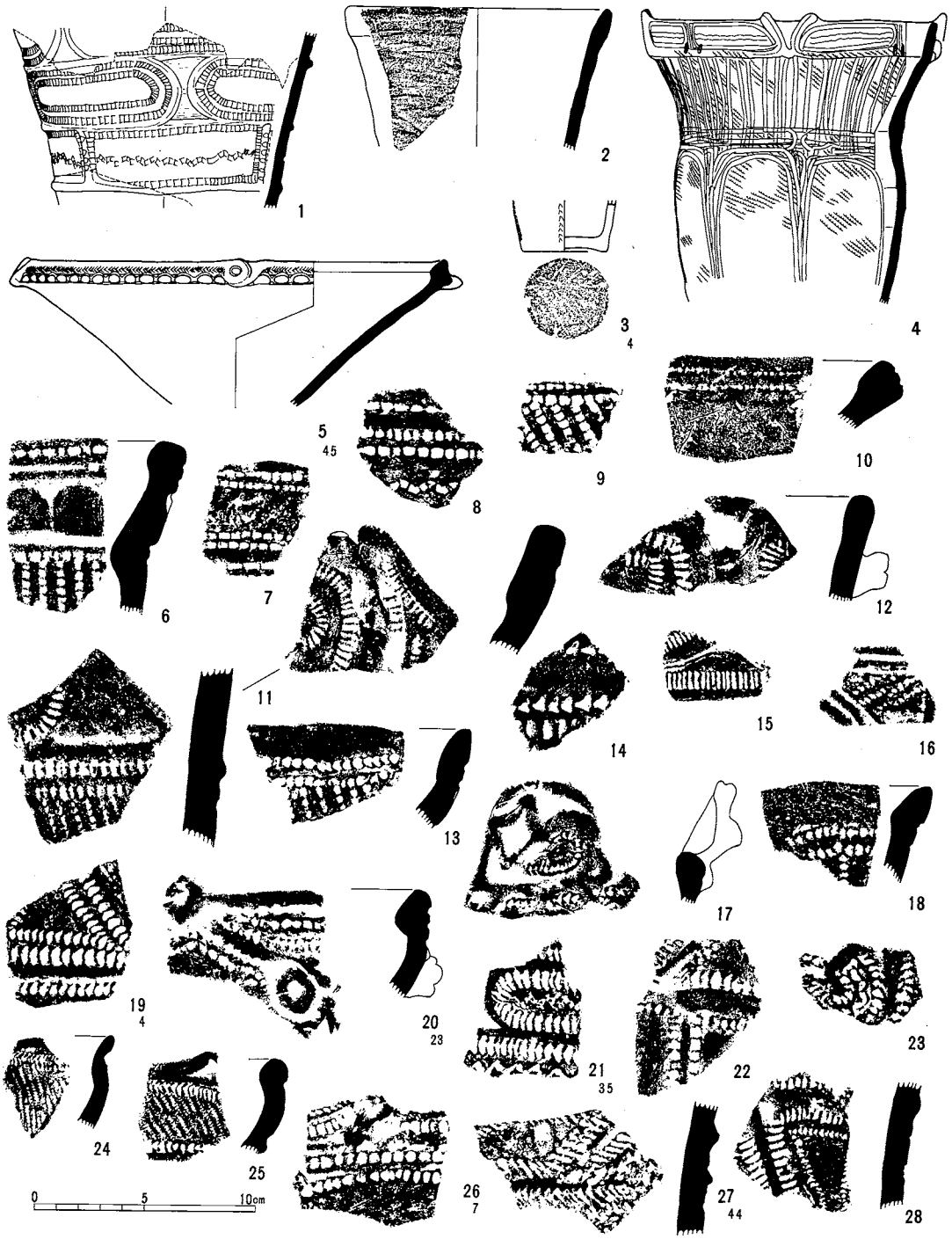


第158図　大石遺跡第12号住居址出土土器(B)(1：3　但し1・2は1：6)

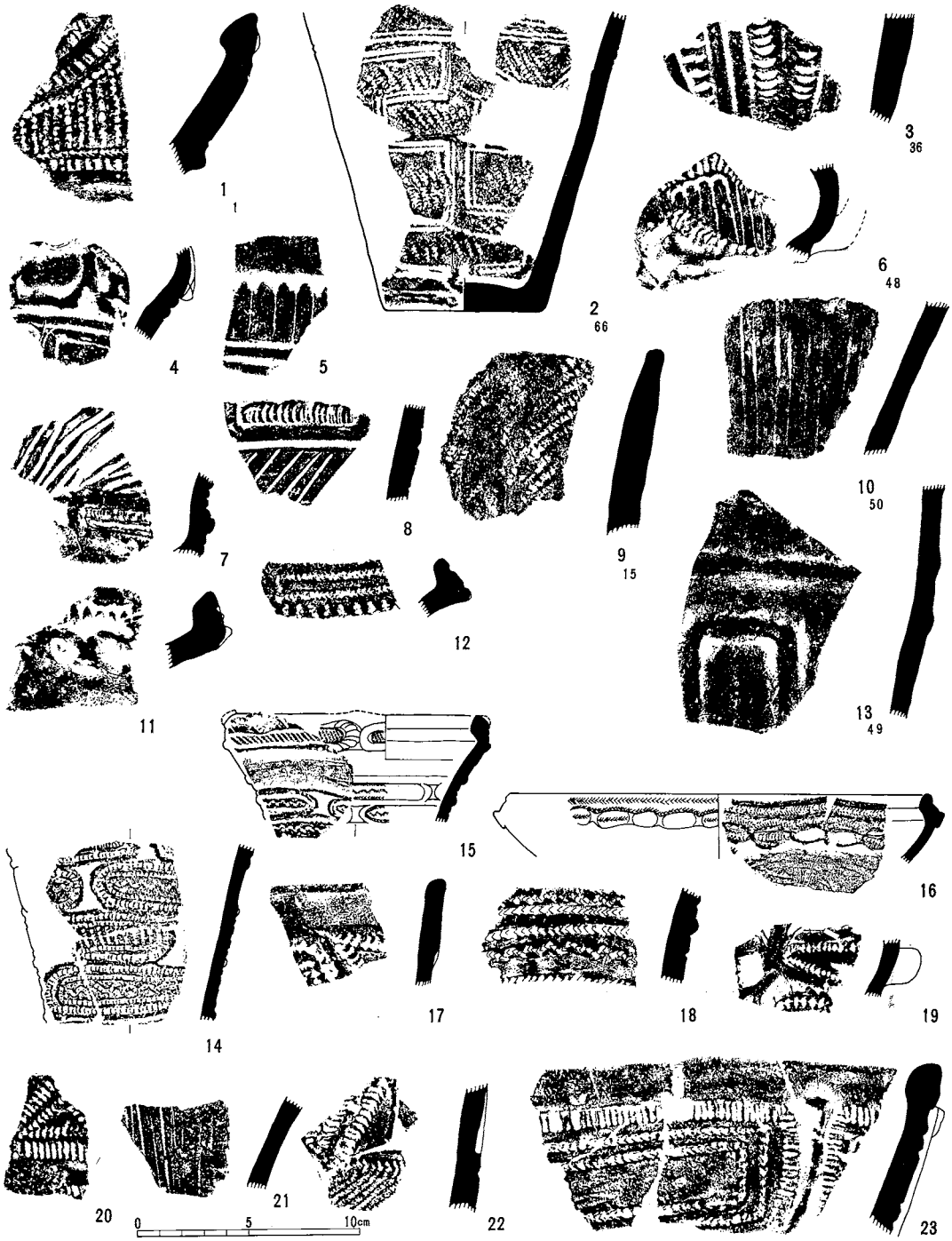


第159図　大石遺跡第12号住居址(C)・第13号住居址出土土器(A)(1：3)

(1～13　12住，14～22　13住)

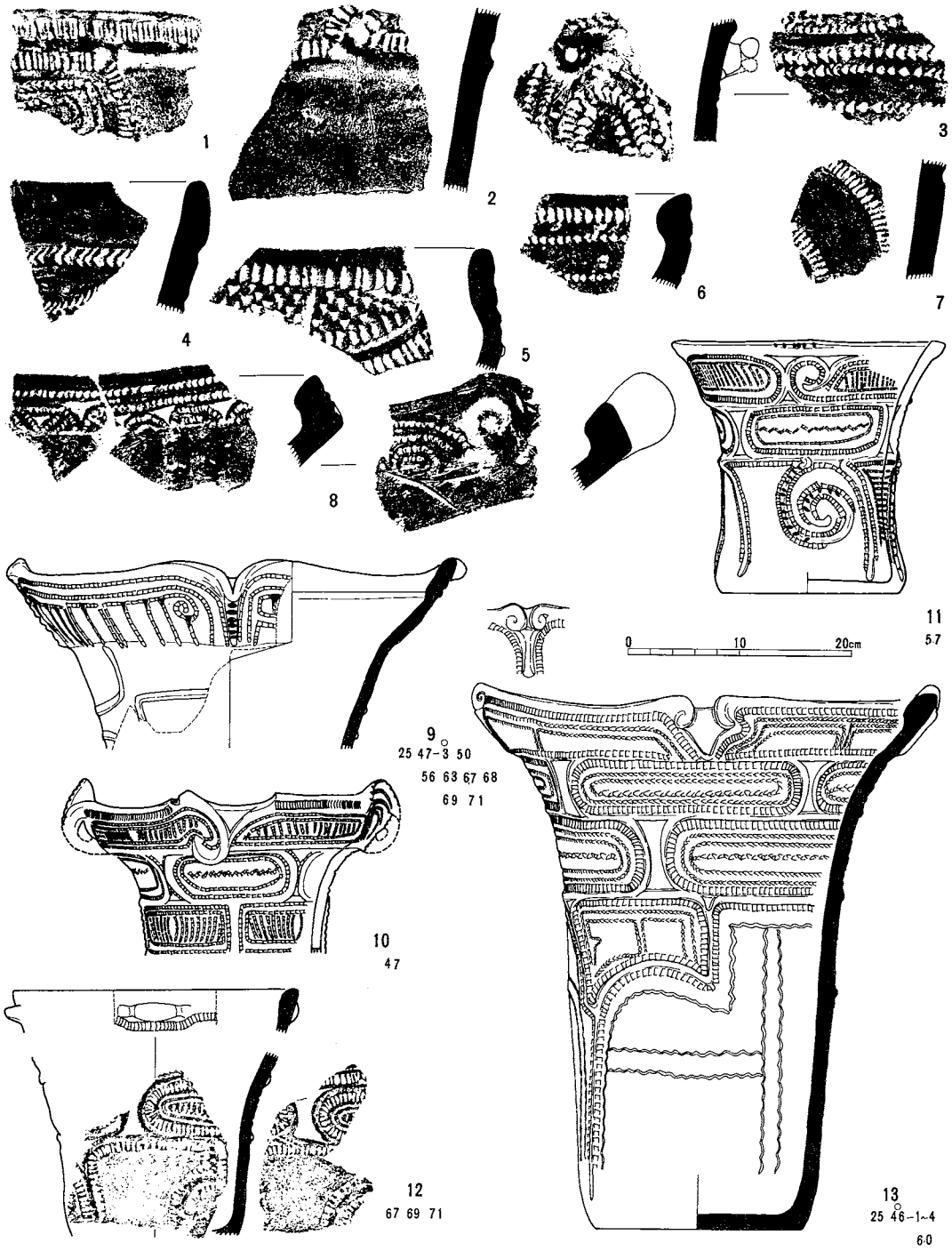


第160図　大石遺跡第13号住居址出土土器(B)（1：3　但し1～5は1：6）

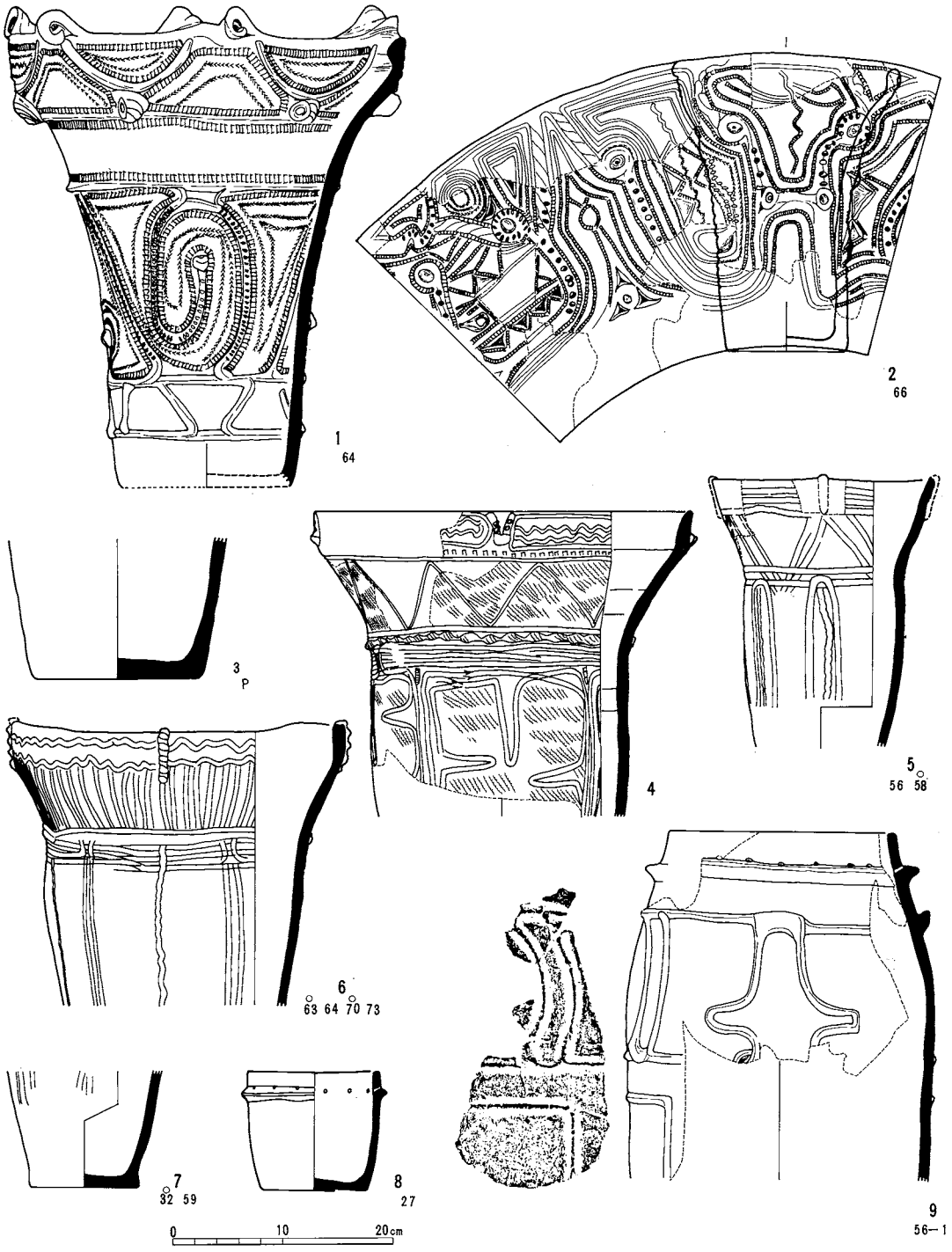


第161図　大石遺跡第13号住居址(C)・第14号住居址出土土器(A)(1：3　但し14～16は1：6)

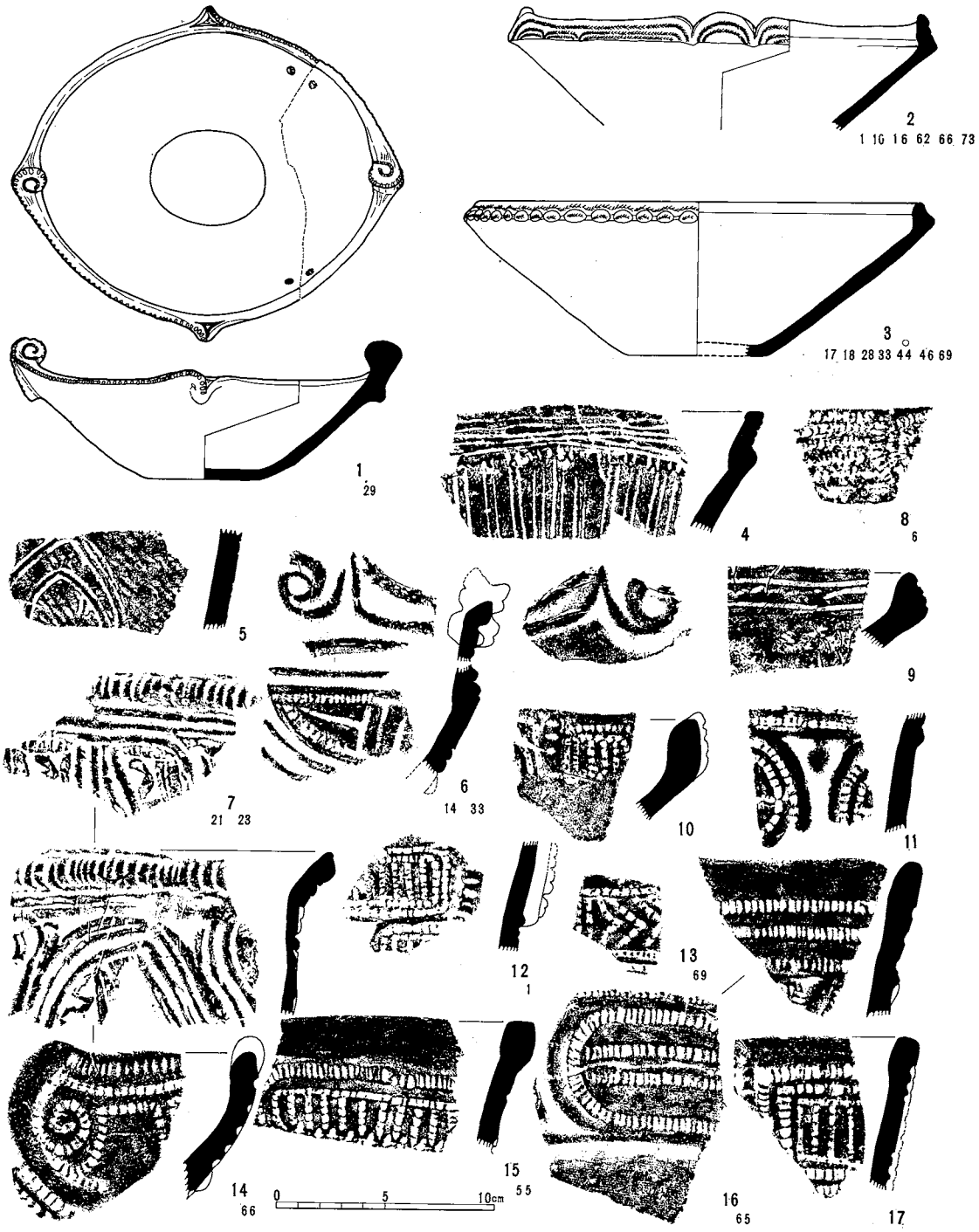
〈1～13　13住，14～23　14住〉



第162図　大石遺跡第14号住居址(B)・第15号住居址出土土器(A)(1：6　但し1～8は1：3)



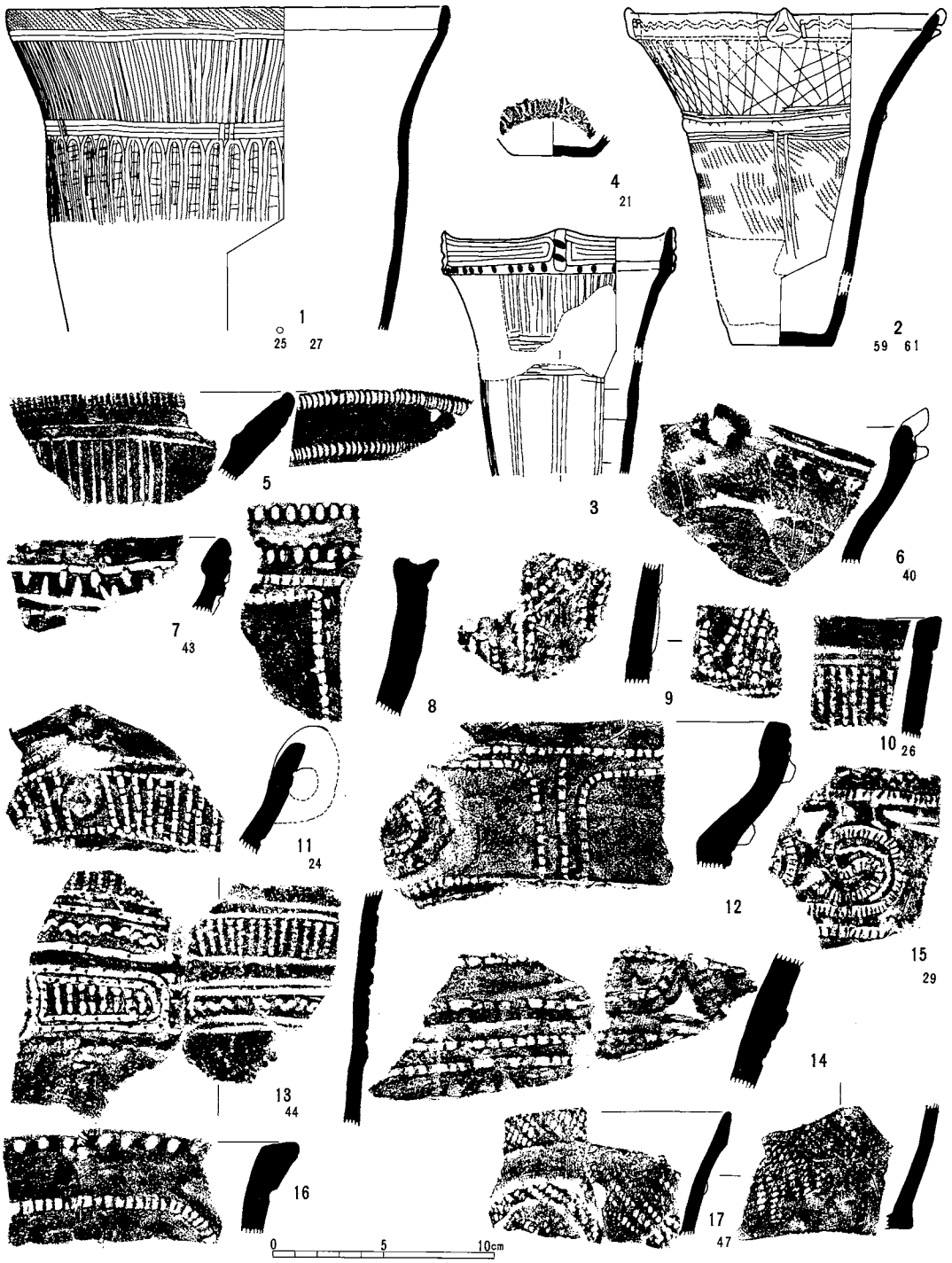
第163図　大石遺跡第15号住居址出土土器(B)(1：6)



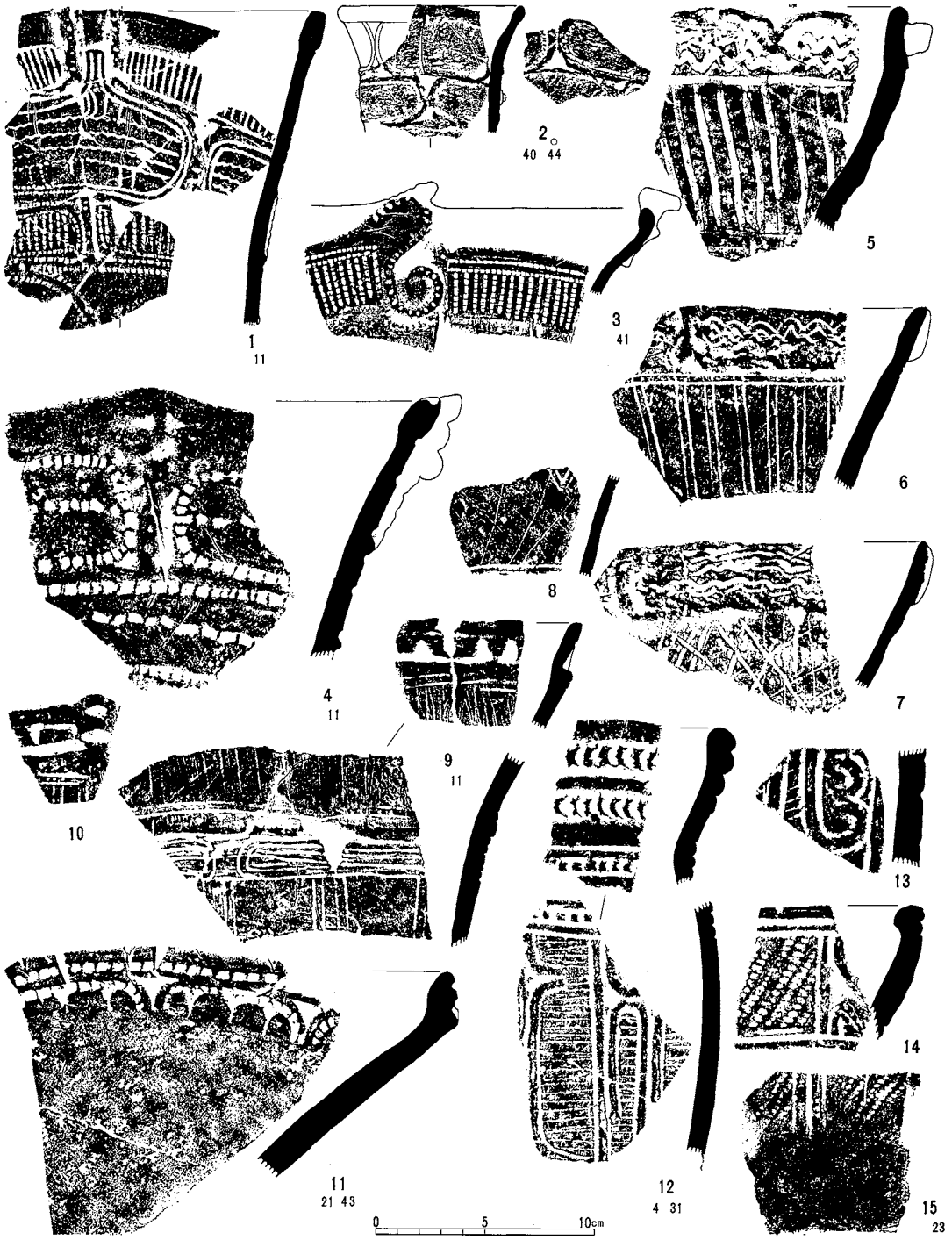
第164図　大石遺跡第15号住居址出土土器(C)(1：3　但し1～3は1：6)

第165図　大石遺跡第15号住居址(D)・第16号住居址出土土器(A)(1：6　但し1～11は1：3)

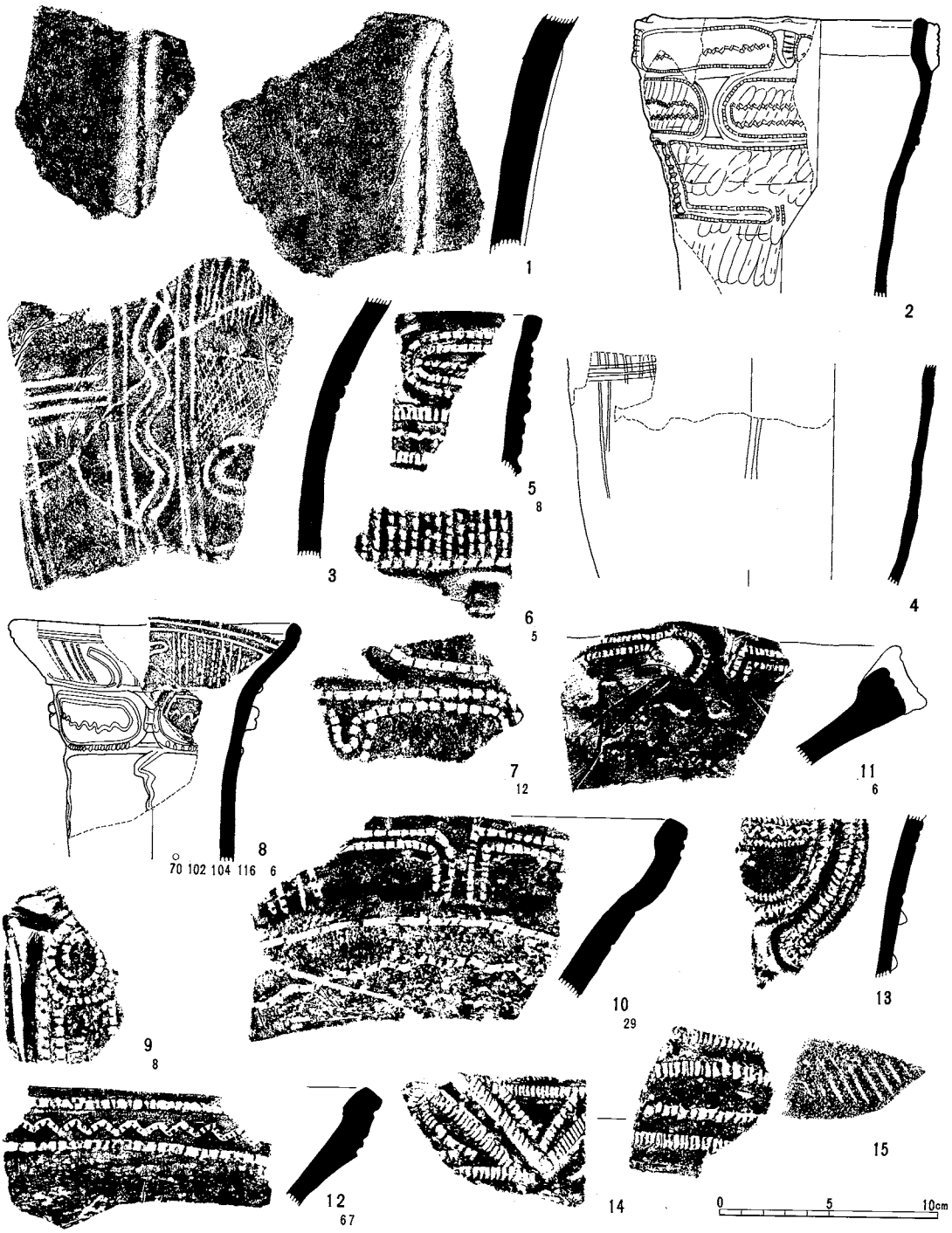
〈1～11　15住，12～18　16住〉



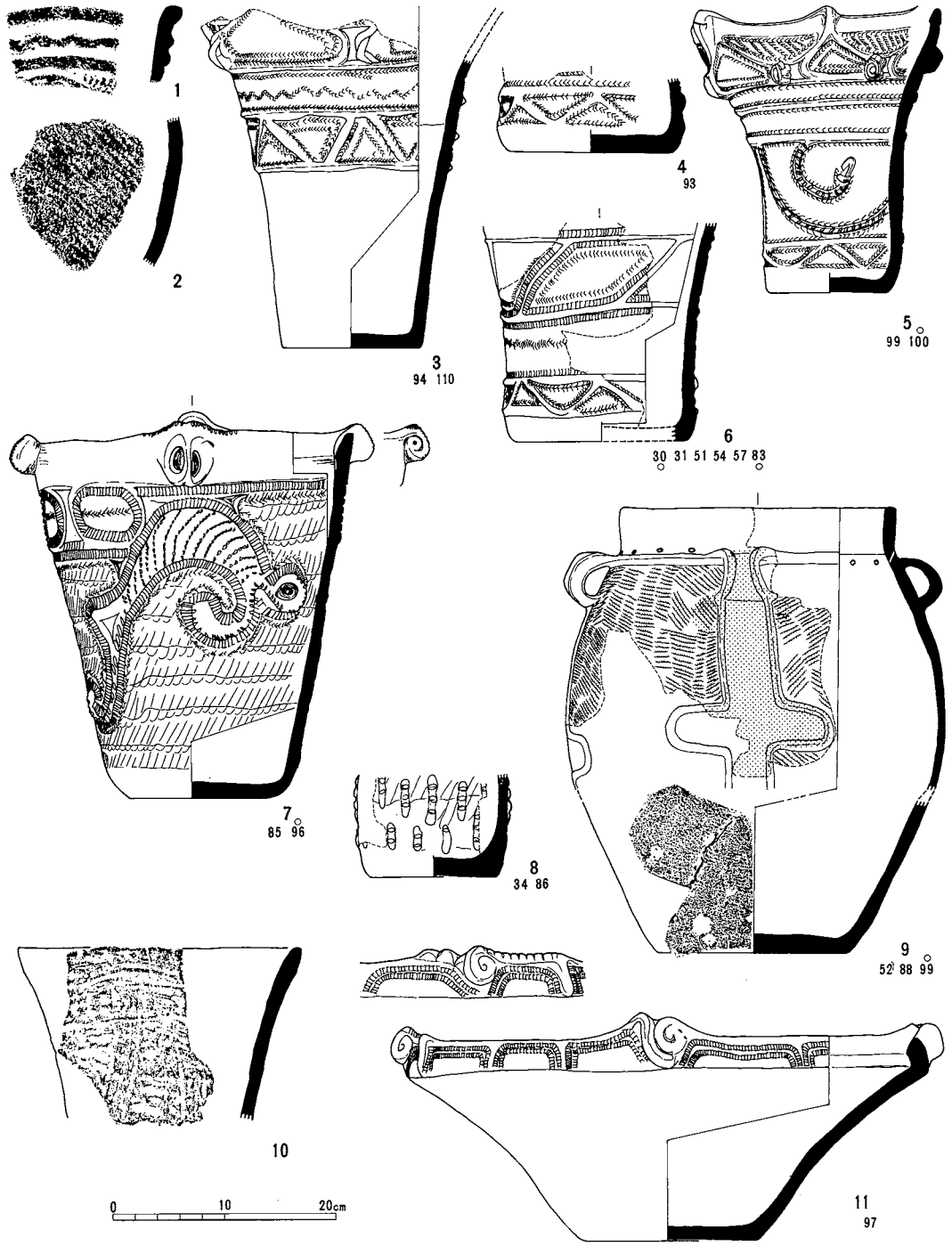
第166図　大石遺跡第16号住居址出土土器(B)(1：3　但し1～4は1：6)



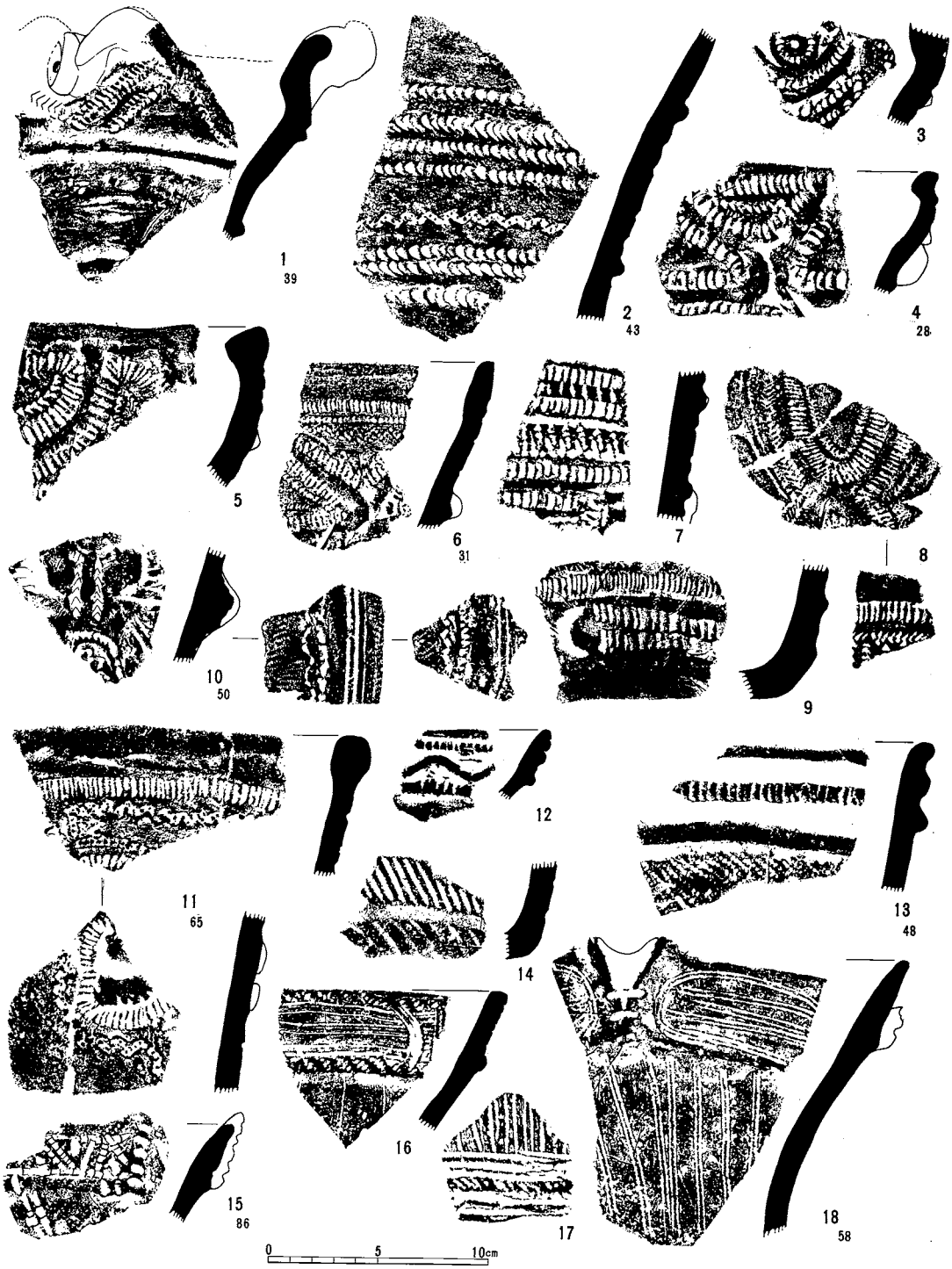
第167図　大石遺跡第16 号住居址出土土器(C)(1：3　但し1～3は1：6)



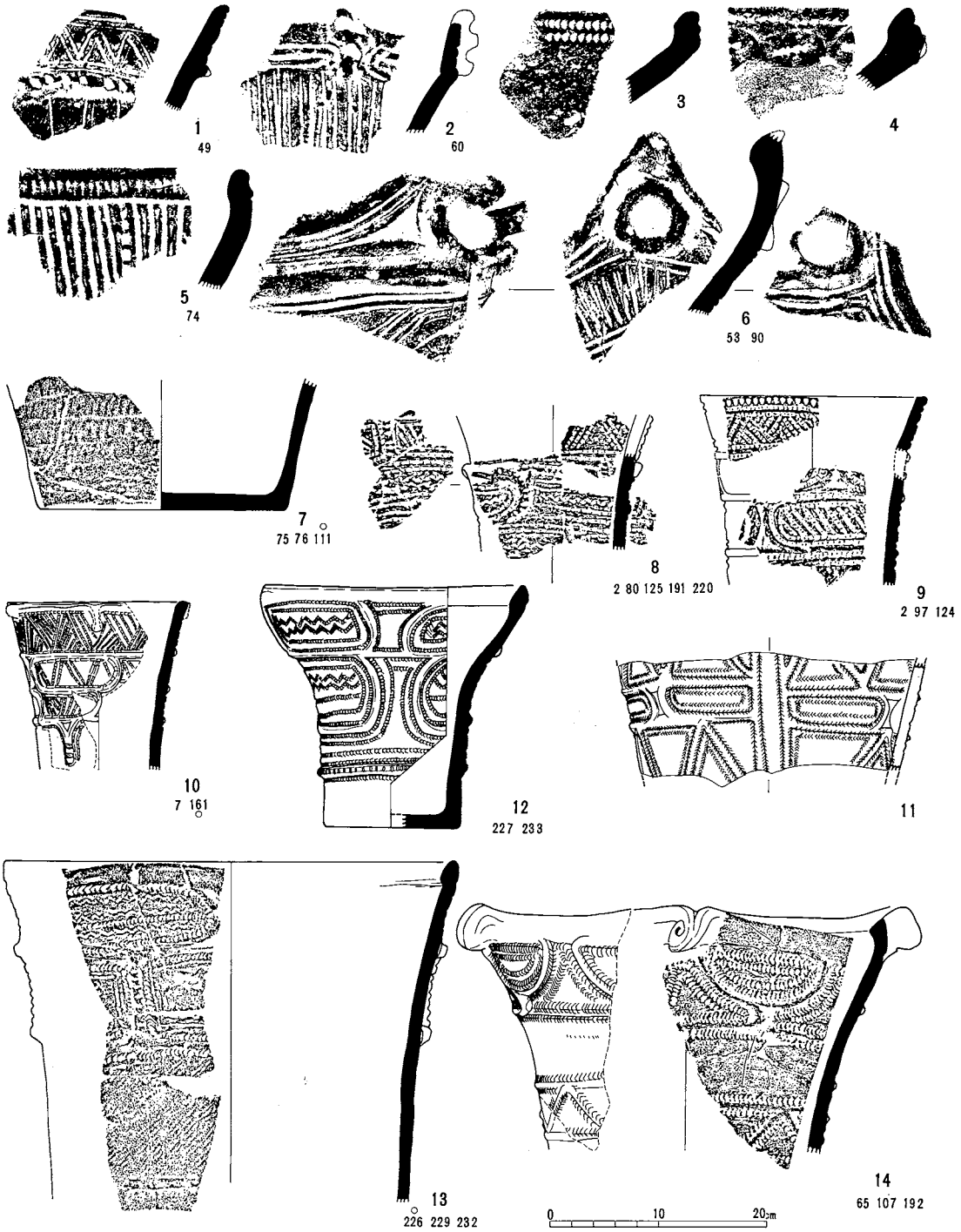
第168図　大石遺跡第17号住居址出土土器(A)（１：３　但し２・４・８は１：６）



第169図　大石遺跡第17号住居址出土土器(B)(1：6　但し1・2は1：3)

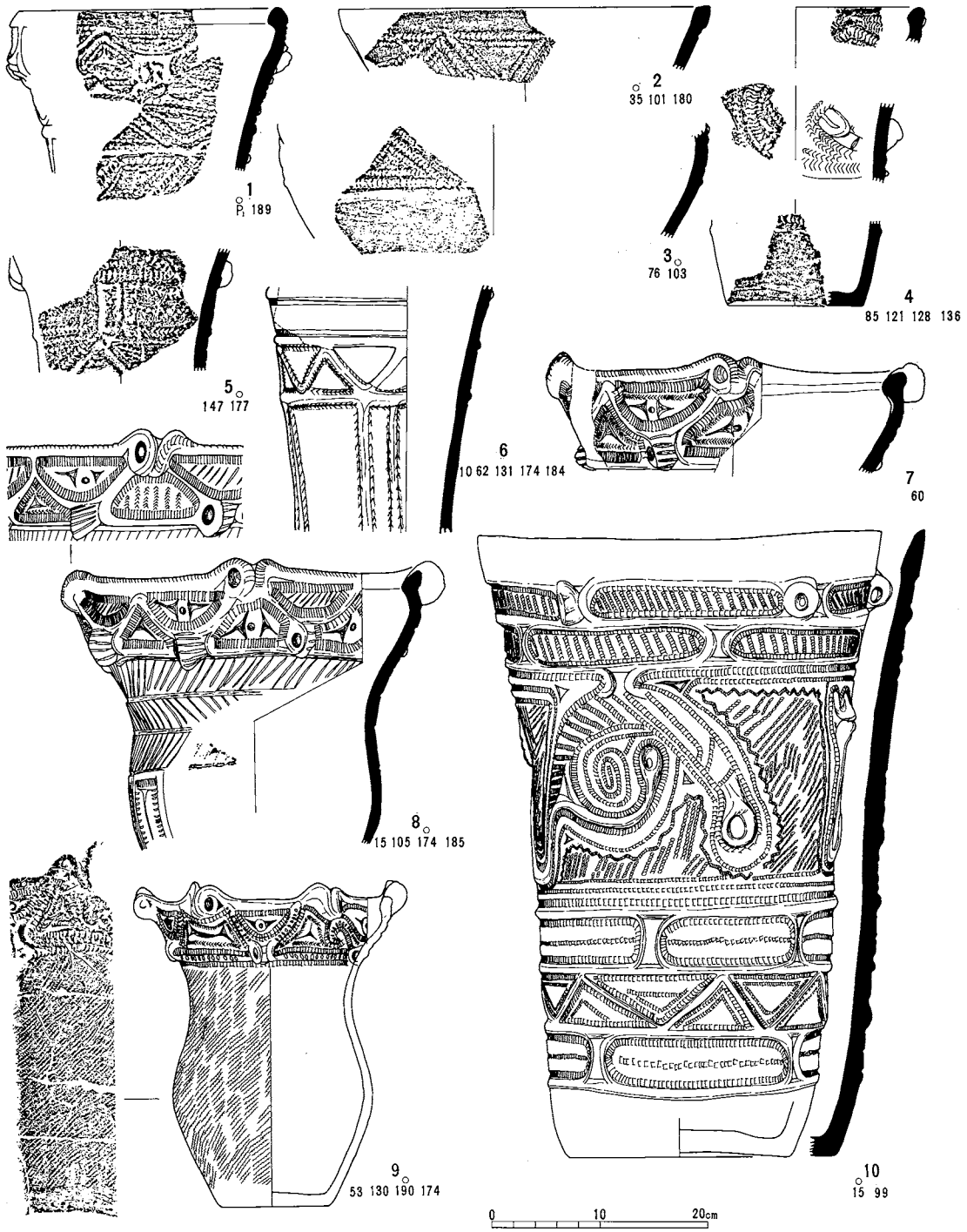


第170図　大石遺跡第17号住居址出土土器(C)(1：3)

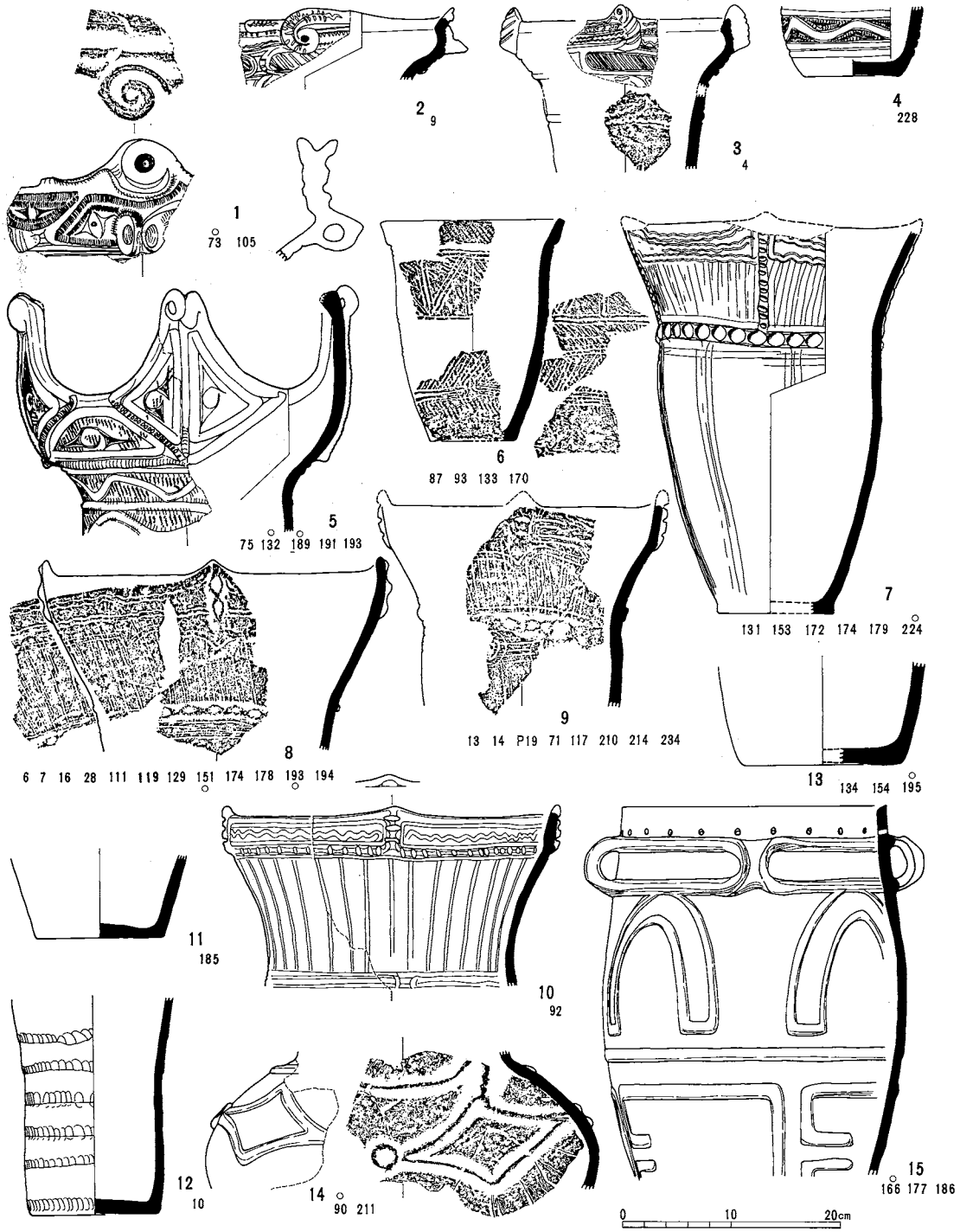


第171図　大石遺跡第17 号住居址(D)・第19号住居址出土土器(A)(1：6　但し1～6は1：3)

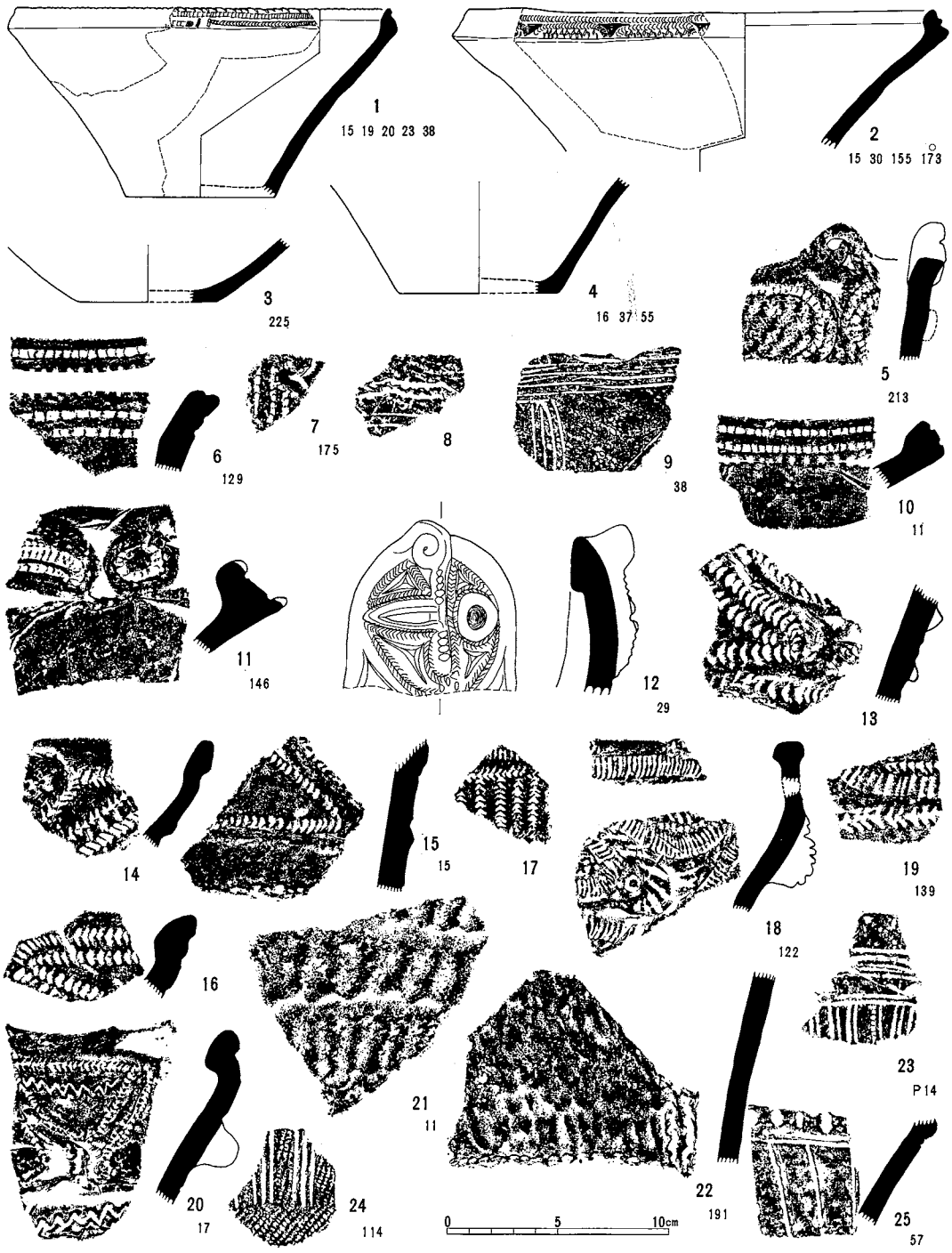
〈1～7　17住，8～14　19住〉



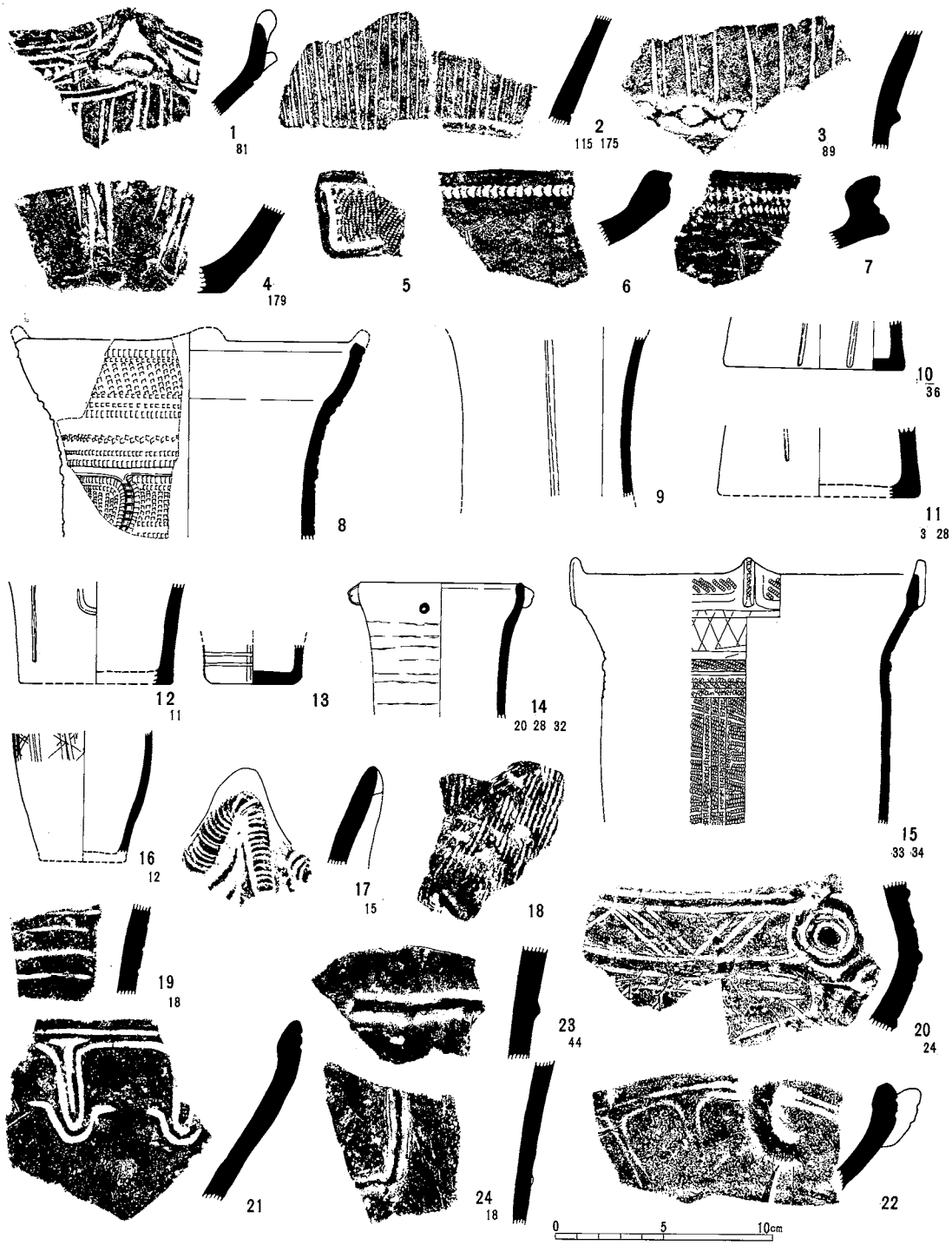
第172図　大石遺跡第19号住居址出土土器(B)(1：6)



第173図　大石遺跡第19号住居址出土土器(C)（1：6）

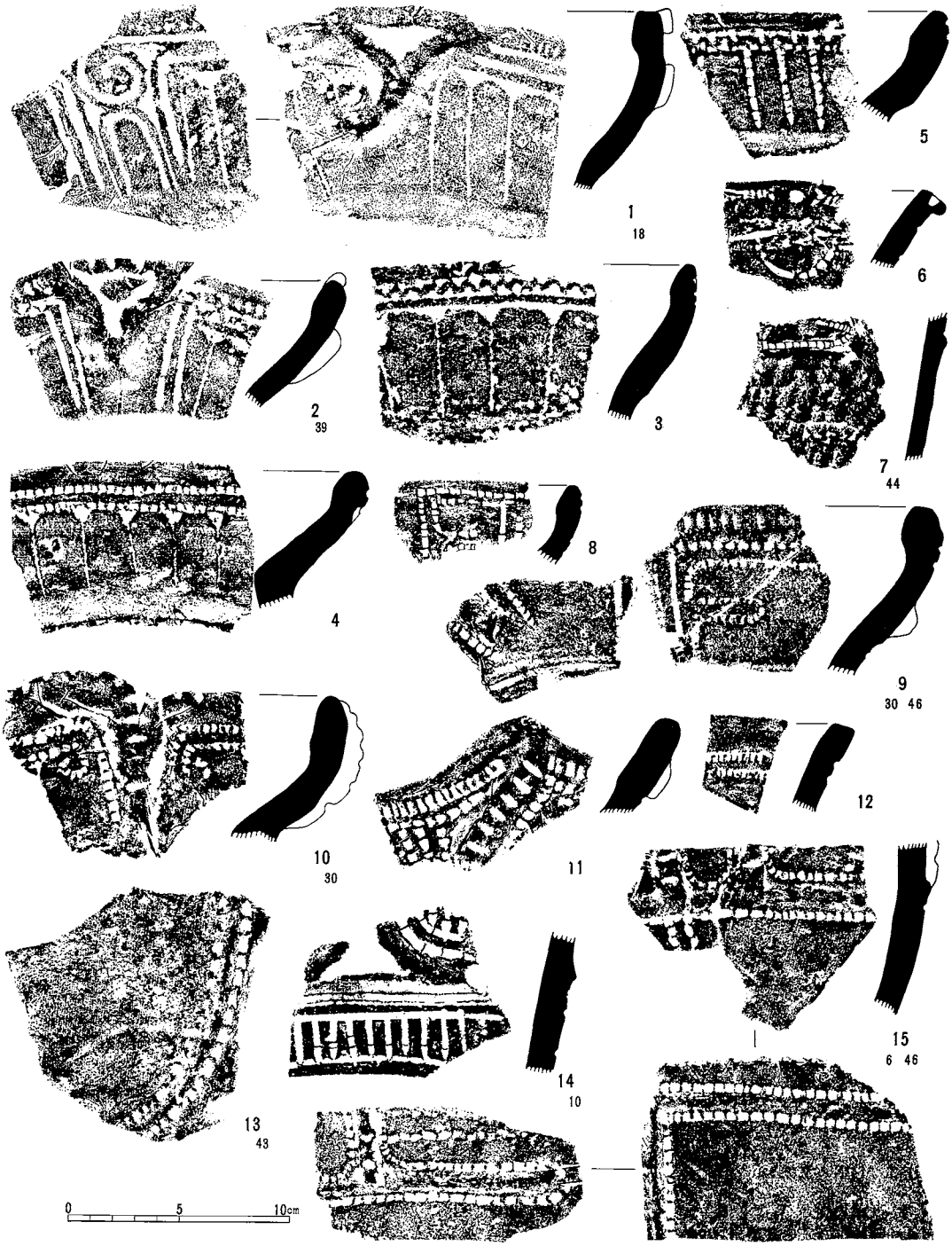


第174図　大石遺跡第19号住居址出土土器(D)(1：3　但し1～4は1：6)

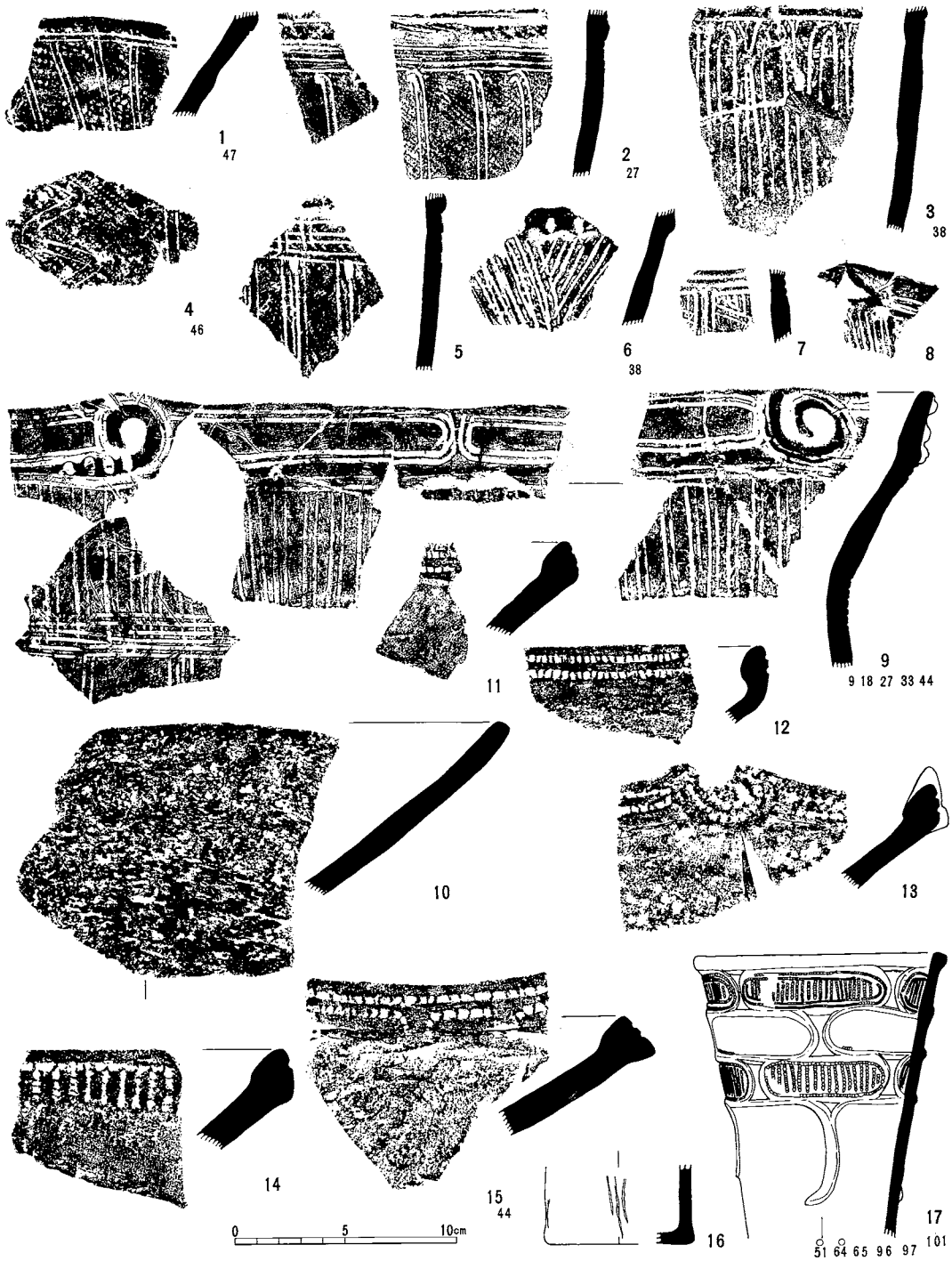


第175図　大石遺跡第19号住居址(E)・第20号住居址出土土器(A)(1：3　但し8～16は1：6)

〈1～7　19住，8～24　20住〉

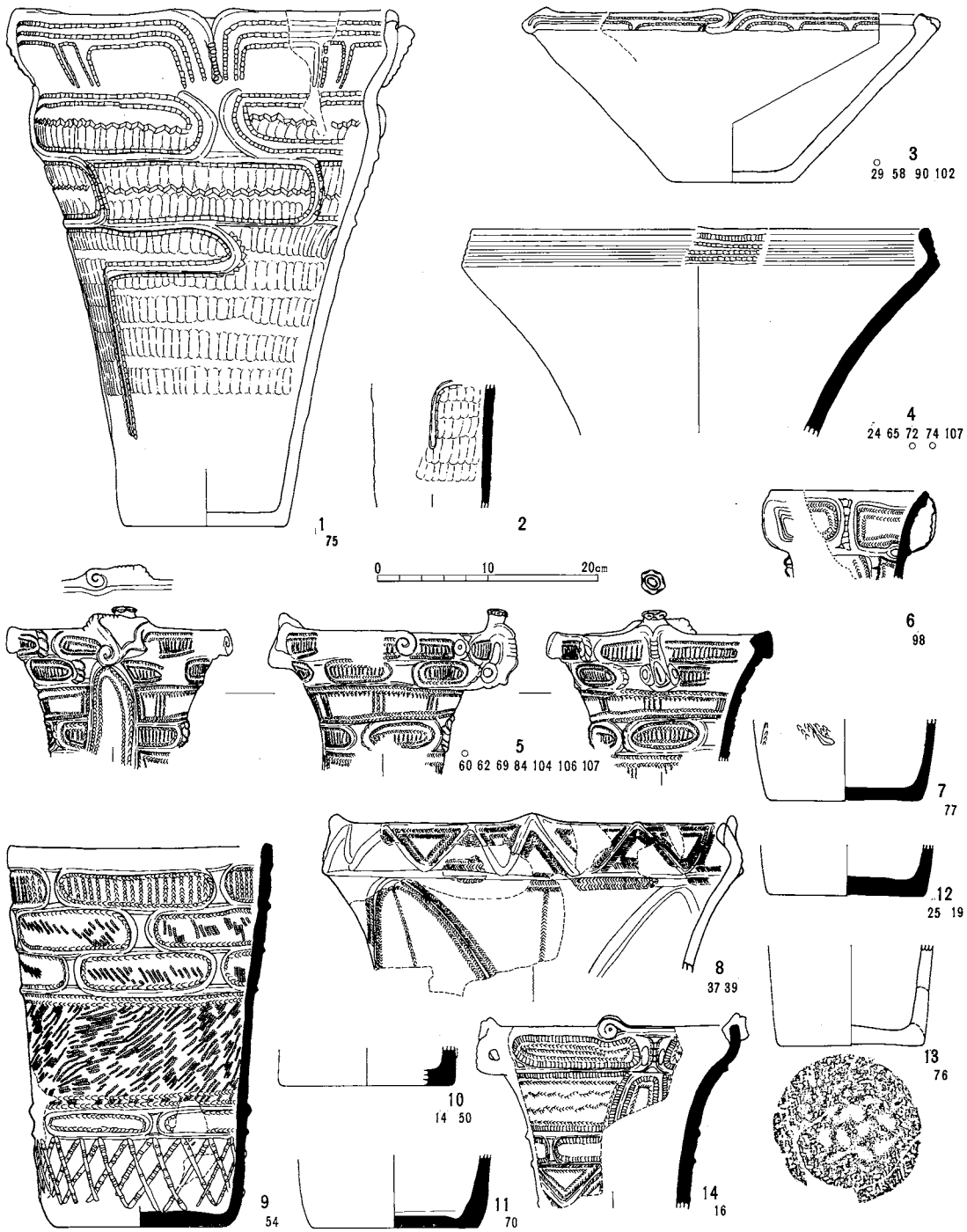


第176図　大石遺跡第20号住居址出土土器(B)(1 : 3)

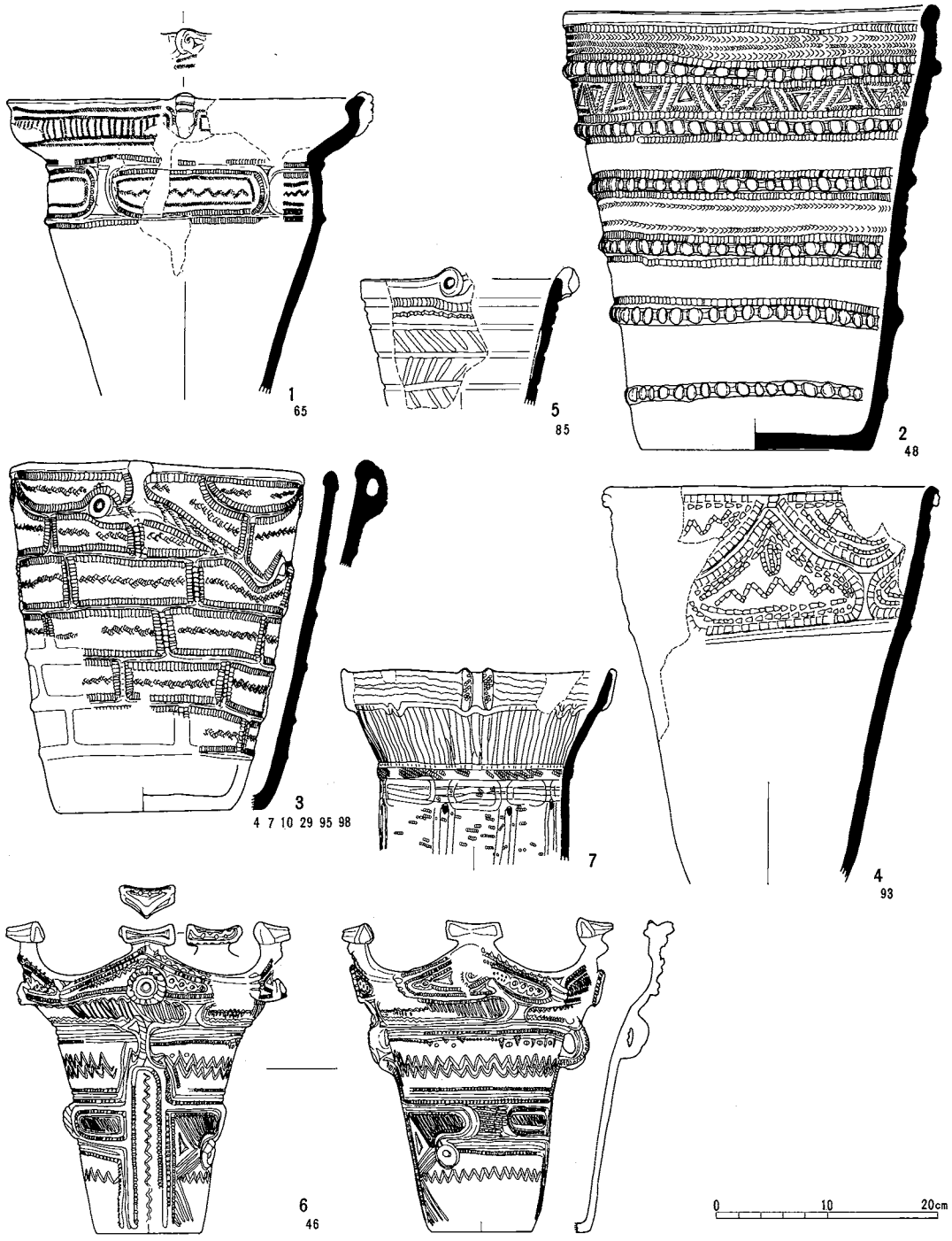


第177図　大石遺跡第20号住居址(C)・第21号住居址出土土器(A)（1：3　但し16・17は1：6）

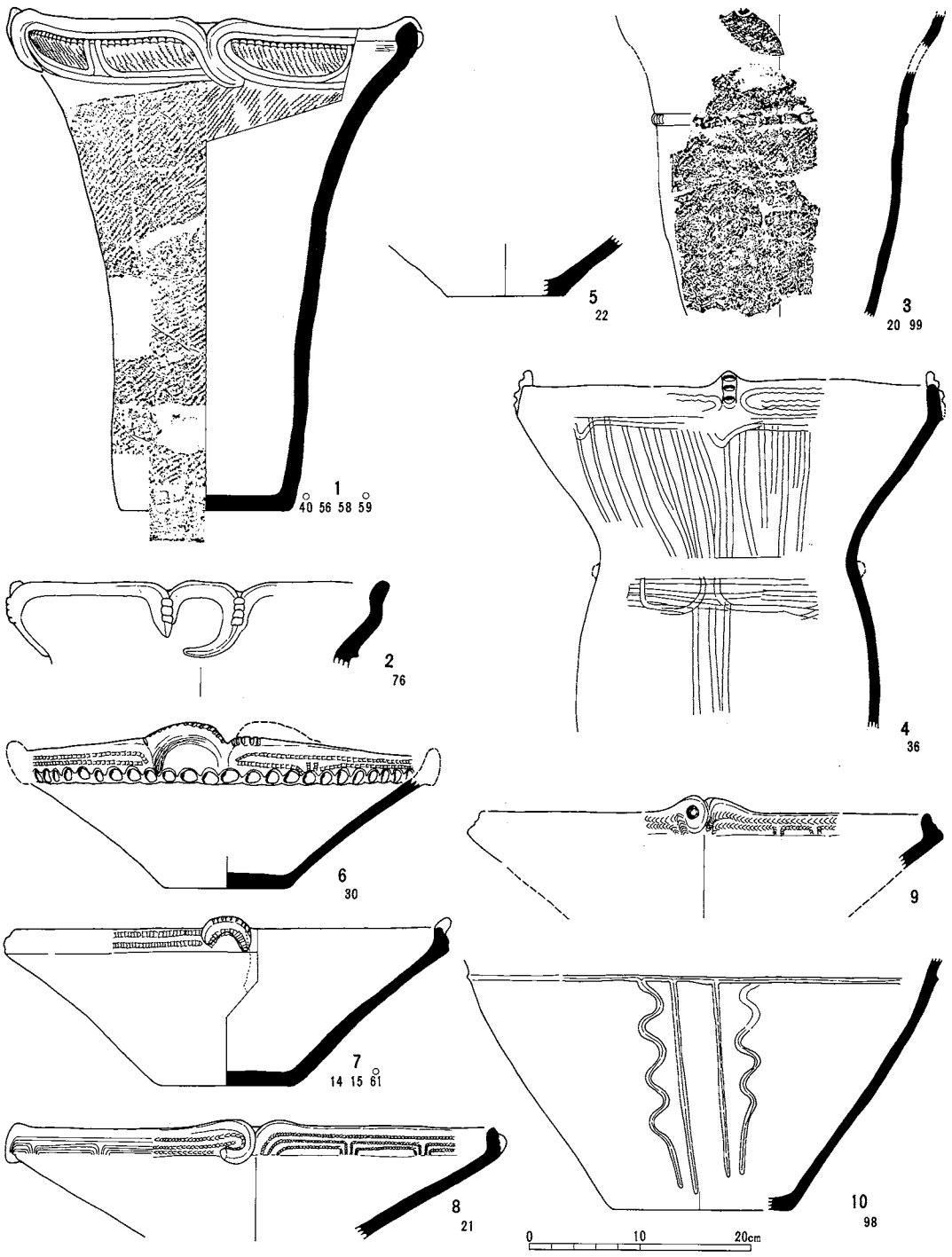
〈1～15　20住，16～17　21住〉



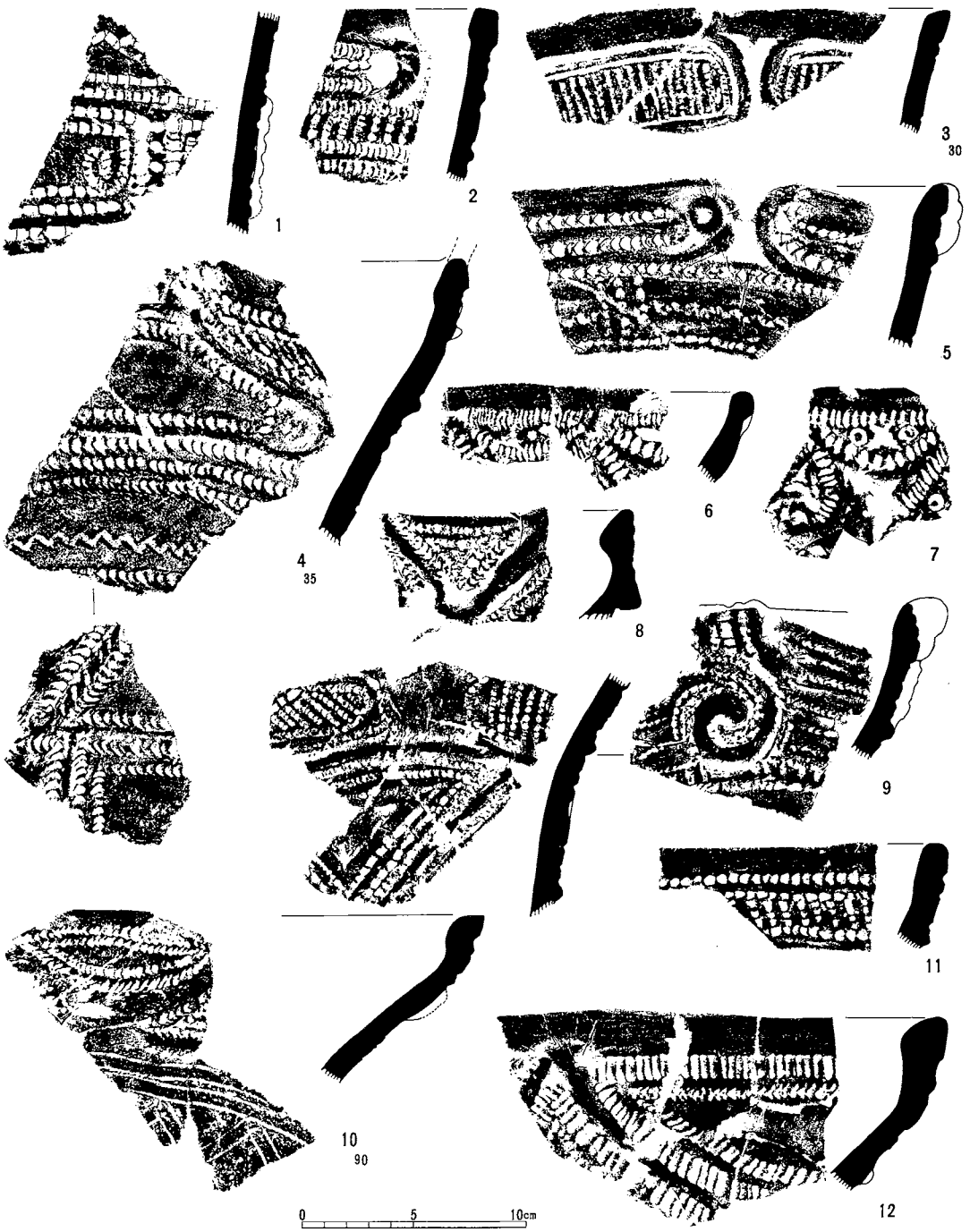
第178図　大石遺跡第21号住居址出土土器(B)(1：6)



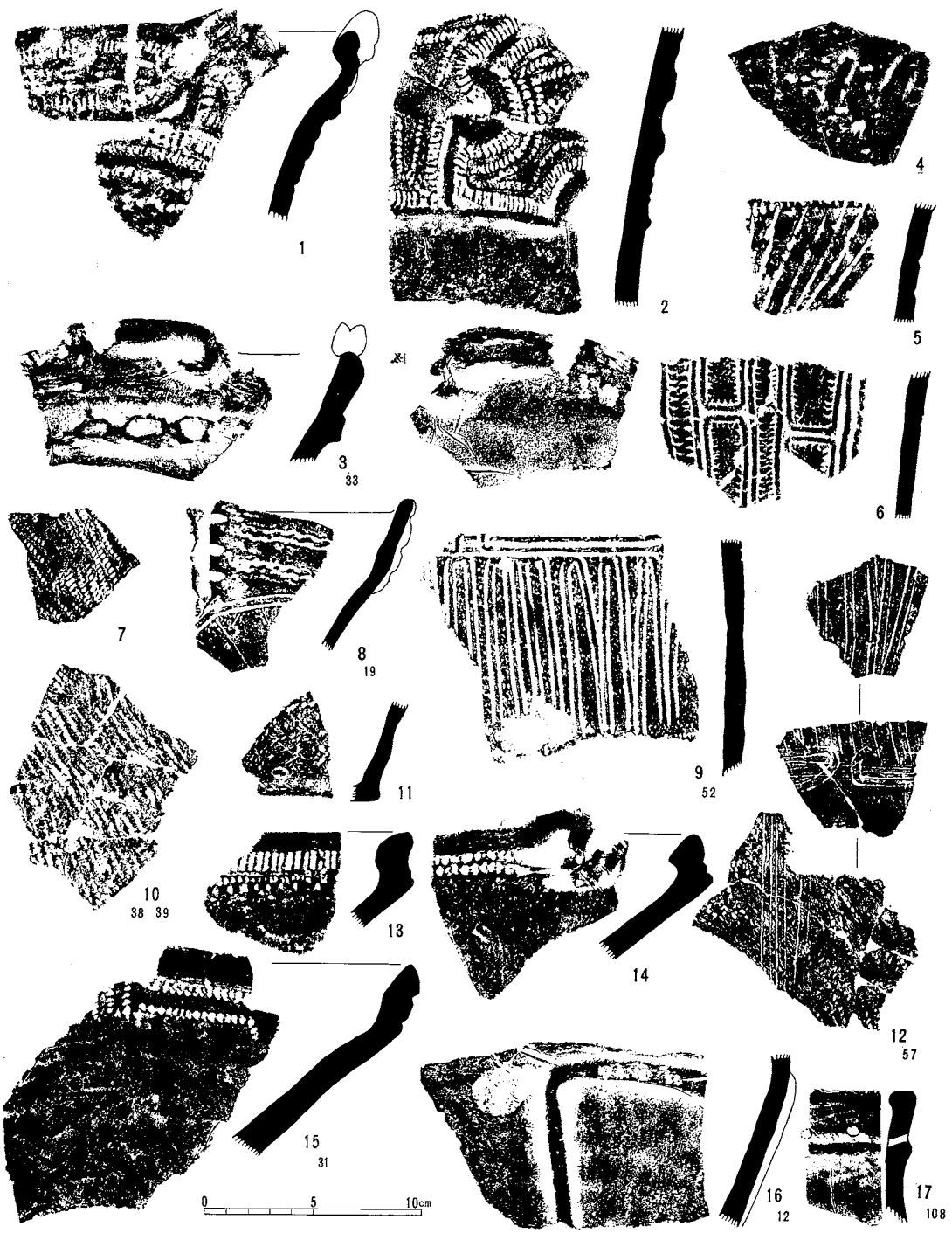
第179図　大石遺跡第21号住居址出土土器(C)（1：6）



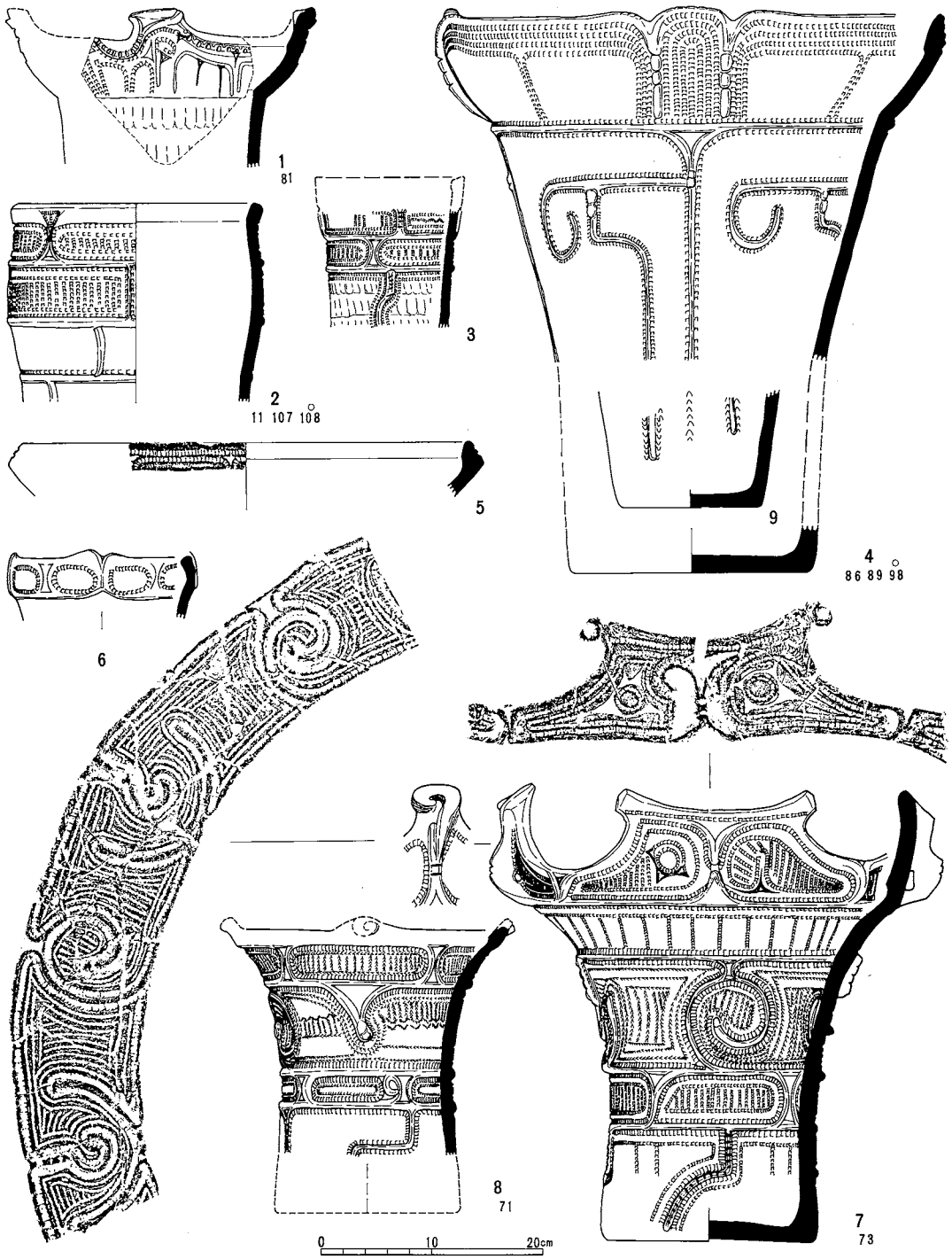
第180図　大石遺跡第21号住居址出土土器(D)(1：6)



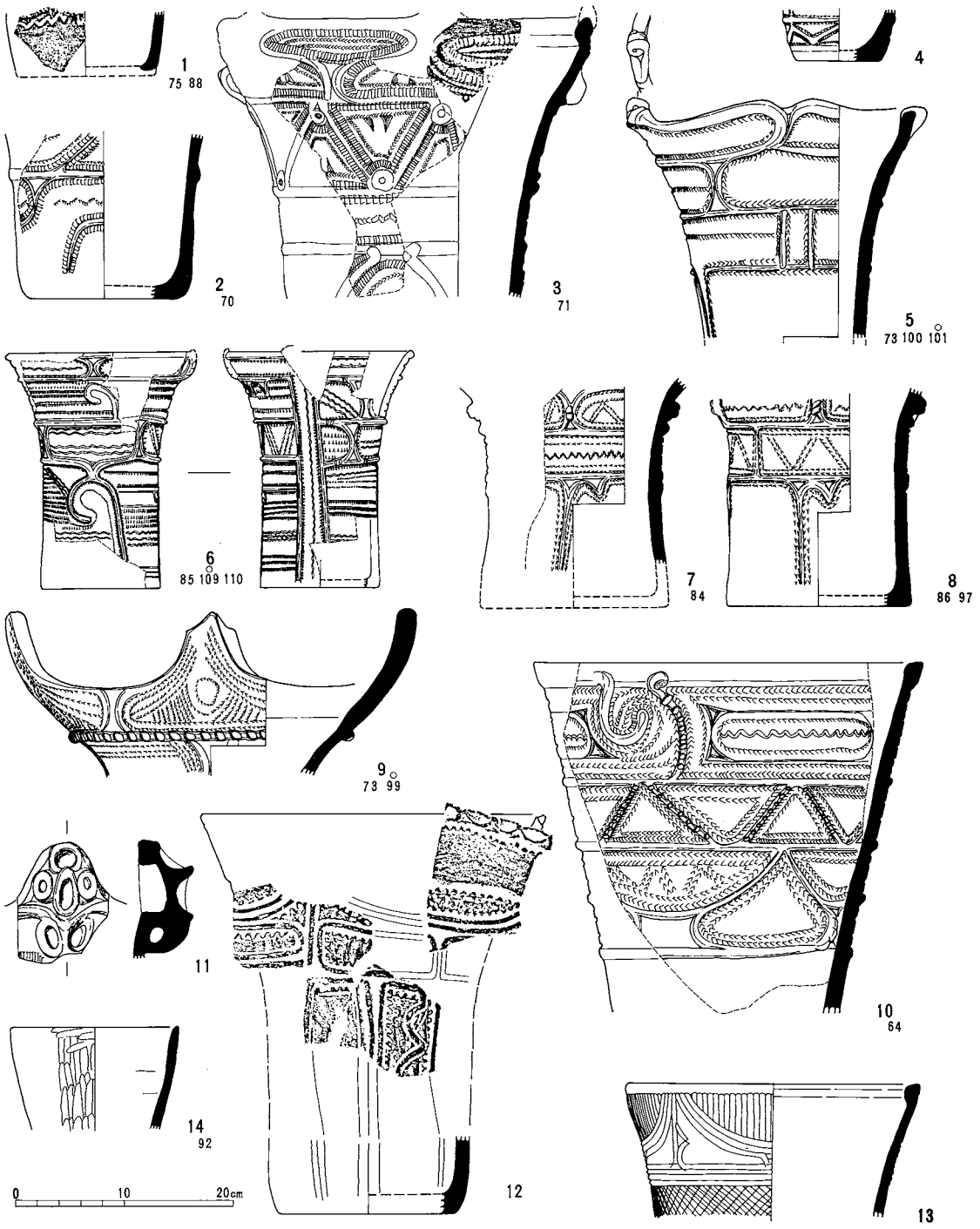
第181図　大石遺跡第21号住居址出土土器(E)(1：3)



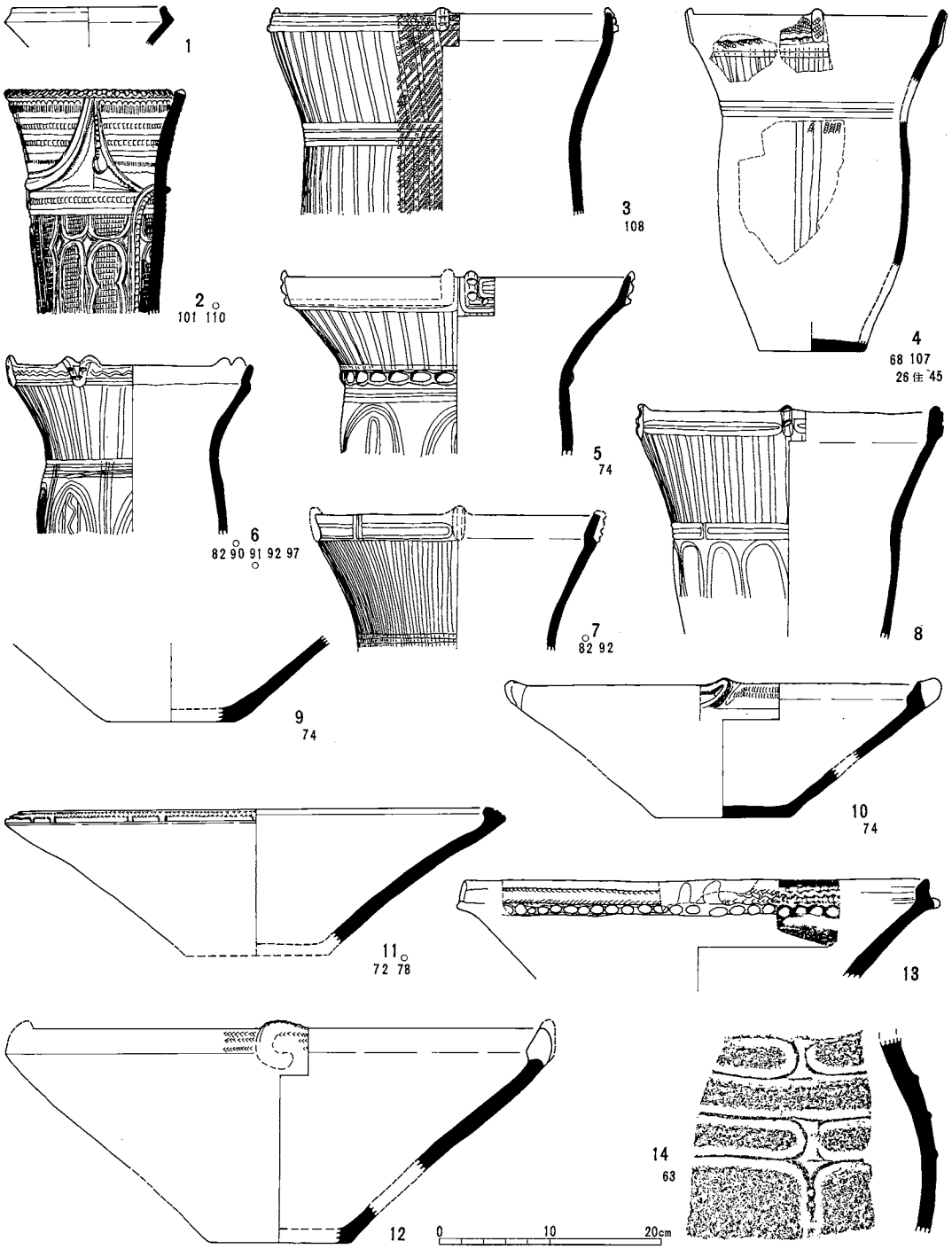
第182図　大石遺跡第21号住居址出土土器(F)(1：3)



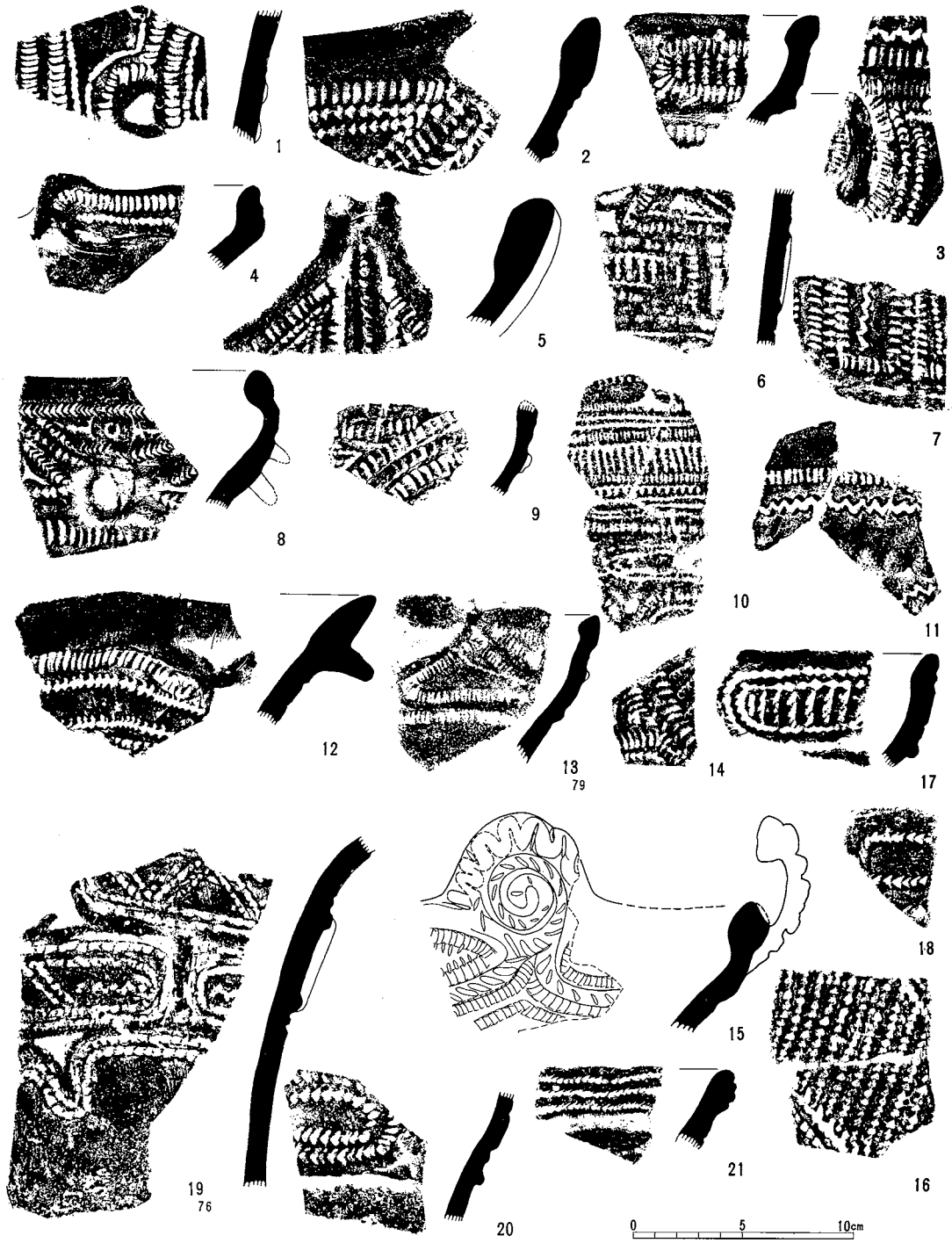
第183図　大石遺跡第22号住居址出土土器(D)(1：6)



第184図　大石遺跡第22号住居址出土土器(E)(1：6)

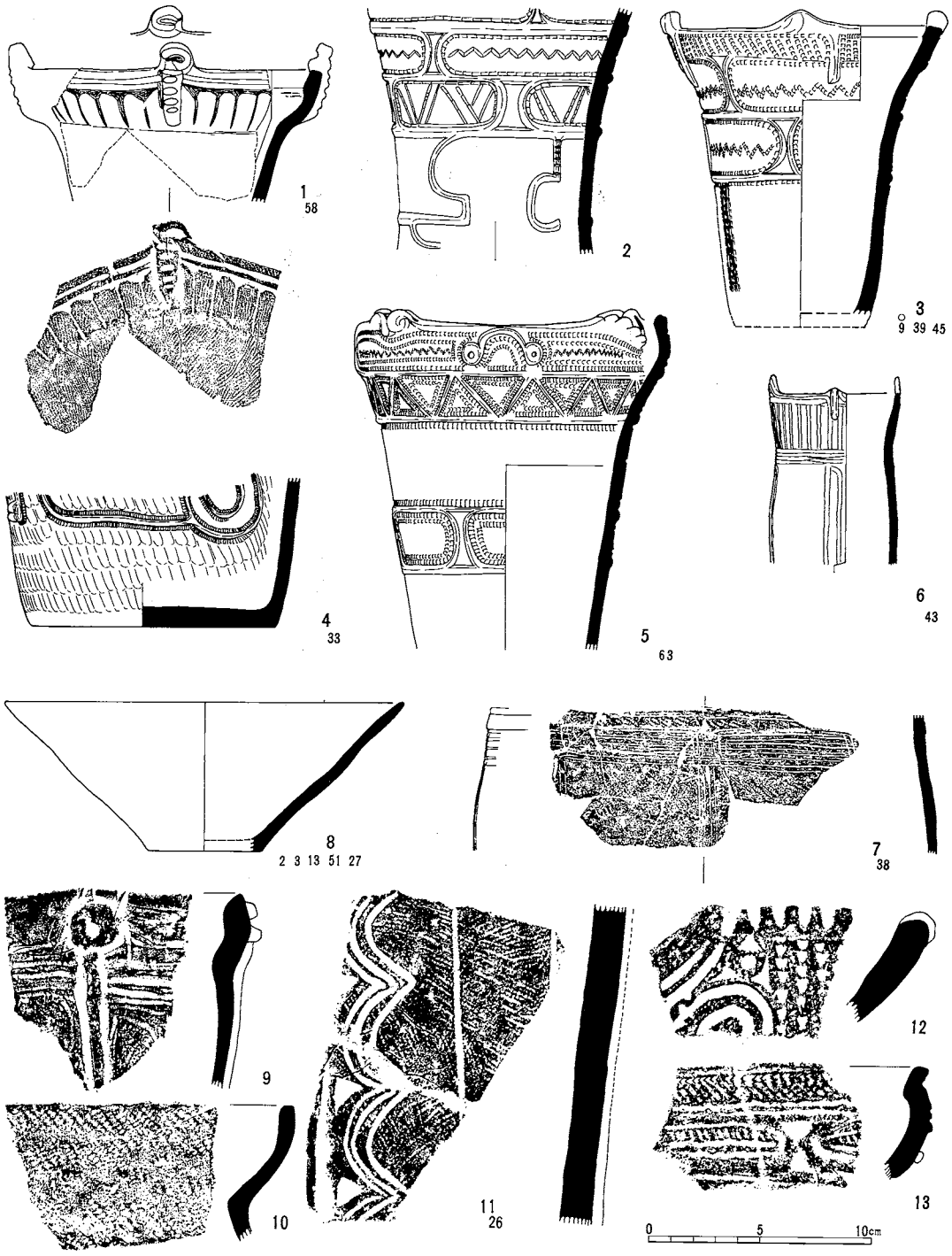


第185図　大石遺跡第22号住居址出土土器(F)(1：6)

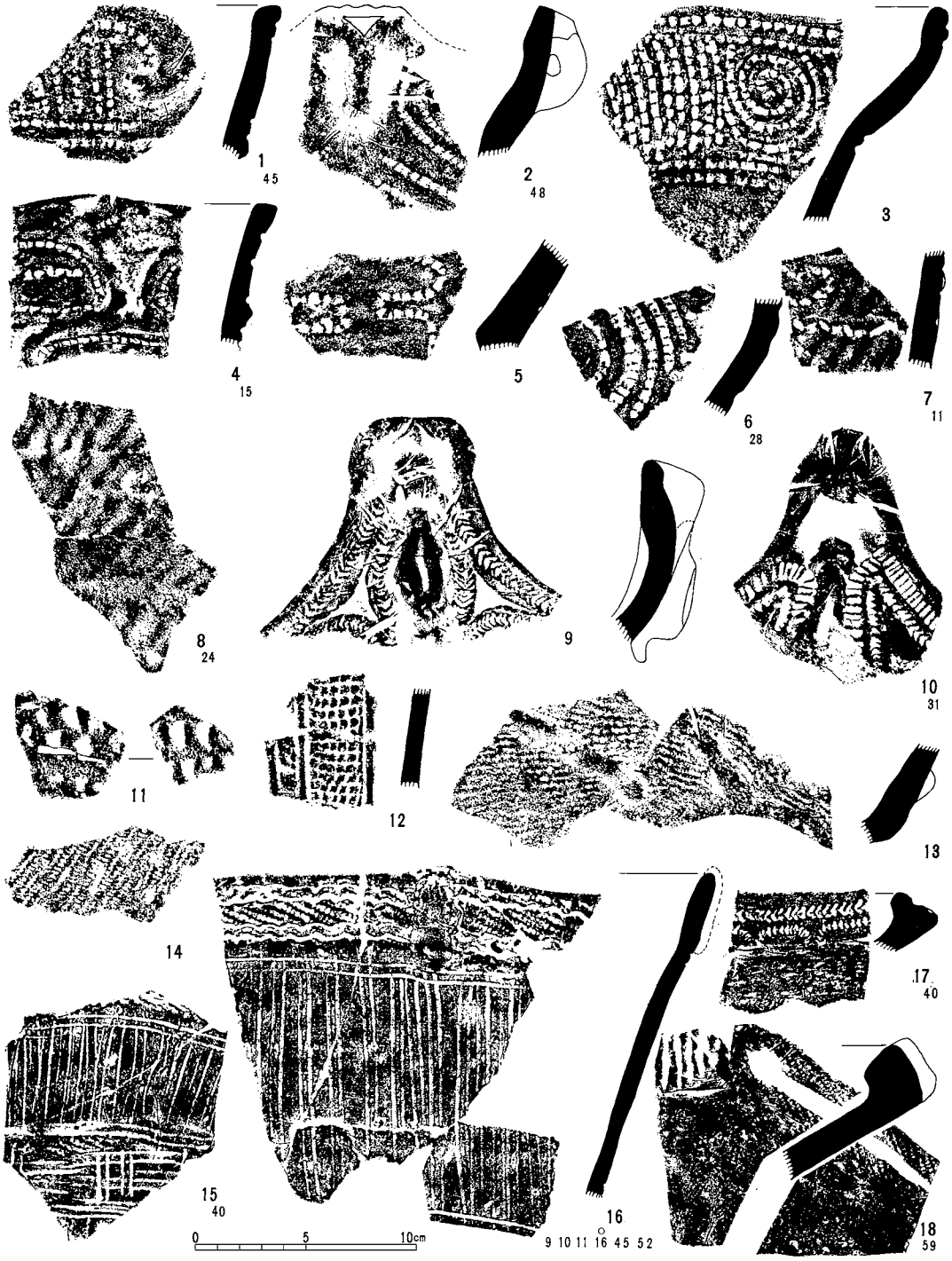


第186図　大石遺跡第22号住居址出土土器(G)(1：3)

第187図　大石遺跡第22号住居址出土土器(H)(1：3)

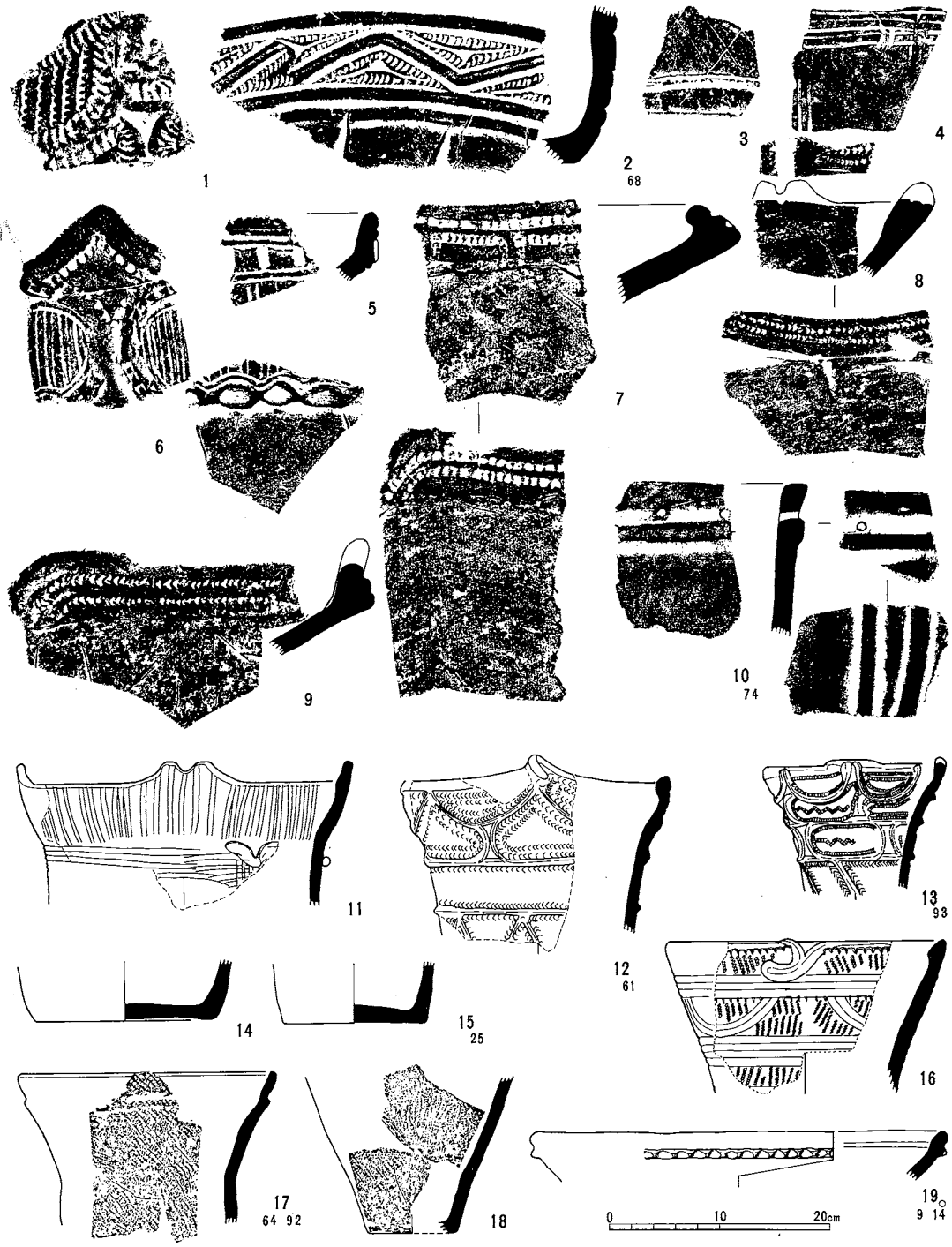


第188図　大石遺跡第23号住居址出土土器(A)(1：3　但し1～8は1：6)

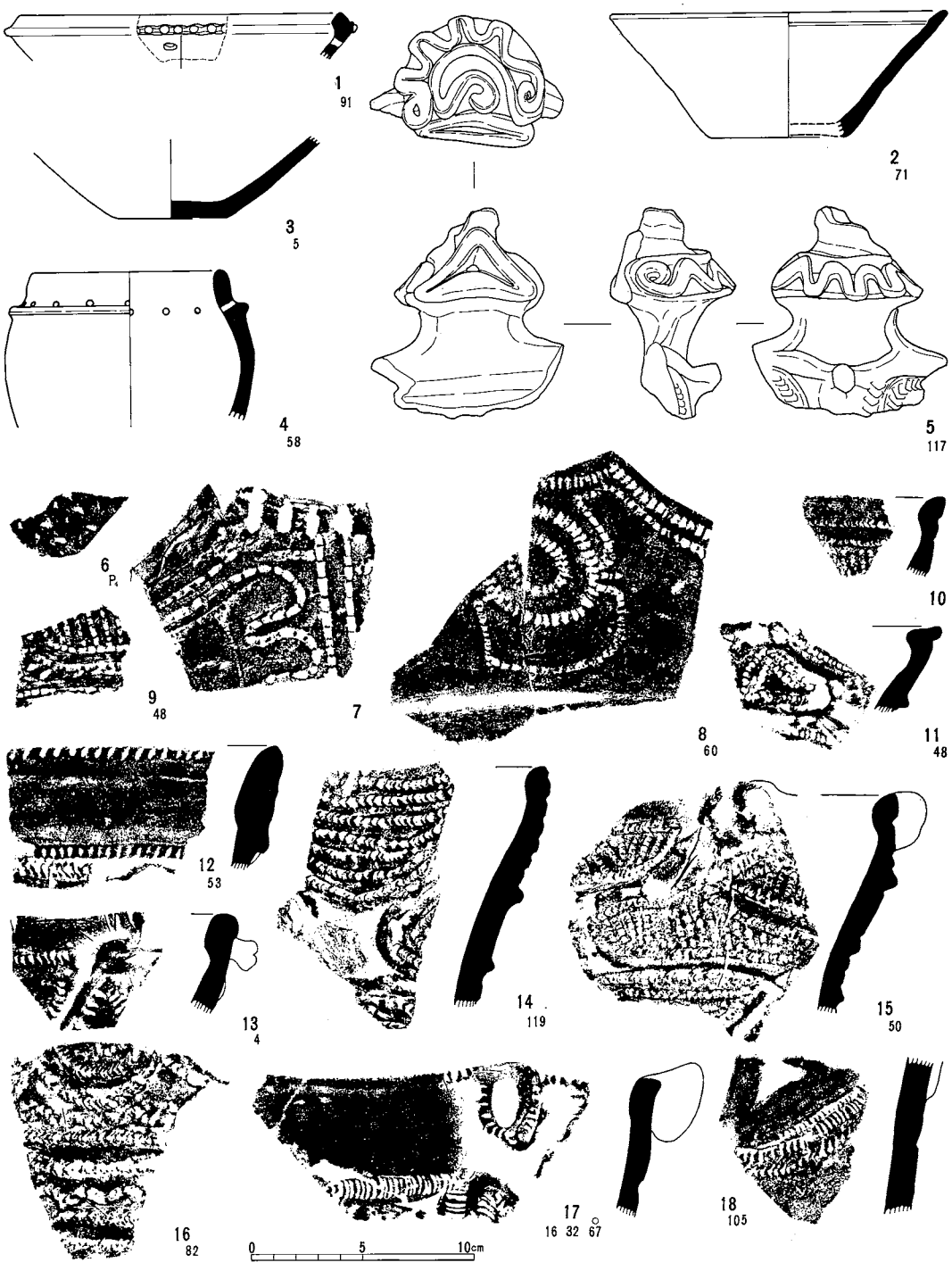


第189図　大石遺跡第23号住居址出土土器(B)(1：3)

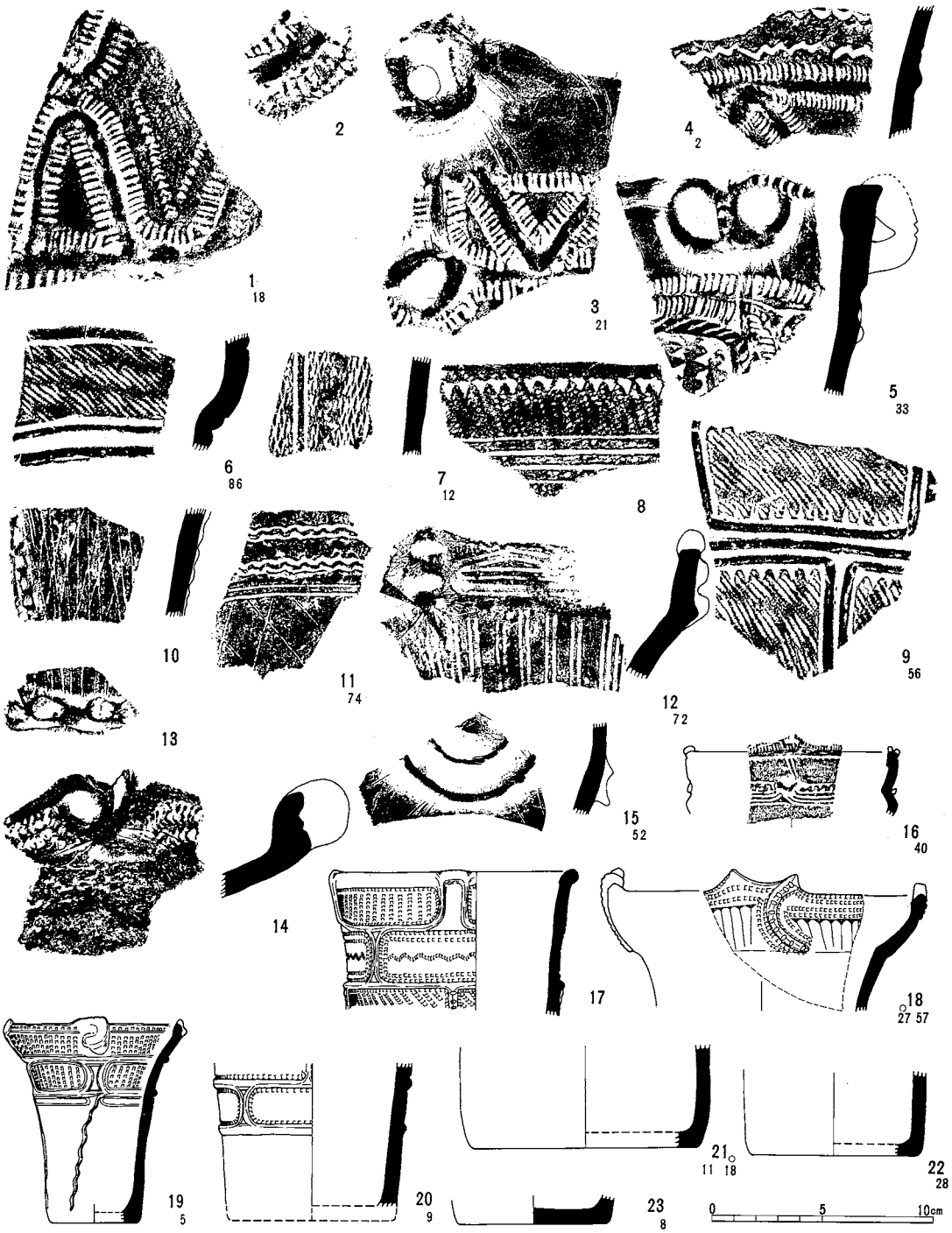
第190図　大石遺跡第24号住居址出土土器(A)(1：3　但し1～3は1：6)



第191図　大石遺跡第24号住居址(B)・第25号住居址出土土器(A)（1：6　但し1～10は1：3）
〈1～10・24住，11～19・25住〉

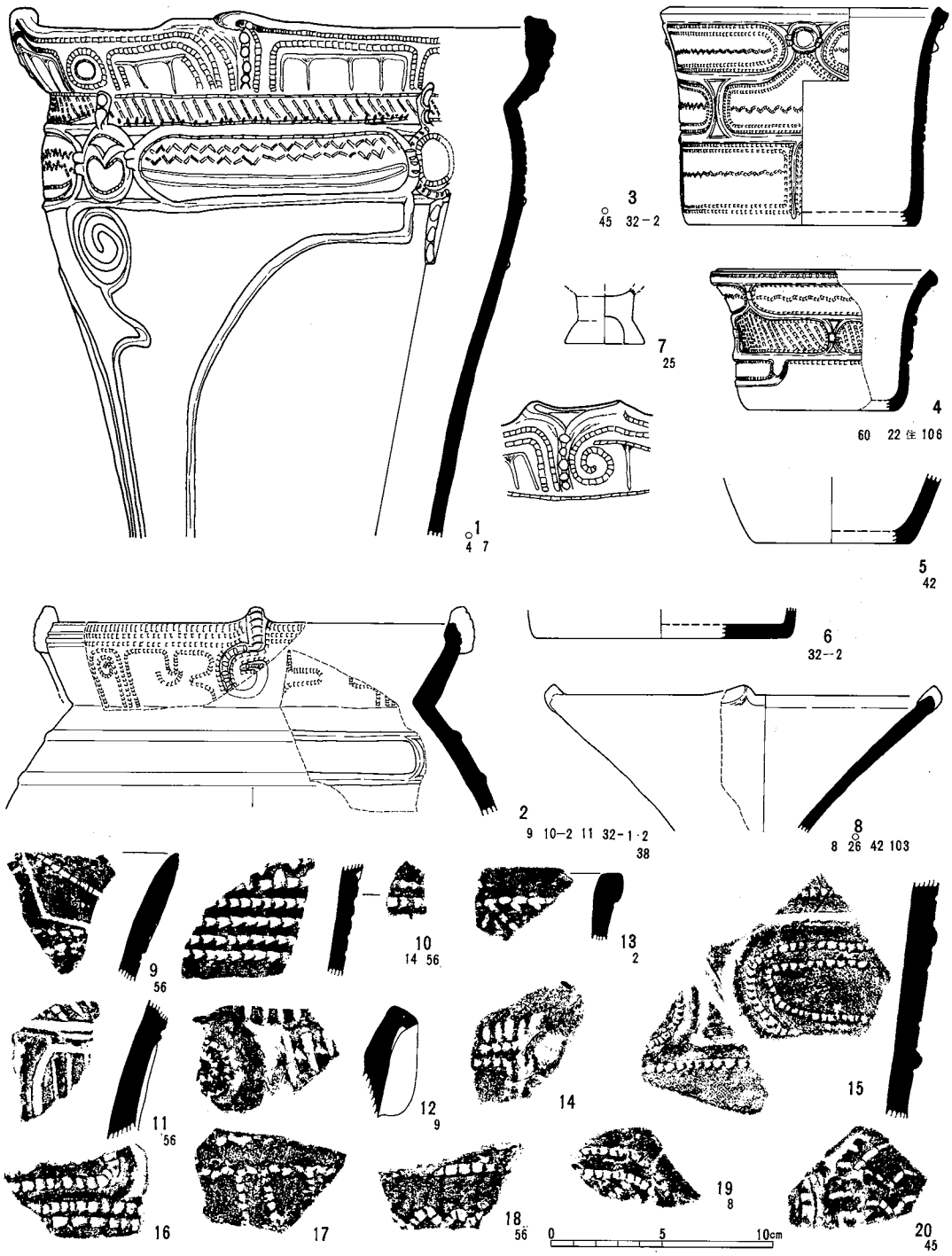


第192図　大石遺跡第25号住居址出土土器(B)（1：3　但し1～3は1：6）



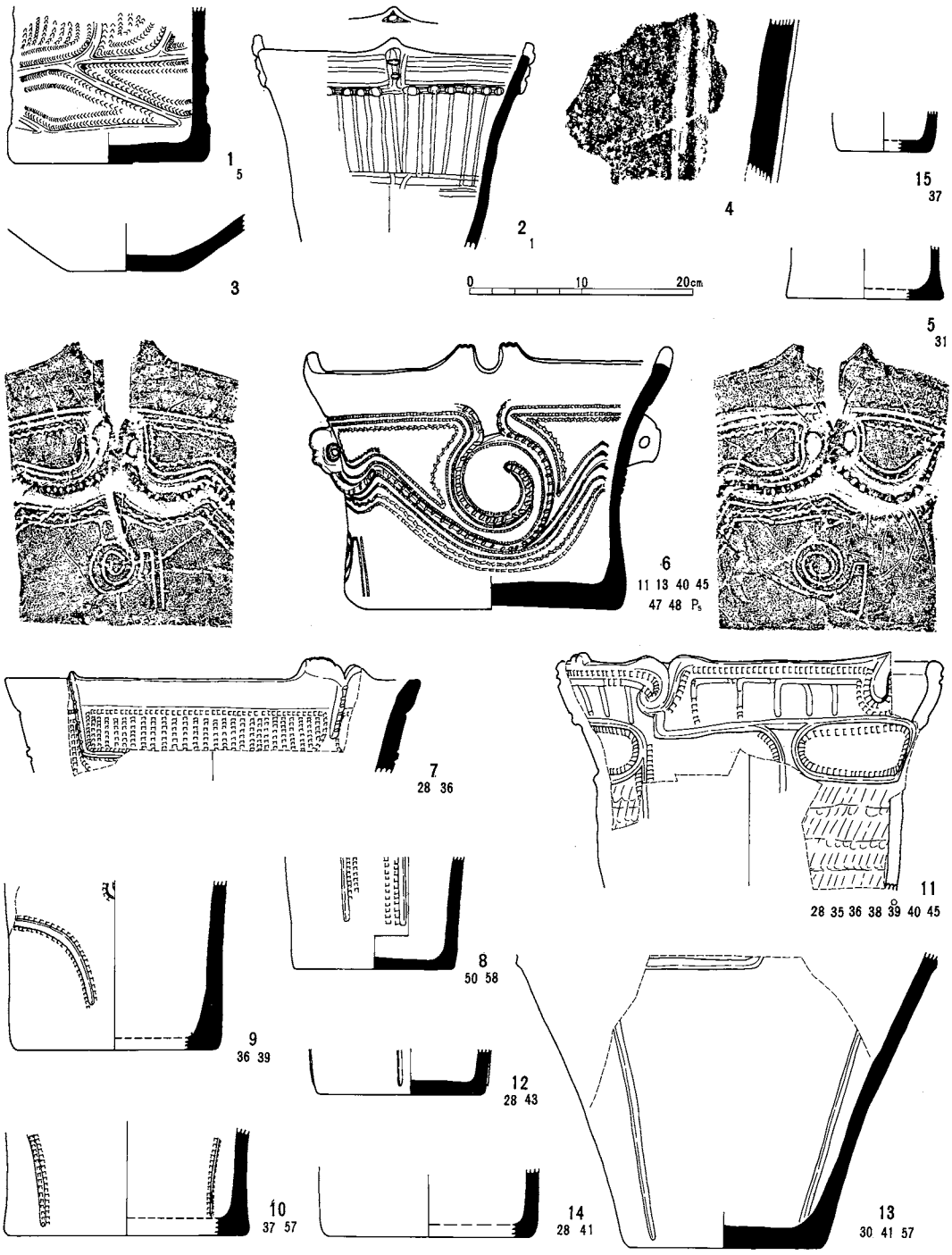
第193図　大石遺跡第25号住居址(C)・第26号住居址出土土器(A)(1：3　但し16～23は1：6)

〈1～15　25住，16～23　26住〉



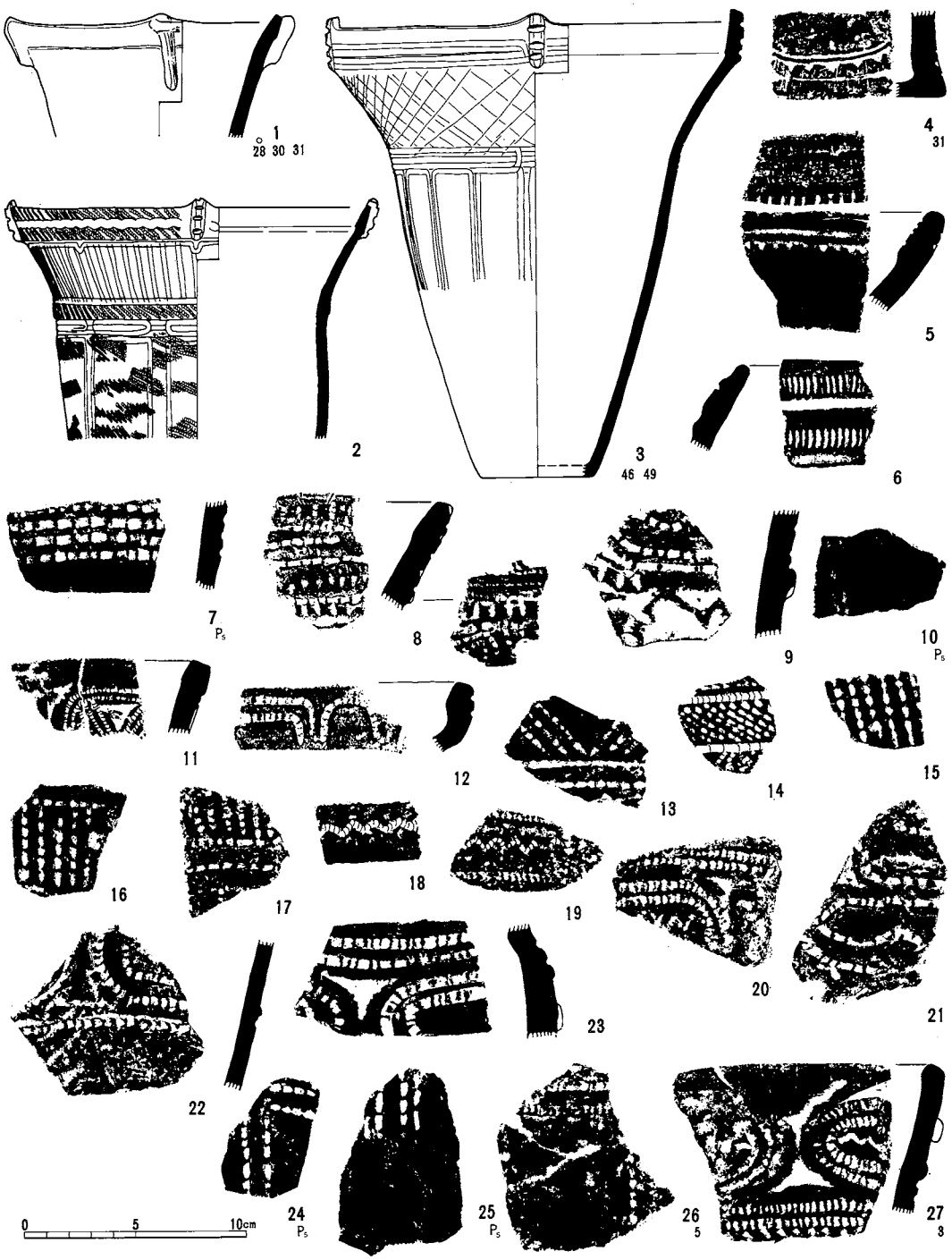
第194図　大石遺跡第26号住居址出土土器(B)（1：3　但し1～8は1：6）

第195図　大石遺跡第26号住居址出土土器(C)（1：3）



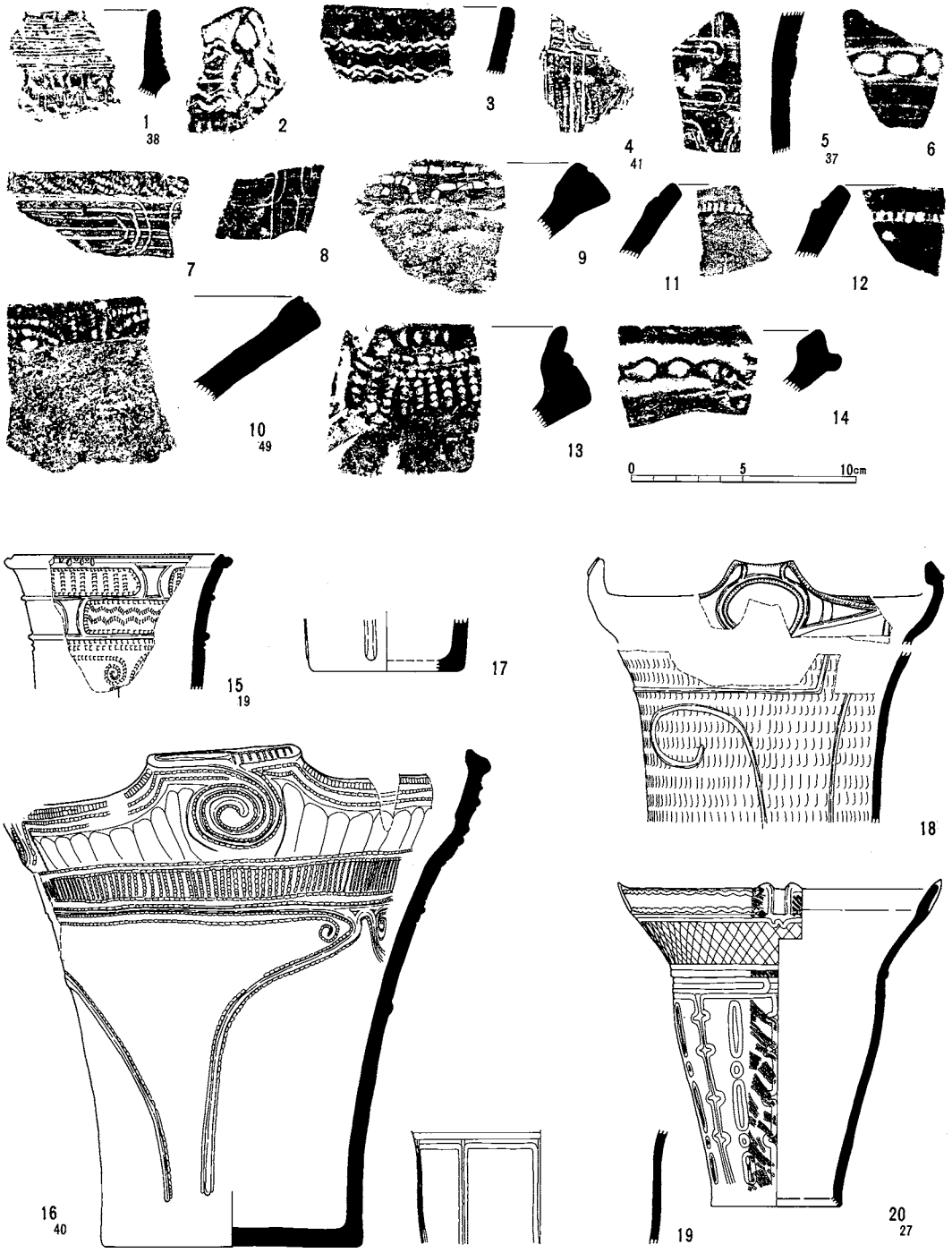
第196図　大石遺跡第35号住居址，第36号住居址出土土器(A)　(1：6　但し4・15は1：3)

〈1～4　35住，5－15　36住〉



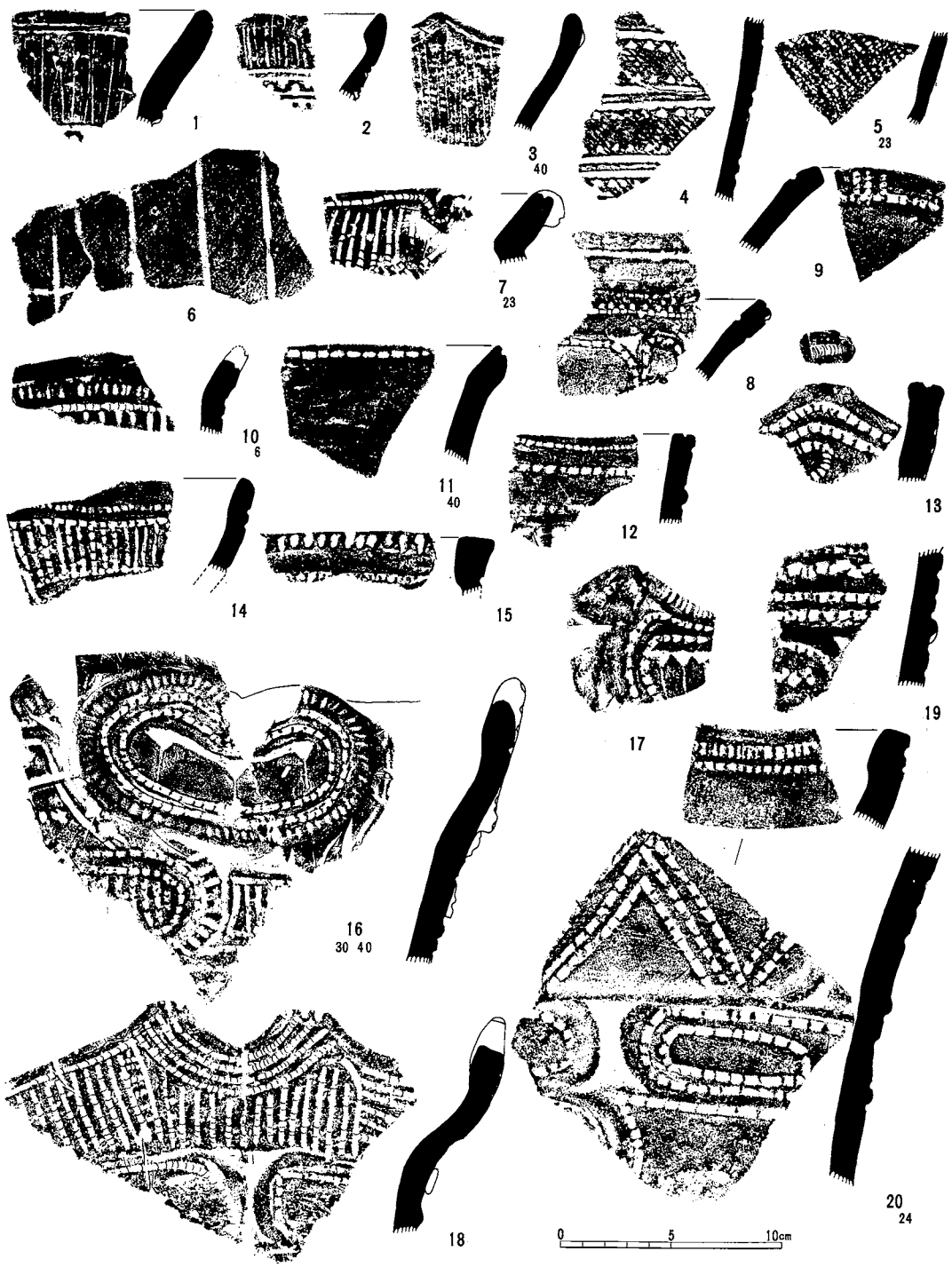
第197図　大石遺跡第36号住居址出土土器(B)（1：3　但し1～3は1：6）

第198図　大石遺跡第36号住居址出土土器(C)　(1：3)

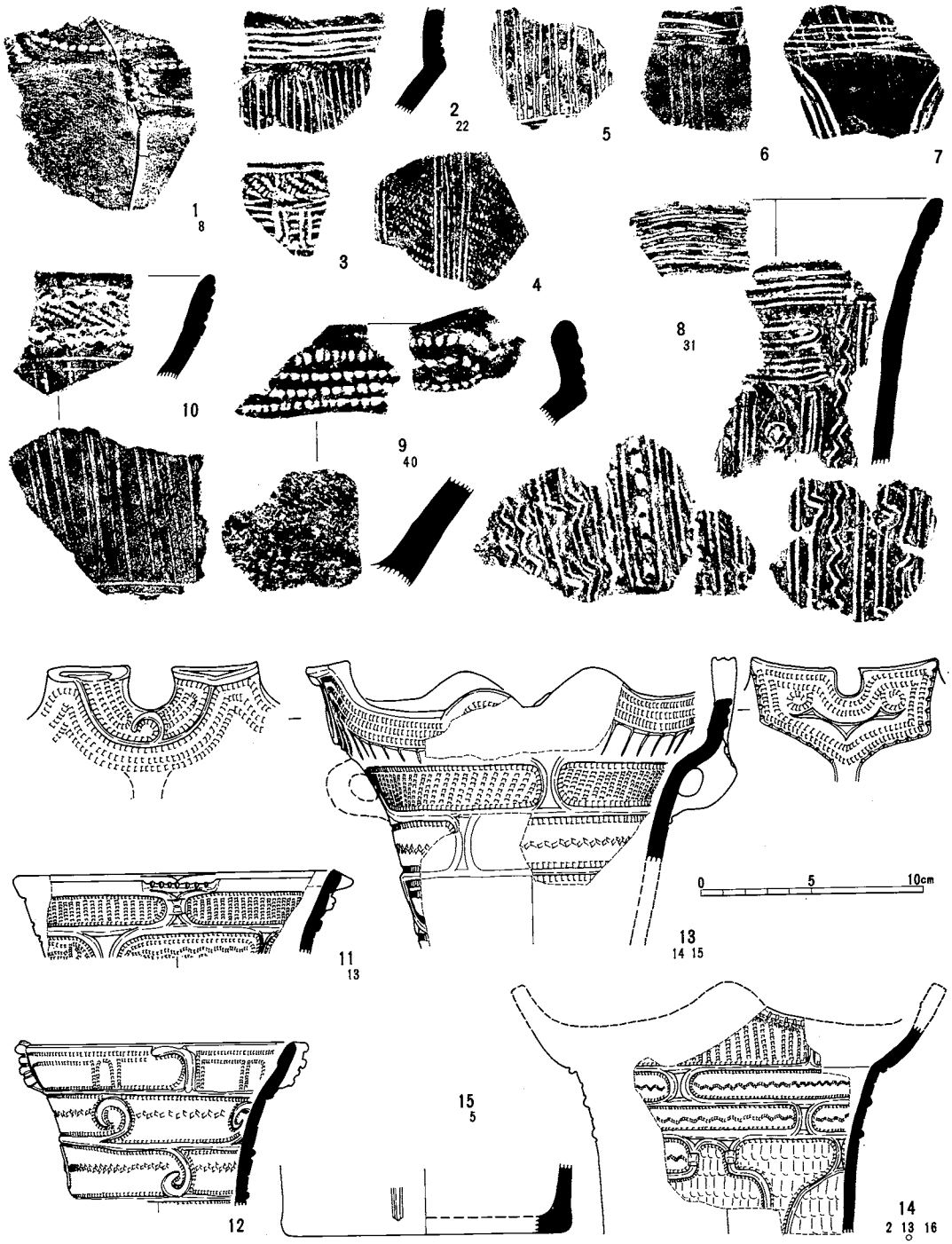


第199図　大石遺跡第36号住居址(D) 第38号住居址出土土器(A)（1：3　但し15～20は1：6）

〈1～14　36住，15～20　38住〉



第200図　大石遺跡第38号住居址出土土器(B)　(1：3)



第201図　大石遺跡第38号住居址(C) 第40号住居址出土土器(A)（1：3　但し11～15は1：6）

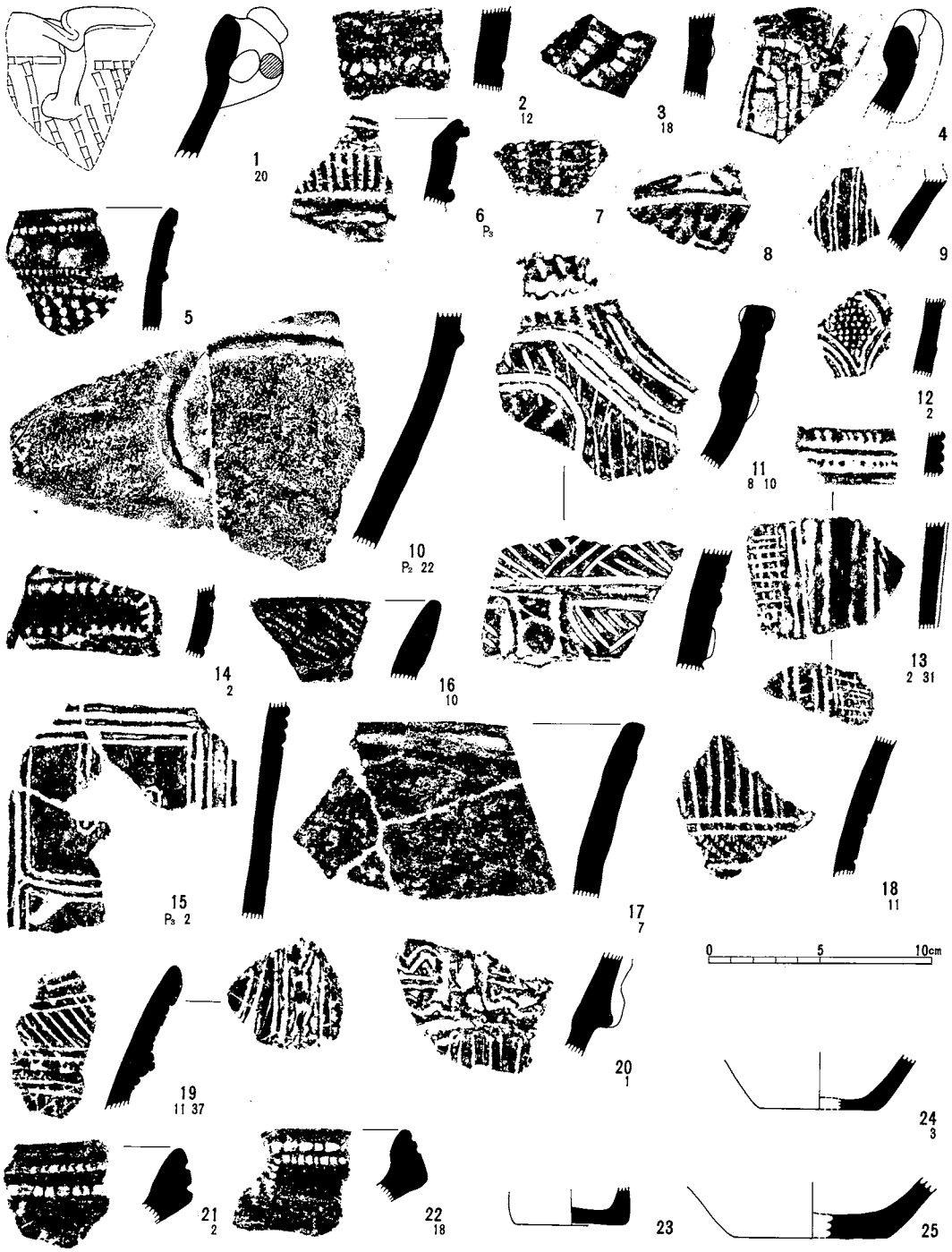
〈1～9　38住，10～15　40住〉

第202図　大石遺跡第40号住居址(B) 第43号住居址出土土器(A)（1：3　但し21・22は1：6）

〈1～20　40住，21～26　43住〉

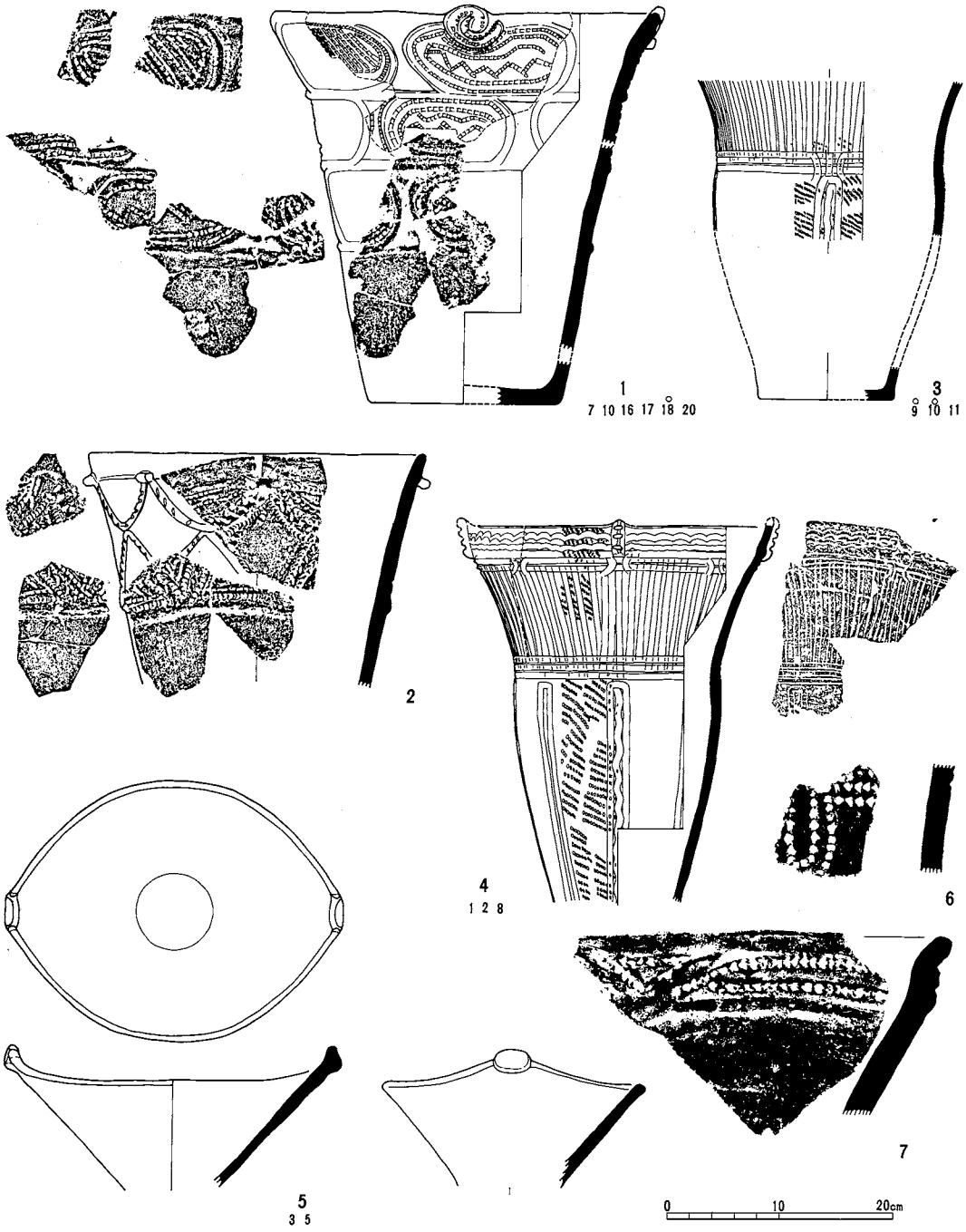
第203図　大石遺跡第43号住居址(B) 第44号住居址出土土器(A)　　(1：3　但し7～12は1：6)

〈1～6　43住，7～22　44住〉

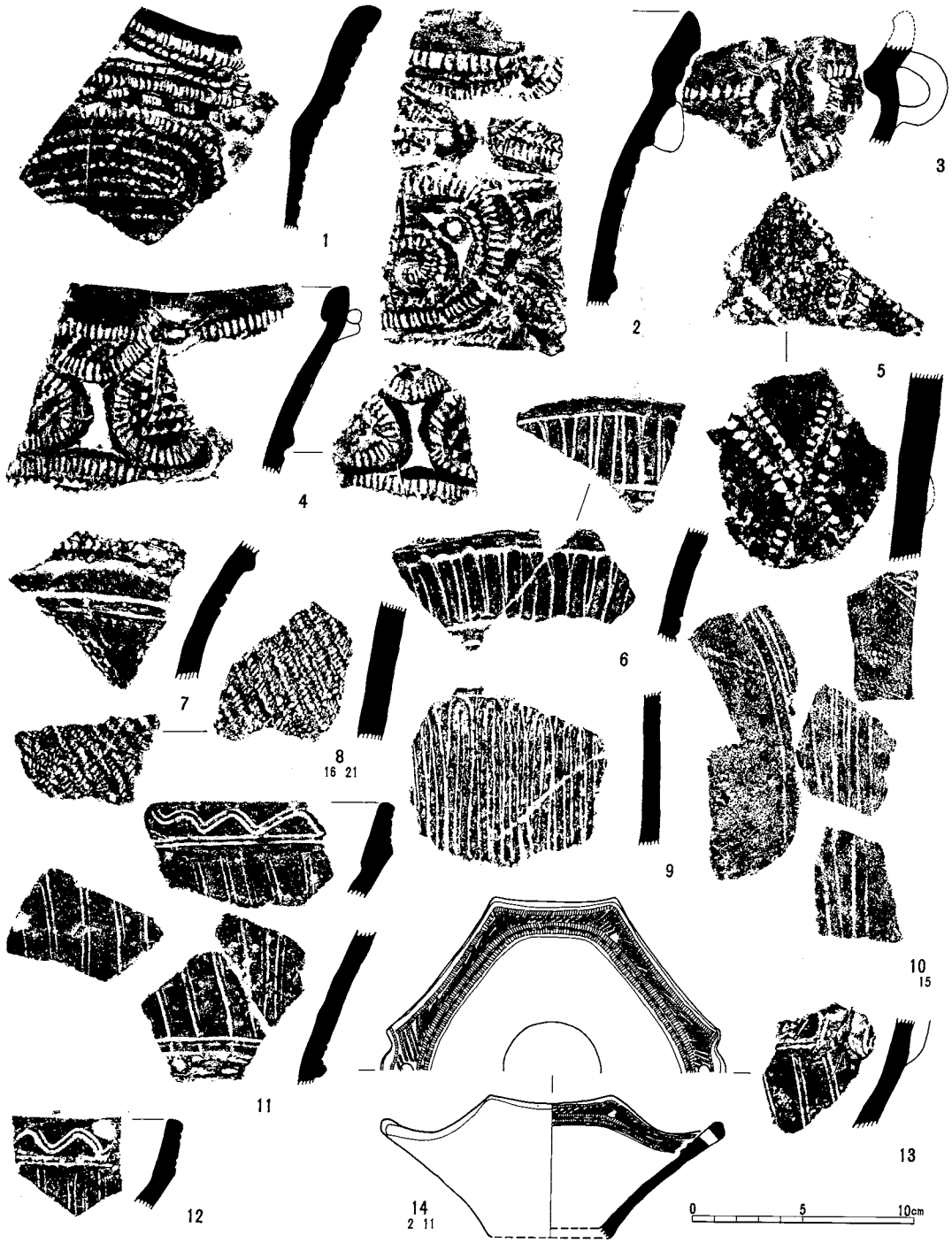


第204図　大石遺跡第44号住居址(B) 第47号新住居址出土土器(C)（1：3但し23～24は1：6）

〈1～22　44住，23～25　47新住〉

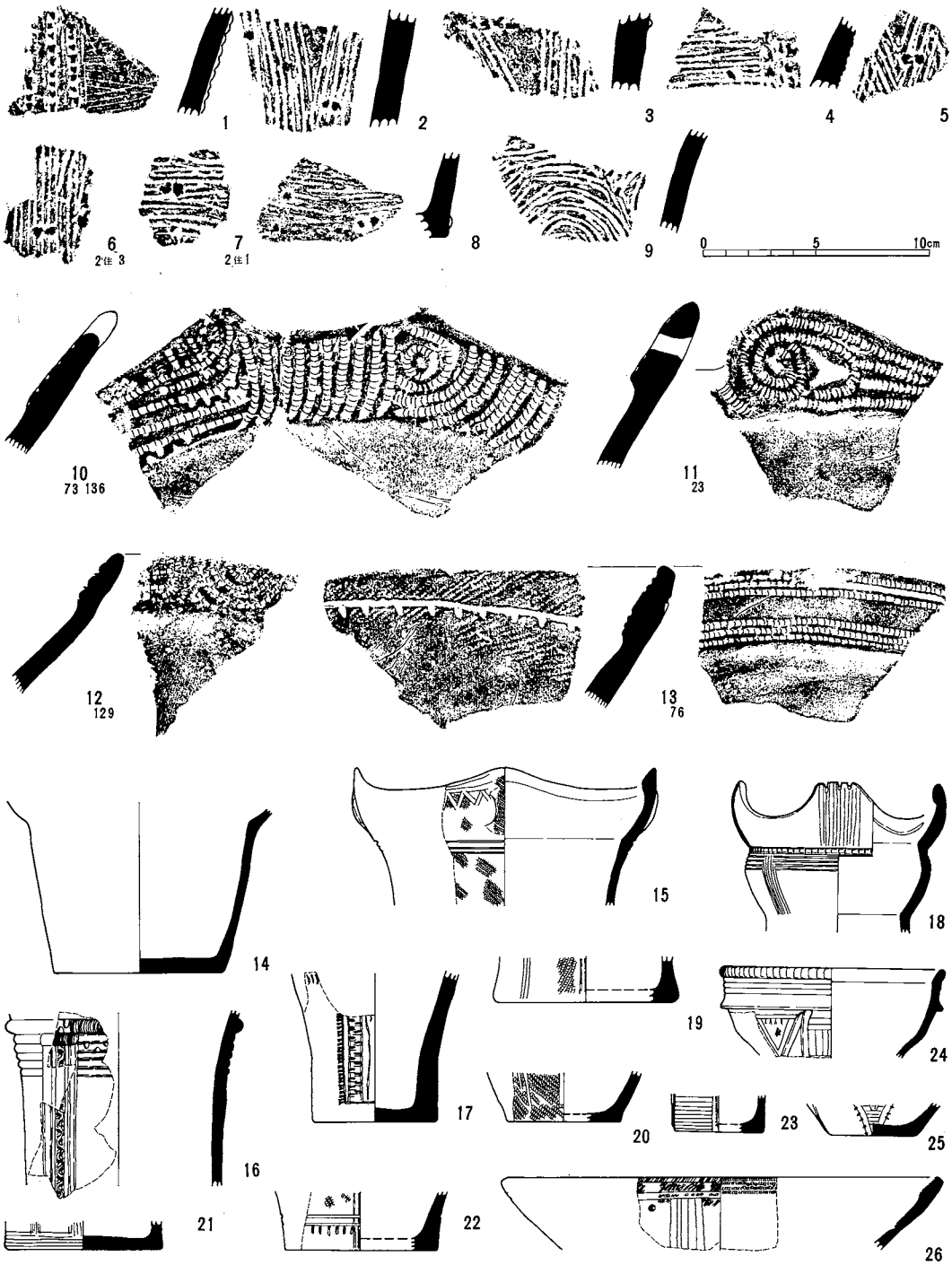


第205図　大石遺跡第47号新住居址出土土器(D)　（1：6　但し6・7は1：3）



第206図　大石遺跡第47号新住居址(E) 第42号住居址出土土器(B)　(1：3　但し14は1：6)

〈1～13　47住，14　42住〉

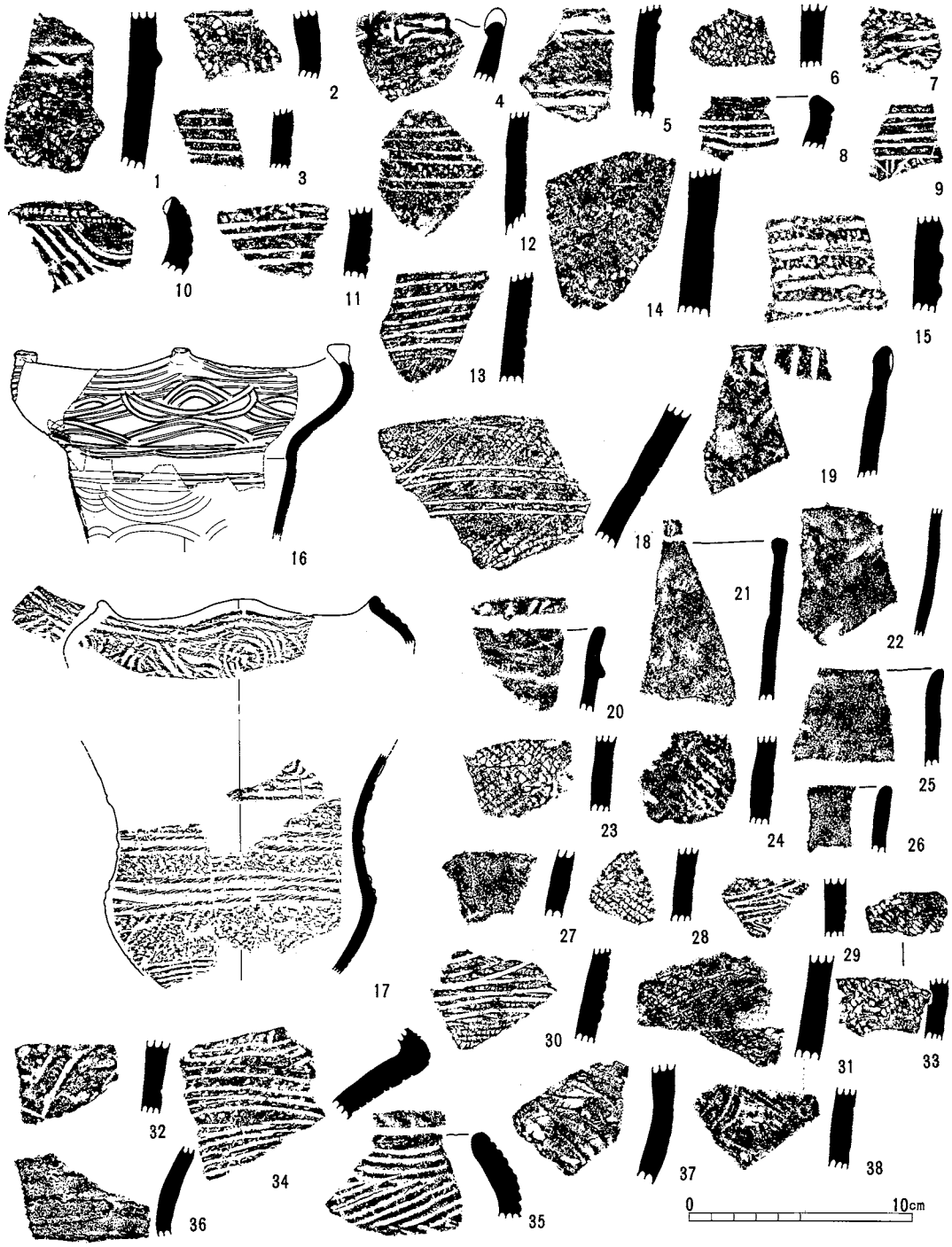


第207図　大石遺跡第１号住居址(K) 第48号住居址(C) 遺構外出土土器（その11）

（１：３　但し14～16・17～26は１：６）

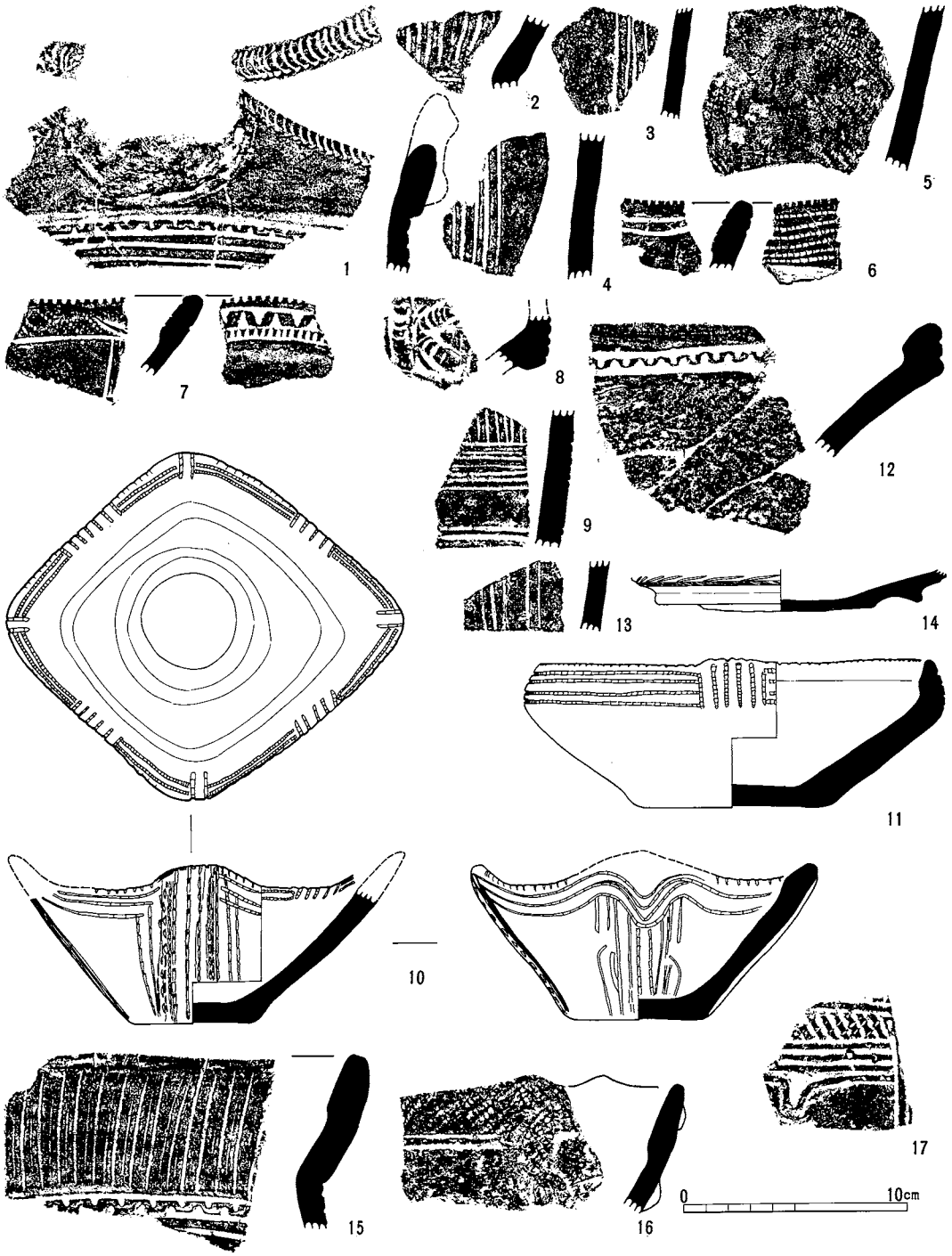
〈１～９・15～26遺構外，10～13　１住，14　48住炉〉

第208図　大石遺跡土壙出土土器(その１)(１：３)　〈1．土壙13,　2．土壙110,　3．土壙162,　4～5　土壙177,　6．土壙179,　7～9　土壙181,　10～12．土壙343,　13．土壙385,　14．土壙471,　15．土壙501,　16．土壙508,　17～25．土壙512,　26．土壙513,　27．土壙514,　28．土壙516,　29～30．土壙517,　31．土壙524,　32．土壙527,　33．土壙528,　34～37．土壙536　38．土壙543〉



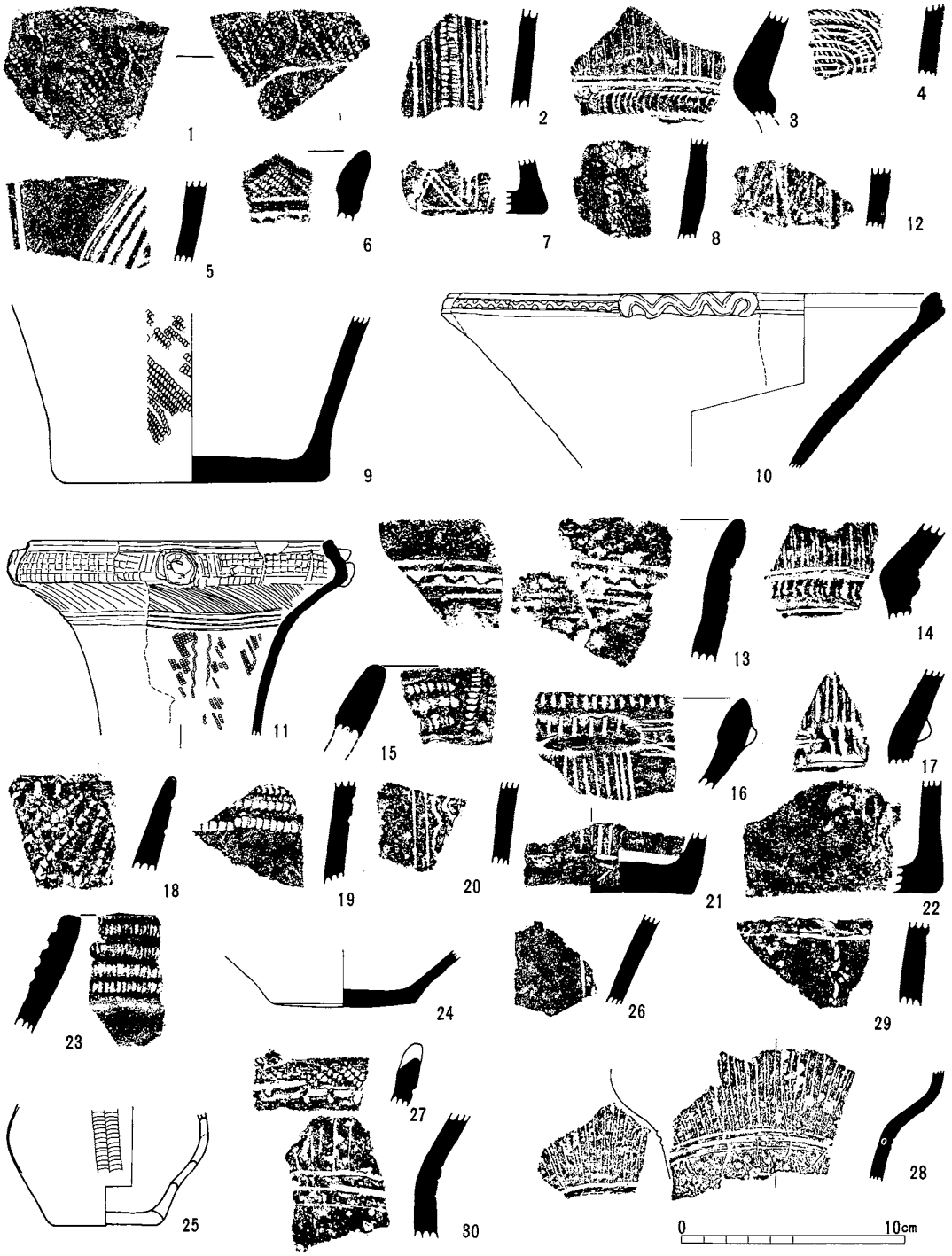
第209図　大石遺跡土壙出土土器（その２）（１：３ 但し16・17は１：６）〈１～３ 土壙548, ４～５. 土壙549, ６～９. 土壙555, 10～14. 土壙559, 15. 土壙561, 16～17. 土壙570, 18. 土壙593, 19. 土壙607, 20～24. 土壙634, 25～27. 土壙637, 28. 土壙640, 29. 土壙763, 30. 土壙838, 31. 土壙843, 32. 土壙851, 33. 土壙852, 34～35. 土壙946, 36～38. 土壙982 〉

第210図　大石遺跡土壙出土土器（その３）（１：３ 但し５・20は１：６）〈１～２．土壙982，３．土壙1118，４．土壙1208，５～11．土壙1279，12．土壙５，13～14．土壙６，15．土壙９，16．土壙14，17．土壙15，18～19．土壙17，20．土壙25，21～22．土壙36，23～25．土壙37，26．土壙41，27．土壙42，28～33．土壙50，34．土壙51〉

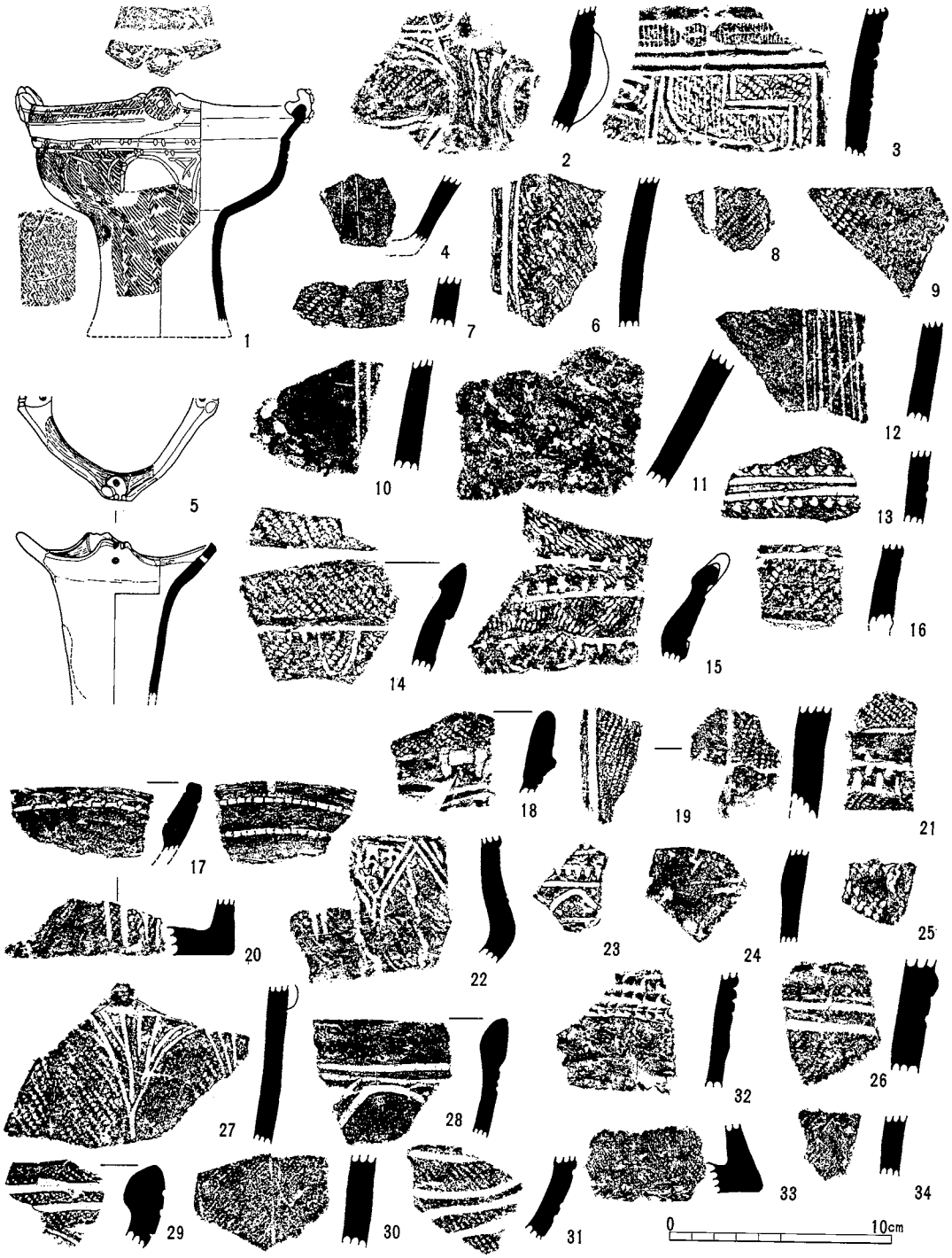


第211図　大石遺跡土壙出土土器（その４）（1：3 但し14は1：6）〈1～6．土壙51，　7．土壙55，
8～11．土壙56，　12．土壙58，　13．土壙59，　14．土壙512，　15～17．土壙68〉

第212図　大石遺跡土壙出土土器（その５）（1：3 但し7～10は1：6）　〈1～7．土壙68，　8．土壙36，
9．土壙58，　10～11．土壙69，　12～16．土壙79，　17．土壙83，　18～19．土壙87，　20～23．土壙94〉



第213図　大石遺跡土壙出土土器(その６)(1：3 但し10・11・24・28は1：6)　〈1～2．土壙94，　3～5．土壙95，6．土壙96，　7～8．土壙98，　9～10．土壙104，　11．土壙109，　12．土壙114，　13～15．土壙121，　16～24．土壙128，　25．土壙152，　26．土壙168，　27．土壙194，　28．土壙197，　29～30．土壙205〉



第214図　大石遺跡土壙出土土器（その７）（1：3 但し1・5は1：6）〈1～4．土壙201，5．土壙217，6．土壙229，7．土壙241，8．土壙243，9．土壙247，10～11．土壙262，12．土壙296，13～16．土壙263，17．土壙272，18．土壙273，19～20．土壙276，21～22．土壙279，23～25．土壙281，26．土壙282，27．土壙288，28～31．土壙289，32～34．土壙295）